
Bグループの少年

櫻井春輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Bグループの少年

【Nコード】

N5699R

【作者名】

櫻井春輝

【あらすじ】

クラスや校内で目立つグループをA（目立つ）のグループとして、目立たないグループはC（目立たない）とすれば、その中間のグループはB（普通）となる。そんなカテゴリー分けをした少年はAグループの悪友たちにふりまわされた穏やかとは言いにくい中学校生活と違い、高校生活は穏やかに過ごしたいと考え、高校ではB（普通）グループに入り、その中でも特に目立たないよう存在感を薄く生活し、平穏な一年を過ごす。この平穏を逃すものかと誓う少年だが、ある日、特A（特に目立つ）の美少女を助けたことから変

化を始める。少年は地味で平穏な生活を守っていけるのか……？
戦闘あり、コメディあります。初作品ですが、楽しんで頂けたら、
と思います。

第二章開始しました。 10/12 あらすじとプロローグか
ら文法の修正をしました

プロローグ

人には分不相応というものがある。

大きな役割を与えられる人間がいれば、小さな役割を与えられる人間もいる。その役割を大きく踏み外そうとすると、手痛いしつぺ返しがあるだろう。

稀にうまくいく時もあるが、それが少数だということはわかるだろう。

そしてそれは、学生生活にも大きく左右される。いや学生生活にこそ大きく左右されるのではないか。

例えば、中、高の学校のクラスの場合、クラスには時間が経てば、グループができるだろう。そのグループを眺めていると、なんとなくかもしれないが、グループ毎には見えない壁のようなものがある。その壁がどんなものかといったら、単純で、わかりやすいものだと第一に容姿があげられるだろう。

男の子は格好いいもの同士で、女の子は可愛いもの同士で集まったりする場合が多い。

この場合容姿が優れていなくてもそのグループに溶け込める人間がいる。

それはどのようなものかといったら、容姿はそれほどでもないが、雑談がうまかったり、勉強ができたり、スポーツの才能に優れたたり

する。

つまりは何かの才能に特化したような人間であったりする 경우가多いたろうが、一番多いのは、やはり陽気で人を笑かす能力に長けた人間だろう。

このようなもの達が集まったグループはクラス内でも目立つだろうし、校内でもある程度は目立つだろう。そして、それより目立たないグループがあり、またそれより更に目立たないグループがある。話を簡単にすると、クラスや校内で目立つグループをA（目立つ）のグループとして、目立たないグループはC（目立たない）とすれば、その中間のグループはB（普通）となる。

そしてこれらグループ間にはさきほど述べた壁がある。人は異物には敏感である。Cグループにいる人間はBグループに混じることは難しいだろう、短い間ならともかく長期間に渡って馴染むことは難しいだろう。

しかし、逆だとそれほど難しい場合でもない。Aのグループにいたと思つたら、気づいたらBのグループにいる場合もある。

もちろん例外もいるだろう。A、B、Cなどと関係なく接触するいい意味で八方美人的なものもいれば、どのグループにも属さず、特定の友人とのみ付き合ったり、常に一人でいたりするものもいるだろう。

そもそもA、B、Cなどと脳内で考察している人間など、どれだけいるだろうか。

これらの壁はクラスが始まり時間が経つことにより、体で感じ、自然と作られていくものだからである。

しかし、ここにこれらの考察をし、考察した末にBのグループに所属する少年がいる。

その少年の名は桜木亮^{サクラキリョウ}。高校二年の16歳で、ダサ目の黒縁の眼鏡をかけ、少しだけ短めと感じる髪の毛を寝癖だけはでない範囲でワックスもつけずにセットしている。

中背で、引き締まった肉体をしているが、服の上からはそうそうわからず、容貌はスラリと鼻が高く整った顔立ちだが、眼鏡のせい、また髪型のせい、その顔立ちも目立たない。つまりは一見ごくごく普通のどこにでもいる少年である。

彼、亮は自身の高校生活に大きな不満もなく、穏やかに流れる高校生活に概ね満足していた。

彼の中学校生活は彼のなかではいわゆるAグループ。Aグループの中でも悪目立ちする友人たちに囲まれたものだった。悪友達に囲まれ、振り回され、とても穏やかとは言えないものであり、高校生活はせめてゆつくりと過ごしたいと考え、受験勉強を必死に頑張り、悪友達が行かない、もしくは偏差値の届かない高校を選んだ。

そうして、せっかく頑張って入学した高校である。穏やかに過ごすことを邪魔されない為に、同じ轍を二度踏まないためにも、Aグループな人間には極力近づかないようにした。

Aのグループでなければ、どんなグループでも構わないと考えた亮だが、実のところ彼としてはCなグループに入りたかった。しかしCグループな人達とは会話も趣味も合わない人が多かった為、自然な流れでBグループな人達と付き合うようになった。

彼自身、クラスを見渡し、A、B、C、などと分けて見ていると

ころがあるが、あくまで、Aな人達と付き合わず、振り回されないための見方である。

俗に「高校デビュー」といった、中学校のときはB、Cなグループにいたが高校の入学を機にAなグループに入ろうとした気概を表す単語があるが、彼の場合、これの正反対に当たるだろう。

いうならば「逆高校デビュー」である。

そして「逆高校デビュー」した亮は、Bな人達のなかでも、特に目立たずに生活するよう注意し、Bのグループの中にいながら、いるのか、いないのかという実に存在感のないポジションを得、穏やかな高校生活を手にした。この穏やかな高校生活を一年過ごした亮は自分の選んだ高校と過ごし方について、自分の選択が間違っていなかったことを確信し、絶対手放してなるものと固く誓った。

大した労力を必要としない誓いをした亮だが、そんな彼に転機が訪れる。後になって亮が思うにこの日の転機は自分の高校生活にとつてプラスだったのか、マイナスなのか、大いに悩んだところであるが、結局のところ彼には結論を下せなかった。

第一話 変化への出会い

初夏の陽射しが当たる五月のある日の学校からの帰り道、平和な日常をより強く噛みしめるため、たまに一人で帰りたくなる亮は、遠回りになるが生徒がほとんど通らない裏道を通り、駅に向かっていった。すると、ふと騒ぎ声が聞こえ、目をやるとそこは50m四方の空き地で自分と同じ学校の制服をきた女の子一人が、他校の制服を着た男子生徒三人に囲まれて、何やら言い寄られているところを目撃した。

亮はその場を目撃した瞬間に、面倒はごめんだと足早に去ろうかとしたが、後になって女の子が怪我などしたと聞いたりしたら、流石に後味が悪いだらうと考え、深く、短く悩んだ結果、危なくなったら介入しようと考え、物陰からこっそり女の子を見守ることにした。

様子を見たところ、他校の男子が女の子に告白したが、女の子がそれを断り、なおも強く女の子に迫っているような状況だと亮は見た。少し遠いが耳を澄ませばよく聞こえる。

「なあ、いいじゃねえか。せっかくこんな所まで来たってのに『ごめんなさい』の一言だけで、はい、さようならなんて気にならねえんだよ。ちょっとお茶に付き合ってくれただけでいいんだよ」

「そうそう。慰めのつもりでちょっと付き合ってくれたら俺たちの気も済むしさ。何よりあんだって、告白を受けて断るなんて後味悪いだろ？ お互いのためにもちょっとだけ付き合ってくれよ」

ニヤニヤしながら男たちは女の子に言い寄る。余りにもふざけた勝手な言い分に、亮は眉を顰めながら、女の子が無事にこの場を切り抜けることを切に願った。自分の平穩の為に。

すると女の子がうんざりした声色で男たちに言う。

「そんなの私には関係ないわよ。あなたたちが勝手にきたんじゃない。私が付き合わなくちゃいけない理由なんて、どこにもないと思うけど?」

女の子の言い分は実にもっともだが、この場合逆効果ではないだろうか、と亮は見ていた。

男たちはいらついできたようで、女の子の腕を掴んだ。

「もういいからこっちこいよ。ちょっとだけでいいってんだから」

「ちょっと離してよ!」

女の子は腕を掴まれたことに抵抗するように、鞆を持っている手を振り回す。すると鞆が女の子の腕を掴んでいた男の顔面に当たり、男がのけぞる。掴まれていた腕は離れたが、のけぞった男は痛みに顔を顰め、すぐに女の子にすこんだ。

「痛つてえな!」

「何よ、あなたがいきなり掴んでくるから、……ってちょっと離してよ!」

振り払ったのは別の男が女の子の腕を掴み、首を振りながらも残念そうに言う。

「あゝあ、こいつは本当に付き合ってもらわねえとな。どうする？
お前の家に連れてくか？」

腕を掴んでいる男が酷薄な笑みを浮かべながら、顔をさすっている男に向かつて言うと、言われた男もまた同じような笑みを浮かべて、同意の声をあげる。

「いいな、それ。じゃあ、俺の家に向かいますか！」

「ちよつ、冗談じゃないわよ！ 離して！ 離してったら！」

「この……、いい加減におとなしくしろよ！」

「きやつ！」

あくまで女の子は掴まれている腕を離そうと鞆を振り回し、抵抗していたが、突然男は掴んでいる腕を突き飛ばし、その結果、女の子は尻餅をついた。

「痛……！ 何すんのよ！ 警察呼ぶわよ！」

「いいぜ、呼んでみたらいいじゃねえか」

痛みに顔を顰めるも、女の子は強く言い返したが、その声には隠しきれていない恐怖があった。その声を聞いた亮は、はあ、とため息をついた。

普通ならここで助けにいけば、女の子にとってのヒーローはほぼ間違いのないものである。と、いうよりも、もう随分前から助けに行っても間違いなくヒーローだろう。

では何故、亮は助けに行かなかったのか。亮としてはいつでも女の子を助けることができたが、助けに行かなかった理由として、助けた場合、明日になって女の子が自分に助けられたことを友達に話

し、自分が噂の対象になることを懸念したからである。

亮にとってはヒーローになることよりも、今の、いるか、いないかのポジションを維持することが大事だからである。女の子が鞆を振り回しつつ、自力で逃げ出すことを期待していた亮だが、やはり甘い考えはうまくいかず、結局は女の子を助けるために動くことを面倒に思いつつ、イタズラに恐怖を与えてしまったな、と後悔のため息がでたのだった。

亮は物陰から出て足元にあった石を拾い、女の子に向かって正面、亮から向かって正面にいる男に無造作に投げた。石は綺麗な放物線を描き、狙った男の額に見事命中した。

石がぶつかった男はさすがに痛かったようで、蹲って額を抑えた。

「何だ、てめえ！」

石がいきなり男にぶつかってから、呆気になって見ていた三人いる内の右側の男が亮を見つけて怒鳴った。それにつられて左側にいる男と女の子が亮の方を振り向いた。

振り向いた女の子を見た亮は、遠目ながらもけっこう可愛い子なんじゃないかと暢気に考え、亮に気づいた女の子と目が合うと亮は右手をシッシ、と亮から右に向かって振った。亮のその意味としては「あつちに逃げる」という意味である。

女の子は亮のジェスチャーの意味するところを悟ったようで、頷いて素早く立ち上がり、亮の示した方向へと、突然現れた亮の行動に呆気にとられている男たちを尻目に走り去った。

「ちよつ……、てめえ！　そこ動くな！」

女の子が走り去っていくのをつい見過ごしてしまった男たちは、そのことにさらに怒りを増やしたようで、亮の元へ走り向かった。

男たちの注意が、女の子から自分に向ったのがわかった亮は、ほと安堵の息を漏らした。どうやら思ってた以上に単純なやつらしい、と亮は無表情ながらもほくそ笑んだ。

男たちは自分たちが向かっていることに亮を安心させているとは露とも思わず、拳を振りかぶりながら亮の元へと接近する。

亮は余裕でかわせるテレフォンパンチを見ながらその場を動かさず、男の一人が自分の蹴りの射程距離に入ったのを確認すると、予備動作を全く感じさせない動きで一閃、足刀を男の鳩尾に突き刺した。カウンターの形で亮の足刀を受けた男は苦悶の表情を浮かべ、苦しそうな呼吸音を吐き出しながら膝から崩れ落ちた。

「は!？」

その一瞬のやり取りを見たもう一人の男は素っ頓狂な声を上げ、目にした光景を信じられないといった表情で走っている足に急ブレーキをかける。それは偶然にも亮の射程距離からギリギリ離れた。それを見た亮は、内心舌打ちをしながら男と目を合わせると、すぐに男の背後に視線を向け、叫んだ。

「こつちだ！　早くこい！」

はっとした男は慌てて背後を振り返るが、そこには誰もいない。自分が騙されたと悟る前に、男が背後を振り返っている間に距離を

詰めた亮が回し蹴りを先ほどの男と同様に鳩尾に突き刺した。

「単純でありがとよ」

亮は実に嬉しそうな笑顔で男に呟き、苦悶の表情を浮かべながら崩れ落ちる男を尻目に、最初に石をぶつけた男に目をやると、蹲った体勢ながらこちらをばかんと見ている。

残りの一人を確認した亮は、落ち着いた足取りで男の元へ歩み寄る。亮が自分の元へと向かっていることを認識した男は慌てて立ち上がり、石をぶつけられたことも思い出したかのうように、自分の額を指しながら啖呵を切った。

「てめえ、何してくれてんのかわかってんのか!？」

声には怒りと得体の知れない恐怖に侵されているような響きが少しあったが、亮は男の啖呵を右から左に聞き流し、無表情のまま、ゆっくりと男に詰め寄る。

すると男は、そんな亮に更に恐怖を抱いたのか、思わずといった感じで拳を振りかぶりながら亮に向かう。が、亮の射程距離に入った瞬間に鳩尾に足刀を受け、他二人の男と同様に苦悶の表情浮かべながら崩れ落ちた。

ここまで、亮が石を投げてから二分と経っていない。鮮やか過ぎるといつても差し支えない亮の手並みである。

気絶した男を確認した亮は、男の制服のポケットを探り始めた。胸ポケットから学生手帳、ズボンのポケットから財布と携帯を取り出し、物色しようとしたところで背後に気配を感じ、ああ、忘れて

た、と思いながら苦笑した。

亮としてはそのまま女の子が逃げ帰ってくれれば、クラスでも存在感のない自分のことだから、自分を見つけないことなく、自分が噂されることもなく終われることを期待していた。が、さすがにそれは自分にとって都合がよすぎるか、と考えると同時に女の子が現れることも想定内だった。

助けてくれた人を残して、一人だけ逃げ去るのには誰にも抵抗があるだろうから、これも仕方がないことだと思いつながら亮は振り返ったが、完全な想定外の事態に絶句し、固まった。

振り返った先に見た女の子はスラリとした細すぎず、太くない長い手足に、性別など関係なく思わず振り向かずにはいられない整った容貌をし、うっすら茶色の髪は肩下までウェーブがかかってながれている、学校内でも特別なA、超特Aの美少女、自分の学校のアイドルがそこに立っていたからだ。

亮が突然振り返ったことにより、少し驚いた表情を見せる超特Aの美少女だが、すぐに気を取り直して、ぺこりと頭を下げた。

「助けてくれて、ありがとう」

女の子の言葉を聞いてはっとした亮は、この事態をいかにうまく乗り切るかを脳内を高速回転させて考えながら、学校で女の子にいつも使う丁寧な口調で返事をした。考えるのはもちろん超特Aの人間に係わりたくないためである。

「い、いえ。どういたしまして……、怪我はないですか？」

「ああ、大丈夫です。どこもすりむかなかったみたいですよ」

女の子は両手を振りながら亮の言葉に答えた。なるほど、女の子を足を見ると、土も血もついているように見えない綺麗な足だ。というよりも細くてスラリと長く綺麗過ぎる足だ、と見惚れそうになったが、頭を振って雑念を追い払い、女の子に言う。

「よかったですね。ではこの連中が目を覚ます前に帰ったほうがいいですよ?」

亮は、この女の子とは少しでも早く離れるのが、ベストではないにしてもベターだと考えた。女の子は少し戸惑いの表情を見せ、亮に詰め寄る。

「いえ、でも、そんな……、あの、同じ学年の方ですよ? 二年生の方ですよ?」

女の子は、亮の言外に「早く帰れ」の言葉に気付いたのか、気づいていないのか。気づいて、敢えて気づかなかった振りをしたように見えた。

戸惑ったのは、恐らく、自分との会話をこれほど早く切り上げようとする男が珍しかったからだろう。これほどの美少女だと言い寄る男は多いはずである。

しかし、自分のような平凡な見かけの男は気後れしてあまり話しかけられないだろうと、亮は見当をつけての自然な流れのはずだが、女の子は亮の「帰れ」の言葉を聞き流して、同じ学年であることを確認してきた。

質問ではなく、確認なのは胸ポケットの刺繍のラインを見たから

だろう。亮の学校では現在、胸ポケットのラインの色が赤が一年、青が二年、緑が三年を表しているからである。亮も女の子も胸ポケットのラインは青になっている。

「ああ、そうだけど……………」

「あの、お礼をしたいんですけど…………、名前教えてもらっていいですか？」

女の子は上目遣いで亮に更に詰め寄る。破壊力抜群の顔だな、と思いつつ亮は拒否した。

「いや、いいです。お礼ならさっき聞きましたよ？」

亮はたいして間違ったことは言っていない。「ありがとう」「の一言を最初に聞いたのは間違いないからである。しかし、この場でいうお礼とは「ありがとう」の一言以上のことをしたいと言っているのは、亮にもわかってる。

「いえ、そうじゃなくて…………もつと別の形でお礼をしたいんですけど…………あ、すみません、私の名前は藤本恵梨花フジモトエリカです。二組です、二年二組」

亮は舌打ちしそうになるのをなんとか堪えた。自分の今の学校生活を守るのにまず一番の方法としては、Aグループな人たちには名前も顔も認識されないことが一番重要だと考えている。なので、この超特Aの美少女には自分の名前を知られたくないがために「人名を尋ねる前に自分が名乗る」の大義名分があるから名前を聞かれてもスルーしたが、女の子は自分が名前を名乗っていないことに気づいて名前を名乗った上、クラスまで名乗られてしまったので、自分も返さなくてはいけないことに憂鬱になりながら一瞬、偽名と嘘

のクラスを名乗ろうかと考えたが、調べられたらすぐにわかることだし、調べられた後になぜ嘘をついたのか騒がれるのを避けるためにもやめて、少し諦めのため息を吐いた。

「……桜木亮、八組です」

「桜木……リヨウ？ リヨウはこの漢字であってますか？」

と、言いながら指で「亮」の文字を空中に描いた。

「合ってるよ……、よくわかったな、一発で。それで、あー、お礼なんて本当にいいから。暗くなるし早く帰ったほうがいいんじゃないか？」

亮は少し焦ってきたようで、口調が段々と素になってきた。が、亮の口調から少し丁寧さが抜けたのを、親密な表現と考えたのか、それに力を得て恵梨花が言う。

「いえ、ダメです！ もっと別のお礼をします……、あの、よかつたら、携帯を交換してもらってもいいですか？」

お礼をするのにそんなに拘らなくてもいいじゃないかと思いつながら、こんな子と携帯を交換したことが他の人に知られたら、厄介になるのでは、と考えた亮は咄嗟に言った。

「あー、いや、じゃあ、お礼として俺がこの連中にしたことを誰にも話さないって約束してくれないかな？」

亮としてもこれはいいアイデアだと考えた。自分が噂にならない、女の子はお礼ができる。正に一石二鳥である。

そんな亮の言葉を聞いた恵梨花は不思議そうな表情になる。

「えっ……？ どうして、そんな……？」
「ああ、そのほうが色々都合がよくて……」
「都合……？ え、でもそんなにいいんですか？」
「俺としてはそれでいい。約束してくれるか？」
「え……、うん、いいけど……」

亮の言葉につられたのか、恵梨花の口調からも丁寧さが少し減りながら頷いた。

そんな恵梨花を見た亮は、ほ、と安心の一息をついて、恵梨花が来る前に始めていた後始末の作業を再開することにする。手にもっている男のポケットから抜き出した携帯から、男の携帯番号、アドレスのデータを自分の携帯に転送し、生徒手帳の顔写真と名前の載っているところを自分の携帯で写真を撮った。

更に財布に免許証の有無を確認し、免許証があったのでこれも携帯で写真を撮り、現金、入っているお札を全部抜き出し、自分のポケットにしまい、転がっている男の上に携帯、財布、生徒手帳を無造作に転がした。

手慣れた一連の動作に呆気にとられながら見ていた恵梨花が、慌てて亮に詰め寄る。

「ちょ、ちょっと、何してんの、桜木君!？」
「後顧の憂いを断つことと、再犯防止」

亮はその言葉だけで締めようとしたが、恵梨花は納得しなかった。

「え？ で、でも、お金までとるのはやりすぎじゃない!？」

亮はその言葉に、ああ、と呟いて恵梨花に尋ねる。

「ゲーム……、RPGとかやったことある？」

恵梨花は質問の意図がわからずに、少しなら、と答えた。

「ゲームで敵キャラクター……、モンスターとか倒したら、お金落とすよな？ あれと一緒にだよ」

あまりに淡々と言う亮と、亮独自の理論に恵梨花は驚きを隠せず、論点が違うような質問をしてしまった。

「ええ！？ で、でもそれはモンスターだけじゃない！？」

亮は頷きながら言った。

「ああ、でもモンスターは落とすけど、こいつらの場合、ポケットの中を探らないとでてこないからなあ……、その点モンスターのほうが親切だと思わねえ？」

「ええ！？ そこ！？」

「それに敵にはちゃんと人間もいるぞ。ボスはけっこうが人間だったり、それに山賊だってお金落したり、宝箱落したりするだろ？ ん……？ じゃあ、山賊のほうがこいつらより親切じゃないか？」

アハハと笑いながら同意を求める亮に、恵梨花は口元を引き攣らせる。

そして、恵梨花は改めて亮を観察してみることにした。彼はとて

も地味な見た目だ。実際自分は今日まで、彼が学校にいることを認識していなかった。見かけたことがあるかもしれないが、今日初めて見るように思う。そんな人が自分に臆することなく、話をする。

恵梨花は自分の容姿が人より優れていることは自覚している。学校の男は自分に好奇心な、たまにねっとりするような視線を送るし、自分に自信のある男は、ほとんどが自分を口説こうと躍起になっているのも知っているし、そんな人がよく傍にいるせいもあって、平凡な男は自分に近づくのに気後れし、あまり話しかけてこないことも知っている。しかし、目の前の、見かけは全く地味な男はやることと言ったことがとても常識外だ。

彼は一体何者なのだろうか、恵梨花が考えていると、亮は残る二人にも同様の作業をし終わったようので、恵梨花に声をかけた。

「もう、帰ったらどうだ？　ここから先は見てもいいもんじゃないぞ？」

亮は自分のことが恵梨花から噂される心配をもうやめたので口調を素にした。丁寧な口調にしていると、言うことまで丁寧になって場のコントロールが難しいと思ったからだ。

亮の問いにはつとした恵梨花は、帰ろうかどうか悩んだが、亮への興味が湧いたのか、怖いもの見たさなのか、首を振った。それを見た亮も首を振った。

「はあ……、俺がこいつらにしたことは黙っててくれよな？」
「わかってるわよ、約束したし」

恵梨花はできるだけ神妙な顔で頷いた。そんな恵梨花に亮は肩を

竦めると、足元の男二人を足でつついて揺り起した。

「おい、起きろ」

のびていた男二人は、亮に揺り起されると、ゆっくりと苦悶の表情を見せながら起き出した。二人が起きたのを確認した亮は男二人に向かって言った。

「おい、あいつ、起こせ」

首を向けながら言う亮の方向に目を向けると、自分たちの友人が気絶しているのが見え、焦った声で宮本、と声を出す。次にポケットに入っていたはずの携帯、財布、生徒手帳が自分のまわりに散らばっているのに気づくと、亮にむかって声を上げた。

「てめえ、俺たちに何しやがった！？ ……財布の中身がないのはどういうことだ！？」

財布の中身を見ながら男たちが怒鳴ると、心底鬱陶しそうに亮が言う。

「怒鳴らなくても聞こえてるって、いいからあいつ起こせよ」

「なんだと！？ なんなんだ、てめえ！？」

次々と文句を言う二人に、亮はうんざりした表情で眼鏡を外し、二人を睨んだ。

「お前ら、誰に向かってそんな口きいてんだ？」

亮は別に何者というわけでもないが、亮の睨みで途端にビクッと

した二人はそんな亮に逆らってはいけないと、本能で察したのか、まだのびている友人を起こしに慌てて駆けて行く。

二人が駆けて行く先には恵梨花が近くにいたので、亮が恵梨花に手招きして、自分の後ろにいるように示した。小走りで亮の元に駆け寄ると、亮が眼鏡を外しているのを見たせいか、恵梨花は少し驚きの顔を見せた。

恵梨花が亮の後ろにいつている間に、もう一人の男が目を覚ましたようので、困惑気味の様子がありありと見れる。

「よし、お前らそこ座れ」

亮は男たちに向かって命令する。男たちは文句を言おうとしたが、亮の睨みからすぐにその場であぐらをかいて座った。が、それを見た亮は今度は呆れの表情をした。

「馬鹿か、お前らは？ 普通、座れって言われたら正座だろ」

男三人は戸惑いつつ、顔を見合わせ、自分たちを睨んでくる亮の顔を見ておとなしく正座をする。

その様子を恵梨花はただただ、ポカン、と見ている。

三人が正座したのを認めた亮は男たちに向かって言った。

「いいか、お前ら。今日お前らがこの子に乱暴しているところを、俺はこの携帯で動画を撮った」

亮は右手に携帯を持ちながら、恵梨花を指し示した。

「「「はあ!?!」」」
「ええ!?!」

四人の合唱だった。男三人はもちろん、恵梨花も驚きの声をあげた。それに亮はおもむろに頷く。

「それとお前らの携帯の番号、アドレス、住所、顔写真、学校、クラスと、押さえてる」
「な、なんだと!?!」

先ほど起こされたばかりの男は、この亮の言葉に、自分の携帯等が転がっているのに初めて気づいた。

「それだけじゃねえだろ! 金もとつただろ!」

憤慨しながら言う男たちに亮は、心外だと言わんばかりの表情で「自業自得、因果応報って言葉知らないか? 悪いことしたんだ、悪いことがお前らに返ってきただけだ。女の子に暴力したらいけないって親や先生に言われなかったか? 金は慰謝料、または迷惑料だと思え。小銭はちゃんと残してやったんだから、家には帰れるだろ」

と、亮が言うと、右側の男が叫んだ。

「ふざけんなよ、てめえ!」

友の叫びに勢いを得た真ん中の男も一緒に叫んだ。

「そつだ、俺たちが何したってんだ!」

その言葉を聞いた亮はピクつと反応し、真ん中にいる男の顔面を無造作に蹴った。

ゴン、と嫌な音とともに蹴られた男は後ろにのけぞる。

蹴られた男の左右にいた男たちは亮の蹴り足が見えなかったように、突然隣の友人が嫌な音とともにのけぞったのを見て、驚愕の表情を浮かべている。

恵梨花も同様に驚いた顔をしている。

「俺たちが、何した……？ お前ら三人で女の子に迫って、こかして、何した、だって？」

その場にいる男たちは亮の雰囲気豹変し、それと同時に冷気のようなものを感じて固まった。

恵梨花も息を飲んで一瞬固まったが、慌てて亮の腕を掴んだ。

「私は大丈夫だから。もういいよ、ね？」

恵梨花も少し亮に恐怖を感じないでもないが、恵梨花はこの人は自分には、女の子には暴力を振るうような人ではないだろうということが感じられたので、硬直から抜け出せた。

反対に恵梨花に腕を掴まれた亮は一瞬硬直し、狼狽の表情を見せる。恵梨花は、ね？ と首を傾げて亮を見るが、亮はさらに狼狽の色を強くしたように見えた。が、すぐに気を取り直して、怯える男たちにむかって言った。

「とにかく、この子にはもう二度と近づくなよ。というよりもこの近辺を二度とうるつくな。ああ、この子と俺の視界にも映らないよ。う気をつけるよ。今言ったことを守らなかつたらお前らの動画をインターネットにプロフィール、携帯情報込みで流すからな。てか、死ね」

男たちは亮の言葉にぞつとし、何度もすみませんと言いながら慌てて逃げていく。その際に、彼女さんには二度と近寄りません、な。どど勘違いのセリフまで聞こえ、それに対して亮は慌てて否定しようとした。が、その時恵梨花が更に強く亮の腕を掴み、再び亮は硬直してしまい、否定の言葉を上げることが出来なかつた。

男たちが去っていくと何とも言えない静寂さが突然訪れ、亮はコホン、と咳払いをした。そんな亮を恵梨花は不思議そうに首を傾げて見上げ、その顔を見た亮は一瞬、う、と詰まり、恵梨花から視線を外しながら言う。

「あゝ、その、腕を外してもらっていいか？」

言われて恵梨花は初めて自分が亮の腕を抱き抱えるように、というよりも自分の胸の間に押しつけて密着しているのに気づいた。それに気づいた恵梨花は、きゃ、と慌てて亮の腕から離れ、顔を真っ赤にした。

「い、いじめんなさい……」

恵梨花がおずおずと亮を見ると、亮も心なしか、顔を赤くしている。亮は目を合わそうとせずに

「いや、いい……、役得だし」
と、亮は本音がポロつと出てしまった。

言われた恵梨花は赤い顔を更に赤くするが、コホン、と咳払いをして、気になっていたことを尋ねる。

「ねえ、動画なんだけど……」
「うん？ ああ……、ちゃんと撮ってたぞ？ 消してほしいなら消してもいいけど……」
「えと……、そうじゃなくて」
「ん……？」

亮が恵梨花の言いたいことを察せずに関り返すと、恵梨花は笑顔になって聞いた。

「いつから撮ってたの？ 見せてもらってもいい？」

その言葉を聞いた亮は自分の失策に気付いたが、自分も悪いところがあることを自覚していたので、観念して携帯を渡した。

亮は動画を静かに眺める恵梨花を見ないようにしながら、漏れる音声が入るのを防ぐ手立てはないかと考えていると、動画の再生が終了し、恵梨花は亮に携帯を返した。零れる様な笑みで。

「ずいぶん前から撮ってたのね？」
「ん……？ ああ、そうだな」
「助けてもらってこんなこと言うのもなんだけど、どうして、もっと早く助けてくれなかったの？」

亮は恵梨花の微笑みが今まで見てきた恐ろしい笑顔のワーストラ

ンキングに、堂々と入っていることを感じた。

「それは、めんど……、オホン、一人でどうにかするんじゃないかと思ったから、かな」

「そう？ 腕を掴まれて、こんなに抵抗している私って、あなたの目にどう映ったのかしら？」

「ああ……、頑張れって、応援してたぞ」

偽りない、亮の本心である。

「そう……」

呟きながら恵梨花は亮の正面に向かい、にこっと微笑むと、腕を大きく振りかぶって

「もっと早く助けなさいよ！」

と言いながら、亮の頬を張り飛ばした。

避けることもできたが、避けると後が怖そうだと考えた亮は、甘んじて美少女のビンタを受けた。

わざと受けても痛いものは痛く、軽く後によるけつつ、目の前がチカチカするのが治まるのを待ち、はあ、とため息をつく。

「悪かった……、早く助けられたのに、助けなくて」

恵梨花は亮の謝罪を受け、助けてもらったのにこんなこととして「めん、と恵梨花も謝罪を返す。そして、助けてくれてありがとう、ともう一度言った。

「約束だけど……、頼んだぞ？」

「約束……？ ああ、うん、わかった。『あなたがあの連中にしたことを誰にも話さない』よね？ けどいいの本当に？ こんなので」「それがいいんだよ……、さてと」

返事をしながら亮は眼鏡を掛ける。それを見た恵梨花は亮に尋ねた。

「どうしてコンタクトにしないの？」

「これのほうが存在感を……、いや、眼鏡が好きなのだ」

どうやら少し素でいる時間が長過ぎたのか、眼鏡をかけてもうまく気持ちが切り替わらない。本音が出そうになった亮は、早くこの目の前の美少女から離れなくては、と考えた。

「そうなの？ 眼鏡外した方がいいと思うのに……」

少し赤くなりながら恵梨花が言ったが、尻すぼみになって亮には聞き取れなかった。

「え？ なんて」

慌てて恵梨花は首を振った。

「ううん、なんでもない……、帰ろうか？ 駅向かってたんだよね？」

亮は内心冗談じゃない、と思った。こんな子と一緒に並んで駅に向かって歩けば、噂が広まり明日になれば今までの、大した労力を使っていない苦勞が水の泡である。

「いや……、えっと、学校に用事思い出したから、ちょっと戻るよ」「
「そうなの？　じゃあ、一緒に……」

恵梨花が言い終わる前に、亮が遮った。

「いや、いい！　ありがとう、じゃあな！」

そう言うと、慌てて来た道を学校に向かって走って行く。

「約束守ってくれよ」とドップラー効果を出しながら。

その様子を呆気にとられて見送った恵梨花は

「普通、襲われた女の子を助けたら、少しは送って帰るのがマナー
じゃないの？」

と、実にもっともな意見を呟いた。

第二話 違和感

しばらく走った亮は、適当なところで立ち止まり、なんとか離れることができた。安堵の息を漏らした。今日はなかなか想定外な出来事があったが、上手い具合に口止めもできたので、なかなかうまく対処できたのではないかと、亮は自画自賛していた。

少し遅かったかもしれないが、女の子に怪我もなく助けることができ、携帯を聞かれても、上手く聞き流せた。約束を守ってもらったことで、お礼を受け取るようになったので、明日になれば自分が噂されることも、話をするかもしれないだろうと、亮は安心していた。

あれだけの美少女と仲良くなる機会を失うのは残念だが、元々、学校内では彼女など作る気のない亮である。どんな噂的になるかわからないからだ。なので、学校一のアイドルは好みの点でいえばドストライクだが、同じ学校の女の子という点で、恋愛対象としては圏外である。だから、亮は学校一のアイドルの名前を知らなかったし、聞いても脳内から消去してきた。

「しかし、あの子、どこかで見たような気が……」

と、言って亮は首を傾げ、一人呟く。

すぐに手をポンと叩いて、気づく。

「見たことある気がして当たり前だ。同じ学校なんだから」

と、アホな解答を出して、スツキリしたところで、帰路についた。

しかし、亮は後になって、約束の内容を変更すれば、と激しく後悔することになる。亮が今のポジションを維持するために、必要な約束は『亮が連中にしたことを誰にも話さない』ではなく、『恵梨花はもう亮に話しかけない』こそが重要だったからである。

もっと言うならば恵梨花が自分に興味をもつことを考慮に入れないかったのが亮の最大の誤算である。

駅までの帰り道、恵梨花は困惑していた。今まで、自分に言い寄る男は山ほどいたが、自分の誘いを、ああまで流して、自分の前から逃げ去られたことは記憶になかった（と、いつても誑かしたり、言い寄るために誘ったわけではない）。

彼に対して、怖い気持ちや、得体の知れない恐怖を感じたりもしたが、それは彼のほんの一面だろうと恵梨花は思う。彼は自分を助けにくるのは遅くなったと言っていたが、結局はしっかり助けてくれた。危なくなった時に、自分から注意を逸らし、助けてくれた。それに、男たちを集め、彼が何度も言い含めたことは自分に近寄るな、と言ったことだ。その前までの行動が色々と常識離れしているように見えたが、結局は全て恵梨花のためである（お金をのぞいて）。

それに眼鏡を外した素顔を見た時は驚いた。眼鏡越しでは見えに

くい、目の奥の感情が伝わってきて、とても心が温かく、落ち着く気持ちになれた。だからか、彼が怒りとともに吹き出した冷気が、彼には合っていないように感じ、思わず腕を掴んで、彼を止めてしまった。

不思議な人というか、変な人というか、怖い人なのか、恵梨花にはわからず、頭から離れようとしないうちに彼のことについて相談したいと思い、誰かに電話をかけようかと考えて、携帯に手を伸ばすが、ふと彼との約束を思い出して、手をとめた。

『俺がこの連中にしたことを誰にも話さないって約束してくれないかな？』

彼が何故、こんな約束をしたのか真意はわからないが、やったことへのえげつなさを考えたら、無理もないと考え、しかしならば、誰に、どんな風に、彼との約束を守りつつ、相談したものかと考えた恵梨花は、うってつけの親友が頭に浮かび、家に帰ったら電話して相談しようと思った。すると、気が少し楽になったのか、鼻唄を歌いながら、上機嫌に帰って行った。

その日の晩、20時を過ぎた頃、恵梨花は高校に入ってからの一
番の親友、鈴木梓ススキアサに電話をかけた。

コール数回で、梓がでる。

『もしもし、恵梨花？』

「うん、今、大丈夫？」

『大丈夫、どうかした？』

「うん、ちょっと相談があつて……」

『へえー？ 電話でなんて、珍しいね』

「そうかな？」

『珍しいよ。いつも相談なら会つて話すタイプじゃない……、急ぎの相談？』

「ううん、急いでるわけじゃないんだけど……」

『ふうん？ で、どうしたの？ ついに好きな男でもできた？』

恵梨花は梓がニヤニヤしながら言ってるのが、頭に浮かんだが、その後すぐに、今日自分を助けてくれた男の顔が浮かび、それに焦りを思いつつ慌てて否定した。あくまで、頭に浮かんだのは『好きな男』の言葉に反応したわけではない、相談の対象が彼だからだと。

「ち、違つて！」

『……、へー』

梓の言葉には、感心の響きが混じっていた

「ちょっと、本当だつてば」

『はいはい。で、どんな人なの？』

まるで信じてない響きの梓の返答だった。

「いい？ 好きだとかじゃなくて、どんな人なのかわからないから、相談したいだけ！」

『……ううん、否定してるのか、肯定しているのか、わからない台詞ねえ』

「もう 話を聞いてくれるの！？ 聞いてくれないの！？」

軽やかな梓の笑い声が聞こえてくる

『聞くから、落ち着きなな』

少し頭を冷やした恵梨花は今日帰り道に起こったことを話した。

亮の

『俺がこの連中にしたことを誰にも話さないって約束してくれないかな？』

の約束を破らない範囲で。つまりは三人の男から助けられたことのみを話した。

聞いた梓は質問した。

『彼はどのようにして、恵梨花を助けた？』

「ごめん、言えない」

『言えない？ どうして』

「言わないことを約束したのよ」

『言えない、ねえ……、言わないように約束……』

梓の言葉から、感情的なものが減ってきた。思考の海に漂う時の彼女の癖である。

「彼がしたことを、誰にも話さないことがお礼でいって言われて『それなのに、あたしに相談した？ 約束を破ることにならない？』

梓は、恵梨花が一度した約束をそうそう破らないことを知っているので、驚いて質問した。

「ならない……わよ……。あくまで彼が私に約束したのは彼が男三人にしたことであって、私にしたことじゃないし……」

恵梨花の少し躊躇いの言葉に、梓は一瞬呆気にとられた。

その彼の約束の真意は梓にはわからないが、なんとなくだが、彼は今日あったことを誰にも話して欲しくないように感じる。

それに気付かない恵梨花じゃないはずで、現に歯切れの悪い返答だった。それなのに彼とした約束の穴をつくように、自分に相談していることに驚いた。

そして次に驚いたのは、恵梨花がそこまでして自分に相談するのは、余程、気になっている証拠ではないか。

そこまで思い至った梓はクッククックと、喉を鳴らすように小さく笑った。

「……梓、ちょっと怖いわよ」

「ああ、ごめん。恵梨花がここまで、誰かを気にするなんて初めてだからね。しかも男で」

「ちよつと、変な風にとらないでよ」

「わかった、わかった。フフ」

恵梨花は思わず、はあ、とため息をついた。

「それで、助けてもらった後は？　一緒に帰って話したんでしょ？」
「それが、その……」

またもや、齒切れの悪い返事に、梓が今度は何だ？ と首を傾げる。

「逃げられたの」

『は？』

梓は、親友の言ってる意味がわからず、彼女にしては珍しい、素っ頓狂な声が上がった。

そんな梓の反応に少し、苛立ったのか、照れたのか、恵梨花は少し声を荒げて言った。

「だから、逃げられたの！ 一緒に帰ろうって、声をかけたら学校に用事があるって、走って逃げて行ったのよ！」

『恵梨花と一緒に帰ろうと声をかけたのに、逃げられた？』

「そう」

『恵梨花が誘ったのに？』

「そう」

『……………、本当に学校に用事があつたんじゃないの？』

梓は、さも疑わしげな声で言った。

「そんな風に、全然見えなかった。それに私も学校と一緒にいこうかと言ったら、慌てて拒否して走って行ったのよ……………」

その時のことを思い出したせいかわ、思ってた以上に恵梨花にはシヨックだったようで言葉がどんどん小さくなっていった。

しかし、梓は男に逃げられた恵梨花を想像して、爆笑してしまった。

その声を聞いて、恵梨花はさすがに声を荒げた。

「ちょっと、何笑ってんのよ！」

『いや、ゴメンゴメン……、あの恵梨花が、あの学校のアイドルが男に誘いを断られた揚句、走って逃げられるなんて……アハハハ！』

恵梨花は恥ずかしさで顔を真っ赤にした。

「もういい、切る！ じゃあね！」

『まって、まって、謝るから……、アハハハ』

息を切らし、笑いながら謝る親友の言葉に、今すぐ電話を切ろうかと考えたが、まだ自分は今日のことを話しただけで、何の相談もしていないことに気づく。これでは笑われ損だと、こみ上げる怒りをなんとか抑えた。

それに梓がこんなに声をあげて笑うのはいつ以来だろうか、とも思った。

「落ち着いてくれたかしら？」

恵梨花の低い声を聞いて、これは相当怒っているな、と思った梓はこみ上げる笑いをなんとか抑え、自身も落ち着いた声で答えた。

『ああ、落ち着いた。……、それで、その彼の名前は？』

「やっと、本題に入れるわね」

恵梨花は、皮肉ともとれるように言った。

『そう、怒らないでって。わかってる、あたしのデータベースの情報を聞きたいんでしょ?』

『そう、名前は桜木亮サクラギリョウ』

『サクラギリョウ………? 桜木亮……、ああ、あの彼か』

恵梨花は梓が記憶に留めているとは思っていなかったたので、驚いた。

「知ってるの!？」

『ああ、思い出すのに時間がかかったけど……、なるほどね、あの彼か……』

梓の以外な反応に恵梨花は戸惑いつつ尋ねた。

「どういう意味? 彼のこと何か知ってるの? 知り合いなの?」

『何か知ってるかと、聞かれたら何も知らないし、もちろん知り合いででもない。ちょっとまって……、今情報引つ張るから』

梓がそう言うと、梓の背後からカタカタと音が聞こえる。キーボードを叩いている音だろう、と恵梨花はすぐにわかった。

『ああ、あった。やっぱりこの彼か……』

「ねえ、『あの』とか『やっぱり』ってどういう意味なの? 何か知っているんじゃないの?」

『いいや、知らないとも』

「じゃあ、どういう意味?」

『ああ……、あたしが人間観察を趣味にして、成績や、身体測定、体力測定などの記録も全て手に入れて、あたしの観察結果と一緒にデータにしてるのは知ってるよね?』

「ええ……、改めて聞くと、とんでもないわね」

そう、梓は普段から人間観察を趣味にされていて、観察結果の推測を実証するために、彼女の家の財力をふんだんに使った全校生徒の情報彼女の手元にある。しかし、ある程度のプライバシーは考慮し、踏み込んだ情報、主に過去に向けての情報は手に入れないようにしている。彼女の補足対象にならない限りは。

しかし、学校内で浮かぶ情報なら、その限りではない。学校の誰かが知っているなら、噂に上がっているようなものなら人脈をフルに使って、学校内の情報は、ほぼ全て網羅している。

だから恵梨花は梓に彼のことを相談したのだ。

「それで？ 何かあるの？ 彼には」

恵梨花は思わず逸る気持ちを抑えながら梓に聞いた。

『違和感かな』

「違和感？」

恵梨花は、自身の頭の上に？マークが浮かんでいるのを感じた。

『そう、違和感』

「どんな？」

『んん……、最初に彼を見た時はそれこそちょっと感じる程度の違和感だった。その違和感は何だったかな……、一緒に歩いている人も特に明記することがあるわけじゃないんだけど……、そうだ、思い出した。一人でいる時はそれほど感じない違和感が、彼が友達と歩いていると、その違和感が強くなる感じがしたんだよ』

「えと……、どういふこと？」

恵梨花の困惑はさらに深くなっている。

『そう、最初あたしは違和感については、おや、と思う程度で終わったんだけど、気にはなつたから書面上での記録、成績や、体力測定なんかをじっくり見たら、なんか変でね、えくと、ああ、これだ』

カタカタと、キーボードを叩く音が聞こえる。

『去年の体力測定の結果なんだけどね、体力測定って二日間に分けてやるよね？』

恵梨花は思い出しながら、たしかにそうだったと思い出し、肯定の返事を出す。

『あれの成績って、C-からA+の9段階で表してたでしょう？』

『そうね、私の今年の成績は平均A-、で梓はAだったわよね？』

『そう、で彼なんだけど去年の成績なんだけど一日目の平均がC、二日目の平均がA、二日間合わせて平均Bとなっている』

また、極端な成績だな、と思ったが、それが何を意味しているのかわからない。

「で、それで？」

『それで、今年の成績を見ると、一日目の成績はA、二日目の成績がCで二日間合わせてやっぱり平均B』

「……、えくと？」

『ちなみに測定種目の順番は去年も今年も一緒』

「つまり、彼は全ての種目で、というよりも一日目も二日目もAを

とれたってこと?」

『それもあるけど、気になるのは一日目の成績も二日目の成績も、必ずクラスで全く同じような成績をとっている人がいる。去年の一日目はその時クラスで一緒だった、河野君。今はあたしたちのクラスと一緒に』

「ああ、河野君……、ええ!? 彼と河野君の体力測定の結果が同じ!?」

恵梨花は同じクラスの河野を思い出して、驚いた。河野はとてもおとなしい人で、運動神経はみんなが知るほど悪かった。今日あの立ち回りをした彼とあの河野が一日目だけとはいえ、同じ体力を示したことなど、とても信じられなかった。

『そう、去年の一日目だけね。フフ、そんなんで、驚いてちゃダメよ。で、去年の二日目の成績は今四組にいる佐藤君。ほらサッカー部のエース、ジュニア代表にもなってる』

「あの、佐藤君と!?!」

そういえば、何度か言い寄られたことがあったな、と思いだした。容貌は普通だが、サッカー部のエースということもあって、いつも自信満々な人である。

『あゝ、そういえば恵梨花に何度か言い寄ってたことあったね』

アハハと、梓が笑うのを聞きながら、恵梨花の困惑はさらに広がる。

「なんか……、随分、おかしくない? あの二人と全く同じ成績なんて」

『そうでしょ? これがおかしくないと言う方がおかしいわ』

「もしかして……、今年も？」

『そうそう、今年の一日目の成績は彼の今のクラスのバスケット部のエースの小野君、二日目もやっぱり同じクラスの山下君』

バスケット部のエースの小野にもやっぱり言い寄られたことがある、というよりも告白されたことがある。丁重にお断りしたが。小野はエースなだけあって運動神経がいいのはけっこうな人が知っているだろう。

「山下君って子は？　どんな人？」

『うーん、悪く言ってしまうえば、いるのかいないのかわからないよ
うな人よ。運動神経はいいとは言えない』

「その山下君と同じ成績？　去年の佐藤君と並んだ彼が？」

『そう、変でしょ？』

「どう考えてもおかしいわよ……、先生たちは変に思ったりしないの？」

『先生たちだって記録を全部見たら、おかしいと感じるはずだけど、彼自体、存在感が薄いからね。変に思う前に誰だっけ？　って思ってるんだと、思うよ。それで、彼を見たら偶々だったんだと思うよ。うになると思うわ。一々、去年の成績と照らし合わせたりする先生もないでしょうから』

梓の言い分はもつともだと思つ。現に梓だって最初は少し違和感を感じた程度なのだし、存在感の薄い生徒を教師がそこまで見ているとは思えない。

『それで、この二年間の成績を見比べたのと、恵梨花の話聞いたので、あたしが最初に感じた違和感がなんとなくわかったかな』

やっと梓の観察結果を聞けると思つと、恵梨花は思わず居住まい

を正した。

「本当！？ 何なの？」

『まあまあ、推測の域を出てないんだから』

「いいから、教えてよ」

恵梨花はじれったそうに言う。そんな恵梨花に梓は、宥めるように言った。

『はつきりしたら、教えるから。それより気になるなら彼と話したらいいんじゃない？ あたしに電話するより、彼に電話したらいいのに』

恵梨花は、こう言ったらもう教えてくれない梓に苛立ったが、梓の質問を受けて、恵梨花は思い出した。

「そういえば、電話番号知らない……」

『珍しい、聞かれなかったの？ ああ、そういえば一緒に帰るのを避けて逃げるぐらいだもんね』

「違う。最初、私から聞いたけど、流されて……。途中から帰り道に聞けばいいと思ってたけど」

『逃げ去られたってわけ……クッククック』

「ちよつと！ 何！？」

『面白いねえ……』

「どうせ、私は避けられましたよ！」

『違うよ、彼だよ。桜木亮が』

「面白い？ 彼が……？ たしかに変なところも感じたけど」

『そう、とても興味深いよ。ここまで面白い観察対象がまだ同じ学年にいたなんて……、クッククック』

恵梨花は梓が本気になっているのに、若干引きながらも、梓の発言に焦って聞いた。

「ちょ、ちよっと、興味深いってどういう意味!？」

「ん? ああ、心配してくてもいいよ。男として興味深いんじゃないよ。あくまで観察対象としてだから」

梓のあっさりした返答に恵梨花は安堵の息を吐いた。

「そ、そう?」

「心配しなくても恵梨花から盗るような真似はしないから」

「盗るってどういう意味!？」

「そのままの意味だけど……、はいはい、なんでもないです」

梓は、実際のところ恵梨花がどの程度、彼を気になってるのか計りかねたが、それはこれから恵梨花もセットで観察すればいいか、と思い、口を閉じた。

「もう……、そういうのじゃないんだからね!？」

「わかりました……、で、明日は彼に会いに行くんでしょ? 学校で」

梓が聞くと、恵梨花が狼狽した声を出す。

「え……、な、な、なんで!？」

「なんでって……、あたしも会ってみたいし、もう一度お礼に行ったらいいんじゃない? お礼し足りないと思ってるでしょ?」

「たしかにお礼はしたりないと思ってるけど……、結局私がしてるのは黙っているだけだし」

「だから、もう一度お礼しにいくだけでも、いいんじゃない? あ

たしも親友を助けてもらったお礼したいし……、その時ついでに電話番号も聞いたらいいんじゃない？」

「え……と、じゃあ、そうしよつかないかな。教えてくれるかな？」

親友の余りに可愛い反応に、梓は自然と綻んだ。

『大丈夫だと思つよ』

実は梓は全く思っていないかった。自分の推測の彼なら嫌がるだろうとも思っていたが、親友の為、親友を困惑させた償いのため、自分の楽しみのために親友を誘導することにした。でも、親友の危ないところを助けてくれたのは間違いのない事実みただから、そのお礼として、結果的に彼が幸福になるようにも手を打つていこうと、梓は心で誓った。

まだ話したこともない彼だが、彼の違和感の一つは恵梨花を避けるところから「目立ちたくない」ことからきているのではないかと、梓は推測をつけていた。

第三話 教室での出来事

亮は睡眠不足だった。

昨日のアクシデントのおかげで帰りが遅くなり、その結果アルバイトに遅刻し、労働基準法を無視したような深夜まで残業をさせられたためだ。

朝の登校中にも眠気は消えてくれず、いつもの数倍のエネルギーを使ったような気持ちになりながら教室に入り、亮に気付いたクラスメイトとおはようの挨拶を交わしながら、自分の席、窓際、後から二番目の最高のポジションの席に座った。

座ると同時に、前の席の一年の時から同じクラスの小路が振り向き、亮に笑いかけた。

「おはよう、今日も眠そうだな」

「おはよう。も、は余計だ。先生がくるまで起こさないでくれ」

亮は教室の時計に目をやり、机にふせながら答えた。朝のHRまであと10分あるので、それまでだけでも寝て、眠気を飛ばすつもりのようなのだ。

「先生がきたら起こしてくれ、じゃないんだ」

小路が笑い声をあげながらも、肯定の意を表して前を向いた。

亮が全神経を集中し、10秒と経たずに眠りの世界に突入しかけた瞬間、クラスがざわついた。

教室の空気が変わったのを感じた亮は、一瞬顔をあげようかと考えたが、眠気が勝った。

体勢を変えずに、意識の半分が睡眠に支配された時、小路がこちらを振り向く気配を感じ、その小路が声をかけてきた。

「お、おい、亮」

亮は内心で舌打ちをした。まだ亮が寝る体勢を作って、一分と経っていない。小路は学校の中でも一番仲のいい友人だが、起こすなと言っていきなり声をかけてくるとは、ふざけているにも程がある。亮は返事をせずにそのまま睡眠を再開した。

「お、おいて」

小路はさらに声をかけながら、亮の体を揺らす。

学校の人間相手にしたことはないが、一発殴ってやるうかと、亮が寝ぼけながら物騒なことを考えていると、頭上から声が上がった。

「桜木君」

それは、とてもとても澄んだ声だった。可愛いというよりも綺麗な、の形容詞が相応しい声で、その声はさして大きい声ではなかったものの、教室中に響き渡ったようで、ざわついていた教室が、一瞬でしん、となる。

その声を聞いた亮は一瞬で眠気が吹き飛び、驚いたがビクリともしなかった自分の体を褒めた。寝ている体勢をそのまま維持しながら、背中に冷や汗が流れるのを感じ、脳内では打開策を得るため、高速回転を始めた。

(なんで、昨日の女がこの教室にいる!? 昨日のことは昨日で終わったはずじゃ!? あのアホ三人をしばいたところを見せ、思わずだが殺気が出てしまって、でも、それに引いてたのがわかったから、もう接触することはないと思ってたのに! いや、今はそれどころじゃない……、よし、とりあえず寝た振りを維持だ。起きなければ諦めて帰るだろう、いや、帰ってくれ!)

亮に呼びかけても反応がないのを見た恵梨花は、亮の前に座っている小路に目をやり、首を傾げながら聞いた。

「寝てるのかな?」

小路は、今まで遠目でしか見たことないアイドル顔負けの美少女に声をかけられ、かなり狼狽気味に答えた。

「あ、ああ……。お、起こそうか?」

亮から言われたことをすっかり忘れて、亮を起こすことを提案している友人に対して湧き上がる怒りを抑えながら、亮は寝た振りを維持する。

恵梨花は小路の提案に、そうなの、と返事をし、どうしようかと一瞬悩む様子を見せるが、そこで恵梨花と一緒に教室に入ってきた梓が声を上げる。

「恵梨花、いいから起こしてみて」
「……いいのかな？」

梓は自信満々の笑顔で恵梨花に頷く。

（よくない、よくない。なんだこのもう一人の女は？ 援軍なんてやめてくれ……）

亮は展開が不味い方向に進んでいるのを感じた。

「ねえ、桜木君……、桜木君？ だめだ、起きないよ？」
（そうだ、桜木君は起きないんだ。だから、早く帰るんだ）

梓は笑みを深めつつ、手を揺らしながら言った。

「もっと強く起こさない」と

揺り起こせ、という意味だろう。それをみた恵梨花は一瞬思索したが、頷いて亮の肩を揺らした。

「ねえ、桜木君……」
（やめてくれー！！）

内心で亮の絶叫が響いた。

それを見た教室の反応はすごかった。女子は目を丸くしながら驚き、男子は、なんであんなやつが、と囁き合いながら、困惑と羨望と嫉妬と殺意が混じった視線を亮に向ける。

クラス中の視線を一層強く感じ、自身を揺らす手に軽い恐怖を覚

えた亮は、現状の維持は不可と判断し、内心で諦めのため息を吐くと、さも今起きたような顔を作りながら、のろのろと顔を起こした。

「ああ、起きた……。ごめんね、桜木君？」

亮は現状が全くわからない、といった顔に、噂の学校のアイドルが何故自分の前に？ といった表情をブレンドしながら言った。

「いえ……。何か用ですか？」

恵梨花は、亮の昨日とはまるで違う態度に、無理矢理起こしたことを怒らせてしまったかと思い、しゅん、となると、俯きながら、もう一度謝った。

「あの……。ごめんなさい、起こしてしまって。怒ってる？」

弱々しそくに、上目遣いで言った。大事なことから二度繰り返そう。俯いて、上目遣いで言った。

隣の小路は真っ赤になっている。

その小路の隣にいる女子生徒数人も、顔を赤くしている。

小路とは逆隣で様子を見ていた男子生徒のグループは、魂を奪われたような呆けた顔をしている。事実、古い言い方をすれば、彼らの心は盗まれたと言ってもいいだろう。

恵梨花の後方にいた男子からは、亮にたいして、怒りと憎しみの声があがった。それほど大きい声ではなかったが、亮は聴き取れた。ためえ、ふざけんなど。

(男も女も無差別って……)

亮は引きつりそうになる口をなんとか抑えつつ、自分も真っ赤になりそうになるのを自覚したが、それも抑え込み、返答する。

「いえ、怒ってないです。……それで用件は？」

亮はあくまで、クラスメイトの前では初対面か、もしくは親密ではないように思わせたかったための口調である。と、いうよりも地味学生を目指す亮の学校での、女子への話し方のデフォルトである。

そんな亮の口調に、恵梨花は戸惑うような表情を見せたが、意を決したような顔を浮かべ、深く頭を下げた。

「昨日は本当にありがとう。昨日のとは別に、改めてお礼をさせてもらいたいんですけど、いいですか？」

教室内がざわついた。

亮は、ありがた迷惑、というのを感じるのは自分が傲慢なのだろうかと考えてしまった。

「昨日のことは気にしなくていいんだけど？ ……、それに、お礼なら話がついたと思うってたんですが……」

「ええ、でもそれでは私の気が治まらないんです。何らかの形で受け取って頂けると嬉しいのですが……」

恵梨花の口調が少し固くなってしまったのは、亮の口調がうつってしまったせいだろう。

亮はこれ以上、固辞してもしかたがないと思い、諦めのため息を吐いた。

「……わかりました。……でもその前に、昨日のアレは……？」

恵梨花の左右には同じクラスでない女の子がいる。

亮から向かって左側には恵梨花に劣らない綺麗に整った容貌の、大和撫子を連想させる、ロングの黒髪に黒縁眼鏡の女の子がいる。

右側には、背が低く、これまた整った容貌でショートカットの女の子が無表情で立っている。

亮が恵梨花の左右を見ながら言ったので、すぐに「アレ」が何なのか、気づいたのだろう。

恵梨花が慌てて口を開こうとしたところに、黒縁眼鏡を掛けた鈴木梓が声を上げる。

「恵梨花は約束を守っているよ。心配しなくていい」
「いや、でもな……。わかった」

そんなことを言ってる時点で、約束の違反になってないか？と亮は考えたが、約束を誰にも話すな、とは言っていないことを思い出した。

「あの……、でも、ごめんね？ どうしても話を聞いてもらいたくて……」

恵梨花が窺うように言うと、亮はもういいから、と手を振る。

普通、女の子なら昨日のことは、相当なストレスになるだろう。誰かに話して発散したくなるのも無理はないか、と亮は考えたので、恵梨花を責めるつもりは無くなった。

お礼についてはみんなの見てる前で話し合いたくない。そろそろ退散してもらおうと口を開こうとした時、梓が

「恵梨花は頑なに君との約束を守っていたよ、私が妬けるぐらいにね」

と、ニヤリと笑いながら言い、爆弾を投下した。

投下された爆弾は、見事教室を爆破させた。

亮は自分の口元が引きつるのを感じたが、抑えることはできなかった。

「ちよっ、ちよっと、梓!？」

恵梨花が真っ赤になって、梓に抗議する。

「何かな？」

飄々と梓が言うのを見た亮は、この女は、自分が困るのがわかってやっている、何故だか確信できた。

少し、自分に似た匂いを感じたせいもあるだろう。

亮の引き攣っている口元から笑みを深くさせた梓を見て、さらに確信した。

梓は恵梨花の抗議を受け流し、時計を振り返って言った。

「もう時間がないね。恵梨花、続きはまた後にしよう」

亮が時計を見ると、なるほど、もうすぐHRが始まる。

恵梨花も時計に目をやる。

「えっ、もう!? …… 本当だ……、あ、携帯……」

携帯の単語に亮は、まさか、と焦りを覚えた。

「携帯の交換は後にしてもらおう。なに、彼なら交換してくれるさ」

またもや、ニヤニヤしながら亮を見て言う梓に、亮は恐怖を覚えた。

教室の男子からの殺意の視線はピークを迎えつつある。

「ごめんね、桜木君? 後で……、昼休みに、また来てもいいかな?」

げっそりとした顔で、亮が頷くと、三人の美少女たちは教室を出て行った。

三人が退室すると同時に、教室中の視線が亮に集まり、HRの開始の合図のチャイムが鳴った。

HRの後の一時間目が終わった後の休み時間、亮はクラスの男子に囲まれた。

いや、包围された、といったほうがいいだろう。

「どういうことだ、桜木？」

クラスでAグループの佐々木が桜木に尋問する。

体格のいい彼が迫ってくるのは、迫力感たっぷりである。

前の席の小路も、振りむいて、興奮した様子で聞いてくる。

「本当に。なんで藤本さんに、鈴木さん、山岡さんまで、亮に会いに来たんだ？」

誰がどの名前を指しているのか分からない亮だが、そのことはおくびにも出さなかった。

お礼つてなんだ、昨日何があった、携帯の交換だと!? なんてお前なんかに！ 昼休み一緒にいいいか？ のような、疑問や恨み、妬みなどの声を受けた亮は返答如何によっては、自分の平穏な生活が無くなってしまうことを感じた。

「実はな……」

口を開いた亮の声を聞こうと、全員が口を閉じ、教室が一瞬、しん、となる。

亮はもちろん、本当のことを話すつもりはない。話したところで、信じてもらうことは難しいだろう。

そこで考えた亮の言い訳はこうである。

「こけているところを助けただけだ」

誰かがずっこけたような音が聞こえた。

嘘はついていない。なぜなら尻もちをついた彼女を助けたのは事実だからだ。

地味な自分には地味な話の方が、みんな信じるだろうとの、亮の結論だ。

一瞬、きょとんとしたクラスメイトだが、ああ、と納得している顔がちらほら見える。

だが、それだけではすまない男が質問する。

「じゃあ、約束ってなんだ？」

「えと、だな……、彼女を起こす時、俺もこけてしまったな。それが恥ずかしくて黙っててくれて言ったただけだ」

これはウソだ。しかし、黙っていてくれといった部分は本当である。

「はあ！？ それだけかよ!？」

「ああ、その通りだ」

亮は片手で眼鏡をクイッとやりながら、凜々しく答えた。

嘘とは堂々と言ってこそ、嘘である。

「お前、昼休みはどうするんだ？」

「ジューズでもおごってもらうよ」

肩を竦めて無難な答えを返す。事実そうしようかと亮は考えていた。

しかし、それでもうらやましい……、などの呟きが聞こえるがそこはスルーだ。

「じゃあ、携帯の交換ってなんだ!？」

その言葉に男たちにまた火がついた。

「あの人は、自分から男に聞いたりすることは滅多にないんだぞ!」

これには、亮が一番頭を悩ませたが、半分事実を言う方が無難だと考えた。

「お礼をしたいから、って何度言われても断ってたら、なら、メールか電話でお礼について相談させてくれって言われて、交換しようとしたら、彼女の携帯の電池が切れて、今日になっただけだ。だから」

ら、お礼のジューズをもらえばを申し出てくることもないだろう」

話の全てや、梓の言動をじっくり考慮すると、多少の矛盾点があるが、それほど無理が無い話だと、亮は思っている。

実際、クラスメイトたちは多少訝しげな表情をしているが、納得している顔もちらほら見える。

亮はこの言葉で締め括った。

「彼女はすごい律義みたいだな。こけたところを起こしただけで、あんなにお礼を言ってくるなんて」

男子たちは、ああ、あの人ならそうかもしれない、と恍惚の表情で呟いた。

この調子なら、いつも通り影を薄くして過ごせば、すぐ忘れてくれるだろうと亮は安堵した。

質問責めをなんとかクリアした亮は昼休み前の休み時間、三時間目が終わった後に恵梨花のいるクラスの前に来ていた。

話を聞いたところ、あの美少女三人は同じクラスで、このクラスにいることは学年の男子たちの羨望の的らしい。こんな恐ろしいク

ラスには近寄りたくなかったが、亮は梓を警戒していた。

あの女は自分が困るとわかっていて、あんな言動を繰り返している様子に見えたから、昼休みもいきなり来ては自分の机を三人で囲んで弁当を食べるような気がしてならなかった。

そのため、先手を打ち、恵梨花を見かけたら昼休みは屋上にいると伝えることにした。

屋上は本来、鍵がかかって生徒厳禁である。しかし亮はアルバイト生活で身に付けたピッキング技術を使って、屋上には自由に入ることができる。

生徒厳禁であるから、屋上では人目を気にせず、過ごすことができる。

クラスの前まで来た亮は、扉の上部の窓ガラスから中を覗き込むと、探している人間はすぐ見つかった。

恐らくどこにいても、すぐに見つかるのだろう。

探していた女の子のその場所だけスポットライトが当たっているように明るいような気がした。

あれが、オーラってやつか？ などと亮が考えていると、恵梨花の横にいた梓が亮に気づいた。

梓と目が合った亮は焦りを覚えたが、予想に反して、梓は恵梨花に注意だけ促した。

亮に気付いた恵梨花は一瞬驚いた表情をして、すぐに嬉しそうな顔をして亮の元へ小走りに寄ってきた。

(やっぱり、相当可愛いよな……………)

亮は意識しまいと考えているが、可愛いものは可愛いと思ってしまつのは男の性だろう。

「 どうしたの、昼休みにいくつもりだったのに？ 」

満面の笑みを受けて、亮はその眩しさにやられそうになりつつも、小さな声で屋上に来るように言った。

恵梨花は不思議そうな顔をしながらも、嬉しそうに了承した。

不思議そうなのは、屋上が本来は生徒厳禁であるからだ。

了承を受けた亮は、即座に退散した。

またもやクラス中（今度は別のクラスだが）の視線と廊下の人間の視線まで浴びていたからだ。

第四話 昼休み

昼休みに入った亮は、誰かに声をかけられる前に即座に教室を飛び出し、購買でパンと飲み物を買って人目にあたらないよう屋上に向かった。

屋上についた亮は誰もいないことを確認したら、手すりにもたれて地面に座り、パンを食べ始めた。

恵梨花たちを待たずに食べているのは、一緒に食事をする約束をした訳ではないからである。

パンを三つ食べたところに美少女三人がやってきた。

それぞれ鞆をもっているところを見るとお昼はまだのようである。

亮を認めた恵梨花は、近くまでくると鞆からシートを取り出し、亮の前で広げた。

なぜ、シートなどもっているのか、と考えているとシートの上に誘われたので、靴を脱いでお邪魔した。

「桜木君も、屋上のカギをもってるの？」

恵梨花が不思議そうに聞く。

「いや……、ああ、あんたら鍵もってんのか？」

「私たち、じゃなくて、梓がね」

そう恵梨花が言うと、梓が亮に鍵を見せた。

道理で、シートをもっていているなど用意がいいはずである。

梓が何故、教師しかもつことを許されない屋上の鍵をもっているかは、スルーすることにした。

三人はお弁当を広げ、それぞれ食べ始めた。

「鍵がないなら、君はどうやって入ったんだ？」

梓がもつともな質問をして、亮は肩を竦めながら、ピッキングツールを見せる。

「そんなことまで、できるんだ……」

恵梨花がなんともいえない顔をしているが、梓は面白そうな顔をしている。

「君は本当に面白い男だな……、そういえば自己紹介がまだだったな。私は鈴木梓だ。^{ススキアズサ}好きに呼んでくれていい」

亮は正直なところ、会いたい、呼びたいとは思ってない相手であるが、自己紹介を返した。

「わかった、鈴木さん。^{サクマキリョウ}桜木亮だ。できたら、苗字でよんでくれ」

「梓でもかまないんだぞ？」

「ああ、鈴木さん」

「アツちゃんでもいいんだぞ？」

「了解だ、鈴木さん」

「君は面白くない男だな……………」

拗ねたように梓が言う。さっき自分が言ったのとは正反対のことを言いながら。

恵梨花が梓の様子を見て、慌ててもう一人の女の子を紹介する。

「で、この子が……………」

ヤマオカサキ
「山岡咲」

ショートカットの女の子は無表情ながら、名前のみを簡潔に告げた。

「あんまりしゃべらない子なのよ……………、普段は私と梓が話しているのを横にいて聞いてるだけが多いけど、話す時は話すわよ」

亮は恵梨花の紹介を聞いて、咲のポジションを羨ましく思った。

「……………よろしく山岡さん」

次に恵梨花が窺うように言った。

「それで、私の名前は……………、昨日言ったよね？」

「ん？ ああ……………、そうだったけ？」

亮は自己紹介を受けた記憶は確かにあったが、名前を覚える気が無かったため、覚えていなかった。

なので、自己紹介を受けていない記憶に改竄を試みた亮である。

「え……？ 私言っただけだと思っただけ……、だから桜木君の名前知っっていると思っただけ……？」

背後から黒いオーラが見えた気がし、本能が警鐘を鳴らし始めたため、亮は即座に謝った。

「いや、悪い……。携帯に登録しないと、中々、人の名前覚えるの苦手で……」

亮は正直に言った。携帯に登録しないと、すぐ忘れるのは本当のことである。

そこで、梓が吹き出した。

「恵梨花に名前を名乗られて、忘れる男なんて君ぐらいだと思っよ」「もう笑わないでよ、梓！ じゃあ、今登録して覚えてよ！」

ハイ、と言いながら恵梨花が携帯を差し出したので、亮は観念して携帯を出し、お互いに交換した。

「え……と、藤本恵梨花……、ああ、そうだ、藤本さんだ」

亮は確認しながら、パンを次々に口に運んでいる。

「じゃあ、次は私だな」

梓が、そう言いながら携帯を差し出す。

気付けば咲まで無言で亮に向けて携帯を出している。

亮は正直なところ断りたかったが、そうしたところで無駄な努力になりそうな気がしたので、諦めのため息を吐いた。

昨日から妙に諦めのため息の数が多いような気がした亮だが、それ以上考えないようにして、二人と交換した。

自分の携帯を嬉しそうに見ていた恵梨花は、亮の脇にある袋に気付けて質問する。

「桜木君って、いつもパンなの？」

「ああ……、いつもってわけじゃないけどな。食堂行ったり、コンビニのお弁当だってあるよ」

「その袋……いっぱい入っているように見えるけど、いつもそんなに買ってるの？」

「多いかな？ だいたい10個ぐらいだけ」

「10個！？ 普通は二つか三つぐらいじゃない？」

梓も呆れた顔をしている。

「いつもそんなに多いんじゃないか？ 昼食代がかさむんじゃないか？」

「まあな、俺のバイト代はほとんど食事代で消えてるからな……」

亮は仕方がないと言った顔である。

恵梨花が亮の言葉に興味津々といった様子で尋ねる。

「アルバイトしているの？ 何してるか教えてもらってもいい？」

「あんまり高校生がやるやつじゃないからな……。これ以上は聞かないでくれると助かる」

「そ、そうなの？ ごめんね……？」

どうも恵梨花は謝る時は無意識なのかどうか、上目遣いになるようである。

亮は恵梨花の正面にいたため、またもや直撃を食らってしまった。そのせいでドギマギしてしまい、慌てて目を逸らし、手を振って気にしなくていい、と言った。

亮はこれ以上、心にダメージを負わないためにも、本題を上げて早めの退散を目指した。

「それでだ、あんたら三人な」

コホン、と亮が声をあげる。

「何？」

「何かな？」

「？」

三人の美少女に同時に見つめられることなど、滅多にないので、亮はさすがに緊張を感じてしまう。

「あんまり、教室に来てもらいたくないんだが」

「え！？ どうして!？」

「どうしてか、理由を聞いても？」

亮は言いにくそうに頭をガシガシと掻きながら、ボソつと言った。

「目立つ」

「え？」

恵梨花は意味が分からないようである。

「目立つんだよ、あんたらは」

梓が亮を観察するように、見ている。

「私達が目立つから来てほしくないと、言っているのかな？」

亮は頷いた。

「ああ。でも、俺に会いにくる以外ならいくらでも教室に来てくれないでもない。ただ、俺に会いに来る為に、教室に来るのはやめてほしいっただけだ」

「ふむ……、やはり……、君は目立ちたくないだけかな？」

梓が尋ねる。

「まあ、率直に言えば、そうだ。俺は目立ちたくないだけだ」

「ええ！？　じゃ、じゃあ、目立ちたくないから、昨日はあんな約束を？」

「ああ、あんたを助けたことが誰かに知られると一気に噂の的だからな。助けてから焦ったぜ、ほんと」

「ふむ、君がどうやって恵梨花を助けたのかは知らないが、たしかにこの子を男三人から助けたなんて誰かに知られたら、一気に噂の的だな」

「な、なんで、私だと噂の的なの？」

恵梨花が困惑した顔で尋ねると、亮は不思議そうな顔で言う。

「あんだ、そんなテレビのアイドル顔負けの反則的な超可愛い顔して、何言ってるんだ？」

「え……」

絶句して、恵梨花の顔が真っ赤になる。

それを見て亮はますます不思議そうになる。

「どうした？　可愛いなんて、言われ慣れてるだろう？」

そう亮が言うと、今度は耳まで真っ赤になった。

亮が訝しげに梓のほうを見ると、梓は小さな声で笑っている。

「いや、たしかに言われ慣れてるとも、なんとも思っていない男達からね」

亮は梓の言った意味がよく分からなかったようだが、話を続ける。

「いいか、こんな見た目地味な俺が、目立たないように生活しているのに、ある日の朝から突然こんな超絶美少女がわざわざ俺のところまで来たら、目立たないわけないだろう。事実あんなに目立ったのは高校入って初めてなんだから……、あんだ、大丈夫か？」

「な、な……なんでもない……」

恵梨花は首まで赤くして、声を絞り出すように言う。

梓は吹き出すのをこらえながら、携帯のカメラで恵梨花を撮影している。

そんな梓に恵梨花は必死で顔を隠そうとしている。

「ちよっ、梓、やめて……」

梓は恵梨花の言い分は無視して撮影を続けながら、亮に話の続きを促す。

「桜木君、続きを」

「ああ……？ いいのか？」

「いいから、続けて」

亮は咳払いをして、肝心な部分を言った。

「だからな、もうあんたたちとなるべく接触したくないんだが……」

言い終わる前に、恵梨花が血相を変えて亮に詰め寄り、掴みかかった。

「いや！ なんで!?!」

真っ赤な顔のまま、亮に問い詰める。少し涙目になっているのは梓のせいだろう。そんな恵梨花を見て亮も狼狽する。

「いや……、だから……あんたら目立つから……」

「ふむ……君はなぜそこまで目立ちたくないんだ？」

ここで何も話さないのは、さすがにルール違反なのは亮にもわかっていたので、大した理由でない理由を言った。

「中学校は悪友に振り回されて、平穩とは言い難かったんだ。だから高校はおとなしく、目立たず、平穩にやりたいと思っただけ」「それが理由か？ つまらんな」

梓が不機嫌そうに言う。

亮自身、つまらない理由なのはわかっているが、今の生活をやめたくないだけだ。

「じゃあ……、もう会いにいったらダメなの？」

恵梨花が瞳を潤ませながら亮に尋ねる。

目の前で破壊光線のようなものが直撃した気分になった亮は、なんとか気持ちを落ち着かせて、自分が思っていることを率直に言う。

「ダメ……、って言うよりも、それ以前に、もう俺なんか用なんでないだろ？ あんたがこだわる礼は、俺はもうジュースでも、もらおうと思っっているんだけど……。その礼をもらったら、もう会う用事なんてないだろ？」

「え……、た、たしかにそうだけど！」「
「だろ？」

亮がそう言っつて恵梨花を見ると、恵梨花がしどろもどろに言う。

「じゃ、じゃあ、お礼あげない、渡さない」

「わかった」

「ええ！？」

「いや、最初から、いらないうって言ってるじゃないか……」

「あ、違う、あげる！ でも、あげない……」

「どっちだ……？」

「あ、あげるけど、まだあげない！」

「……そこの自販機のジュースでいいんだぞ？ お礼ならそれでいいんだけど……？」

「ジュースはダメ!!」
「じゃあ、何なんだ？」
「え〜っと、まだ決めない!」
「……………」『決めない』って日本語おかしくないか？ 今の場合』
「決まってない」じゃ、ないのか？」
「いいの、そんなことは!」
「いいって……………はあ」

ここで梓の楽しそうな笑い声が上がった。手は相変わらず携帯を
持って撮影している。

「そろそろ、うちの子をいじめるのは、やめてもらおうか」
「いじめてねえって……………、なんだうちの子って。それよりあんたが
いじめてなかったか？」

真っ赤になった恵梨花が嫌がるのを、無理矢理写真に収めている
のを、亮は間違いなく見ている。それに亮は確信した。梓はDSだ
と。

梓は亮の疑問を無視して、話を再開する。

「話を戻そうか。君は目立ちたくない、だから私達にクラスで会い
たくない」
「ああ、と言うより学校の人間が見てる前でな」
「恵梨花から礼を受け取れば、用事もないんだから、そもそも会う
必要もないと？」
「そうだろ？ あんたらみたいな美少女たちが俺に会いにくるのが
不自然じゃないか」

そこで、梓の目がキラリと光った。

「その不自然とは何か？」

「いや、俺って地味な見た目だろ？ あんたらみたいな光り輝く容姿の人間には、それ相応の容姿をもった人間が傍にいるほうが自然じゃないか。現に格好いい男があんたらの周りには寄ってくるだろ？」

梓は頷いた。

「そこは否定しないが、私たちが誰と一緒にいるかは、容姿や、自然、不自然で決めることじゃない。私達が決めることだ」

亮もそこは否定できない。

「まあ、たしかに」

「そして、君は恵梨花が君に用事がなければ、会う理由がないと言ったが、それは逆に用事があれば会うのはいいってことじゃないか？」

亮は自分が押されているのを感じた。

「まあ……、たしかにな」

「それに、そもそも高校生ってというのは用事があるから会うとかじやなくて、会いたいから、一緒に遊びたいから、一緒にいて楽しいから、などの理由で会うものだ。違うかな？」

「違わねえな。けど俺は目立ちたくないから、会いたくなくとも言っただぜ？」

「しかしだ、私達は君といえるのは楽しいから、君とまた一緒にこうやって、お昼をとるなり、何かしたいと思っっているんだ。ねえ、恵梨花？」

恵梨花は勢いよく頷いた。

「そうよ！」

亮は咲まで頷いているのを見てしまった。

亮は三人が本気で言っているのか、さも疑わしげに聞く。

「……本気で言ってるのか……？」

三人はすぐに頷いた。

「本気よ」

「本当に本気だ」

「本気」

最後に咲が口を開いたのを、恵梨花と梓が驚いて見ている。

亮はその様子を見て、どうやら本気らしい、とわかってしまった。わかってしまった故に、どうしようかと頭をガシガシと掻きながら悩んだ。

「なんで、俺なんかと……って思っただが……」

梓がふと、気づいたように言う。

「君は目立つことを考慮しなければ、私たちといるのは嫌か？」

亮は少し考えたが、本音を言った。

「いや、それはそんなに嫌じゃない。もう素を見せてしまったし、何よりの目の保養だし」

亮のその言葉に恵梨花がすぐに反応した。

「本当に!？」

恵梨花の反応の大きさに、亮が戸惑う。

「あ、ああ……」

「ふむ、君も変わってるな。たいていの男は一人で私達三人に囲まれると、多少は気後れするものだが、堂々とそんなことを言う」「そうか、それは勉強になったな」

亮は肩を竦めて本気で言った。

梓が薄気味悪く小さな声で笑う。

「フッフッフッフ、君はやはり面白いな。私の考えは間違っていないかったようだ」

自身の発言に、早まった感じがいなめない亮は冷や汗を流した。

「今のおんたを見て、『嫌じゃない』っていう発言を取り消したいと思っただが有効か？」

「いや、無効だな。それより、どうだ？ 私たちとこれから会ってくれる気はあるのか？」

「そうは言ってもな、あんたらに目立つな、とも言えんしな。というよりも無駄だろうな」

梓が恵梨花をちらっと見て頷いた。

「たしかにな。では人目のないところでなら、どうだ？ この屋上や、昨日の君や恵梨花が帰った裏道は」

亮はいつの間にか外堀が埋められていて、まんまと目の前の女にやられている自分に気づいた。

梓に目を向けると、ニヒルに笑い返してくる。
咲に目を向けると、無表情ながらも、視線だけはきっちり返してきた。

恵梨花に目を向けると、期待の籠もったような目をこちらに向けている。

亮は大きいため息を吐いた。

「あんたらが、そこまで言うなら……、帰り道は誰がいるか分からんから、なるべく遠慮したいところだが……こういう屋上ならいい」

梓がニヤリと笑い、恵梨花が歓声を上げる。

「本当に!？」

亮は迫る恵梨花に、うるたえながら言った。

「ああ……、でも、くれぐれも教室には来ないでくれよ? 廊下で会ってもスルーしてくれ」

ここだけは、亮の譲れないところである。
それに対して恵梨花は不満気な顔になる。

「廊下でも……?」

「廊下のほうが噂が広まるのは早いんだぞ?」

梓が恵梨花を宥めながら言う。

「恵梨花、その辺は追々に。今は、まだ、これで妥協しようじゃないか」

「……………わかった」

恵梨花が不承不承、頷く。

亮は、ほっと一息ついた。梓の言葉の節々に、やや気になるものを感じたが、ひとまず、必要以上の注目を集めるのは避けることができるかもしれないと。

一息ついた亮に、ああ、そうだ、といった様子で梓が言う。

「ところで、今日は一緒に帰ってもらおうよ。私からも親友を助けてくれたお礼をしたいからね」

「また、お礼か？ それに、帰り道はなるべく勘弁してくれて、今さっき言わなかったか…………？」

「なるべくだろう？ しばらくは言わないから今日は付き合ってくれ」

「そうね、昨日は逃げ去られたし、今日は一緒に帰ってもらいましょう」

恵梨花は昨日のことを思い出したのか、途端に冷静な口調で梓に同意する。

亮は突然、雰囲気が変わった恵梨花に訝しげな目を向けた。

「どっした…………？ あんた」

恵梨花はにっこりと、微笑んだ。

「桜木君、昨日私を置いて帰っていったよね」

「あ、ああ……」

「女の子が襲われたのよ？ 心細いのに、少しでも送って帰ってもらうことを期待するのは、おかしいことかしら？」

「いや、おかしくはない、な……」

恵梨花の雰囲気はどんどん悪くなっていく、なのに笑顔だ。

亮は冷や汗を流しながら、そんな恵梨花の様子を見る。

「そうよね？ 襲われて、助けてもらったけど。その後だって怖くなるのよ、一人だと」

『一人だと』の部分がやけに強く響いた。

「ああ、うん。いや、すまなかつ……」

亮が言い終わる前に、首を振りながら梓が口を挟んだ。

「そう言うな、恵梨花。彼だって、明日からの自分のことを心配していたんだ。自分が心配だったんだよ。恵梨花のことでなく、自分が」

今度は『自分が』の部分が、はっきりわかるほど強く響いた。

恵梨花の笑みがさらに深くなったが、目がまったく笑っていないこと気づいた亮は、自分の援軍になっていない援軍の発言により、はっきりと自分の口元が引きつったのを感じた。

「えと、すみません、お二人さん。そろそろ勘弁してください」

「そう言っているが、恵梨花？」

雰囲気はそのままに恵梨花が聞く。

「今日は一緒に帰ってくれるの？」

亮は即座に頷いた。

「もちろんだ」

その言葉を聞いた恵梨花は今度は本当の笑顔を見せた。

「そう、よかった」

(花がいきなり咲いたような笑顔だな……)

亮は安堵の息を漏らすと、恵梨花の笑顔に見惚れそうになり、慌てて目を逸らした。

ふと、腕時計を見ると、昼休みがもう終わりそうな時間である。

亮は立ち上がりながら言った。

「昼休みも、もう終わりだな。俺は先に降りるから。鍵もってんだよな？ 閉めるの頼んでいいだろ？」

梓が頷く。

「いいとも。では帰りにな。裏道でまっついてくれ」

亮は、はいよ、と返事をして屋上から出て行った。

恵梨花が梓に体を向けて、ぺこりと頭を下げた。

「ありがとう、梓」

「気にしなくていいよ。あたしも可愛い恵梨花の写真が撮れたし、満足している」

「そうよ、ちょっと、写真消してよ!」

「ダメ」

「もう、いつも、いつも!」

「仕方がない、あたしの生き甲斐なんだから」

「そんなこと生き甲斐にしないでよ!」

二人は言い合いをしながら、シートと弁当を片づける。

咲はそれを見て微笑みながら、片づけを手伝った。

昼休み終了5分前に教室に入った亮は、またもやクラスメイトに包囲された。

「携帯の交換したのか!？」「お礼って、なんだ!？」

質問責めに後退しながら亮は、お礼のジュースだけもらってすぐ

に別れたから、携帯は交換しなかった、と話した。

もったいない、といった視線と、安心したように自分を見るクラ
スメイトに、普段の地味生活の勝利に心の中でガッツポーズをした。

第五話 無意識のサムスアップ

放課後、裏道の途中で亮は立ち止まって待っていた。

(なんで、こうなったのか……………、昨日のあの連中のせいかな？

俺のやり方が悪かったのか……………、いや、あの連中のせいだ。この辺で見かけることはもう無いだろうが、もし見かけたら背後から飛び蹴りしてやる。いや、いっそのこと呼び出して……………)

と、亮が物騒なことを考えている内に三人が現れた。

「ちゃんと待っていてくれたんだな」

梓が、感心といった表情で亮に言う。

「遅くなって、ごめんね？」

恵梨花が申し訳なさそうに言う。事実、亮は20分ほど待っていた。

亮が肩を竦めた。

「いいよ、別に予定があるわけでもないし。それに一度約束したことは守るぞ、俺は？」

「いい心がけだ」

梓が頷いて、ふと気付いたように言った。

「そういえば、君と恵梨花が昨日した約束だが。君から昨日の詳細を聞くのはダメなのか？」

「あ……、別にいいんだけど、自分で話したい内容でもないしな……。あんたがいいなら、あんたから話してやれよ」

亮は一人呟くように言っていたが、最後は恵梨花に首を向けて言った。

恵梨花は少し驚いたような顔になった。

「いいの？」

「ああ、なんか黙っていても、この女にはいつか知られてしまいうな気がするし」

そう言いながら、亮は梓をちらっと見ると、梓は楽しそうに笑った。

「なんで、そう思う？」

「勘」

それを聞いた梓は更に笑い、恵梨花は感心しながら頷いた。

「たしかに梓なら……」

やはりか、と亮は思いながら、梓に対する警戒心を更に強めるところを決意した。

「じゃあ、今日も電話するね？」

恵梨花が梓に言うと、梓が頷いた。

歩きながら雑談すること数分、亮は周囲の警戒は怠らなかった。

警戒しているのは、もちろん他の生徒の目である。

もし、他の生徒の気配を感じたら、即座に身を隠すつもりで亮である。

それにしても、亮は自分の心が少し浮きだっているのに気づいた。

(三人とも、本当可愛いしな……、高校入ってから女の子とあんまり話してなかったし)

ぼんやり考えてっていると、梓に声をかけられた。

「そつだ、私からのお礼を受け取ってもらいたいんだが」

「お礼？ 何の？」

「もちろん、親友を助けてもらったお礼だよ」

恵梨花は、はっとして言う。

「そついえば、私は何のお礼をしよう」

亮は首を振りながら言う。

「ジューズでいいって」

「恵梨花からのお礼は昨日の話を聞いてから相談しよう。ね、恵梨花？」

「じゃあ、そうしようかな」

亮はお礼を受け取る側の人間が、何故にスルーされるのか悩み始めた。

恵梨花が梓に聞く。

「梓からのお礼って……？」

「ああ……、桜木君、ちょっとこっちにきてくれないか？」

亮は警戒した。

「なんで？」

「いいから、悪いようにしないから」

亮は警戒しながらも、梓の後について、二人で来た道を戻り始めた。

「ちょっと、梓……？」

「すまないが、少しだけ、そこで二人で待っていてくれ」

恵梨花と咲に向けて梓が言い、亮を伴って歩いていく。

梓は何度も距離を測るように後ろを振り返りながら、恵梨花と咲の顔がギリギリ判断できるところで立ち止まった。

「こんなところか……そうだ、少しその眼鏡を貸してくれないか？」

「はあ？ 何でまた……」

「いいから、貸してくれ」

亮は嫌な予感が頭から離れないながらも、伊達眼鏡を外して、梓

に渡した。

「ありがとう……、ああ、恵梨花を見てくれ」

亮は、一体何が起こるのか見当がつかず、周囲を警戒しながらも、言われた通りに恵梨花に目を向ける。

すると、梓は携帯をとりだして、二人の方角に向けると「カチ」と機械音が鳴り、それと同時に梓が手を上げた。

手を上げた梓が見えたのか、咲が動く。

何をする気だ、と亮が見ていると、恵梨花の斜め前に立った咲はこちらに背をむけ、屈み、そして、恵梨花のスカートを一気に捲りあげた。

スカートが見事に上に広がった。

「え」

恵梨花の声のスカートの翻る音とともに小さく漏れた。

亮は目が点になって、その光景、一瞬の光景を間違いないように見た。

恵梨花は何が起こったか分からないような顔をしている。

そんな恵梨花の顔を見ていた咲が無表情で亮たちの方に振り返り、親指だけ立てた手を、ピシッとつきだした。

自分にされたんだと理解した亮は、咲と同じ様に無意識に、ビシッと、サムズアップを返した。無意識ながらもそれは、とても、とても力強かった

サムズアップをし合う二人を見て、恵梨花はようやく我に返ったのか、真っ赤になり、あ、あ、あ、とうめきながら両手をゆっくり自らの頬に当て、『イヤアアアア』と絶叫し背を向けて走っていた。見事なドブラー効果を残しながら。

そんな恵梨花を見送った咲は梓に向けてサムズアップをすると、梓も同じように返した。

梓のサムズアップを見て頷いた咲は、走って恵梨花を追いかけかけた。

亮が事態の成り行きに呆然としてしていると、横からぶつぶつ呟いてる声が聞こえ、ふと梓に目を向けると、携帯を構えている梓は恍惚な顔をしながらうつとりと呟いた。

「ああ、なんて可愛いのかしら……、あんな可愛い生き物は他には絶対にいないわ……」

亮は思わず、一歩引いた。

そんな亮に気付いた梓は携帯をしまいながら、亮に尋ねた。

「見えた？」

亮は先ほど、目に焼き付いた光景のせいか、知らずのうちにハイ

テンションになっていたのだろう。口が勝手に動いていた。

「赤と白のチエック」

「ふむ、あれが私と咲からの親友を助けてくれたお礼だ」

「ひでえな、あんた。でも女の子ってけっこうスパッツとかはいているものだと思ってたんだけど、たまたまか？」

「そうだな、今日の恵梨花は、はいていたとも。しかし、学校を出る前に、私が足を大きく動かす可能性があるからと言って、脱がせて貸してもらったのだよ。恵梨花のスパッツは今私がかけている」

「遅かったのはそのせいか。あんた、悪党だな」

亮は心底、目の前の女を恐ろしいと感じてしまった。

「君に言われると光栄だ」

「どういう意味だ」

「そのままの意味だ。それにやっぱり君の眼鏡は伊達眼鏡のようだね、この距離ではつきり見えたということは」

梓が亮の眼鏡を持ち上げながら言う。

亮は自分が今眼鏡をかけていないことを思い出した。

「あ……、つくそつ。まあ、いいか……。あんた、腹黒いな」

「それも君から言われると、褒め言葉にしか聞こえんな」

「一応、褒めてるところもある。女を心底恐ろしいと感じたのは生まれて初めてだ」

そこで梓は本当に嬉しそうに笑った。そんな梓をみて亮は目を瞠った。

「君は本当に面白いな。では恵梨花が心配だから先に行く。君は来

ないでくれよ」

亮は眼鏡を受け取って、わかってるよ、と返事をし、梓が走っていくのを見送った。

「あの女もちゃんと笑うと、可愛いよな……、笑うポイントがおかしい気もするが」

一人残された亮はしみじみと呟いた。

『ごめんね、恵梨花。許して、もうしないから』
「絶対、許さない」

恵梨花は口を尖らせて、拒否する。

その後、駅前で咲に引きとめられていた恵梨花は、追いついた梓に何度も謝られたが、結局許さず、恵梨花が降りる駅についてしまったのでそこで別れ、お互い自宅に帰った。

恵梨花に電話がかかってきたのは昨日、恵梨花が電話をかけた時間と同じ20時過ぎである。

恵梨花は最初電話に出なかったが、何度もかけ直してくる梓に根負けし、5回目の着信音でようやく電話をとり、今に至る。

『じゃあ、どうしたら許してくれる？』

「何しても、許さない。信じられない、あのために私からスパッツ脱がせたんでしょ」

『ああ、バレた？』

てへっ、という擬音が聞こえそうな調子で梓がいうので、恵梨花は益々怒りがこみあげてくる。

「なんで、あんな……、それも彼の前で……」

その時のことを思い出したのか、恵梨花の声が尻つぼみに小さくなっていく。

『あたしと咲からのお礼のつもりなんだよ。彼は大変喜んでいた様子だったよ』

「もう！ 何よ、それ！！ 私が変態みたいじゃない！！」

『大丈夫、彼はそんなこと思っていないよ』

「そんなの、わかんない！！」

『それは、本当に大丈夫だから。なんたって、あたしのことを悪党だと表現してたぐらいだよ』

「そ、それはすごいわね……」

思わず、恵梨花は怒りを忘れた返事をしてしまった。この親友にそんな恐ろしいことを言うなんて、とても勇気のある行為だ。

『腹黒い、とも言われたよ』

「……………でも、その通りよね」

ポツリ、と恵梨花は本音がでてしまった。

「……………」
「ちょ、ちよつと、梓！？　なんで黙るの！？」

突然黙る親友に、恵梨花が慌てた。

「恵梨花に腹黒い、って言われるなんて……………」

ため息を吐くように梓が言った。

「な、何よ…………、それに私、まだ怒ってるんだからね！」

「じゃあ、あたしも彼にパンツ見せたら許してくれる？　…………そうね、二人つきりでベッドのある部屋なんかで」

「な、な、何いってんのよ！　そんなの絶対しちゃダメ！！」

「じゃあ、許してくれる？」

「……………もう！　またしたら、絶交するからね！！」

「よかった、ありがとう。大好き、恵梨花」

梓は、恵梨花の怒りが治まったことに、心からほっとした。

「今度、何かおこつてよね」

「もちろん、いくらでも」

それから、恵梨花は昨日の詳細を梓に話した。

第五話 無意識のサムスアツプ（後書き）

トSの梓でした。

第六話 相応しい対価

「体力測定の結果？」

昼休みの屋上で亮の訝しげな声が響いた。

その場には恵梨花、梓、咲が居て、またもや屋上で一緒に昼食をとっている。

三人は弁当だが、亮の手にはパンである。

亮は午前中、授業を聞ききながら、昨日はパンを食べたから今日は食堂で親子丼にうどん、チャーハンを食べようかとボンヤリと考えていた。

学生食堂とは、本当に学生にとっていいものである。

安くて、うまく、そして、めったに不味いものなどない。

人の三人前は食べるのがデフォルトな亮にとって、学生食堂は天国にも近い場所である。

よし、今日は食堂にしようと思ったところで、携帯が振動し、確認すると梓から昼休み屋上で一緒に昼食を、といった内容のメールがきた。

すでに胃が食堂用になっていた亮は、食堂で食べたなら向かう、と

返信したらすぐに、先ほどと同じメールが一字一句変更なしに返って来た。

「選択権はないのか、と諦めのため息を吐いて、了解の返信をだした。」

「またもや大量のパンを買って（購買に弁当、おにぎりはない）屋上で三人と食べ始めると、すぐに梓が亮に体力測定のことについて質問し、先ほどの亮の訝しげな声はその返事である。」

梓が頷いて聞き直す。

「そつだ。なんであんな結果になっているんだ？」

「変な結果？ 俺はちゃんとBを出したはずだぞ？ それにBの何がおかしいんだ？」

「それはトータルの平均だろう。君の去年の一日目の平均はC、二日目の平均がA。今年の一日目の平均はA、二日目の平均がC。それで今年も去年も二日間の平均はBだ。去年も今年も測定種目の順番は同じなのに、Aをとったり、Cをとったりしている。これがおかしくなくて、何がおかしいんだ」

「一日目、二日目……？ ああ、そういえば二日間にわけていたんだっけな…… AにC？ Cはわかるが、Aが混ざっていたのか？」

「そつだ、君は結果をみていないのか？」

「見たよ、名前の横にBって載っているのだけな。それで安心してただけだ、Aなんかあったのか……」

体力測定の結果は一枚の用紙に記載されていて、名前の横に総合結果、二日間の平均が表示されていて、その下に詳細が記録されている。

亮は総合結果だけ確認して安心した後、そのままゴミ箱に捨てたのを思い出した。

「なんで、あんな結果なんだ？」

梓が再び質問し、亮は肩を竦めて答えた。

「一応二日間、Bを狙ったんだが……。その結果になったのは、その日に冴えない、運動神経の良くなさそうなやつ探して、そいつと同じ成績をとるようにしただけだ。なのに、Aが混ざってるなんてな……。やっぱり、運動神経は顔で選んだら駄目だな……」

最後は首を振りながら、悩ましげに言っている。

梓はその返答に、当然の疑問を返した。

「何故、そんな悪い成績をとることに拘った？」

「いい成績とって、目立ったり、運動部に勧誘されるのとか、嫌だったからな」

「その言い方だと、運動神経に自信があるようだが」

「そこそこな。実際、去年と今年と合わせたら、両方Aをとっているんだろ？ 俺は」

「その通りだ」

「なんで、俺の体力測定の結果なんか知っているのか疑問に思うところだが……」

「些細なことだ、気にするな。それより、そう聞くと君の本当の運動能力が気になるところだがな……」

「そんなこと言っても、この暑いのに走りまわったり、目立つようなことは絶対にしないからな」

「まあ、いずれ機会をみるとしよう」

「やらないからな、めんどくさいことはしないからな」

「そう、つれないことを言うな」

「まったく……それより、あれ、なんとかしてくれ」

あれ、と言いながら、亮は恵梨花に首を向ける。

恵梨花は先ほどの亮と梓の会話に一度も参加せず、亮が姿を現したきり、俯いて、手でスカートを抑えながら、もじもじしている。

「あれ……？　可愛いじゃないか、何か問題でも？」

梓は恵梨花に目を向けると、うっとり目を細める。

「可愛いのは認める。何で、ああなっているのかも予想ができる。だからこそなんとかしてくれと言っているんだ」

亮は強く言った。

昨日のあの瞬間を気にして、ああなっているんだろつなと亮は思っている。

事実、そうである。亮が見たことを気にしているのだろうが、だからといって亮が謝るのもおかしいと思っている。実際、亮は何もしていない。言われた通りに見ていただけであるから。かといって感謝の意を表じれば、余計ひどくなりそうなので、亮はどうしたらいいのかわからない。わかっているのは昨日見た光景は脳内フォルダで永久に残さなければいけないということだけだ。

「ふむ……、君から声をかけたほうが早いと思うな」

梓はしばし、逡巡してから言った。

「俺からか？」

亮は驚いて、聞き返した。

「ああ、名前で呼ぶのを忘れるなよ」

梓は楽しそうに言った。

「名前？ 藤本さんだったよな……」

亮は思い出すようにつぶやいた。

「違う、違う。苗字でなく名前だ。恵梨花、と、声をかける」

梓はますます楽しそうに笑う。

「え……、苗字でいいんじゃないか？」

亮は少し狼狽したように言う。

「駄目だ。名前じゃないと、反応しないぞ」

「……本当か……？」

亮は疑わしげに聞く。

「本当だ」

梓は迷いなく頷いた。

「はあ……、えー……、コホン、え、恵梨花」

亮はどもりつつ、恵梨花に小さく声をかけた。少し赤くなりながら。

しかし、恵梨花は俯いたままである。

「声が小さい、聞こえてないぞ」

梓が眉を顰めて言う。

「わかってら。え……恵梨花！」

亮は照れたように言い返し、恵梨花の名前を先ほどよりも強く呼んだ。

すると、恵梨花がはっとしたように亮の方を向いた。

「はい！？ さ、桜木君……？ あれ、今何て呼んだ？」

「ああ、いや……、弁当冷めちまうぞ、食ったらどうだ？」

亮は誤魔化すように、恵梨花の手元を見ながら言った。

梓はそんな亮を面白そうに見ている、亮は予感があったのか、絶対に梓と目を合わせようとはしなかった。

「……？ そうね……」

少し首を傾げてから自分の手元に目を向けた恵梨花は、止まって

いた手を動かした始めた。

亮がそんな恵梨花のお弁当を見て言った。

「しかし、美味そうな弁当だな。お母さん料理上手なんだな」

「あ……、これは……」

恵梨花が少し言い難そうになっているのを亮は首を傾げて見ていると、梓が口を開いた。

「恵梨花の弁当は恵梨花の手作りだよ」

「自分で!? へ……、すごいな」

亮が真剣に感心する。

「あ、ありがとう」

恵梨花が照れたように、でも嬉しそうに言う。

「桜木君はお弁当もってこないの?」

照れているのを振り払うように、恵梨花が亮に聞いた。

「俺か? ……そういや、もう随分手作り弁当なんて食べてないな……、コンビニの弁当ならたまにあるけど」

亮が少し遠い目をしながら言う。

そんな亮を見て何か感じたのか、恵梨花はそれ以上聞かず、亮に自分の弁当を勧める。

「よかったら、食べる?」

亮が一瞬、目を点にしたが、すぐに笑って手を振りながら言った。「いや、いいって。もうパン食べたし、それにそんな小さいのからもらうとなんか悪い気がする」

恵梨花が小首を傾げる。

「そう? 女の子ならこれで十分なんだけど……」
「それがすごいよな。俺なら少なくともその三倍、いや五倍かな? は食わないと、腹の足しにならないと思う」
「五倍って……!」

恵梨花が驚いたように言うと、梓も呆れた目を向ける。

「なんとも、燃費の悪い体だな」
「うーん、否定できない。でもそのあんたの弁当の大きさは男ならみんな足りないと思うぞ?」

亮が恵梨花の弁当の大きさを見て言う。亮からすると、それはとても小さい可愛らしいサイズで、男が食べるちよつと大きめの弁当の半分ぐらいしか無いように見える。

「にしても、その五倍は食べすぎだろう……」
「本当に……、太らないの?」

梓に同意しながら恵梨花が女の子なら誰でも気にすることを聞く。

「それが、太らないな」
「羨ましい……」

恵梨花がため息を吐きながら言うと、梓も同意した。

「まったくな……、ところで君が恵梨花を助けた時のことを聞いたんだが……」

亮が苦笑する。

「いきなりの話題の転換だな」
「気にするな。恵梨花から話を聞いたが、やはりもうちょっと別のお礼を受け取ってくれ」
「うん。受け取ってよ」

恵梨花がすかさず、同意した。

「お礼なら受けたって。ちゃんと誠意のこもった『ありがとう』って言葉聞いたし……」

梓が首を振った。

「やはり、わかってないな」
「わかってないなって、何がだ。それに昨日も言ったが追加の礼ならジュースでいいぞ」
「だから、わかっていないんだ。いいか？ 一昨日の君は、恵梨花の処女を守ったと言ってもいい」

梓の言葉を聞いた恵梨花が顔を真っ赤にして、慌てて梓を止めにかかる。

「ちょ、ちよつと、梓!？」

そんな恵梨花を横目に亮は冷静に問い返した。

「処女なのか？」

梓はおもむろに頷いた。

「ああ、ちなみにキスもまだな純粹純潔な16歳の女子高生だ」
「……………!」

恵梨花が悲鳴にならない悲鳴を上げている。

亮の目が少し光ったようになった。

「キスもまだなのか」

梓が腕を組みながら真面目腐った顔で頷く。

「そうだ」

亮はいつになく真剣な声で首を振りながら言う。

「そうだったのか……………」

「信じられんだろう?」

「ああ……………。あれ、彼氏いないのか?」

亮がふと気づいたように言うと、恵梨花がやっと声を出せるようになったのか、真っ赤になりながら強く否定する。

「いないわよ！ ちょっと、梓！？ 何でそんなこと、二二二で言うの！？」

「ああ、そうだった」

梓が思い出したように手でポンと叩いて、亮に言う。

「つまりだ、君は恵梨花のファーストキスと処女を守ったと言ってもおかしくないのに、そのお礼をジュースでだけいいだと言う。実に割に合っていないと思わないか？」

梓の発言に更に顔を赤くした恵梨花が梓の傍によって梓の口を手で抑えこもつとするが、梓が難なく避けている。

亮もさすがに少し照れてきたのか、顔を少し赤くした。

「いや、どうだろうな？ 俺が助けずにもし連れられたりしても、途中で誰かが助けたかもしれないし、それに自分で逃げる機会もあったかもしれないし」

梓は頷きつつ言う。梓の両手は恵梨花を抑え込んでいる。

「ああ、かもしれないな。でも結局は君が助けたんだ。恵梨花のファーストキスと処女を」

絶対、わざと繰り返して言っているな、と感じつつ、亮は同意する。

「まあ、最悪の場合を考えるとそうだな」

ジタバタする恵梨花を抑えながら、梓が尚も強く言う。

「恵梨花のファーストキスと処女だ。それを守った対価がジュースでいいなんて私は断じて認めない」

梓の両手の中でもがく恵梨花に少し同情を感じながら亮は頷いた。

「ああ……、まあ、ジュースで駄目なのはわかったけど……じゃあ、何を……？」

「うむ、恵梨花のファーストキスと処女だ。……」それに見合う対価と言わずとも、それなりのものを返すべきだからな。私もじっくりと考えておこう」

まだ言うか、このドSは、と亮が無言で呆れの顔を見せたが、梓は揺るぎもなかった。

恵梨花はもう抵抗を諦めたようで、動かなかった。

顔は真っ赤に涙目で、息をきらして梓の腕の中におさまっている。

そんな恵梨花を見て、めちゃくちゃ可愛いと思ってしまふのは、やはり自分もSなんだろうか、いや、でもこの腹黒眼鏡ほどではないだろうと、亮は自問自答したところで、梓が慈愛のこもった顔で恵梨花に問いかけた。

「落ち着いた？ 恵梨花」

「あ、あんたつて……！！」

梓の腕の中で涙目の恵梨花がふるふる震えつつ、梓を睨みつける。

それを見た梓はさらに強く微笑んだ。

「ああ、可愛い。恵梨花、大好き」

と、言いながら自分の頬を、恵梨花の頬に摺り寄せる。

「もう！ 梓、やめて！ 桜木君、変な目で見てるよ……！」

「ああ、いや、おかまいなく……、俺失礼するよ……！」

と、空気を呼んだ亮はのろろと立ち上がりながら言つと。恵梨花が慌てて引き止める。

「お願い、桜木君！ 行かないで！ 誤解しないで！ 本当に本当に誤解しないで……！」

「あ、ああ……」

恵梨花の剣幕のあまりの迫力に思わず足を止めた亮は、その場に座り直した。

座り直した亮に心底ほつとした顔を見せた恵梨花は、落ち着きながら洪る梓の腕から離れた。

「もう、梓、やめてよね……、で、とにかくお礼はさせてもらっ、つてことをお願いします」

恵梨花があまり亮と目を合わせず、少し顔を赤くしながら頭を下げた。

「あ、ああ……、こちらこそ」

亮も思わず、頭を下げた。

名残惜しそうな目で恵梨花を見ていた梓が時計を見て言う。

「もうこんな時間か。ところで、桜木君、明日の土曜か、明後日の日曜で予定のない日はあるかな？」

「梓？」

恵梨花は訝しげな目を梓に向けた。

亮は警戒心を起こしながら、尋ねた。

「え……と、何でだ？」

「そんな風に警戒しないでくれ、恵梨花からのお礼で用事があるかもしれないのでね」

「そういうことなら……今週末なら……両方空いているな」

亮は思い出しながら、答えた。

「そうか、できれば日曜はそのまま空けといてほしい」

「わかった……。じゃあ、先に降りるからな。じゃ」

と言って亮は屋上から、出て行った。

亮が出るのを確認した恵梨花は梓に振り向いた。

「日曜日が何なの？」

梓は驚いたような顔になって、微笑んだ。

「あたしじゃない、恵梨花だよ。恵梨花も日曜空けといてね」
「私なの!？」

恵梨花の驚きの声が屋上に響いた。

第七話 お礼はモーニング？（前書き）

第七話 お礼はモーニング？

その日の放課後、亮は帰りを誘われることもなかった。今日は一人でゆっくり帰れると思い、今日も裏道で帰ろうと裏道の方に向かった。

この裏道は人通りが少なく、同じ学校の学生が通ることも少ない。駅に向かう道とは遠回りになるからだ。

しかし、時たま隣の高校の学生が通ったりすることがある。恐らく、隣の学校の学生もこの道は遠回りになるといふのに、この道を通るのは喫煙して帰るためだろうと、亮はみている。

事実、亮は何度かその現場を目撃している。空気になろうとしている亮に絡む者はいないが、時たま自分の学校の学生が絡まれているのを見かけるが、絡まれているのが男ならスルーし、女の子なら助けに入ることが過去に二回ほどあった。恵梨花は三回目である。

そんな訳なので、この裏道を通る人間は本当に少ない。

誘いがなかったことから、三人は普通の表通りの道で帰っていると思っていたため、この裏道で帰ることを選んだのだが、その裏道に入ったところで恵梨花が立っているのを見かけた時は不意打ちを受けたような気分になった。

恵梨花が亮に気付くと、にこっと微笑み、亮の元に寄って問いかけてきた。

「一緒に帰っていい？」

こんなところで遭遇して断ることもできないだろうと思いつつ、了承の返事をしてから二人で歩きだした。

歩き始めて数分間、二人は無言だったが、その無言は亮にとっては居心地の悪いものでは無かった。

恐らく、素の自分を見せているからだろうな、と思いつつ隣にいる女の子をちらつと見ると、すぐに目が合ってしまった。

目があった恵梨花は、ん？ と首を傾げ亮を見るので、照れくさくなってしまうた亮は慌てて口を開いた。

「そ、そういえば、あんた、一昨日もこの道に一人でいたけど、いつも三人で帰ってるわけじゃないのか？」

「三人で帰れる時は三人で帰るけど、梓は一年の時から生徒会に入っているし、咲は手芸部だから、三人で帰る時って、それほど多いわけじゃないの」

「へえ？ 生徒会に手芸部ねえ……、らしいったら、らしいな。あんたは部活動入ってないのか？」

「うん、私は何も入ってない。でも二学期から梓に生徒会に誘われているの。桜木君は部活動は……ああ、目立ちたくないし、めんどくさいのは嫌なのよね」

答えようとすると、言おうとしたこと全部言われてしまい、思わず亮は苦笑した。

「そう、それに特に好きなスポーツがあるわけじゃないしな。……生徒会とか大変そうなのは俺はゴメンだな」

「大変かどうかはわからないけど、梓は来期ではおそらく生徒会長になるから、手伝って欲しいって言われてね。そうね、大変なら頑張らないと」

「あの女が生徒会長？ ……………そうか、頑張ってくれ」

梓が生徒会長になると、途端に生徒会が悪の組織のように感じてしまうのは、亮の気のせいなのだろうか。

「なんか、含んでない？」

恵梨花が訝しげに亮を見る。

「イイエ、ナニモ」

片言で返す亮に恵梨花がクスクスと笑う。

笑顔になるとより一層可愛くなるのは、ちょっとした凶器だよな、と亮は思いつつ、思い出したように言った。

「それと、この裏道なんだけどな」

「うん、何？」

「一人で帰るのは、もうやめとけよ？ 他校の学生がよく通るし、この裏道を通って絡まれるやつも少なくないんだから」

「心配してくれてるの？ フフ、ありがとう」

これまた嬉しそうに言うから、念を押すように言った。

「言つとくけど、本当なんだからな？ あんたは、絡まれてたから知ってるだろうけど。とにかく、この道を一人で通るのはやめておけよ？」

「はあい、わかりました」

真面目に言う亮が面白かったのか、笑いながら恵梨花は呑気な声で答えた。

「本当にわかってんのかよ」

亮が訝しげに問うと

「わかってるわよ、ここを通る時は桜木君と一緒にの時だけにするから」

と、言う。それを聞いた亮は、またなんとも言えなくなってしまう。たしかに自分と一緒にいれば安全なのだから。

「はあ……、そっぴや何で一人だったんだ？」

これは亮が一昨日から気になっていたことだった。

女の子が一人でこの道を通ることは滅多に見かけない。それなのに一昨日の恵梨花は一人でこの道にいた。

恵梨花は少し考えながら答えた。

「そこは、もしかしたら桜木君と一緒にかな」

「何が？」

「一人になりたくて、あとジロジロ見られるのも嫌になる時があっ

て
「……なるほど」

一人でこんな女の子が歩いていれば、友達や、クラスメイトに元クラスメイト、彼女を知っている人は我先に声をかけてくるだろう。特に男が。恵梨花の言葉にそこまで察した亮は、茶化すように尋ねる。

「ジロジロ見られるのに、自覚はあるんだ？」

「まあ、ね。自分の見た目が気に入らないわけじゃないんだけど。時々、透明人間になりたくなる時がある」

恵梨花は肩を竦めて答えた。

見た目がいいなら、いいなりに悩みがあるんだな、それも当たり前か、と亮が考えていると、恵梨花が窺うように亮に聞く。

「だから、たまにこの道で一緒に帰ってほしいな？」

「はは、俺は隠れ糞かよ」

亮は苦笑しながら言う。

「それもちょっとあるけど、それだけじゃないよ」

恵梨花が慌てて否定する。

「どっついう意味？」

亮がじゃあ、なんだろうかと思い、問い返す。

「うん、なんか落ち着く？」

「なんで、疑問系？」

「なんでだろうね？」

茶化するように言う恵梨花だが、すぐに表情を改めて悩むように言う。

「なんか、桜木君って自然体……？　なのかな。落ち着いてる雰囲気があつて、それが伝わる。助けてもらった時もそのせいで、すぐに落ち着けた気がする」

「そ、そうなのか？」

多分、褒められてるんだろうと思うと妙に照れ臭くなり、どもつてしまった。この自分はまるで落ち着いてないな、と思つてしまった。

「うん。だからか、こうやって一緒にいても無理なく話せて、落ち着く」

「ふうん？　そんなこと言われたの初めてだけどな」

「そうなの？　じゃあ、嬉しいな……」

恵梨花が本当に嬉しそうに言うので、何がそんなに嬉しいんだろうかと亮は首を傾げ、照れ臭そうにそっぽ向きながら言う。

「ま、たまにならいいよ。隠れ蓑でも、リラックスルーム代わりに、何でもつかってくれ」

「ふふ、何それ。でも、ありがとう」

そう言いながらにっこりと微笑む恵梨花が、亮には妙に眩しく見えた。

駅前近づく、先に行くね、と恵梨花が行くのを亮は見届けた。

先に行ったのは、駅前だと学生がいるので二人でいるのを見られないためである。亮の目立ちたくない精神を察して。

見届けた亮は、しばらくして駅に向って帰宅した。恵梨花の笑顔が頭からなかなか離れず、首を傾げながら。

翌々日の日曜日の朝九時前、自宅から学校を超えて5駅（自宅から学校の駅まで5駅）の学校の駅前よりも賑わいの目立つ駅で、眠たい目をを擦りながら亮は降りた。

前日の深夜1時（正確には本日の午前1時）に梓からメールが届いた。

内容は恵梨花がお礼をするために待っているから、ここへ行けといったものである。

いつもの如く労働基準法を無視するバイト先が土曜の夜にいきなり亮を呼び出し、深夜まで働かせていたため起きてこのメールを確認できたからいいものの、メールが来た時に寝ていて、起きたのが九時過ぎならどうなる！？ といった亮の突っ込みは誰にも聞かれることは無かった。

普段の亮なら、休みの日は昼前までゆっくり寝ている。前日が深夜までバイトに励んでいたなら尚更である。

亮はお礼とくればどこかで食事かな、と考えていたのだろう。ジューズを否定された亮はそれしか思い浮かばなかった。

なので、こんな朝の時間にくるよう指示された亮は、『お礼つてモーニング？』と一人呟いてしまった。

バイトの疲労と睡眠不足の体をなんとか起こして、待ち合わせ場所に亮は向かい、今に至る。

あくびをしながら亮は携帯でメールを再度確認、待ち合わせ場所は駅前にある噴水広場である。

噴水広場を認めて、待ち人はいるかと噴水広場を見渡すと、待ち人は一瞬で見つかった。

前に見たように、一人スポットライトを浴びているように見えるのもあるが、遠回りに男たちが恵梨花を見ながら囁き合っていて、そのせいで余計目立っている。

ナンパの相談でもしているんだろう、あの中心に向かって行くのは

少し気が退けた亮だが、誰かが決心して声をかけてややこしいことになる前に合流しようと、小走りで恵梨花の元に向った。

恵梨花はうすいピンクを基調とした花柄のマキシ丈のワンピースに白のカーディガンで、実に涼しさを感じさせる格好に亮は見えた。素足がまったく見えないのに残念な気持ちだったが。

恵梨花は少し俯き加減に腕時計を見ていたが、亮が駆け寄るとすぐに顔をあげ、笑顔になって口を開こうとしたが、目を点にして口が半開きのまま固まった。

亮はその様子に首を傾げ、恵梨花を見ると髪型がいつもと違うのに気付いた。

いつもはふわふわのロングをおろしているだけだが、今日はサイドでくくって肩の前にその尻尾がある。

（サイドポニー？ とかだったかな、この髪型好きなんだよな。一番はポニーテールだが、これは次点だな）

と亮が思いつつ亮の中で可愛さ割増の恵梨花を感心して見ていると、固まっていた恵梨花が口を開いた。

「桜木君……？ だよな？」

「え、ああ、そうだけど？ ああ……眼鏡つけてないからか？」

「ううん、それは前に見たし。でも、それもだけど。それより髪型が全然違うから、一瞬わからなかった」

「へ？ ああ……学校行かない時はいつもこんなだからな」

今日の亮は学校に行かないし、恵梨花は素の自分を知っているた

め、伊達眼鏡はかけていない。

そして、いつもは寝癖だけを直している髪型はワックスを使って、短い髪を所々立たせている。

服装はジーンズに無地で黒のインナーに白のシャツという、これと違って目だった格好ではない。

亮としては学校での格好は目立たないための格好だが、中学校は基本この格好であった。それと同時に恵梨花の横に並んでいるのを学校の人間に見かけられた時の保険でもある。恵梨花の横にいる人間が自分だと気づくのを減らすための。遠目じゃ、すぐにきづかないだろうと、亮は思っている。何しろ、亮を認識している人間は多いとは言えないからである。

恵梨花が少し興奮気味に言う。

「印象、ぐっと変わるんだね。格好いいよ」

真つすぐに褒めてくる恵梨花に少し押されながら、あんたほどじゃないと思うが、と亮は内心でつつこんだ。

「いや……、ありがとう。あんたも、その髪型似合ってる。可愛いな」

恵梨花に褒められ、照れてしまったせいか、言葉にするつもりになかった本音がポロっと漏れてしまった。

「え？ あ、ありがとう」

一瞬、きよとんとした恵梨花だが、わずかに顔を赤くして、はにかみながらお礼を言うと、二人は押し黙ってしまった。

会うなり、お互いを褒め合って、変な空気になってしまい、口が開きにくくなってしまうたが、恵梨花が先に口を開いた。

「桜木君は、学校が無い日はいつもそんななの？」

そんな、とは髪型と眼鏡が無いことを指しているのをすぐにわかった亮は一部に首肯する。

「ああ、休みでも学校のやつらに会う時は学校に行っている通りの格好だけだな」

「そうなの？　じゃあ、学校では私が一番最初？　その格好の桜木君と会うのは」

「え……？　ああ、そうなるな」

亮が思い出すように頷いた。

「そつなんだ」

恵梨花は嬉しそうに笑顔になる。

何がそんなに嬉しいんだろうかと首を傾げてしまふ亮だが、すぐに考えるのをやめ、今日の予定を聞いた。

「ところで、今日は？　モーニングなのか？」

「え！？　モーニング！？」

恵梨花が素っ頓狂な声を上げるので、違うのか。なら、何なんだ

ろうかと亮は考えた。

「いや、お礼はモーニングなのかと思って。こんな朝だから。その様子だと違うみたいだな」

亮の考えを聞いた恵梨花は声を立てて笑った。

「違うよ。モーニングがお礼なんて、初めて聞いた」
「だよな、俺も初めて聞いた」

恵梨花が笑ったのを見て亮もつられて笑った。

二人して笑っていると、恵梨花が気付いたように言った。

「あれ？ 桜木君、モーニングだと思ってきたの？」
「いや、さすがにそれは無いだろうと思いなながら」

亮の言葉を聞いた恵梨花は、首を傾げた。

「……………これから映画に行くんじゃないの？」
「は？」

今度は亮が素っ頓狂な声を上げる。

「え？ 桜木君が映画に行きたいから、それに付き合うんじゃないの？」

「……………俺が行きたい映画って、何だ？」

亮は混乱しながらも、聞くポイントが間違っているポイントを聞いた。

「えっと、私に聞かれても……」

恵梨花も混乱したように言う。

「だよな」

亮は腕を組んで考える。

「……ちなみに、あんたは今日は何をするつもりか？ 予定でここに来たんだ？」

「？ 桜木君の見たい映画を見たら、お昼ごはん食べて、その後、アウトレットで桜木君の見たいところと一緒に見て回る………じやないの？」

亮の顎がどんどん落ちていくのを見て、恵梨花が疑問に思った。

なんだその高校生らしい、健全なデートプランは！？ と内心突っ込みを入れた亮は、何のためかわからないが、この状況を作り出しただろう人間について聞いた。

「もしかしてだが……あの腹黒眼鏡が言ってたのか？」

「……もしかして、梓のこと？ 梓が桜木君から、こんな要望を聞いたって、言ってたから……、違うの？」

腹黒眼鏡が梓をさしているのがわかった恵梨花は一瞬、吹き出しそうになったが、なんとか止めて言った。

「ああ、俺は金曜の昼からあの女と何も話してないし、昨日の深夜にメールでここに来てって言われただけだ」

それを聞いた恵梨花はとことん驚き困惑顔になった。

「ええ！？　じゃあ……、あれ？　映画に行きたいわけでも、買い物したいわけでもないってこと？」

「まあ……そのつもりで来たわけじゃないのは、確かだな」

「そんな……」

亮の答えを聞いた恵梨花は目に見えて落ち込んだ。見るに耐えれなくなった亮は、どうしようかと思案した。せつかくの日曜日、天気もよくて、朝もこんなに早く起きてしまって、帰って寝るのも、もったいない気がするので……

「あんだ、映画も買い物もするつもりで来たんだよな？」

「？　うん、そうだけど……」

俯いていた恵梨花が顔を上げる。

「じゃあ、行くか」

「え？」

「映画と買い物」

「え！？　……桜木君はいいの？」

一瞬喜面を表した恵梨花だが、すぐにそれを消して亮に窺うように聞く。

「ああ、このまま帰るのもなんかな……あの女の思惑通りにいくのも腹立たしいが……もちろん、あんたがいいならだけど」

「もちろん！！　元々私はそのつもりで来たんだし……」

亮はそれを聞くと笑った。

「決まりだな」

第八話 初デート

「映画館もたしかアウトレットの中にあっただよな？」
「そうだよ」

恵梨花の返答を聞いて、割と最近にこの駅の近くにできたアウトレットに足を向けると、亮は恵梨花の手にもつバスケットを見て言う。

「重そうだな、もとうか？」

亮が自分のもつバスケットを見てるのが分かった恵梨花は慌てて遠慮した。

「いいよ、いいよ。重いんだから」

亮は恵梨花の言葉に思わず笑ってしまう。

「だから、もつって言ってんに」

「あ、で、でも……」

「いいから、ほら。体力にはそこそこ自信あるから。それに俺、手ぶらだしな」

そう言いながら亮は、恵梨花の手からバスケットを奪い取るように手に取った。

「あ……、ごめんね、ありがとう」

そう言つと恵梨花は肩から提げているハンドバッグを担ぎ直した。

「ああ……、本当に重いな、これ。何が入ってるんだ？」

バスケットを手に持った亮は、ずっしりとした予想以上の重みに軽く驚きながら言う。

それを見て、恵梨花が心配そうに言う。

「大丈夫？」

亮は、また笑った。

「俺で無理なら、あんたならもつと無理だろ。大丈夫だつて、思っていたよりも重いから驚いただけ。で、何が入ってるんだ？」

そう言いながら、大丈夫だと見せるのに軽々とバスケットを上げ下げする亮を見て、恵梨花は安堵の息を吐くと笑顔で言う。

「秘密でいい？」

「秘密？ まあ、いいけど……、後でわかるのか？」

「うん、後でわかるよ」

そう言つて、ニコニコする恵梨花を亮は不思議そうに見ていた。

「あんた、何か見たいのある？」

映画館についた二人は上映中のものを確認し、亮が恵梨花に聞く。

「私？ うん、桜木君は？ ……というよりも、桜木君へのお礼の日でもあるから、桜木君が選んでいいよ？」

「なんか、そう聞くと何かの記念日みたいだな」

亮は思わず苦笑し、上映中のもを見ると、どれも強く観たいと思うものがなかった。

「うん、あんたが選んでくれていい」

恵梨花が笑って言う。

「そうしようか？」

「おう、決めてくれ」

「じゃあ……これは？」

恵梨花が指したのは、アクション物だった。

暴走する電車の中でテロと戦う、スピード感あふれるアメリカの映画。

それを確認した亮は意外そうに恵梨花に言う。

「アクション物なんだ？ 恋愛ものとかいくのかと思ってただけど」

今度は恵梨花が意外そうに亮に言った。

「恋愛もののほうがよかったの？」
「いや、そうじゃなくて、女の子は恋愛ものを見たがるのかな、なんて思ってた」

それを聞いた恵梨花は笑って否定した。

「女の子は恋愛もの選ぶ、なんて考えあるなんて、桜木君けっこう古い考えもってるんだね」

亮がショックを受けたように言う。

「古い考えって言われた」

大げさな亮を見て恵梨花は笑いを強くする。

「だって、古いよ？」

「うん、そうかな？」

腕を組んで妙にかめしい顔で亮が聞く。

「うん、古い」

恵梨花も合わせるように真面目腐った顔で言いきった。

「じゃあ、改めるとしますか」

そう言って、亮が頷くと

「改めましょう」

と恵梨花も頷いて、顔を見合わせると二人で笑った。

映画の入場券を買って（亮へのお礼なんだから自分が出す、と言
う恵梨花に、女に映画を奢ってもらってたまるか、結局誘ったのは
俺だから俺が払う、と二人して言い合い、結局割り勘で落ち着いた）
上映する劇場に向かい、席に二人でつくど普段、朝は食べないがモ
ーニングのことを考えたせいか、小腹がすいた亮は売店で何か買お
うと腰を上げた。

「売店いつてくるけど、何かいるか？」

恵梨花は少し考えて

「じゃあ、アイスティーお願いしていい？」

「了解、食べ物？」

「おなか空いてないから、いいよ」

「じゃあ、ちょっと買っててくれ」

「はい」

またも機嫌良さそうな恵梨花の返事に亮はまたも不思議そうな顔
になった。

上映直前の売店は予想通りに混んでいたが、すんなり進んで無事買うことができた亮は、席にくつつけるタイプのトレイを受け取って足早に劇場へと向かった。

劇場に入ると、まだ明るかった。

席に向っていると、またも恵梨花を見てひそひそ言いあう男たちがいて、亮はげんなりした。

日常があんなんじゃない、たしかに一人で帰りたくなるのも無理はないな、と亮はため息を吐く。

恵梨花の方を見ると、たいして気にした素振りも見せず、携帯を見ている。周りでひそひそ言い合うだけの男よりなんと、大物感あふれることか、と亮は思った。

恵梨花の隣の自分の席に戻ると、周りからがっかりした空気が伝わってきたが、亮は無視した。

亮が座る前に亮に気付いた恵梨花は、携帯から顔を上げて微笑んだ。

「おかえり」

恵梨花が微笑んだと同時に息をのむ声が方々から聞こえて、亮は

苦笑する。

「ただいま、ほらアイスティー」

「ありがとう、いくらだった？」

そう言いながら、アイスティーを受け取ると、財布をだそうとする恵梨花に亮は手を振って止めた。

「いって」

しかし、恵梨花は首を振った。

「よくないよ、いくら？」

「本当にいって、第一金額を覚えてないし。財布に小銭しまうのも面倒だから、いい」

そこまで言われて、恵梨花は少し悩んで言った。

「じゃあ、桜木君が財布をだしてる時に後で払うね」

「いい」

「桜木君って、けっこう頑固？」

恵梨花が眉を顰めて言う。

「いや、違うと思うけどな？ どちらかっていうとあんたじゃないか？」

「そんなことないよ」

恵梨花がぶいっと横を向きながら言うのを見ると亮は苦笑した。

「これ食べたかったら、つまんでいいからな」

これ、と指しているのはフライドポテトが載ったトレイである。もう片方の手にはホットドッグをもっている。

ちよつと拗ねたような表情で振り向いた恵梨花が、ありがとう、と呟くように言った。

気を取り直したのか、横を向くのをやめた恵梨花は亮の手にもつホットドッグをトレイのフライドポテトを交互に見ると、小首を傾げる。

「それだけ？」

「うん？」

ホットドッグをかじりながら亮は何のことか、と返事をする。

「それだけで足りるの？」

亮が昼に信じられない量を食べているのを見ている恵梨花は、ホットドッグとポテトを一つずつしか買ってないのを見て不思議に思ったのである。

言ってる意味に気付いた亮は、ああ、と呟いた。

「普段は朝は食べなくてな、コーヒーだけで。今日はモーニングのことを考えたせいで、小腹がすいたんだよ」

「朝はコーヒーだけなんだ？」

「ああ」

「体によくないんじゃない？」

「かもな」

「食べたほうがいいよ？」

「そっだな」

亮が適当に相槌をしていると恵梨花の背後から少し、不機嫌なオラを感じた亮はぎよっとする。

「ど、どうした!？」

「ちゃんと食べたほうがいいよ？」

「あ、ああ。わかった、なるべくそっする」

「ダメです、ちゃんと食べなさい」

「お母さんかよ!？」

思わず亮は突っ込んだ。

「食べるの、食べないの？」

恵梨花は亮に迫りながら言う。

亮の突っ込みはスルーされた。

「え、スルーですか？ あ、はい食べます。ちゃんと朝は(なるべく)食べるようにします」

恵梨花の背後からのオラが強くなってきたので、つい敬語で答えてしまった亮である。

「本当に？」

「はい(多分)」

亮は真摯な表情で答えた。

どうやら亮の真摯な表情は功を奏したのか、恵梨花の背後からオラがゆっくりと消え、それにほっとした亮はポテトを勧める。

「よかったら、どうぞ」

恵梨花は、それに対して気持ちを切り替え、いただきます、と言ってポテトを掴んで食べ、雑談交じりに映画が始まるのを待っていると、劇場内が暗くなり、映画の宣伝等が始まり、それが終わると映画が始まった。

映画の最中、ポテトをとりに行った手と手がぶつかったりするよくなお約束（お約束だとポップコーン？）なアクシデントは無かった。

ただ、手すりに置いてある手をお互い意識しないようにしながらも、手すりから手をおろすことは一人ともしなかった。

第九話 温度

「けっこう、面白かったなー」

映画を見終わった後特有の倦怠感を感じつつ、亮が軽い感想を述べながら劇場を後にする。

「そうね。なんで、あのポイントで撃たないかなーとか思ったけど、どう思うっ?」

「ああ、あれはとろ過ぎると思った。早く撃てよって、叫び……、つつこみそうになった」

恵梨花は亮の感想にクスクスと笑うと、亮も一緒に笑い、感想を言い合いながら映画館の出口に向かった。

(そういや、誰かと映画なんて久しぶりだな。見たいものが出たときは、大体一人で学校の帰りにでも見にいったし。たまには誰かと行くのもいいもんだな)

恵梨花の感想を聞きながら亮がそんなことを考えていると、映画館の出口をでていた。

「さて、昼飯食べに行くか」

映画の前に食べたホットドッグは胃を刺激し、余計に亮の空腹感を増したただだった。

ポテトも恵梨花はほんのちょっとつまんだだけで、ゆっくりとだが亮がほとんど食べたのである。

「あんだ、何か食べたいのあるか？ てか、ここ何があるんだろうな。案内板見にいかないか？」

亮が恵梨花に聞くと、恵梨花はにっこりと言った。

「お昼は公園だよ」

「公園？ なんで？ どのの？」

亮の困惑した問いに、恵梨花は笑うだけで先を歩いた。

亮が引つ張られた先はアウトレットから出て駅とは反対側にある、大きな公園と言ってもいい、芝生が広がり所々に木々が並んでいる広場だった。そこを見た亮が意外の念を隠せない声を上げた。

「へえ？ こんなところに、こんな公園あったのか」

「知らなかった？ 今日はいい天気だし、外のほうが気持ちよくな
い？」

言われてみると、実に納得できる。太陽が昇って、五月の気温で少し暑いくらいだが、いい風が吹いている。

木陰に行けば心地いいだろうと、亮は目を細める。

「そうだな。じゃあ、何か買って木陰で食べるか」

恵梨花が亮の言葉を聞いて、目を丸くした。

「ここに来て、まだわからないんだ？ いいから、あの木の下辺りにいこう？」

そう言って、何も買わなくていいのか？ と困惑気味の亮の袖をつかんで引っ張った。

目指した木の下についた恵梨花は亮に振り返る。

「バスケットかして？」

「ああ……、はい」

まだ少し困惑気味の亮は、おとなしく恵梨花にバスケットを渡した。

すると恵梨花はバスケットを開いて、シートを取り出し、地面に広げた。

「そこもって」

亮は言われたとおりに動き、シートを綺麗に広げた二人はその場

に座った。

恵梨花はバスケットから重箱、水筒、紙コップ、割り箸、紙皿をとりだした。

それを見た亮はようやく、本当にようやく理解した。彼にしては本当に珍しいほどの察しの悪さだった。

今頃気づいた亮はバツが悪くなって、赤くした顔を背けた。

恵梨花はそんな亮の様子に、楽しそうに聞いた。

「やっとわかった？」

「ああ。重いと思ったら、弁当だったのか」

亮は照れくさそうに言う。

「桜木君、私の五倍は食べるって言ったでしょう？ だからお弁当箱には入りきれないから、重箱になっちゃった」

恵梨花が笑いながら言うので、亮もつられて笑った。

恵梨花が開いた重箱は二段になっていて、下段にはおにぎりがぎっしりつまり、上段にはハンバーグ、鮭の切り身、卵焼き、から揚げ、ポテトサラダと、お弁当の定番メニューがつまっていた。

亮はその内容や量に目を丸くして驚く。たしかにこれは、恵梨花の食べていた量の五倍以上はある。

「すごいな……、これ全部、あんたが？ 今日の朝に……？ ずい

ぶん、早起したんじゃないか？」

亮はこれらを全部作る時間を考えたが、自分ではとても想像がつかなかった。

「ん？ 仕込みはほとんど昨日のうちにやってたし、おかずはほとんど焼いたりしたただけだから。おにぎりだけは、今日全部握ったけど。でも、桜木君が思ってるより時間かかってないと思うよ？」

「そうかな？ いや、でも本当すごいな、これは……。手作り弁当……、久しぶりだな……」

亮は感慨深くなっているのか呆然と目の前の「手作り弁当」を眺めている。

恵梨花は亮の様子に少し訝しげな目を向けるが、紙コップに水筒からお茶を汲み、割り箸、紙皿と一緒に亮に渡した。

「じゃあ、食べよ？」

「あ、ああ……」

まだ呆然とした様子の亮に恵梨花は少し戸惑い、付け足すように言う。

「食べたくなかったら、食べなくてもいいよ……？」

亮は恵梨花の言葉に、はっとなり慌てて手を振って否定する。

「いや、違う違う。ちょっと驚いただけだ」

そんな亮の様子に少し安堵の息を吐くと、手を合わせる。それを

見た亮も一緒に手を合わせた。

「いただきます」

「何から食べる？ おにぎりは中の具は梅と昆布とおかかだよ」

「え？ あ、じゃあ、梅のおにぎりとお焼餅、頼む」

亮の言葉に恵梨花は頷いて、おにぎりを一つとお焼餅をとって、亮の皿にのせた。

亮は自分の皿に載ったおにぎりとお焼餅を見て、お焼餅を割り箸でつかみ、ゆつくりと口にはこんだ。

お弁当、手作りの、つまり朝に作って、それを昼に食べるお弁当とはコンビニのお弁当やほかのお弁当では表現できない、独特の温度がある。朝に作ったものであるから、当然中のものは冷える。冷えるが、それは小さいものだ。周りに入っているものは元々暖かったのだから、お互いに暖め合い、冷めにくい。お弁当に入っていないければ、気になる冷め具合の料理も、お弁当に入っていると気にならない。そんな、手作り弁当独特の温度がある。

お焼餅を口に含んだ亮が最初に感じたのはそんな温度から感じる、前に手作り弁当を食べた記憶。そしてその記憶に連なる懐かしさだった。懐かしさの次に感じたのは、お焼餅の美味しさだった。塩が効いていて、自分好みの味つけ、もう食べられないと思っていた味にとっても似ていて、美味しいと感じると同時に涙が出そうになった。

否、涙が出ている。

知らずのうちに涙がでた亮は、焦り、慌ててそれを拭った。

そんな亮の様子に心底驚いた様子の恵梨花が目を丸くして慌てて言った。

「さ、桜木君!? 泣くほど不味かったら食べなくていいよ!？」

恵梨花も相当困惑してしまったのだろう。何しろ自分の作った弁当を食べた人が目の前で涙を流したのだ。

亮も困惑しながら慌てて、恵梨花の言葉のあらゆる意味を否定しようとした。

「な、泣いてませんよ!？ それに不味いなんて、かけらも思っちゃいない!! むしろめちゃくちや美味くてだな、それで、懐かしく……」

なって、と続けようとしたが、言っているうちに更に感情が高ぶってしまったのか、またもや涙がでそうになった亮は、ちよつとこめん、と、なんとか言うつと靴もはかず、シートから出て恵梨花から死角の木の裏に隠れた。

木の裏に隠れた亮は、新たに流れでてしまった涙を拭くと、拭いた腕をそのまま両目に押し当て、木にもたれながら深呼吸を繰り返した。

深呼吸を繰り返していると、いつの間にか恵梨花が目の前に立っているのに気づいた。ここまで誰かに接近されたのに気づかなかつ

た、なんて、どれだけ振りだ？ と目に腕をおさえながら亮が自嘲している、恵梨花が問いかける。

「大丈夫？ 桜木君」

恵梨花の問いかけに笑って答えようとしたが、口を開こうとする
と少し危なそうな気がしたので、手の平を恵梨花に向けて、ちよつ
と待ってくれ、の意味を伝えると、また恵梨花の死角に隠れようと
した。

そしたら、恵梨花が亮の腕を掴んで亮を自分に抱き寄せた。

掴まれた時に亮の混乱も増していたのだろう。普段なら反射的に
出してしまう動きも顔を出さず、恵梨花のされるがままにされて、亮
は気づいたら恵梨花に抱きしめられていた。

無論、身長差のある二人なので亮は屈んでいる形になっていて、
亮の顔は恵梨花の首筋に埋められていた。

亮は自分が今どうなっているかを認識すると、ゆっくりと声をだ
した。

「え……と、あの？」

「私の弁当が不味いせいじゃない？」

亮はその言葉を聞くと慌てて体を起こして否定しようとしたが、
恵梨花が思いのほか強く亮を抱きしめていたので、簡単には体を起
こせなかった。体を起こすのを諦めた亮は、それだけは違つと、そ

のままの体勢で、はつきりとした口調で恵梨花につぶやいた。

それを聞いた恵梨花はクスリと笑う。

「よかった……。なんで桜木君が泣いているのかはわからないけど、泣きたいなら泣いていいよ?」

「ああ……。いや、驚いてすっかり治まったな。……。いや、私泣いてませんよ?」

恵梨花はまたもクスリと笑う。

「そうなの?」

「ええ、私は泣いてなどおりません」

いつもとまるで違う口調で否定を表す亮に、恵梨花はまたも笑う。

「そう? じゃあ、そういうことにしといてあげる」

そう悪戯っぽく言うと、亮に回している手を離そうとしたが、その瞬間、亮が恵梨花を抱きしめた。

恵梨花が困惑した声で言う。

「? 桜木君……。?」

「ごめん、ちょっとだけこうさして」
「……………」

亮は恵梨花の無言を肯定と受け取り、恵梨花を抱きしめている腕につい力が入ってしまい、少しだが、きつく抱きしめてしまった。

「ん……」

すると恵梨花が声をあげながら、抱きしめ返してきた。

亮は恵梨花から伝わる体温、感触に、自分でも信じられないほどの安らぎを覚えた。泣いた理由を深く詮索されなかったのにも、恵梨花に深く感謝した。

それから数秒間二人は抱きしめ合い、亮は抱きしめる力をゆっくりと弱めて、恵梨花から離れた。

亮は恵梨花に目を合わせることが出来ず、目を背けながら言う。

「え……、その、すまん。んで、ありがとう」

恵梨花は亮に向かって微笑んだ。

「どづいたしまして」

すると、亮は恵梨花に顔を近づけて

「……泣いてないからな？」

と、亮が真剣に念を押しすようにもう一度言う。

そんな亮に一瞬、きよんとする恵梨花だが、すぐにぶ、と吹き出し、肩を震わせ始めると、抑えきれなくなったのか、お腹を抑えながら、大きく声をあげて笑った。

亮はこの子がここまで笑っているのは初めて見るな、と思いつつ、

口を尖らせた。

「そこまで笑う……？」

「だ、だって……アハハハハ」

亮はそんな恵梨花を見て、自分も相当馬鹿なところを見せたな、と思うと恵梨花と一緒に腹を抱えて笑ってしまった。

二人して思う存分笑い合った後は、シートに戻って食事を再開した。

さすがに亮はもう泣くこともなく、美味しい、と何度も言いながら、すごいスピードで重箱の中身がなくなっていくのを恵梨花は呆気にとられて眺めていた。

恵梨花はそんな亮の食べっぷりを見て、本当に料理が不味いわけではないと、ほっと、安堵の息をもらした。

重箱の中身がなくなると上機嫌な顔で亮は手を合わせ、頭を下げた。

「ごちそうさまでした」

「おそまつさまでした」

恵梨花も微笑みながら、頭を下げる。

「いや、本当に美味かった。あんたを嫁さんにできる人は幸せだな」

亮は満足気に言うと、恵梨花が少し赤くなる。

「そ、そう？　ありがとう」

「ああ、本気でうらやましいと思う」

「じゃ、じゃあ、また作ったら食べてくれる？」

亮は一瞬、きよとんとなるが、すぐに笑顔で頷く。

「そら、作ってくれるなら、いつでも食べるぞ」

「本当に!？」

恵梨花は自分でも知らずに、亮に迫りながら笑顔で聞いた。

亮はそんな恵梨花に少したじろぎながら頷いた。

「あ、ああ。美味かったし、また食いたいな」

「じゃあ、また作ってあげる」

亮の言葉を聞いた恵梨花は、またも上機嫌な顔でニコニコと笑っている。

料理を褒められたらやっぱり嬉しいんだろうな、などと馬鹿な勘違いをする亮であった。

第十話 枕

満腹感と多少の睡眠不足のせいで、亮は大きなあくびをした。そんな亮を見て恵梨花が問いかける。

「眠いの？」

「ん？ ちよつとな……、昨日寝るの遅かったから」

「そうなんだ？ ……ここは涼しくて風が気持ちいいから、余計に眠くなるね」

「まったくな」

そう言いながらシートの上で横になる亮。シートがひんやりして気持ちがよく、目が細くなる。

亮が横になるのを見ていた恵梨花も、一緒になって目を細めた。

「お昼寝する？」

「いや、さすがに……、あんたも眠いのか？」

自分一人寝て女の子を待たせるなど抵抗があつたが、恵梨花も一緒に寝ると言っているのだろうかと疑問が湧いた。

恵梨花は笑って否定する。

「私はちよつと、ここで寝るのは抵抗あるかな……。いいよ？ 横でまってるから」

「いや、いいって。この後アウトレット回るんだろ？」

恵梨花は首を傾げた。

「桜木君、何か買いたいものあるの？」

「いや、別に」

「じゃあ、いいじゃない」

「いや……、でも、あんた見て回りたいんじゃないのか？」

亮の問いに、恵梨花が笑って言う。

「見たいけど、眠たい目をした人が横にいたら、落ち着いてゆっくり見れないよ」

恵梨花の返答に亮は反論ができず笑ってしまった。

「そう言われると反論できないな。じゃあ、ちょっとだけ寝るかな。寝過ぎたら起こしてくれよ？」

亮の頼みに恵梨花は笑顔で了承した。

「はい、わかりました」

恵梨花の返事を聞いて、じゃあ、寝るか、と体勢を本格的に寝る姿勢にしようとするが、シートの上とはいえ、地面の上なのだから固く、枕もないので今一落ち着かない亮は、とりあえず腕を頭の下に置くようにして、寝返りをうつが中々ベストな姿勢を作れず、何度か姿勢を変えていると、恵梨花から声をかけられた。

「えっと、あの……、これ、使いますか？」

かけられた声に向って目を開けると、顔を少し赤くした恵梨花が膝を叩いている。

亮は恵梨花の言葉の意図がわからず、無言で首を傾げる。

「えっと、……これ」

と、言いながら、さらに顔を赤くして自分の膝を叩く恵梨花。

それを見た亮は、ようやく恵梨花の言っている意味がわかった。膝枕だ。

亮は、慌てて手を振った。

「い、いや、いって！ そんなー！」

すると恵梨花は傷ついたような顔になって

「やっぱり私じゃ、嫌、かな？」

と言うので、亮はさらに慌てて手を振る。

「いや、違っつて！ そのだな、あんたみたいな可愛……」

可愛い女の子に膝枕してもらうなんて、そんな恐れ多いこととはとても自分にはできない、と言おうとした亮だが、何故か躊躇われ言葉に詰まった。何故だろう、と自問していると、なんとなく理由がわかった。すごく他人行儀に感じるのだ。先ほど抱き締め合って、得た安らぎを嘘にしてしまうように感じるほど。

詰まった亮を不思議そうに見た恵梨花は、わずかに期待を込めた声で問いかけた。

「嫌、じゃないの？」

恵梨花の言葉にはつとした亮は慌てて、頷いた。

「当たり前だ！ 実に魅力的な誘いだけど……」

さすがに、こんな人前で、膝枕は……、と言おうとするが、恵梨花が亮の言葉を遮った。

「じゃあ、いいじゃない。はい」

と、言いながら自分の手の平を膝の上に乗せる。

目を点にした亮は、躊躇した。

「いや、えつと……」

膝枕といえでも据え膳食わねば恥なのか、と考えていると、業を煮やしたのか恵梨花が強い口調で言った。

「眠れないんですよ！？ いいからこっちで、寝なさい！」

亮は、またお母さんになってるよ、と思いながら、逆らえない恵梨花の雰囲気から、反射的に「はい」と返事してしまった。

のろのろと亮は恵梨花の傍に来ると、「お邪魔します」と呟き、恵梨花が赤くなって「どうぞ」と言うのを聞きながら恵梨花の膝

の上に頭をのせた。

お邪魔します、と言つのも変だったかな、と考えながら上を見上げると、小さくない、というより大きめの山が目の前に二つあり、慌てて目を逸らし、横向きになると、公園内を歩いているたくさんの人達が目に入り、こちらを見ているのもけっこうな数がいた。

これはたまらん、と亮はまたも慌てながら、反対方向に向きを変えた。

こちらは、恵梨花の服しか見えないが、これもある意味恵梨花に向き合っているようなもので気恥しかったが、外か上をみるよかはマシだと判断し、亮はこの向きで固定することにした。

位置を固定したが、今度は頭の下で感触が気になる。

少し高めだが、柔らかくて、暖かくて、心地よくて、なんともいえない。高級枕なんて、目じゃないんじゃない？ と亮は思う。高級枕など使ったことなどないが。

こうなるとこの感触を起きてじっくり楽しむべきなのか、心地よさを感じながら眠るか、どうするべきか悩んでいると、いつのまにか亮は寝てしまった。

恵梨花は自身の膝の上に亮が頭を乗せると、ゴソゴソ向きを変えているので、それがこそばく羞恥を誘ったが、すぐに動くのをやめて、間もなく寝てしまった。

顔を覗き込むと、あまりにあどけない寝顔なので、また吹き出しそうになるが、気持ちよさそうに寝ているので、起こさないように手で口を抑えて肩を震わせた。

顔を見ていると、さっきの涙はなんだったんだろうと思いついた。

一瞬だったが、とても悲しそうで、寂しそうな目をしていたように思う。

すぐに涙を拭って誤魔化そうとしたが、途中で口が震えて、また涙が出そうになったのかすぐに木の陰に隠れてしまった。

すると焦燥感にも似た、ほうっておけない気持ちになり、泣いてしまうのを抑えているだろう彼の前にいつてしまった。

前にいくと、手振りで待つよう表したみたいだが、また、すぐに自分から隠れようとした。

その時、自分でも驚いたが、衝動的に抱きしめてしまった。彼を。

彼もさすがに驚いたようで、泣きそうな衝動は治まったらしい。

自分でやっていておいての行為だが、テンパってしまい、詮索することだけは避けたほうがいいと思ったので、もうわかっているのに弁当のことなど聞いてしまった。

するとはつきりとした口調で否定してくれたので、それがおかしくて笑ってしまった。

泣くのは治まったみたいだが、まだ泣き足りないなら自分の前で泣いてほしいと思って促すと、変な口調になって、またも泣いてないと誤魔化してきて笑ってしまった。

もう大丈夫なんだろうと思いい、名残惜しくなりながらも、彼から手を離そうとすると、今度は自分が抱きしめられてしまい、気づいたら彼の腕の中にいた。

驚いて声をかけると、落ち着いてるけど、少し寂しそうな声がかかり、そのせいか、なぜか切なくなってしまう、声が出せなくなるほど強く抱きしめてきた。

強く抱きしめられると、彼の腕、体から伝わる力強さのせいか、他の何かのせいか、自分の中で歓喜があふれ、すごく満たされた気持ちになった。

離れると、彼はとても照れ臭そうに、感謝を伝えてきた。

その後、また泣いてないと誤魔化してきたので、ついには耐えられず、大口を開けて笑ってしまった。

あんなに笑ったのは久しぶりだろう。

つられてしまったのか、彼も一緒になって、二人で大笑いした。

恵梨花は、しばらくはこの時のことを思い出して笑ってしまうんだろうな、と考えると、声を立てずに肩で笑った。

それにしても、と思う。

彼と一緒にいると、落ち着いた気分になれるのはわかっていたが、それが彼が眠っていても有効だとは恵梨花は思ってもいなかった。

今日は落ち着く、というよりも胸が高鳴ってばかりだが。

今もひざ枕なんて、大胆な真似をしているが、落ち着いた気持ちになれるのが半分、もう半分は膝枕をしていることからくる羞恥と、胸の高鳴りだ。

でも、それが妙に心地よくなった恵梨花は亮を覗き込んでいる姿勢のまま、亮の眠気に誘われて眠ってしまった。

目を開けると、何かがあった。

なにがあるんだろうとボーっとしていると、目が慣れてきたのか、目の前の何かはつきりと見えた時は天使がいる、と思った。

はて、自分はいつの間に天国にいったのか。いや、その前に天国にいくようなことをしただろうか、と考えていると、その天使の顔

に見覚えがあり、じっと見ていると、天使でなく、とても可愛い女の子が目を閉じているのだと認識した後に、ようやく現状の把握が終わった。

がばつと、起き上がりそうになったが、無理にそれを押しとどめた。

そんな体の起こし方をすると、間違いなく頭突きをしてしまうからだ。

亮はまず、状況を確認しようと思い、記憶を掘り返すと、すぐに思い出した。

自分はひざ枕してもらった。いつの間にか寝てしまっていた。眠気も綺麗に飛んでいる。感覚からして寝ていたのは、多分一時間ほどだろう。

そして、目の前の信じられないくらい可愛い寝顔は、自分が寝ている間に、彼女も一緒に寝てしまったせいだろうと、間違えようのない回答をだした亮は、小さく深呼吸をして、自分を落ち着かせた。

よし、落ち着いた、と思った亮はこのまま膝の上にいるか、体をゆっくり起こすか悩んだ。

やはり、枕としては少し高かったため、首が痛い、それほどひどいものではない。

体を起こして、コキコキと骨を鳴らし、ほぐしたい気持ちがあるが、それよりも、やはり後頭部の感触をもうちよつと楽しむべきだと、本能と理性は満場一致の議決を出した。

うつむ、と心の中で頷きながら目を上げると、そこにある顔をじつくりと見てしまう。

スースーと小さな寝息をたてている。

柔らかかそうな頬、柔らかかそうな唇に目を奪われ、離せなくなると、ごくりと喉が鳴った。

落ち着け、落ち着いて目を逸らすんだ、と自分に言い聞かせるが、気づいたら自分の右手が彼女の頬に触れようとしていて、ギョッとした。

手は勢いを止められず、彼女の頬に辿り着き、右手からくる感触に亮は感動してしまう。

すると、そのせいだろう。彼女の体がピクッと動き、ゆっくりと目を開け始めたので、亮は慌てて右手をおろした。

恵梨花が目を開けると、亮の目とバツチリ合ってしまった。

目が合った亮は右手を軽く上げて、「おはよう」と言ってみた。

恵梨花は亮の手の動きにつられてそれを目でい、その後また亮と目を合わせると、恵梨花の目が見開いて、きゃあ、と叫んで飛び上がってしまった。

亮は恵梨花の膝の上に頭を乗せた状態であった。その膝が飛び上がったことによって亮の首は綺麗に「ゴキ」と大きな音を立てた。

亮が首の痛みで悶絶して蹲っていると、状況が把握できた恵梨花は、はっとして声を上げた。

「ご、ごめんなさい！ 大丈夫！？ ……きゃっ」

声を上げ、亮の元へ寄りつとした恵梨花は体のバランスを崩し、倒れこむようにシートの上に両手をつけて体を支えた。

亮が痛みをこらえながら恵梨花を見ると、驚きの声を上げる。

「大丈夫か、あんた。急にどうした？」

「う、うん」

そう言いながら、自分の足をそろそろと触っている。

「しびれたみたい」

少し、恥ずかしそうに言う。

亮は、ああ、と納得して笑う。

「無理もないか、一時間は同じ姿勢で人の頭のせてたんだからな」

「そうね……、そうだ、桜木君は大丈夫？」

恵梨花は途中で思い出したように亮に問いかける。

「ん？ ああ……」

と言いながら、亮はコキコキと鳴らしながら首を左右に振って、確認するように首をゆっくり動かし答えた。

「大丈夫みたいだな。一瞬痛かったけど、ほどよくほぐれたみたいだ」

「ほぐれた？」

恵梨花が不思議そうに尋ねると、亮が手を振りながら答える。

「え？ ああ、こっちの話だ」

「？ ……そう？ ……眠気はとれた？」

またも不思議そうな顔をした後に恵梨花が尋ねると、亮は笑って答える。

「ああ、スッキリした」

「そう、よかった」

そう言いながら、恵梨花が亮に向かって優しく微笑む。

微笑まれた亮は、一瞬ドキッと、胸がはねたように感じて、慌てて自分の胸元に手をあてた。

その様子を見た恵梨花は、首を傾げた。

「どうしたの？」

声をかけられた亮は自分でも驚くほど動揺してしまい、思わず大きな声がでた。

「なんでもない！」

恵梨花は亮の声の大きさに少し驚いたような顔を見せると、小首を傾げたが、すぐに気を取り直したようで、辺りを見回して言った。

「そろそろ片づけて行く？」

この行くとは、ショッピングのことだろう。それに亮は頷いた。

「そうだな……、先にどっかで、茶しないか？ 冷たいもの飲みたい」

木陰で風が吹いていても五月の天気の良い昼さがりは暑かったので、亮は寝汗をかいていた。

「そうね、寝ている間に喉かわいちゃったし」

恵梨花は頷いて同意した。

第十一話 予定外

来た時と同じ様に荷物を入れ直したバスケットをもった亮と恵梨花は、アウトレットの中にある喫茶店に入った。

席に座った亮はアイスコーヒーを、恵梨花はアイスマルクティーを注文した。

注文した亮は店内のエアコンの涼しさが心地よく、ソファタイプの椅子にもたれると体の中の熱を出すように軽く息を吐いた。

その様子を見た恵梨花が笑いかける。

「疲れたの？」

「いや、涼しいなー、と思って。あんたは？ 疲れてない？」

「疲れてないよ。でも私も寝不足だったみたい、ちよつと寝たらスッキリしちゃった」

恵梨花が照れたように言うと、亮が頷いて同意する。

「そら、あれだけの弁当作ったら、多少は寝不足になるだろう。それにしても本当美味かった。ありがとう、ごちそうさまでした」

と言って、亮が頭を下げる。

「もういいのに、どういたしまして」

恵梨花が照れたように笑って、手を振る。

そこで亮が、気を取り直すように、コホン、と咳払いをして何か言おうとすると、注文した飲み物が届いた。

飲み物を受け取り、お互い口をつける。

一口飲んだ亮は、アイスの時はいつも入れるシロップを忘れたことに苦い顔をして、シロップを入れ、ミルクも入れた。

アイスコーヒーをかきまぜている亮を恵梨花が面白そうに見ていた。

「いつもシロップいれてるの？」

「アイスの時だけな。ホットの時は砂糖なしのミルクのみで」

「ホットの時は砂糖なしなの？」

「ああ。ホットの時は苦さとかは、全く気にならないんだけど、アイスの時は何か気になるんだよ」

恵梨花は、ああ、と少し納得の色を見せた顔で言う。

「少し、わかるかも」

「わかってくれるか」

亮が真面目腐った顔で頷きながら言うので、恵梨花は笑ってしまっただ。

「桜木君って、面白いね」

「いや、普通だろ？」

「ううん、面白いよ。今日なんて、私こんなに笑ったの久しぶりだ

と思うし。普段が笑わないわけじゃないけど。お弁当の時なんて特に」

それを聞いた亮は、急にそわそわし始め、目を泳がせた。

「どうしたの？」

挙動がおかしくなった亮に恵梨花が問いかけると、亮は言いにくそうに声を出す。

「えーと、だな。その、昼に俺が泣……、取り乱した時のことだな」

恵梨花は言い直さずに促す。

「うん」

「他の人には言わんでくれよ？」

恵梨花はきょとんとした後、悪戯っぽく尋ねる。

「どうして？」

亮は恵梨花のそんな表情に、ばつが悪そうな顔で言う。

「うん、いや、あれだ。そこは武士の情けってやつで」

恵梨花は亮の言葉に吹き出しそうになったが、我慢してわざと不思議そうに言う。

「私、女だよ。武士じゃないよ」

「ああ、じゃあ、女の情けってやつで」

今度は我慢できずに、笑ってしまった。

「女の情けって何？ 言いたいことはわかるんだけど」

「とりあえず、黙っててくれってやつだ」

「何よ、それ」

恵梨花はますます笑う。

「ほら、ここは俺が出すから」

と言いながら、伝票をヒラヒラさせる。

それを見た恵梨花は悪戯っぽく言う。

「どうしよっかな」

「この通り」

亮が両手を合わせて、恵梨花に向かって拝む。

恵梨花は楽しそうに亮を見て言った。

「じゃあ、ケーキ頼んでいい？」

亮がすかさず頷いた。

「どうぞ。ついでだから、俺も食べる」

恵梨花が驚いた顔になった。

「お昼あんなに食べたのに？」

「甘いものは別腹だろ？」

「えっと、たしかにそう言うけど……」

恵梨花はあんなに食べたのに、と腑に落ちない顔になっている。

「それに、もう半分ぐらい消化した気がする」

「もう！？ 半分も！？」

「ああ。だって、もう食べてから二時間は経ってるだろ？」

「えっ……、あの量の半分が二時間で……」

「まあ、細かいことは気にしない。……すみませうん」

細かいことなのだろうか、と恵梨花が考えているのを余所に、亮が店員を呼んだので、亮がチョコレートケーキ、恵梨花はチーズケーキを頼んだ。

亮が会計を済ませると、恵梨花が亮に「ごちそうさま」と、頭を下げる。

それにたいして亮が笑って言う。

「あの弁当の価値に比べると安いもんだ」

本音でいつてるのが窺えたので、恵梨花は喜んだ。

それから二人はアウトレットの中のお店を二人で見回り、気づけばもう夕方になっていた。

「もう、こんな時間か」

亮が時計を見ながら言う。

「朝の九時から一緒にいたのにね、あっという間だね」

恵梨花が宙に視線を向けながら言う。

「あんた、晩御飯は？ 家で食べるんだよね？」

「うん、もうそろそろ帰ったほうがいいのかも」

亮は恵梨花の言葉に多少の寂寥感が滲むのを感じたが、それを出さずに言う。

「じゃあ、帰るか。帰りの方向は？ 上り？ 下り？ それともこの近辺なのか」

「ううん、上りだよ。学校超えて、三駅」

「じゃあ、同じ方向か。行こう」

二人は並んで歩いた。

駅までの道を二人とも、無理に言葉を出そうとせず、前に一緒に帰った時とは違った、沈黙を噛みしめるような空気が流れていた。

電車に乗って30分間、恵梨花が自分の降りる駅に近づくまで、その沈黙は続いていた。

次の駅までもう少し、のタイミングで恵梨花が口を開いた。

「次で降りるね」

「ああ……、家まで送ろうか？」

亮の家は次の駅からさらに二駅だが、定期があるので途中でも問題ない。

それだけでなく、なんとなく離れがたかったのが大きかったのだろう。

つい、そんなことを聞いてしまったが、恵梨花は首を振って断った。

「いいよ、いつも降りてる駅なんだし。ありがとう」

そう言って、亮に微笑む。

受けた亮は、つい、といった感じで微笑み返す。

そこで、電車がとまり、恵梨花が扉から出て笑顔で振り向いて言う。

「今日は楽しかった。また、明日ね」

「ああ、また、な……」

亮が言ったところで、扉が閉まり、ガラス越しに恵梨花が手を振る。

亮も手を振り返したところで、電車が動きだした。亮が見える間ずっと、恵梨花はこちらに手を振っていた。

振っていた手を降ろした亮は大きく息を吐いた。

（やばいな、惚れそうだ。いや、多分もう惚れてしまったんだろうな……。初めてだけど、これはわかる。いくらあそこまで可愛いからって、単純じゃないか、俺？ しかもこんな数日で……）

あの腹黒眼鏡のせいだ、と亮は呟いた。

これから先のことを考えて亮は憂鬱になった。

同じ学校の子を好きになってしまうことなど、自分の高校生活のプランには無かった。

好きにならないと決めたのは、去年のあの女の子が原因だが。

あの女の子は何も悪くないと思っている亮だが、それでも自分が

嫌になった。

友達だと思った子だけで、あんな気持ちになった。

ならば、初めて好きになった女の子に同じように見られたら、どうなるのか。

考えるだけで、恐ろしくなった。恵梨花からだけは、そんな風に見られたくない。

恵梨花の笑顔を見れないのも、恵梨花から笑顔を向けられなくなるのは嫌だが、恵梨花からあの目でみられるのだけは嫌だ。それだけは避けたい。

そう思う一方で亮は、でも恵梨花ならそんな風にはならないんじゃないかと、期待している自分がいるのがわかって、それを消した。期待したら、それがなかった時、より強く自分に返るんだから、と。

じゃあ、どうしようか。最悪を避けるためには、やはり………

「会うのは、それよりも一緒に帰るのは、もう、なるべく避けるか………」

亮は自分に言い聞かせるように、誰にも聞こえない声で呟いた。

第十二話 頂垂れる男たち

朝のHRが始まる20分前、いつもと同じ時間に教室に着いた梓は教室の異変に気付いた。

周りを見渡す。女子は囁き合っている。いつも通りに見えるが、少しいつもより熱が入っているように楽しそうに話している。

男子は、ぼうつとした顔だ。これもいつも通りではあるが、いつもより顔が赤い。

男子と女子のしていることに、共通点はないが、視線は共通している。男子も女子も視線は同じ方向を向いている。

視線の先を見るまでもなく、何があるのかは梓には分かった。

みんなが見ている先には、楽しそうに前の席の咲に話しかけている親友の姿があった。

これもいつも通りではあるが、違うところがある。

一目見て今まで見てきた中で一番いい、と思えるほどに親友の機嫌がいいことがわかる。さらには、髪型が違う。サイドポニーになっている。

両手で頬杖を立てて顔には笑みが絶えず、座っている足の膝から下は、ブランブランと揺れている。

そんなご機嫌な様子で咲に話しかけている。

とりあえず梓は携帯を取り出し、そんな可愛い親友の写真を十枚ほど、動画を一分ほど撮影してから、親友に近づいた。

梓がすぐそばに接近してようやく気付いた恵梨花は、ご機嫌な笑顔をさらに強くする。

「おはよう、梓」

梓は今すぐ、余りの可愛さの親友を抱きしめて、頼ずりしたい衝動をこらえ、笑顔であいさつを返した。

「おはよう、恵梨花、咲」

「おはよう」

咲はちいさな声であいさつを返す。

「機嫌いいみたいだね、昨日は楽しかった？」

そう言いながら、梓は恵梨花の隣の自分の席でない椅子に座る。

「楽しかったよ。あ！……梓、昨日のこと彼に何も言わなかったでしょ!？」

梓が問いかけると、恵梨花は快活な声で答え、途中で何かに気付いたようにして梓に責めるように言う。

すると、梓は素知らぬ振りで答えた。

「そうだったっけ……？ でも、楽しかったんでしょ？」

そう問われると、恵梨花は詰まったように言う。

「そ、それは、そうだけど……！」

「じゃあ、いいじゃない？」

「でも、何も知らなかったから、私も彼も混乱しちゃって！」

恵梨花が尚も責めるように言うと、梓は真面目な顔をし、何度も頷きながら先を促す。

恵梨花はそんな梓をジト目で見つっ、亮のお礼がモーニングなのかと勘違いしている話をし、それを聞いた梓と咲が吹き出した。

「アハハ、そんな勘違いをしながらも行くなんて、面白いな、彼は」

咲は口を抑えながら肩を震わせている。

「そんな勘違いをいきなり聞いたから、本当に混乱したのよ」

「まあ、たしかに。でも結局はその後、出かけたんでしょ？」

梓が笑いを抑えながら恵梨花に聞くと、恵梨花はぱあつと、花が開いたような笑顔になって答える。

「そうなの！ 結局私が行くと思ってたところに、全部行ったの！
すごく楽しかった！！」

梓と咲は夢中で言う恵梨花を優しげな目で見ていた。

そこで突然、三人の傍に人影が近づいたのに気づいた梓が振り向く。そこには同じクラスの男子の岡本が顔を赤くし、目線をキョロキョロさせながら立っていた。そんな岡本を訝しげに見る梓が問いかける。

「岡本君、どうした？」

問われた岡本は、はっとした顔になり、梓を見、その次に恵梨花と目を合わせた。目が合った恵梨花は不思議そうな顔で岡本を見ている。恵梨花と目が合った岡本は、赤かった顔をさらに赤くして俯く。しかし、意を決したような顔を見ると勢いよく顔を振り上げ、その勢いのまま頭を深々と下げながら言った。

「お願いします！ 藤本さん、俺と付き合ってください！！ 好きです！ 何なんですか、今日のいつも以上の可愛らしさは！！ お願ひします！！」

三人の美少女は、いやその時教室にいた者は全員、口をポカンと開けて、朝の教室の中で堂々と告白をかました岡本を見る。

三人娘が何か言う前に、岡本以外のクラスの男子二人がはっとなって文句を言いながら、岡本の横に焦った様子で駆け寄る。

「ずるいぞ、岡本！」

「そつだ、こんな抜け駆けは許されることじゃない！」

駆け寄りながら、岡本に責めるように言うのは、同じクラスの男子の、工藤と吉田である。この三人はクラスの間でも仲がいいことは周知の事実だ。二人に責められた岡本は、下げた頭をそのままに二人に言う。

「すまん！！　しかしだ！　今日の藤本さんは……可愛い！　可愛いすぎるんだ！！　だから、我慢できなくて……」

それは悲痛な叫びだった。

「くっ……、それは、たしかに……！」

「ああ、いつもと違う髪型からくる可愛らしさに、いつも以上の光輝のオーラ……！」

工藤と吉田はグッと、拳を握りしめながら悲痛な顔で言い、二人は目が合うと、お互いに頷き、意を決した表情になって同時に恵梨花に振り返った。

振り返られた恵梨花は尚もポカンとした表情になっているが、二人は気にせず、隣に並んでいる岡本と同じように頭を深く下げて同時に言った。

「お願いします！　俺と付き合ってください！！！」

同じセリフが同じタイミングになったのは偶然かは定かではないが、そんな状況の中、誰よりも先に我に返ったのは、さすがというか梓だった。

「……はっ！　……ちよつと恵梨花！」

そう言っつて恵梨花を小突く。梓から注意を受けた恵梨花は、はっとなつて慌てて立ち上がった。

慌てて立ち上がったため、椅子がガタンとなつて、その音が教室

に響く。その音のせいで、教室内の何名かが我に返ったが、誰も声を出さなかった。

そんな中、恵梨花は困ったような顔になって言った。

「えっと……、その……、ごめんなさい!!」

そう言っつて、恵梨花も頭を下げた。

恵梨花の言葉が聞こえた三人の男たちは悲痛な表情で顔を上げ、岡本が声を上げる。

「くっ……、や、やはり無理か。……す、好きな人いるんですか？」

問われた恵梨花は下げていた頭を上げると、少し顔を赤くしながら、言い淀んだ。

「そ、それは……」

そんな様子の恵梨花から悲痛な表情を深くした三人に、梓が声を上げる。

「いるよ、恵梨花には好きな人が」

梓の発言にさらに顔を赤くした恵梨花が慌てて振り向いて、抗議する。

「ちよつと、梓!」

「何? 間違っつたこと言っつた?」

「そうじゃなくて! 私そんなこと一言も言っつてないじゃない!!」

梓が呆れた目を隠そうともせず、頬杖をつきながら恵梨花に言う。

「恵梨花、私の目は節穴じゃあ、ないよ。自覚したのは昨日？ 思ってた以上に鈍いわね」

「うっ……」

梓の言葉が凶星の恵梨花は、真っ赤な顔で言葉に詰まり、そんな恵梨花を梓が面白そうに見ている。

そんな二人のやりとりを、存在が忘れられた三人の男子が諦めの表情で見ていると、工藤が声を上げる。

「じゃ、じゃあ藤本さんが好きになった、そんな罪な男って誰ですか……？」

三人の存在を思い出した恵梨花と梓が、はっとなって振り向くと、恵梨花は困った顔になりながらも、はっきりと言った。

「ごめんなさい、言えません」

恵梨花の答えに、さらに食い下がろうと工藤は言う。

「じゃ、じゃあ、同じ、このクラスの男子ですか!？」

工藤の発言にクラス中の男子が期待と不安の混じった表情になった。

「え、と……、違います。もうこれ以上言えません、ごめんなさい」

頭を下げながらそう言うと、クラス中の男子がこの世が終わったような顔になり、岡本、工藤、吉田の三人は魂の抜けたような表情で、恵梨花に朝からすみません、と呟き、振り返ると、三人は肩を組みながら、今日は飲もうぜ、と呟きながら自分たちの席に戻って行った。

三人が席につく前に、今度はクラス中の女子たちが、恵梨花の元に興奮しながら集まった。

「恵梨花ちゃん、ついに好きな人できたの!？」

「いつ!? 昨日なの!？」

「この学校の人!？」

「同じ学年? やっぱり年上!？」

「いやいや、意外に年下かもよ」

「そうなの!？ どうなの、恵梨花ちゃん!？」

「付き合ってるの!？」

一斉に食らう質問の嵐に面喰った恵梨花は梓を睨みつつ、質問にどう答えようか、一切答えないほうがいいんじゃないかと思案していると、チャイムが鳴り、すぐに担任の先生が入ってきたので、女子たちは渋々、恵梨花から離れて席についた。

ほっとした恵梨花だが、今日一日続くかも、と思うと、どうしようかと悩んだ。

第十三話 男泣き

昼休み前の授業中に恵梨花からメールを受けた亮は、胸が高鳴りながらも、抑えろ、と自制し、メールを確認すると昼ごはんを一緒にしないか、といった誘いだった。

なぜ、まだ自分を誘うのか不思議に思う亮だが、断腸の思いで、断りの返事を送った。

亮としては会わずに自分の気持ちが少し冷めるのを待ちたかったのがあるが、先週の途中から昼も帰りも全部（と言っても木、金の二日間）、あの美少女たちと一緒になので、クラスの男子たちとまったく一緒にいない。先週は何かと噂になったので、それを完全に意識から排除してもらったためにも、あまり嬉しくはないが、クラスの男子たちと一緒に食堂に行こうと決めた。購買のパンに飽きたのもそこそこ大きい。

授業が終わり昼休みに入ると、前の席の小路が振り返って亮に声をかける。

「亮、今日は食堂か？」

「ああ。お前もなら、一緒にいこうぜ」

「ああ、あいつらも行きたいだから一緒に行くか」

小路は頷くと、亮がクラスでよく話すグループのほうを見ながら言った。

「そつだな」

亮も頷きを返した。

亮と小路に加え、亮とよく一緒にいるグループ（亮のB認定）の体格が横に広く、心も広い陽気者の川島勝カウシママサルに、黒眼鏡をかけ、真面目な顔をしながらも、ユニークな夏山巧ナツヤマタクミ、上背が高くお調子者の東新之助シシノスケといったメンツで亮たちは食堂に向い、各自、注文したものを受け取ると、丁度よく空いた六人席に座った。

座ると同時に、小路が亮と川島に向けて呆れた声で言う。

「お前ら、相変わらず、すごい量だな」

亮のトレイには三人前のメニューが各大盛りにおかれている。川島のトレイにも、同じだけ、いや、わずかに亮より多い量（食堂のおばちゃんサービス）が置かれている。

「これぐらい、普通だろ？ なあ、亮？」

「まったくな。なんであれだけで足りるのか、お前らの胃が不思議でしょうがない」

川島が亮に同意を求めると、亮がすかさず肯定する。

「それは、こっちのセリフだ。勝は、わかる。そのデブの体型だからな。この中で一番不思議なのが、亮、お前の胃袋だ。運動もしていない、体格も俺と変わらない、それなのに俺の三倍以上は食っているんだからな」

亮の発言に、夏山巧がつっこむと、亮が肩を竦める。

「そんなの知らんって、俺はずっとこの量なんだから」

「そんなことより聞きたいことがある、亮」

東が、いつもと違って真面目な顔で亮に話しかける。

友人の真面目な顔に亮も合わせて、神妙な顔で聞き返す。亮以外も同じ様な顔を作った。

「なんだ？」

東は頷き返すと、こう口を開いた。

「藤本さんは、もう来ないのか？」

「藤本さん……？ あ、ああ、あの子か」

亮は恵梨花のことは「恵梨花」として認識し、フルネームの「藤本恵梨花」は覚えていたものの、苗字を聞いてもすぐには恵梨花「藤本とは直結できていなかった。何せ、恵梨花と一緒にいる時は梓と咲がいるが、咲が呼んでいるのを聞いてはいないが、梓はいつも「恵梨花」と呼んでいるためでもある。

一方、亮の一瞬忘れていたような顔を見た皆は一様に驚きの表情になり、覚えてないのか？ ふざけんな、とぼけんな、と口々に亮を罵倒する。

「ちよっ、落ち着いてくれ。俺が携帯に登録しないと、中々名前覚ええないの知ってるだろ？」

「だからってだな、この学校のスーパーアイドルの名前を聞いてすぐに浮かんでこないなんて異常だぞ、亮」
「そうだな、しかも会話までしといて」

亮の言い訳で、少し納得を見せながら川島が言つと夏山も同意を示し、眼鏡を上げながら言つ。

そこで、東がまたも真面目な顔で亮に声をかける。

「亮」

「なんだ」

「頼む！ 俺も藤本さんと会話させてくれ！！ それが無理なら近くで見させてくれ！！」

言うなり東はテーブルに両手と頭をつけて、亮に頭を下げている。テーブルで椅子に座った版の土下座である。

「お、俺も、俺も」

川島がすかさず便乗する。

「俺は近くで写真を撮りたい」

夏山も眼鏡を光らせたように言つ。

亮はこのメンツの間では珍しく面喰つた顔を見せている。

「お、お前ら。何か勘違いしてないか？」

「勘違いでもなんでもいい。先週の木曜日には俺は奇跡を見た。あのスーパーアイドルが俺達の友人に声をかけ、親しげに肩をゆすり起

こし、お願いをしていた。これを奇跡と言わずして、何と言っんだ」

東は顔を起こして、熱に浮かされた様な顔で熱心に語る。

東の余りの様子に、亮は慌てて否定した。

「だから、言ったる！ こけたのを助けて、お礼をしてもらった！
！ それだけの関係で、携帯も交換してないんだって！ 友達にな
ったわけでもないし、俺の権限でお前らに話してもらったりとか出
来ないって！！」

亮は少々嘘をついた。携帯の交換はした。友人と言うには少し複
雑な胸中だが、自分の友達と話してくれ、なんて言えるほどの仲と
は思っていない。

「それじゃ、不公平だ！！」

東が泣き叫ぶように言う。実際のところ、涙が流れている。

「な、何がだよ」

亮は東の様子に若干引いている。

「明は藤本さんと話したじゃないか、すぐ近くで見たし！」

「はあ！？」

「俺か！？」

亮が意味不明だと言わんばかりの顔になれば、小路が自分を指さ
しながら、驚きの声をあげる。

「そうだ！ お前は藤本さんに声をかけられたし、目の前で藤本さんのお願ひポーズも見たじゃないか！」

東は悲痛な様子で小路を責める。

「おい、東。なんだ、そのお願ひポーズってのは。誤解を招くような発言を大きな声で言うな」

亮は周りの痛い視線をむけられている友人を止めようとした。

「俺の場合は、ほんと、たまたまじゃないか。前の席にいただけでなんで俺のこと責めるんだよ」

小路はいわれなき罪を被せられるのを防ごうとした。

「羨ましいんだよ……!!」

それは東の魂の叫びだった。

一同、絶句である。

食堂中が一瞬しん、となつて亮たちのテーブルに注目している。

犯人の東は机に蹲つて、男泣きしている。

声をあげるのに躊躇われるところだが、ある意味、この事態の張本人とも言える亮が静かに声をかける。

「いいか、東。……俺にはあの人にお前の近くに來てもらつたり、話したりしてもらつような権限なんてない。俺の見た目や、認知度を考えたら、それはわかるだろう？」

「……………」
「それに、だ。そんなに話してみたいなら、お前から声をかけたらいいじゃないか。少ししか話してないが、あの人なら話しかけられたら、ちゃんと応えてくれると思うぞ」

その言葉を聞いた川島、夏山、小路は、あちゃあ、といった顔で首を振る。

亮がそんな三人の様子を見て、自分は間違ったことを言っただろうかと焦りの表情を浮かべる。そこで東がガバッと顔を上げ、立ち上がり、怒りの表情で言った。

「そんな、度胸、ねえよ！！！！」

一言、一言、区切りながら大声で言った。

言われた亮が自分が悪かったと思ってしまっほどの、逆切れぶりであった。

「今のは亮が悪い」

「亮が悪いな」

「ああ、亮が悪い」

小路、川島、夏山が亮に言ったところで、納得いかないながらも亮は東に渋々謝った。

「いや、すまん」

「ちっ、これだから、運がよかつただけのやつは」

謝る亮に東が悪態をつきながら、どかっと座る。さすがに亮もイ

ラつときた。他三人も、東の態度に、このお調子者め、といった顔を向けている。

「けどな、亮。もう本当に無理なのか？」

川島が空気を変える様に亮に向って期待の混じった顔を向ける。

「ああ、無理だって。話しかける機会なんかもう無いんだし」

亮がバツサリと否定する。

「そつだろつなあ……………」

夏山がしみじみと首を振る。

「じゃあ、もし機会があったら、頼むぞ！」

東がさっきまでの怒りの表情はどこへやら、懲りずに亮に言つ。

亮はげんなりした顔で言つた。

「話す機会があったとしても、だ！ いきなりお前ら連れて一緒にお話ししましょうって言えるほどの仲になれるかどうか考えるよ」

「そつだな……………」

「まあ、たしかにな……………」

これには、川島、夏山は同意せざるを得なかった。

しかし、まだ諦めない馬鹿、東が勢いよく言つ。

「それじゃあ、もし仮にそんな仲になれたら頼むぞ!！」

亮は、東のしつこさに呆れた。

「なれるかよ……」

もしかしたら、それぐらいの仲ではあるかも、でも、さすがにそこまでは自惚れか？ と、考えた亮だが、そんな事態は間違いなく目立ってしまうので、避けたかった。

「いいか、頼んだぞ!！」

尚もしつこく、迫りながら念を押す東に亮は両手を上げた。お手上げである。

「わかったって!！」

「嘘ついたら、ここにいる全員と絶交だからな! 約束だぞ!！」

「絶交って……、小学生か、お前は!？」

亮がすかさず突っ込みを入れる。

ため息をつきながら、夏山が亮に言う。

「もういいじゃないか、それぐらい約束してやれよ、亮」

亮もため息をついて言った。

「わかった、約束するから!！」

亮の言葉に満足したのか、東は笑って食事を始めた。

その様子を見た亮は、隣の小路にだけ聞こえるように愚痴った。

「そんな奇跡を待つより、自分で声かけたほうが早くないか？」

小路は笑って、同じ様に亮にだけ聞こえる声で言った。

「それができればな。でも、それほど奇跡のようには俺は思わないけどな」

亮は一瞬驚きを表し、すぐに聞き返す。

「どつという意味だ？」

「どつもこつもそのままだ。それに、あいつの勘はよく当たるみたいだし」

そう言いながら小路は笑って、後の亮の問いには一切答えなかった。

第十四話 無念（前書き）

第十四話 無念

「月曜での食堂のことは噂になっていたよ」

梓が自分の弁当を食べながら笑いかける。

「なんで、噂になってしまっかな……、俺は噂の的になるような人間じゃないってのに。どんな風に噂になっていた？」

「逆切れされた男が、逆切れした男に謝ったと」

亮はパンを食べながら、不貞腐れた。

ここはお昼の屋上である。

この場にいるのは先で話していた梓、亮、恵梨花、咲である。

最低でも一週間は顔を合わせず、自分の気持ちが冷めるのを待つつもりであった亮だが、会わなくても目を瞑れば恵梨花の優しい笑顔、楽しい笑顔、嬉しそうな笑顔が浮かび、二日間会わなかったのに、冷めるどころか、熱くなっているような気がした亮は、自身の初恋を持て余していた。

それに昼休み前と帰りの前には恵梨花と梓が交互にメールを送って誘ってくるので、それを断るのに罪悪感も感じ、そのせいかより一層気持ちが熱くなっているような気がした亮は、ついにこの水曜日の昼休み前に恵梨花からの誘いのメールに自分自身の決意に白旗をあげる気持ちで了承の返事を送った。

携帯でメールを確認した時に名前を見ただけで、可愛く感じてしまう。

たいして絵文字で飾っているわけでもないのに、何の変哲もない文章なのに恵梨花からだとか可愛く感じてしまう。

一週間は顔を合わせるつもりはなかった決意は、三日目でもろくも崩れさり、自分の決意は、意思はこんなに弱かっただろうか、自問自答しながら屋上へ登る亮の背中には、恋愛初心者特有の哀愁が漂っていた。

そして、今に至り、梓と会話をしている。

「君は周りの友達も面白いのが揃っているんじゃないか？」

亮は首をかしげ、斜め上を見るようにして言った。

「まあ、あいつらは面白いんじゃないかな？ アホばっかりのような気がするが。それと『も』は余計だ」

亮がそう言うと、咲が亮の袖を引っ張った。咲が亮に話しかけたり、亮も進んで咲に話しかけたりすることはなかったため、亮は目を丸くして咲を見る。

目が合うと、咲は亮の顔を指さした。つられて意味がわからないながらも、亮は自分で自分を指さし、困惑の表情を浮かべた。

「えーっと、何だ？」

梓は咲が亮にしたことに驚きを浮かべつつも、それを顔に出さず亮に笑いかけた。

「君『も』面白いと言いたいらしい」

「はあ！？　そ、そうか……？」

亮が訳がわからないながらも、咲に確認するように窺うと、咲は首を横に振る。それを見た亮は咲から目を離さず、呟くように聞く。

「……腹黒眼鏡、違うらしいぞ」

亮が言うと、咲が吹き出し、梓の眉がピクつと動いた。

「君……、まさか今のは私に向けて言ったのか？」

「え？　ああ、いや、すまん。忘れてくれ、つい出てしまったただだ」

梓は険しかった顔を、さらに険しくする。

「そうか。私が君の中でどのように呼ばれてるのか、今ハッキリしたな。覚えておけよ」

「いや、すまん。本当に許してくれ」

亮は自分の失言が相当マズいことに、今さら気付いた。焦りを浮かべた表情で梓に謝罪をこうと、咲がクスクスと笑った。

梓と亮は二人揃って目を丸くし、今まで黙って俯いていた恵梨花も顔を上げて、驚きの声を出した。

「咲が笑ったー！　やっぱり、咲は笑った時が一番可愛いー！」

そう言いながら恵梨花が咲に抱きついた。抱きつかれた咲は、抵抗せずに恵梨花の抱擁を受けている。それを見た亮は咲が羨ましく

なったが、おくびにも顔に出さなかった。そこで梓が気を取り直すように亮に言う。

「咲の笑顔に免じて、さっきのは許してやる。次からは気をつけるんだな」

「お、おう……。で、さっきのはどういう意味だったんだ？」

亮は内心で咲に大きく感謝しながらも、さきほどの咲の首振りの意味を梓に問うた。

「さっきのは、君のほうが面白いと言ってるんだと思っよ」

梓は考えもせずに行った。亮はそんな梓に感心する。

「本当か？ よく、わかるな。今ので」

梓は肩をすくめた。

「一年も付き合ってればね。咲の表情を読むのは恵梨花が一番上手いけど。上手いだけでなく早かった」

「へえ〜」

亮は本気で恵梨花と梓の二人に感心した。それと同時に、三人の仲の良さの一端を垣間見たような気がした。

そこで梓が苛立たしげに、亮を見る。

「しかし、悔しいな」

「何がだ？」

亮は梓の表情を見て、自分はまた何か失言をしただろうかと焦った。

「咲が初めてあんな風に笑うのを私たちに見せるのは、二週間はかかったんだ。それなのに君は一週間だ」

「いや、それはあなたたちがいるからだろう。俺一人じゃ見せることもなかったんじゃないか？」

亮は、自分の失言が原因でないことがわかって、内心ほっとしながらも、思ったことを口にする。すると、梓は首を横に振った。

「違うな。あの子は、あんな風に笑うところを私たち以外の人の前ではめつたに見せない。男子の前では特にだ」

「へえ？ どういうことだ？」

亮はとにかく、自分は珍しいものを見た、という認識だけではできなかった。

梓は肩を竦める。

「君のことを気に入ったんじゃないか？ 私の見る限り、初めてだな。男を気にいる咲は」

亮は首を傾げて梓に聞いた。

「深い意味はないよな？」

「ない。あくまで、男友達としてだ」

梓が、キツパリと断言する。

それを聞いても亮は、納得しかねた。なぜ、自分を気に入ったのか。

「でも、何でだ？」

「さあ……、いや、何となくはわかるかもしれないが、話すつもりはないから。気にするな」

「ふうん？ あんたは、わかってるのか？ 俺にはサツパリだが」

「なんとなくな。ハッキリしてないから、言わない」

「そうかい」

亮はため息を吐いて、それ以上聞くのをやめた。そんな様子の亮に、梓は自分の弁当箱を片づけながら口を開いた。

「それより何で、さっきから恵梨花と話さないんだ？ 目も合わせないし。恵梨花もどうしてさっきから、全然口を開かないんだ？」

梓に声をかけられた二人は、同時にビクッと動いた。

そう、この二人は屋上で顔を合わせても、互いにすぐに目を逸らし、チラッと見ては目が合うと、すぐに目を逸らす。それを二人で何度も繰り返し返している。そんな様子だから当然のように、一度も会話をしていない。恵梨花に至っては、口を開くことを忘れていたようだった。咲が笑うまでは。

目に見えて動揺した二人を、梓は笑みが零れるのを抑えながら、落ち着いた表情で見る。

声をかけられた二人の中で、先に声を上げたのは恵梨花だった。何でもない表情を作ろうとしているが、赤くなっているところで失敗していた。

「そ、そんなこと、な、な、ないわよ。ね、ねえ？」

さらに口調に動揺が大きく現れていたが、亮も恵梨花も相手の動揺に気付いた様子はなかった。

「お、おう、ま、まっただ。は、腹黒眼鏡、変なことをいうな」

動揺した亮はまたもや失言がでてしまい、梓の眉がまたもやピクッと動いた。が、亮はそれに気付いた様子は無かった。

鋭く亮を見る梓だが、亮は自分が見られていることに気付かない様子だ。梓はため息を吐いた。いつも目をあわせようとすると、不思議なことに先にこちらを見ている亮が、自分の視線にまったく気付かない。

（まさか、初恋同士……？ 恵梨花は初恋なのは知っているけど、彼も……？）

梓は今日の亮と恵梨花の二人の様子を見て、亮が恵梨花に惚れたことはハッキリとわかったが、ならば、なぜ、昨日も一昨日も誘いを断ったのか分からなかった。だが、それは彼が初恋で悩んだからだろうか、見当をつけた。

少し腑に落ちない気もするが、今のところ予定通り進んでいるなと、内心でほくそ笑んだ。

思考をやめ目を二人に戻すと、またもや同じことになっていた。目が合うと慌てて逸らし、チラッと見てそれが合うと、また視線を逸らす。お互い無言で。

まだやっていたのか、と内心でため息を吐いた梓は、そういえば今の恵梨花をまだ、写真も動画も撮っていなかったことを思い出し、携帯を取り出して、ムービーを録画し始めた。今回は恵梨花だけでなく、二人が入る角度も撮っておいた。撮りながら、梓は咲に目をやり、目の合った咲は梓の意向を正確に汲み取り、自分の携帯で写

真を撮り始めた。

普段の亮ならカメラを向けられたら、背後であろうと気づくが、今は目の前の初恋の女の子に注意が全て向かい、気付けなかった。

恵梨花も目の前にいる初恋の男に注意が全て向かっていたため、気付けなかった。

梓が五分ほど動画を撮り終わると、携帯を片づけ、亮に声をかける。

「桜木君、もうすぐ昼休みが終わるが、一緒に降りるのでなければ、もう降りたほうがいいんじゃないか？」

亮は、はっとなって腕時計を確認して、慌てて立ち上がる。

「そうだな。じゃあ、先に降りるな」

亮の言葉に今度は恵梨花がはっとなって、慌てて声をかけた。

「桜木君！」

亮は思わずといった感じで恵梨花と目が合い、すぐに視線を下に向けて聞いた。

「どうした？」

恵梨花も下を向きながら、一気に言った。

「今日、一緒に帰ってほしいんだけど……」

恵梨花の言葉を聞いて目を向けると、顔を赤くして俯きながら言う恵梨花が余りに可愛く見えて、思わず『いいよ』と即答しそうになった亮は慌てて自分の口を抑え、出かかった言葉を飲みこんだ。

何も言わない亮に恵梨花が顔を上げながら、おずおずと言う。自然と上目遣いになった。

「今日もダメかな……？」

心臓を鷲掴みされそんな気持ちになった亮は、慌てて恵梨花から目を離して一気に言う。

「悪い、バイトに急いで行かないといけないから。じゃあ、またな」

そう言って、振り返らず走って屋上から出て行った。

亮を見送った恵梨花は大きいため息を吐いた。そんな恵梨花の肩に梓は手を置き、優しく声をかけた。

「また誘えばいいんだから」

「そうだけど……、やっと会えたと思ったら、全然喋れなかったし……はあ」

「またも大きいため息を吐く恵梨花に梓が言う。

「それは恵梨花が頑張らないと。すぐに同じように話せるようになるよ」

恵梨花が首を振った。

「どうなのかな……、桜木君もなんか様子が変わったような気がするし」

梓はその恵梨花の一言で、恵梨花が亮の気持ちに気付いていないことを悟った。恐らく亮も恵梨花の気持ちに気付いていないように思える（これは多少無理もない、学校一のアイドルが自分を好きだ

と思うような男は、よっぽどその手の勘がいいか、自惚れが強いからだ。

どうしたものかと、今度は梓が大きいため息を吐いた。

第十五話 コンプレックス？

「大丈夫か？ 亮」

小路が席に座ったまま後ろの席の亮に振り返り、心配そうな声を上げた。

「大丈夫、ちょっと寝不足なだけだ」

亮は、心配ないと言わんばかりに手を振りながら答えた。

しかし、亮の目の下にはハッキリとしたクマができている。

「いや、大丈夫って、言っただって……。ちゃんと寝たのか？ 昨日の夜中何かしてたのか」

小路の質問に亮は多少げっそりした顔で答える。

「ああ、バイトでな。ちょっとトチってしまっただけで、そのせいで遅くなった」

「そのせいでって……、本当、労働基準法を無視したバイト先みたいだな。最近毎晩じゃないか？ 何時に帰れたんだ？」

「3時」

小路は目を丸くして驚く。

「亮……、やめたらどうだ、そんなバイト先」

「俺も常々考えてる……しかし、お前は聞かないな」

小路が不思議そうに亮に尋ねる。

「何をだ？」

「高校生をそんな時間まで働かせるなんて、どんなバイト先だ。どんな仕事なんだって」

小路は肩を竦めた。

「聞いても答えないだろ、お前」

亮は少し笑って答える。

「まあな」

小路はやっぱりといった感じでまたも肩を竦める。

「なら、聞いてもしょうがない。話すなら聞くけど」

「まあ、いつか話すかもな」

小路は疑わしげに言う。

「本当かよ」

今度は亮が笑って肩を竦める。

「さあ？」

そう言った亮と小路の目が合つと、二人して笑う。

亮が小路に笑いながら言った。

「まあ、詮索しないお前はいいやつだよ」

「どうだか」

そう言つと小路は前を向いて、自分の机の上に置いてあつた雑誌を読み始める。

それを見た亮はポケットから携帯を取り出し、小さくため息を吐いた。

さすがに働きすぎかな、とぼんやり考える。仕事を多く入れて恵梨花のことを考えないようにしている亮だが、仕事から帰るとやっぱり考えてしまい、そのせいで睡眠時間が短くなる。

先日など何故惚れてしまったのか、亮は悩み始めた。土曜日の徹夜仕事の明け方、日曜の夜にも仕事があるにも関わらず、問題の改善のために眠たい中、考え始めた。何故惚れたのかわかれば気持ちを落ち着かせ、冷めるのにも役立つのでは、と考えたからである。

顔に惹かれたこともあるにはあるが、それだけでは惚れないだろうと亮は考えていた。何しろ惚れないように注意して心に壁を置いていたのだから。

まず考えたのは、いつから自分の気持ちが変わったのか。それについては間違いなく、前の日曜にデートになってしまったデートをした日だ。では、その日のいつから自分は変わったのか、と考えると、恐らく弁当の前後だと確信をもって言える。なんせ、もう食べることができないと思っていた『母の味に似ている弁当』を食べた時に、不覚にも涙を流してしまったからだ。

あの時、間違いなく心の何かの壁が崩されたのだろうと亮は推測する。では、その時か？ と自問自答すれば、少し違う気がする。あの後抱きしめてしまった時？ それも違う気がする。膝枕で寝てしまった時？ そこまで考えた亮は、そもそも何故あんなに早く寝てしまったのか亮は不思議に思った。首を傾げて、その日のことを反芻する。

膝枕をしてもらい、そこで横になり、向きを決めてから目を瞑ると、感触に感動すると共に妙に落ち着いたような気がする。何故、あんなに落ち着けたのか？ ………………考えてもわからず、目を瞑り、

頭をガシガシと搔いていると、恵梨花の色んな顔が流れてきた。

困っている顔、微笑んでいる顔、笑っている顔、吹き出して涙目になりながら笑っている顔など、それが流れることと、それと同時に胸が高鳴ることを止めることが出来なかった。そして、恵梨花が優しげに微笑んでいる顔が流れた時、亮は心臓がドクンと跳ねた様に感じた。

亮は困惑して自分の心臓を抑えるように手を当てて、もう一度恵梨花の優しげに微笑んでいる顔を思い浮かべると、またもや同じ様に心臓が跳ねた。これか、と思い優しげに微笑んでいる恵梨花をゆつくりと思い浮かべる。すると、自分の心臓が「正解！ 正解！」と言わんばかりに高鳴り始めたので、ああ、この顔を見た時に惚れてしまったんだな、と亮はいつから惚れてしまったかについては結論づけた。

一つ考えていたことに答えが出た亮は安堵の息を吐いたが、それがわかってどうなるのか？ と一瞬悩んだが、ようはこの顔を見たり、思い浮かべた時に、心臓が跳ねないようになれば少しは気持ちが悪く落ち着くのでは？ と考え、慣れるためにもドキドキしながら恵梨花のその顔を思い浮かべた。

目を閉じ思い浮かべること30秒ほどすると亮は首を傾げた。

（誰かに似ている……………？ いや、顔でなく雰囲気がか……………？）

それから悩むこと数秒もすると亮は、はつと目を開けた。

「母さんの雰囲気似てるのか……………！」

一人呟いた亮は、すぐに何もかも分かってしまった。

つまるところ、亮は母の味に似ている料理、俗に言う『おふくろの味』で心の壁を崩され、母に似た雰囲気から心を落ち着かされ、母に似た雰囲気ですく微笑まれたことにより惚れてしまったのだと。

それがわかった瞬間、亮ははっとなって立ち上がり

「俺はマザコンじゃないぞ!!!」

と、言いながら壁に頭をガンガンとぶつけたのは誰にも内緒である。

とにかく、亮は恵梨花に惚れてしまった原因はよく分かってしまった。分かりたくなかったが。

分かってしまった後はさきほどと同じく、慣れたらどうにかなるのでは、と思い恵梨花の顔を思い浮かべると、今度は全ての恵梨花の顔に母の雰囲気が纏い始め、胸の高鳴りがひどくなり、亮は自分の隠れたマザコン具合に絶望した。断じて自分はマザコンではないと何度も言い聞かせてみたが、恵梨花への気持ちはまったく冷める気配がなく、冷ます努力は諦めた。恵梨花と母の顔がまったく似ていないことだけがこの時の亮にとっての救いだった。

結果的に悩んで、睡眠時間を減らした揚句、気持ちが強くなる、という最悪な事態を招いてしまい、亮は不貞寝した。

その日のことを思い出した亮は悪循環だな、と自嘲した。

先週は会ったのは結局、決意から三日目の水曜と金曜の昼休みだけだった。しかし、今週の亮は頑張ったほうである。

今週は、月、火、水、と誘いを断っている。火曜は帰りだけ、水曜は昼休みだけの誘いだったが、全て断っている。

驚いたのは好きな子の誘いを断るのにこれほどエネルギーが必要なのかと思つた亮である。

昼休みの誘いはバイトで疲れているから教室で寝ている、帰りはバイトが早くあるから、と断っている。嘘はついてないので、まだ気は楽であるが。

一層のこと、告白して振られた方がいいかも、なんて考えるが、そうなればほぼ確実に笑顔が見られなくなるんじゃないかと考えると、それまでできなくなる。なら、昼休みだけに応じれば、問題ないように思うが、昼休みに応じて、帰りを一緒にするのを断り続けるのも難しいので、両方断るようになっている亮である。

不思議に思うのは、何故ここまで自分を誘うのかといったところだったが、今日の木曜は帰りのHRを目前にして誘いのメールが一度も来なかった。断らずにすむと、ほつとすると同時に、恵梨花からのメールが一度もこなかったのは、先週から考えると、今日が初めてなので、亮が思つてた以上に寂しさが来た。そして、そんな自分はどこまで自分勝手なのかと腹が立った。

ため息を吐くようにして亮は腹立ちを抑えると、今日は裏道からゆっくり帰ろう、と考える。誘いが無かったから、三人で裏道を通つて帰つてくることもないだろうし（三人で帰るなら表通りから帰るだろうと亮は考えている）、三人でなくとも、恵梨花には一人で裏道を通るな、と前に言っている。亮の言うことをどれだけ聞く気があるのかは亮には分からないが。

亮のバイト先も、今の亮を見てさすがに休ませようと考えたらしく、今日は休みである。いつも亮のヒマを見つけては、無理矢理仕事を入れてくるバイト先が休みをくれるなんて、今の自分の様子はよほどひどく見えるらしい、と亮はまた自嘲した。

今の状況が一体どうなればいいのか、恋愛初心者であり、少し事情のある亮にはまったく分からなかった。
わかるのは一緒に帰ることだけは、避けたいことだった。

少し時間を遡って昼休みの屋上で恵梨花、梓、咲の三人が食事を終えて、話をしていた。

そこで恵梨花が浮かぬ顔でポツリと言う。

「避けられてるのかな……」

梓が困った顔になる。

「バイトと、それで疲れているからって言うてたんでしょ？」
「うん、でも今週ずっとだよ……」
恵梨花がため息を吐きながら言うと、咲が小さい声で言った。
「でも、本当に疲れているみたいだった」

恵梨花は咲がどうしてそんなことを知っているのかに驚いた。

「本当？　なんで知っているの？」

「今日、廊下でたまたま見た。目にクマがあった」

恵梨花は咲の言葉に少し安堵の顔を見せたが、同時に亮のことが心配になった。

「そんなに忙しいバイトしてるのかな？　大丈夫かな？」

梓が思い出しながら言う。

「そういえば彼、バイト先のことは聞かないでくれ、って言ってたね。恵梨花はあれから何も聞いてない？」

恵梨花は首を横に振る。

「聞いてない。質問もしてないし」

梓は眉を顰めて空中を睨むように言う。

「今度、その辺も聞かないとね。ゆっくりと」

恵梨花は梓のそんな様子を見て、冷や汗が流れる。

「ほ、ほどほどにね……」

梓は一瞬ニヒルに笑うと、すぐに顔を戻して言った。

「しかし、面白くないな……、教室に来るなと言ってるから、こち

らから誘っているのに、疲れているからと言って、こつも断り続けるなんて」

恵梨花は少し落ち込みながら頷いた。

「そうね、今日の帰りも断られるのかな……………」

梓は恵梨花の元気が無いことに胸が痛んだが、同時にやはり亮のことを不思議に思う。亮が恵梨花に惚れたのは恐らく間違いないだろうに、何故こつも恵梨花に会おうとしないのか。亮が惚れるところまでは梓の予定通りに進んでいるが、そこからの展開は完全に予定外である。亮が常々言っているように、目立ちたくないから帰りを断ったり、友人から怪しまれないために昼休みの誘いを断っていると考えることができるが、どうも、それだけでは無いような気がする。

目立ちたくないがために、誘いを断っているというだけなら、目立ちたくない、と考えるのが無駄とも思えるぐらい、三人で堂々と亮に近付いて、目立たせることも梓は一つの計画としておいてあるが、今のまま亮の考えがハッキリしないと、それを使っても意味がない。（亮が知ったら悲鳴を上げるだろう）

梓は腕を組んでしばらく考えると、顔を上げて言った。

「会って話してみよう」

第十五話 コンプレックス？（後書き）

第十六話 ランクアップ(前書き)

第十六話 ランクアップ

亮は裏道に入った瞬間に、回れ右をしそうになった。

角を曲がる前から曲がった先に誰かいるのには気付いたが、曲がって顔を見た瞬間に目を丸くした。

恵梨花、梓、咲が亮を見て近づいてくる。梓がニッと笑って亮に言う。

「久しぶりだね」

亮は少し大き目のため息を吐いた。

「張ってたのか？ それに久しぶりって言うほどでもないだろ」

亮の問いに梓は少し顔を顰める。

「人聞きの悪いことを言うな。待っていたただけだ」

ものは言い様だな、と亮が思っていると、恵梨花が少し控えめに窺うように亮に問いかける。

「一緒に帰っていい？」

亮は頭が痛くなってきた。一緒に帰ることを避けたいと頑張っていたことが、否、と言えない状況でやってきた。

普通、この状況で断ることは余りにも不自然だし、何よりそれなりに親しい関係である。そして亮は最近わかったことだが、恵梨花の頼みを直に断るのはメールで断る時以上のエネルギーを必要とすることがわかった。

自分ではここは断れないことを悟った亮は内心で大きく諦めのた

め息を吐き、苦笑して答えた。

「いいよ」

恵梨花は喜びよりも、安堵の息が大きくでた様子である。

（先週は笑ってたのに、今回はこの表情か……）

亮はここでようやく、自分の断りが恵梨花を傷つけていたことに気づき、自己嫌悪した。それと同時に自分が思ってた以上に、恵梨花が自分を親しく思っているのでは、と思いい、自己嫌悪に入りながらも、胸が高鳴るのを止めることができなかった。

避けたい事態が来てしまったが、亮が一番危惧している可能性に当たることなど、百に一つだと亮は思っている。しかし、百に一つといえども、そういうのはいつも突然やって来るものだと思はれ、亮は考えているため、全てを避けようとした。

だが、こうなってしまったら、もう目の前の初恋の女の子との帰宅を楽しんでしまおうと、亮は驚くべき早さで気持ちを切り替えた。

「悪かったな。ずっと誘ってもらったのに、断ってて」

亮は申し訳なさそうに恵梨花に言う。

「いいよ、顔見たら本当に疲れてるんだって、わかったし」

恵梨花は亮の言葉に慌てて手を振って応えた。

「ああ、これが」

亮は恵梨花の言葉に苦笑しながら、自分の目の下のクマを指差す。

「うん。ねえ、体大丈夫なの？」

恵梨花は心から心配そうな声で亮に聞く。亮は恵梨花の心配が伝

わり、罪悪感がくるのを感じながらも、それを顔に出さず笑って手を振った。

「大丈夫、ただの寝不足だし。今日はバイトも休みでゆっくり寝れるから」

そう聞いた恵梨花は、ホツとした顔を見せ、優しげに微笑んだ。

「そう。じゃあ、今日はゆっくり休んでね」

(こうして見ると、やっぱり似てるな……)

亮は恵梨花の微笑んだ顔を見て、日曜日二人でいた時のように心臓が跳ねたような感覚をまたも感じ、慌てて自分の胸の動きを治めようと手を当て、恵梨花から目を逸らそうとしたが、できず、恵梨花をジッと見てしまう。

突然胸に手をあてた亮を恵梨花が不思議そうに見上げると、そんな亮と目が合い、恵梨花も胸が高鳴るのを感じ、亮と目を逸らすことができなくなる。自然と見つめ合うような形になり、数秒が経過したころ、梓が気だるげに声を上げた。

「あー、君たち」

亮と恵梨花の二人は同時にビクっとなって梓に振り向く。

「な、なんだ？」

「な、なに？」

梓はうんざりと白けた目で、二人に言った。

「私たちもいることを忘れないでもらいたい」

そう言いながら、梓は咲を引つ張った。

咲はコクコクと頷きながら、二人を見ている。

「な、何言ってるの、忘れたりするわけないじゃない」

「あ、ああ、忘れてなんかないぞ」

顔を真っ赤にして言う二人に、自分の心配はなんだったのかと、梓は額に手をあてた。しかし、今日の自分のすべきことは変わらな
いと、梓は自分に言い聞かせ、帰り道に手をやって言った。

「とにかく、こんな所でいつまでも立ってないで、帰ろうじゃないか」

「そ、そうだな」

「そうね、帰りましょう」

二人は相変わらず顔が真っ赤のままだが、梓に同意して二人並んで歩きだした。

四人で歩くこと数分がし経過し、変な空気が無くなったところに梓が恵梨花に言う。

「恵梨花、咲と一緒にちょっとだけ、前を歩いててくれる？」

亮は、またか、と警戒心を強める。

恵梨花が梓に振り返ると、訝しげな声で言う。

「また？」

梓は涼しげな顔で応える。

「心配しなくても、またスカート捲ったりしないから」

梓の言葉に恵梨花は顔を赤くすると、首だけ素早く動かして亮と目を合わせようとした。すると亮は恵梨花の素早さに負けない勢いで、空中に目を逸らした。

亮は空中に目を逸らしたところで、鼻に手を抑えそうになった。以前は「可愛い女の子のパンチラ」であるが、今その記憶は「好きな女の子のパンチラ」にランクアップされている。初恋、美少女というオプシヨンつきで。好きになったのを自覚してからは、思い出すのは何だか失礼な、背徳感のようなものがあつたので思い出すことは無かった（忘れようとしてもしなかったが）。

梓の一言は自然と、その瞬間を亮に思い出させてしまい、興奮で鼻血が出るかと思ってしまうのだ。

絶対に目を合わせようとしないうちに、赤い顔ながらも若干目を陰しくした恵梨花は、次に梓を睨んだ。

「ちょっと、桜木君と二人で話したいだけだから」

睨まれた梓は、涼しげな顔をまったく崩さず恵梨花に言う。

恵梨花はそんな梓に口を尖らせ、咲と腕を組んで、何も言わず前に歩いていった。

梓はそんな恵梨花の様子がおかしかったのか、微笑んで後姿を見

守った。

亮は恵梨花が歩いていくと、安堵の息を吐きながら、ようやく目を下におろした。すると同時に梓が声をかける。

「鎮まったか？」

「……………何がだ」

梓はわざとらしく驚いたような顔を見せながら亮に言った。

「好きな女の子のパンチラを思い出して興奮してたんじゃないの？」

亮は思わず額に手を当てて、唸るように声を出した。

「……………あんた、もうちょっと言い方を……………、待て、『好きな』って何だ？」

亮は途中で梓に振り返りながら言う。

梓は表情を変えずに返す。

「バレてないと思っっているなら、隠したいなら、もうちょっと自重したらどうだ？」

「……………何のことだ？」

「これ以上、私に惚けても意味がないことぐらい分かってもいいんじゃないか？」

亮は苦々しげな顔のため息を吐いた。

「心配しなくても、私から恵梨花に言うつもりはない」

亮は梓を見た。梓も亮を見た。

「……で、何だ、話って」

亮が先に口を開いた。

梓は視線を逸らさず、真っすぐ亮を見て言った。

「何故、恵梨花を避ける？」

亮は一瞬だけ詰まったが、すぐに言い返す。

「……………避けてなんか……………」

亮の言葉を途中で梓が遮った。

「嘘だな」

「なんでだ？ それにバイトで疲れているからと言っただろ。それで避けてるなんて……………」

「違うな」

「……………何が違う？」

「バイトで疲れているから会えない、じゃ、ないだろ。会えない理由のため、避ける理由のために、バイトを入れたんじゃないのか？」

この女はエスパーか、と亮は思った。

「……………ただの憶測だろ。第一、何で俺が避ける必要がある？」

目立ちたくないからあんたたちに会わない、なんてもう言うつもり

はもうないぜ？」

梓は真面目な顔で頷く。

「それはわかっている。君は約束したことはそうそう変えない男だと、私は思っているから」

亮は苦笑した。

「けっこうな高評価受けてる気がするが……、で、何で俺があなたたちを避けるなんて思っただ？」

「私たち、じゃない。恵梨花を避けていると言っている」

「……何でだ？」

「君は恵梨花が好きだろう？ 今さら否定するなんてやめてくれよ、話が進まないからな」

亮は頭をガシガシと掻いて、無言で肯定を示す。

「君は恐らく日曜に、恵梨花と二人で出掛けた日か、その後に恵梨花を意識するようになったのだと私は思っている。何しろ、水曜にはハッキリと顔にでていたからな」

亮はまたも、思わず額に手を当て唸るように言う。

「……そんなにハッキリでてたか……？」

「出たな。あれで気付かないのは、よほど鈍いか、周りが見えてないからだ」

梓はまったく表情を崩さず、言い切った。

亮は額に手を当てたまま、上空を仰いだ。

「マジか……」

梓が少し笑いながら言う。

「心配しなくても恵梨花は気づいていない。咲は気づいているが」

亮はホっとしつつ、疑問を覚えた。

「もしかして、鈍いのか？」

梓は首を振って言った。

「いや、あの時は両方だったんだろう」

「ふうん？」

亮は少し腑に落ちないような声を出した。

梓は亮に聞こえないよう小さな声で、ボソッと「その時は君もだが」、と言ったが、亮は聞こえたようである。

「今、何て？」

「いや、なんでもない。それで水曜から君が恵梨花のことを意識したのはわかった。けど、そこからはわからない」

「何がだ？」

「普通、好きになった女の子に誘われたら、何としてもその子に会いに行くのが普通だろう。月曜、火曜と、男の付き合いを優先して恵梨花に会わなかったのは分かる。木曜日も昼に会わなかったのは二日連続を避けたように捉えることが出来るから分かるが、帰りの

誘いを全部断るのはやっぱりおかしいじゃないか」

「だから、バイトがあっただんたって……」

「仮にそれが本当だとしよう。しかしな、先週と今週で君はどれだけの数、好きな女の子からの誘いを断った？ その一点だけでも十分おかしいし、断ったなら断ったで、罪悪感からでも好きな女の子に会いたさでも昼休みの始まった直後や、終わる直前に少しでも顔を出して、詫びの一言があってもおかしくないとは思わないか？」

「……………」

「君は教室に来てほしくないと云ったな、私たちはそれを守ってる。君に会うには、または、君が恵梨花に会うには、昼休みか帰り、休みの日しかないじゃないか。どう考えても君の想いと、やっていることには矛盾があるんだ。それを『避ける』と考えてもおかしくないと思うが、どうだろうか？」

そう言つと梓は亮に向き直り、亮を見上げた。亮は自分を見上げる梓からの視線を逸らさないようにした。

「もう一度聞く。何故、恵梨花を避ける？」

亮は何を言つたらいいのか、わからなくなった。嘘をつくのは簡単だが、今目の前にいる女の子に嘘をつくのは憚れた。だから言つて本当のことを話して、そんなことにはならないと言われても、その言葉を信じることができず、そんなことぐらいで、と言われるのも嫌だった。

恐らく目の前の女の子は、そんなことにはならない、と言つたろう。しかし、それを言われても『その時の自分』を見てどうなるだろうか、と考えると、恐怖が走る。その恐怖を考えた時、亮の目が

わずかに揺れたのを梓は見逃さなかった。

「君が何故、避けるのかは事情があるんだろう。どんな事情かはわからないが、私に話して私と一緒に解決出来るなら話して欲しい。君が避け続けると、親友がさらに傷つく。私はこれ以上、あの子が悲しむのを見たくない。君が話せず、これからも恵梨花を避けると言うなら、もう会わないと言ってやってくれ。あの子のことが好きで、あの子のためを思うなら。中途半端な態度をとられると、一番傷つくのは恵梨花なんだ」

亮は梓が言い終わった後、ぼんやりと自分の自分勝手さについて考えていたが、途中ではっとして、梓を見て言った。

「おい、今のあなたの言い方からすると、まるで……」

亮が言い終わる前に恵梨花が大きめの声で亮を呼びながら咲と走って戻ってきた。

亮の元に寄った恵梨花が息を切らしながら焦ったように亮に言う。

「桜木君！ あそこの広場で喧嘩してる！ うちの学校の人と他の学校の人が！」

亮は背中に冷や汗が流れるのを感じた。百に一つが来たのかと。

第十七話 名前

「人数は？」

亮は恵梨花が走ってきた方向に小走りで行きながら恵梨花に聞く。

「うちの学校の人が三人、他の学校の人が六人」

亮は恵梨花の言葉を聞いて、ピタッと足を止めた。

「三人？ 六人？ ……全部男か？」

突然足を止めた亮に驚きながらも恵梨花は亮の問いに答える。

「う、うん。全員男だけど……」

亮はあからさまに安堵の顔になり、手をひらひらさせながら恵梨花に言う。

「なんだ。じゃあ、ほっとけ、ほっとけ」

亮の言葉に亮以外の顔が、は？ と口を開けて固まった。

「ちょ、ちょっと待って。助けてあげないの？」

恵梨花は現場を見て焦っていたせいか、立ち直りが早く亮に聞い

た。

亮は当然と言わんばかりの顔で頷く。

「ああ、男だろ？ 男なら自分の喧嘩ぐらい自分で面倒みるもんだ」
「で、でも人数が倍違うんだよ！」

「そこは喧嘩を売った、買った、の責任かな。第一、三人が負けるわけでもないんじゃないか？」

「ううん、うちの学校の三人は、三人ともやられてたよ、囲まれて」
「！」

「ふうん？ じゃあ、もう終わるんじゃないか？」

三人が囲まれてやられていると聞いても顔色一つ変えない亮に、
恵梨花は業を煮やし、亮の腕を掴んで引っ張った。

「と、とにかく、早く来てよ！」

「わかったって」

広場の隅っこのほうで、六人に囲まれて三人が倒れ、囲んでいる六人は楽しげに、三人に殴る、蹴るの暴行を繰り返している。

「やられてるな〜」

広場が見える物陰で亮が呑気な声を出した。そんな亮に恵梨花は掴んだままの亮の腕を揺らして訴える。

「お願い、助けてあげてよ！」

恵梨花の言葉に亮は困った顔を見せ、言い含めようと口を開こう

とすると、梓が先に口を開いた。

「恵梨花！ あの三人、うちのクラス！」

「え！？」

恵梨花は梓の声に驚きの言葉を上げ、すぐに広場を見直した。

「本当だ！ 岡本君に、吉田君に、工藤君！」

梓と咲は知り合いが血を流しているのが見えて気分が悪くなったように、少し顔が青褪めている。

「うん。この前の朝に、恵梨花にいきなり告白してきた三人ね」

亮は梓の言葉に余計に助ける必要性が無くなったな、と思った。

恵梨花は亮の腕を掴む力を強める。

「ねえ、お願い！ 助けてあげて！ 私たちのクラスメイトなの！」

亮は困ったように恵梨花を見て言った。

「もう終わるだろ。それから病院にでも連れて行ってやったらいいんじゃないか？」

「でも、そんなの早いほうがいいじゃない！」

「大丈夫だろ。あの程度の怪我、一、二週間、安静にしていれば治るって」

恵梨花は亮の余りの冷たい言葉に愕然とした。恵梨花の知ってる亮はとても優しい人なのだが、今、自分の目の前にいる人は、喧嘩で怪我している人間を助けようとしなない。自分が好きになった人は

こんな冷たい人だったろうか、と恵梨花がショックを受けていると梓が声を上げる。

「桜木君、君が何故助けようとしなのかは分からないが、私からも頼む。助けてやってくれないか？」

亮は梓の言葉に呆れたように言った。

「あんたら……さつきから、俺一人で六人に喧嘩売って言ってる自覚あるか？」

恵梨花と梓は今さらながら、自分たちが亮にとってどれだけ危険で、身勝手なことを頼んでいるか悟った。

「そうだけど！ 桜木君なら大丈夫なんじゃないの？ 私を助けてくれた時みたいに……」

「あなたの時は三人、今回は六人。単純計算で二倍だが、苦労は二倍どころじゃないぞ」

亮が冷静に指摘すると恵梨花は詰まったが、梓が言う。

「いや、君なら大丈夫だと思う。たいした根拠はないが、君ならどうにかできると思うから、私も恵梨花もこうやって頼んでしまっているんだと思う」

恵梨花が梓の言葉に大きく頷いている、恵梨花の後を見れば咲も何度も頷いている。

亮はそんな無条件の信頼の目を投げられて、困った顔で頭をガシガシと搔いている。亮の様子を見て行きそうにないと考えた梓は、

自分が行くなら亮も来てくれるだろうと思ひ、広場に顔を向けて言った。

「じゃあ、私が行くから、君は後でもいいから来てくれ」

梓の言葉に亮は目を丸くして驚くと、梓の腕を掴んだ。

「馬鹿言つな。あんたに行かせられるか。あんたが行つてどうなる」

亮の言葉に梓は手を振り払おうとしながら、憤慨した顔になる。

「それでも、私はな……」

「合気道だろ？ でも、あんたの腕じゃ、一人か二人投げた後に、警戒されて捕まつて、人質みたいにされるのがオチだ」

梓が言おうとしたところで亮が遮り、梓は口を開いたまま固まったが、そこからなんとか疑問の声を出した。

「な、なんで、それを……」

亮は梓の問いには答えず手を離し、助けに行かない理由を話すために口を開こうとすると、恵梨花が亮の横を走って通りすぎようとしたので、ぎよつとして恵梨花の手を掴んだ。

「離して！ もう桜木君には、頼まないから！ 私がやめてもらうように、話してくる！」

恵梨花は顔を赤く、涙目になりながら亮を責めるように言った。

「あんたも馬鹿言つな。やめて頼んで言うこと聞いてくれる連中に

は見えねえだろ。また攫われちまうぞ」

「じゃあ、どうするって言うの！　どンドン怪我しているじゃない！」

「だからな……」

「もう、いいよ！　離して！！」

亮の油断なのか、好きな女の子の手のせいなのか。痛めないように弱く握っていた亮の手を恵梨花はどうにかして振り解いて走り出した。

自分が握っていた手が離されたことに驚きながら亮は恵梨花を呼び止めた。

「待て！　恵梨花！！」

『待て』という言葉に反応したのか、それとも亮の言葉自体に逆らえない響きがあったからか、それとも初めて好きな人が自分の名前を呼んだと思ったからか、ピタッと恵梨花が止まった。すかさず亮は恵梨花の手をとり、自身に引き寄せると苦々しげに言う。

「俺の目の前で、あんたが怪我するような事させてたまるかよ」

恵梨花は放心したように亮を見た。そんな恵梨花を見た亮は梓に振り返ると恵梨花を押しながら言った。

「梓、恵梨花をしっかりと掴んどけ。俺が行ってやるから三人で先に帰ってろ」

梓は一瞬呆気にとられた顔を見せたが、すぐに亮の言葉の意味に

気づいて、慌てて言った。

「ちょっとまで、一人で行く気なのか？ 一人じゃ無理だと……」

梓が言い切る前に亮が返す。

「俺は六人の相手が無理なんて一言も言ってないぞ」

「いや、しかし……」

亮は梓の言葉を遮った。

「いいから、先に帰れ。咲、恵梨花と梓、連れて帰ってくれ」

亮に目を向けられた咲はコク、と頷くと恵梨花と梓の手を掴んだ。亮は咲の行動を見ると、ふっと笑って咲の頭を撫で、咲の身長に合わせるように少し屈んで言った。

「よし、二人が絶対に俺のところに来ないようにしててくれ」

撫でられたのが気持ちよかったのか、目を細めていた咲は、亮の言葉を聞くと真剣な顔になって頷いた。

恵梨花と梓はそんな二人を目を丸くして見ていると、亮が恵梨花に振り向いた。

「恵梨花」

「はい！」

名を呼ばれて驚いた恵梨花は、先生に呼ばれた生徒のように返事をしてしまった。

亮が真剣な顔で言う。

「いいか。俺が行くから、待たずに、帰れ。帰ってくれ、いいか？」

恵梨花は妙に亮の言うことに逆らうことが出来なくなり、コクコクと頷いた。

「じゃあ、行ってくれ」

亮が言っても三人の足はなかなか動き出せなかった。そんな三人に亮は困ったような顔で言う。

「早く帰ってくれないと、あいつら助けないぞ」

その亮の言葉に三人は、はっとなって走り出した。走りながら、恵梨花は何度も亮に振り返った。

三人が走っていくのを見届けた亮は、伊達眼鏡を外して大きくため息を吐き、頭をガシガシと掻くと、喧嘩をしている集団、もとい、六人で三人を囲んでリンチをしている集団の前まで走り出した。

息も乱さず、リンチ現場の手前で足を止めた亮は集団に向かって静かに声を上げた。

「せむ、お前ら」

第十八話 願い（前書き）

第十八話 願い

亮に帰れと言われた三人は当然のように帰らず、広場が見渡せる別の物陰に少し息を荒くしながら隠れた。

「何で先に帰れって言ったと思う？」

梓が恵梨花に尋ねる。

「巻き込まないためかな。前に私を助けてくれた時も、手でだけどこかに行けって合図された」

恵梨花が答えると、梓は納得しかねない顔で言う。

「でも、それなら帰れって言わずに、その辺に隠れてるって言わない？」

「そうね……、なんでかな。なんにせよ、桜木君一人にほっといて帰れないよ。なんでか逆らえず頷いてしまったけど」

梓と咲が恵梨花の言葉に同意するように頷いた。

「桜木君、大丈夫かな？」

恵梨花が心配そうに言うと、梓は少し考えて言う。

「大丈夫……だと、思う。多分だけど、彼、あたしが思っている以上に強いよ。てこずるかもしれないけど……、多少の怪我はするか

もしれないけど……、大丈夫だと思う」

「……全然、大丈夫のように言ってるようには聞こえないけど。……ああ、お願い。大怪我とかしないで」

恵梨花がそう言いながら両手を組んで目を瞑っていると、咲が恵梨花の袖を掴んで広場を指さした。

恵梨花が目を向けると、亮が集団の目の前に立っている。

それを見た恵梨花は今更のように怖くなり、手が震え始めた。あやつて知っている人が多人数と対峙しているのを見ると、人数の差が恐ろしく見え、自分は焦っていたとはいえ、なんてことを頼んでしまったのだろうか、本当に今更ながらに実感し、顔が青褪めるのを感じた。なんで自分は彼を冷たいだなんて思ってしまったのか、彼は誰よりも冷静に状況を見ていただけなんだと今やっとわかった。梓をチラッと見ると、同じように顔が青褪め、恐らく自分と同じことを考えているのだろうかと思った。

唇が震える。願うのは彼が無傷で、自分に笑いかけること。それを願うには彼に頼んだことを考えると、あつかまし過ぎるかもしれないが、願わずにはいれなかった。

少なくとも、彼が倒れて動けなくなったら、何がなんでも助けに行く。そんな心構え気構えで恵梨花が見ていると、六人が殺気立って亮に向かって行くのが見え、恵梨花は悲鳴が出そうになるのを手で抑えた。

しかし、一分も経たずに、恵梨花は自分の口を抑えていた手を離し、女子高生にはあまりふさわしくない、間抜けな声を上げた。三人同時で。

「「「は?」「」」

恵梨花は先ほど見たものが信じられず、本当に自分が見たのは現実なのか、目を閉じて今見たものを瞼の奥で再現した。

亮が集団の前に立ち、声をかけると六人は振り返り、一斉に亮を睨んだ。

「なんだ、てめえ? こいつらの仲間か」

亮の一番手前にいる、茶髪のロングで頭が悪そうな顔をした男(亮の評価)が亮に言うと、亮は首を振った。

「違う。けど同じ学校のやつらでな。それぐらいで勘弁してやったらどうだ」

亮の言葉を聞いた六人は、下品な笑い声を上げると、六人のなかで一番奥にいる男が亮に言う。

「なんだ、仲間じゃないのに助けにきたのか? 随分格好いいじゃないか」

そう言うと、またも六人は一斉に笑う。なんで一緒になってこんな頭悪そうに笑うのか、と亮が考えていると、またも一番手前にいる男が口を開いた。

「本当、格好いいじゃないか。けど今、足はぶるって立っているのもしんどいんじゃないか？」

六人は、かつこいい、かつこいい、と馬鹿にしたように笑いながら、手を叩いている。

亮は、なんでこんな馬鹿の相手をしなくちゃいけないんだと、頭が痛くなりつつも、口を開いた。

「ほめてくれて、ありがとよ。ほめてくれたついでに、その三人もらっていったいいか」

亮は三人に目を向けて言うと、三人とも意識があったようで、ぽかんと、亮を見ている。

六人の顔が少し険しくなり、右にいる男が声を上げる。

「つまんねー、こいつ。この三人よりむかつく。あんまりビビっているようにも見えないし、やっちまおうぜ？」

六人はいやらしい笑みを浮かべると、口々に賛成の声を上げた。

亮は呆れた顔を隠そうともせず、言った。

「ちょっとまってよ。人がせつかく、平和的に口で交渉してやったの

に……どれだけ短気なんだ、お前ら？」

すると、六人は口々に怒りの声を上げた。

「なんだと、てめえ！！」

「なんで上から目線で言つてやがる！！」

「殺すぞ！！」

やっぱり交渉はこの手の人間には通用しないか、と亮は諦めのため息を大きく吐いた。馬鹿たちと話して、数分は経っているから三人が奇跡的に亮の言うことを聞いているなら、もうこちら辺にはいないはずである。帰っていると考えるのは、希望的観測もいいところだよな、と亮は考えなると、両手を上げた。

「悪かった、悪かった。馬鹿に馬鹿つて言う怒るのは当たり前だよな。言った俺も馬鹿だと思っし。ん……？ ああ、すまん。俺は短気つて言つたんだつたな。すまん、つい本音が出てしまつて」

お手上げのポーズで悪びれずに亮が言うと、六人のうち何人かは顔を赤くし、プルプル震えながら亮を睨みつけ、そのうちの一人が叫んだ。

「ブっ殺せ！！！！」

その言葉で、一斉に亮に向かってくる。

恵梨花のクラスメイトなら仕方がない、これ以上の怪我はしないようにしてやるか、と亮にしては男に対して最大級の優しさを三人浮かべると、六人に意識を向けた。

六人のうち、亮の一番手前の男が素人よろしく大きく手を振りかぶって、亮の蹴りの射程距離に入った瞬間、亮の右足刀が男には視認できない速度で男の腹に打たれ、倒れている三人にぶつからない軌道で亮から右斜め前に吹っ飛ぶ。

次に亮から右手前の男が、目の前の友人が吹っ飛んでいることを認識する前に、亮は吹っ飛んでいる男を追うような形で地面を蹴り、右手前にいた男の正面に立つと、今度はその男の背後に救出対象の三人がいないので、そのまま正面に男の腹を蹴って、男を蹴り飛ばした。

二人の男は一瞬だけ同時に宙に舞い、時間差で二人が地面に激突する。が、最初の男が地面に激突する前に、亮は地面を蹴り、六人の中で一番奥にいた男の斜め前に左足で着地すると、移動の勢いをそのまま消さず、右の回し蹴りで左横に蹴り飛ばした。

残る三人は一瞬、亮を見失っていたが、動いているものに目を向けると、既に三人が蹴られた後である。亮は焦らず残る三人の真ん中にいる男の前まで一足で動き、またもその勢いを消さずに正面蹴りをして男を蹴り飛ばした。

左右にいる男は亮が正面蹴りをした後に亮が目の前にいることを認識し、ぎよつとしながらも手を振りかぶるが、すかさず体勢を変えた亮が右にいる男を右回し蹴りで、左にいる男は、右回し蹴りをした蹴り足をそのまま背後に向ける後ろ蹴りで吹き飛んだ。

六人の男は地面で蹲ったり、倒れたりしながら悶絶している。亮が最初の蹴りを入れてから10秒と経っていない。気絶していないのは、亮が気絶せず、悶絶するように加減をしたためだ。

助けられた三人は揃ってぽかんと放心したような顔になっている。無理もない、自分達に暴行を加えていた男達を目の前で亮が瞬時に倒したのだから。それに倒した過程が三人には全く見えなかった。殴ったのか蹴ったのかも。亮がちよつと動いたと思えば、人が飛んでいる。一人目は亮が影になっていたから無理もないが、一人目が突然宙を舞ったかと思えば、気がつけば亮は自分達の横にいてすでに二人目を蹴り終えた後である。二人目が宙を舞ったのに気をとられた後に亮を見ると、その場にいると思つた亮はおらず、横から打撃音が聞こえ、振り向いたら、またもその場に亮はおらず、人が宙を舞っている。わけがわからないながらも、また打撃音が聞こえ、そちらに目を向けると、後ろ蹴りをした後の亮の姿だった。

つまり、二人を蹴り終えた姿を見たが、何をどうやって倒したのかはさっぱりわからず、気がついたら、自分達に暴行を加えていた六人は地面に蹲っていた。

六人が一人も気絶していないのを確認した亮は、間抜けな顔で自分を見ている救出対象の三人に目を向けると、アゴを帰り道に向けながら言った。

「行け」

「え？」

三人のうち比較的体格のいい男、そのおかげでダメージが少なかつたのだろう、その男が疑問の声を上げる。

「帰れって言うてんだ。後始末はしといてやるから」

体格のいい男、岡本は疑問だらけの表情を浮かべ、ふと亮の胸ポケットに目を向けると、自分と同じ学年を表す青色を確認して、大きく目を見開いた。

「お、同じ学年の人……？」

亮は岡本の反応に大きく舌打ちした。

「おい、学校で俺のことを探したりするなよ。今日のことを誰かに話したりもするな。助けてやったんだから、それぐらい言うこと聞くよな？」

亮がすごんで言うと、岡本は何度も頷く。

「よし、じゃあ、その二人連れて、さっさと帰れ」

「は、はい……お、おい、吉田、工藤、立てるか？」

三人は顔のあちこちに傷があり、吉田は歩くのは困難そうだが、幸い立つことができたので、肩を支え合いながら三人は歩き始めた。すると亮は歩き始めた三人の後姿に声をかける。

「おい、もうこの道歩くな。さっき言ったことも絶対守れよ」

三人は、すみません、ありがとうございます、と何度も頭をペコペコさせながら帰って行った。

三人が行くのを見届けると、六人のうちの一人のダメージが少し回復し、喋れるようになったらしく、亮をにらみつけた。

「てめえ、なにもんだ。一体何しやがった」

亮は吹き出しそうになった。

「なにもんもくそも、どう見てもただの高校生だろ。何をしたかと言ったら蹴っただけだ」

「へえ、そう言うか。さっきの三人も顔覚えてるし、お前も顔覚えたからな」

「……何が言いたい？」

「俺たちに復讐されるって言ってんだ、お前は。さっきの三人も今のうちに俺たちをもっと痛みつけたらどうだ？ けど、その分、復讐がもっともつとひどくなるがな！！ 八八八八八八！！！」

「一応聞いとくが……なんで、あの三人もだ？」

「そら、お前の仲間だからだろ！ 八八八八！」

「……最初に言っただけ、仲間じゃないと」

「そんなの関係あるか、お前の知り合いってだけで、俺たちに殴られるには十分の理由だ」

男が言うと、六人が全員声をあげて笑う。どうやら、全員笑えるだけのダメージは回復したようだ。

亮は、やっぱりこうなったか、と大きく息を吐くと、頭をガシガシと掻いた。

亮は目を閉じて願った。あの三人が帰っていることを。多分無理だろうとは思うが、せめてこの六人を沈めた瞬間には帰っていてくれと。

これからの自分が見られないために。

亮は願うのをやめると六人を見据え、目を閉じた。

すると六人の男たちが笑い始める。

「なんだ、もう俺たちの復讐が怖くなったのか」

「泣いて頼んだってやめねーよ」

「あと10人は増やしてお前とさっきの三人、追い込んでやるからな」

「アーハハハハハ」

亮はギリ、と奥歯を噛んだ。

くそ野郎ども

亮は無理矢理怒りを募らせた。

思い込め

亮は殺意を集めた。

こいつらは殺すべき人間だと

第十八話 願い（後書き）

亮が目を開けると、男たちは馬鹿笑いをやめ、目を見開いて亮を見た。

同時に、そんなはずなのに寒くて仕方がない、と自分の手で自分の体を抱いた。

なぜ、寒いと感じたのか。それは自分の体がどうしようもなく震えているから。

なぜ、震えているのか。なぜ、声がでないのか。それは寒いからだろうと、思い込もうとした。

なぜ、腰がひけているのか。他の理由を探そうとしたが、見つからない。

目の前の男が間違いなく自分たちを殺そうとしているのがわかること以外は。

亮は自身のもつ意識、気をほぼ全て殺意で固め、自身が出せる最大の殺気を出した。

殺気といえども、強すぎるそれは、近づくだけで、自分が殺されるイメージを湧かせるには十分なものである。

男たちは亮から吹き荒れる冷たい殺気に触れ、歯をガチガチと鳴らし、痛みも忘れて、立つこともできず、目を見開いて後ずさった。

亮は暗くて僅かな理性を残した目を、目の前の男に向けて声を上げた。

「おい」

「ひ、ひいい」

男は情けない声をあげて、亮から少しでも離れようと手を動かした後ずさるうとするが、余りに大きく震える手はうまく男の体を動かさない。

「俺に、何を、する、って？」

無理矢理呼び起こした殺意は亮の最後の理性を奪おうとする。亮は僅かな理性が殺意に押しつぶされないように意識を全力でむけているため、発する言葉が少しずつになってしまった。

亮に声をかけられた男も、かけられてない男もみな、自分が目の前の男に言った言葉に、自分の人生の中で間違いなく、一番の後悔を感じていた。

「す、す、す、すみません!!!」

声をかけられた男は震える口を無理矢理動かして、なんとか謝罪の言葉を作った。

謝られた亮は目の色を全く変えず、首を傾げる。

「なんで、謝る？ 俺と、三人に、復讐、するん、だろ？」

「し、しません！ ぜ、絶対に！ あ、あなたにも、三人にも!!!」

「なんで、しない？ ああ、そうか」

そう言つと亮は口を小さく広げ、男たちは息を飲んで亮の言葉に耳を澄ます。

「今、ここで、死ぬ、からか」

六人の男が自分は間違いなく、この男に殺されてしまふ、と感じた直後に、亮は右手で自分の頬を音がハッキリと聞こえるぐらいの強さで殴った。

男たちは、目を丸くして亮を見る。

亮は右手を下ろし、少し息を吐くと大きく吸い、もう一度吐くと男たちに口を開く。

「死にたくなかったら、すぐにこの場から失せろ。もう二度と俺の視界に入ろつとするな。あの三人にもだ」

先ほどより、理性が強まった目を向けられた六人は、氣力を振り絞つて立ち上がる。

返事が聞こえなかった亮は、六人を強く睨んだ。

「わかつたのか？」

六人は飛び上がるほどに驚き、口々に「すみません」「絶対にきません」「ありがとうございます」と言いながら、震える足を無理矢理動かして、走り去って行く。「ありがとうございます」の言葉があったのは、自身の命があることに對する感謝だ。

終わった、と思うと亮は、またも目を閉じ、空を見上げるように顔を上げた。

自然と湧き上がる殺意なら、対象を壊すために体を動かせば、大抵は治まる。しかし、脅すためだけに無理矢理呼び起こした殺意は、暴れる殺意とは反対に体を動かすことができないため、鎮めるのが難しい。

鎮まれ、静まれ

亮は目を閉じたまま上空を見上げた形で、ゆっくりと深呼吸と息吹きを繰り返し、殺気を元の気に循環させようとしていた。

殺気が半分ほど元の気に循環されたところで、背後に三人の女の子の気配を感じた。

（ああ、やっぱり、帰ってなかったか……………、これで終わるな）

殺気と怒りが残っているせいで、起こる悲しみが今のところは少ない。けど、後になってくるんだろうと思いつながら、振り返らず、目も開けず亮は口を開いた。

「先に、帰れと、言ったはずだ」

少しでも殺気を治めようと内に力を込めていたせいで、またも声が一瞬一瞬になってしまった。

亮は気配だけで、後ろの三人が一瞬、息を飲んだのがわかった。

「頼むだけ頼んで、自分だけ帰るなんて出来ないよ。怪我したようには見えなかったけど、大丈夫？」

亮は好きな女の子の声が聞こえ、後に起こることを考えて胸が痛んだ。

「まあ、俺も本気で帰ってくれるとは思わなかった。帰ってくれつ、てのは俺の願望だからな……」

亮の言葉には自嘲の響きがあった。

「桜木君、いい加減こっちを向いてくれないか。このままじゃ、謝罪も感謝もできない」

亮は梓の声を聞いて、そういえば、なんで恵梨花を避けるのかわからなかった。話が途中だったな、と思い出す。今なら隠す必要がなくなったな、と亮は思い、なら話すか、と考えながら亮はゆっくりと目を開けながら振り返った。

亮と目が合うと、目を見開いて自分を見る恵梨花、上半身が思わず引いてしまった梓、放心したように尻餅をついた咲を見た。

三者三様の驚きを見せているが、三人とも、共通して目に恐怖を宿している。

亮は治まらない殺気を鎮めながら、ゆっくりと梓に目を向けると、少し身じろぎした梓に口を開いた。

「なんで避けるのか聞いたな」

亮が口を開くと、恵梨花は訝しげな顔をして梓を見る。梓は少し

だがビクつとなると、震える喉を叱咤するようにして、小さく頷いた。

「え、ええ」

亮は自嘲的に笑い、両手を広げながら言った。

「これを避けたかったから。こんな事態に遭遇して、今みたいな俺を見られて、そして、今みたいにあんたたちが、恐怖の目で俺を見て、明日から俺を見ては目を逸らし、俺から逃げるようになるあんたたちを見たくなかったからだ。だから避けた」

亮は手を降ろすと同時に口を閉め、梓を見た。

「そ、そんな……」

梓は亮の言ったことにたいして、反論のために声を上げようとしたが、はたして本当に自分は彼の言葉に反論できるのだろうかと思いい、声が小さくなって消えた。彼が恵梨花を避ける理由は痛いほどわかった。自分の好きな人が、今の自分みたいに恐怖を宿した目で見られたくないだろう。だから彼は恵梨花を好きになると同時に、恵梨花と帰るのを避けた。危惧する事態に遭遇したくないために、一緒にいる時間を極力避けた。

亮は梓の様子に苦笑すると、困ったように言う。笑っている顔はいつもと同じなのに、まだも吹き荒れる冷たい殺気がその顔を冷たいイメージに変えてしまう。

「別にあんたたちを責めるつもりはない。そんな目で見られてしまうのは、俺のコントロールが悪いからだ。……けど、俺だってまだ

ガキだからな。少しは傷つくもんだ。特に……」

言いながら、亮は恵梨花を見る。目が合った恵梨花は真っ直ぐに亮を見た。

亮は続きを言わなかったが、梓と咲には亮が何を言いたいのかすぐにわかった。好きな女の子に怯えられるような目を向けられたくない、と。

亮は思いを振り切るようにして恵梨花から目を離すと、梓に目を合わせ、肩を竦めた。

「まあ、これで中途半端は終わりだ。終わらざるをえないだろ。明日からはもう会わないし連絡もしない。お互いそっちのほうがいいだろう？　じゃあな、気づけて帰れよ」

亮は言うだけ言うと振り返り、帰る道へと足を進めた。

（終わったな………屋上で四人でご飯食べるのはけっこう楽しかったんだけどな……まあ、いいか。元の生活に戻っただけだ。俺が自分の殺気をコントロールできないのが悪いんだから）

亮がゆっくり歩きながら自嘲していると、誰かが走ってくるのがわかった。その誰かは亮の横を過ぎて、亮の目の前に立った。

恵梨花が少し息を切らして立っている。

亮は自分の目の前に出てきた恵梨花に目を丸くして驚いた。

恵梨花はそんな亮を苛立たしげに見ると、右の手のひらを大きく振りかぶった。

「ぶざけないでよー！」

亮の左頬に恵梨花の張り手が見事に決まった。自分の殺気のせい
で、まともに動けないだろうと思っていた恵梨花が目の前まで走っ
てきたのに驚いていた亮は、避けることも、いなすことも忘れて、
ただ、恵梨花のビンタを受けた。

突然の恵梨花の行動に、亮が呆気にとられて恵梨花を見ると、恵
梨花は今度は左の手の平を振りかぶった。明らかに怒っているとわ
かる形相で。

「何がお互いのためよ!!！」

呆気にとられていた亮はまたも、動けなかった。右の頬に焼け付
くような痛みが走ったが、亮はまだ呆気にとられたままである。

恵梨花はまた、右手を振りかぶった。ここで亮はようやく、また
も自分が殴られるようだ気づいたが、なぜか動けなかった。

「人の気も知らないで!!！」

左頬に衝撃が走る。殴られていることに気づき、ようやく頭が回
り始めた亮は、目の前が少しチカチカしながらも、恵梨花に何か言
おうとしたが、またも左手を振りかぶっている恵梨花を見て、ぎよ
つとし、避けるか、いなすか考えたが、なぜかそのどちらもできな
かった。

「勝手な……!!！」

右頬に、またも焼け付くような痛みが走った。痛みが少しで
そうになるが、恵梨花をなだめようと目をむけると、またも、ぎよ
つとした。

恵梨花は少し身を屈め、右足を引いている。恵梨花が何をしよう

としているのか分かった亮は慌てて声をかける。

「ちょ、まっ……」

「こと言わないで!!!」

亮が口を開いている途中で、恵梨花の前蹴りがドスツという音とともに亮の腹部に直撃し、亮の口からゲホッと息がもれ、亮の体がかくの字に曲がる。避けることはできたが、今、下手に避けると恵梨花が転倒するかも、と思うと亮はそのまま蹴りを受けてしまった。(何で、スパッツはいてんだ……、じゃなくて!)

大きく足を上げた恵梨花のスカートは見事に翻り、その中身がハッキリ見えたが、前のように下着が見えなかったことに落胆を感じつつも、亮はこれ以上殴られるのは勘弁とばかりに、急いで声を上げた。

「ちょ、ちょっとまて!!」

「何よ!!」

亮の制止に、恵梨花は迫るように怒りの形相で怒鳴る。

亮は恵梨花の怒りに戸惑いつつも、さっきから不思議に思っていることを聞く。

「あ、あなた、俺が怖くないのか!??」

「怖かったわよ!!」

亮の問いに、当たり前でしょうと、いわんばかりの顔で恵梨花が怒鳴る。

恵梨花の返事に、亮は違和感を感じる。

「かった……？　じゃあ、今は……？」

「怒ってるのよー!!」

「ああ……、うん、そうだな」

迫力に押され、恵梨花の怒りを抑えるように両手をだしながら、たしかにそうだな、と亮は頷く。

「でも、それよりも！」

と、相変わらずの剣幕で言うと、恵梨花はブレザーのポケットに手をいれようとす。亮はその手の動きにつられるように恵梨花の左手を見ると、その手に血がついているのが見え、亮は慌てて恵梨花の手を掴んだ。

「あ、あんた、血がでてるじゃないか。いつ怪我したんだ！？　大丈夫か！？　もしかして、あいつら……」

亮は六人が逃げる時に恵梨花に何かしたのかと考え、またも怒りが湧きあがりそうになるが、恵梨花は呆れた顔を見せた。

「やっぱり、気づいてなかったの？　これ、桜木君の血だよ。ここ」

と、言いながら、亮の右頬を指差す。亮はつられて自分の頬を触ると、口から血が垂れたような後があるのがわかった。

「え？　……あ……、あん時か」

亮は自分の手についた血を見ながら、血が出ている原因を考えると、六人を脅している時に自分の理性が消えていくのを感じ、消える理性を戻すため、自分で自分の頬を殴ったことを思い出した。

恵梨花はそんな様子の亮に眉をしかめて言う。

「ちょっと上向いて、拭いたげるから」

「あ、ああ……」

亮が言われたとおりに見上げるようにすると、ポケットから取り出したハンカチで、亮の頬から首筋まで拭きだした。

目の先にいる恵梨花にドギマギしながらも、亮は恵梨花が拭き終わるまで、おとなしくした。

恵梨花は拭き終わると、ため息を吐いた。

「怪我したようには見えなかったのに、振り向いたら血が出てるから驚いて心配した」

「心配した……？」

亮は恵梨花の『心配した』という言葉の意味が、よくわからない、といった感じで、聞いた言葉をつぶやいた。そんな亮を恵梨花は訝しげにみる。

「心配したらおかしい？」

恵梨花の言っていることはおかしくないのだが、亮は何か腑に落ちない。

「い、いや……？ その割りにはかなり殴られた気が……いや何でもない。それより、さっきの俺は怖くなかったのか……？」

亮は心配された割に随分と殴られたことを指摘しようとするが、

かつてないほどの強さで睨まれ、言うのをやめた。

「怖かったわよ、一人で六人相手にしろって言ったからそれで怒って……、目を見た時は、一瞬、本気で殺されるのかと思った」

恵梨花は、しゅんとなりながらも亮の目を見て言った。

「じゃ、じゃあ、なんで……、その、怖かった俺を見て……、避けたく、会いたくなくならないのか？」

亮は自分で言いながら胸が痛くなり、声が震えそうになった。しかし、恵梨花は亮の言葉に目を丸くして言った。

「何言ってるの？ 怖いって言っても、それはただの桜木君の一面でしょ？」

「……一面？」

「そう、誰だつて怒って怖くなる時なんかあるじゃない」

「た、たしかにそうだけど……」

自分の出す殺気は別の人が怒った時とは、まるで違う。それをほんの一面だなんて言う、目の前の女の子が亮には信じられなかった。

「さっきの怖い桜木君が全部じゃないじゃない。私の知ってる桜木君は、面白くて、変なところがあって、そして一番の桜木君の本質は、私が怪我して血が流れているのかと思って、すぐに心配してくれた、そんな優しいところでしょ？」

「……………」

自分はそんな優しくないだろうと思いつつ、亮は黙って聞く。

「さっきの桜木君は確かに怖かったよ。でも、それよりも、血が流れているのを見て、私も心配した」

恵梨花は首を振りながら心配げに言う。亮は恵梨花の言っていることがようやく頭に入り始めたように感じた。

「怖かった……けど、……心配した……？」

亮は怖々と、窺うように恵梨花に聞く。

「そう。そして、今は怒ってる。……で、何！？ さっきの、もう会わないって!？」

恵梨花は亮の言葉に頷くと、突然、先ほどの怒りの剣幕そのまま、亮に詰め寄るように言う。

しかし、亮は先ほどの恵梨花の言葉が頭の中で何度も回り、思わずもう一度聞いた。

聞き直したのではなく、もう一度、聞いた。

「いや……え？ ……怖い……より、心配した……？」

「だから、そうだって、さっきから言ってるじゃない！ 会わないって何なの!？」

恵梨花は亮の問いに、苛立たしげに答え、返答次第では許さないとといった感じで亮に詰め寄る。

しかし、亮はそんな恵梨花の様子に焦ることもなく、ただマジマジと恵梨花を見ながら、恵梨花の言った言葉の意味をじっくりと考えていた。

怖かったけど、心配した。

怖いより、心配した。

それはつまり、亮の殺気に恐怖を感じたが、亮の血を見て、その恐怖は心配に塗りつぶされた。

自分が殺されるかも、と思ったが、それより血を流している目の前の男を心配した。

そういうことなんだと理解に及んだ亮は自分の額に手をあて、目

を睨り、上空を仰いだ。

(すごいな、この子は……………、なんて、優しい子だよ)

亮は自分が一番恐れていたことが、過ぎ去ったのではないかと思つた。目の前の女の子は明日になつても、自分を見て、怯えて目を逸らしたりしないだろうし、避けたりもしないだろう。自分の殺気は、目の前の女の子にとってはただの一面に過ぎない。目の前の女の子は自分の殺気など、ものともしない優しさをもっている。自分と会わないことにたいして、あれだけの怒りを見せた。明日からも今までと同じように自分を見るだろう。そういうことなのだと、亮はようやく理解した。

「ねえ！ 何で黙ってるの！？ 私の質問に答えなさい！！」

(またお母さんみたいになつてるな……………、そういえば母さんが怒った時の剣幕にも似てるかもな)

恵梨花の口調に、前に二人で一緒にいた日を思い出した。

黙って何も言わない亮に恵梨花が怒鳴り、じっと黙って険しい目で亮を見ていると、亮が小さく震え始めた。

恵梨花が首を傾げて亮を見ると、亮が、ぷ、と吹き出し、我慢できなといった顔で大声で笑い始めた。恵梨花は目を丸くして亮を見ると、すぐに怒りを再灯した。

「ちょっと、何で笑ってるのよ！！」

恵梨花が怒鳴っても亮の笑いは止まらない。体を苦しそうに、くの字に曲げて笑い始める。

恵梨花は困惑し始めた。

「……愛って、すごいね……」

亮と恵梨花の様子を呆気にとられて黙って見ていた梓は、首を振りながら隣で尻餅をついたままの咲に呟いた。

「うん……」

咲は小さな声だが、まったくそうだという感情が強く籠もっていた。

第十九話

>

>

(後書き)

サブタイトルの意味がわかった方はすごいです。

第二十話 音

亮の笑いはどんどん強くなっていくようで、立つことができなくなったのか、這い蹲り、地面に手を叩きながら呼吸が苦しそうに、でも心底楽しいといった感じで笑っている。

困惑していた恵梨花だが、もう捨て置けずに再び怒りの形相で怒鳴った。

「もう、何なのよ！ さっきから笑って!!！」

亮は目尻にある涙が、笑いすぎたために出ているのか、嬉しくて出ているのかわからなかった。笑いを治めようとしながら、立って目を拭い、恵梨花に向き直ると、呼吸を整えながら言う。

「ああ、すまん……、ちょ、ふ、ゴホッ、ゴホッ……うん、すまん」

ようやく息が整った亮を、恵梨花は眉を顰めて見上げる。

「いきなり笑って何？ 私のことバカにしてる？」

恵梨花が問い詰めるように言うと、一瞬きよとんとした亮だが、すぐに、ふ、と笑って言った。

「いいや、惚れ直したところだ」

「え？」

亮の言葉に今度は恵梨花がきよとんとなる。

亮が恵梨花のそんな顔を見てみると、見る見るうちに恵梨花の顔が真っ赤になり、恵梨花は困惑の声色で窺うように亮に聞く。

「そ、それって……？」

恵梨花の表情の変化を面白そうに眺めていた亮は、恵梨花の問いには答えず、恵梨花の頭にポンと一瞬だけ手をのせて言う。

「ちよつと、待っててくれ」

そう言った亮は、梓と咲を見て二人に届くよう少し大きめの声を上げる。

「そつちに行きたいんだけど、行っても大丈夫か？」

恵梨花は自分の問いに答えられない亮に困惑の様子を見せ、触られた頭を両手で確認するように触れながら、亮の言葉につられて梓と咲に目を向けると、梓と咲が力強く頷いているところを見た。

行っても大丈夫かと聞いたのは、亮が近づいても恐怖を覚えずにその場にいられるかの確認。亮は二人の了承を確認すると、ゆっくり二人に近づいてから、まだ尻餅をついている咲に手を伸ばした。

「怪我してないか？」

咲は一切の躊躇いなく亮の手をとり、首を振りながら立ち上がった。咲の答えに亮は、ほ、と安堵の息を小さく漏らすと、梓に向き直った。梓は不機嫌そうに眉を顰めて亮を見ている。亮はそんな梓を見てばつが悪そうな顔になり、頭を下げた。

「怖がらせて、悪かった」

梓はため息を吐くと、首を横に振った。

「君の謝罪を受ける前に、こちらからの謝罪を受け取ってくれ。こちらから頼んだ行動の結果なのだから私は君をあんな風に見るべきではなかった。すまない、許してくれ」

そう言つと、梓は頭を下げた。咲は亮の袖をつかんで見上げながら、ハッキリした声で亮に言った。

「ごめんなさい」

亮は二人の謝罪に困つた顔を見せ、頭を掻きながら言った。

「いや、あんな反応になるのは当然だと思うぞ。むしろ、あんなら反応が弱いと思つたぐらいだ。もっと怯えていても俺は驚いてなかった」

梓は頭を下げたまま頭を振つて言った。

「それでも、君を傷つけたことには変わりはない。どうか私の謝罪を受け取ってくれ」

咲は亮の袖を掴む力を強くしてひっぱり、亮を見上げる。亮は何とも言えないような顔になつて言う。

「受けるから、頭を上げてくれ。そして、もう一つ、俺は謝りたいことがある」

亮の言葉に梓は頭を上げて、亮の言葉の続きを待った。咲は袖を掴んだままである。

「勝手にあんたたちはこうなるんだと、決めつけ、俺の言い分のみで、全て終わろうとしたことを……」

亮はそう言いながら梓、咲の目を順番にゆっくりと見て言う。
「許してくれ」

咲は亮に向かって頷き、梓も頷いた。

「まったく言いたいこと言って、さっさと行こうとするからな……。まあ、私も言い返すこともできず、追いかけることができなかったから。おあいこにしてくれ」

亮は安堵の息を漏らすと、今度は怖々と聞いた。

「それで……。だ。今は、大丈夫か？ 俺と向き合っのが怖いとか……」

梓と咲は、きよとんとするとお互いを見やり、小さく笑う。

「君と恵梨花のやり取りを見ているうちにすっかり消えてしまったよ……。それに気づいていないのか？」

亮は梓の言葉に不思議そうに問い返す。

「何がだ？」

「さっき、向き合っていた時にはあった素人目でもわかる殺気が、

綺麗に消えているのを」

梓の言葉に亮は少し驚くと、自分の体の内を探り、たしかに殺気や殺意が綺麗に消えているのを確認した。あと30分は残っていると思っていたのに、何故、いつから、と考え始める亮に梓が言う。

「殺気がいつから消えたか、わかる？」

「いや、わからん」

亮の返答に梓は少し笑って言う。

「恵梨花に殴られた時だよ」

亮は目を丸くすると、つい、といった感じで自分の頬を触る。

「そう、あの時、パチン、という音とともに、綺麗に消えた。君が背中を見せても感じていた寒気が恵梨花のビンタの音と共に、一瞬で消え失せたよ。まるで、恵梨花のビンタがとても強い、暖かい風を運んだように」

亮はポカンと口を開け、咲を見ると、咲も同意するように、コクコクと頷く。亮は理解が及ぶと、またもや吹き出した。

「ハッ、ハハハハハッ……！ フッフッフ……、何て女だ……」

梓が悪戯っぽい顔で亮に聞く。

「また、惚れ直したか？」

亮は梓の言葉に目を丸くすると、ニヤッと笑った。

「そうだな」

亮が言うと、三人が三人とも同じような顔をして笑った。梓はいつものニヒルな笑いでなく、咲も小さいが声を上げて。

そんな三人を見ていた恵梨花は、黙って待っていていられず、三人に駆け寄る。

「ちよっと！ いつまで、私を放っておくつもり!?」

亮が笑いながら恵梨花に振り向く。

「悪い。あんたを放っておくつもりはなかったんだ。もうちよっとだけ待っててくれ」

亮の言葉に恵梨花は拗ねたような顔を見せると、すんと横を向いた。

梓が恵梨花の様子を見て微笑むと、ふと気づいて亮に口を開く。

「そついえば桜木君……」

声をかけられた亮は梓に振り向くと、梓の言葉を遮るように言う。

「亮でいい」

「え？」

突然の亮の言葉に梓が聞き直すと、亮が照れ臭そうに横を向くと肩を竦めて言った。

「友達はみんな俺のことは亮って呼ぶから……、亮でいい」

梓は亮の言葉に一瞬、目を丸くすると、すぐに悪戯っぽく言った。

「じゃあ、私達は君の友達になれたわけだ」

ままだも、亮は照れ臭そうに頬をポリポリと掻きながら言う。

「まあ……、あんた達が、明日からも俺を見て怯えて避けたりしなければな」

梓は少し呆れた様子を見せる。

「なんだ？ 君は、しょっちゅうあんな物騒な気配を撒き散らすつ

もりか？」

亮は慌てて否定する。

「まさか！ 学校の人間に見られたのは今回で二回目だ」

「二回目？ ああ……、だから……いや、いい。それより、また物騒な気配が出たら、恵梨花に止めてもらうことにするよ」

梓は少し思案するような声でそう言うと、最後は悪戯っぽく笑う。そんな梓に亮はチラッと恵梨花を見て、少し笑う。

「そうだな。まあ、ないようにするけど……。さっき何か言いかけなかったか？」

亮が途中で思い出したように言うと、梓が少し笑って言う。

「同じ話だよ。何で名前で呼んでくれない？」

「へ？」

亮が何の話かといった顔をしていると、恵梨花がはっとなり黙っていられないとばかりに亮に詰め寄る。

「そうよ！ さっき、名前で呼んでくれたのに、何で、また戻ってくるの!？」

恵梨花の言葉を聞いた亮は梓と目を合わせると、梓が頷いた。

「そうだ。さっき……、あの三人を助けに行く前に、急に人が変わったように、私達全員を名前で呼んでいたんだが……、覚えていないのか？」

梓の言葉を聞きながら、首を傾げていく亮に梓が問うと、亮が聞く。

「あんたたち三人の名前を？ 俺がか？」

亮に問われた三人は揃って頷くと、亮は首を傾げ、はっとなる。

「ああ……、俺って急いでいる時とか、咄嗟の時とか、そんな風になつてしまう時あるな……」

「じゃ、じゃあ、もう名前で呼んでくれないの？」

亮の言葉に恵梨花が焦つたように聞くと、亮は頭を横に振る。

「いいや。もう呼ばないとか、そんなんじゃないけど……」

「じゃあ、名前で呼んでよ！ いつも私のこと、あんたとかしか言わないじゃない！！」

恵梨花が必死の様子で言うと、亮は頬をポリポリと掻きながら言う。

「いや、別にいいんだけど……、癖だからな……」

梓がそんな亮に眉を顰めて言う。

「君は友達の名前を言わないつもりか？ 癖だか知らんが、一度言つたんだ。もうこれからはしっかりと名前で呼んでくれよ」

梓の言葉に恵梨花と咲がコクコクと頷いている。亮は肩を竦めた。

「わかった。気つけるよ」

恵梨花は、ぱあっと顔を明るくすると、すぐにはっとなつて亮に

聞く。

「ねえ、私は？」

「何が？」

「私も桜木君のこと、名前で呼んでいいの？ 友達として！」

恵梨花の言葉に亮は梓、咲と目を合わせると、三人は苦笑し、亮は首を振って恵梨花に拒否する。

「それは嫌だな」

恵梨花はショックを受けたような顔になり、亮に迫る。

「なんで！？ なんで私だけ名前で呼ぶの嫌なの！？」

亮は苦笑すると、恵梨花を抑えるように両手を出しながら言う。

「違う。名前は別にいい。嫌なのはそこじゃない」

「え？」

恵梨花は困惑の顔を見せる。そんな恵梨花を亮は困ったように見る。

「友達としてってところがだ」

「えっと……？ どういう……、私と友達が嫌なの！？」

恵梨花は更に困惑した様子を見せ、途中ではっとなって不安そうに亮に聞く。そんな恵梨花に亮は苦笑する。

梓と咲は面白そうに二人を見ている。

「まあ、そうだな……いや、嫌いってわけじゃない！」

亮の言葉から恵梨花の目に少しずつ涙が出始め、亮は慌てて言う

た。

「じゃあ、何……?」

恵梨花は瞳を潤ませながら、亮に尋ねる。

「それを説明する前に、先に言つときたいことがある」

「……?」

恵梨花は首を傾げる。

「さつき……もう会わないとか、避けるとか、連絡しない、って言つたことだけど……」

亮の言葉にはつとなつた恵梨花は遮るように言つ。

「そうよ！ 忘れてたわ！ 何なの、それ!? やっぱり私のこと嫌いなんじゃ……」

亮は首を横に振る。

「違う。無かつたことにしてくれ」

「え?」

「会わないとか、避けるとか、連絡しない、って言つたことを……、聞かなかつたことにしてくれないか?」

「いきなり、ああ言つたことを……?」

「そう」

「いいけど……でも、何であんなこと言つたの?」

恵梨花は不承不承ながらも、肯定したが、亮が何故あんなことを言つたのか、理由は聞いておきたかつた。恵梨花の問いに亮はばつが悪そうな顔をする。

「怖がらせたら……、明日から、目を逸らされたり、避けられたりするんだと思つて……、だから、もう会わないと言つた」

恵梨花は亮の言葉を聞くと、険しい顔で亮を睨んだ。

「……私、目を逸らすなんて、言つた?」

「いいや」

「避けるなんて、言つた?」

「いや」

「会いたくないなんて、一言でも言った？」
「言っていない」

三度、亮が恵梨花の問いに否定する。恵梨花は俯いて少し黙ると、一変して強い調子で言う。

「二度と、そんなこと決め付けて、勝手なこと言わないで!!」
「言わない……、許してくれ」

亮が謝罪すると、恵梨花は、怒りを抑えるように息を整えると、亮を見上げて言う。

「わかった……。それで、さっきの嫌ってどういう意味？」

恵梨花の目には隠しきれない不安があった。それを見た亮は苦笑する。

「結構、わかりやすく言っただつもりなんだけど……。友達としてつてのが嫌なだけ……。俺がな？」

恵梨花が眉を寄せて困惑したようになると、梓が恵梨花に声をかけた。

「恵梨花、さっき彼は何と言ってから、こっちに來たっけ？」

恵梨花は斜め上を見上げるように、少し考える様子を見せると、はつとなり、顔を赤くしながら俯いた。亮は恵梨花の変化が面白くて、からかうように言う。

「わかったか？」

恵梨花は『惚れ直した』の言葉を思い出したせいで真っ赤になり、

目線をキョロキョロと動かして眩く。

「えっと……、え？ でも………」

亮は目線を合わせない恵梨花の肩を掴んで自分に向かせると、恵梨花の目を覗き込むようにして言った。

「俺は、あんたが……恵梨花が好きなんだ」

恵梨花は目を丸くすると、赤かった顔を更に真っ赤にした。最初に名前を呼ばれたことに歓喜が湧き上がり、『好き』の言葉にどうしようもない幸福が押し寄せた。自分の今の幸せが信じられず、恵梨花は思わず自分の肩を掴んでいる亮の腕を掴んで尋ねる。

「ほ、本当に……？」

潤んだ瞳で上目遣いで自分を見る恵梨花に、う、と腰が砕けそうになる亮だが、真面目な顔で頷いた。

「本当に」

恵梨花の目に涙がぶわっと溢れて、涙が一筋、流れる。

亮は泣く恵梨花に困惑した。なぜか涙を手で追ってしまい、その涙が恵梨花の頬から落ちる前に受け止めた。亮は気がつけば、左手は恵梨花の肩に、右手は恵梨花の頬にあった。

恵梨花は自分の頬に亮の手があることに気づくと、少し驚きながらも、自分の手を亮の手に重ねて、亮を見上げた。

「私もあなたのことが好きです」

亮は、梓の言葉からまさかと思っていたことだが、恵梨花がハッキリ言ったことに目を丸くすると、真っ赤になり、どうしようもないほどの嬉しさが込み上げてくるのを感じた。

そして、もう目の前の女の子しか見えなくなり、恵梨花の目を見ていると、恵梨花も亮の目を見た。

亮は自分の心臓の音が恵梨花に聞こえるのでは、と思うほど脈打つを感じた。

第二十話 音（後書き）

前話のサブタイトル

<

<

は

心配 < 怒り < 恐怖

です。

でも、感想見るとこれ以外の答えも全然いけますね。

第二十一話 時(前書き)

第二十一話 時

二人が見つめ合うこと数秒、時が止まった二人の時間を元に戻したのは、やはりこの人だった。

「オッホン」

梓が片手を口に当てて、咳払いした。

二人は飛び上がりそうな勢いでビクっとなり、重ねていた手を慌てて離し、少し距離をとった。

梓は眉を寄せ、白けた目をしていた。携帯を構えながら。咲も携帯を構えていた。

「いいの？ キスシーンまで、撮っちゃって」

先ほどまで見つめ合っていた二人は、揃ってブンブンと首を横に振った。真っ赤な顔で。

亮は途中ではっとなって言う。

「い、いや、キスって!!」

「そ、そうよ!」

梓は呆れた顔を隠そうともせず、大きいため息を吐いた。

「そう？ 頬に手を当てて、今にもしそうだったけど？」
「う……！ ……」

亮は否定しきれず、言葉に詰まってしまふ。たしかに梓と咲がいなければ、してしまった感が強い。

恵梨花は亮を見て、顔を赤くしながら俯く。少し残念そうに。

「あ、あゝそういえばな。何であの三人を助けられないようにしていたか話していなかったよな？」

亮は本当に、本当に無理矢理にだが、話題の方向転換を試みた。

梓は呆れながらも亮に乗ってやった。

「そういえば何故、あそこまで助けないと行ってたんだ？」

「そうよね。桜木君ならすぐに助けに行ってくれと思うただけ
ど」

恵梨花もすかさず乗ったが、梓は恵梨花の同意の言葉を聞くと、
恵梨花の前に手を出して、待ったをかけた。

「恵梨花、違うんじゃない？」

「なに？」

恵梨花は梓の言葉に困惑の顔を見せる。

「なんで、桜木君って呼んでるの？」

「え？ あ……」

恵梨花は梓の指摘にすぐに顔を赤くして、気恥ずかしげに亮を見

る。すると亮は途中だった話があったことを思い出して、恥ずかしげに見返して言う。

「あー、そうだ……、で、友達として嫌だって言った意味……わかっただよな？」

恵梨花がコクコクと頷くと、亮は少し安堵の息を吐いた。

すると、梓は悪魔が誘うように微笑みながら、恵梨花に言う。

「じゃあ、恵梨花、呼び直そうか？」

「え………」

恵梨花は、そんな梓と気恥ずかしげにしている亮を交互に見た後、少し顔を赤くして俯き加減に亮を見上げる。

「りよ、亮……くん？」

「え？　くん？」

亮は名前で呼ばれる際はいつも呼び捨てで呼ばれているため、『くん』がつけられた驚きが名を呼ばれたことの羞恥を上回り、思わず聞き返した。

「え？　変……かな？」

亮の驚きに恵梨花が首を傾げると、亮は少し考える様子を見せるが、すぐに頷いて言う。

「いや……、まあ、いいか……。呼ばれ慣れてないから、くすぐったいだけかな？　……呼び捨てにしたい時は勝手にそうしていいか

ら

すると、恵梨花が少し嬉しそうに、恥ずかしそうに、期待の籠もった目で亮を見上げながら言う。

「じゃあ……、亮……くんって呼ぶね？」

「……………ああ……………いいよ……………」

(なんなんだ、この可愛い生き物は!!)

亮は無意識に恵梨花に了承し、心の中で絶叫し、悶え暴れそうになる体を抑えた。柱か壁があれば、頭をガンガンと叩きつけそうになる亮だった。

恵梨花は、ぱあつと顔を明るくして、亮に微笑む。恵梨花の嬉しそうな顔に亮もつられて、砕けそうになる腰を支えつつ微笑んだ。

「さて、亮くん。恵梨花から名を呼ばれたんだから、君からも恵梨花の名を呼ばないと」

恵梨花の羞恥など、どこへやらといった風に梓が、あっさり亮を名で呼びかける。亮は梓に素早く首を回して、間抜けな声を上げる。

「え？」

「え、じゃない。君もここで恵梨花の名を呼んで、お互いの呼び名を確認したらいい」

梓は無表情に言うが、亮は直感で梓が楽しんでいることがわかった。なので、梓をがっかりさせようと亮は考え、恵梨花を見るとアツサリと言った。

「恵梨花」

呼ばれた恵梨花はニツコリとなり、そんな恵梨花に癒された亮が梓を見ると、梓は少し眉を顰めて小さく舌打ちしたのを亮は見逃さず、思わずニヤリとした。

梓は忌々しげに亮に手を振った。

「話の続きだ」

「ああ……そうだな」

亮はまたも、脱線していた話を思い出した。

「まず、第一にだな……」

三人の美少女は真面目な顔で亮を見る。

「俺は男を助ける気は基本ない」

三人はどこかの力が抜けたような気がした。

梓は眉を顰め、恵梨花は不機嫌そうに亮を見る。咲に変化は見えない。

「変な誤解するなよ？ 女の子なら助けるが、下心があるからってわけでもないのは、わかるだろ？」

亮の言葉から三人の目に納得の色が浮かぶ。

たしかに亮に下心があつて、女の子、恵梨花を助けたのなら、梓も恵梨花も強く亮に関心をもたなかつただろう。

「まあ、そこは確かなようだね。恵梨花の例があるから」
「でも、どうして男の子だと助けないの？」

梓が頷くと、恵梨花が理由を聞く。

「まあ、第二の理由かな。男なら自分の喧嘩は自分で面倒見るべきだな、俺としては。さっきも言ったけど」

亮は肩を竦めながら言う。

「でも、いきなり絡まれたりした場合とか、可愛いそうじゃない？」

恵梨花が、さっきの三人が殴られた様子を思い出したのか、痛みを感じているように眉を顰めて亮に聞く。

「まあ、何もしてないのに絡まれたりしたら、たしかにそうだけでも、次からはそうならないように気をつけるようにはなるだろう？ それだけでもいい経験じゃないか」

「うーん、たしかにそうかもだけど、やっぱりかわいそうだよ……」

亮は苦笑する。

「ほんと、あんた……恵梨花は優しいよな。けど、その優しさは時に男を落ち込ませるだけの時だってあるんだぞ？」

亮が恵梨花の名を言い直したのは、『あんた』と言った瞬間に梓に睨まれ、恵梨花が不機嫌になり、咲が目の色を強くしてじっと見てきたからだ。

恵梨花が不思議そうな顔になると、梓が言う。

「散々、殴られた後に女の子に助けられるのは、やっぱりこたえるからか？」

「まあ、そつだ。あの時、俺が行かず、あんたたちが行って奇跡的に助けることができて、三人は泣きたくなるほど、情けない気分になるだろうな。まあ、それをバネにして頑張るのもアリだとは思うぜ、俺は」

恵梨花は眉を顰めて首を振る。

「男の子って……」

恵梨花が言うと、梓がクックと笑って頷く。

「たしかに、好きな女の子にあの場面で助けられたら相当だろうね」

梓の言葉に、亮がそついえばと思いつしながら、悩ましげに首を振る。

「やっぱり、恵梨花に行かせとけばよかったかな」

恵梨花が目を丸くする。

「ええ！？　なんで!？」

梓が笑いながら、亮を横目にして恵梨花に言う。

「わからないの、恵梨花？　恵梨花のこと好きな男だって聞いて妬いてるよ、亮くん」

梓の言葉を聞いた恵梨花はまたも目を丸くして亮を見ると、亮は頭をガシガシと掻きながら恵梨花から目を逸らした。

「それでだ。これが一番の理由なんだが……」

亮は気恥ずかしさを隠すように口を開くと、三人は耳を傾けた。

「今日、俺があいつらをぶちのめして、あいつらを助けたわけだけど……、それで終わると思うか？」

恵梨花と咲は不思議そうな顔になり、梓は、はっとなった。

「復讐に来るってことか？」

恵梨花と咲が梓の言葉に、同時にはっとなり、亮は頷いた。

「そう。俺があいつらを倒した。あの六人は俺に復讐したい。それだけでなく、あの六人からしたら俺の仲間とも思われる、あの三人も殴って復讐したい……」

「だから、君はほうっておくべきだと言ったのか？」

「そうだ。三人がやられた後なら、なおさらな。ほうっておいても終わる。バカな高校生といえども、殺しまではしないだろ。怪我してそれで終わり。あの三人が復讐なんて考えなければ、それで終わるんだ。あの六人だって、もうあの三人には関わろうとはしないだろ」

「亮くんが助けると、あの六人が復讐しに、この辺をうるつくから、終わらなくなるから？ だから助けようとしなかったの？」

恵梨花は亮の名を呼ぶ時は少し、恥ずかしげだったが、そのまま思ったことを口にした。亮は恵梨花から名を呼ばれた時は少し体が

熱くなった。梓に呼ばれてる時とはまるで違うな、と思いながら亮は頷く。

「そう。下手に介入すると、人数が増えてこの辺づろつくようになるぞ」

亮の言葉に恵梨花が、慌てた様子になる。

「え！？ じゃあ、大変じゃない！？ どうしよう!？」

咲は黙って亮を見ている。

梓は恵梨花の慌てている様子を落ち着いて見ている亮から何かを感じたのか、何も言わなかった。

亮は恵梨花の前に手をだして、落ち着くように言う。

「落ち着けて。下手に介入したらの話だ」

「え？」

亮の言葉に恵梨花は不思議そうになり、梓は少し安心した様子を見せた。

「君は下手に介入してないんだな？」

亮は少し決まり悪げに、頷いた。

「まあな……、助けに行くって言ったろ？ 中途半端にやってない」

梓が亮の言葉にはっとなった。

「だから、あの殺気か？」

梓の言葉で、恵梨花は少し悲しげな顔になり、咲は申し訳なさそうな目を見せた。

「まあな。復讐心を抑える方法としては、泣いて謝るほど徹底的にいたぶる体罰的な方法か……」

「脅しか」

梓が亮の言葉の先を言うと、亮は頷いた。

「そう。体罰的な方法は俺の趣味じゃない。何より、六人相手にそれもめんどくさい。加減を間違えたらやっぱり、復讐しにくるからな」

「だから、あの殺気で脅したのか？」

梓が頷きながら亮に聞く。

「ああ、あの連中の中じゃ、俺は殺人鬼に見えただろうよ」

亮が自嘲的に笑いながら言う。

そんな亮の顔を見た梓は、決まり悪げに目を落としそうになったが、それはしたらダメだと思い、すぐに顔を上げると、恵梨花が亮に向かい合い、真っ直ぐ亮の目を見ていた。恵梨花が優しい声色で亮に言う。

「亮くん、そんな風に自分を卑下しないで」

「いや、俺は……」

「嘘。……亮くん、もしかしてまだ自分が悪いことしたと思ってる

「？」

恵梨花の言葉に亮が困ったような顔を見せる。

「いや、だって、あんたら怖がらせてしまったし……」

亮が言うと、恵梨花の目の色が強くなったように光り、ため息を吐いた。

「女の子だし、怖がるのは当たり前だと思わない？ 亮くんだって、怖がらない人なんて、いないなんて思ってたない？」

「……まあ、そうだな……」

亮は少し頷くと、恵梨花は肩を竦めて言う。

「なら、いいじゃない」

「え？」

亮が聞き返すと、恵梨花は亮の頬に右手で優しく触れた。亮は目を丸くして恵梨花を見る。

「怖がると思ってたし、実際私達は怖かったよ？ でも今、私達は怖がってないよ？ 亮くんが思ってた通りのことがあったかもしれないけど、それは私達が亮くんに頼んでやってもらったこと。私達が頼んで、それで勝手に怖がっただけ。だから、亮くんは気にする必要ないよ」

恵梨花の言葉は何故だか、亮の胸にストンと落ち、何か綺麗に砕けたような気がした。砕けた先にとても暖かいものを残して。

亮が目だけを動かして梓を見ると、梓は決まり悪げに微笑み、咲はコクコクと頷いた。亮はふ、と微笑みながら少し困ったように恵梨花に言う。

「なんで、あんたは欲しい時に欲しい言葉をくれるかな」

恵梨花は少し目を丸くすると、悪戯っぽく微笑んで言った。

「彼女の特権？」

亮は目を丸くして、吹き出しそうになるのをこらえると、思わず目の前の恵梨花を抱きしめた。右手で後頭部の柔らかい髪に触れ、左手で腰を抱きかかえて。

恵梨花は一瞬目を丸くしたが、すぐに目を閉じて亮を抱きしめ返した。

亮は自分の鼻が恵梨花の柔らかい髪に触れ、そこからくる甘い匂いに酔いそうになりながらも、優しく、強く恵梨花を抱きしめた。

梓は亮が抱きしめた瞬間に後ろを向いた。シャッターチャンスだったが、さきほど亮に目を逸らしそうになったのを、これでチャラにするつもりで。

咲も隣にいる梓にならって後ろを向いた。

第二十二話 少年と少女達（前書き）

第二十二話 少年と少女達

亮が目を閉じて、恵梨花の温かさや柔らかさを感じていると、抱きしめている恵梨花がもぞもぞ動き、つま先立ちになる。亮が訝しげに目を開けようとする、頬にとんでもなく柔らかいものを感じた。

亮は一瞬何が起こったのかわからなかったが、すぐに何をされたのかわかった。恵梨花が自分の頬にキスをしたのだと。

亮が目を丸くして、恵梨花と目を合わせると、恵梨花はクスリと笑って悪戯っぽく言う。

「三人を助けてくれたお礼」

亮はまたも目を丸くすると、真っ赤になった。

恵梨花はそんな亮を見てクスクス笑う。

そんな恵梨花を見てこのまま抱きしめていると、自分が何をしでかすかわからない恐れがあった亮は、恵梨花から手を離すと、はっとなつて梓と咲のいる方を見る。

「どつしたの？」

急に亮が首を動かしたのを見て、恵梨花もつられて亮と同じ方を見ると、亮が慌てた理由がわかると同時にほっとする。

梓と咲が自分達に気をつかって後ろを向いている。ほつとすると同時に、恵梨花は驚愕した。梓がこんな自分にカメラを向けていないことに。

恵梨花に遠慮する梓ではないから、亮に遠慮した。または、いや、やっぱり、お礼のつもりなんだろうと恵梨花は思った。

恵梨花が亮を見ると、首を傾げ不思議そうにしながらも、安堵している様子である。亮は恵梨花と目が合うと苦笑して、梓、咲を見て口に手を当てた。

「ゴホン」

それを合図に梓、咲は二人揃って振り返る。

振り返った梓は何事もなかったように、無表情で亮に聞いた。

「さっきの話の続きだが、今日君がのした六人については、もう心配しなくていいんだな？」

亮は梓がからかってこないことに、多少面食らいながらも答えた。

「あ、ああ。あの三人も襲われる心配はないはずだ」

亮の言葉に三人の美少女がほつと息をつく。すると梓が、頭を下げる。

「君の話聞いた後じゃ、助ける必要はたしかになかったかもしれ
ないが、こちらが頼んで、それであの三人を助けてくれてありがと
う」

「亮くん、ありがとう」
「ありがとう」

恵梨花も咲も一緒に頭を下げる。

亮は少し気恥ずかしくなり、そっぽ向きながら手を振る。

「もう、いいよ。結果的にはむしろ、俺が一番得したと思ってるし」
亮は本気でそう思っている。殺気を出した自分を見ても、自分と一緒にいてくれる。

亮にはこれ以上無いほど嬉しいことなのに、更には初めて好きになった女の子の思いが通じ合っているのを確認できた。

ある意味人生最良の日であるとも思っている。そんな亮の気持ち が伝わったのか、三人の美少女達は微笑みながら頭を上げる。

すると、梓が表情を変えずに、目だけを恵梨花に向けて言う。

「そういえば恵梨花、恵梨花のファーストキスはちゃんとしたカメラで写真に収めるつもりなんだから、勝手にしちゃダメよ。もちろ ん、さつきしてないよね？」

梓の言葉を聞いた恵梨花は顔を真っ赤にして、梓に怒鳴る。

「そ、そんなの、知りません!! それにしてません!!」

梓は恵梨花の返事に何も言わず
「亮くんも、気をつけるように」
と、そう言いながら亮を指差す。

梓の言葉に、亮は思わず額に手を当て、唸りながら言う。

「……俺のファーストキスでもあるんだ。あんたの写真に入れるつもりはない」

「あんたじゃない、梓と呼ぶことになったはずでしょ？ ……やっぱり、君もファーストキスカ」

と、梓は目を光らせながら言う。

（さつき、からかってこなかったのは、単にワンクッション挟んで、こっちの油断を誘っただけか……）

先ほどまでのいい雰囲気はどこにいったのか。

さつき、何もからかわなかったのは、したか、してないかを確認するためにこちらを油断させたのかと亮が気づくと、さつきしとけばよかったと本気で亮は思った。

亮が頂垂れていると、咲が亮の近くまできて亮の袖を引っ張った。

「うん？ どうした？」

亮が聞くと、咲は自分で自分を何度も指差す。

亮が首を傾げて見ていると、表情とジェスチャーから何が言いたいのかわかった。

「ああ、名前で呼べって？」

咲がコクコクと頷く。

亮は目の前でコクコクと頷く咲を見て、リスなどの小動物みたいだな、と思いながらつい手が伸びて咲の頭を撫でた。

「咲。これでいいか？」

撫でられて、目を細め、気持ちよさそうにしている咲が亮の手が頭から離れないように、小さく頷く。

そんな咲を見て、亮は恵梨花からとはまた違う癒しを感じた。

二人の様子を恵梨花が目丸くして、亮に言う。

「なんで、そんなに咲と打ち解けてるの？」

「へ？」

亮が聞き返すと、恵梨花は亮から奪うように、咲を抱きしめながら言う。

「だって、亮くん、そんなに咲と話してないでしょ？ それなのに……、そういえばさつきも咲の頭撫でてたよね？」

なぜ、恵梨花が咲を抱きしめるのか、とはあまり考えずに、亮は恵梨花の問いについて、斜め上を見上げるようにして考える。

「……ああ、なんとなくだな。なんか親近感が湧く」

亮の言葉に恵梨花は、少し不思議そうな顔になると、さらに強く咲を抱きしめた。

咲は恵梨花にされるがままに、ウンウンと頷いている。梓はそん

な咲に言う。

「もしかして、咲もそう？」

咲が梓を見ると、咲はハッキリと頷く。

そんな咲を見た梓は亮に振り向いて言う。

「君も、もしかして咲の表情、読めてきてる？」

亮は肩を竦めた。

「なんとなく」

亮がそう言うと、梓と恵梨花は二人同時に肩を落とした。

亮は二人に向けて不思議そうに尋ねる。

「どうした？」

「ううん、いいことなんだけど……。私と梓は咲にもっと話しかけて、やっと表情読めて、それから話してくれるようになったの……。亮くん、ほんのちょっとしか咲と話してないから……」

「ああ、少し悔しいな……」

恵梨花の言葉を梓が繋げる。

亮は少し項垂れながら言う二人の様子を見て、頭を少し掻いた。

「まあ、いい。さあ、いい加減、私の名前も呼んだらどうだ？」

恵梨花より先に立ち直った梓が亮に、挑むように言う。

亮はここで躊躇すると、からかわれるだけだと分かっているので、躊躇なく言った。

「わかったって、梓」

梓は、ほんの一瞬だけ、目を丸くした。一瞬だけ。

亮はそれを見逃さず、ニヤッと笑った。

梓はそんな亮を少し睨みつけると、思い出したようにはっとして亮に聞く。

「ああ、そういえば、どうしてあたしが合気道をやっているとわかったんだ？」

梓がそう言うと、恵梨花が急に梓に振り向いて、マジマジと梓の顔を見る。

「どうしたの、恵梨花？」

恵梨花は慌てて、手を振った。

「な、なんでもないよ」

しかし、その顔は実に嬉しそうである。そんな恵梨花に首を傾げた梓は亮を見て、返事を促した。

亮は肩を竦めながら言う。

「んな、たいしたことじゃない。普段の体の動かし方だ」

梓の眉がピクと動く。

「それだけで……？」

「ああ、よく身のこなしが……って言うだろ？ それ」

そう言う亮に恵梨花が感嘆した様子で小さく首を振りながら呟く。

「すっごい……」

梓は大きくため息を吐く。

「まったく……六人を秒殺した次はそんなことを言う……。君は一体何者だ？」

亮は目を丸くすると笑って言う。

「さっきの六人もそんなこと言ってたな……。さっきと答えも同じだけど、どう見てもただの高校生だろ？」

三人の美少女は揃って首を横に振る。

「さすがにちょっと……」

「ここまで見て、そう見えるほうがどうかしている」「見えない」

恵梨花が少し申し訳なさそうに、梓が眉を顰めながら咲は無表情に言う。

「そんなこと言われてもな……」

亮は少し傷ついた顔を見せる。

「もう一度聞くぞ、君は何者だ」

梓が返答次第では許さんとはかりに亮に詰め寄る。亮は少し困った顔を見せると、はっとなり、あ、と咳いて梓を見る。

「強いて言うなら……」

「強いて言うなら？」

問い返す梓に亮はニヤッと笑うと、三人に言う。

「Bグループの少年、かな」

特Aグループの三人の美少女は揃って首を傾げた。

第二十三話 鼻（前書き）

第二十三話 鼻

「今日はずいぶんスッキリした顔してるな」

「そうか？」

朝のHR前、あくびをしていた亮に、前の席の小路が笑いかける。

「ああ、とりあえずクマはなくなったみたいだな。今日も眠そうだけど」

眠そうでも、スッキリした顔に見えるのは、よほど昨日までの自分の顔がひどかったのか、それか、もしかしたら自分が思っている以上に浮かれているのかもしれないな、と亮が考えていると、続けて小路が何気なく聞く。

「スッキリしてるのは、もしかしてお前が目立たないようにしていることと関係あるのか？」

「いや、そんなことは………、はあ!？」

思索していた亮は、小路の言葉を上の空で聞いていて、そのまま返事をしかけたが、小路の言葉が頭に沁み込むと同時に、小路が珍しいと思うほどの亮の素っ頓狂な声が上がった。

小路にそんなことを話した記憶はない。

むしろ、亮のそんな考えを知っているのは、この学校では一部を除けば、あの美少女三人だけである。

驚きで亮がマジマジと小路を見ると、小路は笑い出した。

「亮のそんな間抜けな顔は初めてみるな」

「失礼な……、いや、お前、なんで……」

知っているのか、と亮が聞こうとすると、小路が手を振りながら言う。

「そんなの、見てれば気付くだろ」

「いや、気づくって……、そんなの滅多にないはずだぞ」

亮は自分は演技は上手いと思っていないが、大根役者だとは思っていない。

そうそうは気づかれるようなことは、していないはずだと亮が思っている、小路が笑って言う。

「そうか？ 俺って色々なやつと話すけど、亮が一番面白いやつだと感じてな……」

「俺がか？」

亮が訝しげに聞くと、小路は笑って頷く。

「ああ、俺はな。クラスも二年続けて一緒だろ？ 仲も良くなつて色々話していると、色々気付いてくることもある。何で、体育の時間に死ぬほど手を抜いているように見えるかとか、そういえば、体力測定も適当に合わせてたろ？ 女の子とは、あまり長時間話さないし、話しても、馬鹿丁寧に話すしな。違うか？」

亮が呆気にとられて小路を見ていると、小路が肩を竦めて笑う。

「まあ、勝手にだが、俺はこの学校ではお前の一番の友達だと自認しているからな」

小路の言葉を聞いた亮は、吹き出して小路に言う。

「いや、すまん」

小路が眉を寄せる。

「なんで謝るんだ？」

「いや、お前のこと、見くびってた。許してくれ」

小路は目を丸くする。

「亮、そういうことは別に言わなくても、心の中で思っただけでいいんじゃないか？」

「まあ、そうかもな。ただ言わずにいれなかったんだよ、これからもよろしく、明」

と、亮は笑いながら、小路の名を呼び自分の拳をつきだす。意味が分かった明は笑って亮の拳に自分の拳をコッソリと当てながら言う。

「初めて俺の名前呼んだな」

「そうか？」

「ああ、亮ってお前とかしか、呼ばないだろ？」

今度は亮が笑って肩を竦める。

「気にするな、親友よ」

「そうするよ、親友」

明がヤレヤレといった感じで言う。

亮は、はっとなると声を低めて聞く。

「わかってると思うが、俺が目立ちたくないとか、誰にも言うなよ？ いや、その前に誰にも話してないよな？」

明が心外といった様子で亮に言う。

「お前が話してないようなことを勝手に俺がペラペラ話すと思うか？」

「そつだな、すまん」

亮は素直に謝った。

「いって、それに誰にも話さないから、心配するな」

明が笑って首を振る。

「サンキュー」

亮が片手をあげながら言うと、明がふと気付いたように言う。

「そついえば、なんで目立ちたくないんだ？」

亮は肩をまたも竦めて、偽りない本心を言った。

「静かに学校生活を送りたいだけだ」

「ふうん？ まあ、他にも気になるところはあるけど、今度にするか」

「理由としては、これ一本なんだがな」

「まあ、そういうことで、いいか」
「ああ、そうしとけ」

そう笑いながら亮が言うと、担任が教室に入ってきて、HRが始まった。

いいことってのは二日続けて起こるもんだな、と亮は思いながら、前で話す担任の話を聞いていたが、亮にとってのいいことはこの時に終わった。

一時間目の授業が終わり、チャイムの音が流れるのを聞きながら亮が席で伸びをしていると、教室の扉が開いた。教室の扉が開くのは何もおかしいことはない。誰かがトイレに行ったり、他のクラスの友達に会いに行ったりするからだ。おかしかったのは、扉が開いた瞬間、一瞬だが、しん、となったことだ。

亮は扉が開いた音から、何気なしに目を向けると、伸びをしたまま固まった。

扉を開けたのは一人である咲だった。

咲を見た亮のクラスメイトの女子は、何名か目を丸くしている。なぜなら、咲はいつも恵梨花か梓と一緒にいるイメージが強いので、

一人でいるのが珍しかった。次にこのクラスに何の用なのかと、首を傾げる。咲は手芸部だが、このクラスには手芸部の人間はいない。男子は、ひそひそと「やっぱり、山岡（咲の苗字）さんも可愛いよな」「あの二人といるから目立たないけど、こうして一人でいるのを見ると、本当に可愛いな」などと言いながら、色めきだっている。

亮は知らないが、恵梨花はテレビのアイドルより可愛い、天真爛漫な美少女。梓はその一種独特な雰囲気と眼鏡を外せば恵梨花に劣らない容貌とで、大和撫子な美少女。咲はその二人といながら、見劣りもなく、無表情ながら神秘的な美少女として密かに噂されている。

クラスの全員が、教室に入ってキョロキョロしている咲を静かに見ていると、何かに気付いたような咲は固まったままの亮の前まで歩いた。

ほんの二週間前に、恵梨花、梓、咲の三人が亮の元に訪れていたことを、亮が目立たないための努力でほとんど忘れていたクラスの人間は「なんで桜木（君）のところか？」「そういえば……前にも三人で桜木のところに……」などと呟きながら、咲と亮をじっくりと見ている。

亮と仲のいい三人、川島、夏山、東はぼかんと見ている。

「えっと……、どうしたんですか、え……山岡さん？」

亮は咲の苗字を思い出しながら、固まっていた口をなんとか動かした。

亮の言葉を聞いた咲は不満げな表情で首を横に振った。

その様子を見たクラスの間人は、やっぱり桜木に用事じゃないのか？ などと考えている。

亮の前の席にいる明だけが、少し楽しそうに亮と咲を見ている。

咲は俯いて不満げな顔で亮を睨む。俯いているせいで、自然と上目遣いだ。

亮は咲が何を考えているのかわかった。が、これはルール違反なのでは？ と亮は考えていたが、咲は睨むのをやめない。咲が亮を睨むこと10秒ほど、亮は白旗を上げるように両手を上げて、ため息を吐いた。上目遣いで睨まれたせいか、昨日から咲に感じている庇護欲、保護欲を多いに刺激され、亮は咲にとって辛いことをすることができなくなった。

「悪い、俺が悪かったって。だから睨むのやめてくれ、咲」

亮が背中に冷や汗を感じながら、困ったように言うと、咲は頷いてまたもキョロキョロとする。

何かを察した明は席から立つと、咲に言った。

「よかつたら座る？」

言われた咲は明を見上げると、小さく頭を下げて感謝を表し、亮の前の席の明の椅子に座って亮に向いあった。明は席を離れながら、その様子を楽しそうに見ている。

教室が一気にざわついた。「嘘だろ!？」と頭を抱えている男子

に、「桜木君って、女の子にあんな話し方するっけ?」「名前で呼ばなかった?」などと、驚きながらも、首を傾げている女子など、とにかく驚愕の表情で、咲に親密な様子で口をきいた亮を見ている。

亮は視線から逃れる方法は何かないかと、机に肘をついた両手を額に当てて唸っている。亮が唸っていると、咲がツンツンと、亮をつつき、亮は額に当てていた両手をおろし、ため息を吐いて小さな声で言った。

「で、どうしたんだ? こんなところまで来て」

亮の言葉を聞くと、咲はポン、と手を打ち、ポケットからトランプをだして、亮の前にかざした。トランプを見た亮は、訝しげに咲に聞く。

「えと……、トランプをしにきた……で、いいのか?」

亮が言うと、咲は頷いた。

「そ、そうか……」

亮の言葉には、とても、とても疲れたような響きを感じさせるものがあった。そんな亮の様子を気にすることなく、咲はケースから出したトランプを亮と自分の交互にテンポよく配り始めた。

クラス中の人間は、呆気にとられた様子で、亮と咲を見ている。

「……で、何やるんだ?」

配り終えたトランプを咲が手にもつと、亮が聞いた。

「ババぬき」

咲がポツリと呟くと、亮はそうか、とまとも疲れたように呟きながら、自分に配られたトランプを手にとろうとすると、教室中から驚愕の聲が上がって、亮は思わず少し体が斜めにずれるようにのけぞった。

「嘘!？」

「喋った!？」

「男の子相手に!？」

「初めて声を聞いた!！」

「あのお二方以外に声をだすなんて……」

亮は、みんなの驚きの声を聞いて目を丸くして咲を見たが、咲は何も気にした様子もなく、手札からダブっているカードを捨てている。

(そんなに、咲って声ださないのか？ お礼の時とかは普通に話して、最近は表情もわかるようになってきたから、あんまり気にしてなかったんだけど……、咲が話すことで、より注目を浴びるなんてさすがに予想できん……)

亮は自分の手札からダブっているカードを捨てながら、半ば諦めの境地でこの休み時間が早く終わることを願った。

亮が手札を整理すると、ジョーカーはなく、残すカードは6枚となった。と、すると、必然的に咲がジョーカーを含めた7枚のカードをもっていることになる。

「俺からひくぞ」

と、亮が言うと、咲がコク、と頷いたのを見て亮は咲のカードを抜いて、ダブったものを捨て、咲も亮の札を抜いては、捨てていった。

やりとりが続き、亮は残すところ一枚となり、二枚ある咲のカードを抜くところまできた。亮は一度もジョーカーを抜かなかった。真剣に自分の手札を見ている咲から亮はカードを抜くと、ジョーカーではなかったため、亮が上がり、咲が負けた。

亮は窺うように咲を見た。

「俺の勝ち……だな？」

亮がそう言うと、咲は不満気な顔で、片手で机をパンパンと叩くと、亮の前に人差し指を突き出した。

「……えーと、……勝つまでやるつもりか？」

亮がとても疲れたような声をだすと、咲が頷く。

亮がガシガシと頭を掻いていると、咲は素早くカードを回収して、手馴れた様子でシャッフルした。

亮は困った。咲を目の前にして、現場の離脱（逃走）はできない。ババ抜きが終われば、解放されるかと終わったが、勝たないと納得いかないらしい。

ババ抜きの勝敗よりも、今の自分の注目度をなんとかしたい亮はわざと負けることにした。

先ほどと同じく、亮がカード一枚、咲がジョーカーを含めて、二枚の状況になると、亮は手札を真剣に見ている咲のカードを手に取りろうとする。

咲はじっと自分の手札を見ている。じっと、亮から見て右の手札を見ている。

先ほどの勝負ではじっと左の手札を見ていた。だから、先ほどはじっと見ていないほうの右の手札を抜いたら、ジョーカーではなかった。

亮は途中で、咲が自分の手札のどれかをじっと見ていることに気づいていた。フェイントのつもりかな、と思っていたら、フェイントではなく素でジョーカーをじっと見ているのだと亮はわかった。だから、今度はじっとみている右の手札を抜いた。

ジョーカーだった。

亮はほっとした。

「俺の負けだな」

亮がジョーカーを抜いた瞬間、喜んだ様子を見せた咲だが、亮がほっとしているのを見た瞬間、またも不満気な顔を見せて、首を横に振る。

そんな咲を見た亮は狼狽する。

「え？ どうした？ 咲の勝ちだぞ」

咲は首を振る。亮は悲しいことに咲の表情が何を言ってるのか理解できた。

「……ちゃんと、勝つまでやるって?」

咲は頷く。亮がわざと負けたことに気づいて、それがお気に召さなかったらしい。亮は、またもや額に手を当てて唸る。

(一体、どうしろと? 普通にやったら負けようがない。わざと負けたらそれも気に食わない。目線のことを教えるか……? いや……、可愛いから、教えたくない気もする。なによりショックを受けそうで怖い、さあ、どうするか……あ)

亮は唸っていた姿勢から勢いよく顔を上げると、ケースからジョーカーを抜いて、シャッフル中のカードに混ぜて、別のカードを見えないように一枚抜いた。咲が首を傾げるのを見た亮は言う。

「ジジ抜きにしよう。ジョーカーじゃないやつが外れのほうが面白いぞ」

咲は頷いて、カードを配った。亮はまたもほっとした息を出した。

今度は亮が二枚、咲が一枚の状況になり、亮は咲が当たりを引くことを真剣に祈った。祈りが通じたのか、咲が亮の手札から一枚抜くと、咲は喜んだ様子で、抜いたカードと自分の手札を見せて、それを山に捨てた。

「あー、くそっ、負けたか」

亮は精一杯、悔しんだ様子を見せた。本当は喜びたいところだが。

咲は上機嫌で、カードを片付け始めると、悔しんでいる様子の亮を見て、ふ、と小さくだが、鼻で笑った。それを見た亮は愕然とした。

亮は負けるつもりで考え、頑張り、ジジ抜きを選んだ。そして亮は負けて、嬉しいはずなのだが、咲に鼻で笑われたということで、何かが、何かが腑に落ちない気分になった。

亮は勝負に勝って、試合に負けた。そんな気分で終われたはずが、「咲が鼻で笑う」というクリティカルにより、全て負けた気分になっってしまった。

そんな気分の亮を横目にトランプを片付けた咲は、亮に手を振って教室を出て行くとチャイムが鳴った。咲が教室を出た瞬間に、教室中の視線が自分に集まるのを感じた亮は、尋問される前に早く先生よこいと、内心で、全力で祈っていた亮の祈りは通じたのか、ク拉斯メイトの足が亮に向かう直前に先生が入ってきて、みんなが亮を名残惜しそうに見る。

安堵の息を吐きながら、次の休み時間はどうしようかと、思考を切り替えると、明が亮にこっそり話しかける。隣の席の小野（亮のAグループ判定）がチラチラと亮を見ているのに亮は気づいたが、かけらも横に首を向けることはしなかった。

「俺、山岡さんが、あんな表情豊かにしているの初めて見たぞ」

「何も言うな、何も話すな」

亮は唸るように、明に言った。明はそんな亮に笑みを零しながら、前を向く。

授業が始まって、ほぼ全員が亮をチラチラと興味深そうに、話
がしたいように見ているのを亮は明確に感じ取り、私は貝になりた
いと心のなかで呟いた。

第二十四話 D・E・F (前書き)

第二十四話 D・E・F

二時間目の授業はチャイムが鳴って、30秒ほど経っても終わらず、クラスのかなりの人間が、焦れたように亮をチラチラと見ている。

そんな中、亮は逃走のタイミングを計っていた。

昔の人は言った。「逃げるが勝ち」と。

逃げた所、問題の先送りにしかならないことはわかっているが、今は少しでも時間が欲しいと思った亮である。

ついに、起立、礼、が終わり、授業担当の先生が教卓を離れた瞬間に、クラスのかなりの人間が立ち上がり、亮の席に目を向けた。

しかし、亮は自身の身体能力を最大限に発揮し、席に向かっていったみんなの視線が亮に向かうころには、扉に手をかけていた。全員がそんな亮の素早さにぎよっとなる中、亮は振り向かず、ほくそ笑みながら扉を開けた瞬間に凍りついた。

「きちちゃった」

語尾にハートマークがつきそうに言う、亮が見たこともないような朗らかな笑顔の梓が目の前にいた。

亮は即座に扉を閉めた。何も見なかった、何も聞かなかったんだと自分に言い聞かせながら。

扉を閉めた手をゆっくりと額にあげて、ふう、と息をつきながら無意識に汗を拭くと、やはりというか目の前の扉は開かれた。

「あたしは生まれて初めて、門前払いというものを味わったよ」

梓が不機嫌な色を隠さずにそう言つと、亮は見事に口が引きつるのを感じ、それと同時に背後からかなりの数の気配が迫っているのにも気づいた。

「桜木くん、山岡さんと、どういう関係!？」

「桜木! ! なんて、山岡さんとお前が、あんなに親しげなんだ! ?」

「いつから友達なの! ?」

「もしかして、付き合ってるの! ?」

亮は前門の梓、後門の野次馬に挟まれた。

幸いなことに梓は亮が影になっていて誰にも気づかれていない。亮はとりあえず、梓が野次馬から見えない様に教室内に振り返り、梓を少しでも教室から遠ざけようと後ずさりしながら、大量の冷や汗を流しつつ口を開く。現状打破、もしくは現場を離脱する方法を模索するため、脳内を全速回転させながら。

「いや、じつは……」

「咲と、亮くんは友達だよ」

背後から聞こえた声により、亮は内心で悲鳴を上げる。

亮の目の前にいる数人のクラスメイトは、亮の背後から聞こえた声に訝しげな目で亮の後ろを覗きこもつとすが、亮はそうはさせまいと、梓が見えない様に体を動かす。

「桜木くん、後ろに誰かいるの？」

亮の目の前にいるクラスメイトの女の子、髪型はショートカットでクラス内ではお喋り好きで有名な、高橋希タカハシノブ（亮のAグループ認定）が亮に訝しげな目を向ける。

「いや、誰もいな……」

「こんにちは」

亮が誰もいないと言おうとしたところに、梓がひょっこりと首を出した。

「す、鈴木さん？」

「ど、どうしたんですか、こんなところに」

教室にいる者のほとんどが、梓の出現に驚きを隠せない。次期生徒会長候補、美貌、抜群の運動神経、常に学年の上位にいる成績、など、全てを兼ね備えた様な梓に憧れる女子生徒は少なくない。

憧れ故か、梓の雰囲気のせいか、同学年であつても男子を含め、敬語で話す生徒がほとんどである。

そんな梓が、滅多に来たことのない教室に一人で来ていることに驚いて、梓に注目しているクラスメイトを見た亮は、これを好機と見た。

梓と同級生の域を超えない挨拶を交わし、さりげなく教室を出ることができれば、クラスメイトの注目と、何の用で来たかわからな

い梓から逃れることができる。

「こんにちは、鈴木さん」

亮はそう言いながら、神速の足運びで振り返り、教室を出ようとした。が、

「どこに行くんだい、亮くん」

と言いながら、梓は自分の脇を通り過ぎようとする亮の腕をがちり掴んだ。

亮は腕を掴まれたことからくる反射的な動きを抑えることと、焦りと驚きのために、一瞬硬直する。梓はその一瞬を逃さず、すかさず、両手で亮の腕をしっかりと掴んだ。梓からしたら亮は後ろ向きのまままで。

「りよ、りよう、くん……?」

親しげに亮に呼びかけ、腕を組む様に亮の腕を掴んでいる梓に対して、クラス中の人間が顔に驚愕の色を浮かべながら、梓と亮を交互に見ている。

亮は大量に流れる冷や汗を感じ、どんどん悪くなる状況の改善に向けて頭を回転させながら、目に力を込めて梓を見る。

「俺に何か用ですか、鈴木さん」

この亮の言葉の意味は「何しに来た、腕を離せ」である。

亮と目が合った梓は、亮の意図を正確に理解したと確信した亮だが、梓は不敵に笑うと、クラスに聞こえるように言った。

「そうだよ。君に用があるんだよ、亮くん」

この梓の一言により、クラス中から驚愕の声があがる。

「嘘だろ!？」

「何でまた、桜木が!？」

「亮くんって、桜木くんの名前!？」

「一体、今日は何なんだ!？」

亮が口元を大きく引きつらせつつ、チラリと後ろを見ると、一時間前に見たような光景が広がっている。

文句の一つでも言いたい亮だが、人目につくところでは不味い。とにかく、梓と共にでもいいから、教室から一刻も早く抜け出ることが今はベストだと考え、亮が足を上げた瞬間、腕を組むようにしていた梓は亮を掴みながら教室内部へと足を進めた。亮からしたら後方に。

亮が片足を上げた体勢だったので、見事に亮は引っ張られた。

「君の席は窓際だったな。すまないが、ちょっと通してくれないか?」

そう言いながら梓は亮を引っぱり、席へと向かって行く。

亮は抵抗しようとする足を踏ん張ろうとしたが、亮はまたも硬直してしまう。そんな亮に構わず、梓はどんどん進む。

亮は梓にだけ聞こえるように声を出した。

「お、おい。肘、当たってるぞ」

亮が硬直してしまったのは掴まれ、組まれた腕の肘に非常に柔らかいものが当たったためだ。歩きながらも梓は亮の腕を自分に強く寄せている。

感触に浸りたい気持ちも無くは無いが、頭が上手く回りそうになくなるので梓に注意することにしたが、しれっと梓は言う。亮にだけ聞こえる声で。

「これは当たってるんじゃない、当ててるんだよ」

「……なんでだ」

「君のウブな心を利用して、力で踏ん張られるのを避けるためだよ」
「……」

そこまでわかってやる梓に突っ込むべきかどうか一瞬悩んだが、ひとまず置いておくことにして教室を出ることを提案する。今度は周囲に聞こえる声で。

「鈴木さん、話なら俺の席でなく、外でしませんか」

梓は眉を顰めて亮を見た。

「休み時間は10分しかないんだぞ、移動時間もつたいない。それに、さつきからなんなんだ、その君らしくない話し方は……、気持ち悪いからやめてくれないか」

「俺は、いつも、こんな、話し方ですよ」

亮は絶叫したいのをなんとか抑えながら、对学校女子、デフォルトの話し方で梓に一句、一句否定する。先ほどの梓の発言は、普段もよく会っていると匂わせるには十分なものだからだ。

またもや亮の言葉に眉を顰めた梓は、亮の席の前までつくと、亮

の前の席に座り、楽しそうに亮と梓を見ている明と目を合わせた。

「ああ、ここ座る？」

梓と目が合った明は、またもや空気を察して、自席の椅子から立ち上がりながら梓に言う。

「どうも、ありがとう」

梓は少し微笑みながら明にお礼を言う。

明は少し顔を赤くして、頭を掻きながら亮の横の席に座った。この席の本来の主、小野は扉の前で口を大きく開けながら、亮と梓を見ている。

亮は明が席を立った瞬間に、余計なことをと言わんばかりに明を睨んでいる。

席を立つてもどこに行くかと思えば、亮の席の隣に座る。

明としても、親友の面白い姿を見逃したくはなかった。梓に席を譲ったのは、知らない人間の席を勝手に座るよりも、譲られた席を座る方がいいだろうとの明の心遣いである。亮からしたら余りに腹立たしい心遣いではあるが。

梓は譲られた椅子に座ると、体を亮の席に向けず、窓と窓の間の壁にもたれるように座り、足を組むと、亮を見て不敵に笑った。

「君も座ったらどうだ」

「……………そうですね」

亮は唸るように声を出すと、机に脱力するように座る。

そんな亮を見た梓は、不敵に笑つのをやめて、少し真面目な顔つきで亮に言う。

「君が不機嫌になる理由もわかるがな。嫌がらせで咲もあたしもここに来たわけじゃないよ」

「じゃあ、何のためですか？」

亮は訝しげに聞く。

「またも丁寧な口調で自分に話す亮に眉を顰める梓だが、それに構わず言う。

「いずれ分かるよ。こうしている意味がね。嫌がらせをしにきた訳ではないことだけは分かってくれないか？」

「……わかった」

亮は諦めの溜め息を吐くように言った。

「ここまで言われたらもう責めることもできないし、不機嫌にしているのも不誠実だと思えるほどに梓の言葉には真摯な響きがあった。

「まあ、これでも飲んで元気を出してくれ」

そう言いながら梓はブレザーのポケットから百円パックジュースのカフェオレを取り出して、亮に差し出す。

「……どうも」

自分の今までの苦勞が百円パックのカフェオレによって潰されているような、やるせない感覚に襲われながらも、亮は差し出されたものを受け取った。

梓は自分の分も用意していたようで、もう一つを取り出し、スト

ローを外して、それを飲み始めた。

亮はほとんど強くなる視線に頭が痛くなりそうになりながらも、同じ様にストローを外して口に含んだ。

「ああ、ちよつとすまない」

梓はいきなりそう言って、ポケットから携帯を取り出した。どうやら振動したらしく、亮はストローを口に含んだままなので返事をする事も無く、何気なしに梓の手元を目で追っていた。そして、ちらつと梓の携帯の待受画面が見えた。

「ぶはっ」

亮は吹いた。見事に口に含んでいたカフェオレを吹き出した。

幸いかどうか、梓は予感があったのか、亮が吹き出す寸前に、ジューズをもった手で亮の顔の向きを横に向かせたため、梓には一滴も亮が吹き出したカフェオレはかからなかった。

「ゲホ、ゴホッ、……あ、あなた、何て画像を待ち受けにしてんだ！？」

「ん？ これのことかい？」

そう言って、梓は携帯の画面を亮の顔の前にもっていく。

その携帯に表示されているのは、昨日の亮と恵梨花の画像である。亮が恵梨花の頬に手を当てている姿がハッキリと映っている。

「ああ、なんか気に入ってしまったね。つい待ち受けに……」
「やめろ、今すぐ変える。頼むから」

亮はこの画面が下手に他の人間に見られた場合のことを考えただ

けでゾットした。今すぐにもこの待受画面は変更してもらわなくてはならない。しかし、梓は悪戯っぽく笑って言う。

「あたしの携帯なんだから、あたしの好きにするよ」

「いいか、この場合、使われている人間のプライバシーというものを考えてだな……」

亮は目の前の自分を不機嫌にさせにきたのか、嫌がらせにきたのかどうかわからない美少女に説得を試みるが、途中で明が声を上げる。

「おい、亮……」

「なんだ」

亮は説得の邪魔をされ、苛立ちを隠せない声色で横に振り向く。そこには亮が吹いたカフェオレによって服と顔を濡らされ、ハンカチで拭っている不機嫌な顔の明がいた。

「……すまん」

亮は明の惨状を見て、すぐに自分のしたことを理解し、謝罪した。明は憮然としながら言う。

「……今度、昼飯おごれよ」

「好きなだけ食ってくれ」

亮は明の要求に即座に頷いた。明もそれを見て頷く。

「鈴木さんの携帯に何が写っているのか、俺にはさっぱり予想がつかんが、亮……」

「なんだ？」

「さっきから素の口調で話しているぞ。でかい声で」

「……あ……」

明に指摘されて、亮は恐る恐る周りを見渡す。

「おい、桜木のやつ、鈴木さんに向かって、なんて口の利き方を……」

「桜木くんの話し方、今日はいつもと違うことない？ さっきもそうだったけど……」

「鈴木さんに向かって『あんだ』って言ってたぞ」

「携帯に何が写っているんだ？」

クラス中のほとんどの人間が、驚愕の目で自分を見てヒソヒソと話している。

亮はひとまず、携帯の待受画面について、今、抗議することはやめることにした。軽い頭痛を感じた亮は、両手を額に当てて唸るように言う。

「それで、俺に何の用ですか、鈴木さん」

「また、その口調か……」

梓は首を振りつつ溜め息を吐くように言うが、すぐに気を取り直した様子で口を開く。

「あたしがここに来た用とは、君の後顧の憂いを減らすためでもあるんだよ。君は誰かを助ける時は、後になっても心配しないようにしているだろ？」

最後は少し声を小さくして言う。

「まあ……、なるべくな」

亮は小さく頷きながら、同じように声の調子を落とした。

梓はそんな亮に少し頷く。

「あたしも咲も君を助けるつもりで、今日ここに來てるんだよ。君の後顧の憂いを減らすためにね」

「俺の後顧の憂いって……？」

「それも後になればわかるよ」

「……………そうですね」

人前でもう何か言うのはよくない事態を招きそうなので、亮は脱力するように返す。今度は周りに聞こえるように丁寧な口調です。すると、梓がまたも眉を顰める。

「とにかく、その口調はやめてくれないか？ こっちの調子が狂う

……………まったく、Aだか、Bだか、気にしすぎじゃないのか？」

「俺にとっては大事なことなんですよ」

亮は力強く言った。

昨日の帰りに亮は三人に、自分のA、B、Cのカテゴリー分けについて簡単に説明していた。説明を聞いた三人の内、咲は表情を変えず何も言わなかった。梓は少し興味ある目を向けてきた。恵梨花に至っては、笑っていない眼で微笑まれ、その時のことを思い出した亮は微笑まれた時と同じく、背筋に冷たいものを感じた。

少し顔色を変えた亮を訝しげに見ていた梓は、何かを思い出したような様子で亮に言う。

「A、B、で思い出したが…………、ちょっと耳を貸してくれ」

「どこで？ 耳を？」

亮はまたも口元を引きつらせた。そんなことをしたらどんな風に見られることか。そんな亮の考えをよそに、梓は神妙に頷く。

「ああ、大事な話だ。他の人に聞かれるのはよくない話でね」

大事な話なら、今、この場所でしないほうがいいのだが。そもそも大事な話があるのなら、最初からその話があることを言うはずなのに、何故、急に思い出したように言うのか。後で、と言っても聞きそうにない梓の様子なので、亮は警戒しつつ、諦めの溜め息を吐きながら、耳を梓の方に近づけた。

梓は近づいた亮の耳に両手を添えて、口を近づける。

そんな二人の様子を見たクラスの男子は嫉妬と殺意の目を亮に向け、女子は亮にたいして羨むような目と、二人の関係について探るような目を向けている。

亮はこの休み時間、どんどん強くなる視線に本格的に頭が痛くなり始めていた。

時に、人は緊張が強くなったり、冷静さにかけると、つい、手元にある飲み物に手を伸ばし、口をつけてしまう習性がある。この時の亮もそうだった。警戒しつつ無意識に、吹き出したとはいえ、まだ半分ほど残っているカフェオレのストローに口をつけていた。

「先週の体育の時間ね……」

梓の暖かい吐息が耳にかかってこそばゆかったが、それを顔に出さず、亮はカフェオレを口に含みながら頷いて先を促す。

「恵梨花がね……」

こんな風に話すから一瞬、恵梨花が大きな怪我でもしたのかと心配した亮だが、昨日見た限りそんな様子はなかったことから、一体

何なのかと亮は集中して次の言葉を待った。

「Dのブラが、もうきついとぼやいていたよ」
「ぶっ」

亮はまたもカフェオレを吹き出した。なんてことをカミングアウトするんだと思いながら。これには黙っていられずに立ち上がり、冷静さを忘れて叫んだ。

「おい、梓！！ あんたな、なんだって、自分の親友のことを、そう……」
「おい、亮……」
「なんだ！？」

自分を呼ぶ声に、苛立たしげに亮が振り向けば、そこには先ほどと同じようにカフェオレで服と顔を濡らす、先ほどよりも不機嫌な顔の明を亮は見た。

「すまん、本当にすまん。悪気はまったくなかったんだ」
「……一週間、昼飯おごれよ」
「……ま、まかせとけ」

明を見て即座に謝る亮に対して、半分睨みながらお詫びを要求する明に、亮は一瞬躊躇うも承諾した。

そこで梓の軽やかな笑い声が上がった。
「ハハハハ、本当に君は面白いな。それにやっとあたしの名前を言ったな」

そう言いながら梓はニヤッと笑う。
亮はどうやら自分はハメられたようだと言ったと自覚し、大きく脱力して

椅子に座る。そこで梓が普通の調子の声で追撃をかける。

「ちなみに今は間違いなく、Eのものをつけているはずだ」

「あつ、あなたな……」

亮は何を想像したのか、口元を引きつらせながら、顔を少し赤くする。梓はさらに追撃をかける。

「あたしの見立てでは、卒業までにFに行くよ」

「ぐっ……！」

亮は何を言うべきか、言葉を選べなかったようで、変は呻き声だけでた。

梓は楽しそうに笑いながら亮を見る。亮はそんな梓になんとか口を開く。

「あ、あなた。よくまあ、親友のそんな話を……」

「なんだ、この情報を聞いて嬉しくなかったのか？」

梓は不機嫌そうに亮に聞く。そんな梓に対して亮は真剣な顔で首を振る。

「その情報については深く感謝する」

亮は梓の疑念については、即座に感謝の言葉で否定した。

どうやら亮は、度重なるショックで少し頭のネジが外れてしまったようだ。

梓は真剣な顔で言う亮に、大きな笑い声を上げた。腹を抱えて。

そんな梓の様子を、クラス中の人間が大きく口を開けて、信じら

れないように見ている。

梓はひとしきり笑った後、時計を見ると、目尻の涙を拭いながら「ああ、もうこんな時間か。じゃあ、あたしは教室に戻るから。じやあね、亮くん」

と言って亮に手を振りながら、教室から出て行った。

いつもの亮なら、「はい、鈴木さん」ぐらいの最後の抵抗をしただろうが、この時の亮は「おお」と、咳くように返事をして、力なく手を振り返すだけだった。

梓が出て行ってから、教室内の人間は全員固まったままだった。さつきまで自分が見ていたものが信じられないために。

その硬直は数秒後、三時限目のチャイムが鳴るのと同時に入室してきた英語の先生が口を開くまで、解かれることはなかった。

授業が始まる時、自分の席に戻った明が亮に振り返る。

「俺、いや、多分、みんなだけど、あんなに笑う鈴木さん初めてみたぞ」

「……」

亮は放心した様子で何も言わなかった。

第二十五話 リプレイ

授業が始まり、放心しながらも先生が書く黒板の文字を目で追っていた亮は「D」の文字を見ると梓の「Dのブラが……」という言葉が頭の中に流れ、慌てて頭を振ってその言葉を追い出した。気を取り直して黒板を見ると、今度は「E」の文字が目に入り、またも梓の声で「今は間違いない、E……」の言葉が再生され、それと同時に今の恵梨花の姿が脳内で再生され、顔を赤くしながら頭を振った。当然の如く「F」の文字を見ると、未来の恵梨花の姿を想像してしまい、亮は机に頭突きをして脳内に自動的に流れる映像を追い払いたいのを、なんとかこらえた。

亮は極力、「D・E・F」の文字を見ないよう心がけたが、悲しいことに今の授業は英語の時間で、この三文字を見ないようにするのは、不可能と言ってよかった。ならば、いつも通り寝て過ごせばいい、と考えるが、次の休み時間に迎えるであろう尋問をうまく乗り切る方法を考えなくてはいけない。次はさっきの休み時間のように不意について逃げ出すことは難しそうだからである。

ならば、ここは目を閉じて思考をするのがベストだと亮は考え、目を閉じた。

しかし、今は授業中である。先生は前で英文を読む。生徒も英文を読む。「D・E・F」の文字を含む単語が読まれると、亮の頭の中でその単語のスペルが作られ、「D・E・F」の文字がチ力チ力と強調するのである。

目を閉じて、思考に没頭しようともこの三文字はいつまでも亮の思考を邪魔する。

亮は「D・E・F」の文字が耳に入れば思考を中断され、それを頭から追い払うのに集中し、また思考を再開すれば、中断されるのを何度も繰り返し返した。

「おい、亮!!」

「はっ!」

明に名前を呼ばれた亮は、はっとなって前にいる明を見る。

「大丈夫か?」

「え? 何が……、な、なんだ!??」

何の心配をされたかのか分からないまま亮は返事をしようとする、自分の周りに人が集まっているのに気づいてぎよつとした。亮が驚くのも無理はない。亮の視界は前の席の明が見える以外は全て人で埋め尽くされている。

しかし、亮が驚いたのは、自分の周りに人が集まっていることではなく、自分の知らない間に、人が集まっていることである。自分に接近しようとする人間がいれば、数メートル離れていてもすぐに気づくはずが、知らない間に複数の人間に囲まれているなんてことは、ここ数年の間に記憶にない。

一体、何が起きたんだと、亮が一瞬呆けた顔を見せると、明が不思議そうに亮を見る。

「おい、チャイムが鳴って、授業終わったのわかってたか？」

「は？ 何言ってるんだ、さっき始まったばかり……」

「やっぱり、わかってないな」

亮の返答に、明は首を振る。そんな明に亮が口を開こうとすると、周囲から一斉に声上がる。

「桜木！！ 山岡さん、鈴木さんと、一体どういった関係だ！？」

「どっちかと、付き合ってるの！？」

「名前で呼び合うなんて、すごいわね！！」

「あんな、山岡さん初めて見た！！」

「藤本さん、山岡さん以外に、あんなに親しそうにしている鈴木さん初めて見た！」

「鈴木さんと、あんなに仲良いなんて、羨ましい！」

亮は暴れ馬のように鼻息荒くするクラスメイト達から、一斉に質問を浴びる。ここで、ようやく亮は状況がわかってきた。

どうやら、授業は自分があの三文字と格闘するのに集中している間に本当に終わってしまったらしいと。そして、チャイムが鳴っている間もその格闘は続き、その間に自分はクラスメイトに包囲されてしまったと。

そこまでわかった亮は天を仰ぎたくなかった。

（嘘だろ……。梓のやつめ、なんて地雷を人の頭においていきやがった。結局この時間、何も思いついてないぞ……）

「おい、桜木！ 人の質問に答える！」

亮があまりの状況の悪さに絶望していると、業を煮やしたように、クラスメイトの佐々木（亮のAグループ判定）が怒鳴る。

「お、おう……、何だ？」

「何だ、じゃない！！ さっきまでの俺達の話、聞いてなかったのか！？」

「あ、ああ。すまん……、何だって？」

「だから！ 山岡さん、鈴木さんと、一体どういった関係なんだ！？」

「……………同級生、だろ？」

亮の答えは皆がわかつている当たり前のものであり、当然その答えに納得するものは一人もいなかった。亮の返答に佐々木が再度怒鳴る。

「そんなことはわかってる！ なんであんなに親しいんだ！？」

亮は少しでもと、時間稼ぎとして軽く惚けることにした。

「いや……、普通だろ？」

「「普通じゃない！！」「」

「……………」

亮の返答に対して、周囲にいるクラスメイトたちの声が綺麗にハモリ、亮は思わず絶句してしまう。

「ねえ、本当にどちらかと付き合ってるとかはないの？ 私、鈴木さんも山岡さんも、あんなに男の子と仲良くしているの見たことな

いんだけど……」

と、お喋り好きな高橋が興味を隠せない様子で、亮に聞く。

「それは、無いです。本当に」

すぐに亮は否定する。女子相手用の丁寧な言葉で。嘘をつかないで済む質問はされるのも答えるのも本当に気が楽なものである。

「じゃあ、一体、どういった関係だ!？」

亮はどう言ったものか悩んだ。実は昔からの近所の幼馴染だと言ったらどうだろうか。いや、さすがにそれは無理があるなど、亮は却下し

「……友達だ」

と、不本意だが、直球を投げた。下手に嘘を重ねると、状況が悪くなりそうだし、誤魔化しを考える時間も無い。ハッキリ言って、これ以上の回答などない。真実を投げた。すると

「……」

クラスメイト一同に沈黙が降りる。

そこで、誰かが呟く。

「あの二人と、友達……? 桜木が?」

「嘘だろ……」

「信じられない……」

「なんで桜木が……」

あちこちで、混乱した様子で呟いている最中、誰かがはつとなる。

「そついえば桜木! 以前に鈴木さん、山岡さん、藤本さんの三人で、この教室にお前に会いに来たよな!? あれがきっかけか!？」

亮はギクリとなり、動揺が顔に出ないようにするのが精一杯だった。

「お前、あの時はジューズだけで、携帯も交換しなかったと言ってたじゃないか!!」

「そうだ。それなのに、友達になったとはどういうことだ!?!」
かなりの剣幕で詰問され、亮は脳内を高速回転させながら返答する。

「あ……と、帰りに、たまたま一緒になってな。あの二人と」

亮は「二人」の部分を強調した。

「帰り……?」

「あ、ああ……、帰りがちょっと遅くなっ時にたまたま、あの二人に会ったんだよ。それで、一緒に帰って……友達になった」

亮は言いながら、多少、苦しいんじゃないかと思っただが、言い切った。

「……」

再度、沈黙が降りる。

そんな中、高橋が不思議そうに声を上げる。

「でも……、それだけで、あんなに仲良く? 桜木くん、山岡さんのことも、鈴木さんのことも、名前で呼ばなかった?」

言われて亮は思い出し、焦った。頭を抱えたくなりながら、なんとか口を開く。

「気、気のせいじゃないですか……?」

「……気のせいじゃない」「」

なぜ、ハモるんだ、と亮は頭が痛くなりそうになる。亮はこのクラスメイトの意外なほどの団結力を見たくない時に見てしまった。

「それに、桜木くん、名前で呼ばれてたよね……?」

「……気の……」

「……せいじゃない」「」

だから、なぜ八モるんだと叫びたかったが、我慢してこれ以上ない答えを言う。

「……友達だから？」

「」「」

またもや、沈黙が降りる。

誰かが、全く腑に落ちないように呟く。

「友達だからって……」

「あの二人の名前を呼べるか？」

「しかも名前呼んでもらうって……」

名前で呼び合うのを見られた今となつては、単なる友達として認識してもらうのがベターだと思うしかない、と亮は思い込もうとした。恵梨花のことがバレなければ……、と考えたところで亮は凍りついた。

（一時限目の休み時間に咲、二時限目の休み時間に梓、なら三時限目の休み時間は……？）

と、亮が冷や汗を流して考えていると、亮の思考が誰かに届いてしまったのか、誰かがはつとなり声を上げる。

「あの二人と仲良いなら……、藤本さんは!？」

その一言で、かなりの数のクラスメイトがはつとなる。特に男子が。

「そつだ。おい、桜木! まさか藤本さんまで……」

「そつだ、どうなんだ! 桜木!？」

男子は血相を変えた様子で、亮に迫る。亮は教室の扉を意識しながら、目は絶対にそちらに向けずに口を開こうとすると、誰かが何かに気づいたように

「ちよつとまてよ……、朝から順に、山岡さん、鈴木さんと来てるんだから……」

と、言いながら、そろそろと教室の扉を見る。それにつられて、教室内の全員が同じ方向を見る。

誰かの喉がゴクリと鳴った。

亮はさすがに、恵梨花までは来ないだろう、いや、来ないでください、お願いします、と真剣に願った。生きた心地がしないとは正にこのことだと思いつながら。

全員の注目が扉に向かった時、そう都合よく出てくるはずもない、いや、ないはずだと亮が思っていると、その扉が開かれ、全員が目を見開くと

「おい、亮。藤本さんはこないのか？ 教室の前で張ってたけど、来ないじゃないか」

と、亮がよく一緒にいるグループの友人、東が大きな声で呼びかける。

扉を見ていた者は全員、肩から力が抜けたように感じ、男子は

「なんだ、東か」

「アホの東じゃないか」

「期待して損したぜ」

「がっかりさせやがって」

と、吐き捨てるように言っている。

東が扉から出てきて感謝したのは亮だけだろう。

東が更に口を開く。

「なあ、亮。藤本さんは来ないのか？ てっきり来るんじゃないか
と思っただけど……」

「来ないに決まってるだろ」

亮はさすがに恵梨花までは来ないようだ、と、安堵の息を吐く。

亮の言葉に、男子生徒が当然といったように頷く者がいれば、ホ
っとしたような顔を見せる者、恵梨花の姿が見れるのかと期待が外
れてガツカリした様子の者もいる。

「まあ、そうだろうな……」

「ありえねえよ」

「あーでも、一回話してみたいな」

「同じ人類とは思えないよな……」

「たしかにな……」

(こいつら、ちょっと褒めすぎじゃないか……?)

ウンウンと頷きながら、恵梨花について熱っぽい様子で語るのを
見た亮は、恵梨花に対する男たちの憧れがどれほど強いのか、改め
て認識して冷や汗がスーッと頬を流れる。

「一応聞くが、桜木。藤本さんとは友達じゃ、ないんだな？」

佐々木が聞くと、男子生徒のほとんどが厳しい目で亮を見る。

亮はさりげない仕草で冷や汗を拭いながら、当たり前と言わんば
かりの表情で、キツパリと言った。

「友達じゃ、ない」

これに関しては嘘ではない。何故なら、昨日、友情の関係では無

くなつたのだから。友達以上の関係だ。

否定した亮に対して、安堵する者もいれば、まだ少し疑わしげに亮を見る者もいる。

亮は休み時間の終わりが近付いていることに気づき、チャイムが早く鳴ることを強く願った。そこで、佐々木も時計を見て時間が無いことに気付いて

「……昼休みも話聞かせろよ」

と言つが、亮はすぐに拒否する。

「悪い、無理だ。用事がある」

無理な理由の第一として恵梨花と約束があること、第二として昼休みにAグループの人間と一緒にいるのも避けたかった。今日ももうこれ以上、人目を集めたくない亮である。

「……昼休み全部無理なのか？」

「ああ、悪いな」

「なら、5時限目の後だな」

何の用事か詮索されなかつたのはありがたいが、それでもまだ話を聞く気なのかと、渋々、亮が返答しようとするチャイムが鳴つて、全員が自分の席に戻つていくところで、先生が入室してくる。

周りの視界が開けていくと、東と同じグループの友人の夏山、川島の二人と目が合い、二人が口をパクパク動かした。

亮が唇の動きを読むと

「後で俺たちにも話聞かせろ」

と、言っているのがわかった。

亮は流石にこの友人たちには何か言わないと、とは思ったので、疲れた様子で、手で「OK」のサインを使って二人に応えた。

言うとしても、突っ込んだ内容を話す気はない。この休み時間に答えたことを、少し詳しく（と、言っても誤魔化した内容で）話すだけである。

二人が亮の応答に頷いて席に座るのを見ると、明が亮に振り返る。

「なあ、用事って……」

「何も聞くな。明には後で全部話す」

亮は小声で明にだけ聞こえるよう答える。

明は亮の言葉に、何かを考えるような様子を見せると、小さく頷いて前を向いた。

亮としては、さすがにもう頼れる味方が欲しかった。明なら、正直に全てを話しても、黙っていてくれるだろうと思っている。

亮は大きく息を吐いた。こんなに疲れる休み時間はもう遠慮したいが、午後にもあるとなると気が重くなった。この10分で、いや、今日は最初の休み時間から自分にとってありがたくないことが起こりすぎた。今日の午前だけで、少しやつれたんじゃないかと、亮は思った。

授業が始まって静かになると、亮は強く空腹を感じた。

無理もない。いつもなら午前の授業はほとんど半分寝て過ごしているのが、今日に限っては寝ることもできず、頭は常に回転しているのだから。こうなると、朝食を食べない自分の習慣が恨めしく思ったが、そこで思いだした。

以前に恵梨花から、朝食をちゃんと食べると言われたことを。思えば、あの時、初めて恵梨花がお母さんみたいだと思ったことを。

その時は自分の母とは関係なしに、一般にお母さんみたいだな、と思ったことを。

そこまで思い出した亮は笑い出しそうになるのをなんとか抑えようとしたが、表情が緩んでしまった。しかし、そこは手で顔を覆って隠す。

隣の席の小野が訝しげに亮の方を見るが、亮は素知らぬ振りをした。

空腹を感じたまま起きているのも辛いので、ここは（と言うよりもいつも通り）寝てしまおうと亮は頬杖をつく。

顔を下に向けて、目を閉じたところで、ふと急に梓の言ったことを思い出した。

『君の後顧の憂いを減らすため……』

これはどういった意味だ、と亮は考える。

大体、自分の学校での憂いなど、目立ちたくないことくらいだ。

梓は憂いを減らすため、と言っているが、これはどう考えても増

えている。と言うよりも今日ほど憂いたことは無いほどだ。

それに、どうして今日になって二人共、教室にきたのか……。今日……、昨日と今日の違い……。

そこまで考えて、昨日と今日の違いは、ハッキリわかるが、そこからわからず亮は首を傾げつつ考え始めた。

「用事があるって言ってたけど、昼飯はどうするんだ、亮？」

授業が終わったの昼休み、亮はクラス中から刺さる視線に気づかない振りをしている。

今質問されても、「用事があるから後で」としか言うつもりのない亮である。

「購買で買っ……」

明の問いにそう答えながら、亮は力ない様子でノロノロと椅子から立ち上がる。

そんな様子の亮に明が不思議そうな目を向ける。

「どうしたんだ……？」

「腹が減りすぎたみたいだ……。体に力が入らん」

亮は唸るように言う。

「今日は寝てないみたいだしな」

そう言って、明は笑う。

「ああ……、そうだ、明」
「なんだ？」

亮が顔を真剣にした様子で、小声で明に聞く。

「仮にの話だが……」

「仮に？」

「ああ、仮にお前に彼女がいるとしてだな……」
そう言った亮にたいして、明は目を丸くする。

「なんだ、急に……」

「いいから黙って聞いてくれ。今、俺のこの疑問をすぐに解決しないと、とんでもないことになりそうな気がするんだ」

少し焦った様子で、それで有無を言わせない調子で言う亮に、明は

「お、おう……」

と、小さく頷く。

「いいか？ お前に彼女ができたばかりだとして、後顧の憂い……、お前は何を心配する？」

「心配？」

「ああ。思いつく限りでいいから、言ってくれ」

そう言う亮に明は少し、考える様子を見せた。

「んー、嫌われないこと？」

「まあ、そうだな。他には？」

亮は頷いて、さらに促す。

「浮気されないこと？」

「浮気か……、なんか違う気がするな……、他には？」

「ああ……、他の男が彼女を口説いたりすること？」

「それ……か……？ じゃあ、それを回避する方法は……？」

何か引つかかることがあるのか亮が首を傾げながら明に聞く。

「そら『付き合ってますよ』と、公言するか、仲の良いところを見せ……」

明が最後まで言い終わる前に、亮はすぐに動いた。

「早退する」

そう言っつて、亮は机の上のものを片付け、鞆に乱暴に押し込む。そんな亮の様子に明が驚く。

「早退？ 何言っつてんだ、亮？」

そう聞く明に答えず、亮は

「くそつ、何で気付かなかつたんだ……。さっきの休み時間は、昨日と同じ、ワンクッション挟んで俺を油断させるためじゃないか……」

と、焦りながら自分の迂闊さを嘆いている。

「おい、亮、ちょっと待てよ。早退っつて、先生に何て言っつもりだ？」

明が訳がわからないといった様子で亮に聞くと、亮は首を振りながら明に答える。

「事は一刻を争うんだ。悪いが、明。先生に適当に言っつてくれ。そう言いながら、亮は自分の席の横の窓を開ける。

「はあ！？ ……っつて、何で、窓開けて……。おい！ 何言っつてんだ！？」

明が驚愕の声を上げる。それも無理は無い。亮は窓を開け、鞆をもつと、その窓を乗り越えようと、足をあげている。

「何言っつてんだ！ ここ三階だぞ！？」

明はそう言いながら亮の腕を掴むと、亮は苛立たしげにそれを振り払おうとする。

「大丈夫だから離してくれ。一刻も早くこの教室を出ないといけな
いんだから」

「何言っつてんだ！？ もしかしたら、お前なら大丈夫かもっつて思っ
てしまっつが、出るなら扉から出たらいいだろっつ！？」

そう言いながら、明は扉を指差す。

「それは駄目だ。あの扉はもう開けたら駄目なんだ。特に俺は」

亮は扉を見るのが怖いのか、明が指差しても扉に振り返りはしなかった。

「何言ってるんだ!? ……それに、いいのか? こんなところから飛び降りたりしたら、一気に注目的、噂になるぞ?」

明はこんな時でも、最後は声を小さくして、亮に言った。

明が言ったとおり、亮が窓から身を投げ出そうとしているかの様な姿は、弁当片手の生徒たちの注目を集めている。しかし、亮は強く言い返す。

「いいんだ。このまま教室にいて、それから広がる噂に比べたら…」

と、亮が話している途中で、明が指差していた扉が開かれた。

亮は口を開いたまま、固まった。

喧騒で満ちていた教室が、静寂に包まれる。

ある者は目を点にして固まっている。ある者は箸で口に食べ物運んでいる途中のまま口を開いて固まっている。

ある者は、まさか、と信じられない思いで亮を見る。

亮は扉が開いた瞬間にわかった。扉には背を向けて、窓に身を乗り出したままの亮だが、すぐにわかった。

わかったのは何故か。普段から人の気配、視線には敏感なほうだから。

だが、それよりも、最近の亮はこの気配を感じると、頭よりも胸が反応するから。

そして、振り返らずともその気配の持ち主が、真っ直ぐ自分に向かって歩いて来ていることも。

明は、無言で亮を掴んでいた腕を離した。

そして、亮と扉を開けた人物を交互にゆっくり見る。

驚愕の色のある顔だが、しかし、どこか、予測してたような光景だったのか。自分の親友を誇らしげに見るような目の色が浮かんだ。

扉を開け、何もしてないのに、クラスを静寂に包んだ人物は、亮のすぐ背後までゆっくり歩いて立ち止まり、小さくなければ、大きくもない、しかし、なぜだか、教室にいる人間、全員に聞こえる声で、小首を傾げて不思議そうに問いかけた。

「何してるの、亮くん？」

第二十六話 破壊

声をかけられた亮は絶対に背後に目がいかないよう、キョロキョロと「亮くん」なる人物を探した。

すると亮は襟首を掴まれ、後ろに引つ張られて

「りょう、って他にもいるの？ このクラス」

と言う、傍目にはにこやかに、されど亮からしたら背筋に冷たいものを感じさせる恵梨花の微笑みがあった。

引き寄せられた亮は、ほんの目の先にいる恵梨花に若干、目を逸らし、冷や汗を流しながら言う。

「いや、ど、どうだったかな……？ もしかしたら他にいるのかと思っただけ……」

「そうなの……？ じゃあ、私の声を聞き間違えたんだ？」

言葉は穏やかだが、どんどん機嫌が悪くなつていくの間違ったと感じた亮は、距離の近さのせいがかかる恵梨花の吐息にクラクラしそうになりながらも、すぐさま弁解した。

「いや、そういうわけじゃない。ちょっと、アレだ……、探してみただけだ。気にしないでくれ」

そう言う亮を恵梨花は眉を顰めて見ると、少し息を吐きながら言った。

「まあ、いいか」

機嫌が少し元に戻つたのを感じた亮も小さく安堵の息を吐くと、亮は距離の近さを指摘する。

「あー、その、ちょっと近くないか？」
「え？ ああ……うん、そうね」

頬を少し染めながら手を離す恵梨花の可愛さに見惚れそうになる亮だが、状況を忘れる訳にはいかず、目だけを動かして周囲を素早く見回した。

扉を開け、教室に入ろうと手を扉にかけたまま、その場で固まってこちらを見ている男子生徒。

向かい合って弁当を食べていたが、二人してこちらを見て固まっている女子生徒。

空中に何かあるわけでもないのに、カチャカチャと箸で何かを掴もうとしている男子生徒。

食堂に行っている者、購買に行っている者、他の教室等に行っているものを除いても十数名が教室内に残っているが、総じて全員が亮と恵梨花を見て固まっている。

ふと明を見ると、目が合った。すると明はすこし笑って肩を竦めただけだった。

(思っていた以上に大物かもな、明は)

親友の評価を上向きに修正するも、亮は状況の悪さに絶望感がヒシヒシと襲ってくるのを感じた。

苦いものを飲み込んだ様な顔になった亮を見た恵梨花は、首を傾げて亮に問いかける。

「どうしたの？ それにさっきは何してたの？ 窓に身を乗り出したりして……」

恵梨花の問いに亮は、軽く首を振りながら言う。

「……何でもない。………なんで、あんたまでここに……」

恵梨花の問いに答えると、最後は誰に聞かせるわけでもなく呟いた小さな独り言だったが、それは目の前の恵梨花だけでなく、静寂に満ちていたためか、教室に残っていた者にまで聞こえてしまった。

「あんた？」

亮の独り言が聞こえた恵梨花は訝しげにそう尋ねる。その声の調子はとても平坦だった。

亮は恵梨花の声の調子からさっき元に戻った機嫌が、またもや下がってしまったことがわかってしまい、口元を引きつらせた。

恵梨花の呟くような問いは当然の如く、教室内にいるクラスメイトたちにも聞こえた。

そして、それにより男子生徒たちが硬直から解かれ、誰かが誰かに囁く。

「おい、桜木のやつ、藤本さんになんて馴れ馴れしい口調を」

「ああ、藤本さん怒ってるな」

「桜木なんか、藤本さんに『あんた』なんて言ったら、そら藤本さんだって怒るだろ」

「早く藤本さん、って言って謝らないと」

「いや、でもさっき藤本さん、桜木に『亮くん』って言わなかったか？」

「……今日よく聞くな」

どうやら、クラスメイトたちはショックが強すぎたのか、驚きを乗り越して、冷静に2人の様子を見守っているようだ。

亮はそんなクラスメイトたちの囁きがハッキリと聞こえていた。恵梨花の機嫌が悪くなっている原因はわかっている。わかっているが、亮は試さずにはいられない、分の悪すぎる賭けに出た。

「ふ、藤本さん？」

亮がそう言うと、恵梨花は微笑んだ。ただし、目はまったく笑わずに。

「藤本……、さん？」

と、恵梨花は聞き返した。その声の調子はとても、とても冷たかった。

そんな恵梨花を見た亮は、ここまで恐ろしい笑顔は過去に見たことないとハッキリわかった。そして、人間が見せる最も恐ろしい表情とはこういう笑顔なのだ。亮は確信した。恐ろしさの余り、変な声がでそうになるが、そこは唇を噛みしめて踏みとどまり、足が少し震えそうになった亮は、またもクラスメイトの囁きが聞こえた。

「なんか怒ってないか？」

「まさか藤本さん、桜木に名前呼ばれるのも嫌なほど桜木のこと嫌っているのか？」

「……でもさつき藤本さん、桜木に『亮くん』って言わなかったか？」

「……俺はそんなこと聞いていないぞ、聞いてたまるもんか？」

どうやら、クラスメイトたちは冷静になっただけではなく、予感があるのか、それを認めたくないのか、軽い現実逃避と、記憶の改竄を試みている者がいるようだ。

亮はそんなクラスメイトの囁きに同意の声を上げたかったが、冷気を出すようにどんどん不機嫌さを増している目の前の初恋の女の子をどうにかすることにした。怒らせたら怖いのは昨日にハッキリわかっている。何しろ、怒っている時ならば血を流している亮の頬を思いっきり叩くような女の子なのだから。

亮は、今はもう恵梨花の不機嫌が悪くなるようなことはできないと内心で大きく諦めの溜め息を吐いた。

「すまん。恵梨花」

亮がそう言つと少し機嫌が治まり、あの恐ろしい微笑みは消えたが、今度は頬を少し膨らまして不機嫌なのがわかりやすい顔で憮然と言つ。

「まさか今日になって、初めて『藤本さん』って呼ばれるなんて思わなかった」

「……そうだっけか？」

亮は記憶を探ってみるも、ハッキリとはわからないが、それが本当の可能性はどうも高そうである。だとしたら、恵梨花が怒るのも無理は無いかと思った。思いが通じ合つて、次の日にそんなことをされたら、怒らない女の子は少ないだろう。亮がそう考えていると、恵梨花が亮を見上げながら言つ。

「そつよ。ひどいんじゃない、亮くん？」

怒つてはいるが、それよりもその怒つた顔が可愛いのはちよつと反則なのでは、と亮は思いながら、心からの謝罪の言葉を出す。

「いや、悪かった。もう言わないから」

亮が言つと、恵梨花が上目遣いで聞く。

「本当に？」

だから、その上目遣いは反則なんだと思いつながら亮は言葉を重ね

る。

「本当に」

恵梨花はジツと亮を見ると、表情を柔らかくして頷く。

「わかった。じゃあ、許してあげる」

恵梨花からハッキリと不機嫌な気配が去ったのを感じ取った亮はホっとすると同時に、今、自分はこの先において、人前で恵梨花を『藤本さん』と呼べない、とんでもない約束をしてしまったと気付いて愕然とした。が、今はそのことについて考えるのは後回しにする。

現在、亮の意識の9割は周囲と状況の改善について働いている（残る1割は恵梨花だ）。

亮は、またも周囲を素早く見回す。

男子生徒は再び硬直している。

反対に、女子生徒は硬直から抜け出して、ヒソヒソと女の子同士で楽しそうに話しながら、熱の籠もった目でこちらを見ている。

女の子があやうって話していることから、今の自分達が噂に広まるのは時間の問題だが、今ならまだ親しい友達同士で済ませることが出来るかもしれない、と亮は判断する。いざとなれば昔、近所に住んでた、という『実は幼馴染の策』を今こそ無理矢理にでも実行しようと思はれ、恵梨花に口を開く。

「で、どうして、ここにきたんだ？」

亮がそう言うと、恵梨花は楽しそうに微笑んで言う。

「梓が、『亮くんがここに来ていいって言ってたよ』って言ってたから」

亮は思わず額に手を当てて、項垂れた。

「またそのパターンか……？　言うわけないだろ？」

すると恵梨花はクスッと笑う。

「だよな」

恵梨花の言葉に亮は目を丸くする。

「お、おい。嘘ってわかってたのか？」

「いくら私でも、そう何回も騙されないよ。梓だって、私が騙されると思ってたんじゃないと思うよ。でも、騙されたことにしようと思つて、ここに来たの」

と、恵梨花はまるで悪戯が成功した子供のように言う。

亮はそんな恵梨花に、嫌な予感を覚えずにはいられず、口を開く。

「なんで、またそんな……」

「うん。なんでかは、ゆっくり話すよ」

亮はその話は、絶対ここでしないほうがいいということだけはわかった。

「そうか。じゃあ、俺は購買に行ってくるから、また後でな」

亮のこの言葉の意味としては、後で屋上で、という意味である。

空腹が限界なのもある。そう言つて、亮が恵梨花の脇を通り過ぎようとする、恵梨花が亮の手首を掴んで言う。

「購買に行かなくていいよ」

亮は、梓の時と同じく、掴まれたことに対する反射的な動きを抑えて立ち止まる。それと同時に、男子生徒の悲鳴や女子生徒の歓声を押し殺した様な声があちこちから響くのが聞こえ、亮は冷や汗を流しながら口を開く。

「行かなくていいって……、購買行かないと食べるものないだろ」

亮がそう言つと、恵梨花は少し得意げに、もっている鞆を上に掲げながら言った。

「お弁当作ってきたから。亮くんの分も」

恵梨花のこの言葉は、ゆっくりと硬直から立ち直っていたクラスメイト達を再び硬直させた。

そして亮も一瞬、硬直した。

今日の亮は朝から大変だった。

咲が来て休み時間に注目を集め、梓には頭のネジを外され、地雷まで設置された。授業中はクラスメイトからの質問に対する言い訳などを考え、いつもならゆっくり寝て過ごす時間を思考とストレスに奪われた。一時間前には強い空腹を覚え、授業中に何か食べるわけでもないから空腹感は強くなり、今はそのせいで体がふらついている。

そんな亮にたいして『恵梨花の手作り弁当』は亮の心のあらゆる防壁を破壊するには十分なものであった。亮の頭に『恵梨花の手作り弁当』という言葉が浸透し、過去にも食べたその味を思い出した亮は

「ほ、本当か!？」

と、それはそれは実に嬉しそうな顔で恵梨花に飛びついた。

この時、亮の意識の9割は『恵梨花の手作り弁当』に奪われた（やはり残る1割は恵梨花だ）。

亮の嬉しそうな顔に釣られたのか、恵梨花も嬉しそうな顔になって頷く。

「うん。今日はお味噌汁もあるよ」

そう言いながら、恵梨花は鞆から魔法瓶の水筒をだして、亮に見せた。

「味噌汁!? 水筒にそんな活用方法があつたなんて……!」

亮は驚きを隠せない様子だ。

「まあ、あんまり入れないよね。お味噌汁、好きじゃなかった……?」

恵梨花は窺うように亮を見る。

「何言つてんだ、恵梨花。味噌汁を好きじゃないやつは、俺は日本人とは認めないぞ」

亮は真剣な顔で首を振りながら言う。

この時、亮は周囲を忘れ、完全に素になっていた。と、いうより少し壊れたようだ。

「そう……? フフ、やつぱり、亮くん面白いね」

そんな亮に恵梨花はコロコロと笑う。

素になった亮と恵梨花の二人の様子を見たクラスメイト達は硬直のなか、口だけをあんぐりと開けて、目を点にしている。

そんな中、亮は意識から周囲が完全にシャットダウンされた状態で恵梨花に提案する。

「じゃあこれ以上冷めないうちに、食べよう。えーと、椅子は……」

どうやら亮は、教室を出る、ということも頭から消えたらしい。亮は自分の机の周りを見ると、呆気にとられている明と目が合い

「明、椅子かしてくれ」

と、亮が聞くと明は、はっとなって答える。

「あ、ああ。いいぞ」

明は答えながら、自分の椅子を亮の机に向き合うように置いた。

「ありがとよ。座れよ、恵梨花」

亮はそう言いながら、自分の席に座り、恵梨花を促した。

亮と明の親しいやり取りを見た恵梨花は明を横目に見つつ亮に尋ねる。

「亮くんの友達……？」

「ああ。今朝方、親友になった明だ」

「亮くんの……、親友……？」

恵梨花が目をパチクリさせながら呟くように亮に聞く。

「なんだ、そんな意外か？」

亮は少し不思議そうに聞く。

「うん」

恵梨花の答えに、亮は苦笑する。

「即答かよ。そうだ、これから顔合わせることもあるだろうから、挨拶しとけよ、恵梨花」

「え？ あ、そうね。藤本恵梨花です、これからよろしくね。……

あと、椅子ありがと」

恵梨花はそう言いながら、ペコと頭を下げ、最後はニッコリとする。

「いや、知ってます、知ってます。あ、小路明です、よろしく願います。……いや、椅子なんて、いつでも使ってください」

明は赤くなりながら、なんとか噛まずに言えたような様子だ。

恵梨花はそんな明にもう一度微笑むと、明が用意した椅子に座り、机の上に鞆を置いて、中のものを取り出し始めた。

自分たちのクラスメイトの、あの地味な桜木の言葉によって、あの藤本恵梨花が、小路明に挨拶をした。

亮のクラスメイトたちは先ほど見た、亮、恵梨花、明の三人のやり取りが現実のものとは思えず、本当に自分はそのものを見たのかと目を擦る者が数名、そんなものは見ていないと、再度、記憶の改竄を試みる者数名、絶叫しそうなまま固まっている者数名、亮という人間を初めて見るような目で恵梨花との仲について話し合う女子数名。亮にとって非常にありがたいことに、注目の色合いはどんどん強くなっている。

亮はそんな周囲を気にする様子もなく、恵梨花が取り出すお弁当に目を奪われていた。

恵梨花がとりだす弁当、もとい、亮が食べる量を考慮されたため、重箱の姿となって現れたそれを見たクラスメイトたちは、ぎよつとする。

「何だ、あの量は!？」「あれ、全部、藤本さんが作ったのか!？」
「嘘だろ」

「そういえば、桜木のやつ、いつもふざけた量をトレイに載せてたな」

「と、言うか藤本さんの手作り弁当って、一体どれだけの人間が食べたいか、桜木のやつ、わかってんのか……?」

「う、羨ましすぎる……」

明は、どうやら亮が途中から周囲の声が届いてないように見え、この後、正気に戻った親友がどんな風に事態を收拾するのか楽しみに思い、それに恵梨花が亮にどんな話をするのかも興味をもった。

ひとまずは、自分も腹を満たすため、そして野次馬を続行するためにも、あえて亮に声もかけずに、急いで購買にパンを買いに向かった。

第二十七話 神

「ん？ これって……」

恵梨花が机の上に広げたお弁当を見た亮は首を傾げる。

「ああ、わかった？」

亮が何を考えているのかわかった恵梨花は嬉しそうに微笑む。

「やっぱり……前と同じメニューか？」

「うん。別のやつも入れようかな、って思ったんだけど……、なんか同じのにしたくなってる」

恵梨花はそう言いながら、頬を少し赤く染める。

「そうか。とにかく前と同じように美味そうだ」

亮は恵梨花がどんな気持ちで同じメニューにしたかについては、まったく考えが及ばなかったが、前と同じ好きなおかずが並んだ実に美味しそうな弁当に顔を綻ばせる。

「ありがとう」

同じメニューについて、何か思うようなところをまったく見せない亮に少し不満を感じる恵梨花だが、亮の嬉しそうな顔を見ると、それも気にならなくなった。

周囲からは「前と同じってなんのことだ!？」と頭を抱えて絶叫している男子生徒が数名いるが、亮は気付く様子がなく、恵梨花は気にしなかった。

恵梨花が紙皿、割り箸を亮に渡し、紙コップに味噌汁を注いで亮と自分の前に置く。

亮は味噌汁の匂いにまたも顔を綻ばせる。

「いいよ、食べて」

準備を終えた恵梨花は亮にそう勧めると、二人は手を合わせて

「いただきます」

と、二人仲良く合掌した。

亮はまず、前回はなかった味噌汁に手を延ばし、十分に湯気が立っているそれを、ゆっくりと口に含む。すると、

「あつっ」

と、痛そうに顔を顰めた亮を見て、恵梨花が目丸くする。

「亮くんって、猫舌なの？ もうそんなに熱くないと思うんだけど

……」

「いや、違う。沁みただけだ」

亮は昨日、自分の頬を殴って口の中に傷ができたことを失念していた。

「ああ、そっか……」

恵梨花はそこで、複雑な顔を見せる。そんな恵梨花を見た亮は、からかうような笑みを見せて

「誰かさんが、バチバチ叩くから」

と、片手で頬を抑え、軽く溜め息を吐いて、首を振りながら言う。

恵梨花はさすがにムっとなる。

「亮くんが、あんなこと言うから悪いんでしょう!？」

「そうは言っても、あんなに殴られるなんて……。二往復のビンタなんて、初めて食らったぜ」

亮はからかいの色を隠そうとしない様子で言う。

恵梨花はそんな亮をムスッと見ると、今の亮にとっての会心の一撃を繰り出す。

「そんなに痛いなら、食べられないよね。じゃあ、かたづけね」
そう言いながら、重箱の蓋を持ち上げると、亮は焦りながら一氣に言う。

「すみません、俺が悪かったです。昨日の恵梨花は悪くありません」
亮の謝罪の言葉を聞くと、途端に恵梨花はニッコリして言う。

「だよな」

「はい、そうです」

亮が素早く頷くと、恵梨花は蓋を置いていたところに戻す。

亮はほっと安堵の息を吐くと、食事中に恵梨花を怒らすことだけはもう止めておこうと決意した。気を取り直して、今度は傷のある箇所にはかないよう味噌汁を口に含んで飲み下すと、亮は首を傾げる。

「お、美味しくなかった……?」

恵梨花が、心配そうに聞くと、亮は躊躇いなく答える。

「いや、美味しい」

亮の返答に恵梨花は、少し困惑した様子になる。

「じゃあ、なんで……?」

「いや、不思議なんだよ。恵梨花の作るもの全部、なんでこんなに口に合うのか」

「え……と、美味しいってことでもいいの?」

恵梨花の困惑しながらの問いに亮は力強く頷く。

「ああ。ほんとに美味しい」

そう言って、亮は味噌汁を一気に飲み干す。さすがに味噌汁まで母の味に似たわけではないが、違和感なく口が受け入れて、美味しいと感じるのが亮には不思議だった。

「おかわり」

亮はそう言いながら、紙コップを恵梨花に差し出す。

恵梨花はそんな亮の様子から、本当に美味しいと思っているんだとわかって、充たされた笑みを浮かべながら、亮から紙コップを受け取った。

「なんなんだよ、あの仲睦まじい様子は!？」

「まるで、恋……」

「「「言うな!」「」」

男子生徒達は涙を流しそうな顔で、絶叫する。

壊れた亮は、もう弁当と恵梨花しか見ていない。

味噌汁によって胃を刺激された亮は、目の前のお弁当を次々と平らげていく。

とにかく、早い。

恵梨花が一口食べている間に、亮は確実に三口は食べている。恵梨花は嬉しそうにしながら亮の食べる様子を見つつ、自分も箸を動かす。

「亮くん、この中じゃ何が一番好き？」

ふと、気になった恵梨花が亮に尋ねる。

「ハンバーグかな」

亮は箸を止めずに、迷う様子もなく答えると、恵梨花が少し意外そうな顔を見せる。

「卵焼きじゃないの？」

「ん？ いや、卵焼きは殿堂入りだ。比べるもんじゃない」

亮は真面目な顔で、首を振りつつ言う。

「フフ、何それ？」

「お弁当の卵焼きは、あって当たり前というか……うん、デフォルトだな」

亮は真面目な顔を崩さずに言う。

「そうなの？　じゃあ、これからお弁当作る時は卵焼き忘れないようにするね」

恵梨花が少し笑いをこらえつつ言うと、亮はおもむろに頷く。

「そうしてくれると、助かる」

「わかった」

恵梨花は吹き出しそうになるのをなんとかこらえた。

「あ、でも、弁当とか関係なしに、ハンバーグが一番好きかもな」

「そうなの？」

「ああ。晩御飯の時とか、ハンバーグが一番嬉しかったな」

「……そうなんだ」

「……かった？」

恵梨花は亮の言葉に疑問を覚える。そんな恵梨花に気付かず、亮は何かを思い出したのか、楽しそうに言う。

「そついや、ハンバーグの時は俺も親父もかなりのスピードでおかわり繰り返しから、自分がゆっくり食べれないって、母さんが愚痴って、途中から丼でご飯よそってきたことがあったな」

「丼って……」

恵梨花はどう言ったものか、という顔で呟く。

「ああ、親父も相当食う人だったからな」

「……」

（だった……）

亮は自分の失言にまったく気付いた様子がなく、美味しそうにハンバーグを頬張る。

恵梨花は色々聞きたいことが胸の内に湧いたが、今、この場です

べきことではないのはわかっているの、何も聞かず亮に言う。

「亮くんがいっぱい食べるのって、お父さんに似たんだね」

「違うない」

亮が笑いながら小さく頷くと、恵梨花は亮につられるように微笑む。

「残ってるハンバーグ、全部食べていいよ」

「いいの？」

「いいよ。私そろそろ、お腹いっぱいだし」

「じゃあ、遠慮なく」

そう言いながら亮は嬉しそうに、ハンバーグを己の腹に片付けていく。

恵梨花はそんな亮を見て優しく微笑んだ。

よくよく考えたら、二人でゆっくり話したことなど、数えるほどしかない。亮と出会ってから、時間が濃密に感じていたせい、知り合ってからまだ二週間ほどしか経っていないことに恵梨花は驚きを覚える。

だから、今は何も聞かず、亮から話してくれることを待とうと恵梨花は思った。

「……誰か、俺のことを殴ってくれないか？」

「俺も」

「これは、絶対に夢だ。俺は早くこんな夢から覚めたい」

「落ち着けよ。気持ちはわかるが、俺は一つの答えを見つけたぞ」

「聞きたくない」

「いいから、聞け。……あれは餌付けされてるんだ」

「……それだよ!!」

亮のクラスの男子生徒たちは現実逃避しつつ混乱した頭で、自分達を無理矢理納得させる一つの解を出した。

「あー、美味かった」

亮は重箱の中身を綺麗に片付け、満足そうな声をあげる。が、

「まだ、ウインナーが一つ残ってるよ」

と、恵梨花がそう言いながら、自分の箸でそれを摘んで、亮に見せた。どうやら、亮の死角にあったらしい。

「俺としたことが……」

亮はそれを見て悩ましげに頭を振る。恵梨花はそんな亮と、自分の箸で摘んだウインナーを交互に見ると、亮に聞いた。

「食べる？」

「食べるにきまつてるだろ」

亮は真剣な顔で頷く。すると恵梨花は自分の箸で摘んだそれを、亮の口元に運んでいく。

恵梨花は最初は無意識だった。運んでいる途中でそれに気付いて、頬を少し赤く染めた。

しかし、気付いたからといって、途中で止めるのもどうかと思い、恵梨花はそのままそれを運んで、言った。

「はい」

たいする亮は完全に無意識だった。そもそも理性が壊れていた状

態だった。

口に運ばれたそれを本能の赴くままに、口で受け取る。亮にとつて、その時はそれだけだった。なので、亮は

「あ」

と、言いながら自分の口を開けて、恵梨花が箸で運んだそれを口で受け取った。

亮が余りに自然体だったため、恵梨花の羞恥は最低限に治まっていた。それでもやはり、亮の口に自分の箸が入った時は頬を染める色合いが強くなった。恵梨花は頬を染めつつ、美味しそうに咀嚼する亮を見て恥ずかしげに微笑んだ。

亮は恵梨花の手作り弁当の最後の一口を、ゆっくり噛みしめ、飲み込んだ。

その瞬間、亮は笑顔のまま、自分からサーッと血の気が引いていく音を聞き取った。感じ取ったのではなく、はっきりと聞き取った。それと同時に、周囲から音が、声が、絶叫が、歓声が聞こえた。絶叫、というより悲鳴じみたそれは男の声で、歓声は女の声で。

亮は笑顔で固まったまま、目も動かさずに、周辺を気配のみで探った。

教室内には、亮が覚えていた時の人数は十数名だったのが、今は三十近い数になっている。

その三十近いクラスメイトは、ほぼ全員が自分と恵梨花を見てい

る。見ていなくても、注意は完全に自分達二人に向いていることが亮にはわかった。

そして、自分の横には、一体いつからそこに座っていたのか、馴染みの気配の親友が座っていることに気付いて、亮は笑顔を固定させたまま、首も動かさず声を上げる。

「明」

「なんだ？」

「俺は一体、何をしていた？」

「……はしょって言うと、仲良く談笑しながら二人でお弁当を食べ、締めの一〇を俗に言う『はい、あ〜ん』で……」

「もういい」

亮は最後まで聞かず、というより聞きたくなかったため、明の言葉を遮った。

「……正気にもどったか？」

「……そうらしいな」

そこで亮はようやく、自分が今まで何をしていたか、ぼんやりと、だが加速度的にわかりはじめた。

そして次に、何をしようかと考えた。大きく溜め息を吐くべきか。天を仰ぐべきか。この場を逃走するべきか。状況が悪いどころではない。何をしても無駄のような気もするし、何をしても許されるような気までしてきた。脳は回転を始めているが、その脳は完全に空回りしている。亮がそんな風に考えていると、恵梨花がもう一本ある水筒からコップにお茶を汲んで、亮に渡した。

「はい、お茶」

「……ありがとう」

亮は勧められるままにお茶を受け取り、一口飲み、ふう、と一息

ついた。

本来ならこうすれば少しは落ち着いていいものを、その気がまったくこないことに亮は眩暈を起こしそうになった。

恵梨花を見ると、両手でコップを持ってお茶を飲んでいる。なんてないことをしているだけなのに、可愛くて見とれそうになり、亮は顔を少し赤くする。

どうやら亮は壊れた理性が戻ると同時に、恵梨花と、好きな女の子と向かい合っているという状況に急に気恥ずかしさを覚えてきたようだ。

しかし、今は見とれている場合ではないと、慌てて頭を振る。再度、この事態をどうしようかと思考を始めようとすると、明が口を開く。

「亮」

「……なんだ」

「今、色々考えているんだろぅが……」

「その通りだ」

「まず先に、あれを何とかしたほうがいいと俺は思うぞ」

あれ、といいながら、明が目を向けた方を見ると、そこには亮がよく一緒にいるグループの友人、東、川島、夏山の三人が食堂から帰ってきたばかりらしく、扉の前で、目を丸くし口をあんどりと開けながら固まって立っている。

亮はその三人を見て、思わず手で額を覆う。急速に考えなくてはいけないことが一つ増えたためだ。以前は有り得ないと思っていたから、適当な嘘をついた。しかし、今はこれである。この三人とは友情は続けていきたいと思っっている亮であるが、このまま三人に何も言わなければ、自分はただの嘘つきになってしまう。

亮はどうしたものかと思ひながら、もう一度三人をチラッと見る。

すると東と目が合い、口をパクパクと動かしたのを見て、亮が唇の動き読み取ると「や・く・そ・く」と東が言っているのがわかり、そこで亮は先週に、東にさせられたアホな約束の言葉を思い出した。

「嘘ついたら、ここにいる全員と絶交だからな！ 約束だぞ！！」

思わず亮の口から唸るような音が漏れる。

この状況でそんな約束を持ち出す東の大物さに驚く一方、いや、あれは、ただアホで本能に忠実なだけだと思ひ直す。

この年で本当に絶交ということもないだろうと思うが、このまま三人を放つたらかしにすると、それに近い空気になってしまつことも十分に考えられる。

そこで亮は教室内を軽く目だけ動かして確認する。

男子は机に突っ伏して男泣きしている者がいれば、ボーっとしながら恵梨花を見ている者、殺意と嫉妬をこれでもかというほど強くした目で亮を睨む者がいる。女子はほとんどの数が興奮した様子で、少し顔を赤くしながら、さきほどの亮と恵梨花のやり取りについてヒソヒソと楽しそうに話しているように見える。

どんな風に自分を見ているかは気配で何となくわかっていた亮だが、改めて目で確認すると、状況の余りの悪さに変な笑いが出そうになり口元を引きつらせた。そこで恵梨花が、

「急にさっきからどうしたの、亮くん？」

と、不思議そうに首を傾げる。それにたいして亮は、

「いや……、ちょっと、待っててくれ」

と、言いながら頭をガシガシと掻く。そんな亮に恵梨花は不思議そうな顔をしながらも小さく頷く。

亮はそこで、今一番にすることを、天秤にかけた。
周囲、クラスメイトに対してどうするか、と、三人の友人に対してどうするかを。

結論はすぐに出た。三人の友人の方を先にどうにかしよう。

亮は、どうやら自分は思っていた以上にあの三人との付き合いが好ましいとわかり、大きく溜め息を吐いた。それならば、どうするか。亮はしばし黙考しながら、東とした約束について思い出し始めた。

あの時の約束の内容は、亮が恵梨花と深い親交を結んだ場合、東は恵梨花と少し会話をするか、近くで恵梨花を見ること。川島と夏山とは、はっきりと約束をしたわけではないが、川島は東に便乗していて、夏山は写真を撮りたいと言っていた。

三人の言っていたことを思い出して、亮は一つ閃いた。が、それに対する犠牲が大きすぎて、う、と詰まる。しかし、それ以上のことを思いつかない今、あの三人との友情を守ることが難しいと判断すると、大きく諦めの溜め息を吐いて、恵梨花に声をかけた。

「恵梨花」

「なに？」

「じゃ、写真……、撮らないか？」

「写真？」

「ああ。俺のこの携帯で」

そう言いながら亮は自分の携帯を取り出した。恵梨花は亮の携帯を見ると、すぐに嬉しそうな顔で頷いた。

「うん、撮ろう！ そういえば、亮くんと写真撮ったこと無かったもんね？」

「だろ？」

厳密には梓と咲に撮られまくっている二人だが、お互いそこはノ
ーカウントにした。

明は亮が何を考えているのかわからず、しかし、面白そうに成り
行きを見ている。

亮はそこで明と目を合わせず、わざとらしくキョロキョロしながら、
東と目を合わせ、携帯を振りかざしながら声をかけた。

「東、これで写真撮ってくれないか？」

亮がそう言うと、恵梨花はすぐ隣に明がいるのに、と訝しげな顔
をする。

「お、おう！ まかせろ！」

東は一瞬驚いた顔をしたが、すぐに駆けつけてくる。東が亮の席
に着く前に亮は恵梨花に言う。

「ほ、ほら。明は食事中だろ？」

亮が言うとおり、明はまだパンを食べている最中だった。その様
子を見た恵梨花は、ああ、と頷く。

息を切らす勢いで、短い距離を走ってきた東に亮は携帯を渡す。

「じゃあ、頼む」

「まかせとけ」

東は力強く返事する。そして、東が携帯を亮と恵梨花に向けて構
えると、恵梨花は机を挟んだ形ではあるが、亮に少しでも近づこう
と前傾姿勢をとる。

そこで、さっきも聞いたような女子の歓声と、音はさっきより小
さいが絶望の色を濃くしたような男子の絶叫が上がった。

そんな中、撮影された写真には、嬉しさからくる満面の笑顔でV
サインのポーズをする恵梨花と、口元を大きく引きつらせた亮が写

っていた。

東から携帯を受け取った亮はそれを恵梨花に渡し、「画像を確認した恵梨花は嬉しそうにそれを眺めると、ふと気付いた様子で

「あ、私の携帯でも撮って……」

「いや、後で俺が送ってやるから。……ありがとうな、東」

亮は恵梨花の言葉を遮った後に東に礼を言うと、恵梨花もそれに倣って小さく頭を下げる。

「ありがとう……えっと、東くん？」

「ああ、東新之助……、よく一緒に昼飯食ってる友達だ」

恵梨花が礼を言っつて、東が何か言う前に亮が補足する。

「よく一緒に？ そうなんだ……私は藤本恵梨花です。よろしくね」
亮が補足した説明により、恵梨花が明の時と同じくにつこりと自己紹介をした。

「は、はひ！ 東新之助です！ よろしくお願いします！」

恵梨花からの自己紹介で、東は真っ赤になりながら、挨拶を返した。噛んでいたが、亮も恵梨花もそこはスルーした。

これで、東との約束は完遂した、と亮が思っていると、東が両手で亮の手をがっしりと掴みながら片膝をつき、

「りよ……、亮様、仏様……」

と、滂沱の涙を流しながら言う。

亮は東から神の認定を受けた。

「お、おい、言いたいことはわかったから……」

亮は若干引きながら、目の前のアホを追い払った。恵梨花はそこもスルーするとニコニコしながら、携帯の画像を見ている。

東を目の前から追い払うと、次に夏山を見て、亮は如何にも今思っ出したような声を上げた。

「ああ、そういえば夏山って高性能なデジカメもっていたよな？
……それで一枚撮ってくれないか？」

声をかけられた夏山は表情を変えずに、胸ポケットからデジカメを取り出しながら、亮の席に近づく。

「もう一枚撮るの？」

恵梨花が不思議そうな顔で亮に聞く。

「あ、ああ……。最近の高性能なデジカメはすごいんだぞ？ どうせならそれで撮りたいと思っとな……」

亮は普段デジカメの性能にこだわるわけでは無いのだが、夏山が自分のデジカメとだけ高性能が熱く語っているのを何回か聞いている。

恵梨花は、首を傾げて何も言わなかった。

夏山は亮の席の前までくると無言でデジカメを構え、さつきと同じく男子の絶叫と、女子の歓声をBGMに撮影をした。

亮はデジカメを受け取り、恵梨花と一緒に確認すると、確実に亮の携帯で撮影したものより素人目でもはつきりわかるほど画質のいい画像が写っている。そして、その違いと同じくらい亮が疲れているようにも写っている。

「アハハ。亮くん、ひどい顔してるよ。……でも、たしかにすごく綺麗に写ってるね」

そんな亮の疲れた顔を見て、恵梨花が笑い声を上げ、そして高性能なデジカメに感心する。

「だろ……？ あ、そうだ。これ、夏山のデジカメなんだから、夏山も一緒に三人で撮るか。……いいか、恵梨花？」

亮がそう言くと、恵梨花は笑顔で「いいよ」と、了承する。そこで夏山は目を丸くして、亮を見る。が、亮は川島を見て、

「じゃあ……、川島、撮ってくれるか？」

と、呼びかけると、

「お、おう！ いいとも！！」
と、川島はどっかの番組の誘いを了承するような返事をする、待ってましたといわんばかりの顔で亮に駆け寄り、亮からデジカメを受け取って構えた。

今度のBGMの絶叫には羨望の色が強かった。亮と恵梨花の間に夏山が片膝をついて、座っているせいだからだろう。

撮影を終えると、亮はもう画像の確認をせず、疲れた声で夏山に言った。

「じゃあ、印刷頼んだぞ」

「もちろんだ」

夏山は亮が見たことないほどに興奮した様子で言葉少なく頷いた。

「よろしくね。お金払うから」

恵梨花がニッコリそう言うと、夏山は感極まったように目を閉じて天を仰いだ。

「えっとな……、こっちが夏山巧で、こっちが川島勝だ。この二人とさっきのアホ……、東と、明でよく一緒にいるんだよ」

亮が、簡潔に二人を紹介し、自分達の関係を説明する。

「そうなんだ。藤本恵梨花です、よろしくね。写真撮ってくれてありがとう」

亮の説明を受けて、恵梨花は東の時と同じく自己紹介し、写真を撮ってくれた礼を笑顔で言った。

夏山と川島は、東と違って嘸まなかったが、東と同じぐらい真っ赤になって自己紹介を返した。

自己紹介を終えた夏山と川島の二人は、亮の肩をバン、バンと叩いて強い感謝の目を亮に向け、亮と恵梨花から離れていった。

その様子を見ていた明は亮に声をかける。

「亮」

声をかけられた亮はげっそりとした顔で明を見る。そんな亮に明は賞賛を込めた声で言った。

「見事だ」

「……おお」

亮が力ない返事をする、その後、亮はぼそつと「犠牲はでかかったが」と呟いた。

クラスのはぼ全員が見ている前で、ツーショット写真を撮る、という大きく注目を集める犠牲が。

第二十八話 無双

「後で、さっきの三人の人と、亮くんの間になにかあったのか教えてね」

亮が疲れ果てた精神力を奮い起こしながら、さて次は……と、考え始めると、恵梨花がニツコリとしながら亮に言った。

亮はバツが悪そうに

「……ああ、そうさせてくれ」

と、溜め息を吐くように言った。

怒ってはいないようだが、亮が人前でいきなり写真を撮るようなことをしたのか、その違和感に恵梨花は何かに感づいているようだった。そして、そのことが亮にはわかったので、バツの悪さを感じた。

三人のためにしたこと（自分のためにしたことでもある）は恵梨花を利用してと言ってもいいことなので、後で事情を説明しつつ、恵梨花には謝らないといけないなと考えた亮は、周囲の強い視線に意識が向いた。

三人に対してのことは終わったのだから、今はこの状況を何とかしないといけない。少なくともこの見世物みたいな状況から脱したほうがいい。そう考えた亮は立ち上がりながら何気ない調子で恵梨花に口を開いた。

「そっぴいえば話があるみたいなこと言ってたな。別の場所に行かな

いか？」

亮がそう言うと、教室内のクラスメイトの視線が「ここにいる」と言っているかのように強くなるが、亮はそれを努めて無視して恵梨花を見た。すると恵梨花は亮を見上げて

「ううん、ここで話そ？」

と、ニコっとしながら言う。

「いや、こんな人がいっばいたら落ち着いて話せないだろ？」

亮は恵梨花の返答にたいしての内心の動揺を隠しながら言う。

「大丈夫。座って？」

恵梨花の笑顔は変わらない。

「いや、大丈夫って……、そんなことは……」

亮は口元を大きく引き攣らせて言う。

「うん、座って？」

亮の抗議には耳を貸す気は無い様に、恵梨花は笑顔のまま再度、亮に座るよう勧める。そんな恵梨花に亮は背中に冷や汗が流れるのを感じたが、再度抵抗を試みる。

「いや、恵梨花……」

「座りなさい」

「……はい」

亮が抵抗しようとするも、最後まで言い切らない内に恵梨花からの三度目の、今度は怒った時に出てくるお母さん口調になった勧告によって亮は敢え無く降伏した。

座りながら亮は、最初から最後まで恵梨花の笑顔が、かけらも動かなかったことに一瞬、足が震えた。

そんな亮と恵梨花の様子を見ていた男子生徒達は、またも囁き合
う。

「話がある、とか言ってたよな」

「ああ」

「……わかった。きっと桜木のやつが、藤本さんに告白したんだよ。それを今から振る話だ」

「じゃあ、一緒に写真を撮ったのは？」

「アレだ。最後の記念ってやつだ」

「……」

「……間違いはないな！」

男子生徒たちは自分達に都合のいい解を見つけてるのが実に上手く
なつたようだ。

男子生徒たちの先ほどのやりとりは今の亮には、はっきりと聞こえている。彼らの出した解に対して亮に腹立ちや不満といったものは一切ない。むしろ応援しているほどだ。これから先に恵梨花が自

分にどんな話をしようとも、自分にとって、そして彼らにとって都合のいい解を出すのを亮は多いに期待して恵梨花と目を合わせた。

亮と目が合った恵梨花はまたニッコリ笑った。今度の笑顔は純粹に可愛いと感じる笑顔だったので、亮は少し癒されつつ、ほっと一息つけた。そこで、少し落ち着いた亮は恵梨花に口を開く。ささやかな抵抗として少し声の調子を落としながら。

「……で、何だ？ 話って」

「うん……話って言うより、相談かな？」

恵梨花は亮の落とした声の調子を完全に無視し、先ほどまでとまったく変わらない声の調子で亮に言う。

「……相談？」

声の調子を合わせてくれなくとも最後の抵抗まで止めてたまるかと考えながら、亮は先ほどと同じく声の調子を落として恵梨花に問い返した。

「うん。私ね……好きな人や彼氏が出来たら、したいなって思ったことがいっぱいあるの」

恵梨花はそのしたいことを考えたせいか、楽しそうに言った。

そして、恵梨花のこの言葉により、教室に爆発が起こった。

「う、嘘だろ!?!」

「恵梨花ちゃんに好きな人出来たって本当なんだ!?!」

「ま、まさか……」

「お、落ち着け……、藤本さんは好きな人のことを桜木に相談してるだけだ……!」

「そ、そうだ……、お前の言うとおりだ。桜木のはずはない」

「ああ、そうだ。……あの弁当は相談料なんだよ」
「ああ……ああ！　そうだよ、お前は天才だ！」

亮のクラスに天才が降り立った瞬間だった。

たいして亮は恵梨花の一言により悲鳴がでそうな口の形で固まっていたが、なんとか口を動かした。

「そ、そうか……」

一瞬固まった亮に構わず、恵梨花は続ける。

恵梨花が口を開こうとすると、途端に騒がしかった教室は静まった。

「そうなの。……例えばね、学校の帰りに雑貨屋さんを一緒に覗いたり、ゲームセンターでプリクラとったり、たまにお茶したりして帰ることなんだけど……」

そう言いながら恵梨花はちらつと亮を見る。

「でも、私のその好きな人ね……、私と一緒にいるのを見られるのが嫌みたいで、それが出来ないの」

最後はいかにも困った顔をして、軽く溜め息を吐くように言う。

亮は教室の至るところから「やっぱり、藤本さんには好きな人がいるのか!？」「しかも、何だそのけしからん男は!？」「死ね、その男!」といった男の魂の叫びが耳に届いた。

「そ、そ、そいつは……、た、大変だな……」

亮は声の調子を落とすことなど頭から忘れ、他人事のように言うことだけで精一杯だった。

「うん……、でも、昨日はね？　最後まで一緒に帰ることぐらいは

出来るかなって思ってたんだけど、それも無理だったの」

「……」

亮は何を言えばいいのか、まったくわからなかった。

昨日の帰り道、亮は裏道が抜ける直前に恵梨花達三人と別れた。

理由は当然、三人といるところを他の生徒に見られるのを避けるためだ。

亮が当たり前のように三人と別れようとしたところ、恵梨花が少しシヨックを受けたような顔をしたのを思い出した亮はまたもバツの悪さを感じて苦い顔になる。

そんな亮に向けて恵梨花が更に口を開く。

「昨日は、途中で別れるまでね……どこか寄り道したりするかな？

また同じ電車に乗って、色々お喋りしながら帰れるのかな？」

て……色々楽しみに思いを膨らませていたんだけど……」

そう言いながら恵梨花は眉を顰めて言う。

「出来なかったの。……そこで相談なんだけど、一緒に帰ってもらえるように、私はどうすればいいと思う？」

最後は悪戯っぽく微笑んで言った。

そんな恵梨花を亮は口元を大きく引き攣らせて見た。そろそろ自分の口元の筋肉は引き攣ったまま固まるんじゃないかと思いつながら、そしてこれは余りにずるいんじゃないかと叫びたくなった。

たしかに自分の我が儘で、恵梨花がそんな風に楽しみにしていたことを壊してしまったのは悪いとは思う。悪いとは思うがこれはあんまりではないかと、亮は口を開こうとした。すると、隣から吹き出すような音が聞こえ、そちらに目をやると、手で口を抑え、肩を震わせている親友の姿がある。

「わ、悪い。構わず、続けてくれ」

明は必死に笑いの発作を抑えながら言った。

この親友は親友のピンチを完全に野次馬として見ているな、と亮が眉を顰めて明を見たが、しかし、そのおかげで、少し冷静になれたような気がしたので、少し許すことにした。気を取り直して亮は口を開く。

「えーとだな、恵梨花」

少し冷静になれた亮は今も微笑んでいる恵梨花を見る。

「うん」

「……その人とは二人で、ゆっくり話し合えば解決策も見つかるんじゃないか？」

亮は「二人」を強調しながら言った。

「どんな解決策があるかな？」

恵梨花は小首を傾げる。

「……そこは二人で話し合えば出るんじゃないか」

亮はまたも「二人」を強調して言った。

「じゃあ……例えば、亮くんは、どんな解決策が出ると思う？」

「………た、例えば………」

問われた亮は、嫌な汗を流しながら、懸命に何かないか考える。

「例えば？」

「ちよつと、距離を離して歩く………とか」

「………」

「いや、やっぱり二人で話し合ったほうがいいんじゃないか？」

恵梨花の無言の眼差しが怖くなった亮は言わなきゃよかったと思しながら、再度、「二人」での話し合いを勧める。

「そうかな？」

「ああ」

亮は力強く頷いた。すると恵梨花は斜め上を見るように悩ましげな表情を作る。

亮が黙って恵梨花を見ていると、恵梨花が少し溜め息を吐くようにして言った。

「仕方ないか」

恵梨花のその言葉により、亮はほっと一息が出た。話の続きは誰も見ていないところで出来ると思って。しかし、恵梨花は

「じゃあ、ちよつと無理矢理にでも考えを改めてもらおうかな」

と言つて微笑んだ。亮は愕然と目を丸くする。隣にいる明も目を丸くして恵梨花を見た。

「な……、ど、どうやって……？」

聞かなきゃいいのに、亮の口からついそんな言葉が出た。

「それもね、私がしたいと思っていたことと関係あるの」

恵梨花は楽しそうに言う。

「したいこと……？」

亮が呟くように聞くと、恵梨花は少し俯いて言いくそうに

「うん。私ね、今まで……けっこうな数の人に告白されてね？ で、

それ全部断ってきたんだけど……」

と言つて、俯いたまま亮を見上げる。

「だからね……私、好きな人が出来たら、自分から告白しよう……
……したいと思つてたの。……でも先にされちゃって……」

そう言つて恵梨花は少し気恥ずかしそうに亮を見る。

それと同時に「嘘だろ!」「じゃあ、もう彼氏がいるんじゃないか……」と、そう言いながら頭を抱えて男子生徒たちが泣き崩れていくが、亮は自分は何も見てない、聞いてないといい聞かせなが

ら恵梨花に言う。

「そ、そいつは残念……？ だったのか？ 結果オーライで、いいんじゃないか？」

亮は昨日、自分が言わなかった場合、恵梨花に告白されたんだろうかと一瞬、脳裏を横切った。

「うん。……告白されたのは全然嬉しかったよ？ でも、家に帰ってからそのこと思い出して、自分から言えなかったことに、ちょっと残念な気持ちになったのも本当なの」

「そ、そうか……」

亮としても恵梨花の残念な気持ちがわからないでもないが、昨日してしまったものは仕方が無い。時間は戻せないのだから。

「でもね、気付いたことがあるの」

恵梨花は、嬉しそうに亮を見る。

「な、何がだ？」

亮はそんな恵梨花の顔から脳内に最大級の警鐘が鳴ったのを感じた。

「『好きだ』って、私もその人も言ったけど、その後の言葉を言っていないし、聞いてないなって」

「そ、その後の言葉……？」

亮は昨日の自分は何か言い忘れたことがあっただろうかと、脳内を今日一番のフル回転で考えた。

「そう。大抵の彼氏彼女って、この言葉から始まるんじゃないかなって言葉……だから、それは私から言おうと思って」

恵梨花はそう言って亮に微笑みかける。

微笑みかけられた亮は、『告白』『彼氏彼女』といった単語を中心に、自分が言い忘れたのかどうかわからない言葉を焦りつつ懸命に考えた。そして亮は

「あ」

と呟くと、信じられない、といった顔で恵梨花を見た。

「そう。その言葉」

恵梨花は楽しそうに亮を見る。

そして亮は瞬時に理解した。これから恵梨花が何をしようとしているのがわかって戦慄し、思わず立ち上がった言った。

「ちよ、ちよ、ちよっと待て、恵梨花。お、落ち着け。落ち着けよ？ よ……、要求はなんだ？」

どう見ても落ち着くべきなのは亮であるが、恵梨花はそんな亮に微笑む。

「うん。亮くんが先に落ち着こうか。座って、そして私の話を聞いてくれる？」

恵梨花がそう言うと、亮は飛び出さんばかりに目を丸くする。

「ま、まさか、本当にここですか？ いや、こんな場所じゃなくていいだろ！？」

亮がそう言いながら周りを見渡すと、クラスの人間がほぼ全員にプラスして、他のクラスの人間まで混じって野次馬しているのに気付いてぎよっとする。恵梨花もちらつと周囲を見たが淡々と続けた。

「そうかもね。でも、もうここで言う覚悟固めてきたから」

そう言って、恵梨花は亮を見上げる。

「本気か？ いや、場所だけでも……」

「お願い、亮くん……座って？」

亮が移動をもちかけようにも、恵梨花がそれを遮って、真っ直ぐ亮を見る。

そして、亮は気付いた。気付いてしまった。

恵梨花の唇が、手が少し震えていることに。

さすがに人目に慣れているだろう恵梨花でも、これからしようと思っ
思っていることに慣れていくわけでもなく、ましてや時々、嫌にな
ると言っていた視線の中ですることにはもつと慣れていない。

精一杯の勇気を振り絞って、今、この場所でしょうと思っ
のが亮にはわかった。そして自分の我が儘のせいでそうさせてしま
ったのがわかってしまった。

わかってしまった亮は顔を顰め、頭をガシガシと掻くと、大きく
諦めの溜め息を吐きながら座った。

女の子が、自分が惚れた女の子が、精一杯の勇気を振り絞って、
自分に向かい合おうとしているのに、そこから逃げ出したりしたら
男じゃないな、とそう思いながら。

亮が座って恵梨花と目を合わせると、恵梨花は心底安堵した様子
でほっとする。

そんな恵梨花を見た亮は、自分も覚悟を決め、この勇気を振り絞
っている女の子と全身全霊で向き合えないといけないな、と考え、
自分の雰囲気、存在感を意識的に薄くするためにつけている伊達眼
鏡を外し、今日初めて意識の10割を恵梨花に向けた。周囲と自分
の我が儘を忘れ、そして恵梨花の勇気に応えるために。

恵梨花は亮が眼鏡を外すのを見ると、一瞬目を丸くするも、すぐ
に亮が今の自分と真剣に向き合ったためにそうしたのだとわかり

「ありがとう」

と言って微笑んだ。

すると亮は苦笑して言う。

「あんたはズルいよな。こんなのハメじゃねえか」

意識を切り替えたせいかわい、つい、いつもの口癖がでた。その口癖に気付いた恵梨花は少し眉を顰める。

「また、『あんた』って言った。……それにズルって言うなら、昨日の私の帰り道のドキドキ返してよ、亮くん」

恵梨花がそう言うのと、亮はクツクと笑って首を振る。

「悪かった……。それに、つい出てしまっただよ……。これからまたまに出してしまうかもしれないけど、そこは勘弁してくれ、恵梨花」

亮の言葉に恵梨花は更に眉を顰めるが

「仕方ないな」

と、溜め息を吐く様に言う。

溜め息を吐く様まで可愛く見えるなんて、自分は末期だろうかと一瞬ぼんやりと考えた亮は口を開く。

「じゃあ……。言えよ、恵梨花」

「いいの？ 言っても？」

恵梨花は目を丸くして亮を見る。

「いいよ……。それに言うなって言っても無駄なんだろう？」

亮は肩を竦めながら言う。

「うん、言う……。言いたかったことだから」

恵梨花は頷くと、スーハーと小さく深呼吸して、亮を真っ直ぐ見る。亮も真っ直ぐ恵梨花を見た。

「えと、私は……。亮くんが好きです」

今は亮も恵梨花もお互いしか見ていないが、この言葉により周囲

にいる男子が石になり、女子はぽかんとして恵梨花と亮を交互に見ている。

恵梨花は続けて言う。

「……それで、さっき言ったみたいに亮くんと一緒に学校の帰りにどこか寄り道とかしたいです。だから……そういう形で……」

恵梨花はそう言うと、亮が言っていなかった言葉をつなげる。

「私と付き合ってください」

恵梨花は言った後、自分の心臓が大きく音を鳴らしているのがわかった。この静まり返った教室中に聞こえてしまうのではないかと思ひ、顔を真っ赤にする。少しでも静まって欲しいと思ひながら、俯いて亮からの返答を待った。

目立ちたくないという亮のことを考えたら、自分のやっていることは大きく迷惑をかけることになるだろうが、このままコソコソ付き合い、したいと思っていたことが出来ないのも嫌だったから、こういう形で告白した。そして昨日想いが通じ合ったからと言っても今の自分の強引さのせいで断られる可能性も考えていた。

だから、亮の返答を聞くのは少し怖かった。断られたりしたら、自分はどうなってしまうのだろうか。そこで、今まで自分に告白してきた人の心境が少しわかった気もした。もっとも、これだけの人前で告白した人なんて、そうそういなかったが。

恵梨花がそんなことを考えていると、告白し始めた時からずっと黙っていた亮が声を上げる。

「恵梨花」

「は、はい」

恵梨花が顔を上げながら返事をする、今更ながらに自分は思っていた以上緊張していたのだとわかった。

顔を上げた恵梨花と目が合った亮は、ちらっと机の上に片付けられている弁当、もとい、重箱を見て言った。

「重かっただろ、弁当」

「え？ う、うん……」

予想と大きく違う第一声に戸惑いながらも恵梨花は聞かれたことに返答する。

「そうだろうな……また作ってくれるんだよね？」

亮は苦笑した後、窺う様に恵梨花に聞く。

「うん……、食べてくれるなら」

恵梨花は頷きながら肯定を表す。

「じゃあ、これから作る日は前日にでも教えてくれ。迎えに行く……弁当もつから」

「亮くん、じゃあ……」

亮の言葉に恵梨花の顔がぱあっと、花が開いたように明るくなる。

「ああ……、行きも一緒に行けば昨日の罪滅ぼしになるか？」

亮が肩を竦めながらそう言う

「じゃあ、毎日お弁当作っちゃおうかな」

恵梨花は心底嬉しそうな顔を作る。そんな恵梨花の言葉に亮が一瞬目を丸くすると

「まったく、あんたって……」

と、苦笑しながら言う。

「また、あんたって……」

恵梨花が少し頬を膨らませて亮を見る。

「悪い……。恵梨花」

亮は苦笑すると、先ほどと同じ様に真っすぐ恵梨花を見た。

「はい」

恵梨花も亮を真っすぐ見た。

「俺でいいなら……。よろしくお願いします」

亮はそう言いながら、最後に小さく頭を下げた。

亮の言葉を聞いた恵梨花は、体中から歡喜の何かが出るのではないかと思うほど嬉しくなり、頭を上げた亮に

「はい」

と、満面の笑顔で答えた。

そんな恵梨花の笑顔を見た亮は背中に落雷でも落ちたかのような衝撃を受けて、マジマジと恵梨花を見た。

この笑顔は母の雰囲気とは関係ない恵梨花の、恵梨花だけの笑顔なのだ。亮にはわかった。そして既に好きになっている女の子なのに一目惚れをしたかのように心臓が大きく跳ねて、亮の顔が真っ赤になった。

亮が真っ赤になって何も考えなくなると、恵梨花が嬉しさを隠せない声色で亮に言う。

「今日、一緒に帰ろうね」

「え？ あ、ああ……」

恵梨花に見とれていた亮は、恵梨花の声ではつとなり、小さく頷きながら返事をする。

「裏道じゃないほうだよ？」

「ああ……、わかってる」

亮は恵梨花を見ようと、自分で驚くほどに恥ずかしさが込み上げてきて、うまく見れなかった。

亮の返事に恵梨花がまたも満面の笑顔で「嬉しい」と呟くのを見た亮は、更に顔を赤くする。

恵梨花は亮の様子が少しおかしいことに気付いているが、今更、自分を見て恥ずかしがっているなど考えもしない。

亮を不思議そうに見る恵梨花だが、その行動が更に亮を追い込んでいるとは思わず、首を傾げる。

ふと、時計を見た恵梨花は昼休みの残り時間がもう無いことに気付き、机の上の弁当箱をテキパキと片付けて、立ち上がり

「じゃあ、また後でね」

と、手を振りながら言うと、教室を出て行こうとした。

しかし、扉の前は野次馬で渋滞を起こしているため一瞬、足が止まりかけたが恵梨花が近づくと、その人垣は綺麗に恵梨花の行く道を開けるために別れ、恵梨花は「ありがとう」と言いながら進み、

扉を出る時にもう一度、亮に手を振って、自分の教室に帰って行った。

恵梨花を見送った亮は、これでもかと言うぐらい大きな溜め息を吐いて、頭をガシガシと掻いた。

教室内にいる人間は全員、混乱の極みにいるようで、恵梨花の行く道を開ける時以外、まったく動いていない。亮は恵梨花がいなくなったら、自分にクラスメイトが殺到して質問責めに会うんじゃないかと危惧したが、全員こないようではっきりとした。

動ける者もいたが、眼鏡を外して雰囲気が変わった様に見える亮に話しかけ辛かったため動いていない者もいるが、それは亮にはわからなかった。

眼鏡を外してもまるで気にしない明が笑いかける。

「最後は随分、男らしくなったじゃないか……見直したぞ、亮。けど、これから先大変だろうな……」

明がそう言うと、亮が力無く笑う。

「そうだな……まあ、あの笑顔が見れたから、それで釣りができる……」

「おお、格好いいじゃないか、亮」

明も隣にいたから恵梨花の満面の笑顔を見た。たしかにあの笑顔には相当の価値がある。明もそう思うが、それでも亮の潔さを褒めた。しかし、亮はさらに言い続ける。

「と、考える……」

「……」

「いや、思いたい……」

そう言いながら亮は頭を抱える。

「前言撤回していいか？ 亮」

「勝手にしろ……」

亮が力なくそう言うのとチャイムが鳴り、校内で後々まで語り継がれる「美女と地味男の公開告白」の昼休みが終わった。

第二十九話 眼鏡

「おい、起きろー、亮」

眠っていても、常に半分は起きている亮の意識が明の声を聴き取るが、亮は机に伏せている顔を起こさずに手を振り払うようにして無言で『起こすな』と今の自分の意思を表示した。

昼休み直後の授業、亮は早々と寝た。

最初は授業が終わったら来るであろうクラスメイトからの質問の対策を考えようかと思っただが、すぐにやめた。

やめた理由としては、今日は考えれば考えるほど泥沼にはまっていきそうだと思っただことと、もう疲れ切った自分の頭ではマシな言い訳など思いつきそうにもないから。というよりも昼休みにあったことを誤魔化す方法、言い訳があるなら、是非ともご教授下さいと言わんばかりに、亮はもうどうしようもないと思っただからである。なので、昼休みの後特有の満腹感からくる睡魔に身をまかせた（つまりはいつも通りに）。

今日やっと、やっとの休息のひと時である。授業が終わるチャイムが鳴る最後の最後まで、寝る体勢を崩したくない。そんな亮の思いつきは裏腹に、チャイムは鳴っていないはずなのに、自分を中心に人が集まっているのが亮にはわかった。

「起きろって、亮」「桜木、起きろ」「起きてー、桜木くん」

複数の亮を呼び起こす声により、亮は内心で舌打ちしながら顔を上げ、あくびをしながら明に聞く。

「……チャイム鳴ったか？」

「いいや。キリがいいからって、五分前だけど終わった。チャイム鳴るまでは教室で静かにしてろって」

「最後までキツチリやれよな……で、何か用か？」

そう言っただけで亮は自分を中心に囲い、戸惑い、好奇心、嫉妬を押し殺した様な目で自分を見ているクラスメイトたちに目を向けた。

「何か用かって……、さっきの昼休みは何なんだ、桜木」

佐々木が睨むようにして亮を見る。

「さっきの昼休みって……？ 何がだ？」

佐々木の質問が何を指しているのか大体のところはわかるが、余計なことまで答えたくない亮は、とぼける様にして聞き返す。

「……さっきの告白のことだ」

亮のとぼける様な態度に苛立ったのか、佐々木が不機嫌な色を隠さずに亮に聞きなおす。

「何なんだと言われてもな……。見てたのなら、それ以上言うことなんかないぞ」

あんな事態になった以上、誤魔化すことは不可能であり、言い訳を考えるのも話すのも面倒になった亮は半分開き直りの気持ちで淡々と答える。

「お前、なんか雰囲気か……いや、いい。……じゃ、じゃあ、お前は本当に……いや、お前、藤本さんとは何でもないって今日言ってただろ!？」

淡々と言う亮を見て佐々木が少しだけ首を傾げて不思議そうに亮を見たが、すぐにそんな様子を消し、悔しそうに顔を歪ませるも、すぐに希望を込めるようにして亮に詰問する。

「……何でもないとは言っていないだろ。友達ではないとは言ったが」
亮は午前の休み時間に自分で言ったことを思い出しながら、事実を口にする。

「友達ではないって……、ぐっ……じゃあ……、ほ、本当なのか……?」

佐々木はこの世が終わるのを目撃しそうな顔で亮に聞く。

「……本当って、何がだ？」

まだまだ曖昧な質問に答えたくない亮は、佐々木にそう口にする。

「……っ、付き合ってるのか? いや、今日から付き合っつのか!？」

佐々木は自分の口から言いたくないような顔ながらも、勢いよく亮に聞く。

「誰が？ ……誰と？」

佐々木の勢いなど、まるで意に介する様子もなく亮は飄々と聞き返す。

「ぐっ……、お前が！ 藤本さんと！！ 付き合うのか！？」

佐々木は顔を真っ赤にして、一語一語区切りながら、クラス中に聞こえる大きな声で亮に叫ぶようにして聞いた。

目の前にいる亮は耳を塞ぎたい衝動に駆られるも、さすがにそれをするのはマズイと思い、塞がずにやり過ごした。そのせいで軽い耳鳴りがするのでそれが治まるのを少し待っている、クラス全員が亮が次に言うことを聞き漏らすまいと耳を傾けているのがわかり、亮は頭をガシガシと掻いて、諦めの溜め息を吐きながら言った。

「ああ、そつだ……。恵梨…、藤本さんと今日から付き合う」

恵梨花の名前を言い直したのは大勢の前で、恵梨花がいるわけもないのに名前を口にするのになんとなく気が引けたからだ。しかし、そんな言い直しが自分の言葉を聞いている者に、余計に現実味を感じさせるなど亮には思ってもなく、そんな亮の言葉を聞いた佐々木は、この世が終わったような顔で

「そ、そつか……」

と、消え入りそうな声で呟くと、これ以上何か言う力が出てこな

いのか、何も言わずにフラフラとした足取りで自分の席に戻り、座ると同時に苦悩の表情をしながら頭を抱えた。

そんな佐々木が合図になったかのように、あちこちから男子生徒の悲痛な声が聞こえる。

「ほ、本当なのか……」

「あ、明日から俺は一体何を夢みて生きていけば……」
「わかるぞ……、今までなら『俺のこと好きかも』なんて夢でできるが……」

「ああ……、これからはそんな夢想も空しくなる……」

「いや、『俺のこと好きになって別れるかも』と思えばいいんだ」
「……」

「余計空しくないか……？」

誰かが小さく呟いた突っ込みが、余計にその場の空気を空しくさせた。

昼休みに目撃したことにまだ半信半疑だった男子生徒たちはついに現実を見始めたようだ。

亮が見渡すと、男子は佐々木と同じ様に頭を抱えているか、その場で崩れ落ち、腕で目を塞ぎながら男泣きしているものがほとんどである。

改めて突きつけられた現実に男子はほぼ全員が生きる力を失ったように亮は見えた。

対して女子は、先ほどの授業の時間の間にショックは乗り越え、

好奇心を膨らませたようで、今度は男子に代わって女子が亮を囲み、クラスの女子の代表格とも言える高橋が興奮を隠せない様子で口を開く。

「すごいね、桜木くん。あの恵梨花ちゃん、落とすなんて！」

「え？ ああ……、そうですね」

亮は恵梨花との関係についてはもう隠すつもりは無いが、このようなテンションの高い女子の井戸端会議の材料みたいにされるのはさすがに勘弁してもらいたいと思いつつ、いつもの通りに女子用の丁寧な口調で返しづらいつつ思うコメントを適当に返した。しかし、それが高橋だけでなく、他の女子にも多めに違和感を感じさせ、首を傾げながら高橋が亮に聞く。

「うーん、どうしてそんな口調なの？」

「え……と、何がですか？」

「だから、何でそんな丁寧な口調なの？ 男子には普通の口調で話すのに」

亮はこの高橋の言葉に周囲の自分を見る目が多いに変わっているのを実感してしまった。

今までは男子に普通の口調で話し、女子には丁寧な口調で話してきたが、そのことに数人の男子が突っ込んできただけで、女子に突っ込まれたことは無かった。だから高橋にその点を指摘されたことで自分に注目が集まってしまったことを嫌でも感じさせられた亮は思わず額に手を当てて唸ってしまう。しかし、このことをいつか指摘されることなど、随分前から想定している。そのための言い訳もその時に考えていたので、今こそ、と亮は口を開く。

「いや、実は俺は女の子と話す時は緊張してしまうクチで……」

「……あの三人とあんな普通に話せる人が他の女の子と話す時は緊張するっておかしくない……？」

「……」

実にもっともな意見に亮は何も言えなくなった。

昔とは恵梨花達と会う以前であり、恵梨花達と話すのを見られた後を想定したものではない。余りにも自分のバカな発言に、今の自分の頭のネジは徹底的に外れている、いや、外されてしまったようだと言は結論づけた。

黙って何も言わなくなった亮を高橋が言い詰める。

「それに、今日の桜木くん、雰囲気違うことない？ ……特に、恵梨花ちゃんが告白する前」

「そ、そうですね？ 気のせいだと思いますよ……」

さすがに亮はここではギクリとした。

「うっん、そんなことないと思う。男子はバカになってるから気付いてないけど、今も桜木くんいつもと雰囲気が違う気がするし……」

高橋がそう言うのと、周りの女子も頷きながら亮を見る。

そんな女子達の様子から亮は、今は眼鏡を付けているはずだと、かけている眼鏡をつい手で触って確認してしまった。しかし、眼鏡をつけている今でもそう見られてしまうということは、気持ちの切り替えが完全には出来ていないのだと亮は気付かされた。しかし、それも無理もないかと思う。学校にいる時に100%で素になったのは初めてである。気持ちの切り替えができていないのも無理はない。さつき、佐々木が首を傾げていたのはこのせいかと、女子の観察眼の鋭さに亮は賞賛しつつも内心で舌打ちをした。

そして亮が眼鏡を触って確認した時、そのせいで、高橋だけでなく、周りの女子の記憶を鮮明に呼び起こさせてしまう。

「あ、そうだ。眼鏡外してから、ちょっと別人っぽくならなかった？ ちょっと外してみてよ」

高橋が楽しそうに亮に言う。

亮は何も眼鏡の付け外しで雰囲気が変わるわけではない。気持ち切り替えるスイッチのつもりでかけているだけなので、外したからといって意識を切り替えなければ、何も変わらない。逆も然り、外しているところは正直な所、余り見られたく無いが、ここで嫌と言つと、また面倒な問答が始まりそうだったので亮は渋々眼鏡を外して目の前の自分を包囲している女子達に素顔を見せた。

「これでいいですか」

亮がそう言つと、女子達は黙って亮をマジマジと見た。

後ろの女子が少し顔を赤くして囁き合いながら亮を見ている。

「桜木くん、けっこう格好いいんだねえ」

高橋が感心したように亮に言う。

「普通だと思いますよ」

亮は、それはたんなるギャップだろうと思いつつながら、淡々と返す。何しろ、この眼鏡は自分に最も似合わないと思うものを選んだのだから。

「うっん、そんなことないと思うよ……。ねえ、その口調やめてくれない？ 同級生なんだし」

「……………」

亮は何かいい断り方はないかと考えたが、同級生なんだからと言われると、断る理由を見つけることができなかった。

「ねえ、いいでしょ。緊張する様子なんてカケラも見せないじゃない」

高橋は新しいおもちゃを見つけたような顔で亮に言う。

「……………」

亮は諦めの溜め息を吐きつつ、眼鏡をかけながら言った。

すると、数名の女子が眼鏡をかけるのがもつたいないといわんばかりの顔で亮を見るが、亮はスルーした。

「あーよかった。桜木くんって、今日見てると思っていた以上に面白そうだなだしね」

高橋はこれからが楽しみだといわんばかりの顔で言う。

「いや、俺は普通だと思います」

高橋の言葉は亮には捨て置けず、即座に否定した。

「桜木くん……………」、恵梨花ちゃんと付き合う人が、普通、だとは思えないんだけど、私」

「……………」

これまたもつともな意見で亮は言い返せなかった。

亮が黙っていると、チャイムが鳴った。これ幸いにと亮は教室から出ようと考えた。気がつけば今日は一度も教室から出ていない亮である。

席から立ち上がり、高橋、他数名に断って扉に向かおうとするよ、その扉が開かれた。

「亮くん、トランプしよー」

はちきれんばかりの笑顔で亮に駆け寄る恵梨花を先頭に、梓、咲が続いて教室に入ってくる。

立ち上がったばかりの亮は軽く眩暈を起こして、力なく自分の席に座り込んでしまった。

エピローグ

教室内は三人の登場に驚きつつも、ああ、またか、みたいな空気になっている。

亮のクラスメイトは今日一連の出来事のせいで、「驚く」という感情を磨り減らしてしまったようだ。

「なあ、恵梨花」

座っている亮の傍まできた恵梨花に亮が口を開く。

「なあに？」

恵梨花は実に嬉しそうな顔である。先ほどの昼休みから恵梨花を可愛いと思う気持ちが止まるところを知らない亮は、恵梨花を直視することが出来ず、少し目を逸らしながら言う。

「教室にくるなどはもう言わんが、今日はもう休み時間にはこないと思ってたんだが……」

「あれ？ また後でねって言ったよね？」

「……あれは帰りのことじゃなかったのか……」

亮は意外な落とし穴に落ちたような気分になった。

「なんだ、恵梨花の告白を潔く受けた様に見えたが、そうでもなかったのか？」

恵梨花の後ろから梓が言う。

「いや、そういうわけじゃ……、いや、ちょっとまで。あんだ、昼休みはいなかったのに、なんで見たような言い方を……」

梓の問いに否定しようとするも、亮は梓の言葉に引っかかりを覚えた。昼休み梓は教室にはいなかった。それは間違いないと、亮は確信をもって言える。いたら、梓の気配を感じたら、自分が気付かないはずがないと思うほど亮にとって梓の気配は馴染みになっている。

「なんでって……、これだよ」

そう言いながら梓は携帯を取り出す。その仕草から動画を撮られていたことを悟る。

「また、それか……誰かに頼んだのか？」

「まあね。あたしがいたら、君も恵梨花も落ち着かなかったでしょ？」

亮と恵梨花の性格を指摘しながら、梓が悪戯っぽく笑う。

「……その配慮には感謝する」

亮は不承不承、納得しながら言った。

「まったく……、あたしが『恵梨花の初めての告白』なんて最高に

いい画を何の媒体に記録もしないなんて、そんなこと有り得ないと
思わなかったのかい？」

梓は首を振りながらしみじみと言う。

「……言われてみればその通りだな」

亮は反論する箇所が見当たらないことがおかしいのか、梓がおかしいのか、それとも納得してしまう自分がおかしいのか少し悩みそうになった。

「梓、もうこれで、最後にしてよね」

亮と梓のやり取りを聞いていた恵梨花が半分睨むような目で梓に言う。

「それは無理。あたしの生き甲斐だから」

梓は考える余地などないように否定した。

「もう！ いい加減、怒るよ！」

「……怒らせると怖いのは確かだと思うぞ、梓」

憤慨する恵梨花を尻目に亮は自身の経験から忠告した。梓にだけ聞こえるよう口に手を添えて小声で。

忠告したのは亮もこれから恵梨花とセットで被写体になる機会が多くなりそうなので、それは勘弁してもらいたいと切実に思ったからである。

「さすが、実感が籠もってるね」

梓は座っている亮に少し屈み、茶目つ気たつぷりに亮にだけ聞こえる声で返す。

「……ちよつと、顔近くない？ 梓」

恵梨花は眉を寄せながら、少し顔の距離が近くなった二人を見て不機嫌さが混じった声で言う。

「ああ、ごめんよ……心配しなくても、亮くんを誘惑したりしないよ」

梓は亮から近づけた顔を離すと、悪戯っぽく笑って恵梨花に言う。
「わかってるわよ……、ちよつと気になったただけだし……」

恵梨花はそう言いながら、顔を少し赤くしてそっぽを向く。

梓はそんな恵梨花を見て楽しそうに微笑む。

誘惑云々で何てことを言うんだと思った亮だが、顔を赤くした恵梨花に、「ごちそうさま、と梓に感謝の念が湧いてしまい、軽い自己嫌悪に陥った。

咲はいつの間にといったかのように明から席を譲ってもらい、亮に向かって座り、トランプの蓋を開けている。

「……俺は今心底、桜木が羨ましいと思っている」

「俺も」「俺もだ」「まったくな」

「なんで、あいつ、あの三人に囲まれてあんなに自然体なんだ？」

「それより今日のあいつは俺には別人に見える気がする」

「俺もだ」「お前もそう思うか」

「あんなにもてる桜木は俺の知ってる桜木じゃねえ」

「……そこか？ いや、たしかにそう思うが」

「桜木って、普段はいるかいらないかわからんようなやつだったのにな……」

「……」

過去形でなければ亮が聞いたら喜びそうな言葉を最後に、男子生徒達は黙り悩みつつも、クラスに現れた実に見た目麗しい三人の美少女に目を奪われた。

女子生徒達は、臆することなく恵梨花、梓の二人と話している亮を感心の目で見ていた。

「ねえ、恵梨花ちゃん」

チャイムが鳴るまで亮と話していた高橋が恵梨花に声をかける。

「あ、希ちゃん。そういえばこのクラスだったね」

そつぽを向いていた恵梨花は、高橋に声をかけられて微笑む。そんな二人の様子を見た亮は恵梨花に聞く。

「二人とも知り合いか？」

「うん。学校の帰りに何度か一緒になつて友達になつたの」

恵梨花が亮に答える。

「恵梨花ちゃん、今度二人の馴れ初め聞かせてね」

高橋が興味津々といった様子で恵梨花に言う。

「馴れ初めって……」

そう言つて恵梨花が少し困つた様子で亮を見ると、亮は小さく首を振つた。

あれが馴れ初めかどうかはわからない亮だが、恵梨花と知り合つきっかけの日のことだけは黙つてもらわないと、と思つ亮である。

恵梨花もそこは亮の意図を汲んで

「ごめんね。あんまり詳しいことは話せないけど、また今度ね」

と、すまなさそうに高橋に言つた。

「いいけど。じゃあ、また今度ね」

高橋は首を傾げながらも、追求せずに亮を中心とした集団から離れた。

「そつだ！ 亮くん、トランプしよう！」

恵梨花が忘れてた、といった顔で亮に言う。

「……なんで、また、トランプなんだ？」

このメンツでトランプするなど、さぞかし注目を浴びるだろうな
と思いつつ恵梨花に聞く。

「朝に咲としたんだよね？ 咲がまたしたそうにしてたし、私も一
緒にしたいなって思ったから」

にんまりと恵梨花が言う。

「……そうか」

こうまで、楽しみといった感じで言われると断ることなどできな
い。元より断るつもりはなかった亮であるが。

「咲が亮くんを圧勝したって言ってたけど、亮くん、そんなにトラ
ンプ弱いのか？」

「……おい、咲」

思わず突っ込んだ亮である。亮が咲と目を合わせようとすると咲
はぶい、と亮から目を逸らす。

咲とのトランプの戦績は三戦して、亮の一勝、咲の二勝である。
亮の一勝は順当な結果だった。一回目の負けはわざとである。二回
目の負けは願ったにしても、咲の運が勝った結果である。しかし、
咲は亮の一回目の負けは亮がわざとしたことを知っているはずなの
に、ちゃっかり自分の勝ち数にカウントしている。わざとにしても
結果的に咲が勝った訳だから構わないのだが、圧勝したと言われる
と、釈然としない亮である。

「……まあ、いいか。ババ抜きは無しだからな」

深く考えるのはやめて、亮は三人に向かって言う。

「じゃあ、何しようか……、ジジ抜き？」

恵梨花が亮に相槌を打ちながら何のゲームをするか考え始めるも、
咲が一枚を抜いてケースにしまうのを見て呟くように確認すると、
咲が頷いて肯定を表す。

「やっぱりそうか……、恵梨花ここ座れよ」

亮は立ち上がりながら、恵梨花に自分の椅子を示す。

「いいの？」

「ああ……、小野、椅子借りていいか？」

恵梨花の問いに返答しながら、亮は隣の席に座っている小野に声をかける。

小野は自分が声をかけられることは思いもつかなかった様子で目を丸くして亮を見るが、そのすぐ横に立っている梓を見て頷き、立ち上がった。「ほらよ」と言いながら亮に椅子を渡して、まだも頂垂れている友人の佐々木の元に向かっていった。その後姿に亮は「ありがとう」と声をかけ、小野の椅子を自分の机の横に置くと、梓に勧める。

「あんだ、座れよ」

「君は案外、気が利くんだな」

梓は意外な顔で感心したように亮に言う。

「トランプするのに、女立たせて自分が座ったままでいれるかよ」

亮が肩を竦めて言うと、恵梨花が亮に聞く。

「亮くんは？ 座らないの？」

「俺は……」

そう言いながら亮が自分の席の周りを見ると、後の席が留守みた
いなので、その椅子を動かして恵梨花と梓の間に置いた。

「じゃあ……」

と言って、亮が椅子に座り顔を上げると、目の前の光景の華やか
さに固まってしまった。すぐ左に恵梨花、正面に咲、すぐ右に梓が
座って三人共こちらを見ている。

美少女三人に囲まれてランプだ。それはわかっていたが、覚悟
もしたが、さすがにこのシチュエーションは不味いのだと思った。
目立つ、目立たない関係なしに平凡な見た目の自分がこの中に混じ
っている、不自然で仕様がな。周囲に目を動かすと、咲の横に
立っている明と目が合う。

「明、お前も入れ」

「は？」

「は、じゃない。お前も入って、五人でジジ抜きするんだよ」

「……いいのか？」

「もちろんだ。と、言うより入ってくれ……いいよな？」

亮は三人に向けて確認をとる。

「いいよ」

「あたしもかまわないよ」

「……」

恵梨花、梓が答え、咲は頷くだけで、肯定を示す。

「じゃあ、お前もそこから椅子とって……梓と咲の間に座れよ」
亮がそう言うのと明が近くから椅子をもってきて座る。五人で一
つの机を囲んで椅子に座ると非常に狭いが、男を一人増やすことで自
然さが増し、少し落ち着いた亮である。

「お、おい。明があの集団の中に混じったぞ！」

「なんて羨ましいやつだ……」

「しかも、山岡さんと鈴木さんの間だぞ……」

「一人分けてくれ……」

「桜木の友達になつたらあの中に入れるのかな……」

「……」

「ハ、ハハハ……、そんな理由で友達になるとかおかしいだろ」

「そ、そうだよな……ハハハ」

「でも、あいつはクラスメイトだよな……」

「クラスメイトなら友達でもおかしくないよな……」

「そうだよな……」

「ハハハハ……」

男子生徒たちは渴いた笑いを零しながら、亮にとって明に次ぐポジションを得ようと決意した。

女子生徒たちはそんな男子生徒たちを冷めた目で見ていた。

「もうちょっと慌てた君が見れると思つてたんだが、随分落ち着いてるな」

梓が悪戯っぽく亮に聞く。

「……昼休みの余韻のせいだろうな。あと、半分開き直つてるところもある」

たしかに自分でも今は今日の他の休み時間より落ち着いているのがわかる。高橋に言われてわかったことだが、素になった時の気持ち完全には切り替わってはいないせいだろうと亮は考えた。開き直りは言わずにはいれなかった。

梓がクツクと笑う。

「余韻ね……、どうせなら常日頃からそれでいればいいのに」

「冗談じゃない」

「……なんだ、まだ気にするつもりか？ AだのBだの……」

亮の返答に梓が訝しげに亮を見る。恵梨花も同じように亮を見た。

「あんた達といる時に目立ってしまうことはもう受け入れる。と、言うよりも、もう取り返しがつかんしな」

「なら、どういう……？」

亮は肩を竦めて言った。

「恵梨花、梓、咲と一緒にいない時は今まで通りにいっただけだ」

「……あたし達と一緒にいない時は目立たないようにしていくってこと？ ……無理だと思うけど、あたしは」

梓が呆れた目を亮に向ける。

「……学校の中でも普通に会ってくれるんだよね？」

恵梨花が確認するように亮に聞く。

「ああ」

「どの休み時間でもここに来ていいんだよね？」

「……も、もちろんだ」

亮が少し躊躇いながらも頷くと、恵梨花はニッコリして言った。

「じゃあ、いいよ。一緒にいない時までアレコレ言うのもおかしいしね」

「たしかにね……、無駄な努力だと思うけど」

梓は呟くように言いながら首を振る。

「まあ、平穩に学校生活を送れたらいいんだよ俺は。目立ったとしても平穩に過ごせるならまだいい。しばらくは面倒が多いかもしれないが、いずれは落ち着くだろう。いや、落ち着くはずだ」

亮はそうなって欲しいと願うように言った。

そんな亮の願いは無駄に終わるだろうと思いつながら梓が疑問の声を上げる。

「ところで、どうしてそんなに平穩に過ごすことにこだわるんだ？

前にも聞いたが、あれだけの理由じゃ君がそこまでこだわるのもわからないんだが」

「うん、ほんとに。何で？」

首を傾げながら恵梨花も亮に聞く。

「……さすがにここではちよつとな……、今度話すよ」

亮は苦笑して言う。

「うん、じゃあ今度聞かせてね」

「ああ」

「ねえ、亮くん」

「なんだ？」

亮は恵梨花に目を合わさず、返事をした。

目を合わせていないのは何も今だけではない。この休み時間に入ってからまったく恵梨花と目を合わせようとしない亮である。今の場所に座ってから余計にだ。亮は座ってから気付いた。少し動けば肩が触れ合うほど距離が近すぎることに。逆隣の梓も然り。距離の近さのせいか、梓と話す時でさえ落ち着かなくなる。恵梨花だとどうなることかと思い、亮はまともに恵梨花と目を合わせられずにいる。

すると、恵梨花が座りながらも屈むようにして亮の正面に自分の顔を動かした。

「なんで、さつきから目合わせてくれないの？」

「……気のせいだろ」

ぎょつとしながらも亮は目と鼻の先にある恵梨花の目を逸らして言う。実に説得力のない言葉を。

「ねえって」

またもや目を逸らされた恵梨花は両手で亮の頬を掴み強引に自分の正面に向けた。

無理矢理、恵梨花の顔を正面に見ることになった亮は途端に顔を赤くして、しどろもどろに言う。自分の頬を掴む恵梨花の手が異常なほどに柔らかいと感じながら。

「あ、いや、まあ……すまん」

「なんか変ね、亮くん」

恵梨花は首を傾げ不思議そうに亮を見る。

梓はそんな二人を見て、肩を震わせる。今更、恵梨花の可愛さに照れている亮と、それに気付かない恵梨花がおかしくて。

明は目を丸くして親友とその彼女を見ている。

「……死ね、桜木」

「俺の友人の桜木に向かって何てことを言っんだ」

「いや、俺の友人だ」

「違う、俺の親友だ」

男子生徒達が口々に亮の友人であると言い張るのを見た女子生徒達は、このクラスの男子は馬鹿しかいないのでは、と嘆いた。

亮と恵梨花がいつもの様に二人の世界に入ってしまう直前、いつの間にか咲は人数分にトランプを配り終えていた。

明と咲は既に手にもち、ダブったカードを捨てている。

亮、恵梨花、梓の三人もそれに倣ってカードを手にとり、捨てていく。

前準備の終わった亮は四人が視界に治まるように座り直すと、ふとある考えが頭をよぎる。

(休み時間にこうやって集まってトランプするなんて、まるで……)と、そこまで考えた亮はこの休み時間が始まってから、本当に今更ながらのことに気付いて愕然とした顔で固まる。

隣で固まった亮を見た梓が悪戯っぽく亮に言う。まるで、亮の考えていることを覗き込んだかのように。

「どうだい、亮くん？」

「な、何がだ……？」

固まりつつもなんとか返した亮だが、梓が止めを刺す。

「特Aグループに入った気分は？」

止めの一言を受けた亮は口をあんぐりと開けて固まってしまった。

固まること数秒後、目だけを動かすと正面の咲と目が合った。すると咲はニコッと微笑んだ。

普段の咲からはとても見れない表情と、とても可愛かったことから、亮はドギマギして目を逸らす。

逸らした先には梓がいて、茶目っ気たっぷりの笑みで亮を見る。

亮はその時、一瞬だが梓の眼鏡の奥の素顔が見えたような気がした。ジツと見ていると吸い込まれそうな感覚がしたので、慌てて目を逸らした。

慌てたせいかわ、首ごと動かしてしまい、正面から恵梨花を見てしまった。

この休み時間、ようやく亮から目が合わされた恵梨花は、昼休みに亮を骨抜きにしたあの満面の笑顔を浮かべる。

亮はまたも心臓を大きく跳ねさせられ、顔を真っ赤にすると、力なく椅子に深く沈みこんだ。

少しの間黙り、だらしなく座ったような亮を四人が揃って見ていると、亮はクツクツと笑って両手をあげ、首を振りながら言った。

「参ったよ、あんたらには……お手上げだ」

そう言うと亮は苦笑しながら、三人を見渡す。明も視界に入っているが、これは三人の美少女に向けての言葉であるから。

咲はまたもニコッと微笑んだ。

梓は悪戯っぽく笑った。

恵梨花は変わらない笑顔である。

この三人といることにより起きるであろう面倒事がどれだけか、学校のゴシップに疎い亮にはわからない。

わからないが、この三人といるのは純粹に楽しいと思える。

だから、今はもうそれでいいと亮は思った。いや、思わされてしまった。

そして何より初めて好きになった女の子が自分のことを好きだと言い、付き合うことが出来たのだから、そのことに普通の少年らしく喜ぼう。

そう思うと亮は差し当たりトランプに弱いという汚名を返上するかと考え、目の前にいる恋人と友人達に向かって、手にもつトランプをかざしながら笑いかけた。

「じゃあ、やるか」

〔第一章 Bグループの少年と特Aグループの美少女 完〕

エピローグ（後書き）

タイトル通りです、第一章完結です。

ここまで読んでくださった方、本当にありがとうございます！！

そしてトランプを楽しみにしてくれてた方、トランプを始めるところで切ってしまいました。申し訳ありません。

一章のほうもよろしくお願いいたします！

逆(前書き)

注) コーヒーを片手に用意してください、もしくはコーヒープレイク時にお読みください。

誤字・脱字ありましたら、報告頂けると助かります。

逆

「すごい視線の数だな……」

うんざりしたように亮が呟いた。

「ほんとにね……、でも、ほとんど亮くん見てるよ?」

恵梨花が同意すると、亮は意外な念を隠せない声で聞く。

「わかるのか?」

「そりゃ、わかるよ。いつもと感じが全然違うし」

「まあ、そうか……そうだよな」

亮はしみじみと呟くように同意した。

現在亮と恵梨花は、絶賛注目を浴びながら二人で下校している。

高校に入学して今まで、亮が帰る時に注目を浴びるようなことなどまづなかった。

亮が一人で帰る時は人通りの少ない裏道を通ることが多いし、そんな時でも亮は気配を殺して目立たないように帰っている。表の道、今恵梨花と歩いている道で帰る時でも一人ならやっぱり気配を殺して歩くし、一人でない時はクラスの友人達と一緒にいる。そんな友人達と一緒にいても特別目立つ友人達ではないから、やっぱり注目を浴びるようなことはない。

それが今では、視界に映る人のほぼ全ての視線が亮と恵梨花の二人に集まっている。

今までの、いや、昨日までの亮なら絶対に浴びることのない注目度合いである。

原因は何故か。それはわかりきっている。

亮はちらつと、自分の右隣を歩く恵梨花を見た。すると恵梨花はすぐに亮の視線に気づき、「ん？」と小首を傾げ、亮を見上げる。目の合った亮は顔が少し熱くなるのを自覚しながら、「なんでもない」と手を振って目を逸らした。そんな亮に恵梨花はさらに小首を傾げるが、何も言わず並んで歩く。

亮は内心で嘆息しつつ思う。何度見てもとんでもない美少女だな。こんな特A（特に目立つ）の美少女が自分の隣を歩いているのだから、注目を浴びるのは当たり前だな、と。わかっではいたが、ここまで注目を浴びてしまうとは自分の見通しが甘かったのを痛感させられた。

視界に映る生徒は男女問わず、まず信じられないような目で亮と恵梨花をあんぐりと見る。次に呆けたような顔になる。そしてここからが男女で分かれる。

男子の大半は恵梨花の隣で歩いている亮を、嫉妬の炎を灯した目で睨む。中には親の仇を見るように歯ぎしりの音が聞こえそうなほど強く、殺意の籠った目で睨む者もいる。睨まない者はこの世が終わったような顔つきになり、ため息を吐いては恵梨花と亮を交互に見ている。他には、これは何かの冗談かドッキリだろうと自分に言い聞かせる様にして、ふっと鼻で笑ってカッコつけ、現実の区別がつかない者などがいた。

対して、女子生徒は恵梨花のお相手がアレなのかと訝しげに亮を見る者、嬉しそうな恵梨花を生暖かい目で見る者、頬を少し染めてはご機嫌な恵梨花が可愛いと囁く者、などと別れているが、大半の女子生徒は概ね好意的にこの事態を捉えているようである。

女子生徒にまで睨まれないですんでいることだけが、この時の亮の救いでもある。

周囲の視線がどのようなものであれ、ここまでの注目を浴びるのは中学校の時でもなかっただろう。そう思った亮はふと恵梨花に尋ねる。

「恵梨花が普段こっちの道で帰る時も、いつもこれぐらいなのか？
視線」

尋ねられた恵梨花は少し笑って、手を振りながら否定する。

「いつもはこれほどじゃないよ、これの半分もないぐらいだと思う
よ」

「この半分もないぐらい、ね……」

それでも相当な数だろうなと考え、以前に恵梨花が一人になりたくなる時があると言っていたのも無理はないなと思った。そこで亮はまた尋ねる。

「じゃあ、今日はいつもより視線が多いだろ？ 嫌にならないか？
恵梨花はこれにも笑って否定する。

「今日は別に嫌じゃないかな？ ちょっと見せびらかしたい気分？」

そう嬉しそうに言う恵梨花に亮は首を傾げる。

「見せびらかす？ 何を？」

「決まってるじゃない、亮くんのことよ。私の彼氏なんだって」
そう言う恵梨花は実に嬉しそうに亮に微笑む。

「……俺じゃ、見せびらかす対象にならないだろ」

亮が少し呆れつつ苦笑して言うと、恵梨花は眉を顰める。

「何で？」

「ほら、俺ってこの程度の見ただしな」

亮が肩を竦めると、恵梨花は憤然と言う。

「何言ってるの、眼鏡外したらそれだけでも格好いい癖に。それに見た目の話じゃないよ」

「……そうでもないと思うけどな？ それにそう言うなら今は眼鏡つけてるぞ？」

好きな子に格好いいと言われるのは純粹に嬉しいが、見せびらかすレベルではないだろうと亮は思っている。首を傾げつつそう言うと、恵梨花は小さく溜め息を吐いた。

「だから見た目の話じゃないんだけどね……、もういいよ。とにかく私は亮くんを自慢したい気分なの」

諦めるように言う恵梨花だが、最後はにっこりと微笑む。

「そ、そうか……」

恵梨花に微笑まれると、未だ顔が熱くなるのが治まらない。ドキマギしつつ亮はすぐ隣にいる恵梨花から少し目を逸らす。出来ることならこの、恐らく日本一可愛いだろう顔を見ていたいのだが、どうも昼からそれが難しくなっている。どうしたものかと、内心で溜め息を吐く亮であった。

この時、亮と恵梨花の近くにいた同じく下校途中の女の子のグループが二人の会話を聞いていて、その中の一人がボソッと呟いた。

「……普通、逆じゃない？」

「「「……」」」

その場にいる全員が無言で同意を表した。

この逆とはもちろん、見せびらかす側とその対象であることは言うまでもない。

「しかしな……」

照れから目を逸らしたことを誤魔化すように亮は口を開く。

「何？」

恵梨花は小首を傾げて亮を見上げる。

「俺の高校生活で、HR中に担任にイジられる日がくるとは思わなかったな……」

亮が少し遠い目をしながら言うと、恵梨花が少し悪戯っぽく笑いながら聞く。

「ふふっ、イジられたんだ？ 何で？」

「ああ……」

亮は小さく頷くと、帰りのHR中に起きたことを話す。

一日の最後の授業が終わり、HR前の休み時間、亮は誰に起こされようと寝続けた。もちろん最後の授業も今日一日の疲れをとるようにひたすら眠っていた。

人懐っこい顔立ちで、若い男性の亮のクラスの担任、山下悟ヤマシタサトルが入ってきたところで、亮は渋々顔を上げた。

起立、礼が終わり、席についた生徒達を山下が見回すと、少し目を見張って苦笑する。

男子生徒の大半が、非常に疲れたような、人生の夢を失ったような遠い目をしていて、女子生徒はチラチラと亮を見ている者が数名いる。

それを確認した山下はからかうような声で一人の生徒の名を呼ぶ。

「桜木」

「はい？」

HR中に自分の名を呼ばれることなど滅多にない亮は、担任が教室に入って開口一番に自分の名を上げたことに驚きを隠せず、間拔けな声で返事をする。頬杖をつき、眠たい目を擦りながら。

何故、自分の名を呼んだのかと訝しげに見上げる亮と目が合った山下は、ニヤニヤしながら言った。

「春が来たらしいな」

その言葉を聞いた亮は、頬杖をついた姿勢のままずっとこけそくに

なり、危うく「何で、教師のあんたまでそんなこと知ってんだ！」と、真面目な生徒（授業でいつも眠っていても、自分は目立たない真面目な生徒だと亮は思い込んでいる）としてはあるまじき暴言を叫びそうになった。代わりに、唸るようにこう言った。

「……もうすぐ6月ですよ、先生。夏です、春は終わりました」
亮の返しに山下は少し眼を見張ると、喉の奥を鳴らしながら言った。

「そうか、そうか。お熱いらしいからな。たしかに、春と言うより夏かもな」

亮は「お熱い」が強調されて言われたのがわかり、頭を抱えそうになりながらも、片手で眼鏡をクイッとやりながら反論した。

「先生、生徒のプライバシーをこんな場所でそのように話すのは如何なものかと思いますが」

亮がそう言うと、山下は笑いを噛み殺しながら言う。
「昼休みに、学校の教室でイチャついてたやつが何のプライバシーだ？」

実にもつともな意見である。

「……先生、もういいから、さっさとHRを終わらせてください」
これ以上の反論は墓穴を掘る。特に今日の自分はその傾向が強い。そう判断した亮は、苦い溜め息を吐きながら言うと、山下は小さく笑い、いつも通りのHRを始めた。

このやり取りの間、男子生徒のかなりの数が亮を睨み、女子生徒は生暖かい目で亮を見ていた。

「へー、そんなことが。何で、山下先生がもう知ってるのかな？」
亮の話聞いた惠梨花が疑問の声を上げると、亮が疲れたような声で返答する。

「さあな……、大方、誰かが言ったんだろうけど、昼休みからほんの二時間しか経ってないんだぞ？ どれだけ流れるの早いんだよ」
不貞腐れた様に言う亮に惠梨花が微笑む。
「ふふっ、本当にね」

亮と惠梨花のことは彼らがトランプをしている間に、方々で流れていたのだが、二人には知る由もない。

「それに惠梨花が教室の前に来たのを見て、また俺に何か言おうとしてたからな」

亮が言うように彼のクラスのHRが終わる直前、先にHRが終わった惠梨花が亮を迎えにクラスの前まで来た。扉のガラス越しに惠梨花を認めた山下はからかうような眼を亮に向け、何か言いかけるが、他の男子生徒が一斉に惠梨花に注目したため、騒ぎを起こさなためにと何も言わなかった。

「これで担任にまで、注目されてしまったなー……」

亮が昨日までのまるで注目度が0に近い自分を思い出しながら遠い目をして言うのを見た惠梨花は、恐る恐る聞いた。

「やっぱり、ちょっと怒ってる……？」

「え？ ……ああ、悪い。惠梨花を責めるつもりで言ったんじゃない。それに怒ってもないから」

亮が苦笑しつつ手を振って否定するが、惠梨花は不安感が拭えず、また聞いた。

「本当に？ その……、後悔しない？」

「後悔？ 何の？」

亮は恵梨花の質問の意味がわからないように、聞き返す。

「えっと……、私の告白を断らなかつたこと」

恵梨花が言い難そうに言い直すと、亮はまたも意味がわからないような顔を作る。

「断る……？ 告白を……？ ……あ、ああ……」

途中ではつととなったような亮を恵梨花が不思議そうに見上げる。

「どうしたの？」

「え？ いや、あの時な……」

亮は苦笑すると、付け加えるように言う。

「『断る』って選択肢を思いつかなかつたなって」

恵梨花は少し眼を丸くして亮を見る。

「そうなの？」

「ああ……、だから後悔なんてしようがない」

亮がそう言つて笑いながら、先ほどの恵梨花の問いを否定する。

そこで、恵梨花は自分の不安感が少し拭い去られるのを感じたが、もう一度聞いた。

「じゃあ、あの時……、その『断る』って選択肢があるのを思いついてたら？」

今度は亮が不思議そうに恵梨花を見る。

「さつきから変なこと聞くな……。断る訳ないだろ」

亮が断言すると、恵梨花は不安感が拭い去られるのを感じ、込み上げる喜びを抑えながら亮を見る。そこで亮が少し笑つた。

「初めて好きになつた女の子から告白されて、何が嬉しくて断らなくちゃいけないんだ？」

この亮の言葉により、恵梨花は自分の心配は完全に杞憂だったのだと確信した。それどころか、昼休みの告白時の振られる心配すらも無駄なことだったとわかり、不安感が拭い去られるどころか、体中に歓喜が湧くのを感じた。

「そっか……」

先ほどまでであった不安感を吐き出すように恵梨花が言う。

「そら、そっだろ」

亮は当然とばかりに頷く。

「……私が初めてなんだ？」

恵梨花は少し茶目つ気を込めながら亮を見上げる。

「……まあな」

言われて照れたのか、そっぽ向きながら亮が返答する。

「……亮くん」

呼ばれて振り向くと、満面の笑顔の恵梨花が言った。

「大好き」

ここでまたも告白されると思っていた亮は目をぱちくりさせた。そして言葉が頭に沁みこむと、顔を真っ赤にして、口をパクパクとする。

そんな亮が面白くて、恵梨花はクスリと笑って言う。

「私も初めてだよ……男の子好きになったの」

亮は大きく目を見開き、慌てて恵梨花から目を逸らした。

「そ、そっか……」

「うん」

満面の笑顔のまま恵梨花が頷いた。

「あの二人やっぱり何か逆だよ……」

先ほどと同じ下校途中の女の子のグループが、耳を澄まして二人の会話を聞き取り、その中の一人が呆れたように言った。

「でも、こうやって見ると意外にお似合いだよな？」

「ああ、うん、わかる。本当に意外だけど」

「それにしても、恵梨花ちゃん、本当可愛い……」

女の子達はいきなり行われた恵梨花の告白を目の当たりにし、頬を少し赤くしている。

ちなみにこの場合の逆とは、告白を断られることを心配するのは、美少女の方でなく、地味男のほうだろう、ということである。

照れさ故、目を逸らした先にゲームセンターを見た亮は、ふと思い出し、振り返って問いかける。

「寄るか？」

「どうして？」

恵梨花が小首を傾げて問い返すと、亮は無言でゲームセンターを親指で指差す。

亮が指差した先を見た恵梨花は、嬉しそうに頷いた。

「うん、寄ろう。プリクラ撮りたいな、私」

亮は苦笑する。

「プリクラなんて中学校の時以来だな」

そう話しながら二人がゲームセンターに入っていくのを見た女の子のグループは、ついていくかどうか少し悩んだとか。

逆（後書き）

考えていた話の半分しか書いてないのに、予想文字数がすでにオーバーか……ふっ

実はこの話（これは半分ですが）を一章のエピローグにしようかと思っております。

これの話の続き（まあ、ゲームセンター内での話です）を書くかどうか少し悩み中です。

場面飛んでいきなり二章に飛ぶかもしれません。
久しぶりの投稿はかなりドキドキしますね。

似たもの同士(前書き)

きつとブラックコーヒーはいらないでしょう……

誤字・脱字ありましたら、報告頂けると助かります。

似たもの同士

「うーん……」

恵梨花が手に持つプリクラを眺めながら、悩ましげな声を上げている。そんな彼女を見た亮が訝しげに問いかける。

「どうした？ 何か変なものでも写ってたか？」

「そんなんじゃないよ……」

恵梨花は否定するも、未だ眉を寄せたまま悩ましげな様子である。

一体何をそんなに悩んでいるのかと、亮は先ほど二人で撮影したプリクラ見ようと、そっと恵梨花の手元を覗き込んだ。

そこには、本人が目の前にいるにも関わらず、ついつい見惚れてしまいそうになるほど可愛い笑顔をした自分の彼女と、その横に並ぶ若干、無表情にも見える自分の顔が二つ並んでいる。

写真を撮る時、意識して笑顔を作れるほど自分は器用ではない。無理に作るうとしても、固い笑顔になるのはわかっていているから、せめて変な表情はしないようにと、大抵はこんな無表情な顔で写っている。

それが気に食わなくてこんな様子になったのかと思っただけであるが、もっと笑った顔を作れと言われても、その要求には応えられないだろうなと思う。応えられない理由としては、先ほどのように、普段から笑顔を意識して作るのは得意でないこともう一つ、それ

は恵梨花である。

プリクラを撮るため、その仕切りの中に入った瞬間、亮はしまったと思った。プリクラを撮影する場所、そこはもはや個室である。

好きになった女の子と、それも自分の彼女になった女の子とこんな個室（らしきもの）に入ったのは、これが初めての亮である。こんな狭い空間で二人きりというシチュエーションだけで少しは緊張するのに、それだけでなく、昼から恵梨花の顔をまともに見るのが難しくなっている亮である。

これはある種の試練ではないかとすら思えた。ただ自分とは反対に、別段気にする様子を見せずにプリクラ機を操作する恵梨花を見て、少し拍子抜けし、わずかながら緊張は緩んだ。

しかし、いざ撮影する瞬間には彼女との距離がさらに近くなり、緩んだ緊張はすぐに戻ってきた。なんとか緊張を顔に出さないようにとじていたら、結果的に無表情な顔の自分が撮影されていた。

撮影が終わるとホっとした亮であるが、印刷されて出てきたプリクラを見た恵梨花はそれからずっと悩ましげな様子である。

笑顔について言われたらどうしようかと首を捻っていると、プリクラに目を落としていた恵梨花がちらつと亮を見て言った。

「もう一回撮っていい?」

「……いいけど、表情はそんなに変わらんとと思うぞ
「表情?」

亮が言うと恵梨花が訝しげに聞き返し、再びプリクラに目を落とすと、ああ、と頷く。

「たしかに亮くん笑ってないね。でも、そこはいいよ」

恵梨花が笑って言うと、亮は首を傾げる。

「いいのか？ ……じゃあ、次はどれで撮るんだ？」

どうやら恵梨花の悩みは自分の考えていたものと違うようだ。それなら何に悩んでいたのかさっぱりわからないが、それを聞くかどうかは置いといて、どのプリクラ機で撮るかと聞くと、恵梨花は少しキョロキョロし、アレと指差して彼らは二台目のプリクラ機へと向かった。

先ほど撮影したものと、これから撮影しようとしているプリクラ機にどんな違いがあるのかよくわからないが、今回は二回目だけあってさつきよりは緊張を感じなくて済みそうだと亮は小さく安堵の息を漏らす。

フレームやら何かを色々選択し終えた恵梨花は亮を呼びかける。

「撮影始まるよ、亮くん」

あいよ、と返事をしながら先ほどの撮影時のように亮が恵梨花の横に並ぶと、恵梨花が亮を見上げて

「もつちよつとこつち来て」

と、亮の腕を掴み、自身に引き寄せた。

すると必然的に亮と恵梨花の距離は近くなり、お互いの距離がゼロになる。

途端に亮は顔が熱くなるのを感じ、先ほど以上の緊張を感じる。

右腕には恵梨花の腕やら肩やらが当たり、それが妙なほどに感触がよく、腕が溶けてしまうのではと思ったほどである。

それでも先ほどと同じように無表情な顔を作ろうとするも、自分の顔が固くなっているのがわかり、無駄だと悟る。恵梨花は平気なのかと画面越しに顔を見ると、少し頬が赤くなっているのがわかり、目を見張る。そして、思わず画面越しではなく、隣にいる彼女の顔を見ようと視線の向きを変えると、同じタイミングでこちらを見上げた恵梨花と目が合った。

どうやら引き寄せた恵梨花も予想以上に恥ずかしかったのか、亮と目が合うと、途端に彼と同じぐらい顔を赤くする。

亮はそんな恵梨花から目が離せなくなってしまう、恵梨花も亮から目が離せなくなり、自然と見つめ合う形になってしまう。

二人には一瞬とも長くとも感じとれる時間を共有すると、プリクラ機が撮影のカウントダウンを始める。それに気付いた二人ははっとなって画面の前で構えるが、慌てたせいで、二人共やるうとしていた表情もせずに撮影が終わってしまった（亮の場合はその前から諦めていたが）。

なんとも言えない空気が二人に流れる。そこで先に口を開いたのは恵梨花だった。

「ご、ごめんね……」

恵梨花がおずおずと謝ると、亮が慌てて否定する。

「いや、あんたが謝る必要はないだろ。俺の緊張が移ったせいだと思っし」

「でも、私がいきなり……」

恵梨花が尚も言おうとするが亮はそれを遮る。

「別に悪いことしたわけじゃないんだから。だから謝る必要はないっつて」

亮が強く言うと、恵梨花は少し逡巡する様子を見せたが頷いた。

「うん……、もうできたかな？」

そう言いながら、外側にあるプリクラの取り出し口の方を見るとつられて亮も同じ方へと目を向ける。

「できたんじゃないか？」

「じゃあ、見てみよ……あ！」

恵梨花がプリクラをとりに足を進めると、すぐに何かを思い出した様子で亮に振り返った。

「何だ？」

突然振り返った恵梨花に驚いた亮が戸惑いを顔に浮かべて、少し頬を膨らました彼女を見る。

「さつき、また『あんた』って言った！」

一瞬、呆気にとられた亮である。何事かと思えば、昨日やめると言われた口癖が出たのを指摘されただけだからだ。

亮は吹き出したいのをこらえて、謝罪の言葉をだす。

「いや、悪かったって。昼にも言ったろ、たまに出てしまっつかもって」

「そうだけど……」

不満気な顔で自分を見る恵梨花に苦笑する。

「なるべく、気つけるから」

「んー……気つけてよね！」

恵梨花がそう言ってプリクラの取り出し口まで向かうと、またも苦笑する。

プリクラを取り出してそれを見る恵梨花の表情はなんとも微妙だった。

恵梨花の手元にあるそれを覗き込んだ亮もすぐに微妙な表情になった。

そこに写っているのは、二人揃って紅潮し、固い顔をしている亮と恵梨花である。それがなんと言うか、まったく同じ表情を作っている。

亮は何か言うべきか考えたが、言葉が浮かんでこない。恵梨花も

同じなのか、何も言わない。

しばらく黙って見ていた二人だが、どちらからともなく目を合わせると、二人して少し困った顔をした。そして二人揃ってまたプリクラに目を落とすと、これまた二人揃って、今度は小さく笑い始める。

一度笑い始めてしまうと抑えが利かず、二人とも腹を抱えて大きな声を上げながら笑い合った。

「そついえば、さっきは何であんなに唸ってたんだ？」

ひとしきり笑った亮が目尻の涙を拭いながら恵梨花に聞くと、同じように涙を拭っている恵梨花が

「ああ……、ちょっとこれ見て」

と言つて、一回目に撮ったプリクラを亮の目の前にかざす。

「これが……？」

目の前のプリクラを見た亮は首を傾げて、恵梨花と目を合わせる。

「ここ見て、ここ」

と言いながら、恵梨花はプリクラに写っている亮と恵梨花の間を指差した。

亮はまたも首を傾げる。変なところなど何もないからだ。恵梨花が可愛いなど、誉めた方がいいのだろうかと迷い始めた。

亮の様子から自分の言いたいことがわかってないようだと思った

恵梨花は、眉を寄せ、強く言った。

「ここ！ 距離！」

「距離？」

距離とは一体何の距離だと、恵梨花の指差した箇所を困惑顔で亮は見る。

数秒見たところでやっとわかった。

「もしかして……この間の距離が空いてることを言ってるのか？」

亮が言った通りに、写っている二人の間には拳ひとつ分ほどの距離が空いている。

「そう！」

よくわかりましたと言わんばかりの顔の恵梨花である。

「それでこれが……、ああ、だからさっき……」

距離が空いてることがわかったが、それがどうしたのかと思った亮だが、先ほどの撮影時の恵梨花の行動を思い出して、やっと得心がいった。

亮の顔に納得の色が浮かんだのを見た恵梨花は嬉しそうに聞く。

「わかった？」

「ああ……」

亮は苦笑した。

つまりはこういうことである。撮影したはいいが、二人の間の距離が開いているのが恵梨花には気にいらなかった。だから、撮影後はプリクラを見ては悩ましげな様子を見せ、そして二回目の撮影ではその距離を無くそうと亮を引っ張るも、くつついた時に予想外、

もしくは予想以上に照れてしまった。

女の子はみんなこういうところを気にするのか？ と思った亮だが、二回目の撮影の時に恵梨花があれだけ照れてしまったのは、恐らく自分の緊張が移ったのも原因の一つだろうなと思った。そこで亮は、恵梨花が手にもつ二回目に撮影したプリクラを受け取って、もう一度見てみると、またもや同じぐらいの距離が空いている。思わず苦笑する。

「じゃあ、もう一回撮るか？」

唸っていた原因を聞いてしまったのなら、これを言うのは自分からだろうと、亮は小さく笑って聞いた。

「え……と……、うん」

恵梨花は亮の問いに、少し頬を赤くし、躊躇いがちに視線を彷徨させたが、コクリと頷く。

恵梨花のそんな仕草に亮は悶絶した。

「ねえ、明日と明後日の土日の予定は？」

ゲームセンターを後にした二人は、まっすぐ駅まで向かい、電車に乗り、恵梨花の最寄り駅と一緒に降りた。電車は同じ方向であり、亮の自宅の最寄り駅は二つ先の駅である。弁当を作ってもらう時は

朝迎えに行くと言った手前、恵梨花の家を知らなくてはどうにもならない。なので、恵梨花の家への道順を知るためにも送る形で一緒に歩いている亮である。

先ほどの質問は、駅を降りて数分も歩いた頃に期待を込めた様子の恵梨花が彼に聞いたものである。

「明日と明後日？ ……悪い、全部バイトだ」

亮が申し訳なさそうに言う。

「そっか……」

しゅんとする恵梨花に、亮はバツの悪さを感じた。なんせ、昨日まで自分、恵梨花に会うつもりが無かったので、誘いを断る理由のためにバイトをフルで入れていた（まあ、関係無くても大抵土日はフルで入れられているが）。恵梨花が聞いてきた理由も恐らくだが、わかっているつもりである。自分がしたいように、一緒にどこかに出かけるためだろうと。

「来週からは、土日のどっちかは空けてもらおうようにするよ」

「いいの？」

恵梨花は驚いた様子で亮に聞く。

「ああ……、さすがに両方は無理だと思うけど」

亮が苦笑しながらそう言うと、恵梨花は窺うように聞いた。

「でも、それで……、バイト先に迷惑があったりしない？ お給料とか大丈夫？」

「ああ、その心配は大丈夫だ。第一、俺は自分でも働きすぎだと思ってるしな」

亮の言い方は本当にその心配は無用といった様子が窺える。

恵梨花は小さく安堵の息を吐くと、嬉しそうに言った。

「ありがとう」

恵梨花の礼の言葉を聞いた亮は小さく笑った。

「恵梨花が礼を言うことじゃないって、俺がそうしたいからするだけだ」

そう言うのと、恵梨花は先ほどよりも嬉しそうに微笑んだ。

家の近くまで来ると、近所の人に見られたりしたら色々うるさくなりそうだからと、少し手前のところで亮は恵梨花を見送った。迎えに来てくれる時もここでいいと言われて。

一人になって駅まで歩みを進めると同時に、思わず小さく息を吐いた。そこで、自分はまだ緊張していたらしいと気付いて苦笑する。ゲームセンターで二人で大笑いした後、多分そのおかげで、昼休みから恵梨花を直視できない症状がなんとか落ち着きの兆しを見せ始めた。だからゲームセンターからここまで一緒に歩くのにそれほど緊張を感じなかったと思っていたが、それでもなかったらしい。

それともう一つ、恵梨花を見送る時に離れがたいと感じたせいもあるんだろっな、とも思った。

歩きながらポケットに手を入れると、三枚のプリクラのシートにぶつかる。一カットずつあればいいと断った亮の意見は聞いてくれず、恵梨花は丁寧に半分ずつ切っては亮に渡した。プリクラを普段から交換することも、集めたりすることもないので、それ用にしまつものを持ってない亮は無造作にそれをポケットに突っ込んだ。

ふと、そのプリクラのシートをポケットから抜き出した亮は、これだけの量を自分にどうしろと、と溜め息混じりの苦笑をする。

そのまま手にあるプリクラに目を落とすと、一番上には一回目に撮影したシートがある。たしかに二人の間に距離があるな、と亮は思った。そして一番上のを一番下に回し、二回目に撮影したシートが現れる。見た瞬間に亮は小さく肩を震わせてしまった。これは人には余り見せたいものじゃないな、そう思いながら下に回すと、三回目に撮影したシートが姿を現す。それを見た亮は、ふっと笑うと三枚ともまとめてポケットにしまった。

「まあ……、何とかなるだろ」

そう亮は誰ともなしに呟いた。

何とか、とは何を指してるのか自分でもハッキリとわからない。

来週からの学校生活は大きく変化するだろう。それは自分の望む平穩からはほど遠いだろうと思う。しかし、自分の望んでいた平穩とは一人で過ごす何も起こらない平穩である。

彼女が一緒の場合だと、どんなことになるのかまるで予想がつかない。

つかないが……嫌だ、面倒だと思うこと以上に、いいこともありそうだと三枚目のプリクラを見た亮はそう思った。

亮がポケットにしまったプリクラのうちの三枚目

そこには照れ隠しのように小さく笑ってしまった亮と、はにかんだ笑顔の恵梨花が肩を寄せて写っていた。

プロローグ（前書き）

二章をお待ちいただいた方、お待たせして申し訳ないです
始めます

プロローグ

人が生きている中で“転機”と呼ばれるきっかけがある。

それまでの人生とその後の人生がガラリと変わるような、そんな節目のことだ。

転機というものには、良い変化をもたらす転機もあれば、悪くなる転機もある。

そもそもが、幸福と一緒に、同じ転機でも受け取り人によって、それぞれ異なってくるだろう。

人から羨ましがられるほどの転機でも、その張本人には嬉しくない転機がある。

逆に、人には悲惨に映る転機でも、本人にとっては嬉しかったりするものもあるだろう。

そして転機とはどのような形で訪れるか。

それも人によって、色々あるだろう。

例えば……、子供の頃にバスケットボールの試合で感動的なプレーを見た少年は、将来のバスケット選手を目指した。

子供たちに笑顔を与える保育士を見た少女が、自分もそんな笑顔を与えたいと保育士を目指す。

挙げればキリがないだろう。中には、人との『出会い』によってもたらされる転機がある。

学校内で目立ちたくない少年は、いつもの帰り道に学校内でも特に目立つ少女と出会った。

この『出会い』は間違いなく少年にとって、そして少女にとっても転機だったろう。

そしてこの転機は少年以外の男たちには激しく羨ましく映るものであろう。

しかし張本人たる少年には、望ましくないものであった。

少年はこの転機による変化を嫌い、その象徴たる少女から逃げた。

だが少年に関心をもった少女は友人と共に少年を追いかけた。

追いかけられた少年は変化を受け入れることは拒否するも、少女のことを少しだけ受け入れた。

少年との付き合いを経て少女の関心は、いつしか恋心へと変わり、そして少年は少女の魅力に悩まされる。

互いに惹かれ合った少年と少女だが、この二人にまたも転機が訪れる。

少年はこの転機により、少女との別れを覚悟したが、少女の優しさでそれを許さなかった。

少女は知らずに、少年にとっての一番の悩みを吹き飛ばす。

悩むことをやめた少年は、少女に自らの気持ちを告げ、少女も同じ気持ちを告げ返した。

お互いの気持ちを確認した少年と少女だが、更なる転機が二人に訪れる。

少年が嫌って逃げた変化を、少年に受け入れさせるため、少女は捨て身で想いを告げる。

そして少年は少女の捨て身の勇気に全身全霊で応え、少女の想いと変化を正面から受け止めた。

転機とは何かが終わったり、別の何かが始まることでもある。

この時、始まったのは二人の新しい関係による恋物語。

そして終わったのは、果たしてなんだったのだろうか

プロローグ（後書き）

様式美ってやつだと思います

三章で同じようなプロローグをするかは不明です……

その前に二章ですね……

第一話 ホイホイ

「乗らないほうがいい」

「いいじゃない」

「よくない」

「だから、何で？」

一組の少年と少女が言い合っている。

場所は駅のホーム。時間帯は通勤、通学のために、その場所が一日で最も忙しなくなる朝。

彼ら二人の周りには電車を利用する人が大勢行き交っている。

その中のかかなりの数が二人を見ては目を瞠る。

それは二人の言い合いが大声で激しいからといったためではない。

少女が少年と 男と一緒にいるからである。

その少女は、性別など関係なく思わず振り向かずにはいられない整った容顔の美少女で、更にはスタイルがいいことも相俟って、この駅の利用者の間では有名であったりする。

利用者のある男性、又は少年は、朝に少女を見てはその美しさに癒され、今日も一日頑張ろうという気分になれる。

また、ある会社員の男性は少女を見る見ないで、一日の仕事のかどり具合が違つことを自分なりに気付いていた。もちろん見た日の方がはかどっている。

そんな訳などもあって、少女と大体同じ時間帯の電車を利用して
いる男性のかなりの数が、朝に少女を一目見るため、通勤、通学の
時間をずらさないよう心がけている。

しかし、少女を見ることの出来るタイミングは限られている。

朝といえば、一番電車が行き交う時間帯であり、一本の電車が走
つてもすぐに、次の電車がくる。ホームに立ち、電車が走っていく
のをずっと見届けるような人など滅多にいない。いるとしても、快
速でないから乗らないといった場合がほとんどだろう（鉄っちゃん
を除いて）。そしてこの駅には快速は停まらない、普通電車のみで
ある。であるからして、少女は電車が来れば当然すぐそれに乗る。
駅に入り、ホームに立ち、電車に乗る。その間、わずか数分といっ
たところであろう、その少女を見かけるタイミングは。

その数分の間に見かけることが出来れば、ラッキーだと思え、そ
うでなければ、一つのラッキーを見逃すことになり、ついため息が
こぼれてしまう。そんな人が 少女のファンの様な男性がこの駅
には多い。

そんな風にいつも見かけるのを楽しみにしている少女が男という。
今までそんなところを見たことのないせいで、彼氏はいないんだと
知らずに安堵していた彼らにとっては見たくない光景だった。と言
つても彼氏がいないから、自分が、と思っっている訳ではない。誰の
ものでもない、と思えることが肝心なのだ。彼らにとっては。

しかし、少女が幸せであるならそれでも構わない。ましてや一緒
にいる男が素晴らしい男なら尚いいと思える者の中にはいる 血

の涙を流しそうになりつつも。そんな気持ちで少女から目を離し、一緒にいる同じ学校の生徒らしき少年に値踏みの目を向ける。

少年に目を向けた男性達は揃って顔を顰めた。何故なら、一緒にいる少年は至って平凡な出で立ちだからである。ダサイ黒縁の眼鏡をかけているその容貌からはまるで覇気が感じられず、それどころか少女と話している姿は気だるげにすら見える。体格に関しては太っているようにも、痩せすぎているようにも見えないが、高いとは言えないような平均的な身長である。

そんな、一見ごく普通の少年が、あの美少女と一緒にいる。性格はどうかかわからないが、あの程度の男なら自分も負けていないと思う者は多かった。そんな気持ちが湧くぐらいだから自然と、美少女と一緒にいる少年に、嫉妬にも似た苛立ちの視線をぶつけてしまう。

そんな視線を一身に浴びている少年は、その視線に気付いているのか、いないのか。気付いていて、あえて気にしない様にも見える。そんな少年が諭すように少女に言った。

「一緒にいるのを見られたくない訳じゃないからな？　ただ、あんたはあつちに乗ったほうがいいんだって」

少女は不満気に言い返す。

「あゝ、また！　あんたじゃない、恵・梨・花！　それにせつかく亮くんが迎えに来てくれたのに、何で別々に乗らなくちゃいけないの!?!」

亮と呼ばれた少年は少し疲れた様子だ。

「悪い、恵梨花。理由は……、無用な争いを避けるためでもある。だから……」

そう言いながら亮はホームの二画を指差した。

「女性専用車両に乗ってくれ」

亮は前日の日曜日に明日は弁当だから、と恵梨花からメールを受けた。なので約束通りに、弁当をもつためにも恵梨花を迎えに行った。土日の間、顔を合わすことが無かったせいも、二人共おはようの挨拶が妙に照れ臭く感じられた。

恵梨花は亮とは違い、バイトなどで忙しくしてた訳ではないせいか、金曜の自分の告白と、その前日の亮からの告白を休みの間に何度も思い返してしまい、そのせいで、亮に会いたい気持ちを募らせたよう、亮を見るなり、嬉しさと照れから顔を多いに赤くした。

亮は亮で、二日間会わなかった間に、恵梨花が更に可愛くなったように見えて、顔を赤くしつつ見惚れてしまった。

亮自身気付いていないが、会えなかった二日間は亮にも会いたい気持ちを募らせてしまったようだ。

そんな二人は挨拶をした後、優に一分間は見つめ合ってしまった、近くを通りがかった車のクラクションによって、はっとなり現実に帰還する。そこで亮が照れ臭さを誤魔化すように、「行くか」と恵梨花に呼びかけ、肩を並べて駅に向かった。

初めこそ照れ臭く、お互いに遠慮するような口の開き方になって

しまったが、歩を進めると共にお互いの調子を思い出したようで、会話も弾むようになった。

駅に入ると、あちこちから睨まれていることに亮はすぐに気付く。先週の帰りの電車の中では、他校の制服を着た男子高校生に敵意ある視線を向けられたため、半ば予想していたことでもあるが、見知らぬおっさんにまで睨まれるとはさすがに亮も予想していなかった。

その年齢層の広さときたら、ついため息がでてしまうほどである。努めてそれらの視線を無視してホームに入り、ざっと見た感じで少しでも空いている車両の列に二人で並ぶと、異変が起こった。

二人が並んだ車両の列に次々と人が、というか男が集まる。電車を待つのであるから、人が集まり並ぶのはおかしいことではない。おかしいのは、その車両の列に異常ほど人が並び始めたからだ。

亮が後ろの気配が妙に多いなと思って気になり、振り返ると並んでいる人数の多さにぎよつとした。つい周囲を見渡し、他の車両の列と見比べると、明らかに多い。

一瞬唖然とした亮だが、恐らく、ほぼ間違いないとの確信をもって原因を推測する。それは自分の隣にいる美少女のせいだと。

そこで少し考えて恵梨花に尋ねる。

「恵梨花って、いつもどの車両に乗るとか決めてる？」

亮の質問に恵梨花が首を傾げる。

「車両？ …… 普段は女性専用車両だけど」

恵梨花の答えを聞いた亮は合点がいった。駅に入った瞬間からわかっていったことだが、この駅の利用者で恵梨花を認知している人は多い。自分に向けられる視線の類から、恵梨花に好意、もしくは憧れのような気持ちを抱いているのだろう。その恵梨花が今日は女性専用車両でなく、男女共用の普通車両に並んでいるから、観賞するためにも、ついつい後ろに並んでしまったと。亮は、そう推測した。

それだけならまあ、いいかと思つた亮だが、日頃バイトで培つている勘が、ある気配を察知してため息を吐いた。痴漢を働こうと考えている気配を。

横に男の自分がいるのに、いい度胸だと内心で舌打ちをしながら、その気配の持ち主を探ろうと感覚を研ぎ澄ます。すると、その数が一つだけでなく、複数あることがわかる。さらには、その数が増えたり減ったりしている。そのことから痴漢するかどうかを迷っている輩が複数いるのだとわかり、げんなりとする。

そこで亮はさらに考える。並んでいる時点でこれなら、電車に乗って偶々、恵梨花のすぐ近くに立った人はどうなるだろうかと。元々、痴漢するつもりでない人も一時の気の迷いを起こしかねない。しなくても考えてしまうかもしれない。滅多に見れないような美少女が、ほんの少し手を動かせば届く距離にいれば。スタイルもいいのであれば、尚更。

自分の考えすぎかもかと思つた亮だが、どっちにしろこのままでは不味い。

どう不味いかと言つたら、痴漢は現行犯逮捕が必然であり、してない痴漢を痴漢として取り押さえることなどできない。亮は気配か

ら痴漢をするのを察知して、事前に取り押さえることはできるが、その場合、やってないと非難されるのがオチである。事実やっていないのだから。

つまり、痴漢を痴漢として取り押さえるには、痴漢するところを見なくてはならないのだ。

それは却下だなと思った亮である。恵梨花が痴漢されるところなど見たくもないし、嫌な思いもさせたくない。

それに、普段は善良なおっさんが、自分が恵梨花を男女共用車両に乗せたせいで、一時の気の迷いを起こさせ、痴漢にさせてしまうのも忍びないものがある。常習的に痴漢をするような人間は、死ねばいいのと思う亮でも。

とにかく恵梨花を男女共用車両に乗せるのは、色んな人にとって都合が悪いと考えた亮は、恵梨花を引っ張り、列を離れてから言った。

「恵梨花は女性専用車両に乗ったほうがいい」

恵梨花が目丸くする。

「何で？ 亮くんと一緒に学校行くんだから、一緒に車両に乗る」

冒頭での言い合いはここから始まった。

しばらく言い合った後で、再び女性専用車両に乗るよう亮は言ったが、恵梨花は不満気に亮を見るだけである。理由を聞かない限りは梃子でも動きそうにもない様子だ。

可能性の話でも、怖い思いをさせたくなかったため言いたくなかったが、仕方がないと諦めのため息を吐いて亮が言う。

「痴漢にあっちまうぞ、嫌だろ？　それは
「え……」

恵梨花の目に不安の色が浮かぶ。少し周りを窺う様子を見せて亮に聞く。

「考えすぎじゃないの……？」

険しい顔をして亮が首を振る。

「いや、俺にはわかる。何でわかるかは聞くなよ？　……恵梨花がこのまま普通の車両に乗ると、その車両が痴漢ホイホイになっちゃう」

変な言い回しが出たものだ。そのせいか恵梨花は感じた恐怖を少し忘れたように小さく笑った。

「フツツ、痴漢ホイホイって……何、それ」

恵梨花が笑ったことで、小さく安堵の息を吐いた亮も笑って言う。

「恵梨花が乗ると、その車両に痴漢がホイホイきそうなんだな」
「もう、やめてよ！　なんか私が呼んでるみたいじゃない!!」

恵梨花がますます笑って抗議すると、亮は軽く笑って肩を竦めた。

「まあ、そういうわけだ。だから、女性専用車両に乗ってくれ」

「はあ……、わかりました……」

恵梨花は残念そうに肩を落とした。

女性専用車両に乗った恵梨花と分かれて一人になった亮は、満員の一般車両で人に挟まれながら、学校までの短い時間だけでも睡眠をとろうと立ったまま目を閉じた。

直後、またも強い視線をあちこちから感じて嘆息する。

（まったく……まいるぜ、本当に。俺はあんたらおっさんを助けてやったつもりなんだが……、感謝こそされても、睨まれる憶えはねえぞ）

何から助けたかといえば、一つは痴漢を働いて罪に問われるきっかけを減らしてやったこと。二つ目は、痴漢を働こうとした場合、自分にその腕を握りつぶされることだ。車両の乗客全員に当てはまるわけではないが。

誰しも一時の気の迷いというものがある。元々、そのつもりが無くても近くにいればふと頭をよぎるかもしれない。よぎっても大抵の人はしないだろう。葛藤しながらも自分の良心と折り合いをつけ

て。

そんな一時の気の迷いを起こすきっかけすら無くしたことも、感謝してもらいたいと亮は思っている。

しかし、そんな亮の思惑など知らない乗客の男性たちは、自分たちのアイドルと親しそうにしていた亮を、これでもかといわんばかりの憎しみを込めて睨み続けた。自分が降りるか、亮が電車を降りるまで。

電車を降りた亮は、自分を探してキョロキョロしている恵梨花を捕まえて駅を出た。

学校の最寄り駅であるから、そこには同じ学校の生徒だらけである。

恵梨花と改札を出るとまたも視線が自分たち二人を中心に集まる。

「まあ……、仕方ないか……」

亮が誰に聞かせるでもなく、つい出た独り言に、恵梨花が小首を傾げて見せる。

「どっつしたの？」

「いや、何でもない……」

ため息混じりに亮が苦笑する。さらに首を傾げる恵梨花だが、すぐに前を向いてスキップでもしそうなほど上機嫌な様子で、鼻唄交じりに亮と肩を並べて歩みを進める。

隣に学校のスーパーアイドルと噂されている子がいるから仕方ないとは思うが、いつもも利用するこの駅を出た瞬間からこれほど視線を集めたことはない。

高校に入学してから、亮が一人で歩いていて視線を集めたことなどなかった。そのため、自分の高校生活が大きく変わってしまうのだらうと亮は予感させられた。

ちなみに現状、視線は3：1程の割合で恵梨花と亮に分かれている。

まず、常日頃から輝くようなオーラを出している恵梨花にみんな目がいく。次に隣にいる亮に移る。ここから人がよりけりな移り方をする。

亮からご機嫌な様子の恵梨花に目を移しては、その可愛さに見惚れる者が多数だが、続行して亮を睨む者、アレは誰だらうと首を傾げて亮を見る者という。

視線は分かれることは分かれるが、どっちにしる一回は亮を見ている訳であるから、やはりありがたくない状況だなと亮は思う。

先週の恵梨花の告白から、色々と覚悟を固めた亮だが、少しでも平穏を維持する、面倒ごとを避けるための努力は怠らないつもりである。

亮が高校生活を平穩に過ごすには、目立たずに、そして学校の生徒達に認知されないことが一番だと考えている。しかし、それは最早、不可能に近い。なので恵梨花や梓、咲と一緒にいることにより目立ってしまうのは仕方がないと割り切り、次にどうすることがベストかと亮は考える。

今思いつく限りでは、美少女三人娘と一緒にいない時は、これまでに以上に存在感を薄くすることが一番だと考える。亮が自分一人である時にどれだけの注目を集めるのかわからない現状では。

理想を言えば、もし、他のクラスの生徒が自分を探したりしてクラスに来た時に、いるのに気付かれないほど影を薄くすることである。

物陰に隠れているなら、今身につけている気配を消す技で十分だが、それでは不十分である。学校にいる時に常に物陰に隠れる時などないのだから。

今以上に気配を消す、もしくは薄くする技があるのか。あるのなら教えてもらい、無いなら研究するかと、亮が朝から不毛なことを考えていると、横から恵梨花が話しかけてくる。

「そつえばね……」

「え？ ああ、なんだ？」

亮は思考をやめて恵梨花に振り向く。

「梓が今日は4人でお昼しようって言ったよ」

「……屋上でか？」

自分の教室で自分の机を囲んで食べるのは、さすがに勘弁してもらいたいと思いながら亮は聞いた。

「うん。……あと誰かに、どこで食べるのか聞かれたら『生徒会室で食べる』って答えればいいって、伝えといてって言われたんだけど……」

恵梨花の言葉に亮は首を傾げる。恵梨花を見ると恵梨花自身も、何故この伝言が必要なのかといった顔をしている。

梓の伝言の真意はわからないが、無駄な伝言を頼むような女でもないだろうと、亮は深く考えるのをやめた。

「まあ、わかった……でも、何で生徒会室……、ああ、そういえば生徒会なんだっとな、あの女は」

思い出すように言う亮に恵梨花が頷く。

「うん。……4人でお昼って久しぶりね？」

そう晴れやかな笑顔で恵梨花が言う。

「……そういや、そうだな」

亮が思い出しながら頷く。

自分が恵梨花を避けてたせいで先週は一度も昼を一緒にしていない。

それに比べて今日、今週に入ってから、恵梨花と共にいることから起きるかどうかもわからない面倒ごとを避ける方法を考えている。

自分は何かから避けるばかりだな、と亮は自分で少し呆れつつ苦笑した。

第一話 ホイホイ（後書き）

まあ、始まりってところです。

そろそろ真面目なサブタイトルをつけようか悩んだり……

週一はアップする所存であります……多分……

第二話 変化

学校に近づくにつれ増える視線を、亮と恵梨花の二人は無視していた。

恵梨花に関してはいつもと比べると少し視線が多いというだけなので、それほど難しいことではない。

一方、亮はといえば、恵梨花と一緒にいることにより集めてしまう視線に関しては、もう気にしても仕方がないと結論を出している。何より迎えに行くと言ったのは自分であるので、隣にいる自分の彼女との登校を楽しもうと、視線などないかのように気持ちを切り替えた。

ときに亮は、この年齢の男としては驚くほどに気持ち、感情の切り替えが上手い。そして後になって亮は思うことになる。この時、気持ちの切り替えを綺麗にやりすぎたと。

ともあれ、他にも色々悩むところはあるが、何ととっても恵梨花は亮にとって初めてできた彼女である。それも亮の好みどストライクなの。

こうしているのが嬉しく無い訳が無い。

一緒にいるだけで胸が高鳴り、いつになく舞い上がってくるような感覚がある。

そんな状態であるからして、会話も楽しくなり、自然と笑みも顔

を出す。

亮がそうして楽しんでるように、恵梨花も楽しんでほしくなく笑顔を振りまいている。

それだけでなく、恵梨花の場合は亮と一緒にいれて、それが嬉しいといった様子が全身からあふれているように見える。

まあ、そんな風にして、二人はつき合い立てのカップルが無意識によく出す、俗に言う「幸せオーラ」を多めに周囲にまき散らしながら、仲睦まじく登校した。様々な視線を突き刺してくる学校の生徒たちを背景のようにして。

学校に着いた二人は、変わらずの様子で校内を歩き、三階に上ったところでそれぞれの教室に向かって分かれた（二年の教室は全て三階にある）。

一人になった亮はここで気付いたが、恵梨花といると楽しいし、可愛いしで、そのせいか、努めなくても視線を無視できてしまう。だからか、恵梨花と離れると、周りの視線が急にきつく感じ始めた。

少し視線を気にしなすぎたかもと考えたが、一先ずはと、気休め程度だと思いつつも、存在感が薄くなるよう意識して気配を消す。多少なりとも、自分を見過ごしてもらえればと思って。そうしてから、恵梨花と一緒にいたことから集まっていた視線を無視して、廊下の奥にある教室に歩みを進める。

目立ちたくないからといって、視線が苦手というわけではない亮だが、無遠慮にいつまでもジロジロ（嫉妬、殺意も含めて）見られ

るのは、いい気分ではない。恵梨花はよく毎日こんなのに耐えられるもんだと、亮は恵梨花に尊敬の念を強くする。

もつとも恵梨花が受ける視線には亮が受けるような殺意と嫉妬は含まれないが。

以前に時々、一人になりたくなると聞いたことがあるが、これは当たり前だな、と苦笑する。人によっては集まる視線を快感の様に感じる人もいると聞く。時と場合による人もいるだろうが、恵梨花はその類ではないと思われるので、亮はつい安堵の息を吐いてしまった。

隣に恵梨花がいないため、廊下を歩く毎に視線の数が減っていくのを肌で感じながら、自分の教室の前に来ると、誰にも声をかけられなかったことに思わずホッと一息吐きながら教室の扉に手をかける。

開ける前でも喧騒に満ちていたとわかる教室が、亮が開けた途端、しんとなり、教室内のクラスメイトたちの視線が亮に集まる。

クラスの入りは半分程度だろうか、その視線は様々である。女子はほとんどが興味津々といった目を亮に向ける。それ以外の女子は面白いものを見るような目をしている。男子は複雑な目で亮を見るのが半分、何かを期待するように見るのが半分といったところだろう。

視線を集めた亮は顔色一つ変えなかったが、駅から出た時と同じ様に、教室に入った時のいつもとは違う反応から、またも高校生活の大きな変化を感じさせられて、内心でため息を吐いた。

扉を開けてほんの数秒だが、突っ立っていても仕方がない、亮は自分の席以外、何も見ずに足を進める。

席の前に立つと、壁にもたれ、座ってマンガ雑誌を読んでいる明が目だけを亮と合わせた。

「おはよう」

朝の挨拶を向けられた亮は同じように「おはよう」と返し、明がもつ雑誌を見て

「後で貸してくれ」

と言いながら、机に座る。

毎週月曜日は明からマンガ雑誌を借りて読んでいる亮である。

明が「おう」と了承の返事を返すと、亮は時計をチラッと見て、

「くあ」とあくびをし

「起こすなよ」

と明に一言断って、机に顔を伏せた。

そんな亮を見た明は、一瞬目を丸くしてから小さく吹き出した。

明にとって何が面白かって、今も教室でかなりの視線を集められて、いつも通りの飄々とした態度である。

この親友は本当に見ている飽きないなど、改めて明は認識させられた。

亮が机に顔を伏せると、静かになっていた教室内に少し浮き足立ったような空気が流れ始める。

明はその空気の変化に敏感に気付いていたが、事態を見守ろうと、そのまま雑誌に目を落とす。

男子は亮に話しかけようかどうか迷っている様子が見られる。迷っているのは、亮が先週までとは別人のように感じられてしまったからなのか、でもその割に今見るのはいつも通りの姿で、それが混乱に拍車をかけたか。男子たちは、亮に何と言って話し掛けるか、きっかけを掴めない様に見える。

女子は、興味深そうな目を亮に向けては、友達同士で「話かけなさいよ」「あなたから話しかけなさいよ」などと言い合いながら肘で突つき合っている。ただし、色恋といった様子ではない。これは面白い話を聞きたいがための様子だ。

亮は今や学校のゴシップの中心、いや、爆心地にいると言ってもいいからである。そんな亮から色々話を聞きたくなるのは、女子高生の性と言っても差し支えないだろう。

しかし、進んで亮に話を聞きにいこうとする女子は少ない。何せ先週まで亮は注目を集めるような人物ではなかったため、ほとんどのクラスメイトは、同じクラスで名前を知っているといった程度の関係だからだ。そんな関係であるからして、眠り始めた亮にいきなり話しかけて、今付き合っている彼女とのアレコレを、いきなり聞くのは誰だって気が引ける。余程、人見知りしないか、もしくはクラスでも中心人物といった存在でないと、難しいだろう。

そして今、このクラスにはそういった人物が、まだ来ていない……いや、一人来た。

「おはよー、桜木くん」

扉を開けて、机に伏せている亮を認めた途端、面白いものを見つけたような顔をした高橋希が、タカハシノツミ元氣よく挨拶の声をだしながら真っ直ぐ亮の席まで向かう。

亮は既に眠っていたが、いつも半分起きている意識が高橋の声を聞いていた。

金曜は割と会話したが、相手をする事は避けたいと思い、寝ている体勢を維持する。事実、半分は寝ているのだから。

クラス内で先週は多目に目立ってしまった亮だが、基本的にクラス内での行動パターンを変えるつもりはない。変えるとそれだけで目立ってしまうからだ。恵梨花といることで目立ってしまうことは仕方ないと思うが、一人でいる時にわざわざ目立つようなことをしたくない。そして何より睡眠時間が欲しい。

なので、休み時間に話しかけられるのは、少ないほうが好ましい。だからこうやって、寝て相手をしなければ、飽きられ、話しかけられる回数も以前に戻るだろうと思ったが、亮は女子高生を やべり好きの女子高生を舐めすぎていた。 おし

「おはよう、桜木くん」

亮の席の前まできた高橋は、未だ寝伏せっている亮に、起きてもらおうとするかのように再び挨拶の声を出す。

しかし、亮は起きる様子を見せない。代わりというか、明が挨拶を返した。

「おはよう、高橋さん」

「おはよう、小路くん」

高橋は自然に、笑顔で明に挨拶を返すと

「いつから寝てる？」

と、亮を指差す。

「さつき」

肩を竦めて、明が返答する。

「そう」

小さく頷いた高橋は「うーん」と言いながら、亮の顔を覗き込むように体を屈めて

「おはよう！ 桜木くん！！」

と、亮の耳のすぐそばで大きな声で挨拶をした。

亮は気配から高橋が体を屈めるのをわかっていた。そして何をされるのかも嫌な予感さながら、予想がついていたが、予想以上の声の大きさから驚いて少しビクっとなった。

キーンといった耳鳴りと共に、亮は伏せていた顔 不機嫌な、
を起こす。

「おはよう、桜木くん」

不機嫌顔などお構いなしに高橋が笑顔で今日、亮にたいして四度目の挨拶をする。

「……おはようございます、高橋さん」

非難の響きさえ感じとれるほど機嫌の悪い声で亮が挨拶を返すと、高橋は悪戯っ気を感じさせるような笑顔で頷く。

そんな高橋を見た亮は、相手をすることに嫌な予感しか覚えず、起こした顔を何も言わずにまた伏せようとする。

「ちょ、ちよつと待ってよ」

高橋がそれは無いんじゃないのといった顔で、再び寝に入る亮を止める。

止められた亮は内心でため息を吐くと、高橋に振り返る。

「俺に何か用ですか、高橋さん」

顔も声も不機嫌そのものの亮だったが、それより高橋が不機嫌な様子になった。

「まあ、その丁寧な口調？ 先週やめるって約束したじゃない」

「……」

そういえば、そんな約束したなと亮は思い出し、小さく息を吐くと悪い、普通の口調で話すから
と不機嫌さを無くした声で自らの非を認めつつ言った。

すると高橋は尊大な、がつきそうな笑顔でウンウンと頷く。そこで亮が一件落着きといった顔で

「それじゃあ、おやすみ」

と、またも顔を伏せようとして

「だから、ちよつと待ってって」

高橋が苦笑いを浮かべながら、亮を止める。

またもや寝るのを止められた亮は軽く息を吐く。

「何の用だ？」

そこで高橋は亮の口調のせいか、一瞬目を丸くするも、すぐにニンマリと笑って

「朝から恵梨花ちゃんとイチャついてたらしいねー」

からかい以外何もない声色で亮に言った。

そして、現在クラスにいる生徒たちが全員、次の言葉を聞き漏らすまいと耳を傾ける気配が強くなったのを感じ、亮は少し頭が痛くなった。

「イチャついてなんか……、普通に話してただけだぞ」

高橋が目を丸くする。

「何言ってるの、恵梨花ちゃんがすごい幸せそうだったって、見た子はみんな言ってるよ」

「……みんな？ もう？」

亮は軽く天を仰ぎたくなった。

高橋が笑って頷くと、亮の隣の席の椅子に座りながら言う。

「そうそう。私もまいったよ……恵梨花ちゃんの彼氏の人と同じクラスだよ、ってここに来るまでに、何度呼び止められたか」

あー、やれやれといった様子で高橋は首を振る。

「……そうか……」

亮は額に片手を押しあて、苦悩している様子で、ため息混じりに呟く。

「このクラスで、他のクラスに顔の広い連中も、同じようにつかまってると思うよ」

そう言われて、高橋以外にAグループの面々がいない理由がわかる。

朝一緒に登校することが噂で流れることは、まあ、間違いないだろうと予想していたが、まさかこんなにも早く、いや、リアルタイムで流れているとは思わなかった亮である。これじゃ、自分たちが学校に着くより先に噂のほうが先に学校に着いたかもしれない。恵梨花の影響力の強さを改めて亮は感じさせられた。

「ああ、そうそう」

高橋が思い出したような目を亮に向け。

「今度は何だ？」

朝から疲れた様子になった亮が振り向く。

「みんな、桜木くんのこと、『恵梨花ちゃんの彼氏の人』って言うから、『桜木亮』だよって、名前ちゃんと教えといてあげたよ」

感謝してよね、と笑いながら高橋が言うと、亮は眼を剥いて

「なっ……………！！」

なんて余計なことしやがる！ と叫びそうになったのを寸でのところで堪える。

そんな亮を見て高橋が首を傾げる。

「あれ？ 変に誤解とか広がらない方がいいと思って言ったんだけど……………、余計なお世話だった？」

「ああ……………、いや、そんなことはない」

この子には悪気はないんだと、亮は自分に言い聞かせながら、耐え忍ぶ様に返した。

そうだ、恵梨花と付き合ったと知れたなら、名前が広がるのも時間の問題なんだと、更に言い聞かせていると、前から笑い声が聞こえて顔を上げる。見ると明が肩を震わせている。

「おい、明……………」

亮がまたも不機嫌な声を出す。

この親友は先週から自分のピンチを見ては楽しんでるだけである。一度じっくり話し合う必要があるなと亮が考えていると、笑いながら明が謝罪の言葉を出す。

「いや、悪いって」

本当に悪いと思ってるのか疑わしいものだと思っていると、教室内が騒がしくなってくる。

扉付近を見ると、他のクラスの生徒に捕まってたと思われるAグループの面々が入ってきては、皆とおはよつの挨拶を交わしている。

「あー、みんな来たねー。先生ももうすぐきそうだし、それじゃね」

そう言って、高橋は自分の席に向かう。

亮は新たに教室に入ってきたクラスメイトの視線を無視しながら、頬杖をつき、ため息混じりに言った。

「恵梨花と付き合って、最初の朝がこれか……」

疲れた様子の亮を見た明は、からかう様に言う。

「あれだけ可愛い子と付き合ってるんだ、文句言つなよ」

亮は無然と言い返す。

「文句じゃない、愚痴だ」

明は苦笑すると、どう違うんだ、と言いたげに肩を竦めた。

第三話 疑問

担任の山下悟ヤマシタサトルが教室に入ると同時にチャイムが鳴り、朝のHRが始まった。

学校に来て早々に高橋に絡まれた亮は、快活に今日一日の予定を話す山下の言葉に耳を傾けながら、先週末までの注目度なんかまるで無かった自分を少しばかり懐かしく思い、何を見るわけでもなく窓の外に目を向ける。

窓の外に目を向けているのは時折、山下が亮を意味ありげな目で見てくるからだ。多くの生徒に気付かれない程度に、だが。

どうやらこの担任は朝のことをもう知っているようだと思われ、どれだけ噂が流れるのが早いのかこの学校はと、亮はため息を吐く。

学校ではなく、生徒からそこそこ人気のある山下だから、教師でありながら、もう知っているとも考えられるが。

なにせよ、亮が山下と目を合わせ、何か言ったところで藪蛇になるのはわかっていているし、何も言わなくても、目を合わせていると何か言ってきたりする。亮は絶対に目を合わせまいと外を見ている。

そんな亮を見た山下は自分を見ないことに注意もせず、小さく笑っただけだった。

目を外に向けていても教卓の前に立っている山下の話は聞こえる。

来週は体育祭があるから、今日のHRに短時間で決めるためにも、それぞれ出たい種目を考えておけ、など山下が言っているのを聞いた亮は、もうそんな時期かと思い、それならまた去年と同じ方針でいくかと考えた。

なぜなら去年の体育祭は実に有意義に過ごせたからだ。

山下が絶対に勝てる布陣で臨めよ、と拳を固く握りながら生徒たちに向かって力説している辺り、大方、教師同士で賭けをしているんだろうなど、ぼんやりと考えつつ、後の話を聞き流している内にHRが終わり、すぐに一時間目の英語の授業が始まった。

授業が終わり、起立、礼の挨拶をしている間、亮は軽く憂鬱になっていた。

なぜなら先週、梓が亮の脳内に仕掛けた地雷（D・E・Fのキーワードにより発動するアレ）が、まだ生きていたからだ。

次の英語の授業までにこの地雷は必ず撤去してやると誓いながら、席に座ると前の席の明が振り向いた。

「ほら、亮。今、読むか？」

言いながら、亮に差し出しているのは、朝に借してくれと言った漫画雑誌である。

亮は一瞬、地雷によって寝損なった分をこの休み時間に補うか、雑誌を読むか悩んだが、解答はすぐに出た。

「ああ、今、読む」

そう言いながら亮は雑誌を受け取った。寝るのは次の授業の時間でいいか、と思いながら。

亮でもやはり面白い漫画の続きは気になるものである。

「今週のラクマンどうだった？」

亮は雑誌のページをめくりながら、明に聞いた。

亮が読むのは数タイトルだけであり、一番気になる漫画から読む。お目当ての漫画を探しつつ、それに対する明の感想が気になった。

亮と明は漫画で面白いと感じる感性が似ている。明が面白いと言った時は、大抵、亮も面白いと感じる。逆も然りだ。

だから、ここで明が面白いと言えば、読む前から更に期待を高めることができる。それを期待しつつ亮は明の感想を待つ。

「そうだな、今週は……」

「あつ、桜木くん!!」

明が感想を言おうとしたところで、教室で真ん中辺りの席にいる高橋が大声で亮の名を叫んだ。

自分の名を叫ばれた亮は、思わず手で顔を覆い、何かに耐えるように声を出した。

「なあ、明」

呼ばれた明は、クラス内の視線をまたも集めている亮を面白そうに見た。

「なんだ？」

「あの女にクラスの中心で人の名を叫ぶなど言ってくれないか？」
亮の言葉から明はある映画のタイトルを思い出し

「元気がいいだけだって……、それに愛を叫ばれるよりマシだろう？」
と、からかうように言った。

元気のいい女の子は嫌いじゃないが、その元気を学校では自分に向けてもらいたくはないなど、亮はため息を吐いた。

そうこうしている内に明るい様子で高橋が亮の元まで来た。

「ねえ、桜木くん」

「今度は何の用だ？」

笑顔の高橋に対して、亮は少し不機嫌顔である。

「うん、よかつたらプリクラ見せてくれない？ ……あ、そうだ、

交換しない？」

高橋は実に気軽な様子で言い、亮は表情を崩さずに答えた。

「……………何のプリクラだ？」

このタイミングで、自分にプリクラを見せてくれだなんて、どのプリクラかはわかりきっているが、取り敢えず亮はそう聞いた。頭が痛くなりそうになりつつ。

すると高橋は少し目を丸くして問い返す。

「え？ 先週の金曜の帰りに、恵梨花ちゃんと撮ったんじゃないの？ ………………3回？」

「……………なんで、あんたがそんなこと知ってるんだ」

回数まで把握している高橋に、少し呆れた様子 of 亮が当然の疑問を投げ返す。

「桜木さんと恵梨花ちゃんがゲーセンにいた時に、たまたまそこにいた友達から聞いたんだよ」

亮たちがゲーセンにいた時、同じ学校の誰かがいることは知っていたが、よりもよってこの女の友達なのかと亮は自分の不運を呪った。

その場にいた誰かが高橋の友人でなくとも、どっちにしろ、高橋がそのことを聞きつけたであろうとしても。

「ねえ、見せてくれる？」

少し落ち込んだ様子 of 亮を意に介さず高橋は笑顔で再度、亮にお

願います。

そこで亮はプリクラをどこにしまったかなと考えたが、ポケットに入れっぱなしなのをすぐに思い出す。

今は手元に無いからと言って、諦めてもらうのは簡単だが、その場合、明日、明後日と同じことが繰り返されると考えられ、それなら今見せたほうがいいと思った亮は、諦めのため息を吐きながら無造作にポケットから三枚のシートを取り出し、高橋に渡した。

「ほら」

「ありがとー」

高橋は楽しそうに受け取ったプリクラを眺める。

「うーん、やっぱり恵梨花ちゃん、可愛いねー……、桜木くん、もうちょっと笑うとかできないの？」

どうやら一回目に撮影したプリクラが先頭にあったのか、そこに写った無表情の亮を見たと思われる高橋が笑って言う。

「ほっといてくれ」

亮は若干、拗ねたように返す。そこで

「何してるのー？」「あ、プリクラ？」「私も見せてもらっていいー？　桜木くん」

このような調子で、クラスで高橋と仲のいい女の子　つまりはこのクラスの女子のAグループの面々が亮の席の前で集結してしまった。

自分の周りに集まってしまった面子を見た亮は半ばヤケになりつつ、「ああ、いいぞ」と手をヒラヒラさせながら、女子達に了承す

る。

キヤツキヤと騒ぎ始める女子達を尻目に、半分、現実逃避気味に読書を再開しようと、亮は雑誌に向き直った。

「大人気だな」

プリクラを見て騒ぐ女子を見た明が、漫画に集中し始めた亮に、小さく笑いながら言う。

「恵梨花がな」

亮は雑誌に目を落としたまま、ページをめくりつつ明に相槌をうつ。

「そうかもしれないけど、『彼氏』という藤本さんに興味あるんだろ？ な、みんな」

「そんなもんか？」

「そういうもんだろ？、女の子って」

明がそう言うと、隣にいる女子達が、体をくの字に曲げて爆笑し始めた。

笑い声で亮も明も一瞬驚いたが、亮はその瞬間になぜ笑っているかをわかってしまった。二回目に撮影した時に二人して同じ間抜け面をしてしまったのを見たのだろうと。

進んで見せたいと思うものではなかったが、撮影回数まで把握されていたことと、何より恵梨花も同じものを持っているから、遅かれ早かれ見られることに変わりはない。それにしても、隣で自分が写っているプリクラを見てこっも笑われるのは余り居心地のいいものではなかった。

「アハハハ！ 何これ、何これ！ 二人ともおんなじ顔してるし！」

「すごいね、これ！ なんで、こんなことなってるの！？」

「桜木くんも、恵梨花ちゃんも、なんでこんな顔！？」

「桜木くん、後で交換してね！」

「交換」の言葉から次々と聞こえる「私もー」に、亮は小さく相槌をうちながら了承する。

「……一体、何が写ってるんだ？」

女子達の騒ぎに疑問をもったのか、明が亮に聞く。

「……後で見たらわかる」

亮は雑誌に目を落としたまま、不機嫌そうに答えた。

そんな亮を見た明は笑いながら肩を竦めると、隣にいる女子達が一転して、静かになった。

亮と明はそんな女子達の様子から、訝し気に顔を上げる。

「……うわー、すごい、これ」

「うん、すごいね、これは……」

「こうして見ると、男子達がバカになるのもよくわかるね……」

「うん……、この恵梨花ちゃん、本当に……」

最後の女子の言葉の後に

「」「」「可愛い！」「」「」「」

と、女子四人の合唱が拳がった。

興奮した様子で、「可愛い」と連発する女子達を見た明は、目を合わせるだけで亮に問う。

すると亮は頬をポリポリと搔くと肩を竦めてみせた。

それが明には亮が少し照れている様に見えて、笑ってしまった。

「桜木くん、交換しよー！ 三枚とも！ いいでしょ！？」

「私も三枚とも、ちょうだい！」

「私も！ この恵梨花ちゃん、可愛すぎ！」

「私も交換してね！ こんなに幸せそうな恵梨花ちゃん初めて見た！」

迫る様に、亮にプリクラの交換を要求する女子達に亮は少し辟易しながらも「一枚ずつだけ残しといてくれ」と言っ、疲れた様子で再び雑誌に目を落とした。

「大繁盛だな……」

明は少し呆れたように、女子達を見てはそう呟いた。

「俺には全くメリツトがないがな」

亮は雑誌のページをめくりつつ淡々と言う。

「交換だろ？ お前も貰えるんだから、いいじゃないか」

「俺がプリクラを集めて、喜ぶクチに見えるか？」

「……まったく、見えないな」

「そうだろ」

亮はおもむろに頷いた。交換してプリクラをもらっても、処分に困るのが正直なところである。そう思っているところで高橋が

「桜木くん、はい。もう先に一枚ずつだけ切って返しとくね。それと、これ私のあげるよ」

と言いながら亮のプリクラを切ったものと、高橋が友達と撮影したと思われるものを渡して、また女子達の輪に戻る。

別にいいのだが、先に一枚ずつ返ってきたものを見ると、他はもう返ってこないのだろうかと、亮は思った。

「見せてくれよ、亮」

亮の手元に返ってきたプリクラを見ながら明が言うと、亮は高橋

からもらったプリクラとまとめて明に渡し、明は興味深げにそれを見始める。そこで亮が読書を再開しようとする、他の女子達が次々に交換分のプリクラを亮の机の上に置いていく。

机の上にある10枚以上のプリクラを見た亮は、こんなにあつても困るんだが、と思いながらため息を吐いた。

「なあ、亮……」

プリクラを見た明が亮に呼びかける。

「なんだ？」

亮は読書を再開しながら、明に返事をする。

「これは、なんでこうなつたんだ？」

明は若干、肩を震わせながら、二回目に撮影したものを亮に見せながら聞いた。

「……話せば長くなるし、話したくもない。お前でもだ」

亮は最後はキツパリと言った。

「そうか……、ん？」

明は震えるそうになる声を抑えつつ頷くと、隣にいる女子達の騒ぎに何かを感じたのか、首を動かした。

「……亮、見てみる」

明は何を見たのか、同じ光景を見るように亮を促す。

亮は訝しげに顔を上げ、明と同じ方向を見た。

そこにはクラスの男子が数名、Aグループの女子達が仕切っていると思われる中、必死な様子でジャンケンをしている。

「……なんで、あいつらジャンケンしてるんだ？」

亮は男子達の真剣な様子に、少し呆れながら明に聞く。

「状況を見るに、亮のプリクラ……藤本さんが写っているプリクラ

欲しさに、じゃないか？」

明は男子達の目的をハッキリとさせた形容詞を使って、亮の疑問に答えた。

「俺も写ってるんだがな……」

亮は明の言葉を聞くと、複雑そうな顔で言う。

「亮の言わんとするところはわかるが、多分目に入ってないな」

「たしかに恵梨花は可愛いが……」

明が真実と思われることを言うつと、亮が十分に惚気と取れることを堂々と言い放った。すると明は、呆れた様子で

「それだからだろ……、この藤本さんは、ちよつと可愛すぎると思っぞ」

と三回目に撮影したプリクラを持ち上げて亮に見せる。それに対して亮は

「まあ……、可愛いよな」

と頬をポリポリと掻きながら、頷いた。そんな亮を見た明も一緒に頷く。

「ああ、これ見ると、本当に亮は好かれてるんだなって思えるな」

明がそう言うつと亮は何かを言おうとしたが、急に止めては腕を組み、悩ましげな様子で押し黙った。

そんな亮を見た明が訝しげに亮に聞く。

「どうした？」

「ん……」

亮は何かを考えているようだ。

「亮？」

「ああ……」

「どうしたんだ？」

「いや、何で恵梨花は……」

亮は少し言い難そうな様子であるが、明は黙って続きを待った。

「何で恵梨花は、俺のことが好きなんだ？」

亮が真顔でそう言うと、明は心底呆れた顔になってはこう言った。

「亮、それはな……、この学校の、ほとんど全員が疑問に思っていることだ」

この時、たまたま亮と明の会話が聞こえたクラスメイトは、「まったくだ」と思いながら強く頷いた。

第三話 疑問（後書き）

第四話 デジャヴ

二時間目の授業が終わると、亮のBグループの友人である夏山巧ナツヤマタクミが、亮の席まで来た。

「できたぞ、亮」

そう言って、二枚の封筒を亮に渡す。

いきなりそう言われても、何ができたのかわからない亮は、問いかける意味で、いかにも寝起きな目だけを夏山に向けた。

「写真だ。先週にここで撮ったやつ」

自分の眼鏡をくいつとしながら夏山が亮に答える。

写真なんか教室で撮っただろうかと、半分寝ぼけている頭でしばし黙考した亮は、「ああ」と呟いて思い出す。

Bグループの友人達と絶交されなかったために、苦肉の策で友人達に恵梨花とのツーショット写真を撮ってもらったことを。

すると、できたと言うのは夏山のカメラで撮影してもらった写真が、プリントされたということかと、亮は理解した。

「ああ、サンキュー……、一つは恵梨花の分か？」

二枚の封筒を渡されたということは、夏山は亮の分と恵梨花の分と2セット、プリントしてくれたと思った亮がそう確認する。

「そうだ。中身は微妙に違うから気をつけるよ。その白い封筒が藤本さん、青い封筒が亮の分だ」

夏山が頷きながら言う。

「微妙に違うって、どういうことだ？ ……たしか二回撮っただけだろ？」

夏山のカメラで撮影した回数は一回だと記憶しているが、自分の分と恵梨花の分と中身が違うとは、どんな差異があるのかと亮は尋ねる。

すると夏山は、ふっと笑う。

「亮の分にはちょっとしたサービス分が入っている。見てみる」

そう言いながら封筒にアゴをくいつと向ける夏山を、亮は訝しげな目で見ると、青い封筒を開き始めた。

中から抜き出した写真を手にもった亮は、感触から3、4枚あることがわかった。なぜ、二枚でないのかと訝しんだが、まずは見てみよう一枚目を拝見。

先頭にあったのは、夏山も写っている三人での写真だった。最新のデジカメで撮っただけあって、亮が今まで見た写真の中でも最高に画質がいいことがわかる。

そして、すぐに目がいくのが恵梨花である。写真の上でもいつもの光り輝くようなオーラが出ては、つい目がいつてしまう。机を挟

んだ形ではあるが、少しでも亮に近づこうと体を寄せて、嬉しそうに笑っている。

それに対して、顔を引き攣らせている自分を見て、亮はつい苦笑してしまう。

「へえ、綺麗に撮れたもんだな」

亮が持つ写真を覗き込むように、前の席から明が体を屈めながら感想を述べる。

「その程度で満足するなよ、亮。次のめくれよ」

明の言葉に夏山は、まだまだ、と首を振る。亮は言われた通りに一枚目を下にもっていく。

二枚目は亮と恵梨花、二人だけの写真であった。

亮はこうしてツーショット写真を見ると、プリクラとはまた違った気恥ずかしさがあるなど、むず痒い思いになった。

「それにしても、亮。この引き攣っている顔はどうにかならなかつたのか？」

明が笑いを噛み殺しながら言う。

「そうは言ってもな……、この時の俺の心境がわかるか、明？」

亮が顔を顰めて明に抗議する。

目立ちたくない自分が、クラスみんなが見ている前で、美少女とツーショット写真を撮る断腸の思いを考えてくれと亮は言いたいの

である。

「さあ、どうか。俺には、幸せではちきれんばかりの心境しか考えられないな」

「俺も」

「……」

明は亮の言いたいことはわかっているが、からかうようにそう言うとき、夏山が同意し、傍目からはもつともな意見に亮は反論ができなかった。

ため息を吐きつつ、亮は次の写真を見ようとめくる。感觸的に合計四枚あることが亮にはわかった。

あとの二枚は何なのかと、眉を寄せて写真を見ると亮は一瞬、固まってしまった。

覗きこんでいた明は小さく感嘆の声を上げる。

写っているのは笑顔の恵梨花一人だけである。ただし、上半身アップで。

順番に見ていたからわかるが、先に見た二枚のうちの写真から恵梨花一人だけをトリミングしたのだと、亮も明もすぐにわかった。

先ほどまで見ていた分と比べて、拡大して写っているものだから、恵梨花の魅力が十分に伝わってくる写真である。

「いい出来だろ？」

息を呑んで写真を見ていた亮と明に、夏山が自慢気に言う。

そこで亮はもしかしてと思って四枚目を見ると、それも恵梨花のアップ写真であった。

しかし、三枚目と違つのは見た時にドキッとしてしまったことである。

なぜだと思つて首を傾げて見比べる亮に夏山がニヤリと笑つて言う。

「こつちのほうが、藤本さん嬉しそうじゃないか？」

こつちと指したのは、四枚目の写真である。

言われてから、たしかにそうかもしれんと亮は思った。

亮の知る恵梨花の、あの満面の笑顔に近いものがそこにはあった。

「その写真が、亮とのツーショットの方だからな」

亮が納得の色を浮かべながら写真を見ていると、夏山がそう補足する。夏山を見ると目にかからかいの色が浮かんでいる。三人で撮る写真よりも、亮と二人で撮るほうが嬉しいみたいでよかったな、といった意味の。

「まあ……、素直に感謝しとく。ありがとよ」

亮は、写真でからかわれたり、クラスのみんなにまたも騒がれるのはごめんだと思い、そそくさと写真を封筒にしまいながら、夏山に礼を言う。

恵梨花のアップ写真は素直に嬉しかった。これで恵梨花の笑顔による、自分の心臓への奇襲に対するバリエードに耐性をつけることができるかもしれないと思つて。

「そつだ、印刷代いくらだ？ 恵梨花の分と合わせて」

封筒をポケットにしまった亮が夏山に聞くと、夏山は手を振りながら答える。

「いいって、これはあんな約束を守ってくれた感謝のしるしだ。…枚数もたいしたことないしな」

「お前がそう言うのなら、俺は遠慮なくちようだいしとくが、恵梨花がな……」

こういのキツチリして、うるさそうなんだよなと亮が思っている。「じゃあ、これと交換って形でいいぞ」

そう言いながら夏山はポケットから、一時間前に女子に持っていた亮のプリクラの一枚を取り出して見せる。

「なんで、お前……、ジャンケンしたのか？」

自分が渡してもいないプリクラを持っている夏山の入手先を考え、た亮は呆れた目を向けると、夏山は当然といった感じで頷いた。

「当たり前だろ。こんなお宝見逃してどうする？ なんとか一枚入手できてよかったよ。……お前な、こういうのは女子に配る前に友人に配るのがスジじゃないのか？」

「俺は配ったんじゃない。ほとんど無理矢理にもっていかれたんだ」

亮は不服そうに反論する。

「まあ、それでもいいけどな……、とにかくプリクラと交換したってことで、印刷代はいいぞ」

亮の言い分を受け流した夏山は肩を竦めて言った。

「はあ……、まあ、いいか。それに交換なら恵梨花も納得するだろうし」

亮がそう言うと、夏山が眉を寄せてため息を吐いた。

「さつきからお前は……、藤本さんの名前を連呼しやがって。大体な、なんだって、お前が……」

「藤本さんと付き合うことになったんだ？」

夏山が言おうとした言葉の続きを言ったのは、同じBグループの友人の川島勝カワシママサルである。また横には同じグループのヒガシノノスケ東新之助もいる。亮と夏山が一緒にいるからか、集まってきたようだ。

普段付き合っているBグループの友人に囲まれた亮は、最近自分の周りに集まる目立つ人達といる時と比べて、なんと心が安らぐことかと、少し感動してしまった。

そんなアホな感動をした亮だが、そのことについては一切、顔に出さずに夏山と川島の質問にこう答えた。

「先週、見てただろ？ だからじゃないか」

「それは確かに見たがな、何でそうなったかだ！」

亮の答えに、夏山が少し苛立ったようになる。

亮はこの場は適当に済まそうと、眉を寄せながら話す。

「……前に恵梨花が教室に来た時あったろ？ ……あの日以来、偶々、顔を合わせた時があつてな……、それで少し話したりして……、仲良くなって……、で、ああなった」

亮はこの友人達に、本当のところを話そうかどうか考えた。いつかは話すかもしれないと思ったが、取り敢えずそれは今では無いと判断する。何しろ今は、かなりの数のクラスメイトが聞き耳を立てているからだ。

亮の言葉を聞いた夏山が呆れた目を向ける。

「……それは、そうだろうとは思うがな、亮……、はしよりすぎだ」「ああ、適当にもほどがあるぞ」

川島も呆れた目で見ては、夏山に同意する。

そんな二人に亮は肩を竦めてみせる。

「別に、いいじゃないか。細かいこと気にするなよ」

「気にするわ！ どこが細かいんだよ！」

川島がもつともな突っ込みを入れる。

「本当にな……この写真見てもいまだに信じられないしな……」

夏山が頷きながら、自分と恵梨花と亮が写っている写真をポケットから出して見せる。

「……お前、持ち歩いてるのか？」

「当たり前だろ、これは手放せん」

亮が呆れた目を向けると夏山は強く頷いた。

「いいよなー、巧は」

そう言っつて川島は羨ましそうに夏山の手にある写真を見た。

亮は上手い具合に話が流れてくれたかもな、と考えていると東が重々しく口を開いた。

「どうして亮が付き合えたなんてことは、今はどうでもいい」

東の真剣な声色に、その場にいる全員が東を見る。

「いや、どうでもいいことないだろ」

夏山が元々の話題を思い出し、東の言葉を否定する。

「いや、どうでもいい……、亮」

東は首を振りつつ、亮を見た。

「なんだ？」

この話題をどうでもいいと言える東に、亮は軽く感謝の言葉を送りたくなった。

そして、東は真剣な顔でこう言った。

「藤本さんは、いつになったらここに来るんだ？」

その場にいた一同に、軽いデジャヴが起こった。

「お前はそればかりだな……、用事があったら来るんじゃないか？」

亮は前にもこんなことあったなと思い出し、呆れながら言った。

「……東、なんで、どうでもいいんだ？」

疑問に思った夏山が、東に聞く。

「俺は藤本さんをできるだけ近くで見ていただけだ。だから、亮がなんで付き合うことになったかなんてどうでもいい。ただ、亮が付き合ってくれたことで話すことができたし、近くで見る機会もこれから増えそうだ。だから亮、俺はお前に感謝の気持ちでいっぱいだ」

東は真剣な顔を崩さず、必要以上に真摯に答えた。

すると、なんとも言えない空気が流れだす。

「……」

そんな中、空気を払拭するように、ゴホンと咳払いした夏山が口を開いた。

「まあ、なんだ、亮……、できたら今度に詳しく教えてくれ」

「ああ、もうちょっと具体的な内容をな」

川島が相槌をうつと

「……おお」

と亮は夏山が払拭した空気を壊さないよう返事をした。

しかし、東は空気を読まずに言う。

「何で亮が付き合ってるかはどうでもいいけど、藤本さんが来る時は言ってくれよなー、亮」

「……恵梨花がいつ来るかなんて、俺が知るかよ……、廊下で待ってたらどうだ？」

本当にこいつは……と思いつながら、半分冗談で亮が言つと

「ああ、そうだな！ 廊下にいるわ、俺！」

東は、そう言って駆け足で教室を出た。

「……そういえば、あいつ、先週も、山岡さん、鈴木さんが教室に来た後に藤本さんがくると思って、廊下で待ってたな」

そう夏山が思い出すように呟くと

「……」

しばし、沈黙が流れた。

その場にいる面々は、それぞれの心の中で同じ思いを抱く。

ああ、やっぱり、あいつアホだなと。

三時間目は、なんで退職してないんだろつとみんなから思われている、高齢のおじいちゃん先生が世界史の授業を行った。

授業で語ることで満足するタイプなのか、生徒が寝ていようと注意することはない。

それは起立、礼の号令の時であつてもだ。

そのためか、授業の終わりに寝た姿勢のまま礼をしない、けしからん生徒が多い。

もちろん、亮は寝ている。

一日の授業全て、世界史でいいんじゃないかと思ひながら。

そんな訳で、亮は三時間目終わりの休み時間は授業中の姿勢と変わらず、机に伏せて寝ていた。

そこで、一人の男子生徒が亮のいる教室に入って来た。

その男子生徒は顔が広いのか、違うクラスであるのに、何人かの生徒に声をかけられてはそれに応えている。

声をかけられた内の一人に男子生徒がこう聞いた。

「桜木亮って、このクラスだって聞いたけど、どこ？」

第四話 デジャヴ（後書き）

……あ、作者は高校の時は授業中、割と真面目に受けてた、と言います。

第五話 野郎（前書き）

誤字・脱字ありましたら、報告頂けると助かります。

第五話 野郎

男子生徒の問いを聞いた周辺の生徒は「あそこ」「あの寝てるやつ」などと指差したりしては、問いに答える。聞かれてない生徒もつい視線を同じ方向に向ける。総じてクラスにいたかなりの生徒が同じ方向を見たため、男子生徒は探しにきた「桜木亮」が、どこにいるのか、すぐにわかった。

皆の視線の先には、机に伏せて寝ている亮と、その席の前で壁を背にして雑誌に目を下ろしている明がいる。

男子生徒は、答えてくれた周辺の生徒に軽く手を振りつつ「ありがとう」と応えながら、皆の視線の先へと歩みを進めた。

「よう、小路」

「ああ、野村……、亮に用事か？」

どうやら明（明の苗字は小路）と、野村と呼ばれた男子生徒は知り合いのようで、二人は共に挨拶を済ますと、明が亮に目を向けながら野村の用件を聞いた。

「……お前ら、友達なのか？」

明が親しそくに名前を呼んだことから、野村は亮が明の友人かと思ひ、意外の念を隠せない声で尋ねる。

「まあな。同じクラスなんだから、そう意外でもないだろ？」

明がそう言うと、少しばかり納得のいかない顔を見せる野村だが、今はそんなことはいいと思ひ直して、確認する。

「これが桜木亮？」

本人を前にして　寝ているからだろうが　失礼な聞き方であるが、明は一々、指摘せずに頷く。

「ああ……、亮に用事があるなら起こしたらどうだ？」

明が小さく笑ってそう言うと、ほんのわずかだが亮の手がピクッと動いた　が、傍で話している二人は気付かなかつた。

「そのつもりだ……、おい、起きろよ、桜木」

恐らく初対面であるだろうに、少々乱暴なその物言いは、自分が今まで顔も知らなかつた男が、たいしたことのない男だろうと思っ
ているかのような心境が垣間見える。

いつにないことで、そのたった一声で亮は頭を、ゆっくりとだが
起こす。

明はそれを珍しいと言いたげに器用に片眉を吊り上げると、半目
で自分を睨む亮の顔が見えた。

文句が言いたそうな亮を見た明は、野村にわからない程度に苦笑
して見せる。

そんな明に、亮はあからさまにため息を吐くことで自分の心情を
悟らせ、訪問客に顔を向ける。

(……いかにも、Aグループですってツラしたやつだな)

亮が見た野村の印象は、それに尽きた。

自分に自信があるのか、眉を寄せて亮を見下ろす顔からそんな雰囲気伝わる。

記憶をほじくり返すまでもない、間違いなく初対面である。

さて、何となく予想はつくが、こいつは何しにきたのか、と亮が考えていると先に野村が口を開く。

「お前が桜木亮？ ……藤本さんと付き合っているっていう、あの？」

その声には不審な響きがありありとでていた。信じられない、と言いたげに。

「……あの、が何かは知らないが、その桜木亮だ。何か用か？」

その、とは恵梨花と付き合っている点である。亮がそう言つと、野村は小さく舌打ちをして

「やっぱりな……、名前聞いても、全然顔が思い浮かばないと思つたら、案の定だ。見ても全然記憶に引つかからないような、こんな地味なやつになんで藤本さんが……」

亮の用件を聞く言葉には返さず、初対面の相手にしては、中々に乱暴な言葉を吐いた。いや、これは亮に、というよりも、思わず言ってしまったようなものだろう。

そして、その言葉が聞こえた教室に残っていたクラスメイト達は、乱暴なその物言いに喧嘩が起きやしないかと、楽しそうに見る者、

心配そうに見る者と分かれる。

対して亮は表情を抑えるのに少し苦勞した。嬉しさから来る表情の変化を。

「全然記憶に引つかからない」、「地味な」の言葉から、亮は日頃の努力の成果を感じさせられたからだ。

もはや、過去の栄光？　かもしれないが。

こいつは案外、いいやつかもしれんと思いながら、亮は肩を竦める。

「特に秀でているものも無いんでな」

さして表情に変化も見せず、飄々と言う亮を見た野村は、それが余裕ありと見えたのか、気に食わなさそうにすると、鼻で笑うように言った。

「ハッ、自分から無能宣言するなんてな。馬鹿じゃねえの？」

(……いや、普通だろ。それに秀でているものが無いと言ったからって、無能扱いとは随分、突飛な考え方するやつだな……、まあ、どっちでもいいけど)

亮からしたら、普通のやつと思われる方が好ましいが、すごいやつと思われるよりも、無能なやつと思われるほうがいいと思っている。その方が面倒ごとを避けられると考えているから。

ここは無能を肯定するべきか、いや、普通だと反論するべきかと、

亮が少し悩んでいると、それを言い返せないと見たのか、野村が

「言い返すこともできないってか……こんなんじゃ、フラれるのも時間の問題だな」

と馬鹿にする様に言うだけ言うと、亮に背を向けて教室から出て行った。

事態を見ていたクラスメイト達は、喧嘩が起ころなかったことをつまらなく思う者、何も起こらずホっとする者の二つに分かれた。

「……何も言い返さなくてよかったのか？」

結局、さっきのは何しにきたのだろうかと考えていると、明が聞いてくる。

「言い返すというよりもな、ちょっと悩んでたら帰りやがった」

亮が肩を竦めて言うと、明が訝しげな顔になる。

「何に悩んでたんだ？」

「無能を肯定するか、普通だと反論するか」

亮は今もその選択に迷っているような顔である。

「……、その二択で？」

「そうだ」

呆れた目で問う明に、亮が頷くと、明はさらに呆れ顔になり、次に肩を震わせて笑い始めた。

「亮、お前って、本当……」

「なんだ」

「見てて飽きない……、面白いな、本当に」

明が笑いながら言うと、亮は顔を顰めて不満そうに反論する。

「馬鹿言うな、普通だろ、俺は」

「いやいや……、まあ、お前がそう言うなら、それでいいけど」

笑いながら言う明に、亮は更に顔を顰め、そっぽを向くように窓に目を向けた。

そんな亮を見た明はふっと笑うと、少し真面目な顔を作った。

「野村のことだけだな……」

「……野村って、さっきの剣道野郎のことか？」

亮は笑うのを止めた明に顔を向けた。

「そう……、うん？ 名前知らないのに、剣道部だって知ってるのか？」

明は肯定しようとするが、何かがおかしいと思いつつながら、訝しげに亮を見た。

「いや、俺が知るかよ」

「剣道野郎って、言っただろ」

「剣道野郎ってのは、剣道をやってる野郎のことで、剣道部に入っているかなんて、俺が知るかよ」

「……じゃあ、何で剣道をやっているかなんて、わかったんだ？」

「……剣道っぽい顔してたじゃねえか」

説明が面倒だと思つた亮は、そう答えた。実際に説明しようとしても、それは難しいからだ。

誰が聞いても、納得いかない答えを聞いた明は

「……」

押し黙り、言つた亮も

「……」

同じように押し黙つた。

すると、明の眼が笑い始め、それを見た亮はゆっくりと目を逸らすように動かした。しかし、口元が軽く笑い始めている。

「……剣道っぽい顔なんだな？」

明は無理して作つたような、真剣味を混ぜた声で確認した。

「その通りだ」

亮は目を逸らしながら、渋面を作つて頷いた。

「……」

二人にまたも、沈黙が下りる。

すると、どちらからだろうか、多分、同時なのだろう。

肩が震え始め、ぷ、と吹き出す音と共に、二人して爆笑し始めた。

クラスメイト達は、先ほどの剣呑な空気を出していた（実際に出していたのは野村だけだが）場所から大きな笑い声が聞こえて、大きく首を傾げている。

「なんだ、その、剣道野郎の野村なんだがな」

ひとしきり笑った明は、荒れた息を整えながら口を開く。

「おう、剣道野郎がどうした」

亮も笑いを治めながら、声を出す。

二人して、剣道野郎と言ったことにより、また笑いの発作が起きそうになる二人だが、なんとかそれを抑えた。

「根は悪いやつじゃないんだよ……、ただ、一年の時から藤本さんに惚れてるって聞いてたからな……、だから、あんな態度なんだろ
うな」

あんまり悪く思ってくれるなと言いたげに、明は肩を竦める。

「恵梨花にね……、友達なのか？ 明と剣道野郎は」

亮の中で、野村は剣道野郎と固定したかもしれない。

「友達つて、ほどもないな……、顔見知り程度だな。積極的にかばいたくて言ってるんじゃないやなくてな……、普段はそれほど、あんな態度は見せないやつなんだよ。藤本さんがお前と付き合ったから、あんな態度になってしまったんだろうと思う。だから、野村の言ったことはあんまり気にするなよ」

亮がまた剣道野郎と言ったことで、笑いそうになった明だが、それを抑えつつ質問に答えて言った。

「ふうん……、別に気にしてなんかないぞ？」

「……うん、多分、本当に気にしてないんだろうな」

明は野村が来てから、まったく怒っている様子を見せないだけでなく、気にした風にも見えない亮を思い出しては、少し呆れつつ頷いた。

「今のところ俺が気になっているのは、剣道野郎のことじゃなくてな……」

「なんだ？」

亮は悩ましげに眉を寄せては、窓の外を見ながら言った。

「同じように恵梨花に惚れている男が、あと、どれだけいるかってことだな」

きつと山ほどいるだろうなと思ったが、それについては何も言わ

ない明であった。

昼休みに入った亮は弁当の入った鞆を片手に、屋上への階段を登っていた。

先ほど起こったことに、ため息を吐きながら。

亮が教室を出ようとした時に、クラスの男子数人に囲まれた時は驚いたものである。

クラスメイトだが、ろくに話したこともない連中に、いきなり昼と一緒に食べないかと聞かれた時はクエスチョンマークが見事に頭の上に浮かんだだろうなと思った。

「先約があるから」と断れば、「かまわないから」と言われ、呆れながらも「約束した相手のほうがかまう」と言えば、少し黙った末に「どこで食べるんだ」と聞かれ、思わず「屋上だ」と言いそうになったところで、朝に恵梨花から聞いた梓の伝言を思い出して、なんとか「生徒会室だ」と答えると、いかにも残念そうな表情を作っては、亮と一緒に食べるのを諦めた様子で離れて行った。

まさか、あいつら……と思っていたと、明が呆れた様子で、「お前と一緒にいることで、藤本さんらと話したかったんだろうな」と言われて、やはりかと亮も呆れつつ納得した。

それと同時に、このことを予測していたであろう梓に、流石だな

と思わざるをえなかった。

また、こんなことが起こるんじゃないだろうかと考えると、つい、ため息が出てしまう。

しかし、亮は気持ちを切り替える。

今は朝から待ちに待った、恵梨花の手作り弁当を食べれる時間である。

一人で早弁したい誘惑に、何度駆られたかわからない。

確実に美味いとわかっている弁当だから、尚更である。

そこで、ふと思った。

屋上に行くのが随分、久しぶりのような気がするなど。

行ってなかったのは、先週だけなのに。

それに、あの三人と昼食を食べるのが、当たり前前の感覚のようになっていふことに今更に気付いた。

最初の内は強引な誘いの上だったが、目の保養になるから、まあ、いいかと考えていたのも、ずっと昔のような気がしてならない。

自分の心境の変化を感じて、苦笑した亮は屋上への扉に手をかけた。

第五話 野郎（後書き）

亮が「剣道野郎」と言い始めたのは、作者の脳内脚本を無視した、亮のアドリブだ、と言います……

第六話 梅やみ(前書き)

誤字・脱字ありましたら、報告頂けると助かります。

第六話 悔やみ

「亮くん！」

屋上の扉を開けると、それに付随した金属の軋む音で気付いたのか、恵梨花が亮の名を呼ぶ。

亮が声のする方向に目を向けると、日差しを背に、笑顔で手を振る恵梨花、何かの表情を見せるでもない梓、特に表情を読ませない咲の三人がシートの上に座って、こちらを見ている。

亮は軽く手を振り返すと、三人に向かって足を進める。それと同じ時に妙に照れ臭くなってきた。

それは屋上にくるのが久しぶりだからか、三人と一緒に昼食を一緒にするのが久しぶりだからか、それか或いは両方か。

他の要因もあるのだろうが、亮はそれを顔に出さないようにして、三人に声をかける。

「悪いな、待たせたか？」

「ううん。そんなに……亮くんが後から来るなんて珍しいね？」

恵梨花が言う通り、ここへ亮が恵梨花達より遅く来るのは珍しいことで、初めてのことである。

その原因は間違いなく、教室を出ようとした亮に話しかけ、恵梨花達と一緒に昼を食べようとした下心ある男子達のせいだろうが、

亮はそのことを一々、言うつもりは無かった。

亮が「ああ、ちよつとな」と返すと、それに何かを察した梓が尋ねる。

「あたしの伝言は役に立った？」

「ああ、バツチリな……助かったぜ、ありがとよ」

亮はニヤッと笑って、素直に礼を言つと梓は

「そう。それはよかった」

と肩を竦める。

亮と梓のやり取りに、恵梨花が小首を傾げるが、何も聞かずに亮から鞆を受け取り、弁当を、もとい重箱を広げ始める。

靴を脱いでシートの上に座ろうとすると、先ほどからジッと自分を見ている咲と亮は目を合わせた。

目を合わせても何も言わない咲に、首を傾げつつ表情を見ていると、何故だか咲がして欲しいことが、多分だがわかった亮は苦笑して手を伸ばす。

「よう、咲」

そう言いながら、亮は咲の頭を撫でる。

すると咲はそれを気持ちよさそうに目を細めて受ける。

恵梨花は、そんな咲を羨ましそうに見ては、少し拗ねたような顔

をするが、咲の嬉しそうな顔に「まあ、いいか」と小さく息を吐いた。

亮はどうやら正解だったようだ、安堵の息を漏らしながら恵梨花と咲の間であり、梓の正面に座った。

リラックスするように座った亮は眼前の光景にたいして、やっぱり目の保養だな、と思ってしまうのは間違ったことではないだろう。特に教室の中でなく人目のないところで、というのが亮を落ち着かせ、強くそう思わせた。

「……話には聞いていたが、改めてこうやって見るとすごい量だな」

広げられた重箱を見た梓が呆れた様子で言う。横にいる咲も同意するようにコクコクと頷いている。

「……たしかに、そうだな」

「でも、本当に亮くん、全部食べるよ？」

亮が小さく頷いて同意を示すが、恵梨花が一番呆れるべきポイント、これを食べ切る亮だと言わんばかりの顔である。

「全部じゃないだろ、恵梨花も食べるだろ？」

「私も食べるけど、私が食べなくても、亮くん、全部食べれるよね？」

「……食べれるな」

全員から呆れの目を向けられた亮は、恵梨花の「全部」の言葉に

反論するも、指摘された内容を考えた亮は、いつも、ほんの少しにしか見えない恵梨花の食べる量から、「楽勝」という解答を導き出した。

梓は呆れ顔を更に強くして首を振る。

「まったく、本当にふざけた胃袋だな」

亮は何も言わず、苦笑して肩を竦めた。

そこで、恵梨花が

「はい、お皿とお箸」

そう言つて、恵梨花が亮に簡素なプラスチックの皿と、黒塗りの箸を亮に渡す。

紙皿でも、割り箸でもない食器を見た亮が、ん？ となり、説明を求めて恵梨花と目を合わせる。

「いつも、使い捨ての割り箸や紙のお皿だと、もったいないじゃない？ だから亮くん用に買ってきたんだけど……、気に入らない？ その食器」

恵梨花が窺うように亮を見て言った。

言われてみればもったもな話である。

これから弁当を作ってくれる機会が多いなら、使い捨ての食器を使うのは不経済であり、エコにも反する。

亮にもそれがわかった。

「ああ、そういうことか。いや、別に食器にこだわりもってる訳じ

やないから、いいけど……じゃあ、後で金払うな、ありがとな」

亮がそう言うと恵梨花は少しホっとしたように頷いた。

そして改めて自分の手にある食器を見た亮は、恵梨花が自分用の食器を買ってきてくれたことに対して気恥ずかしさを覚え、それを顔に出さないようにするのに少し苦労した。

梓はそんな亮から何かを感じ取ったのか、ニヤニヤして亮を見るが、亮は絶対に目を合わそうとはしなかった。それにたいして小さく笑い、亮から恵梨花に目を移すと、恵梨花が手にもつ食器に目が入り、思わず眉を寄せてしまった。

皿は亮がもつのもと同じもので、箸は亮の黒色の箸にたいして、ひと目でその色違いとわかる、赤色の箸である。

つまりはお揃いである。

ついでに自分のも一緒に買ったのなら、おかしい話ではないのだが、二人並んで同じ食器をもっているところを見ると、連想してしまふものがあった。

「君達、まるで……」

「何だ？」

「何？」

梓が口を開くと、亮、恵梨花の二人が揃って顔を上げる。それを見た梓は、やや躊躇うようにして

「いや、いい……、あたしが無粋だったみたい」

「「？」」

揃って首を傾げる二人に、梓が小さくため息を吐くと、咲が梓の耳に手を添えて二人に聞こえないように何やらゴニョゴニョと言ったようである。

咲の言葉を聞いた梓は「まったくね」と言っただけで笑った。

亮は梓の珍しい素直な笑顔に目を丸くし、恵梨花は首を傾げている。

流石の梓も言えなかった。

付き合ひ立てのカツプルに対して、咲が梓に言ったように「まるで夫婦みたい」とは言えなかった。

からかうネタとしては、中々のものだが、それはもっと後になってからにしようと思は心を決めた。

恵梨花が食べる用意を終えると、四人は揃って「いただきます」と、手を合わせて食事を始めた。

「……………美味いです、恵梨花さん」

一品目を咀嚼そしゃくした亮の第一声である。

「うん、ありがとう。でも、なんでそんな口調？」

恵梨花は笑いを噛み殺しては聞く。

「わからん、なんか自然と出てきたというか」

「そうなんだ？」

「そうなんだ」

亮はおもむろに頷いた。

「どういう会話だ……」

梓は呆れつつも少し笑っているような顔である。

咲もクスクスと笑っている。

「あ、そうだ恵梨花……、ほら、これ」

そう言いながら、亮は夏山からもらった写真の入った封筒を胸ポケットから取り出して恵梨花に渡す。

「何？ これ」

「先週、教室で撮った写真……、デジカメで撮ったな。プリントしてもってきてくれたんだよ」

「ああ……、ええと、眼鏡かけた……夏山くんだったけ？」

「……よく覚えてるな」

「自己紹介したじゃない？」

「そら、そうだけだな……」

名前を覚えていた恵梨花にたいして、亮の声には感嘆の響きがあ

った。

なぜなら亮は複数人に、一斉に自己紹介されても、一人として名前を覚えれる自信などないからだ。いや、一人ぐらいはもしかしたら覚えるかもしれない。

あの日に恵梨花が受けた自己紹介は、明も含めると、合わせて四人である。

まさか、全員覚えているなんてことはないだろうと亮は思うも、恵梨花は亮が紹介してきた友人だからこそ、強く覚えようとしたなんてことまでには考えが至らない。

「すごく綺麗に撮れてるね」

封筒から取り出した写真を見た恵梨花が、喜びと感心が半分ずつ混じった声で言う。

「最新のデジカメラらしいからな」

亮が相槌をうつ。

「へえ、あたしにも見せて、恵梨花」

「はい」

亮の中で恵梨花の写真の第一人者の梓が、当然の如く興味をもち、恵梨花から写真を受け取る。

「本当に……、綺麗に撮れてるね。……もう一枚も見せて」
「ん」

二枚目を見た梓は、急に目が鋭くなったように亮は見えた。

じっくり二枚の写真を見比べた梓は、写真から目を上げずに口を

開く。

「亮くん」

「なんだ？」

「このツーショットの写真の方、焼き増ししてもらえるよう頼んでもらってもいいかな？」

「……わかった」

それだけで亮は確信した。梓は写真に写る恵梨花の表情の違いを見抜いたのだと。

拡大された写真でもないのに、なんて女だと亮は梓の観察眼の鋭さに舌を巻いた。対象が恵梨花だから、というのもあるかもしれないが。

亮がそんなことを考えていると、恵梨花が思い出したように言う。

「ねえ、これの印刷代っていくらだったの？」

恵梨花が鞆から財布を取り出そうとする。

ああ、やっぱり聞かれたかと予想してた展開なので、亮はプリクラの交換で済んだから印刷代はいらないと説明すると、恵梨花は一瞬悩んだ様子を見せたが、今度改めてお礼を言うことで納得したようである。

恵梨花が礼を言いに行くとすると、また教室が騒ぎになるのだからかと、ぼんやりと考えたが、余り深く考えないようにして、亮は目の前のご馳走に集中し始めた。

梓と咲が呆れの目を向ける先で、亮が早すぎるとも思えるスピードで弁当の中身を平らげていく。恵梨花は自分が食べるのもそこそこにして、亮の皿に次々とおかずやおにぎりを載せたり、お茶を入れたりしている。亮が「自分でとるぞ」と言っても、「いいから」と恵梨花はニコニコとご機嫌な様子である。亮としても、載せてもらうのに不快感はなく、寧ろ欲しいものが欲しいタイミングで来る気がするので、途中からは黙って受け入れている。

そんな風にして実に美味しそうに食べる亮と、甲斐甲斐しく世話をする恵梨花の二人に、梓と咲は苦笑交じりに見ていた。

「そういえば、君が助けた三人だがね」

梓がそう言ったのは、四人の食事が終わり、弁当を片づけ、満足気な顔で亮が食後のお茶を飲んでいた時だった。

「……俺か？」

亮は何の話だとばかりに梓を見る。

「君だよ」

「俺が何しただって？」

「助けた……、先週に」

「……？ 誰を？」

梓はここでため息を吐いた。

「絡まれてた男子……、岡本、工藤、吉田の三人！」

亮はまったく身に覚えのないような顔であり、それから小さく笑って

「何言ってるんだ、あんた。俺は男は………、そういえば、助けたな………」

途中で思い出した顔になった。

「なんで、六人も相手に喧嘩した理由忘れてるの？」

「まったくね、ほんの先週のことなのに」

恵梨花が呆れながら苦笑いを浮かべ、梓は理解しがたいと言わんばかりの顔である。

「……仕方ねえだろ。『助けた』なんて言うから、女の子のことかと思っただよ」

亮が不満気に言うと

「……亮くんって、本当に普段から男の子は助けないのね」

「……みたいね。助けない理由を聞いてなかったら、どこの女つたらしの発言かと思うよ」

恵梨花がしみじみと言い、梓も同意するように頷いた。

女つたらしとは、随分とひどいことを言ってくれるなと亮が苦笑

すると、梓が思い出したようにして口を開く。

「でも、よく考えたら忘れてても仕方ないかもね」
「なんで？」

恵梨花が梓に振り向くと、梓はニコッと微笑んでこう言った。

「亮くんが、恵梨花に愛の告白をした日だもんね」

「……！」

「！……ゲホツ、ゴホツ……」

途端に恵梨花は顔を赤くし、亮は飲んでいたお茶を吹き出しそうになり、なんとかそれを抑えるも、そのせいで盛大に咽むせた。

「恵梨花に告白したことに比べたら……、男三人を助けたことなんて、印象に残らないよね？ 亮くん」

梓は慈愛を感じさせるような微笑みを浮かべている。

「あ、あんな……」

亮は顔を赤くしては口元をヒクヒクさせ、恵梨花は真っ赤になった顔で俯いている。

そこで梓は、しまったといった顔で、パチッと額に手をやっては、しみじみと首を振る。

「告白だけじゃなかった……、お互いに熱く、そして強く抱きしめ合った日でもあったよね」

これまた、実にいい微笑みを浮かべて言う梓である。

「……………！……………！……………で、そ、その三人がどうしたんだ？」

亮は『抱きしめ合った』の降りで、色々と何か思い出したようだが、それを何とか振り払っては、元々の話の流れに戻すことを試みた。

すると梓はポン、と手で手を叩く。

「そうそう……………、その三人の怪我なんだけど、先週の金曜日……………、恵梨花が亮くんに愛の告白をした日だけだね……………ああ、あの時の恵梨花の可愛さときたら……………、特に亮くんが返事を出した後なんか特に……………！二人のためとはいえ、あの場にいなかったのが本当に悔やまれるわ……………」

亮の試みは一瞬成功したかに見えたが、失敗に終わったようで、梓は首を振り、拳を握っては本心から悔しそうな顔を見せている。

「ちょ、ちよつと梓……………！」

恵梨花はその日のことを思い出し、また、人に言われることによつてかなりの羞恥を誘ったのか、耳まで真っ赤である。ついでに言う、亮も真っ赤になっている。

そこで梓はどこから取り出したのかデジカメを手に持ち、流れるような動き（恐らくデジカメはいつでも撮れるよう、起動済みだと亮は見た）でパシャパシャと恵梨花を撮った。

ぎょつとした恵梨花は慌てて顔を背けるが、遅かったようで、その証拠に梓は満足気にひと仕事終えたような顔である。

しかし、そんな顔をすぐに引つ込めて

「三人の怪我ね、金曜日は随分と痛そうだったけど、今日見たらそ

「こそこ回復してたみたいよ」

しれっと亮に言った。

「ねえ、恵梨花。けっこう大丈夫そうだったよね？」

今度は微笑を浮かべて恵梨花を見る。

「あ、あんたって……」

恵梨花はプルプルと、少し涙目である。

「……………言いたかったのは、つまり、その三人の怪我がよくなっ
たみたいだってことだけか？」

恵梨花の慌てようを見たせいか、少し落ち着けた亮が疲れたよう
に聞いた。

「そう、それだけ」

梓はあっさりと言った。

「そうかよ……………」

そう言うと亮は、うなだれるように大きく息を吐いた。

「君が助けたんだから、一応知らせとこうと思ったんだけど、忘れ
てたぐらいだから、どうでもよかったみたいね」

「まったく、その通りだ」

亮は大きく頷いた。男の怪我の具合なんて、心底どうでもいいと
いった顔で。

第六話 梅やみ（後書き）

この四人は書くの楽ですね……
でも梓が出ると、やっぱり文字数多くなるな……
何気に二章で一番、楽に書けた話でもあります。

第七話 キラキラ（前書き）

実は、まだ昼休みです……

誤字・脱字ありましたら、報告頂けると助かります。

第七話 キラキラ

「喧嘩で思い出したけど……、君は何か武術を習っているよね？」

質問というより、確認に近かった。

梓が先ほどの撮影のせいで少し拗ねた恵梨花を宥めてから亮に聞いた言葉である。

宥めても、さして機嫌が治ったようには見えない恵梨花であるが、梓は話をするので、恵梨花の意識をそちらに向け、機嫌が元に戻るのを期待したのだろう。

話題の選択も、間違っていない。亮のことなら、喜んで聞くのだろうから。

「……習っていたというか……気付いたらやっていたってやつだな」

亮は思い出すように、上空を見上げながら答えた。

聞かれた亮は、カメラこそ向けられなかったが、恵梨花と似たような被害者でもある。梓が話題を振ってきた意図も理解している。それでも素直に話に乗ったのは、赤くなつた恵梨花を可愛いと思つて見てしまった故の、共犯者に近い意識をもつてしまったせいだろう。

「それって、小さい頃からってこと？ 物心つく前から？」

恵梨花が好奇心を隠せない顔で聞く。梓に向けていた機嫌の悪さも、少し治まっているように見えた。

梓の狙いは見事に巧を奏したようである。

「ああ……そういや、言っただけでなかったか……。家が道場やってたな、それでいつからかやってたな」

亮が頷いて言った。

「そうなんだ！　すごいね、家が道場なんて！　……でも、そんなに意外じゃない……？　ううん、むしろ、そっちの方が自然かも……」

恵梨花が目丸くして驚きを表すが、納得したように頷く。

「？　何が自然なんだ？」

亮が訝しげに問う。

「だって……、亮くんが真面目に道場に通っている姿があまり想像できないっていうか……めんどくさがったりして……」

恵梨花が言いにくそうに、そしてそれを誤魔化すように小さく苦笑いを浮かべている。

「そいつはちょっと、ひどいんじゃないか？」

亮が少し傷ついたような顔を見せると

「あたしも恵梨花に同意見」

「私も」

「……」

梓と咲にまで同意されて、亮は大きく肩を落とした。

そこまで自分は面倒くさがりな人間に見えるのだろうかと思が、亮が悩む中、梓が口を開く。

「ふむ……、どちらにせよ、通っている、もしくはいた、か、そうなんだろうとは大方思っていたが、本人の口から聞くとやっぱり、意外感があるね」

梓がニヤリとからかうように言うと、亮はため息を吐き

「……もう、好きに言ってくれ」

と落とした肩を上げずに諦めるように呟いた。そんな亮に恵梨花と咲は悪いと思いつつも、肩を震わさざるをえなかった。

「それで君の家がやっている武術って何だい？ ……やっぱり足技が主体の？ テコンドー？ キックボクシング？ ムエタイ？ ……それとも意外なところでカポエイラ？」

梓がいつにないほど好奇心を露わにしては次々に格闘技の名を挙げて亮に尋ねる。少し興奮しているように見える。

そんな梓に亮が一瞬呆気にとられた。恵梨花と咲に目をやれば、二人とも少なからず驚いて梓を見ている。その様子から、この女の

こんな様子はやっぱり珍しいらしいと亮は見た。

「いや、違う。うちがやってるのは古いのが自慢みたいな古武術で、足技が主体でもない。……なんで、また、足技主体なんて思ったんだ？」

ひとまず亮は、梓が挙げた格闘技でないことを説明するが、そもそも、なぜ梓は自分が身につけた格闘技が足技主体だと思ったのか疑問をもった。

すると梓は亮の答えに、驚き故か目を瞠った。

「足技が主体じゃない……？ ……じゃあ、君はその古武術の中でも特に足技が得意ということ？」

「？ いや、得意でもない……、何でそう思うんだ？」

今度は亮が驚きに目を瞠った。重ねて否定し、再度疑問を口にする。梓は少し困惑気味に答える。

「いや、だって、君、六人相手に喧嘩した時も、話から聞いたただけだが、恵梨花を助けた時も、足しか使ってないそうじゃないか？」
「……そういえば、そうね」

梓の言葉から恵梨花も思い出したようで、納得の声を上げる。咲は思い出そうとしているのか、首を傾げている。

たしかに亮は恵梨花に絡んでいた三人から助ける時も、先週に六人を相手にした時も足しか使っていない。

「……ああ、そうか……。人から見たら、そう映るのか……。そら

そう思うかもな」

亮もそれを思い出し、梓がそう考えるに至った理由がやっとわかり、思わずそう呟いた。

「別に蹴りが得意って訳でもないの？ 亮くん」

恵梨花も思い出した内容から、足技が主体でもなく、得意でもないと言つ亮を不思議に思ったようだ。

「ああ、違う」

否定すると亮は苦笑を挟んで、こう言った。

「寧ろ足技は苦手なほうだな」

この言葉に三人の美少女は揃って目を瞠った。

「ちょ、ちょっと待ってくれ、君」

最初に立ち直ったのは流石に梓だった。

亮は別に何もしていないし、言ってもないが、一々「待ってる」

とも答えず、少し狼狽気味の梓を珍しいと言いたげな目で見ています。

「じゃ、じゃあ、君は……得意でもない、寧ろ苦手な足技だけで、六人を相手に喧嘩したと、そう言っているのか？」

梓は亮が言ったことを、確認するように繰り返した。

「そうだな」

「な、なぜ、そんな……？」

梓の困惑は相当なものようだ。亮は少し見てて楽しく思いつつ、梓の疑問に答える。

「じじいが……、俺のじいさんが道場の師範でな　まあ、最高責任者？　みたいなもんか。緊急時以外で、素人を相手にする時は、手を出すなって言われてんだよ」

「」「」「」

亮が答えると三人娘が押し黙った。

「？ ……ええと、亮くん、それは喧嘩をするなって言ってるんじゃないの？」

恵梨花が少し困ったように眉を寄せている。梓も同様の顔を作っては亮を見ているし、咲は恵梨花の言葉に同意するように頷いては亮を見ている。

それに対して亮は苦笑いを浮かべる。

「いや、文字通り『手』を『出すな』でな　『使うな』でもいい

か。……親父にも言われてたんだが、売られた喧嘩ならいくらでも買っている。けど、お前は足技が苦手なんだから、素人を相手にする時は、足だけで対処して練習台にしろって……、たいしたことのない相手でも、何が活きるかわからないのが実戦経験だ。ナイフとが出したりしてきたら、それこそいい経験　ラッキーだと思えて言われ続けてきたな」

恵梨花は亮が「親父」と言った辺りで、一瞬ピクッと反応したが、亮は気づかずに、困ったじいさんと親父だろ？　といった顔をしている。

「練習台って……、ずい分と変わったおじい様に、お父様みたいね……それに普通、道場とかで習っている者は喧嘩はご法度だと、よく聞くが……」

呆れ顔を見せながら梓が呟くように言うと、亮は頷いて肩を竦めた。

「うちの場合は自分から売るような真似をしなければ、それほど問題にはならねえかな。買った場合も、やり過ぎないように、とだけ注意されてるぐらいで」

「ふむ……、人の道場のやり方にあれこれ言ってもりもないが……、君は本当に足技が苦手なのか？」

梓が胡乱な目を向けると、亮が苦笑する。

「苦手と言っても、手技に比べたら、って話なだけだ」

つまりは、亮は足技中心で闘うよりも、手技中心で闘う方が得意だと言っているのである。

「六人を軽々と倒したように見えた足より、手のほうがすごいのか、君は……」

梓は何と言ったらいいか、といった顔をしている。

恵梨花は呆れを通り越したのか、感心顔である。心なしか、自分の選んだ人はやっぱりすごい人だったと思っっているようにも見える。

「……君、一体どれだけ強いんだ？」

梓が眉を寄せては訝しげに亮を見る。

「んなこと聞かれてもな……」

どう答えたらいいもんか、と亮は難しい顔をしては頭をガシガシと掻く。

少し悩んだ様子を見せた後に、こう答えた。

「まあ、素人には負けないと思うぜ？」

明らかに適当に答えを返した亮に梓が呆れの目を向ける。恵梨花も同じような目をした後、クスリと笑った。

この亮の回答は、素人六人相手に既に証明されているもので、この場にいる人間にはわかりきっていることである。

ろくに満足いかない回答のため、もうちょっとマシな回答を得ようと再度、梓が尋ねようとすると、咲が亮の袖を掴み、クイクイと引っ張った。

咲が何の用かと興味をもった梓は開きかけた口を閉じた。

「どうした、咲？」

亮が咲に振り返ると、咲は指先までピンと伸ばした手を肘と一緒に肩の高さまで上げ、肘から先を目の前で上下に動かして見せた。

「……割れる？ ……かわら瓦」

「……ああ……、手刀で瓦を割れるかって？」

亮は咲のロボットのような動きを訝しげに見ていたが、最後の一言により意味を理解する。どうやら指先まで伸ばした手は手刀を表したようだ。

確認すると、咲はコクと頷き、亮をジッと見上げた。

亮の気のせいか定かではないが、その咲の目が妙にキラキラしているように見えた。

「手刀で割った経験は無いんだが……、多分割れると思うぞ」

亮がそう言うと、咲は期待を込めたような目で亮を見る。

「……見たいのか？」

コクコクと咲が頷く。尻尾があつたら、ブンブンと揺れているんじゃないかと思うほど、咲の顔には期待が溢れているように見えた。

こんなに表情を露わにする咲は初めて見るかもな、と亮が考えて

いると

「あ、私も見たい!」

「あたしも」

恵梨花が笑顔で手を挙げては便乗し、梓も小さく手を挙げた。

亮は無言で咲から二人に振り向き、また咲を見た。こぼれそうな期待を顔に貼り付けている咲を。

つい、息を吐いてしまった。

正直なところ面倒くさいと思ったが、咲の純粹な期待の眼差しを見ると、自分には断ることができないと悟った亮は、肩を竦めて苦笑する。

「まあ……、機会があればな」

「体育祭、何の種目出るんだ? 亮」

五時間目終わりの休み時間、伸びをしている亮に明が尋ねた。

「体育祭? ……ああ、この後のロングホームルームLHRで決めるとか言ってたな…
…、去年と同じだ」

「去年と？ また、サッカーか？」

亮の返答から、明はすぐに亮の去年の種目名を言う。その早さから、どうやら少し予想していたようにも見える。

ちなみにこの学校の体育祭は男子がサッカーかバスケ、女子がソフトかバレーに分かれている。

種目毎に学年八クラスでトーナメントを行い、その勝敗によりポイントが与えられる。

そして四種目の合計ポイントを競い、学年毎に総合優勝を決める。

「ああ、このクラスにはサッカー部が何人かいたよな？」

「……いるな、相馬に小島が」

明が答えると、亮はよしよしと満足そうに笑う。

「今年も、いい体育祭になりそうだな」

「……亮、まさか今年も去年みたいに過ごすつもりか？」

明があからさまな呆れの目を向ける。

「当たり前だろ……、去年の体育祭は、実にいい日だったよな？」

亮が当然といった顔で頷いては、笑いかける。

「……去年の亮のアレをいい日と言うのは、お前だけだろうな……
まあ、亮らしいと言えば、らしいが……」

明が眉間に手を押さえては頭が痛そうに言うと、ん？ と何かに気付いた様子で問いかける。

「でも、いいのか？ 去年と同じで……」

「？ 何がだ？」

「藤本さんだよ」

「？ 恵梨花は関係ないだろ、別のクラスなんだから」

亮は何か問題あるのか？ といった顔をして明を見る。

「……いや、そういうことじゃなくてだな……」

明はどう言ったものか、と悩む様子を見せている。が、しばし悩んだ末、何か折り合いが見ついたのか頷いて言った。

「亮がそう言うなら、問題ないか……。俺はバスケに出るからな」
「好きにしたらいいじゃねえか……。そういえば、去年はお前もサツカーじゃなかったか？」

亮が言うと、明が頷いた。

「まあな……。あ、チャイム鳴ったな」

明が言う通りにチャイムが鳴り、担任の山下が教室に入ってきた。

明は前に振り返ると、かすかに笑みを浮かべて小さく呟いた。

「面白くなってきた」

第七話 キラキラ（後書き）

この話と前話で合わせて一話のつもりだったんですがね……
文字数が思った以上にいったので、半分にわけました。

第八話 黒（前書き）

先日はお騒がせしました……

あ、わかる方だけでけっこうですorz

更新も遅れて申し訳ないです

誤字・脱字ありましたら、報告頂けると助かります。

第八話 黒

「お疲れ様」

教室に帰って来た恵梨花に梓が声をかけた。

その声には、わずかばかりの同情が籠められているように感じ取れるも、言った本人の顔からはそれを窺うことができないような涼しい顔をしている。

一方、声をかけられた側の恵梨花は、胸の裡にある苛立ちを静かに抑えようとしているかのような、でも、それが少し失敗しているような不機嫌な顔である。声を返すことにより苛立ちが出そうになるのを避けるためか、無言で恵梨花は梓が今座っている席の隣にスカートを揃えながら腰を下ろした。

梓はそんな恵梨花の心中を察しつつ、再び声をかける。

「今週入ってから今日で、さっきので何人目？ …………… 六人目か…………、本当に多いね」

今度の声には、呆れと、恵梨花に向けてではない嘲りの響きがあった。

そこで、両手で頬杖をつき、目を閉じ眉間に皺を寄せて聞いている恵梨花が、はぁ、と大きくため息を吐いて、ようやく口を開いた。

「何で彼氏できたの知ってるのに、告白してくるかな……………」

顔を顰めてそう言う親友を、梓は同情を籠めた目で見た。

亮と恵梨花、二人の交際がオープンに知られることとなった日から明けての今週、現在は木曜日になるが、恵梨花の顔は浮かない。

先ほどの恵梨花と梓の会話からわかる通り、恵梨花は今週に入って六人の男子生徒から告白を受けている。

亮と付き合ったばかりの恵梨花は当然の如く、その告白を全て断っている。二人の交際は、ほぼ学校のみんなが知るところであり、恵梨花もそれを大体のところは察している。それなのに、告白してくる男子生徒達の心境が恵梨花には理解できなかった。

休み時間になつては男子生徒がやってきて、恵梨花を呼び、これこの場所に来て話を聞いて欲しいと言われる。話の内容とは、何かと推測するまでもなく告白である。呼ばれるのも、告白されるのも全て休み時間を使って対応しているため、恵梨花は亮の教室に遊びに行きたくても行くことが出来ない。時間が少し残っていたとしても、教室が離れているため、ゆっくりはできない。昼休みと放課後を指定された場合だけは、拒否している。言うまでもなく、亮との時間のためである。恵梨花が亮の教室に行かないため、梓、咲も遠慮して休み時間に亮の教室には行っていない。

今週に入ってから、恵梨花は毎日、亮に弁当を作っている。そのため、必然的に亮は毎朝、恵梨花を迎えに行き、昼は梓と咲と屋上で一緒だが、帰りは今のところ気を使われているのか、亮と恵梨花の二人きりである。

つまりは今週、亮と恵梨花は朝と帰りの登下校は全て二人きりである。

そのため噂に疎い生徒であろうと、この二人を見かけれる機会は多い。噂に疎くなければ、二人が毎日、仲睦まじく登下校しているのを知っているだろう。

それなのに、恵梨花に告白してくる男子生徒が後を絶たない。

こちらから話すことなどないと、告白される前に断ったらどうかと梓が言うも、恵梨花は先週に告白する身の心境を味わったばかりで、自分と同じぐらいの決心をして、告白しにきているのかもと思うと、それは憚れた。

なので恵梨花は律儀に呼び出しを受けた先（梓から言われて、人のなさすぎるところは避けている。中庭の隅っこなどが多い）に出向き、付き合いの申し込みを受けては、丁重に断っている。ストレスがたまるのも無理はない。

「ごめんね、梓。なんか八つ当たりみたいなお態度とって」「いいよ、付き合ったばかりなのに、こども告白されて、それで時間つぶされたらね」

気にしてないから、と申し訳なさそうに自分を見る恵梨花に梓は言う。

「……ああ、違うの。告白されるから苛立ってるんじゃないの」

「？ じゃあ、何に？」

梓がそう尋ねると、恵梨花から剣呑な雰囲気漂ってくる。

「告白してくる時に、みんなして亮くんの悪口言つよ」

「……………どんな？」

「あんな地味なやつ、取り柄のなさそうな男、存在感の薄いやつ、馬鹿なやつ、あんな無能そうな男って……………、別れた方がいいって言ってくるのよ……………、ああ、もう！ 余計なお世話よ！！ 亮くんのことろくに知らないくせに！！」

言っている間に、その時に感じた怒りも思い出したようで、怒りで顔を少し赤くしながら机をドンと叩いた。

それほど強く叩いた訳ではないのに、普段から目立つ彼女でもあるので、そのせいでクラス中の視線が集まった。

同じクラスなだけあって、最近の恵梨花の事情は知っている。彼氏が出来たばかりにも関わらず、次々とくる告白に苛立っているのだらうと 勘違いではあるが、その目は同情的である。

「……………彼もそう見えるように生活しているみたいだから無理もない話……………無能は言い過ぎだと思っけど、だからってそれを告白の時に恵梨花に言つのはお門違いよね……………」

これは相当怒っているなと思いつつながら梓が相槌を打つ。

「そうよね！？ さっきなんてね……………」

恵梨花がそう言ったところで八つとなり口を噤んだ。

それを梓が訝しげに見る。

「どうしたの？ さっき他に何か言われた？」

梓が聞くと、恵梨花の顔が眉を寄せては辛そうなものになった。

「ん……、さっき聞いたんだけど、なんか今言ったような亮くんの悪口、けっこうな数の人が言ってるのか聞いたんだけど……、本当かな？」

「……まあ、噂みたいな形で流れてるのは、あたしも聞いたよ」

梓が控えめに肯定すると、恵梨花は辛そうな顔をますます強くした。

「……二、三日で急速に広まっている噂である。噂というよりもただの悪口ともいうが、梓は流れ始めた頃から聞いている。亮のことについてもどんな噂が流れているか正確に把握している。」

そのことを恵梨花に言わなかったのは、言う必要性をそれほど感じなかったからだ。ただでさえ最近はストレスがたまりがちな恵梨花で、言ってもそのストレスが増えるだけである。

「やっぱり私と付き合ってたせい……よね？」

「……そうね、それ以外では噂に上るような男じゃないしね」

恵梨花の辛そうな顔を見ると、『違う』と言ってあげたいところだが、それを言っても気休めにすらならないことがわかっているのので、梓は正直に答えた。

恵梨花はそう言われると予想はしていたようだが、ハッキリ聞いたことにより、少なからずのショックを覚えたようだ。

そして、そんなショックを吐きだすように、ため息を吐く。

「付き合ってること隠してた方がよかったのかな……？ やっぱり」

「隠していても、いずればバレていたと思うよ」

「……そうだよ、噂のせいで亮くん、嫌な思いとかしてないかな？」

自分と付き合っているせいで、今の事態を招いている。恵梨花はそう思っている。

付き合うことで噂が流れたとしても、こんな悪口めいたものだけが流れるとは、予想していなかった。

自分のせいで、好きな人が嫌な目にあっていないかと考えると、辛いものがあった。

憂鬱な表情を作る恵梨花に梓が少し明るめるめの声を出した。

「そう噂を信じてる人ばかりでもないと思うよ」

「それは、そう思うんだけどね……」

最近話した（告白してきた）男は皆、亮の悪口を言う。梓の言っていることはわかるが、そう簡単には頭に入らない。

困ったように苦笑する恵梨花に、梓は微笑み、教室を見回した。

恵梨花が首を傾げて見守る中、梓は目標を見つけたのか、視線を固定すると手を上げて少し大きめの声を出した。

「神林くん」

呼ばれたのは神林将司^{カンバヤシマサシ}という名の男子生徒。少し高めの身長で、

人なつつこい愛敬のある顔をしている。その容貌を裏切らず、人当たりもいいのでクラスメイトからの信望も篤く、クラスの中心的存在でもある。

その神林は、談笑していた友達から目を離し、自分を呼んだ梓を確認すると少しばかり目を瞠った。

梓は神林と目が合うと、チヨイチヨイと手招きした。

神林は友達に断りを入れて、席を立ち、恵梨花と梓の前にやってきた。

「何か用？ 鈴木さん」

若干、声に緊張があるのは、クラスのアイドルとも言える二人を前にしているからだろう。梓や恵梨花には見慣れた反応である。

神林の緊張を敏感に感じ取った梓は、数週間前、自分達と咲を含む三人を前にして、かけらも緊張する様子を見せなかった亮を思い出し、あの男がやっぱり変なんだと改めて思った。

「ええ、友達と話してたのに、ごめんね。ちょっと聞きたいことがあって」

梓が悠然と微笑んだ

亮が見ていたら、嫌な予感を覚えたかもしれない。しかし、神林は顔を少し赤くするだけで、「何？」と聞き返した。

「恵梨花が彼氏できたの知ってるよね？」

「え？ ああ、そりゃ知ってるよ……、知らない人の方が少ないんじゃない？」

「そう、じゃあ、彼氏がどんな人だか聞いた？」

梓はニツコリと微笑んだ。

神林は顔をさらに赤くし、照れ故か、落ち着き無さげに、目をキョロキョロと動かしながら「あ、ああ、知ってるよ」と答えた。

恵梨花は呆れた顔で親友を見ていたが、神林の返答に少し違和感を感じて首を傾げた。

「じゃあ、その彼氏と恵梨花が付き合ったと聞いて、神林くんはどう思った？」

梓は小首を傾げて神林を見上げると、神林は赤く照れたような顔で、特に考える素振りも見せずに口を開いた。

「ああ、難攻不落な藤本さんと付き合うなんて、流石、りよ……」

そこまで言った神林は、突然目を見開き、慌てたように手を口に当てて「ゴホッ、ゴホッ」と咳き込み始めた。

明らかに、何か言おうとしたのを無理矢理止めたように恵梨花は見えた。胡乱な目で見ていると、横から小さな舌打ちが聞こえ、ちらつと目をやると、神林が咳き込んで目を逸らしている間に営業スマイルをやめた梓がしたのだと確認した。

神林はオホンと最後に一つ咳払いをすると

「ああ、ごめんね、いきなり……、なんか昨日からノドの調子が悪くてさ……」

と軽く頭をかきながら、申し訳なさそうな顔を作ろうとしていた。作ろうとしていたというのは、焦った顔を何とか隠そうとしている

かのように見えたからだ。梓も恵梨花も、そのことについては何も指摘しなかった。

梓は神林が自分を見る直前に、先ほどまでの微笑を元に戻し、手を振って「いいから」と返す。

「えーっと、藤本さんと付き合ったと聞いて……だよ、うん、驚いたかな。藤本さんって今までたくさんの人に告白されても誰とも付き合わなかったからさ」

梓は微笑を浮かべながら頷いた。

「そう、じゃあ、恵梨花の彼氏のことはどう思った？」

ここで恵梨花は耳に注意を傾けた。なぜなら梓が神林を呼んだのは今から神林が言うことを、自分に聞かせる為だろうなから。

「ん？ か、彼氏のこと……？ えーと……な、名前なんだったっけ……？」

神林は先ほど以上に、落ち着き無さげに目を動かし始めた。それを見て恵梨花は何かがおかしいと訝しげな顔になる。

「あれ……？ さっき『知ってるよ』って言わなかった？」

梓は片手を頬に当てて不思議そうに首を傾げた。

「あ……！ いや、そうじゃなくて、どんな人だったかっていうのを聞いて、知ってるって言ったんだよ」

神林は両手を前に振って、慌てた様子で言った。

「そう……？　それで、どんな人が聞いて、どう思ったの？」

梓は再びニツコリと微笑んだ。

「えーと……、ああ、なんか……あまり、目立つ人じゃないらしいね。地味だつてよく聞くよ」

「そうなのよね……、それだけ？」

「え？」

「そうね……、恵梨花とそんな人が付き合つて、似合わないとか相応しくないとか……、ふざけんなこの野郎！　とか思わなかった？」

梓は浮かべていた微笑をまったく変えずに言った。

本人を前にして何を言うか、そして梓らしくない口調まで聞いて恵梨花が目を開く。

しかし、そんな恵梨花以上に、目を剥き、驚きと動揺を露わにしたのは神林であった。

「ま、まさか！！　そんなことかけらも思つてません！　本当に！！」

大げさに両手を振つては必死な様子でそう言う神林に、流石の梓も驚いたようで、少しだが目を瞞った。しかし、すぐに元の微笑を浮かべる。

「そうなんだ……？　でも、そう言う男子って珍しい……、ねえ、恵梨花？」

「そ、そうね……」

神林の反応は明らかにおかしいが、恵梨花は神林の言ったことが嬉しかった。例え、本人が目の前にいるから気を使って、そう言っ

ただだと思っても。

「ああ、そう言えば……」

そう言っつて、梓はポンと手を手で叩いた。

「な、なに？」

神林は、ここにきてようやく嫌な予感というものを感じ始めたよ
うだ。そんな神林に梓が、再びニッコリと微笑む。

「神林くんって、恵梨花の彼氏と同じ中学校だよね？」

第八話 黒（後書き）

作者は、学年の男子の9割に告白された女の子を知っています……
信じられないぐらいモテる女の子というのは、実在すると作者は言
います……

第九話 悪女（前書き）

誤字・脱字ありましたら、報告頂けると助かります。

第九話 悪女

「ええっ!？」

「……………っ!」

恵梨花は目を丸くして驚きの声を上げ、神林は悲鳴が出るのをなんとか耐えたような顔をしている。

「ほ、本当なの、神林くん!？」

「え? ど、どうだったかな……………?」

神林はダラダラと汗を流し、焦りを浮かべた顔で、必死に恵梨花から目を逸らそうとしている。

「……………桜木亮って名前……………、知らない?」

この場でただ一人、落ち着いた梓がジッと神林を見る。

「ええと……………、ああ、そうだ、思い出した! ………………そうだ、そうだ。たしかにいたよ、桜木って……………」

さも今思い出したかのように、そして額の汗を拭いながら言う神林を見た梓が、わずかに口の端を吊り上げた。

「うそっ! 本当に!? ねえ、中学校の時の亮くんってどんなだったの!？」

恵梨花は思わぬところで、思わぬお宝を発見したような興奮した様子だ。

これほど強い興奮を露わにする恵梨花は珍しいだろう。現に梓はカメラを構えたい衝動を拳を強く握り締めながら必死に耐え抜いている。

「え！？ いや、あの……、あ、あんまり知らないんだよ……、中学校でもあんまり目立つような人でもなかったし……」

テレビに出るアイドルより可愛いと言われている女の子に問い詰められた神林は、タジタジになりながらも答える。が、その答えを聞いた恵梨花は、一瞬キョトンとすると、すぐに訳がわからないといった顔で首を傾げた。

「……中学校でも、あんまり……？」

それはおかしい。

そう思った恵梨花が、口を開こうとすると

「フツ、神林くんって変わっているね」

と、先に梓の軽やかな声が上がった。

「えっ、な、なにが？」

神林はここ数分で、とても疲れた様子を見せている。

「だって……、最初に恵梨花の彼氏のことを『知っている』って言った時には、名前も知らず、特徴しか知らなかったみたいだし……、聞いたことがある』って言うならまだしも『知っている』って言うなら普通、名前を覚えてるもんじゃないかしら？ ……例え、名前を聞いて忘れていたんだとしても、そんな話題（恵梨花の彼氏について）で、目立たなかったとしても同じ中学校の人の名前が出たなら、記憶に連結して思い出して、忘れにくくなると思うんだけど……、違っ？」

梓に悠然と微笑まれた神林は、引きつった顔で口元をヒクヒクとさせている。

梓の言うことはもっともである。

恵梨花も最初に神林から『知っている』と聞いて、感じた違和感の正体がわかった。

神林は今流れている噂に関係なく元々、亮のことを知っている。そして、それを必死で隠そうとしていること。梓が神林に話しかけたのも亮と同じ中学校だからということもわかった。

「そ、そうかもしれないね。……でも、なんか忘れてたみたいで……」

非常に苦しい言い訳を苦しい顔をして神林が言うと、梓は神林をジッと見た後に鷹揚に頷いた。

「そう……誰だっけすっかり忘れることあるもんね？」

「そう！　すっかり忘れてたんだよ！」

梓がニコッと微笑むと、神林は首を縦に振りつつ勢いよく言った。

「あ、私もすっかり忘れていたよ」

そう言いながら、梓は再び手で手をポンと叩く。

「神林くんって剣道部だったよね？」

「あ、ああ、そうだよ」

神林は一体、次は何を聞かれるのかと、少し警戒心の籠った声を出している。

「恵梨花は知ってた？」

「え？ うん、知ってるよ……、神林くんって、エースで次期主将候補なんだってね、すごいね」

恵梨花は突然、剣道部への話題に転換した梓の狙いがわからないながらも、話を合わせて頷き、自分の知っていることを思い出しては心から賞賛しつつ、笑顔で言った。

「いや、それほどでもないよ……候補なんて言われても先のことなんかわからないし……」

頭を掻きながら、照れた様子で謙遜して見せる神林。

愛敬のある顔なせいか妙に微笑ましく、恵梨花の顔には自然と笑みが浮かんだ。

「そつだ、タケちゃんは元気？」

「タケちゃん……？ あ、ああ！ 元気、元気！ 元気過ぎて困ってるくらいだよ。次の大会こそ全国に行くってハリきってるよ」

神林は「タケちゃん」が誰を指しているのか、一瞬わからなかったようだが、わかったところで笑って声を上げた。

「そつ、元気過ぎるくらいなんだ？」

恵梨花も一緒に笑った。

そんな二人を、微笑を浮かべて見ていた梓がふと思い出したような声を上げる。

「そつだ、神林くん」

「ん？ 何？」

神林は笑ったせいか、声から警戒心が薄れている。

「恵梨花の彼氏について、剣道部ではどんな噂が流れている？」

梓がそう言った瞬間、笑みを浮かべていた神林は、表情そのままにピシッと固まった。

そんな神林を訝しげに恵梨花が見る中、たつぷりと十秒ほどフリーズした神林は、ぎこちなく再起動した。

「す、鈴木さん……」

「何？」

梓は微笑みで応じる。

「い、一体どこまで……、いや、全部知ってて聞いているよね？」

「私が？ 何を？」

梓は大げさなほどに声に驚きを乗せて、目を丸くして言う。

すると神林は、深いため息を吐いては、大きく肩を落とし、苦労人の才を思わせるような苦笑いを顔に浮かべた。

「剣道部で流れている噂だね？」

「そう」

梓が返事をする、神林は一転して真剣な顔を作った。

「鈴木さん……、あ、藤本さんも……、いや、藤本さんにこそ聞いて欲しい」

声には、怖いぐらいの真剣な響きがあった。

「う、うん」

迫力に押されたのか、つい恵梨花は身構えた。

「俺は無実なんだ」

神林は真剣な顔でそう言った。

「はい？」

恵梨花の声には訳がわからないといった響きがありありと出てくる。しかし、それに構わず神林は続ける。

「いや、寧ろ俺は止めているんだ……、大会も近いのに、怪我をしてもらう訳にはいかないし……」

「え？ あの、ちよっと……」

恵梨花の困惑は増すばかりである。

「それに藤本さん！ 俺は二人が一緒にいるところを見たことあるけど、本当にお似合いの二人だと思ってる！ 心から！ 本当に心から……！」

神林の目は怖いぐらい真剣であり、同じようなことを二度言ってしまうほど必死な様子だ。

「え！？ あ、ありがとう……」

困惑は増すばかりだが、今一番言われたかったことを言われて、恵梨花は思わず頬を緩めた。

それから、神林は真剣な目をそのまま梓に向けた。

「鈴木さん」

しかし、梓は手で制した。

「いいよ、わかってるから……、神林くんはたしかに噂を助長するようなことはしていない。それは知っているから」

梓がそう言うと、神林はあからさまにホッと安堵の息を吐き

「ありがとう」

そう言いながら、片手を梓に差し出した。

梓はその意味するところをしつかりと理解し、強く握手に応じると

「その代わり、一つだけ聞かせて……？」

そう言うてはニコッと微笑み、もう片方の手も神林の手に添え、つまりは両手で神林の手を挟んだ。

「な、なに？」

神林はたじろぎながらも少し顔を赤くした。

「神林くんは、『彼』について何か知っている？」

問われた神林は、苦渋の決断を迫られたような顔をして、大きくため息を一つ吐いた。

「鈴木さん」

「うん」

「俺は『彼』とは同じ中学校という関係だけで……、『彼』は『地味』で『目立たない人』だったから、どんな人か『詳しくは知らない』んだ」

何か含んだような言い方だった。言った本人にも、それがわかって言っているのだろう。

そして、梓はそれを聞き間違えるような人でもなく、俯くと「そう……」と呟き

「それしか言えない……？」

小首を傾げて神林を見上げた。

「あ、ああ……」

更に顔を赤くした神林は呟くように答えた。

「そう、『言わない』『じゃなくて、『言えない』のね?」

梓は今日一番の微笑みを魅せた。

「そ、そうなんだよ……」

神林は大きく口元を引き攣らせた。

「え、えつと……?」

恵梨花は何が起こっているのかわからず、二人を交互に見ている。

そうこうしている内にチャイムが鳴り、神林は逃げるように自分の席に戻って行った。

563

「ねえ、一体、何がどうなってるの!? それに神林くん、彼女いるのに何してるのよ!」

先生が来る前に、恵梨花が問い詰めるも、梓は答えずに喉の奥でクッククックと笑っている。

「あ、梓……?」

こんな不気味な親友も付き合いの長さから見慣れているが、思わず体が引いてしまう。

笑つのを止めた梓は妖艶に微笑んで呟いた。

「本当に彼って、面白いわ……」

呟きを聞いた恵梨花は、『彼』が誰を指しているのかわかり、複雑な心中になった。

授業が終わると、またも告白の呼び出しを受けた恵梨花を置いて、梓は亮の教室に向かっていた。

恵梨花が行きたくても行けない間に、亮に会いに行くのは罪悪感めいたものを感じないでもないが、確認しておきたいことがあるため、目を瞑ることにする。

一時間前の休み時間での神林との会話は、梓が調べたことの裏づけを取ることができたことと、面白い収穫もあり、中々に有意義なものだった。

神林に話しかけた理由は二つ、あの男と同窓であるということと、剣道部だということ。

神林にはまだまだ聞きたいことがあるが、あの様子ではこれ以上自分から何かを話すことはないだろう。誘導して引つ掛けることもできだが、あの焦りようを見ると、イタズラに迷惑をかけることに

なるかもしれないので、今回のところはやめておくことにする。

自分の親友は本当に面白い男と付き合ったものだと思っただけで、そんな彼と友人になったのも、幸運だったかもしれない。

調べれば調べるほど面白い人間など、滅多にいない。

自分の好奇心を満たすため、本人にも根掘り葉掘り質問したいところだが、それは堪えてまずは親友のために動く。好奇心を満たすのは、その後でいい。梓はそう考えながら、足早に亮の教室に向かった。

「休み時間に寝ている生徒を起こすなっていう校則があってもいいと思わないか、明？」

片手で頬杖をつき、眠たげに目を擦りながら不機嫌の度合いが多い声で亮が呟いた。

「……必要性を感じているのは恐らくお前だけだ、亮」

少し呆れ調子の声で明が返した。

「そうだ、明。お前、生徒会に入って、この校則作って見ないか」

「その校則が欲しいのは、亮だろ。亮が入って作ればいい」

「そう固いこと言うな、未来の副会長」

「誰が副会長だ」

二人のこんなバカなやり取りが始まったのには理由がある。

休み時間になると、亮に男子生徒の来客があるのだ。

教室に来て亮の名前を言っでは、どこにいるかを聞き、クラスメイトが揃って、机で寝ている亮を見る。

そんな男子生徒達の訪問理由はもちろん告白、ではない。

訪問した男子生徒達の行動は大きく分けると二つのパターンがある。寝ぼけ顔の亮を見ては、勝ち誇った顔を浮かべて、さして話をするでもなく帰っていく者、悔しそうな顔をして帰っていく者の二つだ。

特に用事があるという訳ではない。大抵、亮を見ただけで帰っていくのだ。

この休み時間も男子生徒が来て、亮を起こし、悔しそうな顔を見せて帰っていったところである。

いつも寝ていて、それで起こされている亮としては、たまったものではない。

そこで思いついたのが、先ほどのバカな校則である。

「生徒会と言えば、来期はやっぱり鈴木さんが会長やるのか？」
ふと気付いた様子で、明が亮に振り向いた。

「ああ、恵梨花がそんなこと言ってたな、生徒会を手伝うとかも
亮は恵梨花との会話を思い出しながら答えた。

「へえ？　じゃあ、やっぱり亮が生徒会に入りそうだな」

「バカ言うな、俺がそんな悪の組織に入る訳ないだろ」

「……生徒会の話をしてるんじゃないのか？」

明が訝しげな顔をする。

「いや、間違えた。気にするな」

何をどう間違えたのか、亮は苦笑を浮かべて手を振ると

「ん？」

突然、首から上だけを動かして教室の扉付近を見た。

つられて明もそちらを見る。

そこには扉を開けたばかりの梓がいた。

途端に教室内にいる男子達が騒ぎ始めた。

「おお、鈴木さんだ」

「今日も美しいな……」

「……訪問相手はやっぱり桜木なんだろうな……」

「一々、言うな……、それにしても最近のあいつは来客多いな」

「男ばっかだったけどな」

「訪問相手が桜木であれ、見る分としてはやっぱり男よりあいつ
た美少女のほうがいいよな……」

「……まったくな」「」

男子生徒達は一斉に頷いた。

奇しくも、亮もクラスの男子生徒達と同意見だった。

見知らぬムサ苦しい男子生徒が訪れて来るよりも、見た目麗しい女の子が来る方がいいと思ってしまうって苦笑した。それが例え、注目を浴びてしまうとしても。

そんなことを考えていると明が意味ありげな顔で亮に笑いかけた。

「悪の組織の長？」

「……絶対、本人に言うなよ」

何でわかったんだと亮は思いつつ、自分に手を振ってこちらに歩く梓に誤魔化すように軽く手を振り返した。

第九話 悪女（後書き）

悪の組織については、第一章 第七話 「お礼はモーニング？」
を参照……

第十話 きつと来る(前書き)

誤字・脱字ありましたら、報告頂けると助かります。

第十話 きつと来る

「君についての噂が流れている」

亮の隣に座った梓が、開口一番に言った。

「そら流れるだろ……、朝も帰りも恵梨花と一緒にいるんだから」

何を今さらといった顔で亮が返すと、梓が首を振った。

「君と恵梨花、二人が付き合っているとかでなく、君個人の噂が流れている」

「俺個人の……？」

「そうだ」

梓が首肯すると、亮は何かを考えるように視線を空中で動かす。するとハっとなつては、身を乗りだした。

「どんな噂だ？」

この亮の反応に梓は内心で少し驚いていた。予想ではそれほど気にしないだろうと踏んでいたのに、思っていた以上に喰い付いた様子を見せたからだ。

そんな驚きをまったく顔を出さずに梓が言う。

「噂というよりも、悪口めいたものだけだね」

「悪口？ ……どんな？ 知ってるんだろ？」

確信めいた口調である。内容も知らずに、一々、言いに来たりしないだろ？　と言わんばかりな。梓は頷きで返す。

「まず、地味で目立たない……」
「ふうん？」

予想に反したものを聞いたような声色だ。しかし、顔には少し嬉しそうな笑みが浮かんでいる。

何故、そこで嬉しそうな顔を見せるんだと内心で呆れつつ、表面は無表情で梓が続ける。

「取り柄がなさそう……」
「まあ、ありそうに見えるようなことした記憶は無いからな……」

亮が当然だろうと頷いては、続きを促す。

「存在感が薄い……」

まだ無表情を維持している梓が言うと、そこで亮は不満顔になり、ため息を吐いては憂鬱そうに首を振った。

「『薄い』か……、『無い』を指しているんだが……、まだまだだな……」

何が一体、まだまだなのか、少し呆れ顔を見せ始めた梓が更に続ける。

「馬鹿なやつ……」

「……いつも赤点ギリギリだしな、そんなに間違ってないな？」

「俺としては、いつも寝てる癖に赤点をとらない亮が不思議だな」

亮と梓の会話を肩を震わせながら静かに聞いていた明は亮に目を向けられると、笑いを噛み殺して答えた。

学校の成績とは関係のない『馬鹿』とは三人共、考えていない。そういつた『馬鹿』というのは目立つものであるからだ。悪目立ちするとも言う。そういう意味で噂されたのだと考えるには少し無理がある。例えそうだとしても、根拠がまるで無いものである。

だからと言って、『馬鹿』と言われていることに否定もせず、友人に話しかけ、その友人も笑っている。この男の親友だけあるかもしれない、そう思いながら梓は白けた目を二人に向ける。

「無能だとも言われているぞ」

これに関しては明が片眉を上げる反応を見せたが、何も言わなかった。

言われている本人は特に動じた様子を見せず首を傾げて言った。

「……取り柄がない、イコール、無能ってことか？ ずい分と飛んだもんだな」

「まあ、悪口の類だからね」

梓が肩をすくめながら頷く。すると亮が、ふと気付いたように言う。

「噂ってそういう悪口だけか？」

「……そうね、あとは尾ひれがついたりして、似たりよったりのものが流れているだけ」

梓が答えると、亮は大きく安堵の息を吐いた。

「なんだ、安心したぜ」

そう言った顔には、亮が梓に身を乗り出した時から、少ないながらもあつた緊張感が見事に抜けている。

それに対して梓は

「……は？」

と、彼女にしては相当に珍しい、間の抜けた声が出た。

声だけでなく、その表情も亮が何を言ったのかわからないといったような顔である。

梓は元々、亮は噂に関してそれほど気にしてないだろうと踏んでいた。それでも、一応の確認のため、こうやって亮の元まで出向いた。話を始めると、思った以上に気にした様子を見せた亮に内心で焦りを感じたが、噂に関しての話を終えると、『安心した』と出た話している間は、どうやら気にすることもなさそうだと思い直していたが、気にしないだけでなく、『安心した』と出た。

驚くのも無理はない。

しかし、梓はそんな驚きをすぐさま押し殺して、唸るように声を上げた。

「……君、『安心した』とはどういう意味だ……？」
「ん？ ……ああ、中学校の頃の話でも流れたのかと思ってな」

亮の答えを聞いた梓は、小さく頭痛を感じたようで、眉間を指で揉んでは痛みを紛らわす。

「……今の噂が安心できるほどとは、君が懸念した中学校での話とはどんなだ？」

「そら、今みたいに地味で目立たないやつだったなんて話が流れるのはありがたくねえだろ」

「あたしが聞きたいのは、君が中学校の頃に何をしていたかなんだけど……まあ、いい」

どうせ聞いたところで教室^{コウ}では話さないだろうし、簡単に話すとも思えない。何より、今ここにいる目的はそれでもない。そう考えた梓は小さくため息を吐いた。

「一応、確認するけどね。今流れている噂に関して、君は特に気にしてなければ、嫌に思っている訳ではないんだね？」

梓が問うと、亮は一瞬きよとした顔を見せては首を傾げた。

「？ ……ああ、別に気にしてないぜ？ 強く間違ったことを言われている訳でも無いみたいだし、むしろ誉められているような……いや、少し不満に思っていることならあるぞ」

「……なに？」

梓はそろそろ、この男を少しでも心配した自分が馬鹿だったと思いを始めた。

「そういう悪口は噂し合うのでなく、それとなく思ってくれたらいいのってな……、噂されたら、それだけ名前が広がって目立って

しまつじゃねえか」

「……」

亮は本当にそこだけが不満そうで、聞いた梓はもう何も言わなかった。

梓はなんとなく亮の前にいる亮の親友の明と目を合わせた。

目が合った明は、苦笑を浮かべては「心配するだけ無駄だって」と言いたげに肩を竦めた。

それを見ては、自分の心情を感じ取ってくれたのと、この男とは違い、そこそこの事情通であるらしいことが梓にはわかった。

「小路くん、よかつたら今日の昼、あたし達と一緒に食べない？」

「え？ ああ、俺は別にかまわないけど……」

いきなり誘われた明は一瞬の戸惑いを見せると亮と目を合わせた。

「いいんじゃないか？」

亮が頷いて賛同すると、梓も頷いた。

「この男と恵梨花が二人つきりなのを邪魔するわけではないんだから、遠慮することは無いよ……、ただ、ちょっと見ていて生暖かく感じる時があるから、そこにさえ目を瞑れば……」

「……おい、一体、何の話をしてんだ」

亮が口元を引き攣らせて言うが、梓はスルーした。

「どつ？ 小路くん」

「じゃあ、一緒にさせてもらおうよ」

明はスルーされた亮を尻目に、笑いを噛み殺しながら了承した。

「それじゃあ、また昼休みに」

そう言ってから梓は、教室から出て行った。

「そういえば、亮。俺に昼を奢る約束はいつ果たしてくれるんだ？」

「奢る約束……？ ああ……、そういえば、そんな約束してたな」

何か少し脱力していたような亮は、先週に梓のせいで、明に昼を奢る約束をしたのを思い出した。しかも一週間。

「恵梨花が弁当作ってこなかった時に食堂でいいか？」

「いいけど……、それって来るのか？」

「来るって？」

「藤本さんが弁当を作ってこない日って」

明がそう言うのも無理はない。恵梨花は今週に入って、毎日弁当を作っている。亮も明の言った意味がわかり、少し黙ってから言った。

「いや、来るだろ……俺が言うのもなんだが、あの量だぞ。疲れて作らない、作れなかったって日が、いつか来るだろ」

「……俺は来ないと思うけどな」

「……いや、来るだろ……」

今度の亮の反論は心なしか、調子が弱くなったように明は思った。

昼休みになると、亮と明は別々に屋上に向かった。別々なのは、一緒に移動するとなると、混ざりたいと言う男子が、わんさか出てくるぞ、といった明の言葉により。それに明は購買でパンを買う必要があった。

屋上の扉の前で二人集まると、中に入って行く。

恵梨花も咲も梓から明のことを聞いていたようで、恵梨花は笑顔で、咲は特に表情を崩さずに歓迎した。

亮の隣には、当然の如く恵梨花が座り、逆隣には咲が座っていたので、その隣、咲と梓の間に腰を下ろした明は、その華やかな光景に目を奪われるのと、自分の親友に、どれほどの数の男子高校生が羨むような昼休み生活をしているのかわかっているのかと問い詰めたくなった。

最初は緊張を見せた明だが、亮のいつもの食べっぷりを見ては、緊張するのが馬鹿らしく感じたようで、いつの間にか緊張は消えていた。

食事の間は、和気藹々といった感じで過ぎていく。

会話の内容は主に、恵梨花が明に亮のことについての質問である。

何しろ自分の好きな人の親友で、自分よりも付き合いが長い。自分の知らない亮のことについて聞きたくなるのは当然の流れだった。

しかし、亮についての質問の多くに明は苦笑とともに「寝ていた」と答えることが多く、今更ながら恵梨花は自分の彼氏が休み時間どころか学校にいる間はほとんど寝て過ごしていることがわかり、思わず半目で亮を睨み、亮は亮で、余計なことを言った親友を睨むといった場面もあった。

ちなみに梓も恵梨花も、神林のことは亮に質問しないことに決めている。神林が隠す態度をしている間は下手に聞かない方がいいと梓が判断し、恵梨花もそれに賛成した。

そんなこんなで、全員が食べ終わった頃に、梓が本題を切り出した。

「君の噂に関してなんだけどね」
「梓？」

恵梨花はまだ亮が噂を気にしてないということを梓から聞いていない。なので、亮が不快感を感じているかもしれない話題を出して、少し焦った様子で梓を見た。

梓はそんな恵梨花に、「大丈夫」とでも言うように、目を伏せた。

「なんだ、まだ他にあるのか？ 噂」

亮は恵梨花が自分を心配してるなど露とも知らずに、梓に聞く。

「まだ？ 亮くん、噂のこと知ってるの？」
「ああ、今日の休み時間に梓から聞いたぞ」

亮が答えると恵梨花が拗ねるように梓を見た。

「ごめんね、恵梨花。何も言わなくて……、でも、亮くん、噂のこと気にしてないみたいよ」

前半は本心から申し訳なさそうに、しかし後半は茶目つ気たつぷりの顔で梓が言う。

「本当に？」

梓からそうは聞いても納得しきれない（梓を信頼してない訳ではない）恵梨花は恐る恐るといった様子で、亮に確認する。

「噂のことか？ 別に気にしてないぞ」

亮の口調は、強がりでもなく、本心から言っているのが聞いている者、全員に聞き取れ

「藤本さん、亮は本当に気にしてないし、自分の噂を気にするほど細かい神経ないよ……、気にするとしても、目立っているか、目立っていないかぐらいで」

明が補足した。

「……明、今、何かずい分と失礼なことを聞いた気がするんだが」
「事実だろ」
「たしかに」

亮が半目で明を睨むと、明はしれつと言い返し、今度は梓が明の言葉を補足する。

亮は大きいため息を吐いて見せることで、抗議の意を表した。

「……何があつたの？」

恵梨花が訝しげに問うと、梓が話し始める。

時折、梓が明に確認をとるように目を向けては、明が頷き、恵梨花は休み時間での亮、梓、明の会話を事細かく聞いた。

「亮くんって、やっぱり変よね」

話を聞き終えた恵梨花の最初の感想である。

「……いや、普通だろ」

亮の抗議の言葉の調子は普通だが、その顔には少なからずのシヨツクが浮かんでいる。

しかし恵梨花はそんな亮の言葉を無視して、目を伏せる。

「亮くん、ごめんね」

「？ 何で恵梨花が謝るんだ？」

「だって、私と付き合ったせいで、噂されてるじゃない？」

恵梨花が言うと亮は首を傾げた。

「恵梨花と付き合つと決めたのは俺自身だし、なんらかの噂が流れ

ることぐらいは覚悟してたぞ？ だから、恵梨花が謝る必要はないだろ。恵梨花が噂流しているならともかく……だから、俺の噂のことで恵梨花が気にする必要なんて無いから」

「そうは言っても……こんな……」

亮が気にしないなら、それはそれでいいのかもしれないが、どこか腑に落ちないものがあるようで、恵梨花が目伏せる。

そんな恵梨花に亮はふつと笑うと、恵梨花の頭を撫でた。

「俺が気にしてないんだから、恵梨花が気にする必要なんてないぞ。謝る必要はもつとない。悪いのは言っている連中であって、恵梨花と付き合っているせいでもないんだから」

亮が本心で言っていることも、自分を気遣って言っていることもわかる。ならば、素直にそれを受け入れようか。何より、初めて頭を撫でられたことに、恵梨花は体中が歓喜の声を叫んでいるのを感じた。

「うん　ありがとう」

そう言つと恵梨花は嬉しさから、にへらと頬を緩める。

余りに可愛く見えるその笑顔に亮は、う、と詰まっては顔を赤くし、今更ながらに頭を撫でている手の置き所と、目のやり場に困った。

「……本当に生暖かいな」

「でしょ？　たまに二人でああいう空気作るのよ……ああ、なんて

可愛いのかしら、恵梨花」

明が苦笑する横で、梓が恍惚としながら、パシャパシャと写真を撮っている。

見たことのない梓の一面に若干引くも、ふと逆隣を見ると、咲がムービーを撮っている。

咲は明と目が合うと、なぜだか、コクと一度頷いて見せた。

明は首を傾げながらも、頷き返し、次に、赤くなった顔で狼狽している親友を見た。

そこで一人、冷静にこの場にいる自分がおかしくて、笑ってしまった。

満足いく写真とムービーが撮れた梓は、「オホン」と咳払いをしては、二人を現実に戻還させる。まるで小馴れた様子でそれが様になっていた。

二人はビクッと反応しては、パッとわずかな、ほんのわずかな距離だけ離れる。

自分を見て意味ありげに笑っている明と目が合った亮は、しまったといった顔をしては、誤魔化すように口を開いた。

「えー、あ、噂はもういいのか？」

「ええ、もういいわ」

恵梨花が安心したみたいだから、と梓は心の中で呟いた。

「へえ？」

そう言っつて、亮は何か思ったのか、梓、恵梨花、明を順番に見て、もう一回最後に梓と目を合わせると、ニヤリと笑った。

「……何？」

梓は空気を凍らせるような声で、静かに聞いた。

「別に？」

そう言っつと亮は含み笑いをして、目を空に逸らした。
すると梓は忌々しげに、だが小さな音で舌打ちをしては、ぷいとそっぽを向いた。

「……？」

恵梨花は亮と梓の間で、何らかの意思が交換されたらしいことはわかるが、内容はわからず、梓の機嫌が悪くなったことだけはわかった。こういう時の梓に下手に話しかけるのはマズいと経験上わかっていたので、亮に話しかける。

「亮くん、今週末は休み？」

「ああ、そのはずだ　今のところは」

「そう」

よかった、と恵梨花は上機嫌に微笑むと、ふと思い出した様子で「そういえば、亮くん、何のバイトしてるの？　まだ聞いちゃダメ

なの？」

亮に尋ねた。

そこで梓は多いに興味をもった目で、再び亮を見る。

亮は首を傾げては、自分を見ている全員顔をゆっくり見回すと、
頬をポリポリと掻き

「言ってなかったか？」

と不思議そうに聞いた。

その場にいる亮以外の面々は、一瞬呆気にとられ

「聞かないでくれると助かるって言ったの亮くんでしょ!？」

「聞くなと言ったのは君だろ!」

「いつか話すって言ったの亮だろ!」

三者三様の、責めるような怒声が上がった。

第十一話 あのをきを想つ（前書き）

二章始まって、最大文字数になってしまった。

誤字・脱字ありましたら、報告頂けると助かります。

第十一話 あのをときを想う

「ちょ……いや、悪かった。もう言ったと思ってた」

亮は冷や汗を流しながら、怒る猛獣を宥めるように、美少女達の前に両手を出した。

「そう言うからには、もう言っていない訳よね？　じゃあ、話して、さあ、すぐに」

梓が目を鋭くしては、膝立ちで亮に詰め寄る。

「聞かないで欲しいって言うから今まで聞かなかったのに……もう話したと思ってたですって!？」

恵梨花は憤慨を絵に描いた様子だ。

明はそんな怒れる美少女二人を目の当たりにして、少し落ち着いたように、静観することに決めたようだ。

咲はずっと亮を見ているだけである。ただ、眉間にしわを寄せては自身の不機嫌さを表しているように見える。

「ちょっと待って、言うから」

亮は誤魔化すように笑みを浮かべようとするも、それが失敗して相当焦った表情になっている。

「じゃあ、聞こうじゃないか、さあ、何？　君のバイト先って何？」
「何なの!？」　ずっと聞きたかったんだから！」

梓と恵梨花は距離にして数センチというところまで亮に迫る。

迫力ある美貌が二つも眼前に迫った亮は、そのせいで若干体を引かせながら、半ば叫ぶように言った。

「俺のバイト先は警備会社だ！」

亮が言うや、一瞬戸惑いのような沈黙が降りる。

「警備会社……？ ああ……、制服着てやってる、ああ？」

最初に口を開いたのは恵梨花だった。亮が言った時はきょとんとした顔だったが、今は戸惑いを浮かべ、首を傾げて言うその言葉は文法的にはわかりにくいものだったが、その場にいる者達にはなんとなくわかり

「警備員やっているのか、君は？」

「ああ、そんなところだ」

これまた首を傾げて、でも訝しげに問う梓が恵梨花の言いたかったことを補足し、亮が頷いた。

明は、へえ、と呟いては、面白そうな目で亮を見る。

咲は小さく、コクコクと頷いている。その様子は、ちょっと納得といったようにも見える。

「警備員……、警備員か……、うーん……」

恵梨花が難しい顔で唸っている。それを見た亮が苦笑を浮かべる。

「なんだ、似合わねえか？」

「ん……」

そう生返事を返した恵梨花は、一度頷いてスッキリした顔を見せる。

「ううん！　なんか納得できるかな。ファミレスとかで接客してるって言われるよりも」

梓が相槌を打った。

「それは、たしかにそうね……、でも警備員？　たしか年齢制限あるんじゃない？　高校生は無理よね……、何で出来るの？　それに、どうしてそのバイトを？」

梓の矢継ぎ早の質問に、苦笑を浮かべた亮は落ち着けと言わんばかりに片手を前に出す。

「なんで働けるかって言ったら、その警備会社は俺のじいさんと今の会長かなんかが作ったたらしくてな……、だから融通が利いて高校生の俺でも働ける」

「君のおじいさんが？」

梓が少し驚いた様子を見せる。

「亮くんのおじいさんって、道場やってるだけでなく、会社も作ったの？」

驚きを露わにした恵梨花が亮に尋ねると、亮が首を振った。

「じいさんは経営にはほとんど関わってなかったみたいでな、ほとんど現場に出てたらしい……。会長かなんかがじいさんと一緒に会社を作った理由は道場から腕の立つ連中を欲しがったからだ」

「へえ？ ……なるほどねえ」

梓が興味深そうな顔をしては、納得したと頷くと、それを見た亮も頷き返す。

「それは今でもそうだな。そこそこ腕が立って、じいさんが人柄も保障すれば、その会社で働くことが出来る。実際、今でもうちの道場の門下生のけっこうな人数が同じ警備会社で働いている。逆に、道場から関係なくその警備会社に就職した新人社員の研修はうちの道場での稽古が入ってるぞ」

「ふむ、上手いね。会社の方は腕が立ち、人柄も保障された人材を獲得できて、君の道場は会社から新しい門下生を獲得できるかもしれないし、もしくは研修料がとれる」

「そんなところだ」

もちつもたれつの関係を見事に指摘してみせた梓に亮は苦笑で答えた。それを恵梨花は感心した顔で見ている。

明は話から、亮の家がなんらかの武術の道場をやっているらしいことを推測した。亮の家が道場をやっていることは、明はまだ聞いていない。先週末までの亮なら隠していたが、今となっては明に隠すつもりはなく、単に言っただけである。

明も大方、そんなところだろうと思っている。単に話題に出なかったから、聞いてなかったと解釈している。まだ隠すつもりなら、ここでポロリと話す亮でもないと思っただけだからだ。なので、気になることがあれば後で聞けばいいと、話の腰を折らず黙って聞く体勢を作っている。

「じゃあ、なんで高校生の君がそこで働いている？ いくら融通が

利くからって……バイトなんて他にいくらでもあるでしょ？ ……
時給がいいから？」

梓が挙げた次の疑問に亮は首を振った。

「なんで働いているかって言ったら、親父が亡くなった時に……、
ああ、親父も同じ仕事やっててな……、じいさんも親父もやってて
……ほとんど家業みたいなもんだな」

そこで亮は一旦、苦笑を挟んだ。

「それでだ、親父が亡くなった時に親父の仕事を代わりにやれるやつがいなくてな、仕方がないから、俺が代わりに引き受けたのがきっかけで……、どうしたみんな、そんな顔して」

そう言いながら亮が周りを見渡すと、驚きで固まったような恵梨花、目を丸くして口を半開きになっている梓と咲の顔があり、最後に明に目を移すと呆れたような顔をしている。

困惑気味に亮が見ていると、明がため息を吐いた。

「亮、父親が亡くなった話は藤本さんたちに話してないのか？」

「……そういえば、話してねえな……」

亮が答えると、明がもう一度ため息を吐く。今度は先ほどよりも重く。

「だから驚いてるんだろ」

呆れたように明が言うと亮は再度、美少女達を見渡し、頬をポリと掻いた。

「ああ……、驚かせたか、悪いな」

「いえ、謝られても……」

なんとか動き始めた梓が手を振る。

「さらりと言うから、驚いただけで……」

梓の言うとおり、三人の美少女達はバイトの話をしていたら、ついでのように父親が亡くなったことを言う亮に驚いたのである。

亮は梓の言葉に頷くと

「じゃあ、重々しく言えばよかったか？」

思いついたように真顔で梓に言った。

「そういう問題ではない」

梓はキッと睨むように返すと、はあ、とため息を吐いては肩を落とす。

「本当に君という男は……、話していると、調子が狂う……」

そう言うては疲れたと言わんばかりに眉間を指で揉んでみせる。

先ほどの休み時間での会話といい、今集まっている面子で一番疲れているのは彼女かもしれない。

しかし、そんな梓の気疲れなど知る由もない亮は、そんなこと言われてもな、と呟きながら梓から目を動かすと、真っ直ぐに自分を見る恵梨花と目が合った。

すると恵梨花が躊躇いがちに口を開く。

「亮くん、言いたくなかったらいいんだけど……」

そう前置くと、聞いてもいいのか葛藤しているかのような声で続ける。

「亮くんのお父さんが亡くなったのっていつ？ ……原因は？」

問われた亮は全員の視線を強く感じながら、気負うことなく肩を竦めた。

「俺が中三の時だから、もうすぐ二年……も経つのか……」

亮は自分で言いながら少し驚いたように目を睜り、その顔に苦笑を浮かべる。

「早いもんだな……、原因は交通事故だ」

「交通事故……」

恵梨花は何を思ったのか、亮と目を合わせたまま確認するように小さく呟いた。

その呟きが聞こえた亮は頷くと、更に続ける。

「その事故で、母さんも亡くなった」

恵梨花が息を呑んだ。

それと同時に、周りからも同じように息を呑んだような音が亮には聞こえた。

周りの驚き様から、やはり高校生の身で両親を亡くしているというのは、相当に珍しいことみたいだと亮は思った。

亮にとっては、もう二年近くも前のことである。その時間が長いのか、短いのか、それは人それぞれだろう。

亮は長くも、短くも感じた。どちらかはっきりとは言えない。

ただ、その時間である程度の心の整理はできている。だから、両親のことを話して自身が動揺するといったこともない。

思えば、両親のことを同級生に話すのは高校に入ってから初めてのことである。

そのせいか、亮は当時のことが頭に流れ、あることを思い出した。人はよく「失くして初めてわかる」と言うが、実際に本当だった。

しかし、亮は元々わかっているつもりだった。

だが、わかっていたいなかった。

わかっていたつもりだったのは、父も母も大切に思っていたこと。

わかっていたいなかったのは、父と母に連なり、当たり前だと思い、実感することもなかったほんの些細な幸せの数々。

（その数が本当にどれだけ多かったか……、わかった時に初めて俺は……）

そこまで考えた亮は、ふと自分がどれぐらい思考に入っていたのかと思い、はっとなって顔を上げた。

そこで、みんなが自分をじっと見ていたことにようやく気付いた亮は、さすがに気まずい思いを感じ、頭をガシガシと掻くと、肩を落としながらため息を吐いた。それから、目を上げる。

亮が明と目を合わせると、明は何も言わず、何かの感情を顔に浮かべることもなく、肩を竦めてみせた。

そんな明からなんとなく、両親が亡くなったことぐらいは勘付いてたんじやないかと亮は思った。

咲は心配そうな目でこちらを見ている。そこで改めて、自分の失態が如何ほどだったかわかる。

亮は「心配いらん」と言いたげに短く首を振ってみせた。

咲にはそれで十分伝わったらしい。頷きで返してきた。

梓は眉を寄せて、口を固く閉じてこちらを見ている。

それは心配しているようにも、心配なんかしていない、とも亮には見え、それがなんだかおかしく感じ、つい笑ってしまった。

そんな亮にむっとするも、梓は恵梨花を指差した。

つられて振り向くとそこには只々、真っ直ぐに自分を見る恵梨花の瞳があった。

なぜだか亮は、そんな恵梨花からまた強く、自分の母を感じさせられた。

何かに包み込まれるような、安心するような、くすぐったいような。

なんでだろうな、と思いながら亮は、ふ、と笑った。

「思ったんだがな」

「なに？」

恵梨花が目を逸らさず問い返すと、亮は悪戯っぽく笑いながら言っ

「あんまり昼休みにする話じゃねえよな」

聞いた恵梨花は目をぱちくりさせると、クスリと微笑んだ。

「たしかにそうかもね……そういえば今、昼休みだったね……、でも、亮くんの色んなこと聞きたかったから、聞かなきゃよかったなんて思っただけよ？」

「そうか」

「うん……、お父さんとお母さん亡くなってから……どうしてたの？」

亮は恵梨花が自分に同情しているのを感じたが、それを言葉にしない恵梨花がありがたかった。

「しばらく、じいさんの家にいた」

「しばらく……？　じゃあ、今は？」

ここで亮は返事をするのに一瞬躊躇った。答えを言うのがダメという訳ではなく、考えたら自分の彼女となった恵梨花には言っておくべきことだったかもしれないと思ったために。

「……一人暮らししてる」

言った途端、やはりというか、不機嫌な気配を亮は感じた。

「……黙ってようと思っただ訳ではないよね？」

「もちろんだ」

亮がすぐさま頷くと、恵梨花はすっと目を細めた。

「……亮くんって言い忘れてること多くない？」
「……気のせいじゃねえか？」

落ち着きなさげに目を逸らしながら言う亮に、恵梨花から剣呑な
気配が伝わる。

「……そうかしら？」
「そ、そうだと思うぜ？」

冷や汗を流しながら、尚も目を逸らしている亮に恵梨花は「そう？
?」と言いながら、フフ、と微笑んだ。

そこで亮は、ホ、と安堵の息を吐こうとした。すると

「そんな訳ないでしょ！ 気のせいではありません!!」

恵梨花が噴火した。

不味い、お母さん化したと思った亮は盛大に焦りを浮かべた顔で、
なんとか恵梨花を宥めようとした。

「お、落ち着け、恵梨花、いや、落ち着いてください、恵梨花
さ……」

途中で強く睨まれた亮は、慌てて言い直した。が、そんな努力も
虚しく

「黙りなさい！」

「はい！」

恵梨花の一喝で、亮は口を閉じた。

そこで恵梨花は、すう、と息を吸い込む。それを見た亮は体を縮めるように口撃を受ける体勢を作った。これは経験からくる、反射的なものだろう。

「バイトのこと言い忘れてたと言えば、今度は一人暮らしですって！？ 私、亮くんの彼女よね！？ 彼女だからって何でも教えてなんて言わないわよ！ でも、なんで、そういうこと教えてくれないの！？ ああ、言い忘れてたんですけど！ 他には何！ 何があるの！？ 言い忘れていることがあるなら、今すぐ思い出して言いなさい！！」

恵梨花は一息で叫ぶように言った。いや、実際のところほとんど叫んでたと言っているだろう。

亮は本能的に恵梨花から目を逸らしたい衝動を抑えながら、大きく口元を引き攣らせた。

「え、えつとだな……多分……」

「多分！？」

「ああ、いや、もうない！ ……と思う」

「思う！？」

「ないです！」

亮は半ばヤケクソ気味に叫んだ。

すると、恵梨花が覗きこむような目で、それでいて鋭く亮を睨む。

多分、もう無いはずだと、亮は冷や汗を流しながら恵梨花の次なる言葉を待つ。

緊張間漂わせる二人。その横から、ぷ、と誰かが吹きだすような音が聞こえ、二人は反射的に振り向いた。

そこには苦しそうな顔でお腹を手で抑え、肩を震わせている梓と明、口を手で抑えている咲の姿があった。

「もう駄目！」

梓が堪らないと言わんばかりにそう叫ぶと、それを皮切りに梓と明が腹を抱えて爆笑し始め、咲はこちらに背を向けて肩を震わせ始めた。

「なんなの、あなた達二人！ さっきまでの空気はどこにいったのよ！」

梓が笑いながら、息も絶え絶えに言う

「今からこれじゃ、尻に敷かれるのが決定だな、亮！」

明が同じように言う。

亮と恵梨花は三人の笑い様に一瞬ばかんとするが、事態を理解し始めると、二人揃って見る見るうちに顔を赤くした。

恵梨花は自分が彼氏を怒涛の如く怒っている姿を、親友達だけでなく、明にまで見られて。

亮はかつてないレベルの醜態を親友に見られて。

咲は控えめだが、三人の発作の如き笑いが治まるのに暫しの時間が要された。

三人の笑いが治まるまでの間に、恵梨花が「続きは今度、二人でゆっくりとね」と亮に言い、拒否権が無いと感じた亮は恐る恐る静かに頷いた。そんなやり取りがされていたのを笑っていた三人は知らない。二人は三人が落ち着くのを羞恥と共に待った。治まった時、そこには当たり前というか、しんみりとした空気はなく、代わりに気まずげな空気が二人から流れていた。

それを払拭するように梓は亮に声をかける。

「一つ質問いいかな、亮くん」

「ああ、なんだ？」

この空気を変えてくれるなら、なんでもこいといわんばかりに亮が返事をする。

「君のそのバイトだが……、一体、いつから働いている？」

梓は驚きながらも、話の内容は頭にしっかりと浸透させていた。

父親の代わりと亮は言った。父親が亡くなったのは二年近く前である。であるならば、と梓は疑問に思った。

「中三だ」

亮が肩を竦めながら答える。

梓は唸った。予想通りとはいえ、何をしてるんだと。

「中学生って働いちゃ駄目でしょ、亮くん？」

「家の仕事の手伝いだから、いいだろ……それに、もう時効だ」

恵梨花が呆れるような目で見るも、亮は飄々と受け流す。中学生の時のが時効であろうと、亮は今でも高校生がしてはいけないバイトをしているが。

二人の様子から梓はどうやら先ほどの続きは、二人で別のところですか、止める、いや、やっぱり別ですのだからと推測する。恵梨花が何か新しいことを聞いたなら、自分も聞き出そう、そう決心した。

気付けば、昼休みの時間も終わりかけである。亮と明は来た時と同様に別々に降りて行く。

三人娘は片付けを終えると（亮と明が片付けをしてない訳ではない）、鍵を閉めて屋上を後にする。

教室までの道のりで梓は思考に没頭していた。

警備会社とはいえ、腕の立つ人材をそこまで欲しがるのだら

うか。

警備をするなら、もちろんそのほうがいいだろうが。

そのために道場と組むほど？ 新入社員の研修はまだわかる。

それに何より、父親の代わりにする人材がないがために、あの男が働き始めたと言っていたこと。

簡単に代役が見つからない警備の仕事？

あの男の父親なら、恐らく腕も相当立つのだろう。

中学生のあの男で代役が務まるなら、その仕事が必要とする能力は……？

そして、それは……

そこまで考えた梓は、はっとなる。

自分の導き出した結論に、馬鹿な、と笑い飛ばしそうになるが、でも、あの男なら有り得るかもしれない。それに他の可能性だって、自分が考え足りないだけで、まだあるかもしれない。

しかし、確実に一つ言えることがある。

あの男は嘘は吐いていないかもしれないが、言い足りないことがやっぱりある、と。

さて、今度は恵梨花はどんな反応を見せるのか。

梓は楽しみが増えたと言わんばかりに一人、微笑んだ。

第十一話 あのをきを想つ（後書き）

この話を書くのは疲れました……

あ、申し訳ありませんが、予想等（亮のバイトとか……）を感想欄に書くのをご控え頂けたら、と思います。

第十二話 期待

「噂を流した張本人がわかったと言ったら、君はどうする？」

昨日と同じく、いきなり教室に現れた梓は、席を外していた明の席に座ると、遠慮のかけらも感じさせない強さで寝ていた亮。寝ていても梓が来たことは気配で勘付いていたが、眠気が強かったため、体を起こさなかった。を揺り起こし、寝ぼけ眼を隠そうともしない亮に尋ねた。

「……………あー……………、お疲れ様？」

好奇と嫉妬の視線を強く感じながら、亮は率直に答えた。

最近、自分を起こす人間は決まって知らないクラスの男子で、顔を上げる前からわかっていたが、それが梓でも、起き抜けに見る顔はムサイ男子の顔よりも、やっぱり美少女のほうがいいよなど、どうでもいいことを半分寝ぼけた頭で考えながら。

亮の返答に梓が若干、眉を顰める。

「……………名前を知りたいか思わない？」

「思わねえ……………そんなもん聞いてどうすんだ」

亮は「くあ」と大きなあくびをしながら、心底どうでもよさげな声で答えた。

すると梓が、小さくため息を吐く。

「まあ、そんな反応じゃないかと思っていたが……」

「言ったら、どうでもいいって」

「覚えてるとも、それでも噂を流した張本人に興味ぐらい示すんじゃないかと思ってるね」

つまらなさそうな梓に、亮は肩を竦めた。

「張本人でも、そうでもなくても、噂を流したのは一緒だろ？」

…それに知ったからって、何かする訳でもないしな」

「何かして噂を止めようとか思わない？ ……例えば、懲らしめたりとか……君ならできるでしょ？」

梓がちらと亮を見る。そしてその声には、心なしか何かを期待しているような響きが感じられた。

そこで亮が呆れた顔を作る。

「あんた、俺を一体なんだと思ってるんだ。……それにそんなことしたら余計噂が悪くなるし、目立つだけじゃねえか……あんただって、わかってんだろ？」

最後は確認するように問うと、梓は素知らぬ風に無言で肩を竦めて見せた。

噂が流れた場合、その元を閉じても流れてしまった噂は止まらない。

特にこういった悪意ある噂の場合、その元になんらかの接触をすると、更に噂が広まる傾向が強い。内容も激しさを増して。

梓もそれをわかっているだろうと思いながら亮は指摘した。そして、梓の態度は肯定を示していた。

「わかってんなら、なんでそんなこと言ってたんだ」

梓はまた、ちらと亮を見ると、再び肩を竦める。

「君なら、事態を好転させる何かをしてくれるんじゃないかとね…

…、期待してしまうのよね」

「そいつは買い被りだ……それに無理に好転させなければならぬほど、悪い事態でもないだろ」

亮は本当にそう思っている。自分に悪い噂が流れようと、さして被害が出た訳でもないし、気になるようなものでもないからだ。

「君だからそう言うけどね……、じゃあ、知ってる？」

「何をだ？」

「最近、君のところによく男子が来るでしょ」

「？……ああ」

何で知ってるんだと、わざわざ亮は聞かなかった。

「あの連中ね……」

そう言いながら梓は亮の机に頬杖をつき、悪戯っぽく微笑んだ。

「最近、恵梨花に告白してきた男子達よ」

「な……」

さすがの亮も啞然となった。

それを見た梓が面白そうな目をして続ける。

「正確に言うと、君のところに来る男子というのは告白した後か、もしくは、告白する前、だけだね」

そこで亮は今週、自分を訪ねて来た男子生徒の数を数え、信じられんといった声を出した。

「おい……、七、八人はいるぞ」

すぐに梓が頷いた。

「間違いないね。今週でもう七人に告白されてるから」

「七つて……」

いくら可愛いからって、一週間でそれだけの数に告白されるのだろうかと思つた。いや、それよりも

「……それが本当だとして、どうして俺のところに来るんだ？」

心底、不思議そうな顔で亮が尋ねると再び梓は頷いた。

「順を追つて話そうか」

「そうしてくれ」

「まず、君についての噂が流れる……そこで、男子達は疑問に思つた」

「どんな？」

「噂で流れているような、たいしたことのない男なら何故、恵梨花が藤本さんが付き合っているのかと」

「……ふむ」

その疑問をもつのは仕方ないかもしれないと亮は思つた。何故なら、未だに恵梨花が自分を好きになつた理由がよくわからないからである。

亮が何を考えているのか、わかっているような目をした梓が続ける。

「そこで一つの結論が出た」

「なんだ？」

自分も答えを知らないのに、なぜ、外部が結論を出せたのかと亮は不思議がった。

「これも噂として流れているんだけどね、もしかしたら藤本さんは気が変わって……、誰でもいいから付き合ってみようと思ったのではないかと」

「な……」

呆れてものも言えない。開いた口が塞がらないとはこのことである。

再び啞然とする亮に、梓が付け加える。

「……もちろん、そういう風に考えているものばかりではないわ、少数よ」

当たり前だ。少しでも恵梨花と話せば、そんな女でないことぐらいはわかるだろうに。

それと同時に納得のいく部分が亮にはあった。

「じゃあ、告白する前に来たのは……」

「君を見て噂に確信をもち、自分の方がマシな男だろうと思って、それで自信をつけてから告白しにいらしたって男だな」

やっぱり、勝ち誇った顔をしていたのはそのせいかと亮は思った。

「じゃあ、告白した後に来たのは……」

「噂が違ったと身をもって知ったとしても、フラれた自分を少しでも納得させるために君を見にきてるんだよ。噂と違ってマシな男なのではと」

「それなのに俺みたいな地味なやつで納得いかないってか」

「そう。腹いせに恵梨花の彼氏はとんだ間抜け野郎だ、無能だとか噂を流している」

馬鹿じゃないかと思った。

彼氏がいる女の子に告白すること自体おかしな話だが、流れた噂を目の当たりにして、フられたら腹いせに噂を流す。逆恨みもいいところである。

どれだけ、自己中心的な考えをしているのかと亮は呆れた。

「それでも、君は何もしない？ 張本人の名前を聞いても」

そう言いながら梓が小悪魔の如く微笑んだ。

目の前でそれを見た亮は不覚にも、少しドキッとさせられ、誤魔化すように軽く咳払いをすると、暫し黙考する。

梓が黙って待った後、亮はゆっくりと口を開いた。

「……やっぱり何もしない方がいいな」

「へえ……、どうして？」

梓が興味深そうに耳を傾ける。

「噂を流した張本人が何を思って流したのかなんて、恵梨花と付き合った俺に対する嫉妬だろ？ それなら、そいつが何もしなくても別のところから流れてただろうよ」

今週恵梨花に告白した人数から考えると、恵梨花を好きな男なんて腐るほどいるだろうと思った亮がそう言つと、梓が頷いて同意す

る。

「内容が今より強くない程度なら確かに流れたでしょうね」

「それも時によりけりだな……、だから後に起こるであろう面倒ごとを早くに持ってきてくれたと解釈することもできる」

「恵梨花への告白に、君への接触？」

「そうだ……、今の事態は噂を流したやつのせいかもしれないが、そいつが噂を流さなくても同じようなことが起こっただろうよ。違いは遅いか早いかだけだ、そうだろう？」

「……そうね」

亮の言葉をじっくり吟味した梓が同意するように頷いた。

「俺としては、早く起こってよかつたんじゃないかと考えてる……遅く起こると、ダラダラと面倒が来たり、時間が掛かった分だけ、面倒も大きくなったりしてな……もっとも、今の状況が早く起きたからといって、早く終わるとも言い切れねえが、でも、もしかしたら短期で終わる可能性だってある……だから、噂を流したその張本人に少しでも感謝してやってもいいんじゃないかねえかとも考えられる」

亮が不敵に笑って言うと、梓がいかにも呆れたような目を向ける。

「君って本当に……」

首を振りながらそう呟くとため息を吐いた。

亮が言った通りになったとしても感謝という言葉が出るとは、この男の神経はやっぱりどこかおかしいらしいと梓は思った。

「それで、何もしない理由はやっぱり変わらん……、下手に動くとかやっぱり状況が悪くなるだけだろうし、しばらくの間はこの面倒

を我慢すればいい…… 恵梨花は告白はずっと断ってるんだろ？ ……
…それなら、放っておけばいずれ噂も治まるだろうよ」「

告白の降りで、当たり前でしょうと頷いた梓を見て、亮がそう締めくくった。

恵梨花が断り続ければ、いくら馬鹿でも噂が間違っていることは気付く。元々が馬鹿げた噂なのだから、尚更である。

自分に関する噂も、放っておけば沈静化するだろうと亮は見ている。

悪口の類の噂など、言われている本人がおとなしくしていれば、自然に治まったりするものである。程度の差はあるが。

亮はそう思っているからこそ『何もしない』という選択をとっている。

「とにかく君としては、噂を流した人の名前を聞いても、やっぱり何も変わらず、何もしない、のね？」

梓が確認するように尋ねると、亮が肩を竦めた。

「ああ」

「そう、君がそう思っているならそれでいいわ」

「？ 何がだ？」

今度は梓が肩を竦めた。

「あたしも、何もしないほうがいいと考えたから……。君が誰から噂を流した人の名前を聞いたり、噂のせいで恵梨花が告白されるなんて聞いてから、安易な形で何かするようなら止めておこうと

思ってたね……何かする気なら、一応聞いておこうと」

「ふうん？ ……なら、さっきは何で懲らしめたりとか言った？」

腑に落ちない様子で亮が尋ねると、梓は少し愉快そうに笑った。

「単に懲らしめたりはしれないと思うけどね。言ったでしょ、君なら事態を好転させる何かをするんじゃないか、期待してしまっつて」

亮は眉を寄せて小さくため息を吐いた。

この女は自分の何を期待しているんだろうかと思った。

「やっぱり、買い被りだ……、下手に動くとかややこしくなる可能性が高いんだから、特に何かする気ねえよ」

「そうね、下手に動くかね……」

梓はそう言いながら、意味ありげな笑みを浮かべて亮と目を合わせる。

何かしら嫌な予感を覚えた亮は、思わず目を逸らしてしまった。

第十三話 焦り（前書き）

最新話からこられた方ー、本日は二話更新してますので、前話から
お願いしますー

これも二章最大文字数……

第十三話 焦り

昼休み開始のチャイムが鳴ると、亮はあくびをしながら体を起こし、屋上に向かおうと立ち上がりかけたところで、振動する携帯に気付いた。

確認すると梓からのメールで、ちよつと教室で待っていてくれといった内容である。

首を傾げつつ、寝惚けた頭で何も考えずに『了解』と返事を返すと、席に座りなおした。

座ったところで、ようやく、何で教室で待つように言ったのか疑問に思った瞬間だった。

「来たーーーーー!!!」

と、誰かが叫んだ。

叫んだ場所を見ると、そこには興奮した様子の東の姿があった。教室の真ん中辺りである。

あのアホは何を叫んでるんだと周囲のクラスメイトと同様に亮が

訝しむと、馴染みの気配を感じて、反射的に首を動かした。

そこには扉を開けたところで、いきなり叫んだ東に驚いたらしい顔を浮かべた恵梨花がいた。

何故、ここに恵梨花が、と思った瞬間に、ようやくメールの意味がわかり、尚且つ東が叫んだ理由がわかる。「来た」とは文字通り恵梨花が「来た」からだろう。

それにしても寝惚けていたとはいえ、自分よりも先に恵梨花が来たことに気付いた東に亮は驚きを隠せなかった。

亮より早いということは、恐らくクラスで最速だろう。

それを証明するように、クラスメイト達はいきなり叫んだ東に注目して、扉の前にいる恵梨花に気付いていない。

「あの人……、東くんだよな？ どうしたの？」

亮が驚いている間に、いつの間にか恵梨花が傍に来たみたいである。

そして、教室に入った瞬間だろう、そこで東がいきなり叫んだことを当然のように疑問に思っ、て亮に問いかける。

「あー、なんだ……」

どう言ったものかと亮が言葉を探していると、東が居場所はそのまま、こちらに振り向き

「よっしゃー……!!」

と、ガッツポーズをとりながら再び叫び、そのせいで恵梨花がビクッと驚いた。

それを見た亮はとりあえずあのアホを黙らせようと考え、そこで東がこちらを向いた時に釣られたのだろう、傍にいた川島と夏山がこちらを向き、恵梨花を見て目を瞠る。

そこから二人の行動は素早かった。

川島が東の後頭部を思いっきり叩き、流れるように夏山が東にボディーブローをかますと、東はマット……にはなく、床に沈んだ。

そのまま二人は倒れた東に一瞥もくれず、亮、恵梨花の元に駆け足で寄り、慌てるように恵梨花に頭を下げた。

「すみません、あいつアホなんです、悪気はないんです、ただ、アホなだけなんです」

「そうなんです、あいつはアホなだけなんです、悪気はないんです、アホなだけなんです、驚かせてしまって、すみません、友人として謝らせてください」

川島、夏山は何度も頭を下げた。

恵梨花は少し口元を引き攣らせ、困ったように手を振った。

「い、いいよ……、ちょっと驚いただけだから」

「恵梨花、あいつは本当にアホなだけなんだ……、許してやってくれ」

亮も一応の友人として、恵梨花に言った。

「藤本さん、本当にあいつはアホなだけなんだよ……できたら、許してやって欲しい」

明まで援護した。

「お、怒ってないから！ もう、いいから！」

全員がアホと言いながら、許しを請うのに若干、引きつつ、恵梨花は半ば叫ぶように言った。

川島、夏山は、ホ、と安堵の息を吐きながら、顔を上げる。

そこで、恵梨花が思い出したように口を開いた。

「あ、夏山くん、この間は写真ありがとう」

夏山が現像した写真を亮から受け取った恵梨花はまだ直接、礼を言っていなかったので、微笑んで礼を言う。

「あ、いえいえ」

至近距離での恵梨花の微笑みのためだろう、夏山は顔を赤くして言葉少なに手を振る。

「あ、じゃあ、あのアホ連れて退散しますんで、ゆっくりしてってください」

「う、うん……」

川島が言つと、恵梨花はどう返したらいいのかといった顔で、小さく頷いた。

その頃には他のクラスメイト達も、恵梨花がいることに気付き、女子はニヤニヤ、男子は羨望の眼差しを亮に送っている。

川島と夏山が東を引きずって行くのを見送り、何かした訳でもないのに妙に疲れた気分になった亮はそんな視線を受け流しつつ、恵梨花に向き直った。

「なんか、悪いな」

「いいよ、もう」

苦笑を浮かべる亮に恵梨花がクスリと笑って小さく手を振る。

「今日はなんだ、ここで食べるのか？」

亮は答えがわかっている問いを投げた。

「うん、ここで食べよう？ それにここで食べた方が色々都合がいって、梓が言ってた」

「やっぱり、あの女か……それに都合？」

「あ……、梓が言ったからだけじゃないよ？」

恵梨花が苦笑を浮かべて手を振る。

それを見た亮が首を傾げると、再び携帯が振動する。

確認すると、それはやはり梓からのメールで『二人でイチャイチャ

「ヤ、ご飯食べてるところを見せたら、噂が治まるのが早くなると思うけど?」とあった。語尾にハートマーク付きで。

亮は思わず額に手を当てて唸った。

「イチヤイチヤはともかく、一理あると思ったからだ。」

目立つから教室で食べるのは避けたいと本能的に思ってしまうが、教室に来てもいいと言ったのは先週のことであるし、否とは言えない。

それにしても、何故ハートマークなんだと、心の中で突っ込むと、恵梨花が亮の袖を引っ張った。

「メール?」

小首を傾げる恵梨花に、亮は肩を竦めて携帯を見せる。

メール本文を見た恵梨花は、眉を寄せ、亮と目を合わせると、互いに苦笑を浮かべた。

「なんか、カップルっぽくなったねー、あの二人」

「本当にねー」

「今が一番楽しいんだろっねー」

「羨ましい……、あー、あたしも彼氏欲しいー!」

クラスの女子生徒達は微笑ましいといった様子で亮、恵梨花を見ながらお弁当を食べ始めた。

「さつき、梓が言っただけじゃないって……？」

「うん……」

恵梨花は頷くと、ニツコリと微笑んだ。

「今日って、何の日かわかる？」

「今日……？」

首を傾げながら、亮が呟いた。

さて、今日は何の日だったか……、6月の最初の金曜日だということしか亮には思いつかない。

「……わからん」

「も、もうちょっと考えてみて」

早々と諦めた様子の亮に、恵梨花が上目遣いで言い募る。

久しぶりに破壊光線にやられた気分になった亮は、ドギマギしながらも考えるが、平静さを奪われてしまったので、何も思いつかない。

「……やっぱり、わからん」

再度、諦めの言葉を投げた亮に、恵梨花が拗ねるように頬を膨らます。

二人の様子を見兼ねた明が苦笑を浮かべて立ち上がり

「この教室で弁当食べるの一週間振りだな、亮」

そう言いながら、亮の肩をポンと叩くと、恵梨花に振り向いた。

「藤本さん、俺の席、使っていいから」

「ありがとう」

恵梨花がニコッと笑って礼を言うと、明は軽く手を振って教室から出て行った。

「……一週間……?」

亮が確認するように、そろそろと呟くと、恵梨花が半目で亮を見た。

「そう、私たちが付き合って一週間」

その声が少し冷たかったように感じたが、亮は気のせいだと思うことにした。

「そ、そうか、もう一週間か……」

「うん、小路くんは気付いたのに、亮くんは気付かなかったね」

何かが胸にグサリと刺さったような気がした。

「あー、いや……、悪い」

これ以上は勘弁と亮は素直に謝ることにした。

すると、恵梨花が拗ねたような声を出す。

「謝られてもね……できたら気付いて欲しかったけど……」

……

言いながらちらと、頬をポリポリと掻く亮を見て、小さくため息を吐いた。

「まあ、いいや。ご飯、食べようか?」

そう言って、最後には微笑みを見せ、亮は安堵の息を吐いた。

一週間というのが一体、どれほど大事なのかといった質問を投げなかっただけ、マシだったと言えるだろう。

「桜木のやつ、もしかして今週ずっと、藤本さんの手作り弁当だったのか……?」

「まさか、あの量だぜ?」

「そうだよな……、おい、見ろよ!」

「な……!」

「お、お揃いの食器だと!?」

「く、くそう……!」

「う、羨ましい……!」

「しかも、なんかカップル振りが板についてないか!?」

「ああ……、くそつ、最近流れてる噂で桜木に同情して、心の中で応援してた自分を殴ってやりたいぜ……!」

「俺も」「お前もか」「俺もだ」

そう言い合うと、男子生徒達は互いに顔を見合わせ、一斉に重苦しいため息を吐いた。

その「まさか」なんだがなと心の中で呟きつつ、亮は忙しく食べ物運んでいる手を止めて口を開いた。

「結局、今週ずっと弁当作ってくれたけどな、しんどかったら無理して作らなくていいんだぞ?」

聞いた恵梨花は不安そうに眉を寄せ、顔を伏せつつ亮を見上げた。

「飽きた……? ごめんね、レパートリー少なくて……」

とんでもない誤解で吹き出しそうになった亮は、慌てて恵梨花の言葉を遮った。

「いや、まさか！ 味に不満はまったくないぜ？ 一日三食、恵梨花の弁当でいいぐらい……いや、この弁当がいいぐらいだ」

「本当に……？」

「本当に」

尚も不安そうに見上げる恵梨花に、亮が真剣な顔で頷くと、ようやく恵梨花は安心したように顔を綻ばせた。

亮が言った通り恵梨花の弁当は実に美味く、亮の口に合い、今や彼の学校での最大の楽しみとなっている。

その一方で、昼食以外の食事に物足りなさを感じているほどだ。三食に弁当がいいと言ったのは亮の本心である。

そして恵梨花はレパートリーが少ないと言ったが、そんなことなく、亮がリクエストした卵焼き以外のおかずは、毎日多彩な彩りを見せている。

亮に不満などあるはずもない。

「単純に疲れるんじゃないかと思ってな、俺が言うのもなんだが、この量だから……」

少しおどけたように言う亮に、恵梨花がクスリと笑う。

それに、と亮が軽く頭を掻きながら続ける。

「弁当が無くて、朝は迎えに行かないなんてのも言わねえから」

恵梨花は亮の言葉に、一瞬目を睨り、すぐに嬉しそうにはにかんだ。

「本当……？ でも、好きで作ってるから、気にしなくていいよ……、それに、亮くんが食べてるところ見るの好きだし」

「そ、そうか？」
「うん」

自分が食べているところの何がいいのだろうかと思った亮は妙に照れ臭くなり、更には満面の笑顔を見せられ、赤くなる顔を誤魔化すように、猛然と食事を再開した。

「なんだ、もう……なあ」
「ああ」
「」「羨ましいという言葉しか出てこない……」「」

男子生徒達は再び重苦しいため息を吐いた。

HRが終わった放課後、いつもならさっさと教室を出て帰る親友が、珍しく席に座っているのを見た明が声をかけた。

「珍しいな、亮、残ってるなんて。まだ、帰らないのか？」
「ああ……、恵梨花が体育祭の委員らしくてな、今、委員会なんだとよ」
「それで残ってくれって言われたのか？」

言われたとしても、それで待つなんて偉いじゃないかと言わんばかりに、明がからかうような笑みを向ける。

「いや……、そう言われた訳じゃないがな……」
「へえ？」

苦笑を浮かべる亮に、明が怪訝な顔をする。

昼休みの時に委員会があることを亮は恵梨花から聞いた。

その際に、遅くなるかもしれないから、先に一人で帰ってくれても構わないと恵梨花は言ったが、その顔には「出来たら待っていて欲しい」と如実に書いてあった。無意識ながらの上目遣いつきで。

そんなお願いの仕方をされて、お言葉に甘えることを良しとできず、バイトの時間まで余裕もあることだから、教室で待っていると、一応の遠慮の言葉を投げられ、それでも待っていると、花が咲いたような笑顔で「ありがとう」と言われた。

そんな恵梨花に「待つ」選択をしてよかったと思うと同時に、もしかしたら自分は一生、恵梨花のお願いを断ることは出来ないかもしれないといった考えが脳裏を横切り、その後の授業の間、少し憂鬱になってしまったのは誰に言わないつもりのもりの亮である。

「……まあ、待つにしても、時間は有効に使わないとな。寝て待つつもりだが、明はまだ帰らないのか？」

「ああ、ちょっとこの本読んでから帰る」

明は言いながら、ひらひらと文庫本を亮の前にかざした。

「相変わらずだな……、恵梨花来るまで起こすなよ」

そう言ってあくびをしながら亮が顔を伏せる。

寝る前のいつもの台詞が「先生」の部分だけ変わっているのに気付いた明は、抑えた声で小さく笑った。

放課後、二十分も過ぎれば教室に残る生徒もほとんどいなくなる。

残っている生徒のほとんどが、友人とのお喋りに興じている。

中には宿題をやっているらしき姿も見られるが、それも珍しい。

亮のクラスに残っている生徒は十人ほどで、寝ている亮、本を読んでいる明を除けば、男女が半々といったところで、全員がリラックスした姿で机の上や椅子に座ったりして友人達と共に楽しそうに雑談している。

時折、部活動をしているだろう生徒の掛け声なんか聞こえたりして、人の減った学校独特の喧騒、空気が流れている。

そんな中、教室の扉の開閉の音は、残っている生徒からしたら、大変、耳に入りやすく、注意を引くものだ。

この時もそうであり、遠慮が感じられない勢いよく開けられた扉の音と共に、三人の男子生徒が教室に入って来て、残っていた生徒達の注目を集めた。

背は平均的、少し長めと感じる茶髪の男と、体格の良さを感じさせ、少し背が高く感じる黒髪の男、黒髪の男と同じぐらいの背の高さだが、体格は黒髪の男ほどではなく、ひよろりとしている男。

彼らは揃ってニヤニヤと、良い印象を与えない笑みを顔に浮かべている。

教室内にいた生徒達は一見して余り見覚えのない顔に訝しむが、すぐに、学年が三年生を表す胸ポケットの緑色に気付き、納得の顔になると、また訝しんだ。

なぜ、三年生がこの二年の教室に、と。それも三人。

三人の男子生徒達の内の一人、茶髪の男が残っている生徒の内、自分達から一番手前にいた男子生徒にへらへらと笑いながら声をかけた。

「桜木ってやつ、いるか？ もう帰った？」

問われた亮のクラスメイトは困ったように眉を寄せ、ちら、と寝ている亮の席を見た。

自分に話しかけているこの三人は見た感じ、いい印象をもつことが出来ない。よくよく思い返せば、悪い噂すら聞いたことがあるような気がした。

そんな連中が来たこんな時に限って、何故、今日はこの教室にいるのかとため息を吐き、許せよ、と思いながら亮の席を指差した。

「あれか？ 寝ているやつ？」

指差された方向を見ながら、茶髪の男が確認すると、亮のクラスメイトは少しぶっきらぼうに「そうです」と頷いた。

見ると他の亮のクラスメイト達は、少し残念そうにしている者、ついに来てしまったか、といった顔をしている者、痛ましそうに見る者、共通して同情の目を亮に向けている。

三年生の三人は亮の席まで向かうと、囲むようにして並び、黒髪の男が体格に負けないような威圧感と乱暴さを交えた声を出した。

「おい、起きろ」

まるで反応せず寝ている亮に黒髪の男が舌打ちをすると、前の席にいる明が振り向き、上級生三人相手に臆した様子も見せず、ゆっくりと口を開いた。

「りょ……桜木は、一度寝たら中々、起きませんよ　また、今度、訪ねられたらどうですか？」

常でない形で明が寝ている亮を起こすなと言う辺り、不味い雰囲気を感じ取ってるようだ。

黒髪の男が忌々しそうな目を明に向けるも、明は真っ直ぐ見返すだけである。

そんな明に茶髪の男は何か感じ取ったようで、酷薄な笑みを明に向けた。

「お前、こいつの友達か？」

「……そうですよ。同じクラスですし、何かおかしいですか？」

「いいや、おかしくないぜ？　こいつは起きないから、また来たほ

うがいつて?」

言いながら茶髪の男が亮を見下ろすと、明は頷いた。

「ええ、そう言いました」

「けど生憎、俺達はそんなにヒマじゃないしな　それに俺はいい起こし方を知ってるぜ」

そう言う茶髪の男を明が訝しげに見ていると、茶髪の男はニヤリと笑って右手を高く上げた。

明が何が起こるか悟った瞬間だった。

嫌らしい笑みを深くしながら、茶髪の男は上げた右手を勢いよく亮の頭めがけて振り下ろす。

成り行きを見ていたクラスに残っていた生徒達が思わず目を見開いた。

振り下ろされた右手が亮の頭に激突する寸前、明は見た。

顔を伏せたままの亮の右手が信じられない速さで動き、自身に迫るその手を掴んだと思った瞬間。

茶髪の男が横に倒れた。

背中から倒れたのではなく、体が亮を向いた形で、強かに右半身をしたた床にぶつけ、ドン、と大きな音がなった。

「え?」と誰かが呟いた。それは教室にいた全員かもしれない。

いや、一人床にぶつかつた男だけが、痛そうに顔を歪めて咳き込んだ。

殴ろうとした男が突然、倒れた。横に。

明も、クラスメイトも、立っている上級生も、何が起こつたかわからず、時が止まつたように唾然とする中、一人の男だけがその空気に逆らうようにガバッと体を起こした。もちろん、亮である。

この教室で一人だけ動くことを許されたような亮は焦つた様子で、自身の机の横を覗き込むように体を伸ばし、倒れている男を確認するかの如く見た。

教室内の亮以外の人間が、目を見開きながら黙つて亮に注目する中、亮は、ホ、と安堵の息を吐きながら呟いた。

「焦つたぜ……、女の子じゃなくてよかつた」

女の子じゃなければ、いいのか。誰より早く唾然から抜け出し、呆れた様子の明が心の中で呟くように突っ込んだ。

第十四話 マイペース(前書き)

あれ？ また、二章の最大文字数を更新……？
てか、軽く二話分の文字数……、どうして、こうなったのか……

第十四話 マイペース

誰か来たことには気づいていた。

それが三人いるということも。

面倒事の予感しかなかったから、半分起きていた意識を無理矢理寝かしたことが失敗だったのか。

いや、半分の意識が起きていてもやっぱり体は反応してしまっただろう。

その場合、相手が女の子なら途中で止めることも出来たと思う。

男だから、止める意識がよぎらなかつたのだろう。

それでも、寝ていた訳だから本当に男なのか確認するまでは焦った。

人を起こすのにあんなに勢いよく頭を叩こうとするのは駄目だろう、男に揺り起こされたくないが、せめて机を蹴るかぐらいしろよ、まったく非常識な連中だな。

寝ながら人を投げ飛ばすような非常識なことをした亮は、自分のことを棚に上げて、自分を見下ろし啞然とする頭の悪そうな男二人を見上げながら、舌打ちしたいのを堪えてそんなことを考えていた。

胸ポケットの緑色に目が止まった亮はこいつら三年かと、更に舌打ちしたいのを堪える。

そして、ゆっくりと男達の背後に目をやると、クラスメイト達が驚きに目を見開きながら眩き合っているのを見た。

「おい、今何が起こった？」

「わ、わかんない。……桜木くんを叩こうとして、急に倒れたよね？」

「そうだけど……、何で倒れた？」

「桜木の手が一瞬、動いたように見えたけど……」

「動いたの？ 倒れた人が影になって見えなかった。でも、動いたからって何をしたらって言うの……」

「わかんねえ……、本当に桜木が動いたのか？ ……それにさっき何て咳いてた？」

「『焦った』……までは聞こえたけど、それから……」
「俺も」「私も」

状況はかなり不味いが、もしかしたら誤魔化しの利く範囲かもしれない。

幸いにも亮がしたことは、上級生達が壁の役目をして、それが死角になり、ほとんどの連中には見えてないらしい。

亮はそう判断し、いまだ啞然としている上級生を尻目に明に問いかける。

「明、この人達は？ ……それに、なんでこの人は倒れているんだ？」

亮は床に倒れている、これまた頭が悪そうで苦しそうに咳込んでいる茶髪の男を指差した。

問いかける顔もその声色も、何が起こったのか、まったくわからない、といった響きを感じられる。

明は呆れの色が強くなりそうなのを堪えながら返事を返す。

「この人達は、亮に用事があるらしい……、寝ているから、また今度来たらどうかと言ってみたが、そんなにヒマじゃないらしい……それで、お前を起こそうと、この人がお前の頭を叩こうとして……」
「それで、なぜか倒れたんだな」

亮は意図的に声を張り上げて、明の言葉を途中で遮った。

明はそれで亮の意図を察したようだ。

明としても、こんな連中のせいで親友が秘密にしていることがバレルのは本意で無いのだろう。

何より、黙って見ていることしか出来なかったことの罪滅ぼしもしたかった。

だから肩を竦めて頷いた。

「そうだな……なぜか、倒れたな」

最後にはニヤリと笑ってさえ見せた。

それを見た亮は、うむ、もつべきものは親友だと思っていると、ようやく唾然から立ち直った体格のいい黒髪の男が怒鳴った。

「ふざけんな、てめえ！ 今、何しやがった！！」

教室中に響くような怒声だった。

その大きさのせいか、彼の背後にいる亮のクラスメイト達が何人か、ビクッと驚いたようだ。

対して、怒鳴られた亮は驚いた様子も見せず、まったく、うるせえやつだなと思いつながら、けど、それは顔に出さず淡々と返す。

「……何したって、何ですか？ それよりも、俺のこと叩こうとしたらしいじゃないですか？ なんで、そんなことするんですか？」

亮の声色は、完全に被害者のものだった。

少なくとも明にはそう聞こえて、吹き出しそうになるのをなんとか堪えた。

口調に関しては、上級生相手ということで、さすがに丁寧にすることを選んだようだ。

「何しただと！？ お前が何かして、こいつをこっぴどくしたんだろうが！」

亮の問いに無視して、そう怒鳴りながら倒れている茶髪の男を指差すのは、もう一人のひよろりとした男。

「だから、俺は何もしてませんよ……、大体、俺は寝てたじゃないですか……、腹でも痛くなって倒れたんじゃないですか、この人？」

ちらと茶髪の男に目をやりながら亮が返すと、再び黒髪の男が怒鳴る。

「ふざけんなよ！ お前の手が動いて、細川ホツカワの手を掴んで何かしただろうが！ そうだろ、細川！？」

黒髪の男が目を向けた先を見ると、細川と呼ばれ、亮に倒された茶髪の男が己の腹をさすりながらよろよろと起き上がった。

顔が痛みにより歪んでいるが、それよりも混乱が濃いような顔色だ。

「わからん……けど、多分、そうだ……、痛っ……、俺も何が起こったのかよくわからねえんだよ……、お前、何しやがった？」

痛み顔を顰めながら言うが、言っている内にこの痛みは目の前の二年の男のせいだと思ったようで、目がギラつかせて亮を睨んだ。

すると亮は困った顔で肩を竦め、それでいて呆れとため息交じりの声を出した。

「いや、だから、俺は寝てたって言ってるじゃないですか、見てたでしょう……？ それに手が動いた……？ ああ、思い出しましたよ！ 頭がかゆかったんで、それで手を動かしたことは、何となく覚えてますよ……つまり、その俺の手と、先輩の手がぶつかって、そのせいで、勢い余った先輩が、こけた……、こういうことじゃないですか？」

これで間違いない、といった響きさえ感じ取れるような亮の声に、明は呆れと感心混じりの目を亮に向ける。

これでもかと敵意をぶつけてくる人間を三人も相手して、よくまあこれだけ飄々とできるもんだと。

しかし、やはりというか亮のそんな言葉に三人の上級生は納得できるはずもなく

「ふざけんな、てめえ！ いい加減にしろ！」

「噂通り調子こいた野郎だな！ やっちまうぞ、こらー！！」

「大体さつきから、てめえのその態度は生意気なんだよ！」

一斉に亮に怒鳴り散らす。

怒声を一身に浴びた亮は、こいつらは怒鳴るしか脳がないのかと、内心で大きく嘆息しながら冷静に返した。

「いや、本当に俺は何もしてないし、した覚えもないですよ……、本当、勘弁してくださいよ、先輩」

焦りも怯えも恐れもまったく感じ取れない声色に顔で。

横で聞いていた明は、またも吹き出しそうになるのを堪えながら、その台詞はもうちょっと怯えた振りをしながら言えよと心の中で突っ込んだ。

どうやら亮は、普段なら普通の振りはそれなりにできるが、こういう時の普通の振りは苦手みたいだと確信する。

「てめえ！ だから、さつきから、なんなんだ、その態度は！！」

亮のまるで恐れを見せない様子に苛立ったのか、黒髪の男が亮の胸倉を掴み、自身に引き寄せる。自然と亮は立ち上がる形になってしまった。

亮は今度こそ、自身の反射的に出そうになる行動を無理矢理抑え込んだ。

女の子なら、まだ楽に抑えることができるのだが、男相手だと本当にしんどいなと、内心で苦笑する。

それにしても自分の態度の一体、どこが生意気だったろうか？

完璧に『弱き下級生』を演じていたはずなのにと内心で首を傾げる。

亮が三人の後方にふと目を向けると、焦った様子の男子生徒や、怯えた風な女子生徒が見え、もう後は明に任せてみるかと思って口

を開いた。

「先輩、俺に話があるみたいですが、場所を変えませんか？」

「てめえ、その舐めた口きくのやめねえと、ぶっ殺すぞ！」

亮を掴んでいる黒髪の男は逆上している様子で、今にも亮に殴りかからんばかりである。

そんな彼をもう一人の背の高い男が止める。

「やめろつて、いいじゃねえか、場所変えるのは……、元々そのつもりだったんだからよ」

肩に手を置いてニヤリと笑うと、黒髪の男もはっとなって、ニヤと笑った。

「いいぜ……場所変えようじゃねえか、言ったこと後悔するなよ」

そう言いながら酷薄な笑みを浮かべて、乱暴に亮から手を離す。

そうされたにもかかわらず、ろくに体をよろけさせなかった亮は、とりあえずこの教室を出られることに、内心で安堵の息を吐く。

それから明と目を合わせると、少し躊躇いながらも何か問いかけようとしているかのように見え、先に亮が口を開いた。

「鞆見ててもらっていいか？ それから……」

机の横にかかっている鞆を手で示し、ちらとクラスメイト達に目を向ける。

「後、頼む」

明もちらとクラスメイト達に目を向けると、眉を寄せてため息を

吐いた。

「わかった……お前は大丈夫なんだな？」

問われた亮は、少し驚いたように目を睜った。まるで、自分が心配されるなんて予想だにできなかったかのよう。

それから不敵な笑みを浮かべただけで、何も言わなかった。

それを見た明は小さく苦笑する。

「おい、何してんだ、さっさと来い！」

亮と明が話している内に、三年の三人は扉の前まで行き、苛立った声で亮に向けて叫んだ。

亮は肩を竦め、気だるげに「わかりましたよ」と返し、三人に向けて足を運ぶ。

その途中で、一人のクラスメイトの男子生徒が、さすがにこのまま行かせるのは不味いと思ったようで、躊躇いがちに声をかけてくる。

「お、おい、桜木……」

俺も一緒に行こうか？ と男子生徒は精一杯の勇気を振り絞って言おうとした。

このまま黙って見てるだけなんて、男が廢る。そんな意気込みが顔に表れている。

しかし、その先を言う前に亮が言葉を被せた。

「俺じゃないぜ」

真顔でそう言う亮の言葉の意味がわからなかったようで、言われた男子生徒だけでなく、他のクラスメイト達も「は？」と首を傾げる。

意味が通じなかったのを見た亮が言葉を続ける。

「いや、だから、俺は何もやってないぜ？ あの先輩が勝手にこけたんだよ」

左手を顔の前で振り、右手は三年の三人に向けて指差し、また真顔で言った。

その顔は、まるで「私は無実です」と言わんばかりである。

この状況でそれを言うのか、といった引き攣った顔をクラスメイト達が浮かべると同時に、聞いていた三年の一人が叫んだ。

「てめえ、状況わかってんのか、ゴラ！ さっさと来やがれ！！」

いや、本当に。とクラスメイト達が心の中で呟く。

またも怒鳴られた亮は、不快そうに眉を顰め

「ちょっとぐらい待ちやが……、じゃねえ、ちょっとぐらい待ってくださいよ、先輩！」

亮は教室を出られることに、少し気が抜けていたのだろう。普段の口調が出かけ、それを言い直すも、目を剥いているクラスメイト

達同様に、三年生達もしつかりと聞いていた。

「てめえ、本当に立場わかってんだろうな!？」

三年生の一人が額に青筋を浮かべそうなほどに、亮を睨みつけるも、亮の顔色はまったく変わらない。

「わかってますよ、さっさと行きましょう」

肩を竦めながらそう返すと、止めていた足を再び進める。

勇気を出した男子生徒はすっかり氣勢をそがれて、再び声をかけることが出来ず、ぽかんと亮の背中を見るだけである。

亮がようやく、三年生達の前まで行くと、彼らは露骨に舌打ちをして、くいとアゴを廊下に向け、扉を開ける。揃って教室から出ようとした時に再び亮がクラスメイト達の方にくるりと振り向いて言った。

「本当に俺は何もやってないぜ？」

その顔を言葉にすると「信じてくれ、俺は何もやってないんだ」が、相応しいだろう。

クラスメイト達は渴いた笑い声が出そうになるのを抑えた。

明は顔を伏せて、込み上げる笑いを必死に抑えているようだ。しかし、抑えきれない分が肩に出て震えている。

「てめえ、とことん俺達のこと舐めてるだろ！ 覚悟できてんだろうな!？」

三年生の一人が当然のように怒りを浮かべて亮に詰め寄るが、亮は「いえいえ、そんな舐めてなんかいませんよ」と言いながら両手で制す。

「て、てめえ……」

黒髪の男が今すぐ亮を殴りたいかのように固く拳を握る。込み上げる怒りのせいだろう、プルプルと震えている。

「落ち着けて。後でたつぷり、ゆっくりやればいいんだからよ」

茶髪の男が嫌らしいニヤニヤとした笑みを浮かべながら、黒髪の男を制する。

「わかってるよ……チツ、おい、さっさと行くぞ！」

「そうですね」と亮は頷き、四人は揃って教室を出た。

怒鳴っていた人間がいなくなったからか、教室が一瞬でしんとする。教室内にいる者は全員、開け放たれた扉を音も立てず見ていた。そこで、誰かが口を開こうとした瞬間だった。

開かれた扉から、亮がひよっこり顔だけ出した。

注目していた扉からいきなり顔だけ現れたせい、亮のクラスメイトの何人かがビクッと驚くも、全員が「何だ？」と亮に注目すると、亮が明と目を合わせて言った。

「忘れてた。明、恵梨花が来たら、ここで一緒に待っててもらって

いいか？」

呑気な、が付きそうな声で言うその言葉に、クラスメイト達が「本当にあいつは状況がわかってしているのか？」と内心で呟きながら、あんぐりとなる。

「わ、わかった……」

流石の明も返事を返すその顔が引き攣っていた。

「頼んだぜ」

ニヤッと笑って亮が顔を引つ込めると、廊下から「てめえ、いい加減にしねえと、ぶつ殺すぞ!!」「調子に乗るのもいい加減にしろ!!」などといった怒声が響いてくる。その後にもまた呑気な声で「ちよっと、用事頼んだだけですよ」と小さく聞こえ、また、怒声が響く。

亮達の声がまったく聞こえなくなった頃には、また教室に静寂が下りた。

ただ、今回の静寂には先ほどと違って緊張感が抜けていた。それはもう綺麗さっぱり。

男子生徒が一応、聞いておこうかといった顔で口を開く。

「なあ、明、あいつ……大丈夫……なんだよな？」

その問いかけが躊躇いがちなのは、心配する気が無くなってきた

からなのか、心配するのが馬鹿らしくなってきたからなのか、恐らく、両方なのだろう。

例えば、連れて行かれたクラスメイトが、怪我をして帰ってきて、それは自業自得のような気がするし、黙って見ていた自分だが、それでも、それに対して罪悪感など湧かないだろうといった思いが感じられる。

それでも、今の問いを連れて行かれたクラスメイトの親友に聞いたのは、現状、第一声はこれをまずしなくてはならないといった義務感に近いのだろう。

問いを発した本人も、クラスにいる全員が同じ気持ちだと確信に似たものを抱いている。

そして、それはまったく間違っていないかった。

明はそんな空気を敏感に感じ取っており、苦笑を浮かべた。

「……大丈夫なんじゃないか？ あの様子なら」

「そ、そう思うけど……、でも、先生に言つといたほうが？」

明の答えを聞いた女子生徒が、これも一応、といった声で一つの救済プランを提案する。

「……それは、亮が何時間経っても帰ってこなかった時でいいと思う」

「そ、そうか……、うん、そうだよ。桜木くんも先生に知られて問題になるの嫌だろうしね」

間違いなくそうだろうと思しながら明が頷く。

「なあ、明、本当に桜木は何もしてないのか？ ……あの先輩が倒

れた時だけど」

「…………お前はどう思う？」

問いに対して、明は問いで返した。

「…………正直なところ、最初は桜木が何かしたとは思わなかったんだけどな…………、何しろ先輩らの影になってたから。でも、あの先輩らが何か言ってたろ？ 桜木が手を掴んだとか…………だから…………それにさっきまでの桜木見てるとな…………ん…………」

そう言いながら、眉を寄せては首を傾げる。明が見てると、他のクラスメイト達も似たような思いを抱いているのだろう。

明以外のクラスメイト達での亮の認識は、最近でこそ、恵梨花と付き合ったから目立ち始めた存在ではあるが、男子生徒の認識はそれだけである。

勉強の成績はいいとは言えず、体育の時間でもたいした活躍を見せないし、HR中もろくに発言などしない。特に何か優れたところがあるようには見えない。言えば、なぜか、あの藤本さんと付き合いえた男、それだけである。

対して、女子生徒の間では亮は恵梨花と付き合い合った日から、思っていた以上に面白い男だと認識され、そして、あのダサイ眼鏡を外せば、それなりに男前だという、新しい認識がついている。亮には大変ありがたくないことに。

それでも、流れている亮の噂に関しては、クラスメイト達は全員、それは言い過ぎだろうとは思っても、大きく間違っていないとも思っている。だから、喧嘩がどれくらい強いかなんて、考える以前に脳裏を横切ることもない。

そんな認識であるから、あの茶髪の男がいきなり倒れた時も、亮が何をしたかなどとは考えが回りにくい。

だから、最初は亮が言った通り、先輩が勢い余ってこけたのかと、クラスメイト達は思いかけていた。が、途中から違和感を感じる。

あの三人に相對していた亮は、実に堂々としたもので、かけらも臆した様子を見せなかった。

普通、ガラの悪い先輩三人に囲まれたら、少しは焦った様子を見せてもいいのに。

それは最後まで変わらなかった。緊張して、心配して見ていたのを馬鹿らしく思わせるほど。

ここに至って、この場にいたクラスメイト達は思った　桜木は見た目通りの男ではないと。

そう思い始めるとあの三人が言ったように、亮が何かしたのではないかといった考えが頭に回り始める。

こうなるともう、亮が言っていることが本当なのか、あの三人が言っていることが本当なのかわからなくなってくる。

そんなクラスメイト達の困惑を、問いかけられた言葉と表情から明は正確に察して嘆息する。

亮が明に最初に『頼む』と言ったのは、亮のしたことを誤魔化す

ことだが、これでは亮の弱者の演技が下手すぎたせいで難しい。

一応、誤魔化せるだけ、やってみるか。明が口を開く。

「亮は何もやってなかったな」

「そうなのか？ でも、手は動いたんだよな？」

男子生徒がそう言うと、別の男子生徒が頷いて相槌を打つ。

「ああ、俺も手が動くのはちらっと見えたな」

明も頷いた。

「俺も手が動くのは見たな。その手が先輩の手とぶつかって、先輩が大きくバランスを崩したんだよ、俺にはそう見えたな。あれには、俺も驚いた」

そう言って笑みを浮かべると、釣られて全員の顔に大なり小なり笑みが浮かぶ。

それを見て明が続ける。

「第一、寝てたのは本当だし、そんな状態で普通、何かできると思っただけか？」

と、ごく一般的なことを言った。

すると「たしかに……」や「そうだよな……」などと呟き、どこか納得いかないながらも、確かにその答え以外はやっぱり難しいよな、といった顔をするクラスメイト達。

明が最後のひと押しをする。

「あの亮だぞ？ いつも寝てばかりいる、あの」

すると、苦笑を浮かべ始めるクラスメイト達。

そんな彼らを見て、これ以上の誤魔化しは難しそうなので、後の結論は彼らに自分で出してもらうことにする。自分が納得のいく結論を。それはつまり、普通に考えたら、こうだろうといった普通の結論を。

そう決めると明は話題を変えることにした。

「そういえば、藤本さんって体育祭の委員で、今その委員会だけど、いつ終わるかわかる人いる？」

この話題の効果は抜群だった。

「いつ終わるかわからないけど、藤本さん、ここに来るんだよね？」

お前、一緒に待つんだよね!？」

「仕方がねえ、俺も一緒に待ってやる」

「じゃあねえな、俺も付き合っただけ」

「今日は残っててよかったぜ……」

男子生徒達が見事に食いつき、女子生徒達がため息と共に白い目でそんな彼らを見る。

先ほどまで、少なからず先輩達に臆していたというのに、そんな様子が今は、と言うよりも、ずい分前からかけらも見えない。

これは多分、亮のあのマイペースのせいなんだろうなと思うと同時に、恵梨花が亮を好きになったのは亮のそういつところなのでは、と明はなんとなく思った。

第十五話 逆鱗（前書き）

日付を見ると明日で丁度、『B少』の投稿を始めて半年です。だからです。

だから、感謝を込めて二話なんです。

予定より文字数が二倍以上になったから、二話ではありません。本当ですよ……？

第十五話 逆鱗

「まったく、梓から鍵、借りとけばよかつたぜ……」

そう舌打ち交じりにぼやく亮は、かつてない早さに挑戦するように屋上の扉の鍵をピッキングする。

この鍵はもう慣れたものだが、それでも10秒は掛かる。

亮は慌てず、けれど素早く手を動かす。

亮の自己最速記録であろうタイムで鍵穴からカチリと音がした瞬間に、背後から三組の大きな足音と、息を切らした呼吸音が聞こえる。それと同時に素早くピッキングツールをポケットにしまう。

「てめえ、ふざけやがって……」

黒髪の男が階段を登ってきたためだろう、息を切らして肩を上下に揺らしながら、射殺さんばかりの目を亮に向ける。

「それにしても、お前ってやっぱり馬鹿じゃね？ 逃げるにしても、ここはもう逃げ道もないってのに」

同じく肩を揺らしながらだが、こちらは嘲笑を浮かべる茶髪の男。

「本当にな、どこに逃げるかと思ったら……逃げ場所も無いし、人も来ないところって、本当に馬鹿なやつみたいだな」

やっぱり息を切らしたために肩を揺らし、馬鹿にしたような呆れ目の目を向けるひよろりとした男。

頭の悪そうな顔をした連中に揃って、それも面と向かって馬鹿と言われるのは流石に腹が立つなと思いつながら、亮が軽い調子で返す。

「途中でちょうどいい場所を思いついたから、こっちに走ってきただけですよ」

肩を竦めて言うその姿には、やはり焦った様子も、怯えた様子も見えないものだったが、三年生達には今度ばかりはそれは強がりに見えた。

なぜなら亮の教室がある三階から亮を囲む形で降りている時、もうすぐ一階というところで、亮が三人の隙をついて素早く横に一步踏み出し、囲いを抜けて「下じゃなくて、こっちだ。ついて来い」と言うや反転し、降りてきた階段を全速力で屋上へ向けて駆け登った。

三人からしたら、亮のその行為は完全に「逃げ」の一手であり、いきなり逃げだした亮に腹立ち、罵声を上げながらすぐさま後を追う。

しかし、彼らが追い始めた頃には既に視界に亮が映っておらず、上に向かっている足音だけを頼りに亮を追った。

亮は先ほど言った言葉と違って、途中で屋上に行くのを思いついた訳ではなく、最初から屋上に行くつもりだった。

教室で三人に場所を変える提案をした時に、一番人目につかないところを考えた時、即座に思いついたのが屋上である。それにここ

なら、誰かが来てもすぐにわかる。

それなのに、一階の手前まで一緒に降りたのには理由がある。
鍵をピッキングする時間が欲しかったからだ。

最初から屋上に行く提案をしても、鍵をもっていないのでは提案する意味もない。

屋上への扉と階段までには小さなスペースがあるが、事が荒立った場合、あの三人にとって不十分な広さであり、一人である亮の方が有利なスペースである。それに、そのスペースに人が来ることが少ないのは確かで、それを連れていかれている立場の亮が提案すると、怪しまれて反対されるのがオチである。

それにピッキングするところを見せたくもなかった。

なので、わざわざ一階近くまで一緒に降り、足の速さのアドバンテージを利用して、三人に見られないピッキングの時間を確保した。わざと足音を立てて三人を誘導することも忘れずに。

もつとも、これは三人より足が速いといった自信と実力をもってこそ、確保できる時間であるが。

そして、三人の体つきから時間を確保できると判断した亮の目論見はギリギリ成功した。

だが、三年の三人からしたら亮は恐怖から逃げ出し、その恐怖の余りに考えなしに屋上に逃げ、その結果、追い詰められたようにしか見えない。

だから亮が怖がる様子を見せなくても、追い詰められた故の最後の抵抗とばかりの強がりには映らなかった。

「途中で思いついただと？ 適当なこと言いやがって」

「ビビって逃げ出して、つい、ここに来てしまったただけだろうが」

黒髪の男が吐き捨てる様に言うと、追隨して茶髪の男が嘲笑う。

「いや、本当に。今日先生に屋上の掃除頼まれて、それで鍵閉めるの忘れてたのを思い出したんですよ」

亮は事前に考えていた鍵が開いている嘘の理由を、またも軽い調子で言うと、論より証拠にと屋上への扉を開けて見せる。

普段なら開かれるはずのない扉が開かれたことに、少しばかり驚きで目を瞠っている三人を尻目に亮が扉の奥へと進んでいく。

「てめえ！ 勝手に動いてんじゃ……」

「ちよつと待て」

自分達を舐めきっているとしか思えない亮の態度への苛立ちから、茶髪の男が罵声と共に後を追おうとしたところで黒髪の男が手で制する。

茶髪の男が自分を止める手と、閉められた扉を交互に見て苛立ちしげに振り向くと、黒髪の男が口を開いた。

「何で、あいつここに来た？」

「？ 俺達にビビって逃げたからじゃねえの？」

茶髪の男がろくに考えもせず答える。

「俺もそう思ったがな、ここの鍵が開いてるなら逃げるのには向いてないだろ……鍵をかけ忘れたから開いてるなら、屋上の方が人は来ないだろ、裏庭やサークル棟の裏よりも」

黒髪の男が、彼らが事前に行こうと決めた場所と共にそう言う、ようやく茶髪の男が考える素振りを見せる。

「あいつに何か考えがあるかもって？ ……考えすぎなんじゃねえ？」

「……もしかしたら誰か待ち伏せてるかもしれんしな、それだけは頭に入れとけ」

見かけとは裏腹に黒髪の男が冷静に指摘すると茶髪の男は「考えすぎだろう」と言わんばかりに肩を竦める。

そこで、ひよろりとした男が笑う。

「単に、俺達に殴られるところを、誰にも見られたくないだけじゃね？」

そう言うと三人は愉快そうに笑った。

それも充分考えられることだったからだ。

上級生に睨まれ、絡まれる生徒と積極的に関わろうと考える生徒は少ない。

今まで友達と生きていた存在ですら、とぼつちりを恐れて離れていくことも無くはない。

それを恐れて、絶対に誰にも見られないだろう屋上に行くことは、それほど間違った行為ではない。

そうであれば、自分達を苛立たせたあの強がりも滑稽にしか思え

ず、彼らは嫌らしく笑いながら、それと同時に知らずに落ち着きを取り戻して扉を開いた。

そう、自分達が優位であることを疑いもせずに。

ひよろりとした男が言ったことは半分正解で、半分間違이었다。正解なのは、誰にも見られたくないこと。

間違いは、殴る側と殴られる側が正反対だということである。

(やっと来たか……)

亮が屋上に出て来てから何故か三人が中々現れず、明を待たせ、恵梨花を待つ身としてはイライラとした数分を過ごした。

クラスの連中に怪しく思われなかったためにも、なるべく早く戻りたいと思っている亮は内心の苛立ちを抑えて三人を見ると、ふと気付いた。

三人から先ほどまでの苛立ちや、剣呑な雰囲気、殺気立った気配が薄れていることに。

それを見て、どうやら自分がここまで誘導したことに対して、少しは不審がつて冷静になることを訴える思考が出来るやつがいるらしいと、少しばかり感心した。ただの馬鹿の集まりじゃなかったのかと。

それと同時に、三人のニヤニヤとした嫌らしい笑みを鬱陶しく感じ、さっさと用を済ませようと口を開く。

「それで、俺に何の用ですか？」

用件を聞くまでは、口調は丁寧でいくかと亮が切り出す。折角、冷静になってくれたのだ。事をスムーズに運ぶためにも、そのほうがいいと判断する。

「お前、あの藤本恵梨花と付き合ってるんだってな？」

黒髪の男が嫌らしい笑みを崩さずに確認ともいえる問いを投げる。

「ええ、そうですよ……、それが何か？」

亮は内心でやっぱりかため息を吐く。

先週までは、友人以外に話しかけて来るものはいなかった。今週に入ってからは何かと、知らない誰かに声をかけられる。その全員が、恵梨花絡みのことである。

だから今回もそうだろうと思ったが、今までの連中と違って、ただ、自分の顔を見に来ただけでは無いらしいことはわかる。

なので、何の用かハッキリさせる必要がある。

亮が黒髪の男を見据えると、茶髪の男がへらへらと薄く笑った。

「俺達はあの女にちょっと恨みがあつてな」

とても恵梨花に恨みをもつほどの関係を持っているようには見えないが、それに対して亮は片眉を少し釣り上げた。

「どんな恨みですか？」

黒髪の男はスッと目を細めると、冷たく言い放った。

「お前には関係ねえよ」

「じゃあ、言うなよ」と亮は出かかった言葉を寸での所で飲み込んだ。

「じゃあ、その恨みと俺と何の関係があるんです？」

「なに、その恨みをあの女と付き合ってたって聞くお前にぶつけさせてもらおうと思っただけ」

そう言って薄く笑う黒髪の男に亮が訝しげな目を向ける。

「……何で、俺に？」

「あの女に下手に手を出すと、大事おおごとになるかもしれんからな……その点、お前ならその心配は無いだろうし、あの女も多いに悔しがらるだろうからな」

黒髪の男が言うと、三年の三人は一斉に下卑た笑いを浮かべる。

亮はそんな三人に嫌悪感を抱くと同時になるほど、とも思った。

恵梨花への恨みは恐らく、くだらない逆恨みだと思うが、その恨みを自分にぶつけて何かあれば、あの優しい女の子には効果的かもしれない。

恵梨花に下手に何かしたら、大事になるのももつともだと思っ

あの目立つ容姿であるから、何があったと気にかける人間は多いだろう。

その点、地味で目立たないと噂されている自分なら、気にかけるような人間も少なく、大事にはならないと。

馬鹿は馬鹿なりに考えているもんだと再び亮は感心した。

そこで、自分にどんなことをするつもりなのか気になった。

「それで……、俺に何をやる気ですか？」

依然として、怯えも恐怖も窺えない顔色の亮に、三人はまだ強がつているみたいだと嘲笑う。

「さあてな……、とりあえず俺達が呼びだしたら、即行で来い。…それから、ストレスがたまった時の捌け口だな」

黒髪の男が言うと、他の二人も嫌らしい笑みを浮かべながらアレやコレやと言う。

総合するとパシリとサンドバッグ代わりかと、亮が関心なさそうに黙って聞いていると

「おいおい、こいつ、ビビって何も口開かねえよ」

「仕方ねえよ。お前、悪党顔だしな」

「お前に言われたくねえよ」

どうやらそんな亮が恐怖に耐えているように見えたらしい黒髪の男とひよろりとした男がゲラゲラと笑った。

そろそろ、勝手なことばかりぬかすこいつらをシめて帰ろつかと亮が考えると

「まあ、そつべいんなよ、桜木」

そつ言うのは、わざとらしいような同情を目に籠めて亮を見る茶髪の男、が亮の肩に手をのせ、芝居がかつたように首を振る。

「俺達もな、あの女と付き合えたばかりで、幸せいっぱいだろうお前に、こういうことするのは忍びないものがあるんだよ……」

「たしかにな……」

「俺も良心が痛むよ……」

後の二人も、芝居がかつた表情で追隨する。

そんなクサイ演技を見た亮は、どうやら先ほどまでの自分へのは建前らしいと推測する。

「お前だって嫌だろう？ ……あの女と付き合ったせいで、とばっちり食らっちゃまって？」

黒髪の男がニタニタと嫌らしい笑みを浮かべ、覗き込むように亮を見るが、亮は何も答えず、黒髪の男を見る。

その沈黙を肯定と見たのか、黒髪の男が頷いて続ける。

「だからな……俺達はお前に救済プランをくれてやることにした」

そつ言うってニヤリと笑う黒髪の男に、亮は眉を顰め思わず呟いた。

「……救済プラン？」

(こいつら、気は確かか)

自分達でイジめる宣言をして、その本人達が救済プランを提案す

るとは、呆れるべきだろうか、それとも笑ってやるべきなのか、亮は少しばかり判断に迷った。

それと同時に、そのプランこそがこいつらの本命の用事なのだろうと睨む。

呟いて反応した亮を、自分達の話に食いついたと思いついた様子茶髪の男が鷹揚に頷く。

「ああ……簡単なことだぜ？」

そう言つと、茶髪の男は亮が見た中で今日一番の下婢た笑みを浮かべる。

「あの女を俺達の指定した場所に呼び出せ……そしたら、お前のごとは放つておいてやる」

それを聞いた亮の顔からすつと一切の表情が消えた。

「へえ……、何する気ですか？」

その亮の問いかけの声には一切、熱といったものを帯びていなかった。

三年の三人はそれに気付かず、いや、気付いたとしても構わなかっただろうが、意味ありげに笑い合っている。

「おいおい……お前、わかるだろう？」

ひよろりとした男がわざとらしく目を瞞ると、茶髪の男が肩を竦める。

「いやいや、本気でわからないんじゃないかね、そいつ？……そんな変

なことしねえよ、ちょっと遊ぶだけじゃねえか」

「そうそう、あの女もきつと楽しむぜ」

「いやあ、俺はあの女、楽しむどころか喜ぶと思うぜ？ ああいう女に限って、裏じゃ遊んでそうだしよ」

「それもそうだな……そういや、お前はもうあの女で楽しんだのかよ？」

「おいおい何言ってるんだ、どう見たらこいつがそんな手出すの早いヤツに見えるんだよ？」

「付き合って、まだ一週間ぐらいだっけ聞いたしな」

「それじゃあ、こいつ、まだキスもしてないんじゃないか？」

三人は楽しくてたまらないといった風に、欲望丸出しの下卑た顔でゲラゲラと笑う。

黒髪の男が自身の笑いを抑えながら、俯いて黙っている亮に言う。

「まあ、呼び出すのは一回だけでいいぜ？ ……後は俺達であの女を呼び出すからよ」

「ああ、心配すんなよ……お前があの女と楽しむ時間も残してやるよ……俺達がたっぷりと遊んだ後にな」

茶髪の男が嫌らしい笑みを浮かべながらそう言うと、またも三人は一斉に高い笑い声を上げた。

そんな中で亮が何か呟いたが、三人の笑い声に掻き消された。

しかし、黒髪の男だけが亮が何か呟いことに気付いたようで、他の二人に注意を促し、亮に注目する。

「何だ？ 何かあるなら言ってみろよ」

逆らったらどうなるか教えてやるといったような挑発的な声であった。

そんな声が響いた後、三人が揃って挑発的な目を向けると、亮が顔を上げた。

「黙れ」

それは只々、命令の意思のみが籠められたような大きいとは言えない声だった。

自分より弱者の立場にいると思っている男から、そんな声が聞こえた三人は当然の如く怒り、一斉に怒鳴ろうとするが、途中で彼らは気付いた。

自分の手が、膝が震えていることに。

そして、それに気付いた途端、今度は肺を圧迫されたかのような息苦しさを覚える。

結果的に亮の言葉通り黙った三人は、それぞれ自身の体の変調から困惑を見せる。

そこで、怒鳴ろうとしていた男に目を向けると、何故だか体をビクッと震えさせた。まるで、本能が警鐘を鳴らしたかのように。

亮はそんな三人の奥にある屋上の扉を見据えると、自身と扉の射線上にいる茶髪の男を睨んだ。

「どけ」

先ほどよりも強い口調で、怒りを押し殺した声だった。

亮に睨まれた茶髪の男は、先ほどよりも大きくビクつと体を震わすと、目を見開きながら思わずといった様子で足を一步退かせる。

「どけ」と言われたから退いたのではない。

そもそも困惑している彼に、短いが、その言葉が理解できたようにも見えなかった。

亮の全身から発するプレッシャーが男の足を退かせた。

そうして空いたスペースを抜けて、亮は悠然とした足取りで扉に向かう。

三人の男に背中を晒しているが、警戒している風にも見えない。

三人は困惑の中、誰も声を上げることなく、一人動いている亮に知らずに目を奪われてしまっている。まるで、目を離れた瞬間に起こる何かを恐れるように。

無骨な鉄の扉の前まで来た亮は、「カチリ」とした音と共に扉の鍵を閉めた。

その音が亮の背中を見ていた三人の男達に不吉なものを抱かせたかどうかはわからない。

鍵を閉めた亮は、三人に背中を見せているまま振り返ることなく口を開いた。

「お前らは本当にどうしようもないクズ野郎みたいだが、一つだけ誉めてやれることがある」

困惑から徐々に立ち直りつつあった三人は亮の言葉が頭に浸透すると怒り、それ故に、縫い付けられたように感じさせられていた舌を動かすことをなんとか成功させた。

「な、なんだと、てめえ!？」

「く、クズ野郎なあ!？」

「こ、殺されてえか!？」

背中に怒声を浴びた亮はそれに構わず振り返ると、三人を睨みつけた。

再びビクっとなって、冷や汗を流していることに気付くことも出来ない様子で、息を呑んで硬直する三人。

「 どうせ、くだらねえ恨みだろうが、それを直接、恵梨花にぶつけずに、俺のところに来たことだ」

お陰で、こいつらが恵梨花に害を及ぼすことだけは避けられそうだと、亮は本当に、この点についてだけは誉めてやってもいいと思っっている。

けれど、こいつらが恵梨花にしようとしたことだけは許すつもりはない。絶対に。

亮は怒りの籠もった目を強く三人に睨みつけた。

「 来な。お前らのその腐った根性も、考え方も、全部叩き潰し

第十六話 座（前書き）

最新話からこられた方ー！！
今日は二話更新しています！！
前の話に戻ってください！！

第十六話 座

その挑発的な言葉を向けられた三人は、今の自分の震えが怒りから来てるのか、それとも別のところから来てるのかわからない様子に見えた。

怒りから顔を歪め、目の前の一人の男を睨みつけようとしても、途端に睨み返され、思わず目を伏せてしまい、悔しそうに、忌々しそうに顔を歪める。

それでも、彼らは怒り以外から来るとは認めないだろう。

そう、自分達が目の前の一人の男に圧倒されて足も口も動かせないことと一緒に。

「来ないなら、こっちから行くぜ？」

中々、かかってこない三人に業を煮やした亮は、そう言って足を進める。

すると、黒髪の男が奥歯を噛みしめて、忌々しげに亮を睨んだ。

「調子に乗るなよ、てめえ」

それを見た亮は、薄々勘付いていたが、こいつが多分、この中のリーダー格だろうと当たりをつけた。

体格もいいし、頑丈そうだから、こいつは最後に回そうと心の中で決める。

黒髪の男が発した声に追隨するように、残りの二人が思わず後ろに行きそうになっていた足を踏ん張らせた。

「大体、おまえみたいな無能野郎と噂されてるやつが俺達に敵うとでも思ってたのか？」

「お前は一人で、俺達三人だけ？ まともな喧嘩したことあんのかよ、お前？」

口を動かす内に、多少、調子を取り戻したか、数の利も思い出したことで、またも嫌らしい笑みを浮かべて見せる。

本能的に感じている恐怖心を無理矢理押し隠したのは、それを認めたくないからだろう。

本当にこいつらの顔は、見ていて苛々するなと思いつつながら亮は何も言い返さずに、三人の前に立つ。

すると、一人と三人の間に、僅かながらの緊張感が流れる。

僅かなのは、一人が全く緊張する様子を見せていないからだろう。それが誰なのかは言うまでもない。

三人は亮の一挙手一投足を見逃すまいと、注視する。

そこで亮は目だけを、ちらと左に向けた。

これが見事に引っかかった。

三人の頭の中に、誰かが待ち伏せているかもということが頭の中にあつたせいもあるだろう。亮は知る由もないが。

三人が一斉に目を亮と同じ方向に向けた瞬間、亮は自分から見

右にいる茶髪の男に、足払いをかけた。その際、足の速さ故か、ヒュッと音が鳴った。

力を入れたようにも見えない、その蹴り足は見事に男の体勢を傾かせる。

放っておけば、そのまま背中を地面に叩き付けたらう。

しかし、亮は放っておかなかった。

男の背中が地面に着地する瞬間、亮は足払いをかけた右足を少し上げると、男の腹部を強く踏みつけた。

結果、地面と亮の足に強く挟まれた茶髪の男は、背中と腹部を同時に強打し、全身の酸素を出すかのように、苦悶に顔を歪めながら大きく息を吐き出された。

地面に倒れた音で、残る二人の男が反射的に振り返るも、既に一人が倒れていることに、驚愕で目を見開かせた。

更には仲間に足を乗せている亮を見て、二人は頭に血が登り「てめえ!」「ふざけやがって!」と、一斉に襲い掛かるが

「ちよつと、あっち行ってる」

と亮がそう言いながら、茶髪の男の腹部を踏みつけていた右足をその場から動かさず、それを軸足にして、亮の左足の足刀が一瞬間に二回走った。

それにより、二人の男が後方に吹っ飛ぶ。

この瞬間、誰が一番痛い思いをしたか。

それは亮の軸足の下にいた茶髪の男だらう。

茶髪の男は腹部に度重なる衝撃を受けて呼吸困難にも似た状態で、痛みに顔を歪めながら酸素を求めて喘いでいる。

それでも、まだ怒りが勝るのか、自分に足を乗せている亮を忌々しげに睨みつける。

「て、てめえ……調子乗るなよ……、早く、足、どけやがれ」

息も絶え絶えに言うのを、亮は無表情に見下ろしていたが、男の言葉通り右足を体から離す。

すると茶髪の男は、ホ、と安堵の息を吐くが、体中に走る痛み of せい、か、まともに体を動かすことができないようで、舌打ちをして亮を睨みつけようとする。が、その目が驚愕に見開かれる。

亮は足を浮かせただけで、体の上からどけておらず、再び強く踏みつけたのだ。

同じ箇所が更なる衝撃を受けて、またも酸素を吐き出しながら茶髪の男が苦痛に顔を歪ませる。

何か言おうとしても、口を自由に動かすこともままならず、不恰好に酸素を求めるだけである。

痛み故に体を捻らせるが、その時、見えた光景にまたも目を見開かせる。

「ま、まで……!!」

そんな制止の言葉を聞く理由のない亮はまたも足を強く踏み下ろす。

再び、茶髪の男の顔が苦痛に歪む。

そして亮はまた足を上に上げる。

そこで茶髪の男の顔が、ついに恐怖で歪んだ。

「や、やめ……」

言葉の途中で踏み下ろされた足は、男の抵抗心を根こそぎ奪ったようだ。

不恰好に右に左に転がりながら、痛がっている。

亮はそれを不快そうに眉を顰めて見下ろす。

もし、自分がこの三人を撃退できるほど強くなく、三人の言うことを聞くほど弱く、そして、恵梨花が指定された場所に向かって何かされた時、恵梨花が「やめて」と言えばお前らはやめるのかと、やめるはずもないような連中が、少し痛めつけられただけでそれを言おうとすることに亮は途轍もなく腹が立った。

怒りのままに、もう一度、踏みつけようとした時に、視線を感じて振り向く。

そこには呆然とした様子の、ひよろりとした男が立っている。亮が自分を見ていることに気付いた男は、ビクっとなるが、すぐに動きやすいように足を構えて亮を見る。が、その目には得体の知れない恐怖がありありと出ていた。

「な、なんだ、てめえは！？ こんな強えなんて聞いてねえぞ……」

起き上がるうとしてしている黒髪の男と、痛みに呻いている茶髪の男を交互に見ながら、焦った顔で叫ぶ。

そら、聞かれてたら困ると、亮は内心で呟きながら至って気楽な足取りで、ひよろりとした男に向かって歩みを進める。

手を構えることもなくダラリと下げている。

そんな気負いのない姿で自分に向かってくることに、ひよろりとした男は一瞬、目を見開いて恐怖を覚えた様子だが、それと同時に、こんなやつに、といった怒りも覚えたのだろう。

その怒りで、なんとか自分を奮い立たせたようで、奥歯を噛みしめ、目の前に迫った亮に向かって拳を振りかぶった。

その瞬間、亮がくるりと回った。

一閃。

亮の右脚での後ろ回し蹴りが、男の顔面に見事に決まった。

男は蹴りの衝撃で亮から見て右に倒れようとするが、亮はそれを許さず、降ろさなかつた蹴り足で、腰を捻って右の回し蹴りを男の顔面に放った。

結果、右に倒れようとしていた男はその方向からの衝撃により、一瞬ではあるが、無理矢理、亮の正面に立つ形となる。

その瞬間、亮は男のガラ空きのアゴを、またも降ろさなかつた蹴り脚を器用に動かして、高々と蹴り上げた。

仰け反って倒れていく男に意識は無かつた。

亮は意識を無くして痛みを感じないことを許さないように、茶髪
の男の時同様、地面に接地する瞬間を狙って強く踏みつける。

ひよろりとした男は苦悶に顔を歪めながら、盛大に酸素を吐き出し、痛みにより呻き苦しみ始めた。

結局、亮は一度も地面に降ろさなかった右脚で、四度の攻撃を放ったのである。

その一瞬とも言っていない、一連の様子を黒髪の男が驚愕により見開かれた目で見ていた。

最後の一人とばかりに亮は黒髪の男に向かって、先ほどと同様、悠然とした足取りで歩みを進める。

黒髪の男は警戒心を最大限に高めたようで、少し屈み両腕を上げてガードを固めた。

「くそっ！　なんだ、お前！？　足専門の格闘技でもやってんのか！？」

いや、全然違う。と、亮はわざわざ答えなかった。

どうせなら、拳で思いつきり殴ってスッキリしたいところだが、それは禁じられている。

感謝してくれよ、と亮は内心で呟いた。

自分の言葉に何も返さなかった亮に、黒髪の男は更に焦った様子になって目を血走らせた。

目前に迫っても、ガードの体勢を崩さず、仕掛けてこない男に対して、亮は軽く息を吐くと、地面を強く踏んだ。

亮は、黒髪の男がまるでブレたように見えるほどの速さで動くと、ガードをしていなかった腹部に対してまたも右脚で回し蹴りを放つ。但し、その時の蹴りは突き上げるように、斜め上を向いていた。

それにより、男は後方に吹っ飛ばず、足が地面から離れ、亮の足の上に乗るような形になった。

その瞬間、亮は素早く足を引き降ろし、体の向きを変える。目の前には体を横にして未だ空に浮いている黒髪の男。

その男の足が地面に着く直前、亮は男の腹部を高く蹴り上げた。それによって、男の体が亮の目線より少し高く舞い上がる。

上昇が終わり、地面に向かって男の体が落下し始めた時、亮は男の頭を跨いで、足を高く揚げた。

その足を、落下している男の背中に向けて振り下ろす。

亮のかかと落としによって、男は地面と激しく衝突した。

黒髪の男が全身を強打し、痛みに呻く。言葉を発する余裕があるはずもない。

亮は無表情にそれを見下ろしていた。

そこそこスッキリしたが、こいつらにはもっと痛みを知ってもらったほうがいいと思った亮は、さて、これからこいつらを、どうしてやるうかと考えていたら、後ろから声が聞こえた。

「う、嘘だろ……、あの、真壁マカヘが……？」

振り向くと茶髪の男が愕然とした様子でこちらを見ている。

亮に何度も踏まれた茶髪の男は、顔を動かして周りを見る程度に

は動けるようになったらしい。

亮が見る限り、リーダー格の男がやられたことに相当驚いているようだ。

（真壁つて……こいつか）

こちらを見て言ったあたり、目の前の黒髪の男の名前らしい。そういえば、名前を聞いてなかったなと思いつく。聞いていても忘れていただろうが。

亮が振り向いていることに気付いた様子もなく、茶髪の男は首を動かして、その先に倒れているもう一人の男を見つけると、目を見開かせる。

「は、林も……？」

震える声でそう呟いた。

（あの、ノツポが林か）

それからゆっくりと首をこちらに向けて、亮と目が合った。

途端に茶髪の男は体をビクッと震わせた。

恐怖を宿した目を亮から離すと、黒髪の男　真壁と、ひよろりとした男　林を交互に見て悔しそうに顔を歪めて毒づいた。

「くそっ！　何で、あの女に近づこうとしたら、こつも強いやつが出てくるんだ！！」

聞き逃せない発言だった。

「おい」

亮が無遠慮に茶髪の男を呼びかけると、再びビクッと体を震わせて、恐る恐るといった様子で亮を見る。

「な、なんだ」

亮は茶髪の男を睨んで言った。

「今のどつという意味だ」

すると茶髪の男は、しまったと言わんばかりの顔になって、目を伏せながら呟くように言った。

「な、なんでもねえよ……、お前には関係ないだろ」

話そうとしない茶髪の男を亮は無表情に見る。

「へえ？ ……ところで、お前……」

亮はそう言うと、怒りを込めて凄んだ。

「誰に向かってそんな口きいてんだ？」

さっきまで自分達が言っていた台詞を言われていることにも気付かない様子で、茶髪の男は先ほどよりも大きくビクッと体を震わせ、もつれる舌をなんとか動かした。

「な、なんでも……ない……です」

「そうじゃねえ、話せって言ってるんだ」

亮の要求は先ほど茶髪の男が口走った言葉の説明である。

「い、いや……それ、は……」

亮を恐れているのは明白なのに、それでも話そうとしない様子に、亮は苛立たしげに舌打ちすると、足元にいる男に目を向けた。

「おい、お前、聞いてたذار。意識があるのはわかってんだ、話せ。どうせ、お前も関わってんだらう？」

亮はそう言いながら、うつ伏せに倒れている真壁の体を乱暴に足で動かして、仰向けにする。

真壁は痛みに顔を歪め、呻き声を漏らすと、絶え絶えに呟いた。

「も、もう、一年近くも前のことだ……、そ、その時、あ、あの女と付き合っていないお前には、か、関係ないだろ」

聞いた亮はすっと目を細めた。

「それを決めるのは俺であって、お前じゃない。もう一回だけ言うぜ？ 話せ」

それは圧倒的な威圧感を伴った命令だった。

真壁は恐怖を宿した目で、話すか話すまいか葛藤しているようだ。無理もない。話す内容によっては、既に怒っている自分達が手も足も出なかった男を更に怒らせることになる。

死ぬかとも思わされたのは、たった今のことなのだから、尚更で

ある。

そんな葛藤している様子を見た亮は、ため息を吐いて見せた。

「選択肢くれてやる……今すぐ正直に話すか、たっぷり痛めつけられた後に話すか、どっちだ？」

真壁も茶髪の男も、途中からこちらを見ていたひよろりとした男林も、それはあんまりだと言わんばかりに目を見開いた。

どっちを選んでも話さなくてはならない。

この選択肢しか無いのなら、どちらを選んだ方がいいのかは明白である。

だが、それでも話すと、自分達が無事でいられる保証はないと思っ
ているのだろう。

ないからこそ、選択することも出来ない。

いまだ話す決断をする様子を見せない真壁に、亮は無言で足を上げ
て見せた。

ぎょつとした真壁は慌てて口を開く。

「は、話す！ 今すぐに……」

「遅い」

亮は選択を聞いていたが、無造作に足を真壁の腹に落とした。

女の子に、それも自分の好きな女の子に乱暴をしようと企んでいた男だ。

亮はこの三人相手にかけるも慈悲の心をもつ気はない。そもそもそれは出来ないだろうと思っている。

だから躊躇いなく、痛めつけることが出来る。

真壁は腹を抑えながら、苦悶に顔を歪めて咳き込む。

茶髪の男も、林も恐怖と怯えを宿した目で、亮と真壁を見ていた。

亮はそんな二人にも、苦しんでいる真壁にも構わず、屋上を見渡した。

何かを見つけたのか、目を止めると、そこに向かって歩き出した。

倒れている三人は、亮が何をする気なのかと、警戒よりも怯えが強い目で見ている。

亮が歩いた先にはブロック石があり、亮はそれを軽々と持ち上げた。

三人はそれを見て、もしや、それで自分達を殴る気かと、今日一番の恐怖を抱いた。

しかし、亮はそのブロック石を縦に地面に立て、三人に体を向けてその上に腰を下ろすと、こう言ったのである。

「よし、お前らそこ座れ」

そうやって自身の前を手で示す。

三人は、やや拍子抜けな感があったが、石で殴られる訳ではないと、安堵の息を漏らした。

それから、迅速に動かなければ、再び蹴られるかと思ったのだらう。

痛む体をなんとか無理矢理動かし、亮が示した場所まで行くと、そこにあぐらをかいて座った。

そこで亮の呆れた声が屋上に響いた。

「馬鹿か、お前らは？ 普通、座れって言われたら正座だろ」

恵梨花がこの場にいたらどんな感想を漏らしたか。

「懐かしいわ」と呟いたかもしれない。

初めて二人が会った記念日を思い出して、うっとりしたかもしれない。

それが、再度、亮が変わっていると改めて認識させられたか。首を振って「さすが、亮くん……」と呟くか。

何にせよ、呆れることは間違いないと思われる。

第十六話 座（後書き）

スッキリされました……？

亮が黒髪の男、真壁に放った攻撃は別名「空中コンボ」と言います。

第十七話 とりあえず……（前書き）

一章最大文字数を更新しました……

第十七話 とりあえず……

「あれ？」

亮、もしくは恵梨花を待つ明がいる教室に意外そうな声が響いた。教室内にいる全員が、その声の出所を目で追う。そこには、扉から顔だけ覗かせた恵梨花がいた。

その恵梨花は次に、一頻り教室内を見回す。

何か複雑そうな顔をしている女子生徒、男子生徒と自分の彼氏の親友がいるだけで、探し人が見つからない。

トイレにでも行ってるのかと、小首を傾げているとその探し人の親友が声をかけてくる。

「藤本さん、亮なら……」

しかし、その声が言い終わる前に

「藤本さん！ 桜木は三年の人に……」

「三人の先輩に……」

「連れて行かれた！」

「いや、あれは着いて行っただんじゃ……？」

教室内に残っていた男子生徒達が、話しかけやすいネタがあるせいか、学校のアイドルに向かって興奮した様子で次々に声を上げる。

一斉に話しかけた恵梨花は、そのせいか訳がわからなかった様

子で目をパチクリさせ、自然と最初に声をかけてきた明と目を合わせると、明は小さく苦笑を浮かべて言った。

「三年の人、三人が亮に用事あるみたいで、亮はその人達に着いて行ったよ……亮からの伝言で、帰って来るまで、ここで待っていてくれってさ」

「そうなんだ……？ 三年の人？ ……何の用事なんだろう？」

恵梨花は呟くようにしてそう言うと、またも首を傾げる。

「なんか、いい雰囲気じゃなかったよね……」

「そうね」

「桜木くん、余計に雰囲気悪くしてたしね……」

「本人そんなつもりは無さそうだったけど……」

今度は女子生徒達が、少しだけ噂の人間を案じている様子を見せながら口々に言った。

それを見て、どうやら余りよくないことが起きたらしいと、恵梨花は顔を引き締めて再び明と目を合わせた。

「何があったの？」

明に勧められて亮の席に座った恵梨花は事情を聞いた。

明の説明の途中で他の女子生徒、男子生徒も時折、挟むように見たことを話す。

冷静に話す明、女子生徒と違って、明以外の男子生徒は憧れの女

の子と話せることが嬉しいようで、テンション高く会話に混ざろうとするが、そのせいで、しょっちゅう話の腰を折るので、途中に女子生徒達の冷たい眼差しと共に「うるさいよ、男子」の一声で男子生徒達がおとなしくなるような場面もあった。

「う、うーん……」

話を聞き終えた恵梨花は眉を寄せて、呆れたらいいのか心配したらしいのか、どちらかわからない、そんな微妙な顔をして唸っていた。

心配か、心配でないかと聞かれたら心配だと答えるが、それと同じに間違いなく大丈夫だろうとも恵梨花は思っている。

なんといつても、六人を相手にして秒殺するのを恵梨花は見たことがある。後からわかったが、その時ですら、まるで全力を出していないとも。

話に聞いた三人がその六人より手こずることは考えにくい。例えば、その三人が何か格闘技を学んでいても。その時は素人相手では無いのだから、手を使って全力で相手することもできるだろうと考えられる。

大丈夫だろうと頭では思うが、やっぱり心配だという気持ちも湧き上がる。自分の彼氏のことなのだから、そこは仕方ないと思う。けれども、話を全部聞くと、話している女子生徒が顔に出しているように、心配するのが馬鹿らしくなるような気持ちにさせられる。

けど、それでこそ実に亮くんらしいと、恵梨花は周りが心配（一応、形だけの）の目を向けてくる中、クスリと微笑ってしまった。

「え、恵梨花ちゃん？」

話していた女子生徒が、少し焦った様子で大丈夫かといった目を恵梨花に向ける。

そうなるのも無理はない。

自分の彼氏が今、危険にあるかもしれないといった話を聞いたら微笑んだのだ。

心配の余りに、どこがおかしくなったのではと焦っても不思議ではない。

「あ、ごめん、ごめん……話してくれて、ありがとう」

向けられた目を見て、どんな心配をされているのかわかったのだろう。

恵梨花は慌てて手を振り、大丈夫だと伝える。

「……そう？　桜木くんのこと心配……？」

女子生徒は首を傾げつつ、恵梨花を案ずる目を向ける。

「んー、ちょっとだけね……でも、亮くんなら、大丈夫よ」

そう言っただけで恵梨花が微笑むと、明以外の面々が驚きに目を丸くする。

「そうなの？　なんで？」

女子生徒の一人が一同を代表するように聞くと、恵梨花は亮のことを考えていたせいか、自然と満面の笑みが出て言った。

「だって、亮くんだから」

何度見ても亮を魅了してやまない、その破壊力抜群の満面の笑顔を見せられた、いや、見てしまった男子生徒は顔を真っ赤にして口をパクパクとさせ、女子生徒は男子生徒ほどではないが、頬を染めて言葉を失った。

そのため彼らは、恵梨花のまるで説明になっっていない言葉について詳しく聞くタイミングを逸してしまった。

「嘔吐け」

亮がブロック石に腰を下ろしたまま、呆れた様に言いながら、足を伸ばして黒髪の男　真壁を蹴った。

三人並んで正座しているその真ん中で、一際大きな体格が仰け反り、左右にいる二人、茶髪の男　細川ということが途中でわかった、とひよろりとした男　林は冷や汗を流しながら、恐怖の籠もった目で蹴った人間を見ている。

「ほ、本当だって！　いや、本当なんです！　信じてください！！」
「ほ、本当に本当なんです！！」

蹴られなかった二人が必死に言うのを尻目に、亮はため息を吐きながら聞き流していた。

聞き流しているといつても、二人の言い分を無視しているのではなく、先ほど聞いた話に嘘が無いのは、話している時の様子から、なんとなくわかっていいるからだ。

それでも、話を聞いたら「アホか」と心の中で呟いてしまい、それと同時に思わず目の前の男を蹴ってしまっていた。

ともあれ、話を聞き終わった亮は、この三人をどうしようかと思いい、聞いたばかりの話を脳内で反芻した。

亮は三年の三人を正座させると、まず、こつ前置きをした。

嘘や誤魔化しを一切、混ぜないこと。

それを亮の勘（あくまで、亮の勘である）が捉えた場合、無言で蹴りを入れるとも。

だから、これ以上痛めつけられなくなければ、嘘偽りなく、正直に全てを話せと。

再犯を試みることが二度と無いように、まだまだ痛めつける気満々の亮だが、敢えてこつ言った。

そんなことを知る由もない三人は恐怖に顔を染めながら頷くが、当然のように湧いたであろう疑問を恐る恐る尋ねてきた。

その疑問とは、正直に話していても、それを嘘だと思われたら？である。

それに対して亮は「それは、お前らの話し方が悪いからだ」と冷たく言い、更に「だから誠心誠意、俺に信じてもらえるように、馬鹿正直に事実のみを話せ」と言い放った。

聞くと同時に射竦められた三人は顔を強張らせると、亮の放つプレッシャーから震える体を叱咤するかの如く拳を握り、迫り来る恐怖を飲み込むように、ごくりと喉を鳴らすと、ゆっくりと話し始めた。

三人は去年の入学式から、今まで見たこと無いほどの可愛い容顔で、それでいて制服の上からでもわかるほどの抜群のプロポーションを持った恵梨花に大多数の男子生徒達と同様に注目した。

彼らは恵梨花を見かける度に情欲を燃やし、欲望に染まった話を三人でゲラゲラと話し、付き合えるなら付き合ってみたいとも思っていたが、次々に告白してくる男子を振っているとの話を聞いて、自分達も同じ結果になるだろうとのこと、最初から諦めていた。

ここまではこの学校の多数の男子生徒と同じように、よくある？話である。

冗談で言い合うことはあっても、三人は自分達の欲望を無理矢理、形にするつもりは無かった。

ただ、ある日、三人は自分達と同学年の男子生徒が、恵梨花にたいて、放課後にこの場所に来てくれるように頼んでいるのを偶々見かけた。

またかと思いつながら、その場所も聞こえた。

その時は、それを聞いても別に何かする等考えることはなかった。

しかし、そのすぐ後に考えが変わってしまふ。

告白の前準備を見かけてから、さほど間が開いていない休み時間にクラスの友人と雑談をしていると、こんな話が出た。

今は使われていないサークル棟にある、一つの部屋の鍵が壊れていて、その扉がいつも開いている。その部屋は一階だが、裏庭に面して人目につきにくい。

そして、その部屋を使って、この学校のカップルが色々と励んでいるらしいと噂が流れている。

今度、覗きにいったらみるか？ 等と笑いながら言う友人を尻目に、三人は思わず顔を見合わせた。

偶々だろうが、その部屋の前こそが放課後に恵梨花が呼び出された場所なのである。

その部屋が、今どんなことに使われているかと聞いたこともあつたせいだろう、三人の頭に共通して邪な考えが脳裏をよぎる。

一度考え始めたら止まらなくなった。常日頃欲しいと思っていたものが手に入るチャンスだとも考えたのだろう。

彼らは偶々聞いた告白現場を自分達の欲望のために利用することにした。

三人は放課後になると男子生徒が告白現場に向かうのを確認して、あとをつける。

待ち人の恵梨花でなく、こんな場所に三人が現れたことに驚く男子生徒を問答無用で殴り倒すと、彼らは件の部屋くだんに男子生徒を放り込んだ。

後は恵梨花が来るのを待ち、開け放たれた部屋に男子生徒が倒れているのを恵梨花が見れば、慌てて中に入って様子を見るだろう。もし警戒して、自分から入らなければ、その時は無理矢理入れたらいい。

彼らは自分達の計画が上手くいきそうなことに下卑た笑いを浮かべ、ご馳走にありつく順番、撮影する役回りなどを欲望に染まった顔で話し始めた。

それから数分もしない内に一組の足音が聞こえて目を向けると、三人は揃って「は？」と目を点にして固まった。

見ると、そこには一人の男と思われる人物がいた。

男と思われるのは、この学校の男子の制服を着ているからだ。

手にはその辺に落ちていたと思われる小汚い角材らしき棒を持っている。

それだけなら、彼らは驚きはしても固まりはしなかった。

固まったのは、男がゴム製の覆面をしていたからだ。

その覆面は、未来から来たタヌキ型ロボットと小学生の子供たち

が織りなす国民的人気アニメ「タヌえもん」に出てくる、メインキャラクターの一人、ガキ大将シャイアンであった。

その覆面を被った男は驚いて固まっている三人に、三人が告白しようとしていた男子生徒を殴り倒した時と同様に、問答無用で棒を振り回しながら襲い掛かった。

驚き故、不意を衝かれた三人は迎撃態勢を整えようとするも、覆面を被った男の振りまわす棒は鋭く、強かに打ち据えられた三人はあっという間に地面に沈んだ。

三人が痛みに呻いていると、覆面を被った男は傍^{はた}からわかるほどの怒気を滲ませた声で言った。

「はな……、藤本恵梨花はここには来ない……、お前らは二度と彼女に近寄るな。もし近寄ったら、次は骨の一本や二本ではすまさん」

そう言い捨てると、三人の前から姿を消した。

三人がそこで話を終えた時の亮の反応は先ほどの通りである。

亮はシャイアンが目の前の三人を打ち据えるところを想像して、その光景の異様というか、余りの馬鹿らしさに衝動的にやってしまった。

ちなみに三人が話している間、亮の怒りは治まるところを知らな
いように膨れ続けていた。

三人はどんどん強くなっていく亮のプレッシャーから顔を背けた
そつに身じろぎするが、それが許されないこととわかつているのだ
ろう、堪えるように前を向いた。しかし、耐え切れぬように時折、
目を伏せがちに話す。

三人の話が部屋の前での降りになると、亮の怒りは殺気を伴って、
周囲の空気を冷たくした。

三人は亮の殺気に芯から震え、怯えながら話すが、シャイアンが
登場することにより、亮は毒気を抜かれたような気になって、殺気
だけは消えた。

殺気が消えた瞬間、三人は冷や汗を拭いながら、心からほっとし
た様子を見せた。

三人の過去の計画はシャイアンによって打ち砕かれたが、今現在、
彼らの命はシャイアンによって助けられたと言ってもいいだろう。

「　　で？　　最初に言った恨みってのは、その覆面野郎にやられ
たことか？」

「あ、ああ……、そうだ」

亮に蹴られて仰け反っていた真壁が痛みにも呻きながら答えると、
亮は眉を顰めて吐き捨てるように言った。

「逆恨みにも程があるな」

三人は身を竦めて、何も言い返さない。

怖くて言い返せないということもあるのだろうが、亮の言っていることが間違っていないことも理解しているのだろう。

「それでお前ら、その覆面野郎が誰だか調べはついてんのか？」

「いや……俺たちと同じ三年だということはわかっているが……」

胸ポケットのラインの色を見たのだろうと亮は見当をつける。

「ふうん？ ……他に特徴とかは？」

「背は大体俺と同じぐらいだったが……声はマスクのせいでもっててよくわからなかった」

そう言う真壁を亮は改めてじっくりと見る。身長は大体180cmあるかないかといったところである。

三人を痛めつけ、恵梨花を助けたシャイアンのは気になるが、恵梨花に害する気が無いようであるなら、考えることは後回しにするかと亮は結論付ける。

「……それにしても、お前ら、懲りるといっつか、反省することを知らねえらしいな」

馬鹿らしい話だったが、そのシャイアンはこの三人から恵梨花を救い、亮からしたら及第点をやれないところだが、再犯防止のために最後に脅しをかけている。

脅しがぬるかったから今、亮の前にいる訳であるが、ふと、亮は気になった。

「その覆面野郎に言われたからかおとなしくしてたか知らねえが、何で、今日になって俺から恵梨花に近づこうとした？」

亮がそう聞くと、三人は顔を見合わせ、言い難そうに口を開いた。

「その……、お前の噂を聞いてな」

「俺の噂？」

「あ、ああ……、喧嘩できる根性もなさそうな無能なやつだと聞いてな、だから……」

「脅して、言うこと聞かせようと考えた訳か……そしたら、恵梨花を好きにできて、覆面野郎にも一矢報いることになる」

亮がため息を吐きながら最後を補完すると、三人は目を伏せて沈黙した。

その意味するところはYesということであり、それを目の前で圧倒的なプレッシャーを放つ亮にハッキリと口にするのを避けたのだろう。

亮は話を全て聞いて頭を抱えなくなった。

悪い噂とは、こういう馬鹿も刺激するのかと。

梓から聞いた話では、流れている噂のせいで、自分から奪えると思つて恵梨花に告白する連中が後を絶たず、その連中は自分がどんな人間か、確認に来たり、振られた後に憎悪の籠もった目で見てくる時がある。

おかげで、自分の貴重な睡眠時間がどれだけ減ったかと亮は肩を落とす思いだった。

それでも、甚だ迷惑な話であるが、その程度なら時間が解決すると思つたし、恵梨花には多少、嫌な思いをさせるかもとは思つたが、

下手に動けば事態が悪くなると思っていたから傍観することにした。

それに、きつかけが噂であれ、告白までしに来るということは、それだけ好きになっているということであり、そういう連中は噂がどうであれ、いずれ告白しに来る可能性が高かっただろうと亮は見ている。時間が経てば何もせず諦める連中がいたかもしれないが。

しかし、噂のせいで、こういう物騒なことを考える連中が増えるなら、噂をどうにかしたほうがいいのかもしれん、恵梨花の負担を少しでも減らしてやりたいし、と亮が考えた時に、ふと脳裏をよぎった。

この状況はもしかしたら、けっこう都合がいいかもしれないと。

何故なら、恵梨花に対して物騒なことを考える連中が動くきつかけが噂なら、この三人みたいに、まず自分のところに来るはずだと亮は推測する。

そういう連中が自分のところに来たら、片っ端から返り討ちにする。

そしたら恵梨花の身は安全である。

もちろん、それは亮にとって、非常に鬱陶しくて面倒くさいことではあるが、恵梨花の身の安全の方が比べるまでもなく大事である。

なら、やっぱり噂を放っておくか？ と考える。でも、一度考えたせいか、恵梨花の負担を減らしてやりたい気もする。

このような事態になったのは、付き合いをオープンにしてしまったせいだが、それを責めるつもりはない。

噂を全く訂正する気のない自分に、亮は少しだが罪悪感めいたものを感じている。

「な、なあ、桜木……さん？」

亮が思考に没頭していると、遠慮がちに細川が声を上げてきた。思考の邪魔をされた亮は振り向かず、苛立たしげに返す。

「なんだ」

「あ、足が、痛いんですが……」

あからさまに機嫌の悪い声色を聞いた細川はビクっとなると、さも足が痛いんですと言わんばかりに顔を引き攣らせ、恐る恐るそう言った。

三人が正座を始めてから、中々の時間が経っている。慣れていないものには、けっこう堪えるだろう。

亮がチラと見れば、三人とも正座の痛みのせいか、それとも別のところが痛むのか脂汗を掻いている。

「俺の知ったことか……それと、敬語はいらねえ、お前らに敬まれないなんて、かけらも思ってたねえから」

にべもない亮の返答に、三人はより一層顔を引き攣らせる。

「ちよ、ちよっとだけ……」

「うるさい、ちよっと黙ってる……もう俺の許可無く口開くな」

亮が睨みながらそう言うと、三人は抵抗を諦めたのか、大きく肩

を落として押し黙った。

亮は思考を再開して、考えたことを整理し始める。

まず、噂をこのまま放っておけば、この三人みたいに物騒なことを考える連中が自分のとこに釣れる。

この一点だけを見たら、やはり噂を流したやつには、感謝してもいいかもしれないと亮は思った。

恵梨花と自分のストレスは溜まるかもしれないが、恵梨花の安全が高くなる。

次に、どうするか今のところ考えは無いが、噂を少しでもいい方向にどうにかする。

そしたら、恵梨花に告白する連中が減るかもしれないし、自分の貴重な休み時間も還ってくる。

でも、その場合、潜在的に物騒なことを考えているかもしれない連中がそのままになる。

あちらを立てれば、こちらが立たずである。

やはり、ここは放っておくのがベターかと亮は考える。

まあ、今急いで決断を下さなくても、どっちかを考えるのは帰りでも構わないかと思う。

恵梨花も明も待たせていることだし、と考えた亮は次に、この三人をどう始末するかとチラと目を向けた。

伏し目がちに、窺う様に亮を見ていた三人は、本能的な危険を感じたのか、揃ってビクッと体を震わせた。

(そういえば、この三人は覆面野郎に痛めつけられたにも関わらず、

今回のことを企てたんだよな)

それならば、これ以上痛めつけても、もしかしたら抑止力にはならないか？ と亮は考える。

喉元過ぎれば何とやら、である。

今痛めつけて同じようなことは絶対しないと誓わせても、痛みが無くなり、その痛みを忘れる頃には、考えが変わるかもしれない。

では、どうしようかと考えた時、亮は閃いた。

顎に手を添え、閃いたことを、じつくりと吟味する。

すると亮は満足そうに一つ頷くと、三人に振り向いた。

「よし、とりあえず、お前ら携帯と財布出せ、それから」

三人は、とりあえずがそれなのかと引き攣った顔で、亮の話の続きを聞いていた。

「なんか、廊下騒がしくない？」

恵梨花が亮のクラスの女子生徒と仲良くお喋りに興じていた時、不意に誰かが言った。

それを皮切りに全員が静まり、耳を澄ませる。

すると、廊下の奥から楽しそうな笑い声が聞こえてくる。

「これ、さっきの先輩達の声じゃ……？」

一人の男子生徒がそう呟くと、一瞬の間の後、何人かが駆け足で教室を出た。

「恵梨花ちゃん！ 桜木くん、帰ってきたよ！ ……怪我は、してないみたい……」

廊下に出た女子生徒が、首を傾げつつ手招きする。

恵梨花は、大丈夫だとは思っていても、そう聞いて、つい安堵の息が出た。

次に、何故、女子生徒が首を傾げているのかと、恵梨花も小首を傾げる。

恵梨花と明も廊下に出て奥の方を見ると、階段の前で亮の後ろ姿と、恐らく恵梨花が話に聞いた三年の三人の姿がある。

それを見た一同は揃って首を傾げていた。

先ほど聞こえた笑い声はそこからだった。

そして、その笑い声の中心には亮がいるのである。

三年の三人だけが楽しそうに話しているのなら、わかる。

しかし、その笑い声の中心には亮がいるのである。

三年の三人は親しげに亮に笑いかけ、肩に手をやったりとしている。

亮はこちらに背を向け、どんな顔をしているのかわからないが、三年の三人は至って親しげな態度で亮に向き合っている。

多分大丈夫なんじゃないかと思っていたクラスメイト達だが、それを見て狐につままれたような顔になった。

「じゃあ、またな桜木！」

「また、今度な、桜木！」

「じゃあな、桜木！」

クラスメイト達が見ている中で、冷静になると不自然とも思えるほど大きな声で（亮のクラスは廊下の奥にある）、三年の三人がにこやかに、亮に別れの挨拶をした。

すると、亮も手を振り返した。

「おう、じゃあな！……えーつと……、じゃあな！！」

途中の喧きは教室の前で見ているクラスメイト達には聞こえなかったが、亮の返す声には親しげな響きが感じられた。

更に首を傾げているクラスメイト達を尻目に、恵梨花と明には、亮の言葉の途中の間が何かわかった。

（また、名前忘れてるのね……）

（絶対、あいつ、名前覚えてないな……）

しかし、恵梨花と明含め、そこで見ている者達にはわからなかつ

た、いや、見えなかったことがある。

よくよく見れば、三年の三人の顔に浮かぶ、何かに耐えているように浮かび出ている脂汗に、引き攣った口元が。

三人が階段を降りて見えなくなると、亮がこちらを振り向いて、教室に向かってくる。

近づいた亮は少し驚いたように目を丸くした。

「何やってんだ、みんな？」

亮がそう聞くのも無理はないだろう、十人近くが教室の前の廊下で屯たむろっているのだから。

クラスメイト達は顔を見合わせると、男子生徒の一人が代表するように聞いた。

「先輩ら……何の用だったんだ？」

「ああ……、なんか、悩み事があったらしくてな……秘密にして欲しいんだとよ」

だから、詳しくは言えないとの言外の言葉で亮は追及を避けた。

「なんか、ずい分、仲良くなったみたいね……？」

女子生徒が、今見てた光景が信じられないと言わんばかりの顔で尋ねると亮は肩を竦める。

「話してみると、中々いい人達だったぜ？」

苦笑を浮かべてそう言う亮の姿に、女子生徒が不思議そうに眉を寄せる。

「ありがとよ、明、一緒に待ってもらって」

亮が明と目を合わせると、明は肩を竦めるだけで返事とした。

「悪いな、待たせたか？」

亮が最後に恵梨花と目を合わせると、恵梨花は首を振った。

「ううん……、元々、私が待ってもらってたんだし」

「そっぴゃ、そうだったな……じゃあ、帰るか？」

「うん」

恵梨花は微笑んで頷いた。

亮と恵梨花が教室に入って鞆を手に持つと、ふと亮が明に尋ねた。

「明は？　一緒に帰るか？」

すると明は呆れが含んだような目を向ける。

「野暮なことさせんな、二人で帰れよ」

明がこう言ったのには、言葉以外の理由として、Yesと言えば、他の男子も着いて来るかもしれないからだ。

そんな明の懸念に気付いたのか、気付かなかったのか、亮は苦笑

すると、恵梨花と二人並び、共に手を振ると教室から出て行った。

教室に、何とも言えないような沈黙が流れる。

そんな沈黙を破るように一人の女子生徒が、ぽつりと呟いた。

「桜木くんって……けっこう、大物？」

その問いに応える者は誰もいなかった。

そう、否定も、肯定も。

第十七話 とりあえず……（後書き）

どうやら亮くんは三年の人達と友人になることを選んだようです…
…え？ 違う？ いや、そんな馬鹿な…

第十八話 連勝

「それで？ あの三人に何させてるの？」

「俺が何かさせてるのが前提になって話してないか？」

「違った？ ああ、脅迫して何かさせてる、かしら？」

「一つ言っておくが、脅迫されたのは俺だぞ」

「脅迫された後に、脅迫し返したんでしょ？」

「……俺は自業自得と、因果応報について教えてやっただけだ」

「へえ？ ……まあ、君がそう言うなら、それでいいけど……、で、何をさせてるの？」

「……あんた、わかって聞いてるだろ？」

「大体のところはね……、でも、本人からハッキリしたことを聞きたいだけよ」

そう言いいながら梓が悪戯っぽく笑いかけると、亮は面倒くさそうに息を吐いた。

今は亮が屋上で三年の三人と『お話』をした金曜日から、週が明けて月曜日の休み時間である。

先週と同じように恵梨花を迎えに行き、学校まで向かっている途中、いつもの嫉妬めいた視線の中に、僅かだが、不審な思いが籠もった視線があったことに亮は気付いた。

原因は何かわかりきっている。三年の三人と亮が接触したことに

ついで知っていることだとは推測するまでもない。

金曜の放課後のことなのに、耳の早い連中だと亮は内心で呆れ半分、感心半分に、涼しい顔でそんな視線を受け流していた。

ただ、登校中はそんな視線は僅かであったが、教室に入ったらそれは違い、その時点で教室にいるクラスメイト達は全員が知っていた。

その視線の割合は、何があつたのか知りたいといった興味と、事の前後を詳しく聞いたのだろう、怪我もなく笑いながら帰ってきた亮への感心といった割合が半々だった。

そして、こういう時のための亮への突撃隊長として認識され始めている高橋が、それはもうテンション高く亮に質問という名の突撃をする。

亮は朝からそんなテンションについていけず（と言うよりも学校にいる間の亮のテンションが高くなること自体、滅多にない）、辟易しながらも、終始「話してみればいい人達だった」「友達になつた」「殴られたり、脅されたりなどしてない」と答えた。

ほとんど、と言うよりも全て嘘の回答であるが、クラスメイト達からしたら、それ以外の回答を聞いても、今イチ、信憑性に欠けるか、真実味が無いようなものだろう。

それに亮がその三人と仲良さそうにしているのを見ているクラスメイト達がいたのだから、その事実を補完したような形になるので、亮がそう言うのなら納得せざるを得ない。

もちろん、亮がそう答えても、納得いかないように首を捻っている者もいた。が、突っ込んで聞くようなこともなかった。そうなる理由としては、どんな話をしたのか聞かれた亮が頻りに「先輩達の

事情によって秘密だ」と答えたせいだろう。だから納得のいかない部分はその「秘密」の中にあるのだろうとの解に至った。

それでも、亮を連れて行った時は殺気立っていた先輩達が帰ってくる、実に友好的な姿勢を亮に見せていたことから総合して、クラスの亮を見る目が「実はけっこうすごいやつなんじゃ……?」「や」「藤本さんと付き合っているのは伊達じゃない?」などと、上向きに評価を修正されているのは、仕方のないことだろう。

そう、仕方のないことである。

無能の烙印が押されている間は、誰も亮に期待などせず、放っておけば、いずれは「ただ、藤本恵梨花と付き合っている人」という認識が広まってそれで落ち着いただろう。もちろん、それは亮にとって、大変ありがたい歓迎すべき状況である。

だが、今となっては過去の話である。

恵梨花の安全、それを考慮した上で、亮が自分から選択して行動した結果が今である。

クラスメイトやそれ以外の他の生徒達の自分を見る目がいい方向に変わるだろうということは予測していたが、実際に受けると、やはりありがたくないなと亮は朝からため息が止まらなかった。

なぜなら、いい方向に変われば、「何か」を期待されてしまう。

「藤本恵梨花」と付き合うに相応しい「何か」を。

そんな期待にはサラサラ応えようとは考えず（もちろん、応えられないものもある）、尚且つ目立ちたくないという気持ちを持つ亮からしたら、それは注目を集めてしまうだけの、非常にありがたいものではないものである。

しかし、例え、恵梨花の安全を考慮せず、適当に三人を帰らせても、亮が無傷で帰れば、それだけで亮への見る目が変わっただろう。かといって、亮がわざと殴られて怪我をして帰ってくれば、恵梨花が悲しむだろうことは想像に難くない。

結局、恵梨花が悲しむようなことを進んでやる気が起こらない亮にとって、今の状況は三年の三人が来た時点で避けられない、仕方のないものだったのだ。

そう結論に至った亮は、もっと他にやりようがあったかもと過去を悔いるよりも、恵梨花に迷惑がかからず、安全も確保できて、尚且つ、丁度いいラインまで自分への評価を落とす方法は無いかと、前向きではあるが、非常に馬鹿なことに頭を働かせるも、まったくいい方法が浮かばず、未来の自分の平穩具合はどうなるのだろうか、と憂鬱になった。

そんな風に授業時間も含め、いつも通り教室でおとなしく過ごしている、昼休みから一時間前の休み時間に、クラスメイト全員の視線を集めながら、梓と咲がやってきた。

咲が教室に来たのは久しぶりであり、二人揃ってということ、余計に注目を集め、その注目は自然とそのまま亮に移行する。亮のクラスメイト達にとって、これはもう条件反射になりつつあった。

見知らぬ男子生徒に訪ねられるより全然構わないとは思うようになったが、せめてバラバラに来て欲しいと思ってしまうのは亮の我が儘だろう。亮もそれは自覚しているが、廊下からも他クラスの男子生徒の妬みの視線を感じたところで、思わずため息を吐いたのは、仕方のないことかもしれない。

しかし、この時亮は気付いたが、クラスメイトの男子からの視線が、妬みよりも、単純に羨ましいといったものの割合が多く感じられた。

突き刺さるような妬みの視線と比べて、どっちがマシなのだろうかと考えたが、ここはマシになったのだと無理矢理思い込むことで、亮は自らを励ました。

梓と咲は亮の席まで来ると、自席を譲ろうとした明に首を振って断り、手近にあった空いていた椅子を拝借して、梓は亮の横に、咲は明と梓の間に腰を下ろす。

すると咲は、とりあえずといった風に、亮をジッと見る。何かを期待するように。

亮は咲の意図していることがすぐにわかった。

最近、半ば習慣化してきたことであるが、それを、今、この教室でやれと言っているのかと、つい頭を抱えた。

亮は現実逃避気味に、視線をスッと咲から窓の外に向けると、途端に咲から不機嫌な気配が漂い、更には横にいる梓から肘でつつかれる。「早くやれ」と言いたげに。ちなみに明はこちらに向き直って座り、面白がって見ている。

誰も味方はいなかった。

亮は諦めのため息を吐くと、「よう」と言いながら、咲の頭を撫でた。

すると、亮と梓がわかる範囲でだが、無表情ながらに混じっていた咲の顔から不機嫌さが消えて、くしゃりと笑った。

途端に教室がどよめいた。

「お、おお……」

「み、見たか、今の!？」

「な、なんてこった……」

「山岡さんの頭を撫でるなんて……」

「藤本さんや鈴木さんが山岡さんを抱きしめてるところは見たことがあるが……」

「いや、あれは思わず抱きついたような感じだよな……?」

「それでも、男が山岡さんにああいう風に触れるなんて、かつて無かったこと……」

「やっぱり、伊達じゃねえな……」

睨まれるかと身構えていた亮だが、会心の一撃が決まったかのように、亮への評価が若干、変な風にはあるが、上向きに登っていく。

どうやら、三年の三人との接触は、自分が思っていた以上に、クラスの連中の見る目を変えてしまったらしいと亮は察する。

先ほどまで下げる方法を考えていたというのに、思わぬ形で自己への評価を上げてしまった亮は、疲れた様に大きくため息を吐いた。

そんな亮に構わず、咲は上機嫌にトランプを取り出し、その中から一枚抜いて配り始める。

また、ジジ抜きかと思いながら亮が見ていると、明の分も配られている。

そこで明と視線を合わせると、了解といった風に明が頷く。

咲が配り終え、全員がダブったカードを捨て、ジジ抜きが始まったところで梓が口を開き、先ほどの会話が始まった。

「特に変なことはさせてないぜ？ 誰かに俺と会った時のことを聞かれたら『友達になった』と言えって言ったただけだ」

亮が明のカードを抜き、ダブってないかを確認しながら梓に言う。ダブっているカードは無かった。

「ふうん？ ……それだけ？ ……君と恵梨花の仲について、文句あるやつは俺達が相手にする！ とか、言わせないの？」

梓が亮のカードを抜きながら、少し面白がってるような声を出す。ダブったようだ、手札から二枚捨てた。

「そら、どう考えても、『下手』な動きだろうが……あの三人を怖がらないやつなら、ただの挑発行為になる。狙いは俺への悪口でない噂を増やすことだ」

亮が言っている間に、咲が梓のカードを抜く。手札から二枚捨てた。

「やっぱりね……、悪口でない噂が流れたら、そっちに意識が集まるし……恵梨花への告白を減らそうと？」

明が咲のカードを抜く。手札から二枚捨てた。

「まあな……これで、どれだけ減るかわからねえが……あと、俺のところに知らない男子が来るのが減ることも期待に入ってる」

明のカードを抜きながら、亮が相槌を打つ。また、ダブっているカードは無かった。「なぜだ」と亮は小さく呟いた。

「まあ、悪くないやり方ね。噂を修正するのではなく、実際に起こった新しい噂を追加する。ガラの悪い先輩三人が君を訪ねるが、君も三人も『友達になった』と言う。仲良くしている場面も見せている。友達になったのは本当かもしれないが、実際に何が起こったのかと不思議がつて、特に根拠のない悪い噂の勢いが減る」

梓が納得の顔で頷きながら、亮のカードを抜き、手札から二枚捨てて続けて言った。

「それと、他にも狙いあるよね？」

「……何で、そう思う？」

「あの三人の狙いは恵梨花なんでしょ？」

「あんた、知ってたのか？」

亮が若干の驚きを込めて聞いた。若干なのは、「やっぱり知っていたか」という気持ちもあったからだ。

「あたしは、君より長く、そして近く恵梨花と付き合ってきたんだから、知っててもおかしくないでしょ？」

「……そうだな、あんただしな」

亮が変な納得の仕方を見せると、梓は半目で亮を睨んだ。

「君にだけは、そういう風に言われたくないんだけどね」

亮は危険を感じて目を逸らした。

「まあ、いい、続きだ。君はあの三人の狙いを聞いたんでしょ？
ここからはあたしの推測だけど、それなら同じような考えをする人間が他にもいるかもしれない。いるなら、放っておこうなんて考えないはずだ、君は」

少し苛立たしげに梓が言い始めると、亮は自分が屋上で考えたことをまるで見てきたかのように語る梓に、驚きを隠せず目を丸くする。

そんな亮を見て、梓は自分の考えが正しかったことを確認したかのように頷き、更に続ける。

「そして君も三人も、『友達になった』と言っている……君の狙いはまず恵梨花の安全にいくはず……あの三人は評判も良くないし……だから……」

そこで梓は視線を宙に彷徨わせ、ブツブツと呟く。

その様を見て亮は、まさか、と思いながら冷や汗を流す。

すると梓が力強く頷いた。

「わかった……、君、自分と三人を餌に見せるつもりでしょ？」

そう言いながら妖艶に微笑んで見せる梓に、亮はあんどりと口を開いた。

(一体、どういう思考回路してるんだ、この女は)

梓が言った言葉は短いものである。だが、その言葉は亮の狙いを完全に把握しなければ出せない、簡潔にして、要点のみの言葉である。

自分の考えを見事に見透かされ、愕然としている亮を見て、梓が不敵に微笑んだ。

「その様子だと当たり前みたいね」

前にも思ったことがあるが、本当にエスパーかもしれんと亮は、今日何度目かわからないため息を吐いて、頭かぶりを振る。

「まいったぜ……けど、本当に……」

「何？」

続きを促す梓に、亮は苦笑を浮かべて言った。

「あんたが、味方でよかったぜ」

すると、梓は一瞬だが目を瞠ると、またも不敵に微笑んだ。

「君に言われると光荣だね」

そういえば、これ前にも言われたなと思い出した亮は、クックと喉の奥で笑う。

「まあ、無理に隠そうと思ってた訳じゃなかったから、あんたに知られても問題はないんだが……」

「だが？」

「恵梨花には言うなよ」

「……無闇に心配かけたくないから？」

少し考えてから梓が問いかけると、亮は「そんなところだ」と言いたげに肩を竦めた。

「ふうん……？ まあ、いいけど……、手助けが欲しくなったら言
ってちょうだい」

「そいつは心強いな」

亮が小さく笑って本心からの言葉を投げると、梓は肩を竦めながら「まあ、君に助けがいるのか疑問ではあるが……」と呟いてから、亮の手元を指差した。

「気付いてないみたいだから言うけど、負けてるよ」

そう言われてから亮は、自分の手に残る一枚のカードを見てから周りを見渡す。もう誰もカードを持っていなかった。

「いつ終わった？ ……いや、それより、また負けたのか、俺は…
…」

話の合間にカードを抜いては、やっとの思いで手札を減らしていたのは覚えているが、周りが上がっていることに亮は気付かなかった。

「……君、これで咲に何連敗？」

少し呆れの目を向ける梓に

「先々週と先週と見てたけど、亮、ジジ抜きで一回も勝ってないよな？」

亮と梓の会話を黙って聞いていた明が不思議そうに首を捻って、
そう言い

「……私の連勝圧勝」

咲がほんの僅かに口の端を吊り上げる。それは嬉しそうにも、少し勝ち誇っているようにも見える。

この教室で初めて咲とトランプをした日から、先週では昼休みに屋上でする時もあつたが、亮は一度も咲にジジ抜きで勝っていない。

余りに勝てなくて、一度、ババ抜きにしないかと亮は提案してみたが、咲は首を振り断固として却下した。他のゲームも同様である。

とにかく勝てない。恵梨花や梓より早く上がる時はあつた。ほんの僅かだが。でも、咲には勝てない。

運の要素で絶対的に咲に負けてるのかもしれない、いや、自分の運が悪いんだろうと亮は思い、少し目を遠くした。傍目からは突然、美少女と付き合い、望外の運に恵まれているようにしか見られない。ない亮だが。

「話聞いてたけどな、亮。俺も何か手伝えることあつたら言えよ？」

梓との会話で大体のところを察したらしい様子の明が、ふいに言

った。

その時、少し苦笑混じりだったのは、亮が何を考えているのかわかったからだろう。

「ああ、ありがとよ、明」

亮は遠くしていた目を戻し、素直に感謝の言葉を返した。

すると咲がこちらを見ながら、自分を指差している。

会話の流れから意味は明白である。亮は笑って頷いた。

「ああ、咲も頼らせてもらうからよ」

それを聞いた咲は、ウンウンと頷く。

話の内容を咲が理解しているのか亮には不明であるが、敢えて何も聞かなかった。

梓がそんな咲を見て和むように微笑むと、亮に振り向いた。

「一応、聞いておくが、君に危険は……」

「無いな」

途中で遮って即答する亮に、明と梓が呆れの目を向けた。

第十八話 連勝（後書き）

色々、不明な点もあるかと思いますが、追々に……
まあ、わかる人もいるんだろうとは思いますが……

第十九話 何を？

「でかい欠伸あくびだな」

階段を降りながら、隠そうともせずになきな欠伸をした亮に、隣にいる夏山が苦笑混じりに呟いた。

「眠いんだから仕方ないだろ」

気怠げに返す亮に、一步前で階段を降りている川島が振り返って見上げる。

「亮って、何でいつもそんなに眠たそうなんだ？ ……いや、眠たそうと言うより、実際にいつも寝てるけど」

「成長期だからだろ」

「ああ、なるほど……いや、それは俺達も、いや、高校生なら全員に言えることだろ！」

思わず納得しかけ、期せずしてノリ突っ込みをした川島によって、一緒に階段を降りていた面々に笑い声上がる。

「けど、何で、いつもそんなに眠たそうなんだ……？ あ、お前、まさか藤本さんと毎晩……」

「黙れ、アホ東」

亮が途中で東の言葉を遮ると、東はきょとんと不思議そうな顔をした。

「電話してるんじゃないのか？」

「……すまん、東」

「？ 何で謝るんだ？」

「気にするな」

そういえば、ここにいる友人達は滅多に下ネタなど言わないなど、早トチリした亮は『アホ東』と言われても怒らなかつた友人に手を振った。

「でも、電話とかするの、亮って？」

亮の早トチリに、夏山、川島と笑い合っていた明が問いかける。

「………そういえば、したことないな」

亮は少し考えて、自分でも今気付いたような声で答えると、周りにいる全員が、呆れと、勿体無いといった感情が織り交ざつたような目を亮に向ける。

「……メールはたまにしてるんだがな」

そんな目を向けられた亮が弁解するように呟くと、周りから一斉に、はあ、とため息を吐く音が聞こえる。

毎日、朝の登校時と昼休みと下校時、一緒にいて会話していると、いつの間に、電話をしてないだけで何故、そんな反応を返されなくてはならないのかと、亮もため息を吐くと、ふと顔を上げた。

「止まれ、明」

五人の先頭で階段を降り、コの字型の階段の折り返し地点の踊り場で、下に向かおうと体の向きを変えた明が、亮の言葉に注意をとられ、足を止めて目を上げる。

その瞬間、明が進もうとした先を、体操着を着た見知らぬ男子生徒が勢いよく階段を駆け上ってきた。一人だけでなく、二人、三人と騒ぎながらそれが続く。シャツのゼッケンの色から、一目で一年というのがわかる。

亮が明を止めなければ、明とぶつかり、踊り場に来ていた明は尻餅をつくだけですんだらうが、駆け上ってきた生徒は、下に転げ落ちたかもしれなかった。

そんなことを知る由もない男子生徒達は亮達に気付くと、勢いを少し落とし、亮達を避けて階段を登って行った。

それを見届けるように見上げていた夏山が振り返って明を見下ろす。

「危なかったな、明」

「俺よか、あいつらの方が危なかったけどな……けど、助かったよ、亮」

「おう」

そう返事をしながら、何事もなかったように、再び階段を降り始めた亮に夏山が首を傾げる。

「さっきの連中、一年だったな……、でも、何で亮わかったんだ？」
「何が？」

「明を止めただろ？ あのまま明が降りてたら、ぶつかってこと」

夏山がそう言うと、その場にいた全員が、確かに、といった風に亮に目を向けると、亮が肩を竦めた。

「足音と話し声が聞こえたんだよ」

「へえ？ ……よく聞こえたな。俺は全然聞こえなかったのに」

川島が少し驚いたように目を丸くすると、またも亮が肩を竦める。

「俺達が喋ってたからだろ……、そうでなかったら聞こえてるって」

「ふうん？ でも、亮は聞こえたんだよな？」

「耳がいいだけだ」

苦笑混じりに亮が答え、そういうものなのかと川島が首を傾げると、夏山が不機嫌そうに眉を寄せた。

「しかし、テンション高い一年だったな……ちゃんと、前見るよな」

「ああ……、でも、こういうイベントの時って、無駄にテンション高くなるやつっているよな」

川島が相槌を打っては、笑いを誘うようにそう言うと、東が笑って頷いた。

「ガキだよな、ガキ」

すると、東以外の全員が押し黙る。

それを東に言われたら、たまらないよなといった空気が漂っていた。

「それにしても、今日はいい天気だよな」

そんな空気を替えるように、明が言うと川島が相槌を打つ。

「ああ、絶好のってやつか？ まあ、俺は体育館がメインだから関係ないけど」

ガハハと川島が笑うと、亮が首を振った。

「運動場がメインの俺には天気がいいのは歓迎だな……今日はいい休日になりそうだ」

亮のその言葉の真意がわかった面々は揃って呆れた目を向ける。

呆れの目をそのままに、夏山がクイッと眼鏡の位置を整えた。

「亮……今日は休日ではなく、体育祭だぞ」

「あー、負けちゃったねー」

恵梨花がハンドタオルで汗を拭き、荒れる息を整えながら残念そうに呟いた。

「そうね……流石に、現役バレエ部員三人がいるクラスには勝てなかったわね」

恵梨花ほどではないが、荒れた息を整え、同じく汗を拭きながら梓が頷く。

今日の恵梨花は運動のためか、いつも下ろしているだけの髪をサイドにアップしている。亮お気に入りのサイドポニーだ。

対して梓はいつも通り、ロングの髪を簡素に一括りにしているだけである。

服装は汗で張り付くTシャツに、蛍光がかった薄緑の膝丈の短パンといった、ごく普通の体操着姿だが、制服よりも薄着である。

そのせいで、恵梨花の胸部はいつにも増して主張が激しく見えるが、バランスの悪さを感じさせない。梓はスレンダーな体つきであり、そのラインの美しさを魅せている。

そんな格好を見慣れていない、この体育館にいる他クラスの男子生徒達の視線を集めること夥おびただしい。二人共、運動を終えたばかりなので、頬が紅潮しているのも、その要因の一つだろう。

そんな視線を意識したからか、そうでないのか、汗を拭いた二人は早々と、冬用の長袖を羽織り、男子達に残念そうなため息を吐かせた。

恵梨花と梓は先ほどの会話からわかる通りに、バレエの試合に参加して負けた。

二人共、運動神経が良く、同じクラスの女子バレエ部員から、惜しめない賞賛を受けるほどの活躍を見せるも、日々、バレエの練習

をしている部員を多く擁するクラスには勝てなかった。

試合はトーナメント形式で、それはどの種目も同じである。各学年八クラスずつあるので、三回勝てば、その種目では優勝となる。

途中で負けようが三試合行われ、その場合、同じ勝ち星、負け星を挙げたクラスと試合を行い、一位から八位をキツチリ決めることになる。

恵梨花のクラスの女子バレーは、一度目の試合を勝ち、先ほどの二度目の試合で負けた。

つまり、昼休みを挟んだ次の試合は三位決定戦を行うことになる。

優勝はもう無理でも、次の試合は負けるもんかと、恵梨花が静かに闘志を滾らせていると、バスケのコート脇にいる知った顔に目が止まった。

「小路くん」

明を見て、呼びかけるでもなく呟くと、視線を感じたのか、明が振り向き恵梨花と目が合った。

目を離すことなく恵梨花が手を振ると、明が少し苦笑しながら手を振り返す。

「彼はバスケなんだ、亮くんと一緒じゃなかったのね」

恵梨花が手を振っている先を見た梓が、少し意外な念を込めて呟く。

「咲が私達と違ってソフトに行ってるのと一緒じゃない？」

「まあ、そうね。二人共、馴れ合うような男でもなさそうだし……ちよつと話しに行こうか」

梓がそう言うと、二人で明のいるところに向かった。

「惜しかったね、さっきの試合」

「見てたの？」

「こつちも試合してたから、合間に見えたっただけだけど」

「そうなんだ、そつちのクラスはどう？ 勝ってる？」

「一回目勝って、さっき負けたよ」

「私達と同じね」

明と一緒に話していた夏山、川島、東にも軽く挨拶をすると、お互いの進行状況を明と恵梨花が話し合う。

ちなみに東は恵梨花が近づいて来た瞬間、夏山と川島によって地面に拘束されていた。恵梨花も面白そうに見ていた梓も、そのことについては深く触れるようなことはしなかった。

「そつちのクラスのサッカーはどう？」

梓のその問いに、恵梨花は自分では気付いていないだろうが、若干、期待に満ちた目を明に向ける。

恵梨花は亮が出ているであろう、サッカーの試合を見に行きたかったが、自分の試合と委員の仕事に時間をとられ、未だ見に行つて

おらず、試合結果も聞いていなかった。

向けられる目の意味に気付いた様子の明は、苦笑混じりで梓に答える。

「さつき、一回目は勝ったって聞いたよ、もうすぐ二回目だから、そっちの応援行こうかって話してて」

「じゃあ、一緒に行かない？ あたし達も、そっち見に行くつもりだったし……ねえ、恵梨花？」

梓が確認するように恵梨花に振り向くと、恵梨花が嬉しそうに頷く。

それを見た明以外の男子の面々は、少し不思議そうに首を傾げて、互いに顔を見合わせると、問うように明に目を向ける。

すると明は、少し困ったように眉を寄せて静かに首を振った。

既に意識が体育館の外に向いていた恵梨花はそれらを見ていなかったが、梓はしっかり見ていたようで、「やっぱりか」といった風に、軽いため息を吐いた。

恵梨花と梓、明達がサッカーのコートに来たら、試合は既に始まっていた。

早速、自分の好きな人を探した恵梨花が不思議そうに首を傾げる。

「……あれ？」

「どうしたの、恵梨花？」

「……亮くん、どこ？ 試合、出てる？」

「……見る限り、出てないわね」

「……なんで？」

ここで、一緒に来ていた夏山が話に入った。

「えっと……藤本さん、亮が最初から試合に出てると思ってた？」

「え？ ……うん……」

「あ、やっぱり……？」

恵梨花の答えに、夏山、川島、東が納得したように頷く。それと同時に、少し気の毒そうな顔になった。

それを見た恵梨花が眉を寄せて首を傾げる。すると、先ほどまで涼しい顔で返していた梓が、ここで小声になって恵梨花に尋ねた。

「恵梨花、彼はどういう人だっけ？」

「え？ ……あ……」

突然の質問に、一瞬戸惑い気味だったが、内容を考えた恵梨花は途端にはっとなる。

そんな恵梨花に梓が頷く。

「うん。それと彼は体力測定とか、どうしてたっけ？」

「……手を抜いてた」

「そう言ってたね……、じゃあ、体育とか、どうかしら？」

「……」

恐らく、それも手を抜いているのだろうと、恵梨花は簡単に推測できたが、答える気になれず肩を落とす。

この会話が聞こえていた訳ではないが、タイミングよく夏山が補足するように躊躇いがちに言った。

「亮って、あんまりサッカーって得意じゃないから、ベンチスタートだよ?」

そう言いながら、指差すは亮のクラスメイトが試合をしているコート脇で、少し斜面になっている芝生である。

そこで亮が試合を見ることもなく、寝転がり、熟睡している様が見えた。

明らかにやる気がない。恵梨花は呆れた顔になった。

「てか、あいつ、スポーツ全般、あんまり得意じゃない……、よな……?」

川島も同じく躊躇いがちに呟くように言った。

友人の彼女に向かって、余り言いたくないという気持ちがありありと出ている。

ここで恵梨花は、やっぱりそうなのかと、ため息を吐く。

クラスメイトからそういう認識なら、ベンチスタートは仕方ないかもしれないが、と考えていると明が少し困った様子で尋ねた。

「藤本さん、亮から今日のこと何か聞いてなかったの?」

「うん、聞いたけど……」

「本当に? どんな風に話してた?」

「えっとね……」

恵梨花は、先週に亮と交わした話を、じつくりと思い出した。

「亮くん、体育祭、何に出るの？」

「……サッカー」

欠伸を噛み殺して、亮が答える。

「そうなんだ……あ、ポジションとか、もう決まったの？」

「ああ、ゴールキーパー」

チームの守りの要と言っていていい、大役である。

それを任された亮に喜びながら恵梨花が激励する。

「へえ……すごいじゃない！……頑張って守ってね!!」

「もちろん、守るとも」

亮は力強く頷いた。

この時の亮の様子から、試合に最初から出るものだと思い、その時は応援をいっばいしようと考えていたのも恵梨花は思い出した。

思い出した会話を一字一句、間違えずに恵梨花が話すと、明と梓は顔を伏せて肩を震わせ、夏山、川島、東は頬を引き攣らせている。

そんな面々を恵梨花が訝しげに見ていると、梓が笑いを噛み殺しながら恵梨花の肩に手を置いた。

「んん、恵梨花……、ちよつと、亮くんと話してきたら？」

「……試合中だけど、いいのかな？」

「いいんじゃない？ 他のクラスのベンチメンバーも他クラスの友

達と話しているみたいだし」

それを聞いて周りを見渡すと、梓が言う通りの人達が、ちらほらと見え、恵梨花は頷いた。

「じゃあ、行ってくる」

第二十話 不発

「ねえ、亮くん」

周囲の視線を多めに集めながら亮の傍まで来た恵梨花が、寝ている亮にしゃがんで呼びかける。

亮は軽く身をよじりながら、閉じた目をそのままに眠そうな声を出した。

「……なんだ、恵梨花？ ……もう昼飯の時間か？」

「……違うわよ。ちょっと、起きてよ」

恵梨花の声が呆れ気味になったのは仕方のないことだろう。それにも関わらず、亮は

「……違うなら、昼休みまで寝かせてくれ」

言いながら恵梨花に背を向ける形で寝返りを打つ。

そんな亮に恵梨花がムっとなるのも仕方のないことだろう。

「もう！ 自分のクラスの試合中でしょ！？ 寝てないで、応援ぐらいしたら!？」

そう言いながらユサユサと亮を揺り起こす恵梨花。

しかし、亮は片手を上げてヒラヒラと動かしてこっぴどく応える。

「男の俺の声援なんて、連中には何の力にもならねえし、期待もしてないから、いいんだって」

「もう！ 後で出番あるんじゃないの！？ こうやって寝てたら、すぐに動けないでしょう！？ とりあえず、起きたら！？」

ベンチスタートといえど、クラスでやる試合なのだから、少なくとも出番があると考えるのは、自然な流れである。だから、恵梨花はこう言ったが

「……何言ってるんだ？ 俺の出番なんて無いぞ？」

意外な念を籠めて返ってきた亮の言葉は、恵梨花の考えを否定するものであった。

「……え？ 何で……？」

少し困惑気味に恵梨花が問う。

「何でって……俺は運動神経も悪いし、サッカーは下手だから」「からな、じゃなくて、そう思わせてるんでしょ？」

「……運動神経に関してはたしかにそうだが。でも、そう思われるから、俺の出番なんてない」

「それでも、クラス対抗なんだから、みんな少しは出番あるんじゃないの？」

「……まあ、そういう空気は確かにあるな。でも、出番が無くても、まるで気にする様子も無く、寝ている俺みたいな人間には当てはまらないだろ」

こういったクラス一丸となつてのイベントの間、運動神経が悪く、

ベンチスタートの者が居心地悪そうにしていれば、空気が悪くなる時がある。

だから、ほんの少しでも試合に出てもらい、そこで汗を掻いてもらえば、その居心地の悪さは減り、クラスの空気も悪くなくなる。そういった気遣いのようなものが、クラスマツチにはある。

しかし、亮の言う通り、最初から寝ていて、やる気のかけらも見せないクラスメイト相手に、そんな気遣いは不要である。

亮は恵梨花が腹立つほどに自分を客観的に見ていた。

「……じゃあ、ゴールキーパーになったのは、何で？」

ずっと目が細くなる恵梨花だが、亮は気付かずに返す。

「ドリブルがろくに出来ない（と思われる）人間にはうってつけだろう」

亮のクラスはサッカーをする面子が決まった時に、サッカー部の相馬と小島が中心になって、ポジションを決め始めた。

そんな時、運動神経がいい者や、日頃、休み時間にサッカーをして遊んでいる者は、サクサクと決まっていくな。

運動神経が悪いと思われる者は、後になって適当に決められていくが、その時、もちろん後に決められる亮が、控えめにゴールキーパーをやると宣言した。

それは、サッカー部の小島がゴールキーパーをやると決まった直後であり、そんなタイミングであるからして、その場において空気を読んだ面子は亮の真意を見抜き、快く承諾した。

「……ゴール守るって言ってたじゃない」

恵梨花の声色から機嫌の悪さを感じ取った亮は、なぜだ、と首を傾げながらむくりと体を起こす。

「？ ……ゴールを守るなんて言っていないだろ？」

「じゃあ、守るって何よ!？」

亮は頬をポリポリと掻きながら真顔で答えた。

「ベンチ」

そう、クラスメイトが読んでくれた亮の真意とは、ゴールキーパーの補欠^{ベンチ}である。

常日頃から寝てばかりいて、やる気も運動神経もない（と思われる）亮なので、守備の要であるゴールキーパーをやると宣言するのは『気遣いなく出番は不要である』と言っているのと同義である。

恵梨花は沸々と怒りが沸きあがるのを感じながら、先週の亮との会話を再度思い出した。

「そうなんだ……あ、ポジションとか、もう決まったの？」

「ああ、ゴールキーパー（の補欠）」

「へえ……すごいじゃない! ……頑張って守ってね!！」

「もちろん、守るとも（ベンチを）」

つまりは、こういうことである。

「あの会話の流れで、そう思う訳ないでしょ！？ 何よ、それ！？ 応援いっぱいするつもりだったのに！！」

恵梨花の応援は嬉しいが、それはありがたくない状況を引き起こすだろうなど、恵梨花の怒声に少し怯みながらも、亮はそう考えた。

「ちょ、ちょっと待て。何で、そんなに怒ってんだ？」

「亮くんが、サッカーするの見るのを楽しみにしてたからよ！ 悪い！？」

「いや、悪くはないが……、ああ、そうか……」

ここに来て、ようやく亮は恵梨花の怒っている原因を理解する。これ以上、怒らせてお母さん化しない内に手をつたなければと亮は思った。

「いや、でもな、恵梨花、少し考えてみてくれ」

「何を！？」

暴れ馬を宥めるかの如く、両手を前に出し、冷や汗を流しながら亮が淡々と言う。

「えつとだな……こういうイベントの日に、俺が頑張ってサッカーをして爽やかに汗を掻く姿がイメージできるか？」

この言葉の効果は大きかった。

途端に恵梨花は押し黙って、機嫌悪そうに眉を寄せ、唇を尖らせて答えた。

「……………できない」

イメージした時に、余りに似合わないと思ったのだろう、それが恵梨花を少し冷静にさせた。

そのことがわかった亮は、ホ、と安堵の息を吐く。

「でも……………！ はあ、楽しみにしてたのにな……………」

これ以上、誤解するような言い方をした事を責めても仕方ないと恵梨花は思ったのだろう。

それに、体育祭の話題を出した時から、応援することばかりに頭がいって、そのせいで亮の性格を忘れていなければ、こういうことになることも予想できたのだ。

「まあ、来年の楽しみということにしてくれ」

しょんぼりと拗ねてる様子の恵梨花に、亮が軽い調子で言った。

「……………来年は、ちゃんとやるの？」

三角座りをして膝小僧に頭を寄せ、若干上目遣いになった目を亮に向けて恵梨花が問う。

その仕草が可愛くて、少しドギマギするも、亮は顔を顰め、首を振りつつ重々しく言った。

「それは、わからんな」
「もう！ 何よ、それ！！」

亮の言葉に怒るよりも言い方がおかしく感じたようで、少し吹き出しながら笑顔でパシパシと叩いてくる恵梨花から、お母さん化は回避できたようだ、亮は安堵の息を漏らす。

このまま、話題を体育祭から逸らそうと、さっきから気になっていたことを口にする。

「久しぶりだな、それ」

「え？」

「その髪型」

そう言いながら亮が恵梨花のサイドポニーを指差すと、恵梨花が先のしっぽに触れながら首を傾げる。

「体育の時とか、時たま学校でもしてるけど……」

「俺が見るのは、あの日以来だな」

『その髪型』と『あの日』から、二人が連想するのは決まっている。

「前に……映画に行った日以来……？ そっか……、そういえば、そっか」

その時の何を思い出したのか、恵梨花が薄く頬を紅潮させ、はにかみながら頷く。

そんな恵梨花の様子と、久しぶりに見た可愛さ割り増しの髪型の

せいで、直視するのは危険と判断し、亮は視線を宙に向ける。

多少、自爆を招いた感が否めないが、ベンチの話題について頭から離れ、機嫌もよくなったので良しとすることにする。

しかし、そこで亮は気付いた。

自分のクラスが試合をしているコートから、普段以上に強い突き刺さるような視線を。

そろそろと、そちらを見れば、試合をしているコートからクラスメイトと対戦相手チームが、こちらに聞こえそうなほどギンギシと強く歯を噛みしめ、プレイをしながら、時折こちらを強く睨んでいる。審判役をしている他クラスの生徒まで。まるで親の敵を見るかのようにである。

原因は隣に恵梨花がいるからだろうと亮は思ったが、少し違う。

亮と恵梨花は痴話喧嘩みたいなものをしていた訳だが、傍^{はた}から見ると、いちやついているのと、そう変わらない。

それも、恵梨花の機嫌が直った後は、尚更である。

更に言えば、クラスメイトが必死でサッカーをしているコートの横で。

恨まれるように睨まれても仕方のない所業^{じやくご}である。

自分のことであるが故、そこまで分析出来なかった亮だが、見なかったことにして、再び芝生に横になる。

「もう……、出番が無いにしても、せめて起きて見てたら？」

「……今日、ゆっくり寝れることを楽しみに学校来たんだ、昼休みまで寝かせてくれ」

隠そうともしない呆れを声に乗せた恵梨花に、横になった瞬間に、もう眠そうな声を出す亮。

恵梨花は軽くため息を吐くと、目を閉じている亮の顔を見た。そういえば、寝顔を見るのは初めて二人で出かけた時以来だと、その日のドキドキ感を思い出しながら、恵梨花は試合観戦をするでなく亮の顔を見つめ始めた。

それに対して、至近距離で見られていることに目を閉じていても気付かないはずのない亮である。

少し、どころでない居心地の悪さを感じるが、「やめてくれ」とも言えず、無理矢理寝ようとした。

その瞬間である。

「恵梨花!!!」

焦燥を含んだ梓の叫び声が恵梨花の耳に届いたと同時に、いや、それより早くに亮がガバッと素早く身を起こした。

突然の亮の動きに目を丸くする暇もなく、荒々しく亮が恵梨花を抱き寄せ、そのせいで恵梨花は亮の胸元にぶつかった。

何が起こったのかわからない恵梨花の耳に、今度はバシン！と

いった大きな音が響く。

恵梨花がその音の大きさに、ビクっと体を震わすと、頭上から気遣わしげな亮の声が聞こえる。

「大丈夫か？」

そう問われても何が起こったのかわからない恵梨花は、そろそろと声のした方向に目を動かす。

そこには、至近距離で自分を気遣わしげに見る亮の目があり、その目の奥の光からいつも以上の優しさを感じて、心臓が跳ねるようになるときめく。

次に目を先ほど大きな音がした右方向に向ければ、亮が伸ばした左腕、とその先にサッカーボールが掴まれているのが見えた。

そこで目を丸くした恵梨花は状況を理解する。

亮に庇われなければ、サッカーボールが自分に当たっていたのだと。

「うん、大丈夫……、亮くんは？」

「いや、俺は問題ねえよ……」

安堵にも似た苦笑を含んだ返事に、恵梨花も安堵の息を吐く。

「おーい！！ すまん！ 大丈夫かー！？」

コート上からこちらに駆け寄りながら、焦った表情で気遣わしげ

な声を発するのは、亮のクラスの対戦相手の生徒である。

「ああ……気づけるよ」

そう言いながら、亮がボールを放り投げる。

そのボールを胸元でトラップしてから、男子生徒が頭を下げる。

「すみません、藤本さん……俺の蹴ったボールが、跳ね返ってしまつて……」

「いや、俺の跳ね返した方向が悪かったんだよ……よく捕ってくれたな、助かったぜ、桜木……悪い、藤本さん」

そう礼と謝罪をするのは、同じく走ってきた亮のクラスメイトの相馬である。

軽く手を振って、ボールを捕れたことに「たまたまだ」と返す亮に

「うっん、私は大丈夫だから……」

と、首を振って返事をする恵梨花。

「そうか、よかった……」

相馬が安堵の息を吐きながら、二人を見て顔を少し赤くする。それに恵梨花が小首を傾げる。

それから相馬は亮だけを見て、何かを言おうとするも、後ろから呼ばれるクラスメイトに振り向き、何も言わずにそのまま走って行った。

「？ よく捕れたな、桜木のやつ……」

「なあ、弾くならともかく」

「いくら桜木でも、藤本さんのためなら必死になるってか？」

「そんなところだろ」

「？ ……なあ、あいつ、ボール捕る直前まで、寝てなかったか？」

「……いや、ないだろ、それは」

「直前まで寝てて、どうやって反応するんだよ」

「いや、鈴木さん、叫んでたろ？」

「……それにしても、寝てたら間に合わないだろ」

「だよなあ……？」

「それにしても、最近の桜木って……？」

「……なあ……？」

コート上で男子生徒達が腑に落ちない様子で、呟き合う。

幸か不幸か、コートにいない亮には聞こえなかった。

「本当、頼りになる男ね……」

コート上の男子生徒達とは対照的に、安堵の息を漏らしながら梓

が呟く。

しかし、言葉の調子とは裏腹に、もう少しでボールが恵梨花にぶつかりそうになったことに、心臓が強く脈打っている。

「鈴木さんが叫ぶより、動くの早くなかった？ 亮」

頷きながら、驚きも含んだ疑問の声を発する明。

「ええ……そうでなければ、恵梨花にぶつかってたわ」

「……我が親友ながら……本当にすごいな、あいつ……」

驚嘆と呆れの成分が半々の割合の声を出しながら明が首を振る。

「本当に……、それより、いつまで、あの場所で抱き合っているつもりかしら？」

本人達は気付いていないだろうが、未だ抱き合っている亮と恵梨花を見て梓が首を傾げる。

正確には亮が片腕で抱き寄せているだけなのだが、傍から見ると抱きしめ合っているように見えなくもない。

「あ、離れた」

明が微笑と共に呟く。

言葉通り、二人が状況に気付いて、慌てて離れたのである。

離れた距離で見てもわかるほど、本人達の顔は真っ赤である。

「ああ、恵梨花、可愛い……」

梓がうつとりと呟く。

「おい、何だったんだ、さっきの亮は？」

「あんな勢いのあったボールを片手で捕ったよな？」

「てか、めっちゃくちゃ早く動かなかったか？」

「最近の亮は、本当に驚かされてばかりだな……」

そう呟き合うは、亮が恵梨花を庇った時から、目を丸くしていた川島と夏山である。

「火事場の馬鹿力じゃないか？」

二人の会話に明が振り向く。

「いや、そうは言ってもな……すごいぎじやね？」

首を捻る川島に

「そつだよな……東は、どう思う？」

夏山が振り向くと、東は首を傾げる。

「え？ ……てか、亮って、元々すごいやつだろ？ あれぐらい楽勝だろ」

そう言いながら笑う東に、川島と夏山が眉間に深い皺を刻む。

この東の発言に、一番の反応を見せたのは明である。驚きに目を丸くして東を凝視する。

「……ん？ 何だ、明？」

首を傾げる東に、明は弱々しく首を振る。

「……いや、何でもない」

どれだけわかって言った発言かわからないが、アホは侮れんと思じみと明は思った。

「それにしても……見事なキャッチだったわね」

梓も東の発言に少し驚いたが、顔に出すようなことはせず、思い出すように呟く。

「うん、本当に……ゴールキーパーやった方がいいのにな」

「……小路くんも、そう思う？」

小悪魔の如く梓が微笑みかければ、それに負けずに明が微笑み返す。

「思うね」

この二人を背後から見ていた川島と夏山は、二人の背中から何か黒いものが吹き上がるように感じて思わず冷や汗を流した。

「あ！ 咲！ ちょうど、よかったわ！」

そう言って梓が手を振る先には、こちらに向かってくる咲がいる。

咲が来るのを待たずに、梓が咲に駆け寄ると、咲に耳打ちをする。

遠目ながらにフムフムと頷いている咲と梓の二人を見た明は、かすかに笑みを浮かべて小さく呟いた。

「やっぱり、面白くなってきたな……」

第二十一話 魂の叫び

「あ、咲」

再び眠り始めた亮を見つめていた恵梨花が、こちらに向かってくる咲に気付いて顔を上げる。

「ソフトはどうだった？」

恵梨花が問いかけると、咲はビシッと片手の親指を突き立て、サムズアップ。

「勝ったの？」

微笑する恵梨花に、咲が小さく首を振る。

「じゃあ……？」

勝ってないのに、その親指は何なのかと恵梨花が小首を傾げると、咲は小さいながらも嬉しさの籠もった声を出す。

「……ヒット打てた」

チームが負けても、そう言うのは運動が苦手の咲には、余程嬉しかった証拠だろう。

それがわかった恵梨花はクスリと微笑んだ。

「よかったね」

コクリと頷くと、咲は亮の足元まで歩みを進める。

恵梨花が首を傾げて咲の行動を見守る中、咲が亮の体を跨ぎ、両手で亮の両手首をそれぞれの手で掴んだ。

「咲……？」

恵梨花が訝しげな声を上げるが構わずに、咲が亮の両手を引つ張る。

「……おい、何だ、咲」

咲がいることに気付いていた亮は、抵抗することなく引つ張られるままに体を起こし、不機嫌そうな声を出して咲を見上げる。

咲が小柄なせいとか、体操着姿は妙に子供っぽく見える。しかし、体には女の子特有のしつかりとした起伏のラインがあり、他人には窺えない表情と相俟ったせいなのか、妙な魅力がある。

それでも、その姿はいつも以上に小さく見え、普段より庇護欲を感じさせられた亮は強く口に出せなかった。

そんな亮に咲は無表情のまま、まあまあといった風に片手を前に出しながら、亮の背後に回る。そこまで行くと、立ち止まり、しゃがんで亮の背中に背中合わせにもたれた。

「……なあ、本当に何してるんだ、咲」

咲のいきなりの行動のせいで、先ほどよりも強く集まる視線に頭が痛くなりながら、首を後ろに回して亮が問いかける。

咲は首を横に振って応えるだけで、何も言わない。

「……休みたいだけ？」

恵梨花が羨ましそうな目で尋ねると、咲はコクと頷いた。

背中に重みを感じながら、亮が重くため息を吐く。

「なあ、咲、休める場所なら、他にもあると思うんだが……」

亮がそう言うも、咲は首を振って拒否を示すだけである。その際に「んー」と、間延びした気持ちよさそうな声が漏れる。

どうやら、思った以上に亮の背中にもたれるのが居心地よかったようだ。

顔は満足気で、気持ちよさげに目を閉じている。

そんな咲から亮はふと、でかい猫に懐かれているような気分になった。

「……満足したか？ そろそろ、俺は寝転がって、睡眠を再開したいんだが……」

首を回してそう言う亮に、咲はまたも首を振る。

「……しばらく、このまま……」

その声が少し眠そうなことから、これは下手したら昼休みまで、この体勢のままではと亮の頬が引き攣る。

もたれられるのが疲れるとか、そういうのではない。

咲がいることと、密着しているせいで増加する一方の突き刺さるような視線、プラス、自分の睡眠時間の減少のためだ。

「あら？」

更には追い討ちをかけるように、梓までやって来た。

楽しそうな顔で発された声は、咲を見てのものである。

「……あんたまで、来たのか」

げんなりとした顔になる亮。

「恵梨花と咲のいるところに、あたしが来るのはおかしくないと思っけど？」

梓がもつともなことを言いながら、いそいそとポケットから携帯を取り出し、咲に向ける。

「いや、それをおかしいとは言わねえが……」

一応、ここはうちのクラスのベンチメンバーの待機場所なのだが、と言おうとするも、それより前から恵梨花がいるし、よく見れば、他のクラスのベンチメンバーも他クラスの生徒と話しているしで、

亮は言っのをやめてため息を吐いた。

それより、梓が来たことにより、三人の美少女が集まったこの場所の注目度が、洒落にならないことになっていることに亮は気付く。

よくよく考えたら、人前でこの三人といるのは、自分の教室以外では初めてのことである。

恵梨花と二人でいる時以上の視線を向けられた亮は、思わず天を仰ぎたくなった。

そんな亮の心境など知らず

「もう、可愛い！ この、あどけない咲の寝顔！」

梓が弾んだ声を上げながらカメラのシャッターを切る。

「本当……、可愛い、……咲」

亮が目を向けると、恵梨花は今すぐにでも抱きしめたいと言わんばかりに、手を握ったり、開いたりとしている。

梓の言葉から咲が眠ったことがわかった亮は、今の時間は自分の睡眠時間のはずが、何故、起きて背中を貸し、人の睡眠を手伝っているのだろうか、現実逃避気味に遠くに目を向ける。

「ほら、恵梨花、横に並びなさいよ」

「あ、うん、撮って、撮って……、梓も後で撮ってあげる」

「うん、よろしく」

背中側では、のほほんとした撮影大会が始まったようである。

それとは対照的に、前方では負の感情がどんどん強くなってくるように思えた。睨みをかけてくる誰とも目を合わせたくない亮は、俯き加減にあくびを噛み殺す。

暫しの間、背後でカメラのシャッター音を聞いていたが、それも終わったようで、梓が恵梨花とは反対側に亮の隣に座る。

それが肩が触れ合うほどに密着していて、亮はもうちょっと離れないか？ という意味を込めて指摘しようとするが、先に梓が声を出した。

「ほら、咲、可愛いでしょ？」

梓が微笑と共に、亮に開いた携帯の液晶画面を見せる。

そこには、口を半開きにして目を閉じている、あどけない寝顔の咲が写っていた。

「……たしかに可愛いな」

見ていると、自然と頬が緩んでしまう。亮は少し癒された気分で、率直に感想を述べる。

携帯を見せるために、この距離で座っているなら仕方がないかと思っても、亮に見せて携帯をポケットにしまっても、梓は少しも距離をとろうとしない。

内心で首を傾げたと同時に、何かが頭に引っかかった。

(咲が来て、梓が来て……、でも、恵梨花は最初からいるが……)
いつぞやの時の流れを思い出した亮は、嫌な予感が流れるのを止められない。

「ところで君、本当にこのまま出番なし？」

「え？ ああ、俺はそのつもりだし、クラスの連中もそのつもりだろ」

「出たらよかったのにねー」

色々と頭に考えが浮かんでいたせいか、梓の質問に不意をつかれたような形になった亮が答えると、恵梨花が名残惜しそうな顔になる。

梓が来たのは、まさか強引に自分をサッカーに出させる気かと思っただが、いくら梓でも他クラスのサッカーチームの編成に口を出すことも出来まいと考え、今みたいに注目を浴びる以上に嫌なことなど起こるまいと亮は無理矢理自分を納得させる。

されど一応、警戒はしておこうと亮は気構えるが、梓は至って気楽な調子で亮を見上げる。

「たしかに、出たら面白かっただろうにね……：：：：：そういえば、君がサッカーを選んだ理由は？ 元々、出る気が無かったのなら、バスケットでもよかったんじゃない？ ……：：：：：サッカーの方が得意なの？」

問われた内容に少々、拍子抜けの感が否めない亮だが、隠すことでもないことだと率直に答える。

「いや、バスケの方が得意だな」

「……なら、なんでサッカーを？」

出る気がないのなら、たしかにどちらでもいい話であるが、亮がハッキリ答えたことで、流石の梓も腑に落ちないように首を傾げると亮が肩を竦める。

「体育館はうるさくて眠りにくいから……ボールの跳ねる音とか反響するし」

間にあくびをしながら答えると露骨に呆れた顔になる恵梨花と梓。それも仕方のないことである。

亮が二種目からサッカーを選んだ基準は「寝心地」のみなのだから。

「まあ……君らしいとは言えるか……」

それでも、梓は顔を顰めつつも、少し納得の色を見せると、恵梨花も同意するように頷く。

「そうね……バスケは得意なんだ？」

そう尋ねる顔はとても興味深そうである。

「そうだな……小・中学校の時は、よく友達と遊びでやってたからな」

「」

亮が頷きながら答えると、途端に押し黙る恵梨花と梓。

「……おい、なんだ、その間は」

亮が不満そうに二人を見る。

「いえ、だって……」

「うん……聞いたいてなんだけど、亮くんが、スポーツで『遊ぶ』なんて……」

二人共、共通して信じられないものを聞いた、という顔をしている。

「……俺だって、人並みにスポーツで遊んでた時ぐらいある」

不機嫌そうに亮が言うも、恵梨花と梓は「そう言っても、ねえ？」といった風に、顔を見合わせる。

そんな二人の間で亮がため息を吐くと、梓が尋ねる。

「じゃあ、得意って、どれぐらい?」

「……また、曖昧な質問だな」

「また」になったのは、以前に「どれぐらい強いのか」と聞かれ時を思い出したからで、亮は苦笑を浮かべる。

「……俺の中学校のバスケット部のエースらしいやつと、いい勝負できるぐらいには得意だな」

軽く眉間に皺を刻んで亮が答えると、恵梨花の顔に少し戸惑いの

ようなものが浮かぶ。

「……亮くんの中学校のバスケットって……えーっと……」
「弱小？ ……いくら君でも、強豪校のエースと渡り合うなんて言わないよな？」

恵梨花がどう聞いたものか、と言い悩んでいるところで、梓が補足するように口にする。その問いは疑わしげであったが、まさかといった響きもあった。

それに対して、今の二人の心中がどういったものかわからない亮は気軽な調子で言う。

「そんなこと、俺が知ってると思うか？ ……遊びでやってた俺と張り合うぐらいなんだから、弱小なんじゃねえか？」

最後に肩を竦めて見せる亮に恵梨花は悩ましげに首を捻る。そこで梓に目をやると、何故だか梓の目が少し光ったように恵梨花は見ええた。

「それじゃあ、君の中学校はどこ？」
「……バスケット部のこと、調べるのか？ ……あんたも、もの好きだな。俺の中学校は南三中だ」

少々、呆れ調子で言う亮に梓が「南三中ね……」と呟く。その際、内心の興奮を抑えるようにグッと手を握っていた。

そして、何気ない調子で梓が続ける。

「南三中といえば……たしか、うちのクラスにいたわね」

「……あんだ、他人の出身中学校まで把握してるのか？」

亮はまたも呆れ気味になるが、その横にいる恵梨花は少し驚いたようで「いいの？」と言いたげに梓に目で問いかける。すると梓は「大丈夫」といった風に小さく頷き返す。

「たまたま、会話で出たのを、覚えてただけよ……そう、たしか……神林くん」

名前を告げると、梓と恵梨花がジッと亮を見る。

以前に二人が、神林と話した時、神林は明らかに亮と何かしらの関係があるように見えたが、神林はひたすらにそれを隠していた。

そんなことがあったため、亮は一体どんな反応をするのかと、梓と恵梨花の喉がゴクリと鳴る。

「？ ……神林……？ いたっけ、そんなやつ」

亮は聞いた名前を復唱すると、眉を寄せて首を傾げた。

そんな亮の反応に、内心で動揺する恵梨花と梓。恵梨花は顔に出さないことで精一杯だったが、梓はそこから内心の動揺を追い払うように軽く咳払いをする。

「フルネームは神林将志^{カンバヤシマサシ}、剣道部に所属しているわ。知らないの？」

梓の問いに、亮は思い出すように宙に目を向けると、「剣道部で……神林……将志……？」と呟き、再度首を傾げる。

「知らねえな……」
「……本当に？」

梓が詰めるよろよろにして、亮を見上げる。そのせいで、元々密着していた距離が更に縮まる。

迫力ある美貌が眼前に迫ったためか、亮が少し怯んだ様子になる。

「なんだ、知ってないとマズいやつなのか？ ……同じ中学だから
って全員知ってなくても、おかしくねえだろ」

返ってきた言葉はより二人を困惑させるもので、言っている様からは、まるで嘘を吐いている様にも見えない。それでも、梓は自分では判断し切れなかったのか「嘘吐いてないよね？」と恵梨花に目で問いかけると、恵梨花は躊躇いながらも、小さく頷き返した。

二人の様子から訝しげに首を傾げる亮は、自分と梓の密着具合を見て言った。

「なあ、あんた、さつきから気になってたんだが、近くねえか？」
「え？ あら……」

梓は恵梨花の返しの後、思考の海に入りかけるように見えたが、亮の声により引き戻される。

そこで、亮が言った通りのことを確認すると、ちらつと亮を見上げ、妖艶に微笑んだ。

「ああ、ごめん、ごめん……、こうした方がよかったよね？」

そう言いながら、亮の腕に自分の腕を絡める。

それに対して、ぎよっとする亮。位置的に見え難かった恵梨花も、少し遅れて同じ反応を見せる。

「な、何やってんだ、あんた!」

「そ、そうよ、梓、何やってるのよ!」

亮は呪い殺されるのではないかと思えるほどの視線を意識しての言葉で、恵梨花は焼きもちだ。

「いいじゃない、別に。最近、亮くんと一緒にお昼とってないんだから、代わりにこうやってスキンシップ」

梓は両手で亮の腕が逃げないようにしっかりと絡ませながら楽しそうに微笑み、最後には二人に向けてウィンクまでして見せる。

スキンシップはともかく、途中まで梓が言ったことは事実である。今週に入ってから亮への男子の訪問は減ったが、恵梨花に告白しにくる男子の数は、亮を見に行く男子ほど減っていない。そのため、教室で亮と恵梨花の二人で弁当を食べるのは続行中である。

「代わりとか、そんなの友達同士で関係ないだろうが!」

「そう、つれないことを言わなくても」

「言うに決まってるだろうが! 場所考えろ!」

「場所ならわかってるとも、君が一生懸命守っているベンチでしょ?」

「そこじゃねえ! 周りの目を気にしると言ってるんだ!」

亮は焦った様子で乱暴にならない程度に腕を動かして抜け出そう

とするが、梓はがっちりとホールドしている。

梓は亮と言い合いしながらも時折、恵梨花を見ては悪戯っぽく微笑む。

それが恵梨花をどんどん不機嫌にさせ、梓もそれはわかっているがやめる様子はない。

恵梨花は梓が何のために、こんなことをしているのかわからず、不機嫌から困惑に陥りそうになるが、それより目の前の光景によって沸いた嫉妬が、恵梨花に一つの行動をとらせた。

それによって、梓と言い合っていた亮がビクッと体を震わせ、驚きを露わにする。

「お、おい……、何やってんだ、恵梨花？」

ゆっくりと振り向く亮。その顔は、とても、とても引き攣っていた。

「何って？」

可愛らしく小首を傾げる恵梨花。表情は少し不思議そうにも見える。

その仕草のせいか、それとも別の要因のせいか、顔を赤くした亮が、しどろもどろになる。

「な、なんで、恵梨花まで……」

そう言いながら亮が目を下ろすは、梓に絡まれている腕とは反対の腕に絡まれている恵梨花の腕である。

「いいじゃない、梓もしてるんだし」

つんとした様子で言う恵梨花だが、頬が少し赤く、口の端が少し釣りあがっているのが、内面の喜びを表している。

「いや、梓もしてるって……」

「私と、こうするの嫌？」

亮が反論しようとするも、恵梨花が眉を寄せ、上目遣いで亮を見る。重ねて言うが、上目遣いである。更に言えば、腕を絡ませることがができるほどの超至近距離である。

結果、亮は真っ赤になり、「い、嫌じゃないが……」と言ってしまい、恵梨花は「なら、いいじゃない」と、話はこれでお終いといった態度である。

亮は自身の敗北を悟り、出来ることなら、生徒の目のないところでこうしたかったと深く肩を落とす。

そして、そんな状態でも体のあちこちから、触覚は伝えるのである。

背中越してもハッキリと女の子だとわかる咲の背中 of 感触と温度。左側には梓の、日頃運動を欠かしていないだろうと思わせる引き締まりつつも柔らかさを残したしなやかな体躯。右側は、柔らかかなのは間違いないのだが、これは好きな女の子だからなのか、柔らかいというよりも、触れている箇所、全てが甘く感じさせられる。

そこで、ふっと亮は思った。

(なんだ、この状況は……)

右に左におまけに背中まで伝わる感触から、亮がそう内心で呟いた時だった。

ピー、ピー、ピー、ピー、ピー、ピーー！ と甲高い笛の音が鳴った。

それは何度も吹かれ、そしてその音の大きさに、亮は思わず顔を上げる。

すると、自分のクラスが試合をしているコートから一人の男子生徒　ビブズの色から対戦相手のクラスでもない、審判役として呼ばれたであろう他クラスの男子生徒　が、怒り心頭の様子でこちらに向かって、ズシズシと歩いて来る。

そうして亮の目の前まで来た男子生徒は目一杯、空気を吸うと空に向かって再度、甲高く笛を鳴らす。

その音の鋭さに、亮だけでなく、恵梨花、梓も一緒に顔を顰め、背中からは驚いたのであろう、咲のビクとした震えが伝わってくる。

呆然とする三人の前で、審判役の男子生徒が叫んだ。

「交代！　交代！　！　桜木！　交代だー！　！」

自分のクラスメイトだけでなく、対戦クラスの生徒達まで魂の籠もった叫びを上げる。

必死、憤怒といった顔から出る呪詛にも似た叫びの中に（いや、実際に呪詛の叫びがある）咽び泣くような声まで聞こえ、亮は事態の余りのひどさに不覚にもポカンとなる。

そんな状態ながら、いや、前田って誰だと内心で突っ込んでしまふも、目の前の審判役が目には自らの腕を押し当て、男泣きしている様から、こいつかと悟る。

「さあ、咲、恵梨花、逃げ……じゃなくて、行くわよ」

いつの間に腕を離したのか、そんな梓の言葉が背後から聞こえた亮は、はっとして振り返る。

「おい、あんた、まさか狙って……」

「とんでもない」

梓は心外だと言わんばかりの顔で首を振る。

「成功確率は五割未満と見て、あたしが狙ったのはこの次の試合の直前のスタメン決めの際に、似たようなことになることよ」

これはちょっと予想を超えたわ、と付け加えるように言う梓に恵梨花が頬を引き攣らせ、「この悪女」といった目で見ている。

その横では亮が、かつてないほどに頬を引き攣らせている。

「じ、この腹黒眼鏡……！」

一瞬、ムっとした梓だが流石にやり過ぎたと思ったのか、言い返さずに悪戯っぽく微笑んだ。

「でも、ちょっと活躍するだけで、色々と事態が好転すると思うけど?」

「こ、この際だし、頑張つてよ、亮くん! 応援するから!」

恵梨花が少し気の毒そうな顔でありながら興奮した面持ちで亮を励ますと、咲が無表情ながらにサムズアップして見せる。

そんな三人と、未だにコートから聞こえる「早く交代しろー!」との怒号もあって、逃げ場が無いことを悟った亮は盛大なため息を吐くと、頭をガシガシと掻きながら重い腰を上げる。

「じゃあ、頑張つてね!」

亮がこの場にいなくなるなら、他クラスである恵梨花達がこの場に留まり続ける訳にはいかず、再び明達のところに行こうと三人が背中を見せたところで、亮がボヤクように言った。

「何を勘違いしてるのか知らねえが……、俺はゴールキーパーやったことねえぞ」

ピタッと三人の足が止まって、振り返る。

「え?」

恵梨花と梓の訝しげな声がハモリ、咲は不思議そうに首を傾げた。

第二十一話 魂の叫び（後書き）

神林とは……二章の第八話「黒」と第九話「悪女」を、ご参考。

第二十二話 All x 2 For One

「桜木のポジションはどこだー!? ……なに、ゴールキーパー？」

「ほう、ゴールキーパー？」

「なるほど、それはそれは……」

「たしか、ゴールキーパーという文字は『命を削る』と書いてゴールキーパーと読むんだよな？」

「いや、俺は『死ぬ』と書くと思ったぞ」

「何言ってるんだ、『棺桶』だろう」

「いや、違う『死刑場』だろ？」

コート上の男達は敵味方関係なく『ゴールキーパー』とはどういう文字で書かれるのか、熱く議論し始めた。

そんな男達を尻目に、そして自分は何も聞かなかつたんだと言いつつ聞かせながら亮はコートを横切り、ゴールまで歩みを進める。

その際に視界の隅で親友が腹を抱えて、爆笑している様が見えた。

その時、なぜだか怒りが湧くよりも、明はこういうことになるのを予想していたのではないかと、ふと頭をよぎる。

いや、流石にそれは無いかと思うも、どうにも釈然としない。

それにしても、とため息を吐く。

まさか、自分を出させるために、こんな手を思いつくとは。あの女のことだから色々と考えた上でやったんだろが、やはりありが

たくないという気持ちの方が大きい。狙いは次の試合だったらしいが、つくづく恐ろしい女だと亮は実感する。

でも、不幸中の幸いか。時間を確認すると、試合の残り時間は五分程で短い。

更にスコアは三対一で亮のクラスがリードしている。これなら残り時間とを考えると、適当にやっても負けることは難しいだろう。クラスメイトも自分がまともにゴールキーパーなんて出来るなど思っていない。そもそもやったことがない。

運が良ければ、ゴールに突っ立っているだけで試合が終わるかもしれない。

ゴールの前まで来た亮は、普段には無いプラス思考を無理矢理脳内に設置し、そして、それを最大限に働かせながら、現ゴールキーパーの小島からビブスを受け取った。

それからベンチに向かう小島は、すれ違う際に「俺は鈴木さん派なんだ……お前のおかげで、普段はあまり見れない鈴木さんの笑顔を見れたと思うておく」と哀愁をこめて呟きながら亮の肩に、ポンと手を置く。

傍から見ると、これから試合に出るクラスメイトに対してエールを送っているような親しげな動作に見えるが、その手は不自然なほどに、グッと強く力がこめられていた。

そんな小島に亮は「梓とはただの友達だ」と言い返すような野暮な真似もせず、とりあえず自分のせいでクラスが負けない程度には頑張るか、とため息を吐き、黙ってビブスに袖を通した。

「まさか、ゴールキーパーやったことないなんて……」
「本当にね、やる気がないから選んだみただけど、それでも経験はあると思ってたわ」
「うん……」

ベンチメンバーの待機場所から、明達がいる観戦のし易い場所に移動した恵梨花と梓は、眠そつに「ふあ」とあくびをする咲の横で、亮がコート上を横切るのを見ていた。

「それにしても……、大丈夫かな？」

コート上の男達の議論は恵梨花達には聞こえてないが、そこから物騒な気配が漂っているのは感じ取れたのか、恵梨花が心配そうに呟く。その少し引き攣った顔には自分の、いや、自分達の影響力を甘く見ていたといった表情も窺える。

亮は恵梨花にはハッキリとは言わなかったが、元々やる気も無く目立ちたくもない亮が、恵梨花の故意では無いにせよ、こんな形での出場だ。

亮がサッカーをするときを見れるのは嬉しいが、自分達のせいで不本意に出場させてしまったことと、コート上の物騒な気配と相俟って心中複雑な恵梨花である。

「まあ……、物騒な気配が漂っているけど、大丈夫でしょ、あの男

なら」

亮が出場することになった最大要因の一人である梓が、涼しい顔で恵梨花に答える。

「私もそう思うけど……」

怪我等に関しては確かに心配はいらないと恵梨花も思うが、状況が状況であり、何よりこの状況を生み出したのは自分達である。釈然としない様子で恵梨花が呟き返すと、背後から明の声が上がる。

「亮なら心配いらなと思うけど……それに亮は今日は少しでも出た方がいい」

「？ 何で？」

「折角、亮の悪い噂が治まってきたのに、このまま一回も出なければ、今度は『クラスのお荷物』とか、そんな噂が流れるんじゃないかな？ ……だから、ちよつとでも出た方がいい」

明の答えを聞いた恵梨花は内容を吟味すると、確かにその通りかとも思った。それから、はっとなって梓に振り返る。

「梓、もしかして、そのためにあんなこと……？」

『あんなこと』とは、コート上の男達を燃えさせた梓のスキンシップである。梓は何を指しているのか聞き返すまでもなく、おもむろに頷いた。

「そうね、理由の半分ぐらいは」

「……もう半分は？」

訝しげに恵梨花が問い返すと、梓は「そんなの、ねえ」と悪戯っぽく微笑みながら明と目を合わせる。すると明も同じような笑みを返し、二人で答えた。

「「そつちの方が面白そうだから」「
……」」

もしかしたら自分の彼の親友は、自分の親友と同じように腹黒い人なのかもと、少しばかり恵梨花の頬が引き攣った。

そんな恵梨花をよそに、梓が気付いたように顔を上げる。

「あ、始まるみたいね」

恵梨花が声につられて目を向けると、コート上では各々が自分のポジションについたようで、試合は亮のクラスの対戦相手である四組のスローインから再開するようである。

それを見て恵梨花は、つい。

先週から張り切っしてしようと思っていたことを、つい、状況を忘れてやってしまった。

「頑張れー！ 亮くんー！」

亮は自分の頬が引き攣っているのを自覚しながら、声援が聞こえ

る方向にゆっくりと振り返る。

そこには、口に手を添えて自分を応援する恵梨花がいる。目が合うと、それで恵梨花は嬉しくなったのか満面の笑顔になって、「頑張ってるねー！」と手を振りつつ、また強く声援を送ってくる。

ふと視線をズらすと、自分をこの場に送る策略を図った梓がいて、その梓とも目が合った。

すると梓は一瞬ニヤリと笑うと、恵梨花と同じように「頑張ってる！ 亮くん！」と叫んだ。

その時の梓の笑顔は、それはもう見たことないほどに朗らかで、状況が状況でなければ、すっかり見惚れてしまったと思うほどのほどである。

更には、その横で咲が口に両手を添えている。声は聞こえないがよく見ればその口はパクパクと動いている。それだけでも、応援をしているという気概は伝わってくる。

男なら喜ぶべきところだろう。

美少女二人が応援してくれているのだから。

しかし、亮の顔は引き攣る。

それは、何故か。

恵梨花は元より応援をしたかったと聞いていたので、応援以外の他意は無いだろう。

あの満面の笑顔からでも、それはわかる。咲もそうであろう（亮

の希望でもある)。

問題は梓である。

あの女だけは、純粹に応援の気持ちだけで声援を出している訳がない。

亮は考えるまでもなく、それがわかった。

何故なら、あの楽しそう笑みは梓が恵梨花で遊んでいる時の笑顔にそっくりで、つまりは、ドS心全開である。

美少女三人の応援を一身に浴びた亮は、冷や汗を流しながらギギギとコートに振り返る。

「コートに入ってもこれか……」

「鈴木さんが、大声出してるよこなんて、見たことねえぞ……あんな可愛い笑顔も」

「藤本さんだけなら……だけなら、ともかく……！」

「ああ……」「なあ……」「そうだ……！」

「あんな応援があれば、援護なんかいらんよな……」

「その通りだな……俺ならあの応援があれば、何でも出来る……！」

「俺もだ」「俺だったら死ぬる」「違うない」

「それにしても今日ほど、ゴールにボールを叩き込みたい衝動に襲われたことは無いな……」

「うちのクラスは、流石に桜木のいるゴールにボールを蹴る訳にはいかねえが……」

「うちのクラスがやってやる」

「……やってくれるか!?!?!」

「まかせとけ……、今日のボールは血に餓えている」

「頼んだぞ」「わかってるな!?!」「やってくれ!！」

コート上の男達は敵味方関係無しに、この試合の展開について歯軋りを鳴らしながら話し合っている。

三人娘の応援は、コート上の男達の亮への怒りの火に、正に『火に油』の効果であった。

結果、亮のクラスの守備力を大きく下げ、相手方の攻撃力を大きく上げた。

そんな現状に、亮は引き攣った笑みを浮かべることしか出来なかった。

しかし、無情にも試合は再開される。

スローインで投げられたボールを対戦相手クラスの少年が受け取ると、真っ直ぐ亮を見て、亮のいるゴールまで怒りの形相を浮かべながら、真っ直ぐにドリブルでコートを駆け抜ける。

そう、真っ直ぐに。

亮のクラスは誰一人、その少年を止めることができないのか、いや、止める気がないのかもしれない。

自分を止める障害も無くこちらに駆けってくる少年を見た亮は、誰か少しでも止めるよと思ってから何かに気付いたように眉を寄せる。よく見れば、駆けてくる少年は亮の一年の時のクラスメイトである。

鬼のような形相をしているせいでわかりにくかったが、確か名前

は佐藤だったと苗字まではギリギリ思い出せた。

その佐藤はペナルティーエリア寸前まで来ると、勢いを少し落とし、止まらずにボールを蹴る動作に入る。

その時、佐藤の背後からは「いけー！」「やれー！」「天誅をー！」といった、男達の声援が次々に上がる。

「やれ」と言っている時の文字は「殺れ」じゃないよなと思う中、亮はあんぐりとなる。自分のクラスメイトまで、佐藤に声援を送っているのだ。

これが、コート上の男達（亮を除いて）の心が敵味方関係なく、一つになった瞬間である。

野太い声援を一身に受けた佐藤は「死ねー、桜木ー！」と叫びながら、ボールを強く蹴った。

ついにハッキリ「死ね」と言われた亮は、自分に真っ直ぐ向かってくるボールを冷静に見極める。

ボールが自分の顔面から僅かに30cmほどズレた位置を走るとわかった亮は、何もせずそのボールを見送った。

結果、亮はゴールの前に立っていたのだから、当然の如くボールは背後にあるゴールネットに突き刺さった。

審判の笛が鳴る。佐藤は見事ゴールを決めたというのに、悔しそうに地面を叩いている。そして、その背後からは「くそー！もうちょっとだったのに！」「けど、惜しかった」「ああ、惜しかった

ぞ、佐藤！」「次は決めてくれよ」などと、男達の悔しそうな声がかかる。

ゴールを決めといて何だそれとはと、亮がため息を吐くと「何してるんだー、桜木！」「そうだ、動けよ！」「何でスルーしてんだよ！」「何で顔面で止めねえんだ！」と、何もせずにボールを見送った亮に対して、当然とも言える抗議の声が上がる。それに対して

「いや、お前ら少しはディフェンスしやがれー！」

亮も当然言っている文句を返すと、クラスメイト達は一斉に亮から目を逸らした。

はあ、と亮が肩を落とす。

亮がボールをスルーした理由は、クラスメイトがディフェンスをしないのなら、こっちもしなくていいだろうというのが半分。第一、さっきみたいな状況で、クラスの為にまともに頑張る気など起きる訳がない。

そもそも、完全にフリーで打たれたのだ。止めなくても無理はない（手を延ばせば届く距離だったというのは置いといて）。

もう半分は、点差が一点になれば、クラスメイトも危機感から正気に返って、ちゃんとディフェンスをしてくれるのではないかと考えた上でのことである。

そんな理由があった訳であるが、それを盾にこれ幸いと手を出さなかつた亮も間違いなくいた。

さつさと時間が過ぎて、早く終わらないかと亮が願う中、ハーフラインから試合が再開される。

「今のボール、すごく速くなかった？」

「そうね、流石ジュニア代表だけあるわね」

「……そうだった。佐藤くんって、ジュニア代表だったね」

「去年、しつこく恵梨花に応援に来てくれて言ってたよね」

「……でも、サッカー部の人って、こういう日は積極的に攻撃に参加しないはずじゃ？」

「あら、スルー？……まあ、いいけど。恵梨花の言う通り、サッカー部は積極的に攻撃には参加せず、ディフェンスかフォロウに徹するのが暗黙のルールなんだけど……」

そう言いながら、梓がコートを見回す。

「誰も気にしてなさそうね……思いつきり、シュートしてたのにも関わらず」

「……普通、危ないよね？」

「そうね。ゴールにいるのが亮くんであれば、流石のあたしも生徒会役員として、注意するけど」

佐藤がゴールを決めてから恵梨花と梓の二人が会話している後ろでは、明含む亮の友人達が「さすが、亮！スルーしたぞ！」「ここでも寝てるんじゃないか？」「少しは動けよ！」「このまま見逃し三振じゃないか？」などと言って笑い合っている。

それらが聞こえた恵梨花が少し考える様子を見せた。

「さっきのはボールが速すぎて、だから亮くん反応出来ずに、動かなかったってことじゃないよね？」

「多分ね。さっきのは自分に当たらないことを見極めてから、動かなかったんじゃない？」

「何で動かなかったんだらう？」

そう聞く恵梨花の顔には「格好よくセーブするところが見たかったなあ」と書いてある。

「多分……、ん？」

恵梨花に答えようとしたところで、梓が周囲を見回した。

釣られて恵梨花も梓と同じ方向を目で追うが、この試合を観戦している生徒が増えてきているといったこと以外、特に目立ったものは見つからなかったようだ。

「どうしたの、梓？」

「ん……何でもない、それより試合始まるよ」

そう言う梓を訝しげに見てから、恵梨花は試合（亮）を観戦するために、コートに目を向けた。

試合に集中し始めた恵梨花を尻目に、梓は先ほど引っかけかきりを覚えた場所を再度、注視し始める。

その先にはバラけているが、亮の出ている試合を観戦している他クラスの男子生徒、女子生徒達がいる。

彼らの内でも、単純に試合を観戦している者や、次の試合の対戦

相手はどちらになるのかといった目や、やはりというか、最近何かと噂になっている亮に注目している者もいるといった感じで、見る目は様々である。

梓が注視しているのはもちろん、亮に注目している生徒達だ。

よく見るとその中には、噂になっている亮を見てみよう、見定めやろうといった目がある。これら二つは似たようなものであるが、その二つとは別に、もう一つハッキリと種類の違う別の目があった。それは「あーあ」といった顔で亮を見る数人の男子達と、苦笑気味に、それでいて何かを期待するように亮を見ている数人の女子達の目である。

この目には先ほどの二つと決定的に違うものを含んでいる。

それは既知のものを見る目であり、それでいて親しみがこもっている点だ。

そんな目を向ける男子生徒、女子生徒の顔を梓は遠目ながら確認し、脳内の情報と照らし合わせる。

演算の結果が出たのか、梓は満足そうに頷いてから、誰ともなしに小さく呟いた。

「間違いない……全員、亮くんと同じ中学校出身ね」

第二十二話 All x 2 For One (後書き)

ジュニア代表の佐藤くん……名前だけなら過去にも出てます。

第二十三話 同窓

本当に興味深い男ね。

梓は自身の好奇心が大きく刺激されているのを感じながら、亮の同窓達を黒縁の眼鏡越しに見ていた。

彼らの亮を見ている表情からは共通して、亮との関係が「ただの同級生」以上の「何か」を感じさせるものがある。

それは一体何なのかと梓が思考の海に入りかけたところで、隣にいる恵梨花の声によって引き戻される。

「あ、神林くん……」

声に釣られてコートの方こう側に梓が目を向けると、そこには確かに神林が。それともう一人。

「と、千秋^{チアキ}」

神林の隣にいるポニーテールの女の子の名前を恵梨花が続けて言った。

高めの身長ナルヒチアキの神林の隣にいるせいから、少しばかり小柄に見える女の子の名前は成瀬千秋ナルヒチアキとあって、三人娘とは一年の時に同じクラスで、名前を呼び合うほどに仲の良い関係である。

亮が試合をしているのによく気付いたなと梓は思ったが、チラとコートを確認すると試合は亮のクラスが攻めているため、ゴールキーパーの亮はヒマしているようだ。そのためかと思うと同時に、神林が先ほど亮との話題に上がったばかりなため、目につきやすかったのだからと見当をつけた。

「あの二人は相変わらず仲良いみたいね……」

にこやかに談笑しながら歩いている二人を見て梓が微笑と共に言う、恵梨花が相槌を打つ。

「ねえ、いつも堂々と仲良くしていて」

「堂々と」のところが妙に強調されたように聞こえ、それをするところの意味がわかった梓は吹き出しそうになるが、抑えて苦笑を漏らす。

「そうね。二人共剣道部で、部内では憧れのカップルらしいしね」
「神林くんは男子剣道部のエース、千秋は女子剣道部で主将を凌ぐ強さ。そんな二人が付き合ってるんだから、そうなるのも無理ないよね」

周囲からは公認の仲といった二人を見る恵梨花の目にはささやかな羨望と、いずれは自分達も、といった決意の光が同居していた。

この場に亮がいたら冷や汗を掻いていたかもしれない。

そんな恵梨花に梓がまたも苦笑を漏らす。

「恵梨花と亮くんも、いずれはみんなから認めてもらえるようになるよ」

るわよ」

「…………だと、いいんだけどな…………、やっぱり、あの二人ぐらい長く付き合ってからかな？ 確か、千秋と神林くんは中学校からの……………中学校!？」

二人の関係の長さを思い出しながら口を動かしている途中、一つの事実に気付いた恵梨花は驚きに目を瞠らせて梓に振り返る。

梓は振り返らずに神林と千秋の二人に目を留めながら頷いた。

「そう、あの二人は同じ中学校　つまり、亮くんと同じ南三中の出身よ」

それを聞いた恵梨花は更に驚きに目を瞠ると、すぐ二人に目を向ける。

数秒すると向けた目はそのままに、恵梨花は自分に問うように呟いた。

「亮くん、本当に神林くんのこと知らないのかな…………？」

「…………嘘は吐いてなかったみたいだけど…………」

「ねえ…………、あ」

恵梨花が突然、注意を引くような声を上げた理由は梓にもわかった。

神林がゴールにいる亮に気付いて口を「あ」の形にして固まったのだ。

すぐに我に返った彼は、千秋の肩を叩いて亮を指差す。すると最初は怪訝な顔つきだった千秋は亮を認めると、目を見開いて固まった。次いで、ゆっくりと神林に振り返り、二人して目を合わせると、

神林は少し困った顔で苦笑いをし、対照的に千秋は小さく吹き出して楽しげな顔になった。

「やっぱり知り合いだよな？」

「彼を一方的に知っている風にも見えないわね」

二人の様子を見ていた恵梨花と梓は、間違いないと言わんばかりに頷き合う。

「じゃあ、亮くん、何で知らないなんて……」

恵梨花が思案顔で首を傾げると、コートから歓声が沸き、恵梨花は慌てて亮へと視線を戻した。

オフエンスだけはどうやら真面目にやってくれるようだ、亮はゴールの前でゆったりと構えながらクラスメイト達の果敢な攻めを眺めていた。

されど、その攻めも相手方のゴールキーパーがボールをキャッチしたことで終わってしまう。

ゴールキーパーはボールを前方に向かって投げ、受け取った男子はすぐさま、先ほどゴールを決めた佐藤にボールをパスする。

ボールを受け取った佐藤は、一心不乱な様子で先ほどと同じくドリブルで駆けてくるが、今回は先ほどと違ってクラスメイト達が障害として、前に立ちちはだかる。

それを見て、ディフェンスも真面目にやってくれるのかと亮が安堵の息を吐いたのも束の間だった。

クラスメイト達はボールをもつ佐藤に向かうが、不思議なことに、本当に不思議なことに、佐藤は右に左に動くこともせず『直進』しかしていないのにも関わらず、どンドンと抜いていく。寧ろ右に左に動いているのは、佐藤を止めに走ったクラスメイトである。

クラスメイト達は抜かれる際に「な、何!?」「くっ、なんてドリブルだ!」などと大げさなほどに声を出し、驚愕を顔に浮かべてはいるが、悔しそうな素振りがまるで見えない。追走もしないのだ。

そんな彼らの様子に亮は深く考えるのはやめることにした。先ほどと比べたらマシである。

またも佐藤がペナルティエリア前でシュート体勢に入る。その背後からは彼の味方からの「今度こそ決めるよー!」「頼む! やつてくれー!」などの野太い声援が。

亮が見る限りでは、今度は自分のクラスメイトは佐藤に声援を送ってはいなかった。が、拳を握った手を佐藤に向けている。静かにエールを送っているように見えるが、これも深く考えるのはやめることにする。やっぱり、先ほどと比べたらマシだからである。

そんな応援を受けた佐藤のシュートが放たれる。

向かってくるボールを見極めた亮は、今度ばかりは自分の顔面に直撃コースだと悟る。

(……さすがに避けるのは不味いよな)

などと、ゴールキーパーにあるまじきことを考えた亮だが、諦めのため息を吐きながら両腕を顔面の前にもっていく。その際に少しばかり上体を引かせるのも忘れない。

これにより、ビビりながらも咄嗟に両腕でボールをガードするという、亮が考えるにこの状況では恐らく「普通」の人としての反応と思われる動きをとった。

結果、ボールは亮の両腕に弾かれ、ゴールの枠から外れていった。

腕に多少の痛みは残るが、こんなもんだらうと淡々とした様子の亮に、

「亮くん、ナイスー!!」

と、恵梨花からのご機嫌な声が耳に届く。

その方向に目を向けると恵梨花と目が合い、満面の笑みで手を振ってくる。

そうやって嬉しそうな恵梨花を見ると、亮も嬉しくなってしまうのは流石に惹かれあった仲なら仕方ないものだろう。好きな子からの応援というのも、よくよく考えたら今日が初の亮である。

自然な様子で軽く手を振り返した亮は、これによってまたコート

がとんでもないことになるのではないかと脳裏をよぎるも、振り返ささないのも恵梨花に悪いと思ったがためだ。

恵梨花から目を離れた亮は再びコートから怒号が上がるのではと恐る恐る振り返る。

しかし、それは亮にとって嫌な方向で杞憂に終わった。

コート上の男達は先ほどの亮と恵梨花のやり取りを気にした様子も無く、全員ポカンとした顔を亮に向けている。

それを見た亮は自分は何か不味いことをやっただろうかと顔に焦りを浮かべる。

そこで、誰かが「な、何で……」と呟いた。

それが切欠となり、男達は呆然とした様子で口々に言い始める。

「な、何で、あいつ平気そうに立ってるんだ？」

「な、なあ？」

「いや、普通吹っ飛ぶだろ……」

「よろけもしなかったぞ」

「佐藤のシュートって、確かプロ並だとか言われてるよな？」

「あんな受け方したら、最低でも尻餅はつくだろうに……」

「それをけしかけた俺達も俺達だけ……」

「ああ、確かに冷静になったら、とんでもないこと煽ってたな……」

「普通に考えたらヤバイよな」

「だが、不思議なことに全く罪悪感が沸かないな……」

「俺も」「俺もだ」「同じく」

「反省する気もないが……」

「それは、なあ……?」「ちょ、ちょっとは……」「俺だったらさ
っきので、失神してる自信あるなあ……」

「と、ともかく……」

「ああ……」「なあ……」「いや、本当に……」

「」「何で、あいつあんなに平気そうなんだ!?!?!」

コート上の面々は亮がボールを止めたことにより、頭が冷えたよ
うだ。

男達の呟きは全部聞こえた訳では無いが、自分はどうやらあまり
「普通」でないことをしてしまったらしいと亮は焦りと共に悟る。

話の内容からどうやら佐藤が蹴ったボールは相当な威力だったら
しいが、亮からしたら自分に向かってきたボールは「けっこう速い
もんだ」と思っただけで、それはゴールキーパーの視点だからそう
視えたのだらうと思っ込んでいた。

これは不味い流れかもしれないと亮が冷や汗を流しながらどう誤魔
化すかを考え始めた時に、クラスメイトの相馬が焦った様子で叫ん
できた。

「おい、桜木ー！ 腕は大丈夫なのかー!? てか、よく止めたな
ー！」

流石にサッカー部員である彼は事の重大さに気づいたようで、コ

ト上で誰よりも亮のことを案じている様子だ。

「ああ、大丈夫……夫、じゃない！ それにさっきのは偶然だ！ 偶々だ！ マグレだー！」

大丈夫だと言いかけた亮は咄嗟に言い換え、そしてボールを止めたことをここぞとばかりに偶然だと主張する。

「そ、そうか？ でも、腕は大丈夫そうだな！」

「何聞いてたんだ！ 腕は大丈夫じゃないぞ！ 誰か交代してくれ！」

亮はこの流れで交代しようと企んだ。

「？ いや、お前、さっき普通に藤本さんに手振ってだろう！ それに、今お前が口に添えてる両手は何だー！？」

「あ………」

亮は間抜けにそう呟きながら、叫ぶために口に添えている自分の両手を見た。

「それに交代要員はもういないぞー！ 佐藤にはもう蹴らせないから、この調子で頑張ってくれー！」

「な………」

愕然とする亮を尻目に、相馬は佐藤に「お前が素人相手に全力で蹴るとか有り得ないんだから、やめろよなー」と今更なことを注意している。

しかし、亮は相馬が佐藤にエールを送っていたのをすっかり見て

いた。

そんな間抜けなやり取りの前の、亮がボールを弾いた時から、梓は亮の同窓達をずっと注視していた。

亮の同窓達は亮がボールを弾いた時に、揃ってあちゃあと額に手を当てたり苦笑したりで、相馬とのやり取りが始まった時などは、座って観戦していた男子は地面をバンバンと叩いて爆笑し、女子は苦しそうにお腹を抱えて肩を震わせたりしていた。

そんな彼女らを見て梓は少し吹き出しそうになるが自制し、見届けた後は恵梨花に声をかけ亮の相馬との間抜けなやりとりは見ずに、一緒に神林と千秋に目を向ける。

こちらは神林が苦しそうに肩を震わせていて、千秋などは、ぶはつと吹き出し腹を抱えて盛大に笑っていた。

それから千秋が思わずといった様子で、口に両手を添えて亮に向かって何かを叫ぼうとしたように見えた。

叫ぼうとした、となったのは途中で血相を変えた神林によって、後ろから口を抑えられたからだ。

それから神林はすごい勢いで首をブンブンと横に振って見せ、自らの口の前に人差し指を当てる。いわゆる「シー」のポーズである。

片手で口を抑えられている千秋は、そのままコクコクと頷く。

千秋から手を離し、ホっとした様子の神林に向かって千秋は誤魔化すように笑みを浮かべながら頭を掻いている。

「……………」

「……………」

「もう、なんかね……………」

「ええ、わかってるわ……………」

二人の様子を見ていた恵梨花と梓は、多くを語ることは避けながらも、同じ考えを共有した。

間違いなく、亮とあの二人はタダならぬ関係であると。

そこで恵梨花に先ほどと同じ疑問が頭に降りる。

どうして亮は神林を知らないと言ったのか。

嘘を吐いている様子はまるで無かった。では、何故、と恵梨花が頭を捻る。

そこで天啓、というか、恵梨花に一つの考えが舞い降りる。

それを恵梨花が吟味したところ、考えれば考えるほど、それしか無いといったものだと確信する。それどころか、何故、この答えを思いつかなかったのかと思っただぐらいである。

強く頷いた恵梨花は、梓に自分の考えを聞いてもらおうと振り返る。すると梓は怪訝な顔つきで眉を顰めて遠くを見ていた。

小首を傾げた恵梨花がその目の先を追うと、向こうの方へと歩いている後ろ姿しか見えない女子生徒と、恐らく亮のクラスのコートを眺めていると思われる一人の大柄な男子生徒がいた。

「あ……」

大柄な男子生徒が見知った顔であったため、恵梨花の口から呟きが漏れる。そこで、はっとなった梓が恵梨花に振り向いた。

「どうしたの、恵梨花？」

「ん、あそこにいるのって……」

「ああ、そうね」

そう返した梓は顎に手を当て、少し悩んだ様子を見せると、頷いて言った。

「恵梨花、ここで待っていてくれる？ 彼とちょっと話してきたいから……」

「？ いいけど……」

それを聞いた梓は「じゃあ、待ってて」と言い残し、大柄な男子生徒の元へと向かった。

恵梨花は何の話だろうかと首を傾げた後に、自分の考えを聞いてもらうことを忘れていたことに気づく。まあ、後でいいかと思いつき、自分の彼氏の応援のため、コートに目を向けた。

梓は男子生徒のいるところまで足を進める中、まるで予想だに
なかつた事態に軽く困惑していた。

恵梨花と話しながら、他に亮を変つた目で見ている者がいない
か注意深く周囲を観察していると、予想していた人物とまつたく予
想していなかつた人物を見つけた。

予想していたのは、今向かっている男子生徒。
していなかつたのは、その近くにいた女子生徒だ。

先ほど恵梨花は気づかなかつたが、今向かっている男子生徒の近
くで一人の女子生徒が亮のことを見ていたのだ。

それだけなら特に驚きはしなかつたが、その時の目がまるで亮の
同窓達と同じようなものであり、その女子生徒と亮の繋がりがまる
で読めないことが梓を困惑させていた。

(まさか、あの女性むすめまで亮くんをあんな風に見てるなんて……)

それもそのはず、女子生徒の名前は本塚モトツカ智子トモコとって、梓が所属
する生徒会の現生徒会長である。彼女が亮と同じ中学校でないのは、
調べるまでもなく本人から聞いていた梓は知っている。

生真面目だと評判の彼女が楽しげに亮を見ていることに気づいた
梓は驚いて目が止まってしまった。

すると生徒会長は自分を見ている梓にフレームレスの眼鏡越しに
気づくと、意味深に悪戯いたづらっぽく微笑み、小さく手を振ってから背を

向け去って行った。

それを見た梓は生徒会長も亮と何らかの関係があるのは、自分の当て推量でないだろうと確信する。

（一体どれだけ人の好奇心を刺激してくれたら気が済むのか、あの男は……）

顔を顰めるも最後にはクスリと笑った。しかし、生徒会長との関係に関して興味は尽きないが、今はそれを調べる状況ではない。

自身の好奇心に蓋を閉めた梓は大柄な男子生徒の前で立ち止まり、見上げる。

短髪で意思の強そうな目、ともすれば「いかつい」とも見える容貌と、隆々と鍛え上げられた肉体から、相変わらず自分に厳しい練習を課しているのだろうと梓に感じさせた。

「こんにちは、郷田^{ユウタ}さん」

微笑と共に小さく頭を下げた梓に、郷田は頷きつつ、然程大きくない無骨な声で同じ挨拶を返す。

素っ気ない態度にも見えるが、そうでないことを知っている梓は気にしなかった。

代わりに悪戯心がかま首をもたげたのか、茶目っ気をこめて言った。

「それとも……、正義のシャイアンと呼んだ方がいいですか？」

第二十四話 誰の厄日か

「それはやめてくれと言ったと思うんだが、鈴木さん」

疲れたように言う郷田に、梓は悪戯っぽく微笑んだ。

「そうでしたっけ、それは失礼しました」

おどけたように返す梓に郷田は「あなたが忘れるはずないでしょう」と言わんばかりにため息を吐いて見せる。

クスリと微笑んだ梓は、自分が来る前から、今もずっと一点を見続けている郷田の横に並んで、同じ光景を共有する。

そうやって向けた目の先には、ゴールの前に立っている亮の後ろ姿があった。

試合はどうやら、亮のゴール近くのコーナーキックから再開されるようで、また亮の出番になりそうである。

梓はチラと隣にいる郷田の顔を見上げる。

何かの感情を表しているという訳ではないが、視線は一定して亮に向かっている。

やはり見定めに来たのだろうと、自身の推測の裏づけをとった梓の耳に、コート近くから声が届いた。

「言っておくが、亮ー！ 同点だと、延長だぞー！」

そう叫んだ明に振り向いた亮の顔は露骨に嫌そうに顔を顰めていた。

再び前方に目を向ける際に頭をガシガシと掻く亮の姿に、あれはあの男の苛立った時の癖だろうか、梓は目線はそのままに隣の大柄な男に声をかけた。

「部の調子はどうですか？ 大会近かったですよね？」

「……悪くない。神林と野村がこの一年で大きく腕を上げてくれたからな」

その返答には、後輩の成長を誇らしく思っているような響きがあった。

だがそれは相変わらず後輩にも厳しい練習を課していることの証明みたいなものである。梓はそのことを指摘するまでもなく質問を続けた。

「行けそうですか？ 全国」

「やはり難しいが……不可能ではない、と言ったところか」

続いた返答には、自信よりも今年こそはといった決意が垣間見られる。

そこから梓は去年の県大会の成績は団体でベスト8だったことを思い出す。

不可能ではないと言ったのは、去年のメンバーよりも強くなって

いる自信があるのだろう。それならば確かに不可能ではない。

「頑張ってください。……では、主将である郷田さん、あなた個人は？ 去年は惜しくも準決勝で敗れての三位でしたよね」

先ほどまでの話は団体の部の話で、今度は個人の部の話である。

郷田はすぐには言葉を返さず、少しの沈黙の後に小さく苦笑した。

「よく覚えていられる」

「あたしは大会に応援に行ってたんですよ。覚えてても不思議ではないでしょう？」

「そうだった……」

そう返した声はどこか遠くに向かっていているようで、去年の、その時を思い出しているのだろうと梓は思った。

「去年の雪辱を晴らして……と言いたいところだが、やはり、これも難しいだろうな」

返ってきた答えに梓が片眉を吊り上げる。

団体の部の話をしている時ほど、声の調子に自信が感じられない。

これ以上は聞かない方がいいだろうかと、話題を変えようと梓が思った時、コートから喚声が上がった。

佐藤がコーナーから蹴ったボールが、亮のいるゴールの前に運ばれる。

目はコートに向けたままの二人だったが、一層の注意を傾けた。

ボールを受け取った男子生徒は、亮のクラスメイトをフェイントでかわすと、ゴールに向かってボールを蹴った。

残り時間も少ないせいか、亮でなく、ちゃんとゴールを狙ったように見えたシュートだった。

しかし、ボールが向かった先の近くには偶然のように亮がいて、ボールは伸ばされた亮の手に弾かれて軌道が逸れ、ゴールの後方へと飛んで行った。

すかさず、恵梨花が嬉しそうに亮に賞賛の言葉を投げ、軽く振り向くだけで亮はそれに応える。

一方で、蹴った男子生徒は弾かれたことに対してなのか、不思議そうに首を傾げて亮を見ている。

そして亮のクラスメイトの相馬が、先ほどまでの罪滅ぼしなのか、それとも純粹に、なのか、亮に「よく止めたー、桜木ー！」と、実際にクラスメイトらしいエールを送る。

しかし、見事ゴールを止めて見せた亮だが、ボールが向かった先に偶々近くにいたことから、マグレ感が強い。

そう思う生徒が多い中、梓はこう考えた。

そもそもボールが飛んだ先の近くに亮がいたのは、本当に偶々なのだろうか。

あの男なら色々考えることが出来そうだと「延長を避けるためな

「仕方がない」と言っている様な、やる気の感じられない男の背中を見てから梓は隣の男に本題を切り出した。

「彼が気になりますか？」

「……彼とは？」

「恵梨花の彼氏のことですよ」

「わかっているでしょう？」と言わんばかりの口調である。

郷田もそれはわかっているのだろう、少し気まずげに口を開く。

「俺が気にならない方が……」

「おかしいですよね」

続くはずの言葉を梓が断定口調で繋げ、若干唸る郷田に梓が問い掛ける。

「今のところどう思われていますか、彼のことは？」

問われた郷田は、亮を見据える。

「どうにも覇気の無い男だ……クラスみんなで頑張るべきところでも、やる気が一切感じられない」

続く「なぜ、あんな男に……」と不満げに小さく呟くの聞いた梓は、軽く言い返す。

「団体競技は好きじゃないらしいですから」

団体競技が好きか嫌いかも聞いてはいないが、梓はそう言った。

やる気が無いのはまったく否定できない。

しかし、覇気は無いのではない。あの男は学校にいる間は、見事にそれを全部内側に隠している。

ヒューマンウォッチングが趣味の自分でも気づけないほどに。

梓は眉間に深い皺を刻んでいる郷田を見上げた。

「それに、彼には彼なりにいいところがありますよ」

「……例えば？」

「そうですね……、先ほどは見てませんでしたか？ 恵梨花にボールが当たりそうになったところを、自分の体で恵梨花を庇いながら、ボールをキャッチして見せましたよ」

「ふむ……」

郷田は見直したような、そんな感嘆の息を漏らしてから軽く言い添える。

「まあ、悪い人間では無さそうだ」

「それはあたしも保証します。それに、恵梨花が好きになった男ですし……何より、咲が笑顔を見せるくらいですよ？」

「山岡さんが……？ むう……」

梓の言葉には、郷田を驚かせるに十分な効果があったようだ。

暫し何かを考えるような沈黙の後に、郷田が口を開いた。

「あの三人がああ男のところに行ったと聞いたが……」

「みたいですね」

この人から当然あっていい質問がようやく来たかと梓は返答する。

「あの男と友達になったと三人が言っているらしいが……本当のところは？」

「あたしも詳しく聞いた訳ではありませんが……、ちゃんとした友達ということはないでしょう」

梓が詳しく聞いていないのは事実である。

しかし、推測であるが大体の全容は把握している。

それを話さない理由は、亮の断りをとっていないことと他にもあるが、それも今口に出すことではない。

そんなことを思っている梓に郷田が再度、質問する。

「そうだろうな……大丈夫なのか？」

「大丈夫です あたしは心配していません」

力強い口調の梓に、思わずといった風に郷田が振り向く。

「それは……」

「もちろん、恵梨花がです」

真つ直ぐ目を見てくる郷田に、梓も同じように見返す。

「……理由は？」

「あなたが人に話して欲しくないことがあること同様に、彼にも人に話して欲しくないことがあります 理由はその中に含まれています」

「……」

言っていることはわかるが、もうちょっとハッキリしたことを聞

きたいと不満げな顔の郷田に、梓は安心させるように柔らかく微笑んだ。

「心配はいりませんよ……本当に」

郷田は葛藤するように眉を顰めるが、最後には息を吐いてから言った。

「あなたがそう言うのなら……、それにしても、あなたにしては随分、あの男を買っているようだ」

「恵梨花が認めた人ですから……、それに、あたしも彼を信頼しています」

「恵梨花の安全に関しては特に」と続く言葉は内心で呟いた。

梓のそんな内心を読み取れた訳では無いだろうが、梓なりに亮を信頼していることを感じ取れたのだろう。郷田は少しばかり安心の表情になって、再び亮に目を向けた。

コート上では先ほどと同じようなシーンになっていて、今度はボールの前に回りこんだ亮の腕によってボールは弾かれた。

それを見た郷田は、自分に言い聞かせるように呟く。

「まあ、体は思いの外、頑丈かもしれないな……いざという時、盾の役目ぐらいはできるかもしれん」

聞こえた梓は、少し吹き出しそうになった。

(あの男は盾どころか、攻撃力の底が見えない剣よね……)

しかし、コート上で相馬が「よく止めたけど、桜木ー！ 藤本さん、助けた時みたいにキヤッチしろよー！」と亮に向かって叫び、「あれは偶々だー！ マグレだー！」と叫び返す亮を見て、梓は少し肩を落としそうになった。

ちなみに、亮の同窓の男子生徒達は周りから白い目で見られながら爆笑し、女子生徒達 周りの目を気にせず爆笑している千秋を除いて は苦しそうにお腹を抑えている。

そこで亮がゆっくりと、本当にゆっくりで、それでいて何気ないように首をグルリと半周させた。

その途端である。

爆笑していた男子生徒達は急に空にある雲の数や、足元の小石の数が気になったようで、視線をコートから離して指でそれらを数え始めた。よく見ればその顔には冷や汗がダラダラと流れている。

反対に女子生徒は少し嬉しそうな顔になって、手の平だけを小さくヒラヒラとさせた（千秋は焦った様子で止めようとしている神林を無視して、嬉しそうにピョンピョンと飛び跳ねている）。注意して見ていなければ気づかないだろうが、それらは亮に込んでいるように見えた。

一瞬呆気にとられた梓だが、検討は後じゃないと、と逸る気持ちに無理矢理切り替える。

チラと見上げると、亮の相馬への返答が気に入らなかったのか、郷田は眉を顰めている。

内心でため息を吐いた梓は、注意を逸らすことも狙って、気にな
っていることを郷田に問いかけた。

「ところで、郷田さん……『太陽』の人達の様子はどうですか？」

それに対して郷田が振り返る。

「相変わらず……と言ったところか。……あなたと山岡さんが、い
くらあの男を認めた態度をとっていても、連中の不満は消えない」

予想通りの答えであるが、少しばかりの落胆が否めない梓に郷田
は「^{タタ}但し」と続ける。

「不満は消えないが、抑止力にはなっている……、いつまで持つか
はわからないが」

「そうですか……」

これも予想の範囲内であるが、上手くいつてることを確認できた
梓が胸を撫で下ろすと、郷田が前を横切った。

「それでは、俺はこれで失礼する」

試合の時間はまだ少し残っているのにと思った梓だが、ここで返
した言葉は挨拶でなく再度、質問だった。

「もう一度だけ聞きますが、彼の……亮くんの印象はどうですか？」

すると郷田は立ち止まり、振り返らずに肩を竦めて見せた。

「噂ほど、ひどい男では無いらしい」

それだけ言うと、郷田は梓の前から去って行った。

言葉の調子から、郷田の亮への印象は「可もなく、不可もなく」といったところだろうか。梓は見当をつけた。

コートに目を向けると、佐藤がドリブルをしている。

次々と亮のクラスメイトを抜き去り、ゴールに向かっていく様子が少しムキになっているように見えた。

よく考えたら仕方のない話かもしれない。

ジュニア代表に選ばれながら、最近まで碌に噂に上らないような地味な男にボールを弾かれ、ゴールを防がれたのだから。

この事実だけが噂に広がってくると助かるのだが、と梓が見ていると案の定である。

先ほど、同じサッカー部の部員に止められたにも関わらず、鬼気迫る勢いで佐藤がゴールに向けてシュートした。

そのボールは再び亮に直撃コースのように見え、亮に目を向けた梓は一瞬であるが、亮の背中から葛藤のようなものを感じ取った。

そして葛藤は延長を避ける方向に決着が着いたようで、亮は両腕を顔の前で構える。

そして、先ほどと同じくボールは亮の腕によって弾かれたが、先ほどと違う点が二つあった。

一つは、先ほどボールがぶつかってもビクともしなかった亮が少しばかり後ろによるけた。

あのボールにぶつかったら標準的な反応かもしれないが、先ほどと比べたら如何にも不自然な反応で、亮という人間を知っている者全員に苦笑を誘った。

そして、もう一つはボールが弾かれた先であつた。

亮の両腕にぶつかったボールは壁にぶつかったように、綺麗に反射し……、

「おい、佐藤、大丈夫か!？」

「駄目だ、完全にノビちまつてる」

「なんてこつた……、サッカー部の至宝がー!!」

ボールを蹴った佐藤の顔面に直撃した。

焦った様子で佐藤に駆け寄るクラスメイト、サッカー部員を、亮のクラスメイト達が亮と交互に見ている。

すると、そんな彼らの顔が引き攣った。

ボールをぶつけようとしていた佐藤が、自らのシユートによってノビている。

きっと、彼らの頭に「天罰」の二文字か何か舞い降りたのだろう。

そんなこんなで、サッカー部員が嘆きの声を上げたり、亮が頬をポリポリと掻きながらそれらを見ている中、審判のホイッスルによって試合は終了を迎えた。

「地味な活躍……」

無理に出てもらった訳だが贅沢を言えば、もうちょっと派手に活躍して欲しかった。

そう思いながら梓がため息を吐く。

「いくらなんでも限界があるんだからね、亮くん……」

それは彼女にしては珍しいほどに、愚痴めいた口調だった。

「ワザとじゃないんだな？」

「ああ、狙ってできるかよ」

「お前なら出来そうだけど……佐藤に苛立ったとかは？」
「いい加減にしろとは思ってたな」

先ほど体育祭の閉会式を終え、開会式に行った時と同様の面子で教室に帰るため廊下を歩く中、東、夏山、川島の後ろで明と亮が小声で、亮が出ていた試合の最後の悲劇の話をしていた。

亮の出た試合だが、結果だけを見るとゴールキーパーとなった亮は、最初の佐藤のシュートをスルーした以外は見事にセーブして見せ、それによってリードを維持したままクラスを勝利に導いたと言

つても過言ではない。

そして、昼休みを挟んだ後の決勝戦では、亮が出て下手に活躍し、それによって応援に来ていた女子の注目を集めることをクラスメイ卜達は嫌ったのか、寝ていた亮に最後まで「交代」の声はかからなかった（恵梨花、梓、咲が決勝には時間が合わなかったため、観戦に来ていないのも大きい）。

このことに関しては、亮もクラスメイも利害が一致した瞬間であり、嬉々として、と言ってもおかしいが、亮はゆっくりと午後を睡眠で過ごすことができた。

「それにしても、佐藤が蹴ったボールにぶつかった時は焦ったけど、よく大丈夫だったな、亮」

「全然、こたえて無さそうだったしな……亮って実は体、頑丈なのか？」

小声で話していた亮と明に夏山と川島が振り返る。

「当たり所がよかっただけだって……、見た目ほど威力無かったんだと思うぞ」

そう言っつて誤魔化そうとする亮に、東が振り向いた。

「なんならキャッチすればよかったのに」

「あんなもん、キャッチ出来るかよ」

間髪入れずに言い返した亮に、東は不思議そうな顔になる。

「何言っつてんだよ、亮なら楽勝だろ」

「は？」

あからさまに訝しげな顔になった亮に、明が苦笑して口を開こうとするが、それより先にまたも東が声を上げた。

「あ、あそこに藤本さん達が！」

手を目の上に添えて、廊下の十メートル程先の階段に目を向ける東に釣られて、その場にいた東以外の面々も同じ方向を見る。

そこには確かに、階段を昇っている梓と咲に、踊り場に差し掛かった恵梨花がいた。

だから、なんでこいつは自分よりも先に気づくんだと、亮が若干呆れの目を東に向ける。

そこで、先ほどの東の声が聞こえたのだろう、梓が振り向いてから恵梨花を呼び止めた。

振り向いた恵梨花が亮に気づいて嬉しそうに手を振ってくると、亮以外の面々が恵梨花のスマイルに顔を赤くする。

そんな彼らを横目に、あれは一種のテロではないかと思いつながら手を振り返そうとした時、亮の目が大きく見開かれた。

三人娘は全員、こちらを見ていて気付かない。

恵梨花が一步踏み出したコの字型の踊り場に、一人の男子生徒が勢いよく駆け下りてきたことに。

声を出してもそれと同時にになり、間に合わないと見た亮は、前にいる同じ危機に気付いて硬直した三人の間を一瞬にして走り抜ける。

亮が走り始めたのと同時か、男子生徒と恵梨花がぶつかり、何が起こったのかわからない顔で重力に従って落下を始めた恵梨花に、全身の毛穴が開いたような焦燥感を味わいながら亮は全力で駆けた。

ふざけるな!!

怒りにも似た叫びが亮の内心で木霊^{コタマ}した。

第二十四話 誰の厄日か（後書き）

サブタイトル……作者は恵梨花に一票

第二十五話 骨……？

頭の中が真っ白になったのを梓は自覚した。

だが、それでも近い方の手は勝手に動いていた。落下途中の彼女の親友に近い方の左手が。

しかし、伸ばした左手はあとわずかな距離、というところで止まり、空を掴む。

知らずの内に手すりを掴んでいた彼女の右手が、それ以上の距離を伸ばすことを許さなかった。

危ういバランスで階段の上にいる彼女の体を支えているのと同じに。

助けるために自身も落ちては仕方がないとは言え、この時ばかりは無意識かつ冷静に動いていた自分の右手に梓は腹立たしく思う。

が、それよりも掴めなかった左手が意味することに彼女の顔が絶望の色に染まる。

そんな彼女に追い討ちをかけるように、更なる悲劇が文字通り舞い落ちる。

階段で一、二段ほど斜め上にいたはずの梓のもう一人の親友が、手を伸ばした体勢で恵梨花の後を追うように落下しているのを梓は視界の端で捉えた。

梓と同じように手を伸ばして助けようとしたのだろう。同じ親友として当然の行為かもしれない。

しかし、その時の勢いが余ってしまったがために自らの足を滑らせてしまった。

梓のいる側とは反対側に手すりがなかったことも要因の一つかもしれない。

到底、届く距離でないとわかっていても、空を掴んでいた梓の左手が咲に向かって懸命に伸ばされる。が、やはり空を掴んだ。

梓の目の前で、二人の親友が高さといったエネルギーを伴って地面に激突しようとしている。

「……………ッ！」

悲鳴になりきれない悲鳴が梓の口から漏れる。

かつて体験したことが無いほどの絶望感によって顔を歪めた梓は、迫り来る未来を恐れた故か、それとも認めたくないためか、歯を食いしばる様にギュッとまがた瞼を閉じた。

「……………？」

しかし、重力が叩く衝撃の音は梓の予測よりも少し遅く、

「……………！！！」

大きく『一度』だけ梓の耳に届き、ビクッと彼女の体を竦ませた。

背に廊下の無機質な冷たさを感じながら、亮は自分の心臓が強く脈打っているのに気づく。

助かった。

この場合、「間に合った」が一番相応しいのかもしれないが、廊下の上で横たわっている亮の心中を占めたのはこの言葉だった。

自分が傷つくよりも、他の誰かが傷つくよりも、怖いと、恐ろしいと感じたがためだろう。

それほどに大事な存在となったということなのだが、そういった考えには頭が回らず、それよりも体中に安堵の波が広がるのを亮は感じた。

右手と左手が支えている自分の体の上に横たわった女の子は、シヨック故かピクリとも動かない。

落下途中で気を失ったのだろうかと思いを向けようとした時、上から声が届く。

「恵梨花！ 咲！！」

続く、階段を駆け下りる足音を聞きながら、あの女のあれほど焦

った声はこれが初めてで最後かもしれないなど、聞こえた声の焦燥さとは反対に、亮は呑気に考えた。

そこで梓の声に反応したのか、亮の体の上に横たわっている『二人の』女の子がほぼ同時に身じろぎする。

「大丈夫なの！？ 恵梨花！ 咲！」

梓が廊下の上で膝立ちになり、亮の体の上で向き合うように横たわっている恵梨花と咲に身を乗り出して問いかける。

「な、何が……？」
「……？」

恵梨花と咲は二人揃って困惑した顔で、ゆっくりと体を起こす亮の体の上で。

「怪我は！？ ……無い……？ ……みたいね……どこか痛むところはない？」

焦りを顔に浮かべた梓が勢いよく尋ねるも、一見したところ二人共大きな怪我はない。それがおかしいと感じたのか、困惑気味に梓は眉を寄せる。

恵梨花と咲は自分の困惑はそのままに、言われた通りに自分の体を見回す。亮の体の上で。

「え……と、特に……？」
「……大丈夫」

二人の返答に、ひとまずは大丈夫そうだとわかって感極まったのか、梓はガバッと二人をまとめて抱きしめた。

「ああ、よかった……」

「あ、梓……？」

突然の抱擁に驚く恵梨花だが、梓の声が震えているのに気づいたためか、何も言わずに黙っていた。繰り返すが、亮の体の上で。

梓が二人を抱きしめたまま、ゆっくりと口を開く。

「信じられない……二人共、無事だなんて……」

「そうだ……私、たしか……」

「ええ……階段から落ちたのよ」

「……じゃあ、何で私、無事……？」

恵梨花はそう言いながら、ゆっくりと下に目を向けて驚声を上げる。

「りよ、亮くん!?!」

恵梨花は、ようやく自分がどこにいるのか気づいた。

「な、なんで、亮くんがそんなところに!?! ……もしかして、亮くんが助けてくれたの!?!」

「あ……! 二人共早くそこからどいてあげて! 亮くん、大丈夫!?!」

梓は驚いている恵梨花を横に、亮を案ずる声を出す。

どうやら梓は二人が落ちた時から二人しか見えていなかったよう

で、今更ながらに亮が二人の下にいて、そしてその事の重大さに気づいた。

恵梨花と咲は急いで亮の体の上から下り、梓と一緒に廊下の上で膝立ちになって亮を見下ろす。

「亮くん、大丈夫!?」「いくら何でも、無茶すぎよ! 大丈夫なの!?」「大丈夫……?」

三人娘が口々に心配の声を上げる中、亮はむくりと体を起こした。その顔は無表情で、三人は亮が怒っているのかと不安の顔になるが、違った。

「ゲホツ! ……ゲホツ!」

三人娘が揃って目を向ける中、いきなり亮は咽^{むせ}始めた。いきなりでは無いかもしれない、当然あって然るべきことだ。

「だ、大丈夫……?」

無表情はこれを我慢していたためかと気づいた恵梨花が心配そうに手を伸ばすが、亮は「いいから」の意味を込めて手を振る。

すぐには治まらず、座っている体勢がきつくなっただのか、亮は四つん這いになって盛大に咳き込み始めた。

「亮!」「大丈夫かよ!?」「無茶すぎだろ!」「藤本さんは無事か!?」

そこで今まで呆然としていたのか、亮の友人達が亮の身を案じた

(アホ一名を除く) 声を上げながら駆け寄ってくる。

亮は近寄ってくる友人達を止めるように咽ながらも片手を押し出すだけで応える。「大丈夫だ」と言いたいのだろうが、咽ている最中なので、これが精一杯である。

亮は地面に着地した時、腹部に届いた衝撃のためにずっと咳き込みたかったが、恵梨花と咲が上に乗っている状態だったので、亮は二人が下りるまでなんとか我慢していた。

にも関わらず、二人は亮の上で起き上がり、梓は亮が見えていなかったようで、我慢している亮にとどめを刺すかのように、亮の上のっている恵梨花と咲を抱きしめ、そのせいで更なる衝撃が亮を襲った。

腹筋に力を入れていたのと、咳き込むのを我慢していたため「早く下りてくれ」の一言が言えず、結果が今である。

「はあ……はあ……、俺より……恵梨花、咲、本当に大丈夫か？」

座り直した亮が息も絶え絶えに問いかける。

「私より、亮くん……」

「いいや、俺より恵梨花と咲だ。どうなんだ」

恵梨花が問い返そうとしたが、亮は断固とした口調で遮った。

真っ直ぐ見てくる亮から言う通りにした方がいいと思ったのか、恵梨花と咲は座ったまま再度、自分の体を見回す。

「大丈夫だよ」
「……私も大丈夫」

恵梨花と咲が言うと、亮もそれを認めたのか、ホ、と肩の力を抜いた。

「亮くん、私の下敷きになって助けてくれたんだよね……？　ありがとう……ごめんね、大丈夫なの？」

「ああ、俺なら大丈夫だ……骨もどこかいったように無いしな」

碌に自分の体を点検してもないのに、そう返す亮に梓が不審がった。

「本当に大丈夫なの、君？　いくら二人が軽くても……階段から落ちた二人の下敷きになって、どこも何ともないなんて」

梓は口にしながら余計に信じられない気持ちになったようで、目を驚きに見開くも、心配そうに、そして注意深く亮の体に目を向けている。

「……落ちた……二人？」

そこで呟いたのは恵梨花で、二人が、つまりは咲も一緒に落ちたことが、まだわかっていなかったようだ。

訳もわからず階段から落ち、二人揃って亮の体の上に横たわっていたものの、今だ説明なしに混乱のままだったので無理もない。

「そういえば、何で咲まで……？」

「恵梨花を助けようとして一緒に落ちたのよ」

「嘘!？」

「生きた心地がしなかつたわ」

恵梨花の問いに返した梓は、自分のした最悪の想像を思い出したのか、顔を悪くする。

それを見た恵梨花が申し訳無さそうに口を開く。

「ごめんね、心配かけて……」

「いいのよ、無事でいてくれたんだから」

「ありがとう、梓……、でも、咲！」

首を横に振って微笑む梓から恵梨花が咲に振り向く。

「何で、そんな無茶したの！ 咲まで大怪我するところだったじゃない！？ お願いだから、もう、そんな無茶しないでね？」

途中から若干、涙目になっている恵梨花の言葉に、咲は神妙に俯いている。

続く恵梨花の言葉は助けに来てくれようとしたことの礼も混じっていたが、説教じみ始めてきた頃に亮が割って入った。

「そう言っただけだよ、恵梨花。体が勝手に動いてしまう時ってのはあるもんだ」

「けど、亮くん！」

「わかってる。恵梨花が言ってるのも、もつともだ」

亮は頷いてから咲と目を合わせた。

すると思わず、その時のことが頭に流れる。

あの時　恵梨花が落下を始める直前、既に亮は動き始めていた。かつてない焦りと共に全力で走り、階段手前でジャンプした。

恵梨花が途中の階段で頭がぶつかりそうな時、ギリギリのタイミング、伸ばした片手で恵梨花の肩を掴めた。

その後、ジャンプの勢いが残っているため、このままでは片手で変に恵梨花を抱えた体勢で恵梨花もろとも階段にぶつかりそうなので、その前に階段を蹴り、出来た滞空時間を利用して恵梨花を抱え直し、両足で着地。が、亮が恵梨花をキャッチした時に思い浮かび、出来ると見込んだプランだった。

そのプランを実行しようと階段を蹴ろうとした瞬間、上からの影に　咲が降ってきたのに亮は気づいた。

血が凍る思い　それと同時に咲が落ちてきた理由も理解した亮は急慮、プランを変更。後方に向かうために蹴ろうとした足を、上に　咲に向かうように蹴る。

咲に向かつて飛んだ亮は、残っている片手でなんとか咲をキャッチする。

それから階段上での着地はやっぱり不可と判断した亮は、今度こそ後方に、階段のない地面に向かうように、思いっきり階段を蹴った。

そこで気づいたのは、片手で一人ずつ女の子を抱えている亮は、どうあってもまともな着地が出来ないということ。

それならばと、亮は地面に激突する寸前に二人の女の子を両手で抱きしめ、自分の後頭部がぶつからないように、背中での着地を果

たした。

つまり、亮は地面と女の子二人のサンドイッチになった訳である。

聞こえは簡単かもしれないが、どれも魂を削るような作業だった。あれをもう一度成功させると言われたら、無理だろうなと思いつつ、亮は咲の目を見て言った。

「咲、助けようとするのはいいが、これからはもつと自分の身を省かえりみるよ？」

咲はジッと亮の目を見ると、コクと頷いた。それから何故か、恵梨花がギョッと咲を抱きしめた。

しかし、亮の言うことはもつともかもしれないが、この場合、一番自分の身を省みなかったようなことをしたのは亮である。

そのことに気づいた梓が呆れの声を出す。

「二人の下敷きになって助けた君がそれを言う……？ 本当に君、体大丈夫なの？」

「そうよ、亮くん、本当に大丈夫？」

「大丈夫だって……それに俺の場合、結果的に二人を助けることになっただけだろ。恵梨花だけなら、下敷きにならずにすんだんだ……咲、責めてる訳じゃねえからな？」

二人に答えていた亮は途中ではつとまって咲と目を合わせる。亮の様子から、本音で言っていると感じ取れたのだろう、咲は頷いて返した。

「……あたしはよく見てなかったんだけど……、よく咲も助けられたね？ ……いえ、恵梨花だけ、で……も……」

そう言いながら梓は廊下の向こう側、亮達が歩いていた方向に目を向ける。

「君……、あ、あの一瞬をどれだけの速さで走ったら……」

亮が走った距離を目算したのか、信じられないように呆然と呟いた梓から、あのタイミングである距離なら、もしかしたら世界記録が出るかもしれんなと亮は思ったが、賢明にもそれは口には出さなかった。

「……それより……」

代わりに言いながら亮は階段の上に目を向ける。

そこにいたのはやはりというか、朝、明にぶつかりそうになった一年生の三人である。

今だ呆然と立っているところから、恵梨花とぶつかった時からずっとその状態なのだろう。

その内の一人が自分達に目を向けている亮に気づくと、連鎖したように残りの二人も亮に気づいた。

それと同時に、知らずに亮は目に力を籠め、一年の三人を睨みつけていた。

「お前ら……」

言いながらギリと奥歯を噛み締めると、途端に亮を中心として冷たい空気が流れ始める。

一年の三人はそんな亮から何が伝わったか、目を見開き、ビクッと体を震わせて立ち竦んだ。

まさに「蛇に睨まれた蛙」の構図だが、この時、先に動いたのは蛇でもなく蛙でもなく、三人の女の子だった。

恵梨花、梓、咲は一年の三人よりも近くに肌で伝わった空気と経験のためか、感じ取った危険性を避けるため素早く動いた。

恵梨花と咲は座ったままの亮の両腕に飛びつくように抱きつき、梓は立ち上がり一年の三人に向かって毅然とした態度で言い放った。

「あなた達！ 放課後になったら生徒会室に来なさい！ 私は現生徒会、書記の鈴木梓。事の経緯を職員室に報告する義務があります。わかったわね！？」

生まれつきの威厳ではないかと感じさせるほどに、堂々とした口上だった。

怒鳴るように一息に言われた三人は、直立して「は、はい！」と揃って返事をし、逃げるように上への階段を昇っていった。

見届けた梓は、ホ、と安堵の息を吐き、チラと横目を亮に向ける。

「ごめんなさい……けど、彼らの処分はあたしに任せて頂戴」

珍しいほどに申し訳なさそうな声色から、すっかり氣勢を削がれてしまっていた亮は責め句を失くしてしまう。

頭ではわかっている。梓がそうした理由も、そして誰のためにしたのかも。

わかってはいるが、自分の大切な女の子があわや大怪我をしかけた。

それを起こした張本人達には、沸き上がる怒りをぶつきたい。

頭で理解している部分と感情がせめぎ合った結果、つい亮は不機嫌な目を向けてしまった。

「そうは言ってもな、あん…………た…………」

言っている途中で亮がようやく気づく。自分の、それぞれの腕から伝わる大きめな山と、控えめな山の柔らかい感触に。

「私は大丈夫だから、ね？」

「…………」

恵梨花と咲が巻きつくように亮の腕を抱きしめ、見上げてくる。

一体、何が要因なのか。亮は自分の頭からプシューと何かが抜け出るのを感じ、それと同時にかあっと顔を赤くし

「わ、わかった…………」

と、返してしまった。

その返事に三人娘が肩の力を抜くように、ホ、と一息吐く。

「鈴木さんに任せとけよ、亮」

「……そうだな」

今まで黙って見ていた親友の声に亮は振り向かず返事をする。

「……なあ、何で、大丈夫なんだ、亮？」

「？ 何がだ？」

川島の不思議そうな問いかけに亮が振り向く。

「いや、お前、藤本さんと山岡さん二人を空中でキャッチして……いや、それが出来たことも驚きだけど、その二人のクッションとして地面に落ちて、何でそんなに平気そうなんだ？」

続く問いは夏山のものだが、これにはどう返そうか亮は少し悩み、こう言った。

「……こう見えて、けっこう骨太でな」

恵梨花、梓、明は「まさか、それですます気か」と言いたげに顔を引き攣らせる。咲は無表情だ。

しかし、川島と夏山は大方の予想に反して

「そうか……」「なるほど……骨太か……」

納得顔で口々に呟いた。

亮以外の面々が、「え？」と二人に目を向け、亮が内心で「うむ」と頷いた直後、

「ふざけんな！」「何でお前はそれですませられると思うんだ！」

川島と夏山はかつと目を見開いて亮に抗議する。当たり前だ。

「いいか、亮……お前は何か誤魔化そうとしてることが時々あるけどな……」

川島が滔々と述べ、その先を夏山が眼鏡をクイッとやりながら続ける。

「そうだ……そのどれも、どれも！ 適當過ぎるぞ！ 誤魔化したのか、誤魔化す気が無いのか、サッパリわからん！」

二人の言い分に「そんな馬鹿な」とショック顔の亮の横では「ああ、やっぱり」と恵梨花、梓、明が頷いている。

更に言い募ろうとする夏山に、東が割って入った。

「もう、いいじゃん……そんなことより、藤本さんが無事だったんだぞ？ それこそが大事なことだろ？」

邪魔された夏山は不機嫌そうになったが、東の言葉に呆れた目のため息を吐いた。

「お前は本当……、でも、藤本さんも山岡さんも無事でよかった」「そうだな……、亮、よくやったぞ」

続く川島の誉め口上に「おお」と力なく亮が返した。

「とにかく……、いつまでもこんなとこに座ってないで教室戻ろう、
亮」

周りを見ながら言う明に釣られて周囲に目を向ければ、今更ながらに自分達を見ている人の多さに亮はギョっとなった。

今や階段の前では、亮達を中心に人だかりが出来ている。

恵梨花と咲の怪我の具合、一年の三人への怒り、両腕の感觸のせいで、まるで周囲に注意がいつてなかったことに気付く。

慌てて立ち上がるうとする亮から、名残惜しそうに恵梨花が亮の腕から手を離す。亮も名残惜しかったが、それを口にする気は流石に無い。

亮、咲が立ち上がり、恵梨花も続こうとした時

「痛っ！」

痛みに顔を顰めながら、恵梨花がしゃがんだ。

「どっした？」

「どこか痛むの？」

心配顔になった亮、梓、咲も一緒にしゃがむ。

「足……」

体に痛むところがないかは何度か確認したが、座ったままだったので気付かなかったようだ。

手で足首を触る恵梨花の顔は辛そうだが、亮は躊躇なく恵梨花の足首に手を触れた。

「これ痛むか？」

「え？ ううん……」

足を触られていることに意識してしまったのか、恵梨花は緊張と相俟って顔を少し赤くしたが、亮の目には痛みの原因を探る光しがなく、それがわかったのかすぐに恵梨花は緊張を抜いた。

「じゃあ、これは？」

「痛っ……！」

恵梨花が痛そうに顔を顰めた瞬間、亮も同じように顔を顰めた。

「悪い。……捻ってるな……ぶつかった時か……、梓」

「？ 何？」

亮が痛みの原因を特定する手際の良さに感心顔で見ていた梓は、ここで名前を呼ばれたことに少し不意を受けた様子だった。

「放課後、俺も生徒会室に……」

「絶対来ないで頂戴」

亮が何を考えているのか即座にわかったのだらう、生徒会室に血の雨を降らせたくない梓は断固として却下した。

「……チツ……じゃあ、テーピングもってるか？」

「……もってないわ……、保健室ならあるんじゃないかしら？」

「どうやら舌打ちに関してはスルーのようだ。」

「そうだな……じゃあ、保健室行くか」

頷いた亮は恵梨花に両手を伸ばそうとし、恵梨花は亮が何をすつもりなのかわからない様子ながらも小首を傾げ、つい、といった感じで、同じように両手を前に伸ばす。

しかし、亮の手が恵梨花に届く直前、ピタッと亮が止まった。

釣られて止まった恵梨花がまたも小首を傾げる前で、亮は伸ばした手を引っ込めて立ち上がった。

「え……と……肩貸すから……立てるか、恵梨花？」

「う……うん……」

しかし、戸惑いを顔に浮かべて立ち上がるうとする恵梨花に、梓が手を前に出してストップをかけた。

「ちょっと待って、亮くん……恵梨花も」

「……何だ」

亮は何やら気まずそうな顔をしている。

「君、今……アレよね？」

「……な、何だ？」

意味深に問う梓の口元は少しヒクヒクとしていて、亮は決して目

を合わせようとしなさい。

すると梓は手を口に当て「ゴホン」と咳払いを一つ。

「君、今……『抱っこ』しようとしたよね？」

「……い、いいや」

目が泳ぎまくっている亮に、梓の顔は我慢していたものがハジけるようにニヤけ始めた。

梓だけでなく、明も同じような顔をし、東、夏山、川島は「おお……」と少し赤くした顔で亮と恵梨花を交互に見ている。よく見れば、周囲のギャラリ―も三人と同じような反応だ。

「隠さなくてもいいじゃない、亮くん……足が痛む自分の彼女を無理して歩かせないためなんだから……立派で紳士的な行為よ？ さすが亮くんって思っちゃった」

ドS心、ここで本領を發揮か。亮と恵梨花は同時に顔を真っ赤にする。

「さつき恵梨花は立とうとして立てなかった訳だけど……もしかして、そんなあたしの親友を無理に歩かせる訳ないわよね、亮くんは？」

「いや、ちょ、ちょっと待て……」

「最初はそうしようとしてたんだから、もちろんするよね？ 悪化したら大変なもの。むしろ、亮くんが『抱っこ』して運ばなければ、絶対に悪化するわ……、ええ、間違いないわ」

「……」

ニコヤカに言う梓だが、目はほとんど熱を帯びていて、亮にプレッシャーを与えている。

ここで拒否の言葉を連ねればどうなるのだろうかと思わされるほどだ。

だが一方で、恵梨花の足を悪化させないためにも、自分で運びたい気持ちは確かにある。何しろ、家の道場では怪我した女の子を抱き上げて運んだことも数え切れないほどあるからだ。だから、つい手が伸びた。

それをやめたのは人目があるからで、言うならば自分の我が侷のためだ。

そして梓の言うことも間違っていないと認めている亮は、目立ちたくないという気持ちと、恵梨花の怪我を悪化させたくない思いで葛藤する。

そうした葛藤の決着が着いた亮は諦めのため息を吐き、恵梨花と目を合わせた。

恵梨花は顔を赤くしてボーっと亮を見ている。

亮が目で「いいか？」と問いかけると、はっとなった恵梨花は躊躇いがちにコクリと頷いた。

それから亮は首を動かさずに人目の数を数えると、その数の多さに心が折れそうになったが、仕方がないと割り切るように首を振った。

そこから亮の行動は素早かった。

再びしゃがんだ亮は、ひよい、とまるで重さを感じさせない動作で恵梨花を抱き上げる。

周囲からは「おおー」と声上がる。手を叩く音まで聞こえた。

しかし、軽々しく抱き上げた亮だが、立ち上がった瞬間に、ガクと片膝が折れた。が、何とか踏ん張った。

「ちょ……、大丈夫なの!？」

デジカメを片手に持った梓が焦った様子で亮に詰め寄る。

「ああ……悪い、恵梨花」

「う、ううん……重くない？」

ここで恵梨花がそれを気にするのは恋する乙女として当然のことだろう。亮は首を横に振って答える。

「いいや、まったくな」

これは亮の本心である。では何故、膝が折れたかと言うと、抱き上げた恵梨花の体の柔らかさに驚いたためだ。

道場で運んだ女の子とは、決定的に何かが違うと感じたが、それが何かは亮にはわからなかった。

これでは、また何かの拍子で膝が折れるのではないかと心配になった亮は

「しっかりと掴まっとけよ」

と、特に何かを意識することなく言った。

そして、この言葉には問題があり、それはすぐにわかることになる。

通称「お姫様抱っこ」で知られるこの形だが、抱かれている女の子がしっかり掴む場所なんて、目の前にしかない。

言われた恵梨花は躊躇いがちに

「う、うん……」

と頷くと、亮の『首』に両手を回した。

途端に亮の両膝がガクンと折れる。が、亮は意地でも倒れないように踏ん張った。

周囲からはより一層、熱の入った歓声が上がリ、大きな拍手がかかる。嫉妬の声も無い訳ではないが、全体に比べると少数である。

梓は遠慮無しにパシャパシャと二人を撮影し、咲はジーンと携帯でムービーを撮り、亮の友人達は感無量といった顔で、二人に拍手を送っている。

そんな中、誰かがボソリと呟いた。

「あいつ、ゴール以外じゃキャッチするんだな……」

その声に頷くのは試合中の亮を見た人間か。

無心になろうと努めた亮は恵梨花を抱えて、足早に保健室へと向かった。

この日の亮と恵梨花のことは、当然の如く校内で広まることとなる。

体育祭、ゴールキーパーの補欠で、試合中では派手なキャッチも活躍もなかった亮だが、「ゴール以外の場所で最高のキャッチをしたゴールキーパー」といった、名誉なのか不名誉なのか、いや、多分、名誉の方が高いだろう称号と共に。

第二十五話 骨……？（後書き）

前話のサブタイに意外に票が集まりました。

一位は作者の予想にまるで入ってなかった佐藤くんです。

投票してくれること自体、予想外だったので嬉しかったです、ありがとうございます！

第二十六話 話と頼み

「君って、アレよね」

「……また、アレか。……何だ、アレって」

「こつ……、人が小石をコツコツ積み重ねて高さを作っている横で、いきなりドカッと大きな岩を置いて……いえ、横じゃないわね。積み重ねた小石の上に……？ ドカッと」

「……何の話をしてんだ、あんた」

「……さあ？」

肩を竦めながら梓が嘯く横で、意味がわからないとため息を吐いた亮は、机の上に置かれた袋からクツキーを一枚つまんで、口に放り込んだ。

体育祭の日から二日経ち、金曜日となった今日。

明日は土曜の休みであり、加えてあと一時間の授業で今日が終わるとなると、教室にいる生徒達は休みに何をするかといった健全な話題に花を咲かせる者が多く、亮がいる教室でもそうだった。

そんな、どこか浮ついた空気漂う教室に、梓と咲が二人でやって来た。

いつも通り、教室にいるほとんどの視線を集めた二人だが、いい加減、注目する方も慣れてしまったのか、二人の訪ね人だろう少年を一瞥すると、すぐ元の話題に戻る者が多かった。

多かった、とはそうでない者ももちろんいる訳で、並々ならぬ熱

い視線を送る者が少なからずいた。

対して、こちらで慣れはしたが、やっぱり目立つなと思わずにいれない。

いや、これは思わなくなったら負けなんだろう。誰に、という訳でもないが、何か負けた気になる。

亮がそんな風に考えていると、二人が前まで来て、空いている椅子を拝借し、元々亮と向き合っていた明含め、自然と三人で亮を囲む形を作ることとなった。

座った咲は、教室に入る前から抱えていた丁寧にラッピングされた赤い袋を前触れもなく亮に差し出してきた。

首を傾げた亮に「階段から落ちた時に助けてくれたお礼だそうだと梓が説明し、確認の意を込めて目を合わせると咲がコクと頷く。

お礼なら「ありがとう」と言われたんだがなと思ったが、中身は咲が昨夜に作ったクッキーだと聞いて、細かいことは考えずにありがたくお礼を言って受け取った。

贅沢を言うなら、もっと人目の無いところで受け取りたかったが、それを今言っても詮無きことである。

既にクラス男子達から、怨念じみた視線を痛いほど受け取っているのだから。

作ってくれた本人にこの場で開けていいと了承をもらった亮は早速袋を開け、中身を拝見。

そこには形も色も良い簡素な丸いバタークッキーがあり、開かれた袋から漂う良い匂いによって大いに胃を刺激された亮は、作り手がジッと見る前でパクリと一口。

サクサクと心地いい音が口から零れ、ゴクリと飲み下した亮は「美味しいな」と呟いて、更にもう一枚を口に放り込む。

そこで小さくホ、と一息吐く咲に、自然と亮と梓、明の頬が緩んだ。

流石に四人いて一人で食べる気にもなれない亮は、机の上に置いて四人でクッキーを食べることに。

一口食べた梓は、咲に「美味しい」と微笑んだ後、自分が来た理由の本題を切り出した。

体育祭の日以来、亮に関する噂が良い意味合いのものが大きく広がったと。

聞いた亮は、それはまったくありがたくないなと眉を寄せるが、黙って最後まで聞くことに。

梓が簡潔に語った内容はこうである。

体育祭の日に亮が恵梨花と咲を二人まとめて助けたことに対して「桜木は体を張って藤本さんと山岡さんを守った」と純粹に賞賛している者が多くいて、更には「サッカーの試合で、佐藤のシュートを受けても平気な顔をしている実はタフなやつ」といったことも少なからず流れていて、中には「ボールはキャッチしないが女の子はキャッチするゴールキーパー」など、半分皮肉の籠った噂も流れている（この噂を話している時の梓は耐え切れないように頬がヒクついていた）。が、総合するとやっぱり賞賛の色が強く、亮が無能だと言う者はもういないだろうとのこと。

そして噂が流れる前から亮と恵梨花が付き合うことについて、いい顔をしていなかった者の多くや、恵梨花が本当に亮のことを好きなんだろうかと勘繰っていた者達は、その日、お姫様抱っこをされ

て実に幸せそうな恵梨花の表情を実際に目の当たりにしたり、話に聞いたりで「どうやら、藤本さんは桜木にゾッコンらしい」といった噂（というか事実）も流れたおかげで諦める決心がついたらしく、恵梨花に告白してくる男子がガクッと減ったこと。

ちなみに亮は誰かが言うまでもなく、噂に流れるまでもなく、恵梨花にゾッコンだというのが学校中の共通認識である。

何でも「あの藤本さんと付き合ってゾッコンにならない訳がない」だとか。

ここまで語った梓は、もう放っておけば亮の悪い噂は消え、良い噂もいずれ治まって誰も噂し合うこともなくなり、二人の周りも少しは落ち着くだろうと締め括った。

聞き終えた亮はとりあえず、肩を震わせて聞いていた親友を横目に、どうして自分はこんなにも噂の対象になってしまったのだろうか、遠い目を窓の向こうへと向けた。

噂に関しては詳しく内容を聞いてはいなかったが、ここ最近、気配を薄くして廊下を歩いていても、ヒソヒソと指で指されることが多かった。

確かに梓の言う通り、いずれ噂も治まり、亮と恵梨花の周囲は落ち着きを見せるだろうが、その時はもう亮を認識していない人間は稀少な存在だろう。

そんな簡単に想像できる未来に亮がため息を吐いたところで、梓がボヤクように先ほどの変な例え話をし出した。

なんとなく意味がわかる例え話だったが、何の例えかわからない亮は、とりあえず口の中のクッキーを飲み下した。

「そういえば、恵梨花の足がすっかり良くなっていたけど、君、手当て上手いのね」

「またもいきなり話題を変えてきた梓だが、先ほどの例え話にそれほど興味が沸かなかつた亮は突っ込むことなく頷いた。

「家の道場じゃ、怪我なんて日常茶飯事だからな。それに、じじいが道場の裏手で整骨院みたいなのもやって、そっちも色々と教わってるからな……教わつてると言うか、仕込まれたと言うか」

「へえ……、じゃあ、君が昨日、恵梨花に渡してた塗り薬もその整骨院から？」

「ああ」

恵梨花を階段の落下から助け、保健室に着いた亮は何故か誰もいなかった保健室からテーピングを拝借し、テキパキと恵梨花の足に巻いて処置した。

そのおかげで、ヒョコヒョコながらも恵梨花は一人で歩けるようになったが、少し不満そうに亮を見ていたのは、もうちょっと『抱っこ』を堪能したかったからか。

一日明けての昨日には、亮はテーピングを解き、家から持ってきた塗り薬を塗ってから、もう一度テーピングを巻き直す。

数回分の塗り薬なので、持ってきたものはそのまま恵梨花に渡し、家に帰ったらもう一度塗り直すようにだけ指示をした。

そして今日になって亮が恵梨花を見た限りでも、足の具合はすっかり良くなっており、明日、明後日には完治の見込みだ。

怪我の程度もあるだろうが、治りが早いのは間違つた処置をして

いない証拠である。

梓が感心するのも無理はなく、明も感心している。

「そういえば、恵梨花は？ 何で一緒じゃねえんだ？」

二人が来た時にこれを聞かなかったのは、また男子から告白されてるのかと思つた亮だが、先ほどの梓の話からその可能性も低いんじゃないかと、ふと思つて尋ねた。

「今日の放課後、体育祭委員の統括があるのは聞いたでしょ？ その準備してる」

梓の言葉に「ああ」と納得した亮は昼休みの恵梨花との会話を思い出した。

委員会は先週と同じく放課後にあり、「遅くなるから……」と恵梨花が言ったところで、先週とまったく同じ流れになり、亮は今日の放課後、またも教室で恵梨花を待つことになった。

元々、恵梨花をあの足で一人帰らせる（誰かしら一緒に帰るかもしれないが）のに気が進まなかった亮なので、待つことに不満はない。

「委員の仕事とか、ちゃんとやって偉いもんだな」

学校では常に、がつきそうなほど寝ている亮が感心して言うところをいつも見ている明が頷いた。

「寝てばかりいて、委員の仕事なんか絶対やらない誰かさんとは大違いだな、亮」

「まったくな」

友人の皮肉に対して真顔で亮が頷くと「これだからな」と言わんばかりに明が肩を竦めて見せる。

そんな二人のやり取りに苦笑気味の梓が言った。

「でもね、今やってるのは遅いと思わない？」

「……そう言われるとな。次の授業が終わったら、もう放課後だしな」

「何でだと思っ？」

梓が悪戯っぽく笑って問いかける。

亮が首を捻っていると、隣から「ああ」と納得の声色が聞こえ、思わず目を向ける。

「わかったのか、明？」

「多分」

どこか楽しそうな笑みを浮かべた明が梓と目を合わせる。

「もしかして藤本さん、教室に帰っても？」

曖昧な問い掛けだったが、問われた本人は満足そうに頷いた。

「そう、体育祭終わってから、ずっとよ」

「へえ……」

更に楽しそうな笑みを浮かべる明に、亮が怪訝な顔つきになる。

「何がわかったんだ、お前」

「亮は寝てたからな……」

明は顎に手を添え、意味ありげな目を亮に向ける。

「……？ 俺が寝てたのと何の関係があるんだ？」

「そういえば、君、恵梨花がここに来てても寝てたんだって？」

「……まあ、起こされなかったしな」

少し決まり悪げに亮が返すと、それを聞いていただろう梓だが、呆れ調子でやれやれと息を吐く。

だが、梓がそうなるのも無理はない。

梓が話した通り、恵梨花に告白する男子の数が減ったためか、今日の休み時間に予定がなかったらしい恵梨花が亮の教室にやって来た。

その時、亮は深い睡魔に襲われて寝伏せっていたが、恵梨花が来たことは東の奇声によって気づいた（またも、亮より東が先に気づいた）。

体を起こすのが億劫だった亮は、起こされるギリギリまで寝ていようと顔を伏せていると、明に椅子を譲られた恵梨花が前に座っても、一向に起こしてこない。

内心で首を傾げながらも亮が寝続けていると、やっぱり起こしてこない。

前に座った恵梨花が、ジッと自分を見ていることに居心地の悪さを感じながらも気づいている。

流石に変だなと思っていると、いきなり頭を指でツンツンと触られるのを感じた。

顔を伏せたまま驚いていると、携帯で恐らく自分を撮っている音まで聞こえてきた。

この時になって亮は自分で起きるタイミングを完全に逸してしまつたことに気づく。

今更、起こされずに自分で起きにくく、この際だからと亮は完全に寝入った。

寝ていたというのは、この時のことかと亮が思い出していると明が言った。

「あの時の藤本さん、ずっとニコニコしててな」

「こっちの教室じゃ、体育祭終わってからずっとその調子よ。時々、バックに花が見えそうなくらい、うっとりしてるし。ボーっとしてることが多くてね。だから委員会の仕事のこと忘れてて、慌てて今やってるのよ」

「……やっぱり、『アレ』のせい？」

「『アレ』以外にないでしょ？」

そう言つてニヤニヤと笑い合う二人から亮はそつと目を逸らす。そんな亮に構わず、梓は楽しそうに続ける。

「それで大変なのがクラスの男子達。うっとりしてる恵梨花に見惚れちゃってね」

「ああ、うちのクラスも似たようなもんだったよ。うっとりじゃないけど、ニコニコしてる藤本さんに魅入ってるやつが多かった」

寝ていた亮と違って起きていた明が笑いながら言う。

「あれはもう、一種のテロみたいなものね」

いつぞやに亮が抱いた感想を梓が口にする、でも、と梓が続ける。

「ピリピリしてるよりはマシかもね」

「？ ……ピリピリしてたのか？」

「ええ……考えてみなさいよ。君と付き合ってること知ってるだろうに、次から次へと告白されるのよ？ イライラするのも無理ないでしょ」

「ふうん？ ……そんな風に見えんかったがな」

亮が思い出せる限りでは、無意味にイライラしている様子はなかった。

深く考えずに疑問を口にする、またも梓がやれやれとため息を吐く。

「そらそつよ。君といる時の恵梨花は基本的に上機嫌なんだから」

そつ言っって意味ありげな笑みを含んだ梓の目から、再び亮はそつと目を逸らした。

体育祭の賭けで負けたのか、奢るハメになったっぽい、担任の山下が「今日は焼肉だ」と力無く呟いて終わったHR後、ホームルームイトが帰り支度を進めている中、寝て恵梨花を待とうと亮があくびをすると、明が振り向いた。

「亮、ここで待つのか？」

「ああ。お前も待って一緒に帰るか？」

「遠慮しとく」

微笑と共に丁重に断りを入れる明に、はあ、と亮がため息を吐いた。

明と一緒に帰れないからといって亮がこんな態度をとることなど、今までにないことである。

そもそも亮と明と一緒に帰ること自体、それほど多くない。今でこそ、亮は恵梨花と毎日行き帰りを一緒にしているが、それ以前では帰るタイミングが合って一緒に教室を出た時に、というぐらいで、どちらも無理に一緒に帰ろうとはしない。

では何故、亮はため息を吐いたか。これには理由がある。

梓と咲が来た休み時間、二人が自分達の教室に戻る直前、今日は四人で帰ろうと梓が提案してきたからだ。

四人で帰ったのはもう随分前のような気がした亮だが「じゃあ、裏道で……」と言いかけたところで、咲が四人でプリクラを撮りた

といった旨を伝えてきたところで、亮は固まった。

どうにも咲には強く言えない亮で、続く梓の「放課後遅くで人少ないし、いいじゃない」といった援護射撃によって、亮は抵抗の無駄を悟った。恐らく、恵梨花含む三人の中では既に決定事項なのだということも。梓は生徒会の仕事を少しやってから、咲は部に少し顔を出してから、この教室に来ると伝えたと二人は自分達の教室に戻って行った。

三人娘と一緒に表の道を歩いた時の自分への注目具合を考えた亮は、少し考えてから明も誘った。

視線を分担するための生贄として。

だが、亮の狙いを見抜いた明はにこやかに断った。

先ほどは、明がまた少し本を読んで帰るのかと思っただ亮がさりげなく誘うも、同じように断られたことによって気落ちしたのだ。

「あの三人と一緒に帰るのにそんな風になるのは、亮ぐらいだぞ」

呆れ調子で言う明に、亮は不満そうに返す。

「いいか、いまだに恵梨花と二人で歩いてても、鬱陶しい視線が集まるんだぞ。それが単純計算で三倍になる鬱陶しさを味わうことを考えてみる」

「……まあ、わからんでもない」

「だろ？ だから、お前も……」

「断る」

涼しい顔で断る親友に、亮は露骨な不機嫌顔を向ける。

明が苦笑する。

「気にせず楽しめよ」

「楽しくないとは言わないがな……」

「あの三人と仲良くなったのは亮だろ？ その最初のプリクラに混じるのは流石に気が引ける」

そう言われると亮も返す言葉を失くす。またも、はあ、とため息を吐いた。

「それより、本当にここで待つのか？」

「？ ああ、さっきから何気にしてんだ、明？」

同じ問いを繰り返してくる明に、亮が訝しげな顔になる。

「いや、だって、亮が放課後の教室に残るなんて珍しいことをすると……」

そう明が言いかけたところで、教室の空気が少し変わった。

それを敏感に察した亮と明が目を向けた先は教室の扉で、そこには体格のいい男子生徒が一人立っている。

放課後なのだから誰がいてもおかしくは無いが、空気が変わった原因はクラスメイトの反応を見るに、その男子生徒が見慣れないかららしいということに亮は気づいた。

それもそのはず、男子生徒の胸ポケットには二年の亮達の青色とは違い、現在、三年ということを表す緑色のラインがある。

空気が変わった原因は三年が二年の教室に来たせいかと亮が見て

いると、男子生徒はゆっくりと教室を見回した。

すると一瞬、亮と目が合った男子生徒は真っ直ぐこちらへと向かって来る。

その様子を見た明が横目で言う。

「ほらな。……誰か、来た」
「……」

今のはどちらかと言うと、明が余計なことを言ったせいじゃないのかと勘繰ってしまうほどのタイミングだった。

三年の男子生徒は、教室に残っていた者の大半が予想通り（見慣れぬ人間が来たら亮が目的だろう）といった目で見ると、亮の前で立ち止まった。

「桜木亮だな？」

低い声で自分の名を口にする男の背は高く、座っている亮は顎を上向きにして見上げた。

（……老けツラだな）

第一印象に相当な失礼を抱いた亮だが、流石にこれを口にはしない。

それに、この場合は老けているというよりも、老成した、または落ち着いた雰囲気があると言った方がいいかもしれない。

男の問いに対して「違う」と言ってやるうかと思つた亮だが、この男は自分を認めると真つ直ぐ向かってきた辺り、顔は完全に割れているらしい。

もしかして『釣れ』たのだろうかと思つても、これほど人目があるところで自分に接触してきたことが腑に落ちない。

「そうですが……先輩は？」

男の厳格さを感じさせる目を見ながら亮は首肯し、問い返した。

すると男は少々気まずそうな顔になった。

「むづ……すまん。俺は、郷田剛ゴウタツキヨシと言つ

「はあ……」

丁寧に名前を返されたことで亮が少し拍子抜けになっていると

「亮、この人剣道部の主将だ」

明が亮にだけ伝わる小声で囁く。

聞いた内容に亮が内心で首を傾げていると、郷田が真つ直ぐ亮の目を見て言った。

「桜木、お前に話しておきたいことと、頼みたいことがある。少し時間を貰えないか？」

郷田の言葉に亮は困惑に近いものを覚える。

(部の主将をするような立場の人間が……？ 『釣れ』たのとは関係ないのか？ 頼みはともかく、話しておきたい……？)

内心の困惑はおくびにも顔には出さず、亮が尋ねる。

「……話と頼みって、何ですか？」

「……それには、場所を変える必要がある。着いてきてくれるか？」

亮は自分に集まる興味深そうな視線を意識すると、ため息を吐いた。

「わかりました」

第二十七話 なじみ（前書き）

ま、またも二章で最大の文字数に……
そして、またもギリギリ一萬文字は超えませんでした

第二十七話 なじみ

「話って何ですか？」

「まあ、待て。もうすぐ着く」

「着くって……どこ向かってるんです？」

「行けば、わかる」

亮は訝しげに眉をしかめた。

人目を避けるための移動かと、教室を出てから前に行く郷田の後を着いて来た亮だが、一階に降り、放課後の今は人気の少ない、体育館へと通ずる外の渡り廊下まで来たところで、ここならいいだろうと先ほどの話と頼みが何なのか、歩きながら亮が尋ねたのだ。

返ってきた言葉からは望んだ成分が一切含まれておらず、期せずしてわかったのが、人目を避けるための移動ということだけでなく、どこかの目的地へ向かっているということ。いや、もしかしたら人目を避けるための移動でもないのかもしれない。

先週と違って亮がおとなしく着いて行っているのは、前を歩く大柄の男から亮に対して物騒な気配を放っていないためである。

ここ最近、教室にやって来て亮を見ては、敵意ばかり向けてくる男達と比べて、実に珍しいことだ。

それに加えて亮も確認したいことがあったため、話だけは聞く気になった。

「じゃあ、頼みって何ですか？」

話を聞く気にはなつたが、こちらは恐らく応えることもないだろうと思ひながら、亮は再度問いかけの言葉を投げた。

「……ああ、そのことだが……」

そこで郷田は一度言葉を切ると、思案深げに頷いた。

「聞いてもいいか、桜木。もしお前が誰か……、その人のことをよく知りたいと思つた時、お前はどうする？」

はて、質問をしていたのは自分だつたはずだと、つい亮は思い返してしまつたが、

「……さあ、話でもするんじゃないですかね」

と、深く考えずに返すと、郷田は然もありませんと頷いた。

「たしかにそれが一番かもしれん。だが、どうにも俺は口下手でな、会話をしたからといって相手のことがよくわかるといった例ためしがない」「はあ……」

どうにも話が見えてこず、調子が狂うなと思ひながら亮は気の抜けた声を返す。

「お前のことについては色々噂で聞いた」「そうですね」

さつさと忘れてくれと思ひながらまたも亮は気のない声を返した。

「体育祭の日はお前が出た試合を見ていた」

「……」

「体育祭が終わった後の階段でのことは見てなくてな……、話で聞いた。……たいしたものだな、男より軽いとは言え、女の子二人の下敷きになつて碌に怪我がないとは」

「……運がよかつたんですよ」

何が狙いかと亮が訝しむのも自然な流れだろう。

話が何か聞いても、頼みとは何なのかと聞いても碌な答えは返つてこず、こんな話が返ってくる。

ついには体育館横の武道場前まで来ると、郷田は首を振った。

「それで、どうにもわからなくなった」

「……何がですか？」

亮が問いかけると、郷田は武道場の扉を背に振り返った。

「お前という人間がだ」

「……」

別にわかつてくれなくてもけつこうだと、亮はわざわざ言い返さなかつた。

郷田の背にある武道場では剣道部が練習しているのか、竹刀が打つ音が響いてくる。

「最初に噂でお前のことを聞いた時は、碌な男だとは思わなかつた。だが、実際目になると、それほどでもないという印象を受けた」

「……目にしたというのは？」
「体育祭の時だ……、その時に噂もそれほど当てにはならんもんだ
と感^あじさせられたな」
「……」

目を逸らし、内心で舌打ちする亮を見下ろしながら郷田が続ける。

「そして、階段でのことだ……あれだけ話^わに流れていて、目撃した
者も多^おいところから本当のことなんだろう……そして、わからなく
な^なった」

ここまで来ると薄々、話が見えてきた亮だが空惚^{そいつほ}けた。

「へえ、何がですか？」

「無論、お前のことだ、桜木亮」

亮の軽い調子とは反対に、郷田は重々しい雰囲気^{きふき}で返す。

「噂では碌でもない男で、実際に目にするとそうでもなく、そして
階段でのこと……俺にはお前という人間^{にんげん}がわからなくなり……そし
て知りたくな^なった」
「……だから、何ですか？」

亮が尋ねると、郷田はおもむろに頷いた。

「先ほどの話の続きをする……頼^{たの}みのことだ。桜木、俺と一本、勝
負^{かちま}してもらいたい」
「……は？」

余りの話の展開の訳のわからなさに間の抜けた声が亮の口から漏

れるが、郷田はかまわずに話を続ける。

「さっき、お前は言ったな。誰か、その人のことを知りたいと思つた時、お前は話をする」と

「そう、ですが……」

それが何故、勝負をする発想になるんだと亮の口から出かかったが、なんとか踏み止まった。

「そして、俺はこう言ったな。話をしたからといって人がわかつた例がないと」

「……」

「俺は剣道をずっと続けてきた身でな……そのせいか、竹刀で打ち合つた相手のことなら話をするよりもわかることが多い」

十人十色とはよく言ったもの、随分と変わった郷田の意見だが、似たようなことで亮にも身に覚えのあることだった。

だからといって、初対面の相手にそれを言う郷田に亮が呆れていると、郷田は亮の目を真っ直ぐ見て言った。

「だから桜木、俺と剣道で一本、勝負してもらいたい。それが俺の頼みだ」

顔も、こういったところもおっさんくさいと思つた亮だが、正直なところ、亮の嫌いとするところではない。

だが、学校関係者とそういつたことをするのは大いに嫌う亮である。

「なんで俺のことを……それに俺は剣道、素人ですよ」

少し遠回しな遠慮の言葉を口にすると、郷田は首を振った。

「かまわない、怪我はさせん。お前は全力で向かってきてくれたらそれでいい」

そこは大いにかまってくれと亮は内心、全力で突っ込んだ。

武道場の前に来てこんな話をするということは、ここでYesと言えば、道場に入って勝負ということになるのだろう。

剣道部にどれだけの部員がいるかなど、興味をもったことのない亮に知る由もないが、道場から聞こえる喧噪と気配から、少なくとも三十人はいることが窺える。

そんな人数の前で注目を浴びつつ剣道部の主将と勝負など、どれだけ目立つ行為で噂に上ることが、推して量るまでもなく、到底、聞ける頼みではない。

「その頼み、俺が応えなくちゃいけない義務は無いですよね？ そんな物騒な話、聞く気はありません。話ももういいです、失礼します」

そう言っつて亮が来た道を引き返すべく、振り返ろうとしたところで郷田が言った。

「話とは、ハナ……、藤本恵梨花さんのことだ」

途端にピタ、と止まった亮がゆっくりと郷田に向き直る。

「恵梨花が……何なんですか？」

そう問うと、恵梨花の名前を言ったところで、心なしか郷田が不機嫌そうに顔をしかめるのを亮は見逃さなかった。

「……藤本さんの安全に関わることだ」

「……へえ？ 何ですか？」

尋ねる亮の目つきが剣呑なものになったのがわかったのか、郷田は手を振った。

「勘違いするな、俺が彼女に危害を加えるという訳ではない」

そんな反応から一瞬、自分が素になりかけていたことに気付いた亮は自重を心がける。

「じゃあ、安全って何のことです？」

「安全と言うより……迫る危険性について、だな」

「……何ですか、それは？」

まさかと思いつながら、もう答えがわかっている問いを亮が投げると、郷田はおもむろに頷いた。

「それは俺の頼みを聞いてくれたら話そう」

真つ直ぐ自分を見る目に、亮は舌打ちしたいのを堪えた。

大抵の危険なら、自分が一緒にいれば、恵梨花は安全だと思える。だが、それはあくまでも一緒にいればの話である。

自分と一緒にいない、もしくはいれない時の危険性についての話であるならば、聞き逃す訳にはいかない。

もちろん、そうだった場合でない話かもしれない。

だが、そうでないことを期待して聞かずに捨てるには無理なほど、亮にとって恵梨花の存在は大きくなっていった。

郷田の顔を見るに、危険が迫ることについては確信をもっている様子である。

然れば、聞かなくてはいけないことだ。

だが、それをするには今から郷田と武道場に入り、勝負をしなければならぬ。決して少なくない人目の前で。

短い葛藤の時間になったが、それも当然かもしれない。

同じような葛藤を最近したばかりのせいだろう。

そして、決着もその時と同じ方向で着き、亮はため息を吐いた。

「もう一度言いますが、俺は剣道素人ですよ？」

「俺も、もう一度言うが……、かまわん」

亮の返事を受けとった郷田は頷くと、振り返って武道場の扉に手をかけた。

先ほどから響いていた音がすっかり耳に届くのと同時、道場内の様子が開けてくる。

郷田が入ると途端に「チーッス！」などと、中にいる部員達の主将に対する挨拶の音が次々と飛んでくる。

しかし、続いて入る亮に気付いた部員達が訝しげに眉をひそめて

いく。

突き刺さる様な視線を受け取った亮は、目だけを動かして道場内をサラッと眺めた。

そこには数はやはり三十人程で、男女が入り混じり、その中には学校内で見たことのある（当然、名前は知らない）顔、ない顔がチラホラとあり、更には馴染みのある顔まで見えた。それも二人分。

その二人は口をあんどりと開け、間の抜けた顔を作っていて、そうなるのも無理はないかと、亮は重苦しいため息を吐いた。

勝負を受けることは了承した亮だが、全力でやることは元より真面目にやるつもりも毛頭ない。

（てきとうに負けて、話を聞いてさっさと帰るか）

予定よりも早く委員会が終わった恵梨花は、痛む足を無理させない様に、亮が待っている教室へと向かっていた。

足を痛めた時はひどい痛みだったが、今はそうでもなく、ゆっくりとなら普通に歩けるようになった。

順調に痛みが引いていくことに、自分の健康な体に感謝しつつも、

少し名残惜しい気持ちもあった。

何しろ足を痛めたその日は、好きな人に抱き上げられ、恥ずかしくもあつたが夢のような心地になり、更には毎日　とは言っても、三日間　丁寧手当までしてもらえたのだから。

学校の行き帰りに一緒に歩いている時など、さり気なく自分の足と動きを見ては問題が無いか気にかけてくれる。

気遣われていることに申し訳ないとう気持ちがあるものの、心から自分を心配して見てくれることに、喜びを抑えきれない。

総じて、この足の痛みは少し動きに不自由さを与えたものの、幸福になれた気持ちの方が大きい気がした。

だから、無くなる痛みの名残惜しい気持ちになつてしまった。

この痛みが無くなるよう、手当をしてくれた亮に悪いとは思いつつも。

それでも、早く治つて欲しくないと思うほど、恵梨花は我儘ではない。

無理をせず早くしつかりと治すのが、あれほど丁寧に自分の足を診てくれた亮に応えることだと恵梨花はわかっている。

それを意識し、ゆっくりと足を進めて廊下の角を曲がると、親友の後ろ姿が見えた。

「梓ー！」

振り返った梓が恵梨花に気付くと、そこで立ち止まり恵梨花がゆつくりと歩いてくるのを待った。

「早かったのね、恵梨花」

「うん、梓も生徒会の仕事、もういいの？」

「ええ、一年の三人がちゃんと掃除しているのを見に行くだけだしね、今日は」

「ああ……ちゃんとした？」

ここで梓が言う一年の三人とは、階段で恵梨花が落ちる原因を作った三人である。

あの事故の後、生徒会に呼び出した梓は一年の三人を連なって職員室に報告後、生活指導の教諭と話合った結果、一年の三人には一か月間、放課後に校内の掃除をさせることとなり、梓は生徒会役員として、三人の掃除の監督係となった。

不満そうだったけど、怒ってたあの男の前に突き出すよりは百倍マシよね、と恵梨花が梓から聞いたのは昨日のことだ。

「まあね。一応、自分達が恵梨花を大怪我させるところだった、ってことはわかって反省もしてるみたいだからね」

ちなみにこの三人からは咲も一緒に昨日の休み時間の間に、謝罪を受けている。

あわや大怪我をするとところだった恵梨花と咲だが、結果だけ見ると恵梨花が足を捻っただけであり、事故なのもわかっていたので「これからは気をつけようね」で恵梨花は謝罪を受け入れた。

三人は神妙にしていたものの、梓もその場にいたことで学校の有

名な美少女三人に相對することになったせいか、赤面して帰って行ったのは仕方のないことかもしれない。

「そっか、それならよかった」

梓の返答に恵梨花が頷くと、二人は雑談を交わしつつ、一緒に亮の待つ教室へと向かった。

「あれ？ ……また、いない」

恵梨花と梓の二人が教室に入ると、亮の席に座った咲とそこに向かい合った明の二人しかおらず、その当人達は手にトランプを持っていた。

どうやら二人でトランプをして時間を潰していたようだ。

「えと……小路くん、亮くんは？」

二人の元まで梓と歩きながら恵梨花が尋ねると、二人が教室の扉を開けた時にトランプから目を上げていた明が答えた。

「亮なら、剣道部の主将とどこか行ったよ……それで、亮から伝言頼まれた。戻るまでここで待っていてくれて」

またもや伝言と、亮の鞆が置いてあるところを見るとその番も頼まれたらしい。

だが、それよりも明の返答が恵梨花には意外過ぎた。

「剣道部の………主将と!?!? ……え、何で!?!?」

「何か、話しておきたいことと頼みたいことがあるとか言ってたけど……？」

「話……？ 頼み……？」

「あ、物騒な感じも喧嘩になりそうな雰囲気でもなかったよ」

呆然としている恵梨花に明が補足すると、険しい顔の梓が尋ねた。

「……小路くん、それっていつのこと？」

「えーっと……」

黒板の上の時計に明が目を向けた。

「もう、三〇四十分ほど前かな」

「三〇四十分！？」

「三〇四十分……」

恵梨花はその組み合わせが話をするには、少々長く感じたことで驚き、梓は何を思ったか顎に手を当て、ブツブツと呟き始めた。

「何故……？ こんなにも長く……？ それも今日……？ 何のため……？ 話しておきたいこと？ ……あ！」

突然大きな声を上げた梓に、その場にいる者の注目が集まる。

「……梓？ ……何かわかったの？」

困惑顔で恵梨花が尋ねると梓は額に手を当てて目を閉じ、もう片方の手を恵梨花に向けて突き出し「ちよっとまって」のポーズをしては、またもブツブツと呟き始めた。

「じゃあ、助けるため……？　そして、それが必要かを見極めるた、め……？　でも、それで、あの男が……」

更にブツブツ呟いた梓だが、目を開けるとサッと恵梨花に振り向いた。

「行きましょう、恵梨花……亮くんと、郷田さんのところへ」

「……でも、どこに？　小路くん、知ってる？」

「いや、俺も知ら……」

明が答えようとしたところで、梓が割り込んだ。

「恐らく……、武道場」

「それじゃ、話聞かせてもらえますか？」

薄ら流れる汗を拭いながらも、涼しい顔をした亮が郷田に尋ねた。

一方、尋ねられた郷田も同じく汗を流しているが、こちらは不満そのものを絵に描いたような険しい顔である。

それもそのはず、亮がまるで力を入れずに郷田との勝負を終えたからだ。

大勢の目の前で、今日まで秘密にしてきたことを、郷田の言い分のみで晒す気になれない亮からしたら当然のことだ。

武道場に入った亮と郷田は、武道場の半分を使って困惑気な部員達の目の前で試合の準備を始めた。

亮には不慣れな防具をつけるのに、郷田は女子剣道部の主将に手伝いを頼み、更には試合の審判まで頼んだ。

郷田は部員達には練習を続けるように指示したが、部員達は最近、何かと噂になっていいる桜木亮と自分達の主将が試合をするのを、勝敗はともかく気になったようで、興味深い目を隠さずに二人の試合を観戦し始めた。

だが、試合が始まるとすぐに彼らは鼻白んだ顔になり、中には嘲りを浮かべる者までいた。

もう少し正確に彼らの表情を語るなら「もうちょっと根性だせよ」が正しいか。

しかし、そうなるのも無理はないかもしれない。

試合での亮は一応攻撃は仕掛けるも、郷田が避けたり受けたりすれば、素早く追撃などせず、ノロノロと竹刀を振る。防御の点に於いては、部員達の目からしたら明らかに加減された郷田のゆっくりとした振りに、亮はまるで反応できず、すぐに竹刀を撃ち落とされる。

亮がそんな調子だったため、試合が始まるとアツサリと勝敗はついたが、郷田の「もう一本だ」の言葉に、審判をしていた女子の主将が気遣うような目を向けるも、同じような試合が何度か行われ、

その内に部員達も興味を失くしたようで、自分達の練習に戻っていく。

気の毒そうに観る者もいなくはないが、「もうちょっと気合出せよ」と思わずにはいれないような顔をしていた。

そんな、亮に対してひたすら空気の悪くなった武道場内で、郷田の「わかった、もういい」の一言によって、亮と郷田の試合が終わり、またも女子の主将に防具を外すのを手伝ってもらったのが先ほどのことである。

「……一応は、約束だからな。もうちょっと、こっちへ来い」

面は外し、胴はつけたままの郷田が不承不承といった顔で亮を自分のすぐ近くまで来るよう手招きをし、小声で言った。

「何故、本気を出さなかった」

恵梨花の話が始まると思っていた亮は若干、うんざりとした顔で肩を竦めた。

「十分、本気でしたよ。……第一、剣道素人の俺と、剣道部の主将である先輩とじゃ、勝負になる訳ないじゃないですか」

「そういうことでは無い。言っただろ、俺は竹刀で打ち合った方が話をするよりわかることが多いと……お前の振る竹刀には、力も思いも碌に込められていなかった」

そりゃ、そうだと思った亮だが、それがわかる程度には腕はあるらしいと亮は郷田を再認識した。

「俺に何を期待したのか、知りませんが……約束は約束なんですか

ら、話してくださいよ」

亮がそう言うと、郷田は険しい目をして苦そうにため息を吐いた。

「いいか……お前が、先週『友達』になった三年の三人だが……」

郷田が言い始めると、亮はその内容に不思議そうに首を傾げた。

「……三年の三人？ ……友達？」

「……『友達』になつたんじゃないのか？」

「誰のこと……ですか？」

「ああ……ちゃんとした『友達』では無かつたか？ ……三年の眞壁と林と細川だ」

ここで郷田が名前を言つても、名前をすぐに忘れる亮には無意味なことだったが、郷田には知る由もない。

「……えーつと……？」

「……丁度、先週にお前を訪ねた三人だ」

「？ ……ああ！」

亮はようやく思い出した。それに対して流石に郷田が呆れの目を向ける。

「何故、すぐに思い出せんのだ」

「あー、まあ、余り気にしないでください……ん？ その三人の話ですか？」

亮は三人が来たこと自体失念していたが、思い出したことで、ここでそれを言う郷田に嫌な予感を覚えた。

「ああ……お前があの人を、どう言い含めたか知らんが、気をつけるんだな。何か企んでいる様子だったからな」

「あー………、せい………つは、どう、も………」

亮の声には、丸つきり力がなく、郷田はそんな亮を不思議がった。

「？ ……いいか、あの三人が手に負えなくなったら、いつでも俺に言え。無理しようと思えるな」

真剣な様子で言葉を続ける郷田に対して、亮は体からどんと力が抜けていくのを感じた。

ここに来て亮はようやく、郷田の真意を悟った。それはつまり、自分の味方を申し出ているということに。

先の試合に全力でやってないことはわかってるだろうが、自分が喧嘩の弱い人間だと確かめた後で。

そしてそれは、ありがたいことかもしれないが、亮にとっては完全に不必要なことで、そんな話を聞くために、こんな大勢の前で目立つ行為をしてしまったことに、亮はどうしようもないほどに気落ちしてしまった。

更に自分の策の欠点に痛い気持ちで気付かされる。

「それは………どうも………ありがとうございます………」

亮は力なく郷田にそれだけ言うと、多数の露骨な嘲りな目や、二対の少しホットしながらもどこか納得いかないような目に哀愁漂う背を見せながらトボトボと武道場の扉へと向かった。

扉の前まで来ると、取っ手に手を伸ばそうとした亮だが、手を引っ込めて後ろに一步下がった。

そんな亮の行動に郷田や部員達が首を傾げていると、その扉が勢いよく開かれた。扉の前にいたままだったら、亮はぶつかっていたかもしれない。

そんなことを知る由もない外から開けた人物は目の前に亮がいたせいか、少し驚きに目を瞠って、つい、といった感じで名前を口にした。

「亮くん！」

「恵梨花……梓と咲……明まで来たのか」

扉を開けたのは恵梨花だったようで、梓と咲がすぐ後ろに、そしてその後ろにいた明が、亮の鞆を掲げて見せた。

「鞆、もってきた」

「ああ、ありがとよ……よく、ここがわかったな」

亮の疑問に明は肩を竦めて答えた。

「鈴木さんがな」

そこで武道場内の男子達が学校の有名な美少女三人の登場に色めき立つ。

背後の喧噪をよそに、亮は恵梨花達にここに来た理由を訊こうとしたが、先に恵梨花が少し焦ったような声で亮に尋ねた。

「こんなところに来て何してたの亮くん？ 物騒なことかしてない！？」

「いや、物騒なことって……」

頬をポリポリと掻きながら亮がチラつと、後方にいる郷田を見る。そこで気付いたのだが、亮の気のせいではなければ、郷田は少し焦ったような顔をしていた。

「……？ ちょっと、剣道の試合してたな」

「剣道の試合！？ 誰と！？」

「誰とって……、あの大きい人」

言いながら亮が後ろを親指で指し示すと、恵梨花はその先にいる郷田をチラつと見て、途端に険しい目つきになった。が、すぐに表情を戻して亮と目を合わせた。

「何で試合することになったの？」

「ああ……頼まれてな」

「それで、何でめんどくさがりの亮くんが試合するの！？」

「……いや、本当にな」

これにはもう苦笑するしかない亮である。

「君、何で、その頼み引き受けたの？」

「ここまで黙っていた梓が亮に尋ねた。

「……色々、事情があつてな」

「ふうん、事情ねえ……」

言いながら梓は恵梨花をチラッと見た。
そんな梓に、わかってんじゃないかねえかと思いつつも、亮は何も言わなかった。

「それで、試合の結果は？」

梓が尋ねると、恵梨花と咲、明の視線が亮に集まった。

「結果？ …… ああ、負けた負けた…… コテンパンにな」

言っている内容とは裏腹に、亮の顔には悔しさといったものは一切含まれておらず、朗らかなものだった。

事実、真面目にやる気のなかった試合だったので、負けたからといって特に亮に含むところはない。

だが、その彼女の表情は優れない。

「…… 負けたの？」

「おお…… 何回もな」

答えた途端に恵梨花は血相を変えて亮に詰め寄った。

「…… 何回も!？」

「…… お、おう」

その剣幕に少したじろぎながらも亮が答えると、恵梨花は亮の後方をキッと睨んだ。

「タケちゃん!!」

亮の知らない名を叫んだ恵梨花はズシズシと、道場内を歩いて行く。

突然、恵梨花が大声を出したことに驚いた亮だが、力強く足を動かしているその動きに、治りかけてはいるも恵梨花の足を気にした亮が声をかけようとしたところで、梓が小声で亮に尋ねた。

「一応聞くけど、君、本気出してないよね？」

「ああ。当たり前だろ」

亮が当然といった顔で答えると、梓は「やっぱり……」と言いなから嘆息した。

そこで、またも恵梨花の怒鳴り声が響いた。

「タケちゃん！ 何で、亮くんをここに！！ それも何回も試合！？ コテンパンにしたですって！？」

あれは少しお母さん化してるかも、なんて思いながら亮は郷田に詰め寄る恵梨花を、武道場内にいる大多数の男子と同じように呆然と見ている。

すると、詰め寄られている郷田は焦った顔で両手を前に突き出し、少し後ずさりながら反論の言葉を口にした。

「ちょっと待ってくれ、ハナちゃん……これには深い事情があるんだ」

「何の事情よ！ 人の彼氏勝手に連れてきて！ 言いなさい！ 聞かせるから！！」

二人の力関係が実によくわかる図だったが、それよりも亮には気になることがあった。

「タケちゃん……ハナちゃん……？」

誰ともなしに呟いた疑問だったが、隣で聞いていた梓が答えた。

「あの二人の小さい頃からのアダ名ですって」

「小さい頃……？」

続いて沸いた亮の疑問の呟きに、梓は少し愉快そうに口の端を釣り上げた。

「あの二人、幼馴染なのよ」

「な……」

亮は驚愕を浮かべた顔で二人に振り返り、その中でも郷田に目を向けながら愕然と呟いた。

「あのおっさんヅラで幼馴染なのか……！」

それを横で聞いていた梓と明は「は？」と首を傾げると、すぐに立ち直り、揃って突っ込んだ。

「いや、顔は関係ないでしょ！？」「驚くところがそこなのかよ！」

第二十七話 なじみ（後書き）

ダメダメの亮の回

第二十八話 無双（前書き）

0時更新でないのは久しぶりです

活報を見て待つていただけの方、お待たせしてすみません

そして、一万文字突破……

いえ、いつかはやってしまおうと思ってましたがorz

第二十八話 無双

「幼馴染の男と言ったら……何だ、こう……爽やか？ いや、二枚目……じゃねえな……優男？ ……とにかくだ、あのおっさんヅラは違うだろ」

手振りを交えて幼馴染についての自論を語る亮に、梓と明が呆れた目を向ける。

咲は何かツボに入ったのか、無表情ながらも笑うまいと堪えてるようだが少し肩が震えている。

「……とりあえず、君が幼馴染について随分偏った考えを持っているのはわかったわ」

梓が呟くように言うと、亮は至極真面目な顔で返した。

「何言ってるんだ……俺に限ってじゃなく世間一般のイメージだろうが」

すると呆れ目を含み笑いに変えた明が言った。

「亮、言いたいことは何となくわかるが……」
「だろ？」

「……けど、やっぱり顔は関係ないな」
「……」

何故わからないのかと眉を顰める亮に梓がため息を吐いた。

「一体、何を基準に……」
「何って……」

言いながら亮がチラと武道場内を振り返る。が、すぐに肩を竦め

「まあ、いいか……それにしても、ハナちゃんにタケちゃん？
……ハナはもしかして、恵梨花の字の『花』から来てんのか？」

振り返ったことについては、恵梨花と郷田を見たと思ったのか、
二人は何も言わず、恵梨花の親友である梓が亮の質問に答えた。

「ええ、そうよ」
「……？ 何で、そうなるんだ？ 普通に『恵梨花』でいいだろう
に」

首を捻る亮に、梓が意味ありげな微笑を浮かべる。

「それは恵梨花の家に行けば、わかるわ」
「ふうん？ ……あとタケちゃん？ 不似合にも程があるようなあ
だ名だな……『タケシ』って名前なのか、あのおっさん？」

亮の随分と失礼な物言いに明が呆れ声を返す。

「いや、郷田剛コウタツコウジツって言ってただろ……さっき、教室来た時」
「……そういえば、そんな気もするな」

つい、先ほど郷田に名を名乗られたことは亮にとっては遠い過去の
のようらしい。

「？ ……じゃあ、何で『ツヨシ』が『タケちゃん』になるんだ？」
この、もっともな疑問に答えるのはやはり『タケちゃん』の幼馴染の親友である梓だ。

「……郷田さんの名前の剛ムコシの読みを変えると剛タケシになるでしょ？ ……だから」

そう答える梓の表情は特に何かを映していなかったが、検分するような目を亮に向けていた。

「……わざわざ読みを変えて、それをあだ名にもっていったのか？ 随分と変わったことしたもんだな」

またも首を捻る亮だが、すぐに笑みを浮かべて言った。

「フルネームにすると、郷田剛ゴウダタケシってどこか……語呂ゴロはいいじゃねえか……？ ……ゴウダタケシ？」

亮が何かに気付いたような声を出すと、明も何かに気付いたような顔になる。

両者が何かに気付いたのは共通したことのようだが、その後は違った。

明がそこで興味を失くしたのに対し、亮だけが少し難しい顔を作ったのだ。

「……聞いていいか、梓」

「何？」

「『タヌえもん』に出てくる『シャイアン』のフルネームって？」

「……ゴウダケシ剛田剛、上から読んでも下から読んでもゴウダケシ剛田剛」

特に表情を変えず淡々と答えた梓に、亮がため息を吐く。

「……だったよな」

流石の亮でも、自身も観ていた国民的人気アニメのメインキャラクターの名前ぐらいは憶えている。

梓にわざわざ確認したのは、そうせずにはいられない心境に陥ったからだ。

(……あの、おっさんが、あのシャイアン……?)

流石に安易過ぎやしないかと思うも、否定できる材料が見つからない。

あの三人のことで亮に味方を申し出るということは、恵梨花を助ける意思の表れであり、尚且つ郷田は恵梨花の幼馴染である。

幼馴染全員が仲が良いとは限らないが、そして今の、恵梨花が郷田を叱っている場面から鑑みても仲が良いとは言い切れないが、『敵』と言える関係でないのは確かだろう。

次に亮の脳裏を横切ったのが三年の三人からの話で、三人がシャイアンのもっていた小汚い角材らしき棒で打ち据えられたということ。

亮がちらと郷田に目を向ける。

今は持っていないが、自然と先ほどの竹刀を持っている姿が頭に

浮かぶ。

そして角材を持たせても、さぞかし似合うだろうと亮は思った。

三人を一人で相手するのに、剣道をしている人間が得物を使って相手をするのはごく自然な流れだろう。

(……普通に考えたら、三人相手に一人で喧嘩に勝つって、けっこうたいしたこと……だよな)

人には、知らずの内に自分を基準に物を考える時がある。

自分には大したことのないことでも、人には大したことの場合があり、逆も然りだ。

自分には大したことでも、人には大したことのない場合もある。

この場合、前者だと頭に残りにくい。

そのため、亮は今更ながらに気付く。

シャイアンが、それなりの『強さ』を持っていなければいけないということに。

そして、その『強さ』は亮の目からしたら、一年前の郷田でも恐らく持ち合わせていただろうと推察出来る『強さ』だ。

ここまで考えた亮は先ほどからずっと黙っている、恐らく最初から答えを知っていただろう女の子に声をかけた。

「……去年だったな、恵梨花をあの三人から守ったやつが、どんな格好してたか知ってるのか？」

「ええ」

表情を変えずに頷く梓だが、亮はその様子から推測を確信に変えた。

「笑えることに、シャイアンの覆面を被ってたらしいぜ」

「みたいね」

振り向かずに梓が答えると、亮は一拍の間を開け郷田に目をやりながら尋ねる。

「……あのおっさんなんだな？」

「おっさんって……」

ここで、ようやく振り向いた梓の目には呆れの成分が多分に含まれており、それが亮の目と合うとため息を吐いた。

「こうなったら、義理立てして隠していても無意味……どころか、状況がひどくなるだけね。そうよ、彼 郷田さんが一年前、恵梨花を助けたのよ」

「……まんまか……、それにしても義理立て？ 俺に話さなかったのはそのためか？」

「ええ……誰にも話してくれると言われてね」

「ふうん……それは恵梨花にもだな？」

「ええ……恵梨花は、自分が助けられたことも知らないわ。だから、そのシャイアンが誰かなんて考えたこともない」

「……やっぱりか」

先週の三年の三人とのことについては恵梨花は強い反応を示さず、しきりに亮に本当に怪我がないかを確認するだけだった。

そんな様子から、もしかしたら去年に自分が襲われかけたことなど知らないのではと考えたが、知らずにすんでいる恐怖を一夕話して確認する気にはなれなかった。

郷田が話さなかった理由も推察出来る。

そんな風に亮が考えに耽っていると、梓が亮に向き直った。

「亮くん」

名を呼ばれた亮が首を回すと、梓は小さく頭を下げた。

「ごめんなさい」

「……………あなたにしては、随分しおらしいじゃねえか……………何に対して謝ってた？」

突然の梓の態度に亮が目を瞠るも、軽口を叩きながらその訳を問うと、下げた頭を元の位置に戻した梓がジロリと睨んだ。

「その台詞から君が普段、あたしをどう思ってるかよくわかるわね……………」

矛先の亮はすっと目を逸らす。

だが、梓もそう思われて仕方ないと思っている節があるのか、亮の軽口にこれ以上は言い返さず、ため息を吐いて続ける。

「謝ってる理由は……………君と郷田さん、双方の事情を知っているあなたなら、この事態を予測して防ぐことも出来たから」

「……………この事態って？」

「郷田さんは君と勝負をした後、何と言ってきた？」

「あの三人が俺の手に余るなら言いに来い、だったな」

亮の答えに梓がやつぱり、とため息を吐く。

「じゃあ、勝負をしたのは君がどれぐらい喧嘩を出来るかの確認のため？」

「……大体、そんなところだろう」

その他にも亮自身に興味を持っている様子だったが、一番の目的がそれだと思つたため亮はそれ以上言わなかった。

「勝負を受けた理由は、恵梨花のことを何か言われたからよね？」

「……ああ」

「それでめんどくさがりで目立つことを嫌う君が、こんなところで勝負を受けた訳よね」

「……もう言うなよ」

改めて人から聞くと、思わずダメージを受ける。

不必要な申し出を聞くための損害は大きかったと改めて認識してしまつた。

気落ちを表すように眉を寄せるも苦笑気味の亮に対し、梓が珍しいほどに申し訳なさそうな口調で切り出す。

「だからよ」

「……うん？」

「君にも彼にも、少しでも何か話しておけば、君がここで目立つ必要はなかったでしょ？……それを防げるのはあたししかいなかった」

「……それを気にして謝ったのか？」
「そうよ」

流石にこれには驚いた亮である。

何かと亮が目立つことを気にしないような態度をする梓が、自分のせいで亮が目立ったことを気にして謝罪をしたのだ。

「おい、あんた、どうしたんだ？ ……変なものでも食べたのか？」

亮がそう言ってしまうのも無理はないが、言われた本人は若干、口元をヒクつかせている。

「君、年頃の女の子に、すごく失礼なこと言ってる自覚ある？」
「……いや、すまん。けど、あんた、日頃から俺が目立つことを気にしねえじゃねえか……特に体育祭とか」

素直に謝罪の言葉を出した亮の脳裏を過つたのは、梓の策がなければ自分の出番などなかった体育祭のことだ。

「体育祭の時はそうした方がいい理由があったのよ、それに君が恥を掻くとは思っていなかったし」

「……理由ねえ。けど、あんた面白がってただろ」

亮がそう言つと、梓はおもむろに頷いた。

「たしかに……、半分面白がってたのは認めるわ」
「認めんのかよ」

悪びれずに言う梓だが、これでこそ、この女らしいと亮が苦笑を

漏らす。

それと並行して、亮は先ほど梓が言った「恥を搔く」の言葉が引っかかった。

体育祭では、亮が恥を搔くと思っていなかったことと、理由があったから梓は亮を目立たたせた。

だが、今日のことでは強い理由なく目立ってしまった、亮に恥を搔かせたと悔やんでいるように見える。

それを防ぐことを出来たのが自分だけだと思った上で。

そこまで考えた亮はゆっくりと口を開いた。

「別に恥は搔いてないぜ」

「……そう？　ここに来た時、部員達の君を見る目が随分、酷いものに見えたけど」

「かもしれないが、俺が恥を搔いたなんて思ってねえから……」

そう言いながら梓と目を合わせると、悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「だから、あんたが気にする必要ねえよ……謝る必要もねえ。それに、あのおっさんところなつたのは、あんたが俺の秘密を黙ってしてくれたからだろう？　……悪いな、おっさんとの板挟みにさせちまって」

すると梓は少し目を瞬かせると、プイッと亮から目を逸らした。

「……君、ちょっと、格好つけすぎじゃない？」

何故だか少し苛立ちを含んだかのような梓の声に、亮が肩を竦め

る。

「心外だな。格好つけないから、今こうなってるんじゃないか」

この言葉の通り、普段から亮が目立つことを嫌わなければ、郷田との勝負で部員達に変な目で見られることもなかった。

そして今も尚、郷田を怒鳴っている、そんな恵梨花の姿も無かっただろう。

亮はそう思つての言葉だったが、梓は不満そうに眉を顰める。

「あたしが言いたいの、そういうことじゃないけど……」

「とにかくだ、あんたが気にする必要ねえよ……そもそも、こうなつちまつたのは俺の計算ミスの方が大きい」

肩を竦めて疲れたような顔で言う亮の言葉に、梓は「ああ……」と呟いた。

「押し問答になるけどね、それこそ、あたしが気付くべきことだったのよ」

「それでも、あんたが気にする必要ねえよ。俺が考えた策なんだから」

「……そうかもしれないけどね、結局は君もあたしも……」

「悪人を釣ることしか考えず」

亮が続きを繋げると、二人は同時に言った。

「味方になる人間が釣れることを考えていなかった」

すると二人は顔を見合わせ、肩を落として同時にため息を吐いた。

「こういったことで、俺に味方を申し込むやつなんていなかったかな……」

亮がしみじみと呟くと、梓が小首を傾げる。

「それは中学校時代のこと？」

「まあな……」

頷きながら亮が郷田に目を向ける。

「去年、恵梨花を助けたシャイアンはあのおっさんか……」

先週、三人の話を聞いてから亮は何度も思い返した。

もし、シャイアンが三人の前に現れなければどうなっていたか。

そうなった場合の最悪の想像が頭に浮かんでは、腸が煮えくり返る思いになったのを何度も繰り返した。

けど、それでも、そんな最悪を回避してくれたシャイアンを探そうとは思わなかった。

「確かに彼は恵梨花を助けたけど、だからって当時、恵梨花と何の関係もなかった君が何かをする必要はないと思うけど？」

亮が考えていることを読み取ったかのようなタイミングで梓が言ってくる。

相変わらずのエスパーぶりだなと亮が苦笑する。

「わかってるよ……恵梨花を助けたのはあのおっさんの勝手で、その時に恵梨花と関係のなかった俺が礼を言う義務も義理も、筋合いもねえ」

そう言つと亮は頭をガシガシと搔いた。

「てきとうに勝負受けちまったな……」

そう呟くように言う亮を、梓は黙ってジッと見ている。

今だ怒鳴っている恵梨花と怒鳴られている郷田と、二人を遠巻きに見ている部員達、全体に目を向けた亮は、めんどくさそうに息を吐いた。

「仕方ねえな……」

そこで梓の片眉がピクリと動いた。が、何も言わず

「……何かする気が、亮？」

恵梨花と郷田の様子を観戦しながら、今までちゃっかり話を聞いていたらしい明が尋ねた。

「そうだな……梓、少し質問がある」

「何？」

「あのおっさんは部内で……何番目ぐらいに強い？」

「間違いなく、一番強いわ」

「ふうん……間違いなく？」

「ええ……、何しろ去年の県大会で二位」

「へえ……そりゃ、すごい」

最後の驚きの声は明のもので、亮は顎に手を添えて軽く首を傾げた。

「じゃあ、去年でも……前の三年が引退する前も部内で一番強かった？」

「ええ……、それも間違いないと思うわ
「なるほど……」

郷田を見据えながら頷く亮に梓が問い掛ける。

「……何考えてるの？」

「ちよつとな……」

訝しげに眉を顰める梓に亮が続けて質問する。

「この部の顧問って、剣道素人か？」

「……え、ええ」

来る質問と、亮が何をする気なのか想像がつかないせいか、少し戸惑い気味になる梓。

「じゃあ、去年の……五月……、だったか？ それぐらいまで、あのおっさん、どこかの道場に通ってて、そこを辞めたとか聞いてないか？」

「？ 去年の五月……？」

質問の意図がわからないまま、梓が悩ましげに眉を寄せる。
途端、はっとなって驚きを浮かべた目で亮に振り返った。

「その様子だと、正解らしいな」

ニヤリとする亮に、梓が喘ぐような声を出した。

「な、何で知って……」

その疑問には答えず、再度亮が尋ねた。

「最後の質問……、あのおっさんはその道場を辞めてから別の道場に通ってるか？」

「あ、あたしの知る限りでは、無いけど……」
「だろうな……」

しみじみと頷く亮に梓が詰め寄る。

「な、何で知ってるの？ ……いえ、それより、それを聞いて何するつもり？ ……去年のことで君が彼に何かする必要もないのよ？」
「ああ……さっきも言ったが、礼を言う筋合いは確かに俺には無いな。俺だったら別に言われたくねえ。けどな」

亮はそこで言葉を切ると、不敵に笑った。

「感じた恩を俺が勝手に返すのは俺の勝手だよな？」

その言葉に梓は目を睨り、明は「へえ……」と微笑と共に呟く。

そこで亮は恵梨花と郷田の方へ振り返って足を動かし始める。が、すぐに立ち止まって、首だけ後ろに回した。

「そうだ、後であんたに話振るかもしれん。その時、俺に合わせてくれると助かる」

「話って……？ 何する気なの、君」

「その時になればわかる……何、悪いようにはしねえよ」

からからと笑う亮に梓がため息を吐いた。

「わかった……何するつもりなのかわからないけど、悪いようにはしないのね？」

「ああ……、そこは保証する」

梓の了承をとった亮は、半ばお母さん化して今だ郷田に怒鳴り続けている恵梨花の背後まで歩みを進める。

「それに、タケちゃんは昔っからね……！」

何やら話が昔に飛んでいる恵梨花の説教じみた声が聞こえると、それが自分に向いていなくても、近寄りがたく感じるのは何故だろうかと思いつつ亮は恵梨花の肩に手を置いた。

「恵梨花」

「！ 亮くん……」

振り返る恵梨花の顔には、いつの間にか亮が後ろにいたことで驚いたせいか、郷田に向けていた勢いのような怒りが霧散していた。それと同時に、ほっとしたような顔をする郷田に、亮は内心で「わかるぜ」と呟きながら苦笑を漏らす。

「恵梨花が怒る必要ねえからよ、だから……」

後ろで見てろ、と亮が言おうとした時だった。

「ダッセー、女に庇われてるし」

「さっきの主将との試合といい……」

「情けねえやつだな」

「馬鹿、やめろ」

「？ 何だよ、神林。お前も見てただろ？」

「そうそう。本当、これほど釣り合っていないカップルも珍しいよな

……」

「階段でのことだってタダのマグレだな、こりゃ」

「それ以外に無いだろ？」

「まあな、あの試合見た後じゃな……」

「話が大きくなったんだろな」

「やめないか、お前ら!!」

最後に主将の郷田が怒鳴るまで、男子部員達が好き勝手に言うのを、亮はいつもの如く聞き流そうとしたが、それが出来ない女の子が亮の前で両の手を固く握ってプルプルと震えている。

肌に伝わってくるピリピリとした空気から、不味いと思った亮は急いで恵梨花を梓のところへと連れて行こうとした。

が、そこで、嘲りに満ちた声が道場内で響いた。

「なんだ、やっぱり無能じゃねえか」

それが聞こえたのと同時、亮は何かブチっと切れたのを目の前の女の子から感じ取った。

その女の子　　恵梨花が怒りの形相を浮かべて声をした方向を強く睨みつけた。

「亮くんは無能なんかじゃありません！！」

どこからそんな大きな声が出るのだろうかと思わせるほどの音量に、武道場内の人間のほとんどがビクッと驚く。そんな中、息荒く恵梨花が再度、怒鳴った。

「ちゃんとやれば出来る人です！！」

完全にお母さん化して怒鳴る恵梨花によって武道場内がシンとなった。

暫し、息を乱した恵梨花の呼吸音だけが武道場内で響いた後、一人の男子部員がはっとなって隣にいる男子部員に声をかけると、男子部員達が口々に小さな声で呟き始めた。

「お、おい見ろよ、あれ」

「うわ……」

「いや、うん……彼女にあそこまで庇われたら男としてな……」

「だからってな……」

「いや、藤本さんにあそこまで庇われたら、俺も泣けるぞ」

「それは別の意味でだろ」

「もちろんだ」「俺もだな」

「怒った顔も可愛かったな……」

彼らが指差し見ている先には、俯いて両目に片手を当てている亮だった。

その姿を見て、泣いていると思ってても無理はないだろう。

何しろ、人前で彼女にあそこまで言わせたのだ。

男として情けなくて涙がでるのも仕方がないと彼らは思ったのだ。

彼らが少しの同情を籠めた目を亮に向けていると、その亮の肩が小さく震え始めた。

「りよ、亮くん？」

男子部員達の二度目の眩きは聞こえなかった恵梨花だが、亮の様子がおかしいと思ったのだろう、怒りを引つ込めて戸惑いの声を出す。

男子部員達があーあ、といった顔になると同時、両目に手を押し

当てていた亮が肩を震わせたまま屈む。まるで、苦しそうに。

男子部員達の間から同情が消え、苛立ちも含んだ苦いものを見るような目になった時だった。

目から手を離れた亮が突然大声で笑い始めたのだ。

そうなってから止められなくなったのか、体を苦しそうに「くの字に曲げて大きな笑い声を立てている。

奇行とっていいほどの亮の笑いつぷりとタイミングに、亮の目の前にいた恵梨花含め、武道場内のほぼ全員が暫し呆然とすると、ここで真つ先に怒っていいだろう恵梨花が誰よりも先に我に返った。

「もう！ 何で、笑ってるのよ！！」

「いや、すま……ハッ、……フッフッ……！！」

笑いを抑えられない亮の口からはまともな言葉が出ず、それが恵梨花を苛立たせた。

「こらー！ 何で、笑ってるのよー！！」

またもや怒りを帯び始めた恵梨花の形相から、亮は流石に不味いと思つて無理矢理、発作の如き笑いを抑え込んだ。

「ま、待て……！ お、落ち着け、恵梨花！」

「亮くんが……、それを言う……！！？」

「いや、本当悪かった。別に恵梨花を馬鹿にしてるとか、そんなんじゃないから……！」

「へえ……じゃあ、何で笑ってたのかしら……？」

常に無いほどの低い声色に亮は身の危険を感じ、両手を上げる。

「いや、なんだ、その……こんな風に誰かに庇われるなんて初めてでな……」

「……それで？」

「ああ。その初めてが、まさか自分の彼女からとは、って思ってた。それがおかしくってな……」

「そ、そう……？」

恵梨花は不機嫌顔を貫こうとしているようだが、面と向かって『自分の彼女』と言われたのが嬉しかったのか、貫き切れていない。それが証拠にそっぽを向きながらも、悦びを表すように口端がわずかに吊り上り、頬がうつすら紅くなっている。

怒りが薄くなっているのをなんとなく感じ取った亮は、ほっと安堵の息を吐いて両手を下した。

どうやら笑ってしまった、もう一つの理由は話さなくて済みそうだと。

先ほど亮が言った言葉に偽りは無い。

無いが、足りなかったのだ。

決して、恵梨花を馬鹿にしている訳では無いと言えないと思った。

(恵梨花のお母さん化っぷりが凄すぎたせいなんてな……)

恵梨花のあの怒鳴りっぷりが、テレビのドラマか何かで勉強の成績が悪いと言われた我が子を庇ったお母さんのように見え、そして庇われたのが自分だと認識すると、どうにも笑いを止められなかった。

思い返すとまた笑ってしまいそうだと思った亮は、考えるのをやめて恵梨花に目を向ける。すると、先ほどまでであった怒りはどこにいったのか、そっぽを向きながらも頬が緩んでいるのが見えた。

コホンと咳払いをするとはつとなつた恵梨花が振り向く。

「前にも言ったがな……、何か言われても俺は気にしねえぞ?」

「そう言ってもね……私の目の前で、それも亮くんいるのに、あんな風に言われたら……」

眉を寄せて言う不機嫌な顔に亮は今日、梓から聞いた話を思い出した。

付き合っているというのに、いまだに何回も告白されて、それで恵梨花がピリピリしているということ。

これに関しては下手に動いたら酷くなると思ったから、強くどうにかしようと考えなかった亮だが、結局は目立たずにいようと自分のせいでもあり、そのせいでストレスの溜まった結果が先ほどの恵梨花の怒りだろう。

そこまで考えた亮は自分の不甲斐なさに対して自嘲気味に笑う。

「亮くんは……悔しくなったりしない……? こんな目の前で色々言われて……」

躊躇いがちに、上目遣いで尋ねられた亮は苦笑を漏らす。

「そつだな……、ちょっと悔しいかもな」

恵梨花にここまで気を使わせてしまった自分に対して

「それでも……その……」

ここで言い淀むのは、人前であることを忘れてない証拠である。

亮も先ほどから痛いほどの視線を感じている。

これも全部まとめてどうにかするかと考えながら、何かを言おうとした恵梨花の唇の前に亮は自分の人差し指を置いた。

そんな亮の行動に周囲からは怒号にも似た声が飛び交い、自分の唇に触れ合うほどの距離に近づいた亮の人差し指を見た恵梨花は少し顔を赤らめながらも、不思議そうに亮と目を合わせた。

すると亮は悪戯っぽく笑い、もう片方の手で眼鏡を外した。

突然の亮のその行動に恵梨花が驚きに目を見開く。

外している姿を見たのはもうちょっとあるが、恵梨花の目の前で亮が眼鏡を外したのは、これで二度目である。

途端に学校で亮が纏っている雰囲気が変わったのを感じたのと、一度目の時のときめきも思い出したせいも、恵梨花の心臓がトクンと跳ねる。

眼鏡を外した亮は、ふうと軽く一息吐き、眼鏡を懐にしまおうとしたが、そこで悪戯心を起こす。

懐にしまわずに、驚いて動かない恵梨花の顔に、両手でそっと眼

鏡をかけたのだ。

自分の眼鏡をかけ、今だ呆然としている恵梨花を見た亮は思わずくっくと笑ってしまった。

そこで恵梨花が我に返る。

「ちょ、ちょっと、ひどいんじゃない!? いきなり人にかけておいて笑うなんて!」

もっともである。

「いや、悪い。似合わないのに、可愛いなんておかしなもんだと思っ
つてな」

「……え、えーっと……?」

少々混乱した様子で顔を赤くする恵梨花に、亮がまたもくっくと笑う。

「な、なんてことだ……」

「ふ、藤本さんが眼鏡を……」

「女神が神器をかけた姿を見れるなんて……!」

「で、でもだ……!」

「そ、そうだ……」「ああ……!」

「「もつと可愛い眼鏡は無かったのか!」」

悔しそつに男子部員達が叫んだ。

贅沢言いやがってと聞き流す亮に、今更に亮がここで眼鏡を外した理由が気になった恵梨花が戸惑いの声を上げる。

「亮くん……？」

「梓のそこ行つてよ」

クイと顎を動かす亮に、恵梨花が小首を傾げながら躊躇いがちに足を動かす。

恵梨花が自分の後方に歩いていくのを横目に、亮は郷田に向き直った。

亮が来た時は恵梨花の目の前にいたはずなのに、今はそれよりも二、三步ほど後ろにいる。

恵梨花が怒鳴った時に思わず足が退いたのだろつかと思いつながら亮は郷田と目を合わせた。

「おっさん」

亮のその、今日が初対面とは思えない暴言と違っていい呼びかけに、後ろを歩いていた恵梨花が思わずといった様子で立ち止まり、引き攣った顔で振り返る。

恵梨花が向かおうとしていた先にいる梓と明の二人の口元も盛大に引き攣っている。咲はぶ、と小さく吹きだした。

部員達は男女に関わらず、あんぐりと口を開けて固まっている。

呼ばれた本人の郷田は、亮と恵梨花が二人で話している時からずつとムスツとした不機嫌顔だったが、今はそれが消えて、目が点になっている。

様々な視線を受け、武道場内でただ一人平然としている亮は不敵な笑みを浮かべると、こう言い放ったのだ。

「もう一回、俺と勝負しようぜ」

第二十八話 無双（後書き）

サブタイの話数……偶然なんですよね

さておき、とても素敵なイラストをいただきました。

見た日は興奮して寝つけなかったほどです（笑）

恵梨花がばねえです。

活動報告にリンク貼ってますので、よければ是非

作者の励みになるので、感想・評価など頂けたら、嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5699r/>

Bグループの少年

2011年12月11日02時48分発行